岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第501集

野古（のっこ）A遺跡第23・24・29次発掘調査報告書

盛岡南新都市土地区画整理事業関連遺跡発掘調査

2007

独立行政法人都市再生機構
岩手県盛岡市

（財）岩手県文化振興事業団
埋蔵文化財センター

野古A遺跡第23・24・29次発掘調査報告書

盛岡南新都市土地区画整理事業関連遺跡発掘調査

RA061 出土墨書土器「吉」

「吉」字刻書土器集合

序

本県には、旧石器時代をはじめとする１万箇所を超す遺跡や貴重な埋蔵文化財が数多く残されています。それらは、地域の風土と歴史が生み出した遺産であり、本県の歴史や文化、伝統を正しく理解するのに欠くことのできない歴史資料です。同時に、それらは県民のみならず国民的財産であり、将来にわたって大切に保存し、活用を図らなければなりません。

一方、豊かな県土づくりには公共事業や社会資本整備が必要ですが、それらの開発にあたっては、環境との調和はもちろんのこと、地中に埋もれ、その土地とともにある埋蔵文化財保護との調和も求められるところです。

当事業団埋蔵文化財センターは、設立以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに、開発事業によってやむを得ず消滅する遺跡の緊急発掘調査を行い、その調査の記録を保存する措置をとってまいりました。

本報告書は、盛岡南新都市土地区画整理事業に関連して平成16年度に発掘調査された野古A遺跡第23・24次調査、平成17年度に発掘調査された野古A遺跡第29次の調査成果をまとめたものです。今回の調査では、古墳時代から平安時代の竪穴住居跡が多数見つかったことから、当時の集落の一部であったことが明らかになりました。今後、この地域における古代の集落に関する基礎資料となるものと考えられます。本書が広く活用され、埋蔵文化財についての関心や理解につながると同時に、その保護や活用、学術研究、教育活動などに役立てられれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査及び報告書の作成にあたり、ご理解とご協力をいただきました盛岡市都市整備部、独立行政法人都市再生機構、盛岡市育委員会をはじめとする関係各位に対し、深く感謝の意を表します。

平成19年2月

財団法人　岩手県文化振興事業団
理事長　武田牧雄

例　　言

1．本書は平成16年度、岩手県盛岡市下鹿妻字北33-1ほかに所在する野古A遺跡第23次・24次の発掘調査成果、平成17年度、岩手県盛岡市下鹿妻字北40-1ほかに所在する野古A遺跡第29次の発掘調査成果を収録したものである。

2．調査は盛岡南新都市整備事業に伴い、岩手県教育委員会事務局生涯学習文化課の調整を経て、独立行政法人都市再生機構の委託を受けた第23次調査、盛岡市の委託を受けた第24次・第29次調査を財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが実施した緊急発掘調査である。

3．野古A遺跡は岩手県遺跡登録台帳番号LE16－2155に該当し、調査略号はそれぞれ第23次調査がONK－04－23、第24次調査がONK－04－24、第29次調査がONK－05－29である。

4．発掘調査における調査次数毎の期間、調査面積、担当者は以下の通りである。

（第23次調査）　平成16年9月15日～11月1日　2,056㎡
文化財調査員　亀澤盛行・期限付調査員　立花裕

（第24次調査）　平成16年10月1日～11月1日　2,240㎡
文化財調査員　福島正和・米田寛

（第29次調査）　平成17年4月12日～6月13日　3,088㎡
文化財専門員　金子昭彦・文化財調査員　八木勝枝

5．整理作業の期間、担当者は以下の通りである。

（第23次調査）　平成17年2月1日～平成17年3月31日　立花裕

（第24次調査）　平成17年2月1日～平成17年3月31日　福島正和

（第29次調査）　平成18年1月16日～3月31日　八木勝枝

6．本書の執筆は分担し、福島（第23次・24次）、八木（第29次）がおこなった。

7．発掘調査に際する航空写真撮影は東邦航空株式会社に、出土した鉄製品の保存処理はJFEテクノリサーチ株式会社にそれぞれ業務委託した。

8．発掘調査においては、盛岡市都市整備部盛岡南整備課、盛岡市教育委員会、独立行政法人都市再生機構岩手総合開発事務所、近隣住民の方々のご理解とご協力をいただいた。

9．調査および報告書作成にあたり以下の方々のご教示をいただいた。記して感謝申し上げる（敬称略・順不同）。八木光則、三浦陽一、神原雄一郎（盛岡市教育委員会）、井上雅孝（滝沢村教育委員会）高橋千晶（奥州市教育委員会）佐藤良和（財団法人　奥州市埋蔵文化財調査センター）村田晃一（宮城県教育庁）、高橋誠明、大谷　基（大崎市教育委員会）、佐藤敏幸（東松島市教育委員会）、宇部則保（青森県八戸市教育委員会）、菅原祥夫（財団法人福島県文化振興財団）、津野　仁（財団法人　とちぎ生涯学習財団）、小橋健児（財団法人　市原市埋蔵文化財センター）。

10．本書では、国土地理院発行「盛岡・日詰　1：50,000」地形図を使用した。また、検出遺構の土層注記における土色および出土土器の色調は農林水産省農林水産技術会議事務局・財団法人日本色彩研究所　色票監修『新版　標準土色帖』2002年度版に準拠した。

11．調査で出土した遺物および実測図、写真等の各種記録類の一切は岩手県立埋蔵文化財センターに保管している。広く活用されることを希望する。

12．本書発行以前に現地公開で調査成果を公表したが、公表内容と本書記載事実との不一致、相違に関しては整理作業期間を経ている本書をもって正とする。

目　　次

Ⅰ　調査に至る経緯と経過 …… 1
Ⅱ　立地と環境 …… 1
1　地理的環境 …… 1
2　歴史的環境 …… 2
3　過去の調査成果 …… 4
Ⅲ　調査の方法 …… 7
1　発掘調査の方法 …… 7
2　整理作業の方法 …… 7
3　記載方法と凡例 …… 7
Ⅳ　第23・24次調査 …… 10
1　基本層序と遺構配置 …… 10
2　竪穴住居跡 …… 10
3　土　　坑 …… 57
4　溝　　跡 …… 60
5　遺構外出土遺物 …… 63
6　ま　と　め …… 63
Ⅴ　第29次調査 …… 81
1　竪穴住居跡 …… 81
2　掘立柱建物跡 …… 97
3　土　　坑 …… 98
（1）陥し穴状土坑 …… 98
（2）土　　坑 …… 100
4　住居状遺構 …… 102
5　柱穴状土坑 …… 106
6　遺構外出土遺物 …… 108
7　総　　括 …… 108
Ⅵ　考　　察 …… 117
1　野古A遺跡第23・24・29次調査検出竪穴住居跡について …… 117
2　野古A遺跡第19・20・29次調査区検出の陥し穴状土坑について …… 122
3　墓　　壙 …… 127
4　土　　器 …… 129
5　礫土器の使用痕跡 …… 138
6　鉄製銛先 …… 140
7　ま　と　め …… 143

報告書抄録

図　　版

第１図　遺跡位置……２
第２図　地形分類……３
第３図　周辺の遺跡……５
第４図　調査区割……８
第５図　基本層序断面……11
第６図　第23・24次調査区遺構配置……11
第７図　RA066……12
第８図　RA066カマド……13
第９図　RA066出土遺物……14
第10図　RA068……15
第11図　RA068カマド……16
第12図　RA068出土遺物……17
第13図　RA068出土遺物（石器）……18
第14図　RA071……19
第15図　RA071（カマド）……20
第16図　RA071出土遺物……21
第17図　RA067……22
第18図　RA067カマド……23
第19図　RA067ピット……24
第20図　RA067出土遺物（土器）……24
第21図　RA067出土遺物（石器・石製品）……25
第22図　RA060（第23次）……26
第23図　RA060（第23次）出土遺物……27
第24図　RA061……28
第25図　RA061カマド……29
第26図　RA061出土遺物（１）……30
第27図　RA061出土遺物（２）……31
第28図　RA061出土遺物（３）……32
第29図　RA062……34
第30図　RA062東カマド……36
第31図　RA062南カマド……37
第32図　RA062出土遺物……38
第33図　RA59・064……40
第34図　RA064カマド……41
第35図　RA059・064出土遺物……42
第36図　RA070……45
第37図　RA070カマド……46
第38図　RA070出土遺物（１）……47
第39図　RA070出土遺物（２）……48
第40図　RA063……49
第41図　RA063カマド……50
第42図　RA063出土遺物……51
第43図　RA065……52
第44図　RA069……53
第45図　RA069カマド……54
第46図　RA069出土遺物……55
第47図　竪穴住居出土鉄製品……56
第48図　RD103～108……58
第49図　土坑（RD）出土遺物……60
第50図　RG024……61
第51図　RG027～029……62
第52図　遺構外出土遺物……63
第53図　「吉」字土器集成……64
第54図　第29次調査遺構配置図……81
第55図　RA060住居跡……82
第56図　RA060住居跡出土遺物……83
第57図　RA076住居跡……84
第58図　RA076住居跡出土遺物……85
第59図　RA077住居跡（１）……86
第60図　RA077住居跡（２）……87
第61図　RA077住居跡出土遺物……88
第62図　RA078住居跡（１）……90
第63図　RA078住居跡（２）……91
第64図　RA078住居跡出土遺物（１）……92
第65図　RA078住居跡出土遺物（２）……93
第66図　RA079住居跡……94
第67図　RA079住居跡出土遺物（１）……95
第68図　RA079住居跡出土遺物（２）……96
第69図　RB004掘立柱建物跡……97
第70図　RD112～115陥し穴状土坑……99
第71図　RD116～125土抗・RE002住居状遺構……101
第72図　RB004掘立柱建物跡・RD土坑出土遺物……102
第73図　RE002住居状遺構出土遺物（１）……103
第74図　RE002住居状遺構出土遺物（２）……104
第75図　RE002住居状遺構出土遺物（３）……105
第76図　RZ005柱穴状土坑……106
第77図　RZ006柱穴状土坑……107
第78図　RZ005柱穴状土坑・遺構外出土遺物……108

第79図　奈良時代住居床面積……118
第80図　平安時代住居床面積……118
第81図　古代住居跡分布図……119
第82図　カマド方位……121
第83図　陥し穴状土坑開口部長幅分布図……122
第84図　陥し穴状土坑底面長幅分布図……122
第85図　野古A遺跡陥し穴状土坑配置図……123
第86図　近隣遺跡検出陥し穴状土坑開口部長幅分布図…123
第87図　陥し穴状土坑底面長さ別検出数……124
第88図　野古A遺跡・第12次RD039……128
第89図　土器集成図（1）……130
第90図　土器集成図（2）……131
第91図　土器集成図（3）……132
第92図　土器集成図（4）……133
第93図　土器分類図……134
第94図　礫石器の使用痕跡……139
第95図　岩手県における鉄製銛先出土分布……140
第96図　岩手県内出土鉄製銛先……142

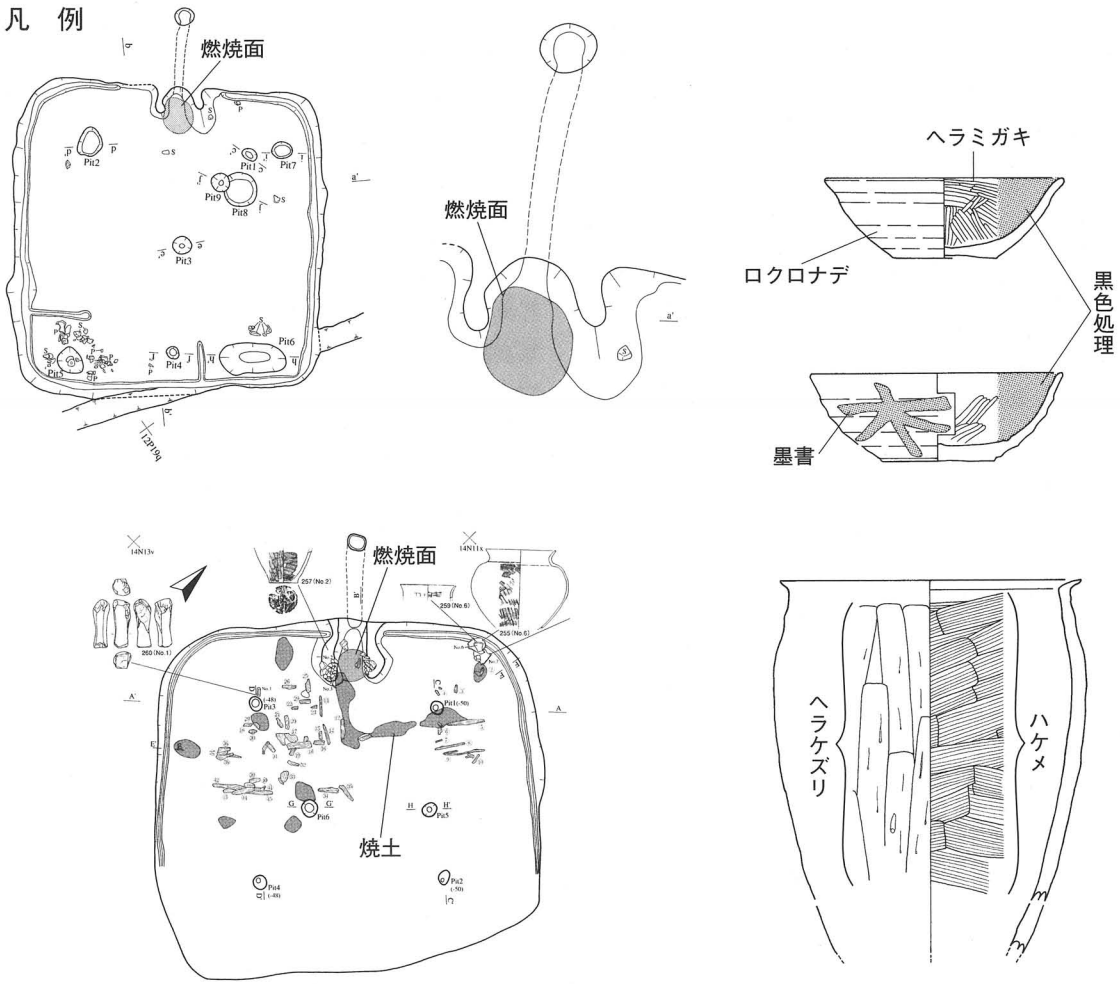
表

第1表　第23・24次掲載遺物一覧（土器）……65
第2表　第23・24次掲載遺物一覧（その他）……79
第3表　第29次陥し穴状土坑観察表……98
第4表　第29次土坑観察表……100
第5表　第29次柱穴状土坑観察表……109
第6表　第29次遺物観察表……113
第7表　野古A遺跡検出住居一覧……119
第8表　第23・24・29次竪穴住居跡計測表……120
第9表　第23・24・29次カマド計測表……120
第10表　盛南開発地域内陥し穴状土坑一覧……125
第11表　礫石器の使用痕観察表……138
第12表　岩手県内出土鉄製銛先……141

写真図版

写真図版1　航空写真……147
写真図版2　調査前状況……148
写真図版3　基本層序（微低地）……149
写真図版4　RA066(1)……150
写真図版5　RA066(2)……151
写真図版6　RA068(1)……152
写真図版7　RA068(2)……153
写真図版8　RA071(1)……154
写真図版9　RA071(2)・RA060……155
写真図版10　RA061(1)……156
写真図版11　RA061(2)・作業風景……157
写真図版12　RA062(1)……158
写真図版13　RA062(2)……159
写真図版14　RA064(1)・RA059……160
写真図版15　RA064(2)……161
写真図版16　RA070(1)……162
写真図版17　RA070(2)……163
写真図版18　RA067(1)……164
写真図版19　RA067(2)……165
写真図版20　RA063(1)……166
写真図版21　RA063(2)……167
写真図版22　RA065……168
写真図版23　RA069……169
写真図版24　RD103～106・108……170
写真図版25　RG024・027～029・RD107……171
写真図版26　RA066・068(1)出土遺物……172
写真図版27　RA068(2)出土遺物……173
写真図版28　RA068(3)出土遺物……174
写真図版29　RA071・067(1)出土遺物……175
写真図版30　RA067(2)・060・061(1)出土遺物…176
写真図版31　RA061(2)出土遺物……177
写真図版32　RA061(3)出土遺物……178
写真図版33　RA061(4)出土遺物……179
写真図版34　RA061(5)出土遺物……180
写真図版35　RA061(6)出土遺物……181
写真図版36　RA062(1)出土遺物……182
写真図版37　RA062(2)出土遺物……183
写真図版38　RA064(1)出土遺物……184
写真図版39　RA064(2)出土遺物……185
写真図版40　RA070(1)出土遺物……186
写真図版41　RA070(2)出土遺物……187
写真図版42　RA070(3)・063(1)出土遺物……188

写真図版43　RA063(2)・069(1)出土遺物……189
写真図版44　RA069(2)出土遺物……190
写真図版45　土坑・遺構外出土土器、
RA068出土石器、RA071出土土製品・191
写真図版46　RA067出土石器・石製品……192
写真図版47　RA061出土石器、RD108出土石器、
竪穴住居出土鉄製品……193
写真図版48　調査区全景・南調査区基本土層……195
写真図版49　RA060住居跡……196
写真図版50　RA076住居跡……197
写真図版51　RA077住居跡(1)……198
写真図版52　RA077住居跡(2)……199
写真図版53　RA078住居跡(1)……200
写真図版54　RA078住居跡(2)……201
写真図版55　RA079住居跡(1)……202
写真図版56　RA079住居跡(2)……203
写真図版57　RB004掘立柱建物跡……204
写真図版58　RD112・113陥し穴状土坑……205
写真図版59　RD114・115陥し穴状土坑……206
写真図版60　RD116・117・118・119・120・121土坑‥207
写真図版61　RD122・124土坑、RE002住居状遺構・
RZ005・006柱穴状土坑……208
写真図版62　RA060・076住居跡出土遺物……209
写真図版63　RA076・077住居跡出土遺物……210
写真図版64　RA077・078住居跡出土遺物……211
写真図版65　RA078住居跡出土遺物(1)……212
写真図版66　RA078住居跡出土遺物(2)……213
写真図版67　RA079住居跡出土遺物(1)……214
写真図版68　RA079住居跡出土遺物(2)……215
写真図版69　RA079住居跡・RB004掘立柱建物跡・
RD土坑出土遺物……216
写真図版70　RD土坑・RE002住居状遺構出土遺物(1)・217
写真図版71　RE002住居状遺構出土遺物(2)……218
写真図版72　RE002住居状遺構出土遺物(3)……219
写真図版73　RE002住居状遺構(4)・RZ005柱穴状土坑・
遺構外出土遺物……220



Ⅰ　調査に至る経緯と経過

盛岡南新都市開発計画は、現在の既成市街地の他に市域の南部地域を新市街地として開発し、両者が有機的に結びついた軸状都心を形成するために策定された都市区画整理事業である。平成3年度から平成17年度までの15年間を事業予定として、対象面積313haに及ぶ土地区画整理事業が進められている。

この間、事業対象地域に係わる埋蔵文化財の取り扱いについても協議が重ねられた。その結果、盛岡市教育委員会が試掘調査をおこない調査必要範囲を確定し、本調査は、財団法人岩手県文化振興事業団の受託事業として実施することとなった。

今回の発掘調査は、第23次・第24次が平成16年度、第29次が平成17年度受託事業として契約された。そのうち第23次調査が独立行政法人都市再生機構委託分として都市計画道路予定地2,056㎡の範囲で、第24・29次調査が盛岡市都市整備部盛岡南整備課委託分として宅地予定地内2,240㎡、3,088㎡の範囲でそれぞれ調査した。

Ⅱ　立地と環境

1　地理的環境

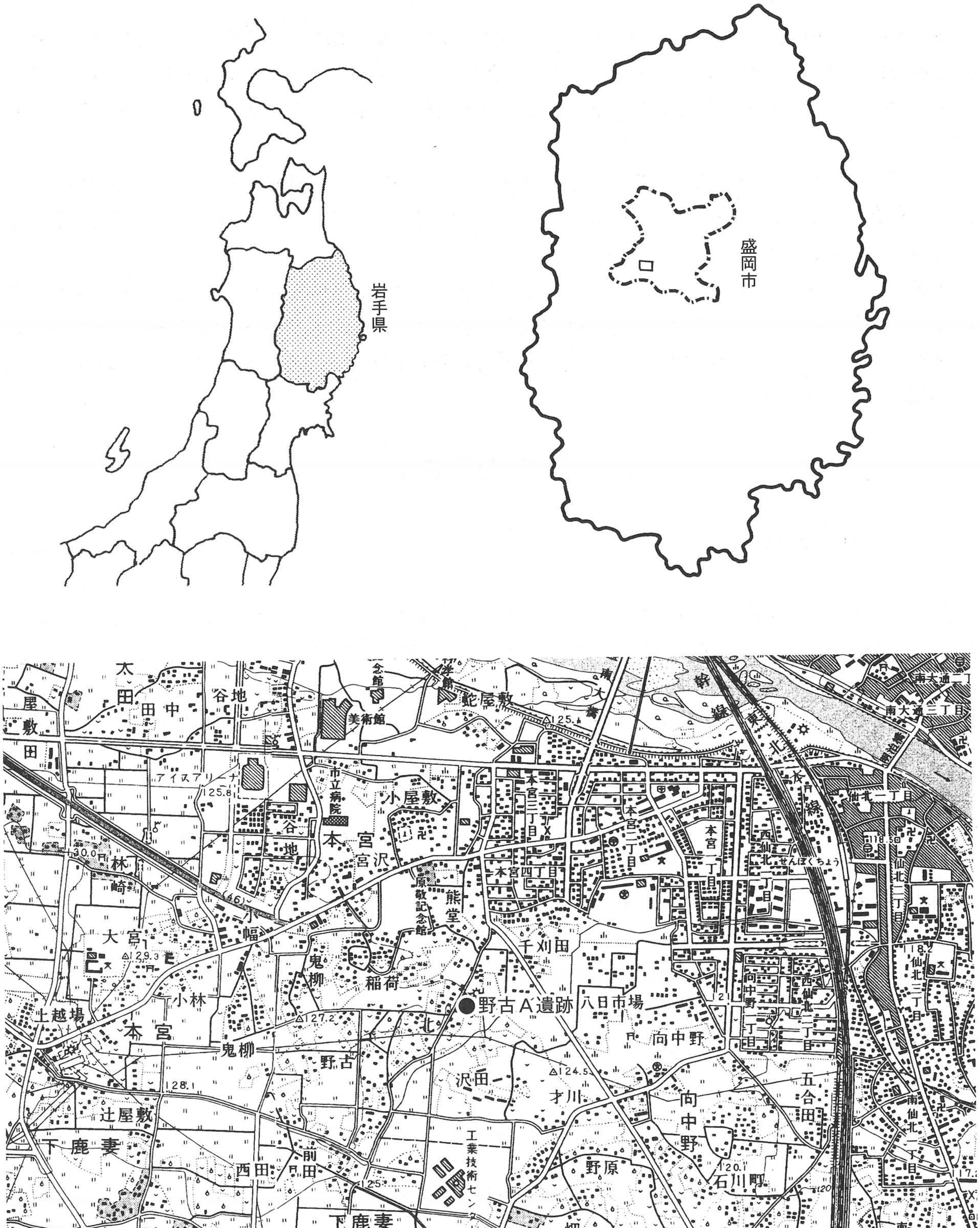
野古Ａ遺跡は、岩手県盛岡市下鹿妻字北に所在する。遺跡の東には北上川、北には雫石川がそれぞれ流れ、北西には岩手山を望むことができる。奥羽山脈東側に位置する岩手山は標高2,038ｍを測り、雫石川北岸で火山噴出物を堆積させている。

岩手県北部から県内を南へ貫流する北上川は、蛇行を繰り返しながら岩手県南端を抜け宮城県に至り、宮城県北部を経て、宮城県石巻湾より太平洋に注ぎ出る。この東北地方を代表する大河川は西に連なる奥羽山脈、東に連なる北上山地の間を流れ、その流域に多くの沖積平野を形成している。この北上川の沖積作用によって形成された平野は、特に中・下流域において発達が顕著であり、その平野部面積は岩手県内に存在するその他の河川流域よりも広大である。中流域北部に位置する盛岡市域では、西から雫石川、東から中津川、梁川がそれぞれ北上川に合流する。

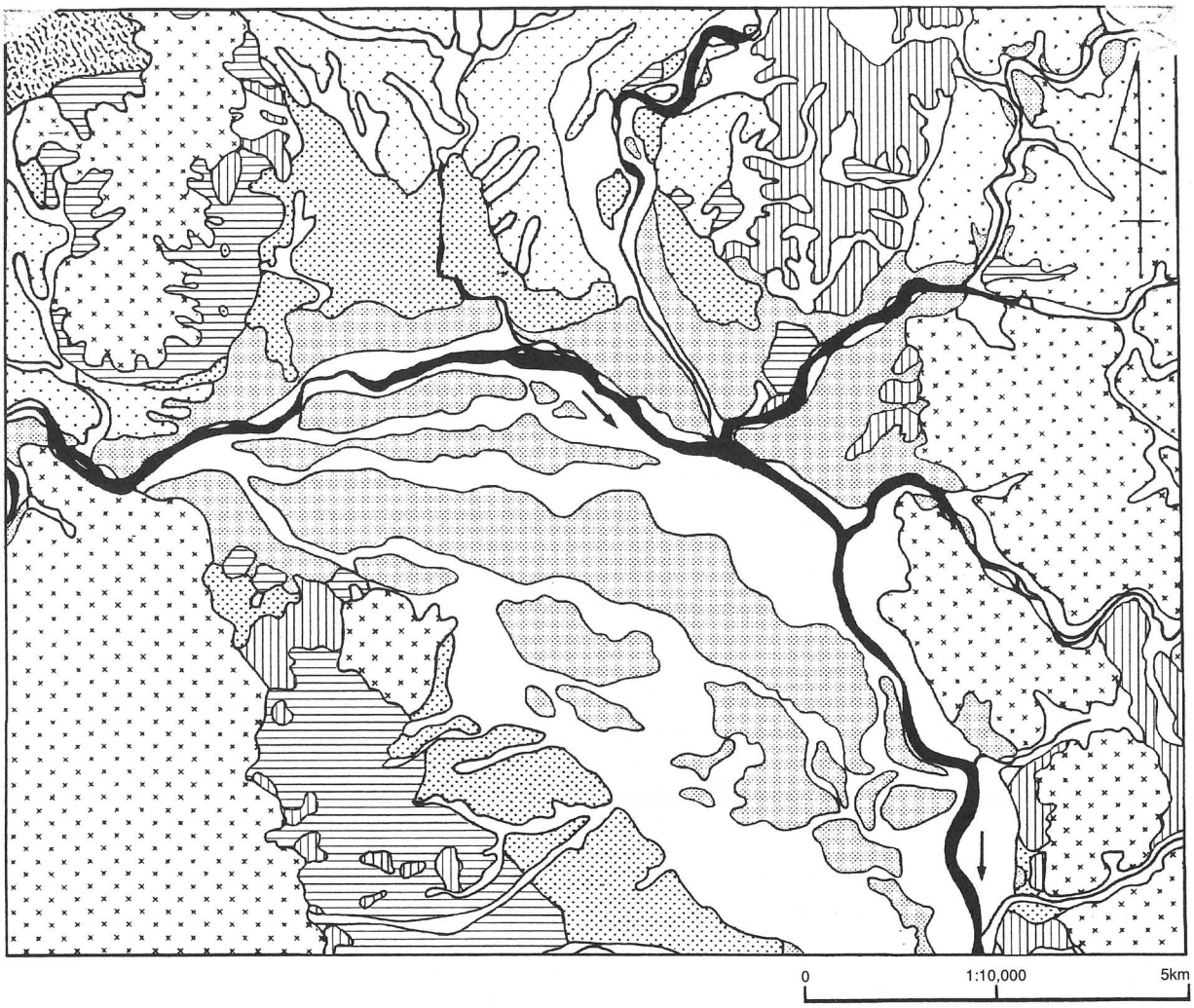
雫石川は、秋田県境、岩手県西部に端を発し、東へ流れ北上川に合流する。この雫石川は、盛岡盆地西半において広い沖積地を形成しており、特にこの南岸と北上川西岸にあたる一帯は沖積段丘面が層状に重なる。

野古Ａ遺跡は、この段丘面の自然堤防上に位置する。この段丘は砂礫層によって構成され、起伏を持ちながら一帯に広がっている。また、段丘面には雫石川から北上川に向けて幾つかの氾濫源を持ちながら後背湿地を形成している。遺跡付近では、多くの低地部分が検出されており、古くから湿地と隣接する立地であったと考えられる。

野古Ａ遺跡周辺は、雫石川の氾濫原による低地部分と低位段丘面が複雑に入り組んだ地形を成している。盛南開発前の地形は水田、宅地、道路などに反映している場所も随所にみられる。このような微地形は、遺跡の分布・立地と大きく関わるものと考えられ、両者の関連性については今後も開発が進むこの地域の重要なテーマの一つであると考えられる。また、開発によって旧地形がほとんど失われていく現状で地形を記録に残すことも有用である。


岩手県
盛岡市
野古A遺跡
八日市場
千刈田
本宮
小屋敷
市立病院
美術館
蛇屋敷
原敬記念館
熊堂
稲荷
鬼柳
小林
上越場
大宮
林崎
小幡
辻屋敷
下鹿妻
西田
前田
野古
沢田
才川
向中野
五合田
野原
石川町
工業技術センター
畑中
飯岡新田
鶴子
道明
養護学校
中屋敷
南田
下久根
下飯岡
内村
藤島
本宮四丁目
本宮三丁目
本宮二丁目
本宮一丁目
仙北一丁目
南大通三丁目
アイスアリーナ

第１図　遺跡位置



第２図　地形分類

２　歴史的環境

雫石川北岸の台地上には、縄文時代の遺跡が多数確認されている。特に大館遺跡群は県内でも有数の縄文時代中期の集落である。一方、雫石川南岸に位置する野古Ａ遺跡周辺では、本宮熊堂Ａ遺跡が縄文時代晩期の集落域であるが、その他の遺跡では縄文時代の陥し穴状土坑が散見される。

雫石川南岸に広がる平野部には古代の遺跡が顕著である。古墳時代の様子は遺跡がほとんどなく未解明であるが、奈良時代になると古代の人々の活動がみられ始める。

雫石川より北約１kmに位置する太田蝦夷森古墳群は８世紀に営まれた古代の墳墓群である。これまでの調査で和同開珎や蕨手刀などが出土している。また、太田蝦夷森古墳群の約1.5km西には志波城跡が存在する。この志波城跡は803年に成立した城柵の一つで、古代盛岡地域も中央政府の枠組みに組み込まれたとされている。この志波城は存続期間が短く、10年でその実質的な機能を徳丹城に移される。これまでの志波城跡の発掘調査では、築地塀跡などの城柵としての機能を持つ遺構が確認されている。また、城柵機能を想定できる他地域からの搬入遺物や墨書土器なども多量に出土している。

志波城跡の周辺および南側の広い範囲では、古代の集落が多数高い密度で分布する。志波城の所在する太田地区では、志波城並行期の集落と考えられている松ノ木、館遺跡が調査されている。また、志波城以降の時期では林崎遺跡などの集落遺跡が確認されている。

太田地区の南に位置する本宮地区では本書に掲載している野古Ａ遺跡や本宮熊堂Ｂ遺跡、小幅遺跡、鬼柳Ａ遺跡、宮沢遺跡、大宮北遺跡などが調査され、古墳～平安時代の拠点的な集落の全容が明らかになりつつある。特に、本宮熊堂Ｂ・野古Ａの両遺跡は居住域が密に広がっており、この地区の集落群の中心的な存在であったと考えられる。現在までに本宮熊堂Ｂ遺跡で約130棟の古代の竪穴住居跡が確認されている。この地区は７世紀代の遺構・遺物は数多くないが、８・９世紀代の遺構・遺物は充実している。

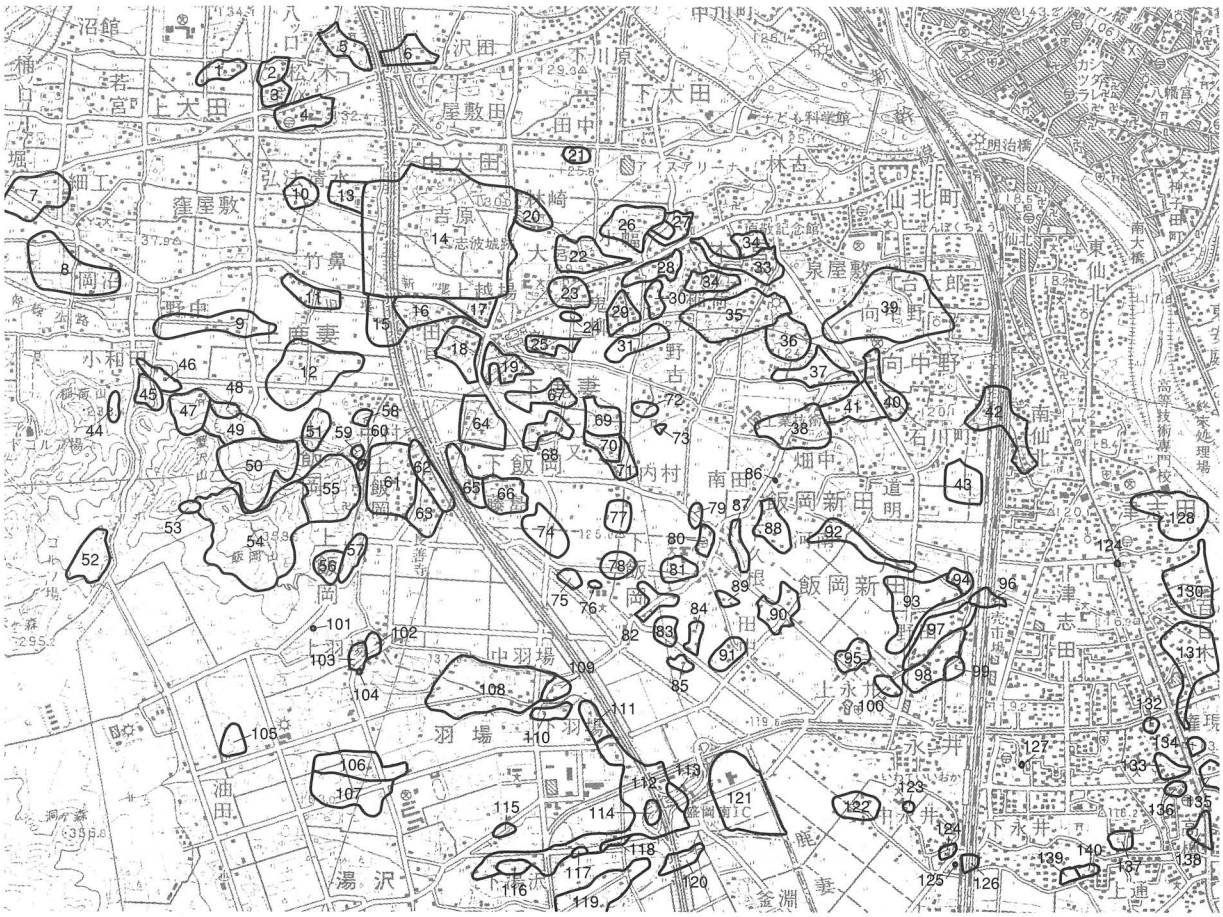
本宮地区の南に位置する向中野・飯岡地区では、台太郎遺跡を中心に多くの古代の集落が調査されている。台太郎遺跡の西側に隣接する飯岡沢田遺跡では、古代の竪穴住居のみならず、古代の墳墓群が調査されている。この南に隣接する飯岡才川遺跡でも墳墓群、平安時代の竪穴住居が調査されている。台太郎遺跡の南に位置する細谷地遺跡、向中野館遺跡の調査では、飯岡才川遺跡と同様に平安時代の竪穴住居跡が多く調査されている。

以上のように野古Ａ遺跡周辺の盛南開発区域では、古代を中心とする集落遺跡が広域な範囲にわたって高密度で存在している。

3　過去の調査成果

野古Ａ遺跡は平成16年度当初段階まで、22次に渡る発掘調査が当埋蔵文化財センター、盛岡市教育委員会の両機関によっておこなわれている。野古Ａ遺跡の延べ調査面積は、平成16年度４月段階において約43,000㎡を測り、約60棟に及ぶ古代の竪穴住居が検出・調査されている。

この成果により、周辺地域同様に古代の集落が広がっているエリアであることを示している。現段階では、遺跡範囲東側で未調査部分もあるが、隣接する諸遺跡の成果を考え合わせると、遺跡のほぼ全域が７世紀～10世紀にかけての居住域であると考えられる。竪穴住居はおもに第12次・第15次調査区周辺において密に分布しており、遺跡の中での集落中心域はこのエリアであると考えられる。また、遺跡内に旧河道と呼ばれる帯状の低地部分が幾条も認められ、この低地部分に近接するように竪穴住居が立地する傾向にあり、微地形と住居立地との関係性が注目される。現段階では、７世紀後半以前の遺物は確認されていないため、野古Ａ遺跡での古代集落の開始時期は７世紀後半であると考えられる。一方、平安時代では、志波城が成立する９世紀前半の遺構・遺物が確認されていない。このように、古代集落は断絶しながらも10世紀頃まで展開すると考えられる。古代の竪穴住居以外では掘立柱建物も確認されており、住居以外の施設が集落内に存在している可能性を示している。ちなみに、古墳～奈良時代の竪穴住居は25棟、平安時代の竪穴住居は34棟という内訳である。



1．細田（平安）
2．松ノ木（古代～近世）
3．館（太田館）（古代～近世）
4．上野屋敷（古代）
5．八ツ口（古代）
6．八掛（奈良・平安）
7．太田蝦夷森古墳群（奈良）
8．一本木（平安）
9．天沼（古代）
10．畑中（古代）
11．五兵衛新田（古代）
12．竹鼻（古代）
13．小沼（平安）
14．志波城（平安）
15．竹花前（平安）
16．田貝（古代）
17．新堰端（縄文・平安）
18．石仏（古代）
19．上越場A（縄文・古代）
20．林崎（平安）
21．太田田中（平安）
22．大宮北（古代）
23．大宮（古代～近世）
24．小林（古代）
25．水門（古代）
26．小幅（古代）
27．宮沢（古代）
28．鬼柳A（古代）
29．鬼柳B（古代）
30．鬼柳C（古代）
31．野古B（古代）
32．本宮熊堂A（古代）
33．本宮熊堂B（古代）
34．稲荷（古代）
35．野古A（古代）
36．飯岡沢田（古代）
37．飯岡才川（古代）
38．矢盛（古代）
39．台太郎（古代）
40．向中野館（古代・中世）
41．細谷地（古代）
42．南仙北（縄文・古代）
43．向中野幅（古代）
44．小和田館（縄文・弥生・中世）
45．二ツ沢（縄文・古代）
46．蟹沢下（古代）
47．蟹沢（縄文・古代）
48．ヘビ堂（縄文・古代）
49．オミ坂（縄文・古代）
50．山中（縄文・古代）
51．月見山（縄文・古代）
52．大ヶ森（縄文）
53．細越（縄文）
54．飯岡山館（中世）
55．飯岡館（中世）
56．飯岡赤坂Ⅰ（古代）
57．飯岡赤坂Ⅱ（古代）
58．堤（縄文・古代）
59．高館古墳跡（奈良～平安）
60．高館（縄文）
61．大柳Ⅱ（古代）
62．大柳Ⅰ（古代）
63．館野前（縄文）
64．辻屋敷（古代）
65．藤島Ⅱ（平安?）
66．藤島Ⅰ（縄文・平安）
67．上越場B（縄文・古代）
68．二又（平安）
69．西田A（古代）
70．内村（平安）
71．中屋敷（古代）
72．西田B（古代）
73．前田（古代）
74．飯岡林崎Ⅱ（古代）
75．飯岡林崎Ⅰ（平安）
76．上新田（平安）
77．深淵Ⅰ（平安）
78．深淵Ⅱ（平安）
79．高屋敷Ⅰ（古代）
80．高屋敷Ⅱ（平安）
81．西（平安）
82．飯岡熊堂Ⅰ（縄文・古代）
83．飯岡熊堂Ⅲ（平安）
84．飯岡熊堂Ⅱ（平安）
85．南谷地（平安）
86．法領権現塚（近世）
87．下久根Ⅰ（縄文・古代）
88．石持（古代）
89．下久根Ⅱ（縄文・古代）
90．松島（古代）
91．田中（平安）
92．夕覚（古代）
93．横屋（古代）
94．生畔（古代）
95．葛本（古代）
96．津志田（古代）
97．陣当（古代）
98．長沼（古代）
99．津志田横屋（古代）
100．境田（古代）
101．羽場いたこ塚（近世）
102．羽場館（中世）
103．羽場百目木（縄文）
104．砂子塚（古代）
105．アイノ野（縄文）
106．木節（平安）
107．福千代（奈良）
108．因幡（縄文・古代）
109．新井田Ⅰ（古代）
110．新井田Ⅱ（古代）
111．新田（平安）
112．下羽場（平安）
113．下湯沢（古代）
114．間渡Ⅰ（古代）
115．小田Ⅰ（古代）
116．小田Ⅱ（平安）
117．森子（古代）
118．間渡Ⅱ（古代）
119．湯沢大館（古代～中世）
120．一本松（平安）
121．大島（古代）
122．間木（古代）
123．永井前田（古代）
124．神田（古代）
125．神田塚（近世）
126．下永井（古代）
127．永井経塚（近世）
128．碇堰（奈良）
129．津志田イタコ塚（近世）
130．西鹿渡（古代）
131．百目木（縄文・古代）
132．坂の下（縄文）
133．下永林（縄文）
134．中島（古代）
135．三本柳幅（古代）
136．大道西（古墳）
137．高櫓A（古代）
138．高櫓B（古代）
139．菖蒲田（古代）
140．荒屋（古代）

第３図　周辺の遺跡

古代の遺物では、残存状況が良好な竪穴住居が多いため出土量が豊富である。住居内より一括で出土する竪穴住居跡も多くあり、古代の土器におけるセット関係が明らかになる可能性を秘めている。特に、野古Ａ遺跡では、竪穴住居跡の残存状況が良好であるため、この時代の遺物は他の遺跡より豊富である。そのため、特殊な土器類も多く認められ、一例としてこれまで砂底土器が多く出土していると指摘されている。

今回報告する調査区は遺跡の西側に位置し、濃密な居住域の縁辺部に当たる。今後、調査が進むことによって、古代集落域全体の様子が明らかになるものと思われる。

また、野古Ａ遺跡では古代の遺構以外に縄文時代の陥し穴状土坑も検出されている。このことから遺跡の一部は縄文時代の狩猟場であったと考えられる。

現在、この地域は大規模な都市開発により刻々と姿を変えている。野古Ａ遺跡も例外ではなく、すでに旧来の地形はその面影を失いつつある。未調査部分もわずかになり、この遺跡の発掘調査のまとめを要する時期に差し掛かりつつある。

引用・参考文献

盛岡市教育委員会　1998「野古遺跡」『盛岡市埋蔵文化財調査年報　平成５・６年度』盛岡市教育委員会

菅原靖男　　2003『野古Ａ遺跡第12次発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第420集（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

阿部眞澄　　2003『野古Ａ遺跡第15次発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第421集（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

小松則也　2004「野古Ａ遺跡第19次」岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第455集（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

Ⅲ　調査の方法

1　発掘調査の方法

調査開始時、試掘トレンチを掘削し、その土層断面によって調査区全域での遺構検出面を確認した。その後表土をバックホーにより除去し、それ以降の掘削作業は人力でおこなった。調査中は適宜、写真撮影および実測図作成をおこない記録の保存に努めた。

調査区割とグリッドの設定および遺構名称は、盛岡市教育委員会の方針に従っている。座標軸をもとに正方形グリッドを設定し、その最小単位を２×２ｍとした。グリッドの配置については第４図のとおりである。

遺構出土遺物は遺構・位置・層位の各単位で取り上げ、遺構外出土遺物はグリッド・層位単位で取り上げた。

調査区は、第23次調査区・第24次調査区・第29次調査区と大きく３つに分かれる。

遺構名は遺跡内統一の連番であるため、調査時に付与したものが欠番になることもあったが、統一連番にするべく新しい遺構名・番号を与え報告した。また、過年度調査されている遺構の続きは、過年度調査の遺構名および遺構番号をそのまま踏襲した。遺構名略号は、竪穴住居（RA）・竪穴住居状遺構（RE）・土坑（RD）・溝（RG）・性格不明遺構、その他（RZ）である。本文中の記載については略号のみの表現で統一した。

2　整理作業の方法

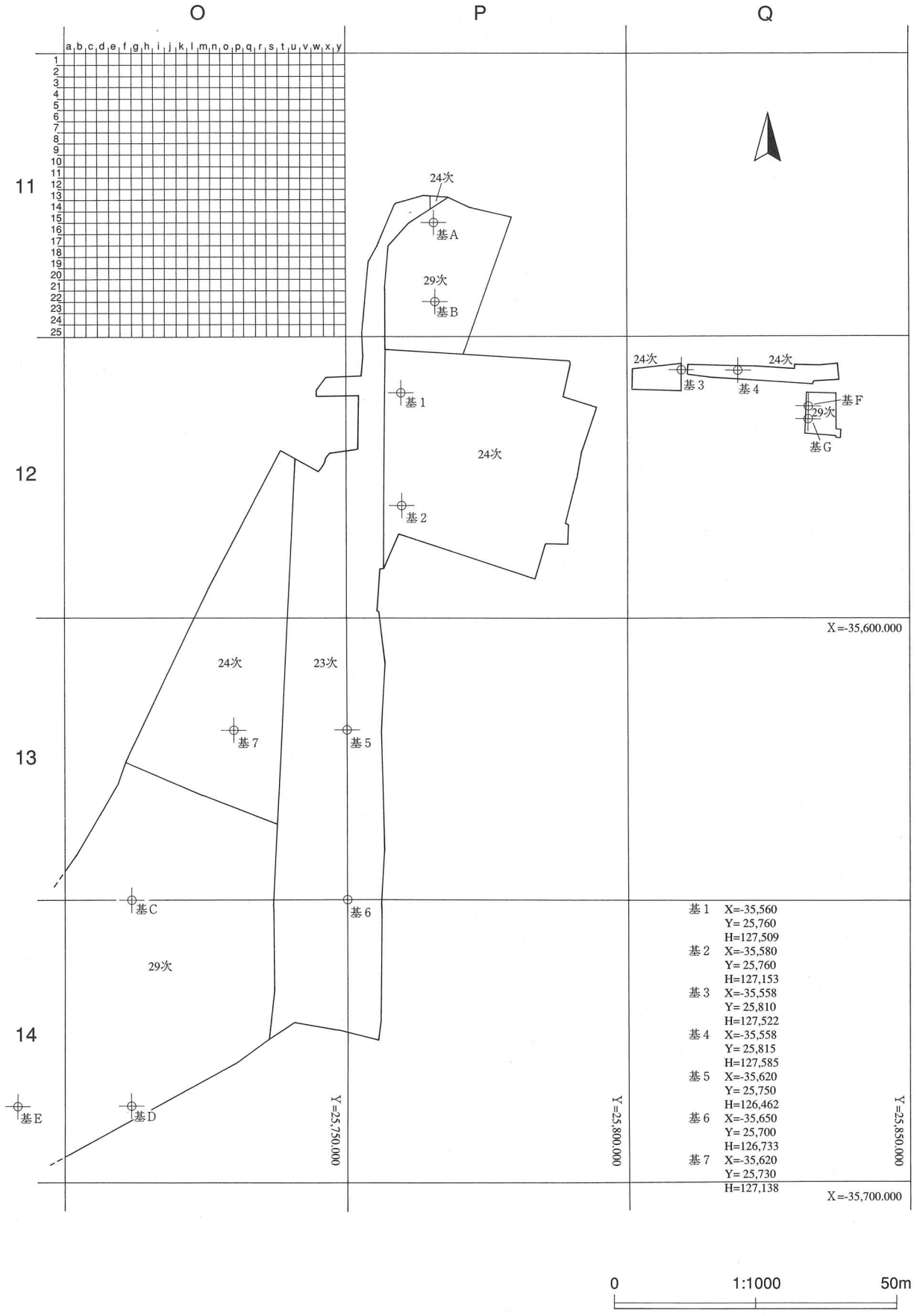
発掘調査中に作成した遺構実測図は必要に応じて合成および修正をおこない、浄書し版下作成をおこなった。

発掘調査中に撮影した遺構写真は、35㎜モノクロ・35㎜カラーリバーサル・６×７版モノクロを使用し、それぞれファイルに整理し台帳を作成した。本書では、そのうち必要な遺構写真についてトリミング、紙焼きをおこない写真図版に掲載した。

出土した遺物は、水洗した後注記・接合し、必要な遺物に関しては石膏による復元をおこなった。それら作業過程中、本書に掲載するものを選出し実測および写真撮影を実施した。実測した遺物は浄書をおこない挿図版として掲載し、撮影した遺物写真についてもすべてを写真図版に掲載した。掲載した遺物は、原則的に実測に堪え得るもの、体部のみの破片は器壁の傾きが厳密に判明する遺物のみを選出した。また、墨書土器等の特殊な遺物に関してはこの限りでない。遺物写真は、立面での撮影を原則としたが、立面での撮影が不可能な破片については平面的な俯瞰撮影をおこなった。

3　記載方法と凡例

本書で使用する方位は、座標による方位である。よって平面図中に付されている方位はすべて国土座標による北である。検出した遺構の欠損部分は、破線による推定線を加えて表現した。また、調査において任意で設定したトレンチ掘方、調査区境および現代の攪乱は一点鎖線とし、トレンチおよび攪乱の平面図はケバを変えて遺構のそれと区別した。


O
P
Q
a b c d e f g h i j k l m n o p q r s t u v w x y
1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25
11
12
13
14
24次
基A
29次
基B
基1
24次
基2
24次
基3
24次
基4
基F
29次
基G
X=-35,600.000
24次
23次
基7
基5
基C
基6
29次
基E
基D
Y=25,750.000
Y=25,800.000
Y=25,850.000
基1 X=-35,560 Y=25,760 H=127,509
基2 X=-35,580 Y=25,760 H=127,153
基3 X=-35,558 Y=25,810 H=127,522
基4 X=-35,558 Y=25,815 H=127,585
基5 X=-35,620 Y=25,750 H=126,462
基6 X=-35,650 Y=25,700 H=126,733
基7 X=-35,620 Y=25,730 H=127,138
X=-35,700.000
0
1:1000
50m

第4図　調査区割

個々の遺構平面図は、基本的に遺構主軸を重視して配置したが、主軸の定まらない不定形、円形の平面形帯を呈する遺構については、北が上になるように掲載した。竪穴住居の平面図はカマドのある側辺を上向きに配置し主軸に合わせレイアウトした。

出土した土器は、本書では以下の通りに分類し報告することとした。従来のあかやき土器とされている坏類は土師器（非黒色処理、ミガキなし）とした。この分類は客観性を持たせることが目的であるが、非黒色処理でミガキの施されない坏と焼成不良の須恵器坏とは極めて不分明であると言わざるを得ない。両者の決定的な差異は焼成に他ならない。よって、一部で還元が進んでいるものや須恵器の形態・製作技法がみられるものは本来須恵器を指向したと考えられ、器表面に黒斑が顕著にみられるものは本来土師器を指向していたと考えられるため、部分的に還元不足が認められる土器や黒斑を有する土器は遺物観察表の備考欄に表記した。

掲載した土器実測図は、奈良平城京跡、京都平安京跡の調査報告書に準じて１／４の縮尺で統一した。先述した分類により須恵器の断面は黒塗り、土師器の断面は白抜き、黒色処理されている土師器は内外面とも半分にアミを掛けて表現した。調整の痕跡は、一部例外を除き内外面ともに中央半分のみの表現にとどめた。土師器口縁部に施されるヨコナデは、口縁部における稜線の欠失、図の煩雑さを避けるため表現していない。また、土器実測図における稜線は弱い屈曲や口縁端部、底端部の稜を一点抜き直線、強い屈曲や明瞭な調整の変化点は実線、ロクロ等の回転力を利用した回転ナデは、その凹凸の凸部に２点抜き直線で表現した。回転ナデの稜線における２点抜き位置は、土器の立体感を表現するため稜線全長の３等分位置に固定した。また、石器も１／４の縮尺で統一し、その他石製品、土製品、鉄製品は１／２の縮尺で統一した。

竪穴住居出土遺物は、原則として住居毎のまとまりで図・写真を掲載した。竪穴住居出土以外の遺物は遺構種別毎のまとまりで掲載している。

第23次、第24次の調査で設置された基準点の標高値は第４図に示している。この基準点は調査に際して都市再生機構によって設置され、これら基準点の標高値を基に遺構の実測をおこなった。しかしながら、第29次調査地点をはじめとして隣接調査地点の水準点と比較すると約２ｍ高い標高値であることがわかった。約２ｍは大きな誤差であるが、成果簿等の資料がなく検証不可能である。したがって、本書第23次、第24次調査の標高値は修正をおこなわず調査時のままで表示した。

Ⅳ　第23・24次調査

1　基本層序と遺構配置

調査区周辺の微地形をみると西から東へ向け低くなる段丘の境である。周辺は大まかに分けると3つの段丘面が存在しており、本遺跡北西にある稲荷遺跡・本宮熊堂Ｂ遺跡・本宮熊堂Ａ遺跡が各段丘面に立地している。すなわち、高位が稲荷遺跡、中位が本宮熊堂Ｂ遺跡、下位が本宮熊堂Ａ遺跡である。これら3つの段丘面のうち、本宮熊堂Ｂ遺跡が立地する中位の面に野古Ａ遺跡が立地している。この段丘面の境界ラインは上記遺跡群周辺では東西方向にみられるが、野古Ａ遺跡では、緩やかにカーブしておよそ南北方向へと変化する。今回の調査区西側はちょうど高位と中位の面の境目にあたると考えられる。したがって、調査区内は概ね西から東へ向けて低くなる地形である。

調査した範囲の基本層序は上層よりⅠ～Ⅲ層を確認した。Ⅰ層は表土および近現代耕作土層、Ⅱ層は黒色シルト主体の自然堆積層、Ⅲ層は黄色シルト主体の自然堆積層である。なお、Ⅲ層より下層では砂層および砂礫層がみられる（Ⅳ層）箇所がある。表土直下で砂礫層がみられる調査区西側は、本来堆積していたであろうⅡ層およびⅢ層が削平のため失われていると考えられる。すなわち、本来調査区内でもっとも高い地点であると考えられ、表土直下面の標高値ももっとも高い。また、第23次・24次調査区では、帯状に低地部分が3ヶ所みられる。これらが、もっとも低い地点であると考えられる。この低地部分にはⅡ層が良好に残存しており、そのため大規模な黒い帯が調査区内に横たわっているように見える。最上位の遺構検出面は、このⅡ層上面である。RA067のみは、帯状低地のまっただ中にあり、Ⅱ層上面で検出した。しかし、低地以外はすでにⅡ層が残存しておらず、Ⅲ層上面が露出している状態であったためこの面で遺構を検出した。次章で報告する第29次調査区も基本層序は同様である。

検出した遺構は、第23次調査区で竪穴住居8棟、土坑5基、溝3条である。第24次調査区では、竪穴住居5棟（内1棟は第23次調査区に及ぶ）、土坑1基、溝3条（内2条は第23次調査区に及ぶ）である。第23次調査区は南北に長い形状を呈しており、竪穴住居は北からRA060・{RA064・059}・RA062・RA061・RA070・RA068・RA071・RA066の順で検出した。第24次調査区は間に第23次調査区を挟み、東西に分かれる。西側で遺構は無く、第23次調査区より東側でのみ遺構を検出した。竪穴住居は東からRA063・RA067・北端にあるRA065・東端のRA069である。なお、次章で報告する第29次調査区は、第24次東側エリアの北と、第24次西側エリアの南にそれぞれ隣接して位置している。また、第23次調査区北で検出したRA060は第29次調査区で続きを検出している。

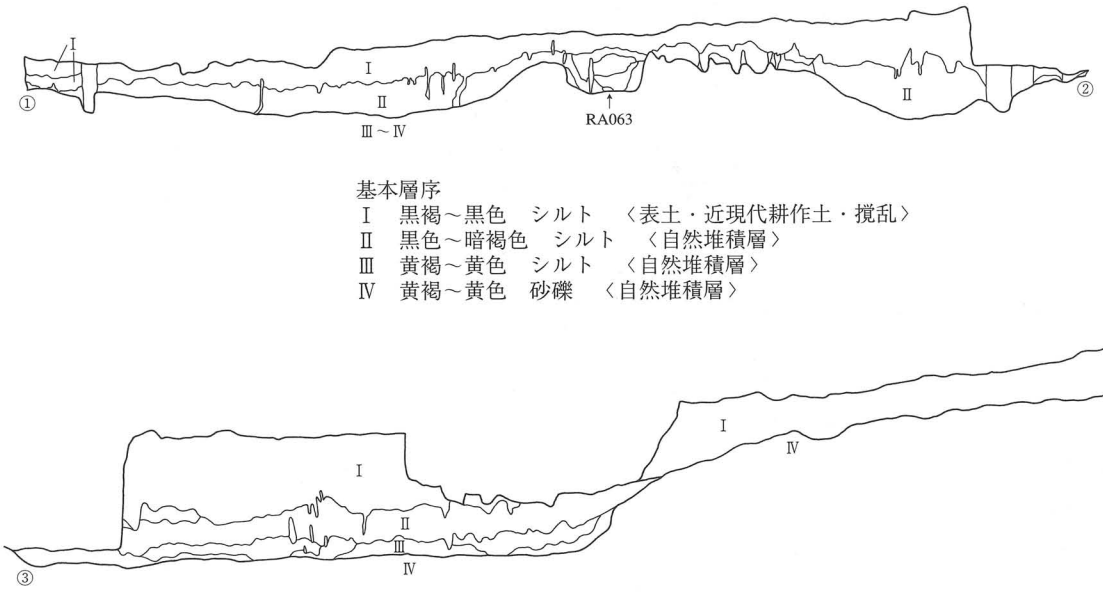
2　竪穴住居跡

RA066

遺構（第7・8図・写真図版4・5）

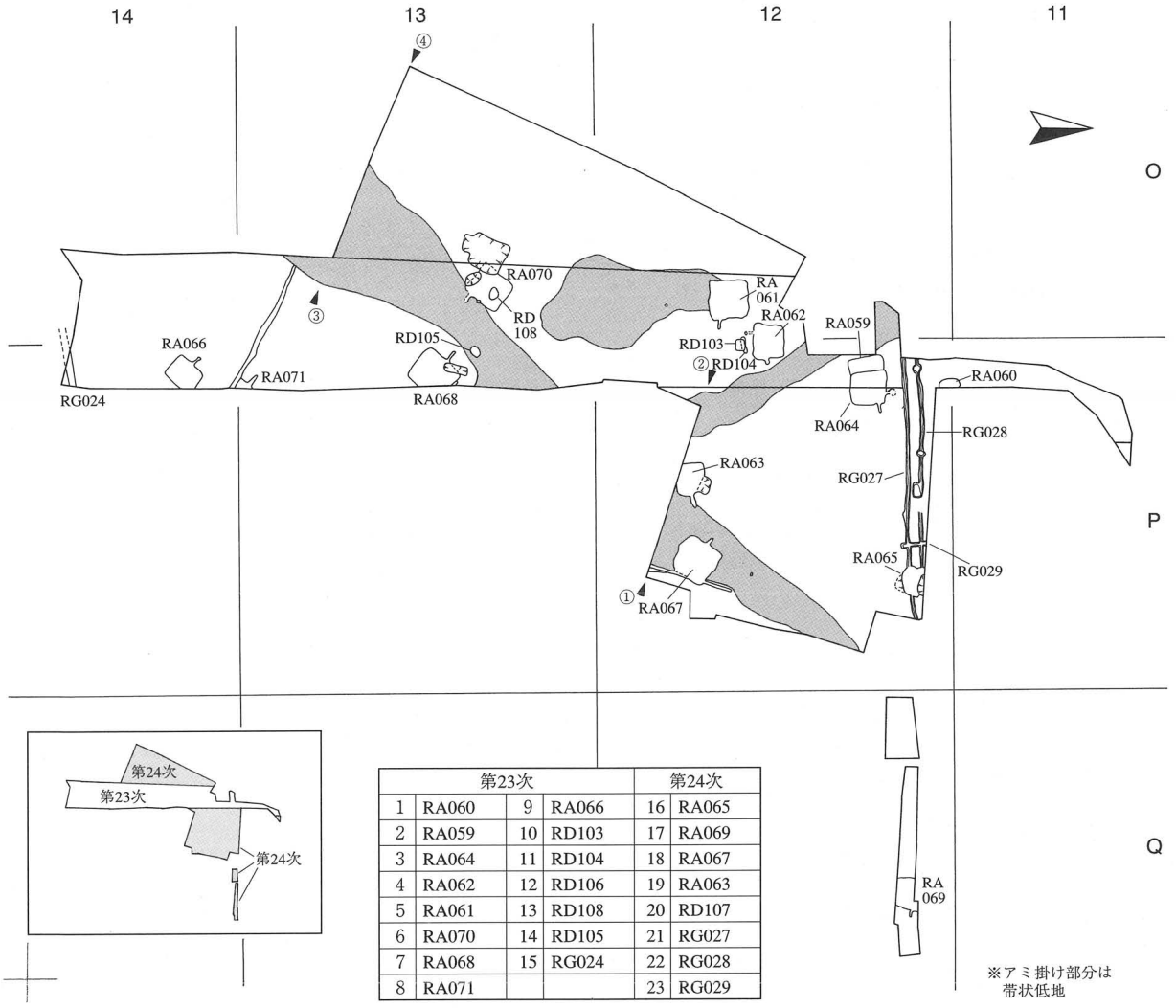
[位置]　第23次調査区南側14O 4 aグリッド付近に位置する。他の遺構と切り合い関係は認められないが、住居西隅は調査区外へ続く。また、住居の北西には、RA071が位置している。Ⅰ層直下の平坦な面である。主軸方向は約45°西に傾いた南北方向である。

[平面形・規模]　平面形態は概ね方形であると推定されるが、やや主軸方向が短く、南東壁がやや長



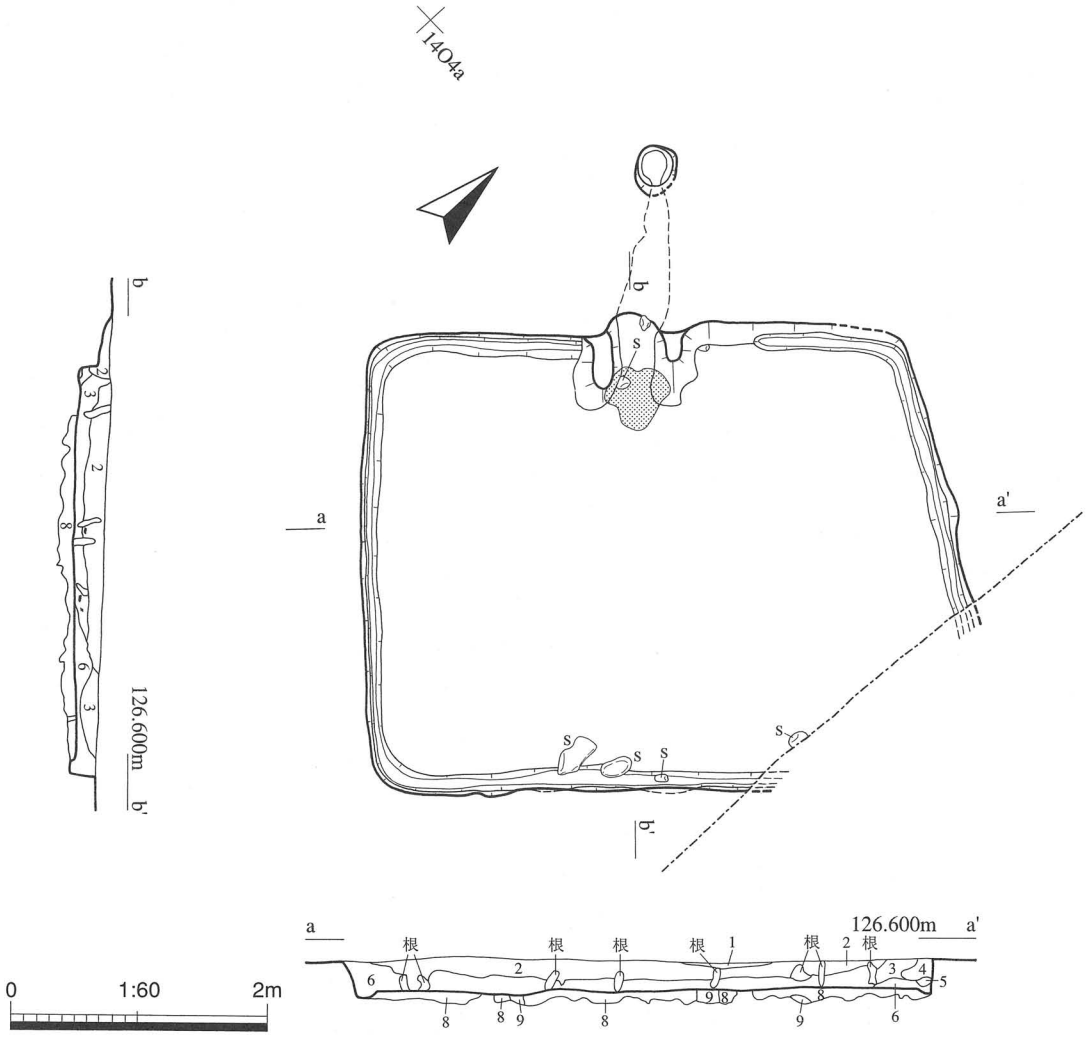
基本層序
Ⅰ　黒褐～黒色　シルト　〈表土・近現代耕作土・撹乱〉
Ⅱ　黒色～暗褐色　シルト　〈自然堆積層〉
Ⅲ　黄褐～黄色　シルト　〈自然堆積層〉
Ⅳ　黄褐～黄色　砂礫　〈自然堆積層〉

第５図　基本層序断面



第23次				第24次	
1	RA060	9	RA066	16	RA065
2	RA059	10	RD103	17	RA069
3	RA064	11	RD104	18	RA067
4	RA062	12	RD106	19	RA063
5	RA061	13	RD108	20	RD107
6	RA070	14	RD105	21	RG027
7	RA068	15	RG024	22	RG028
8	RA071			23	RG029

第６図　第23・24次調査区遺構配置



RA066
1．10YR3/2　黒褐色　シルト（やや粘質）
2．10YR2/3　黒褐色　シルト（中～粗粒砂混じる）
3．10YR2/1　黒色　シルト
4．10YR3/2　黒褐色　シルト（やや粘質、地山B.L混じる）
5．10YR5/4　にぶい黄褐色　粘土
6．10YR3/2　黒褐色　シルト
7．10YR3/3　暗褐色　シルト（地山B.L混じる）
8．10YR4/3　にぶい褐色　シルト（やや粘質、地山B.L多量に混じる）
9．10YR3/2　黒褐色　シルト（焼土B.L多量に混じる）

第7図　RA066〈第23次〉

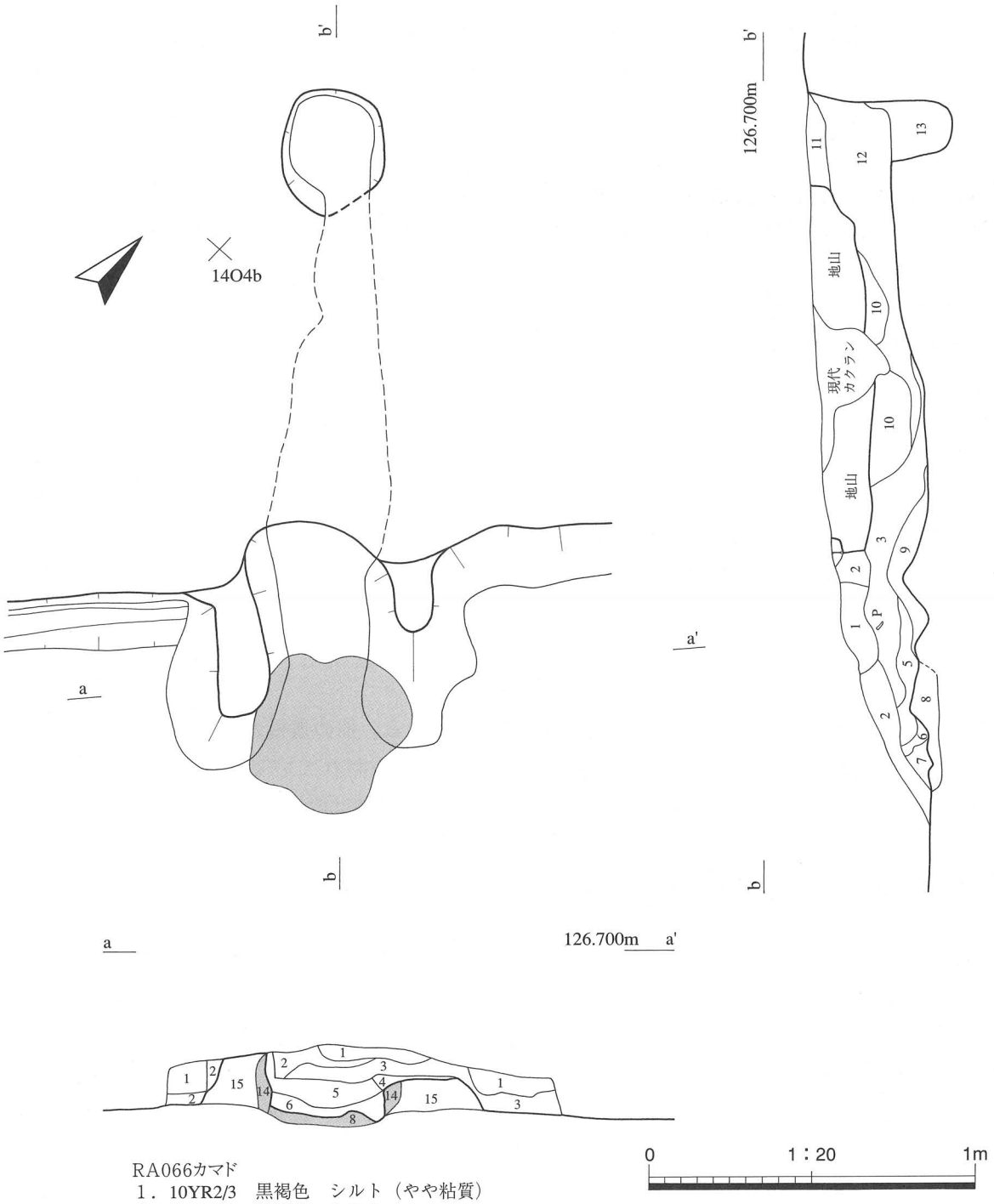
い台形に近い形態であると考えられる。

検出可能な北西壁4.09mおよび南西壁3.5mを測り、調査区外へ続く北東壁2.2mおよび南東壁2.81mを測る。また、深さは32cmを測る。

[堆積土]　概ね2層のシルトからなる。いずれも炭化物を多く含む。

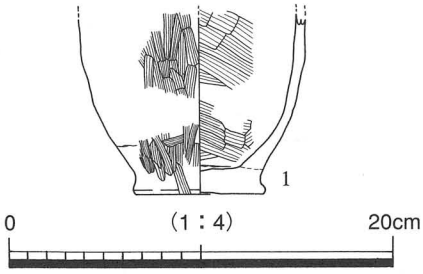
[壁・床面]　調査区外へ続く東隅以外がすべて良好に残存する。四側壁ともに、垂直に近い急角度で立ち上がる。床面は固く締まった平滑な面である。東側壁際には礫を検出した。また、壁際の周溝はカマド付近を除いてすべての壁で検出した。

貼床はほぼ床全面に施されており、除去すると凹凸著しい掘削面が存在する。



RA066カマド
1．10YR2/3　黒褐色　シルト（やや粘質）
2．10YR3/1　黒褐色　シルト
3．10YR3/3　暗褐色　シルト
4．10YR2/3　黒褐色　シルト（地山B.L少量混じる）
5．10YR3/4　暗褐色　シルト（焼土B.L少量混じる）
6．5YR3/6　暗赤褐色　シルト（焼土B.L多量に混じる）
7．10YR3/4　暗褐色　シルト（焼土地山B.L少量混じる）
8．5YR3/6　暗赤褐色　シルト（焼土B.L混じる）
9．10YR3/4　暗褐色　シルト（焼土B.L少量混じる）
10．10YR4/4　褐色　シルト（地山B.L少量混じる）
11．10YR3/3　暗褐色　シルト（やや粘質、地山B.L混じる）
12．10YR3/4　暗褐色　シルト（焼土B.L少量混じる）
13．10YR2/3　黒褐色　シルト（地山B.L微量に混じる）
14．5YR4/4　赤褐色　粘土
15．10YR4/4　褐色　シルト

第８図　RA066カマド〈第23次〉



第９図　RA066出土遺物〈第23次〉

[カマド] 北西側壁に設置されており、両袖部ともに基底部が残存している。また、燃焼部の平面形態は不定形であるが、両袖部内側の裾にまで焼土化が及んでいる。したがって、両袖部内側裾は本来の形状が良好に残存していると考えられる。カマド天井部は残存していない。

煙道部は煙出し部に向けあまり傾斜せずトンネル状に刳り抜かれており、長さ1.35mを測る。堆積土は焼土や地山ブロックを多く含んでいる。

煙出し部は、円筒状に掘り込まれており、煙道部底面よりも約20cm深い。

[柱穴] 明確な柱穴は確認されなかった。

[土坑] 確認されなかった。

遺物（第９図・写真図版26）

堆積土やカマド燃焼部などから土師器が出土した。このうち、図化可能な遺物は土師器１点である。

１はカマド燃焼部埋土より出土した土師器甕である。内外面ともにハケ調整が施されている。底部は比較的厚みがあり、安定した形態である。

小結　遺構の時期は、出土遺物より７世紀末～８世紀初頭であると考えられる。

RA068

遺構（第10・11図・写真図版６・７）

[位置] 第23次調査区南側13P19bグリッド付近に位置する。他の遺構と切り合い関係は認められないが、住居北隅および中央付近が大きく攪乱坑によって失われている。また、住居の北西には、RD105が位置している。Ⅰ層直下の平坦な面である。主軸方向は約45°北に傾いた東西方向である。住居東隅は調査区外へ続く。

[平面形・規模] 南北4.2m、東西4.5mを測り、平面形態は概ね方形であると推定される。深さは32cmを測る。

[堆積土] ３層のシルトからなる。いずれも炭化物を多く含む。上層からは平安時代の土師器片が出土している。下層には特に炭化物が多く認められ、土器の出土や焼土ブロックも顕著である。

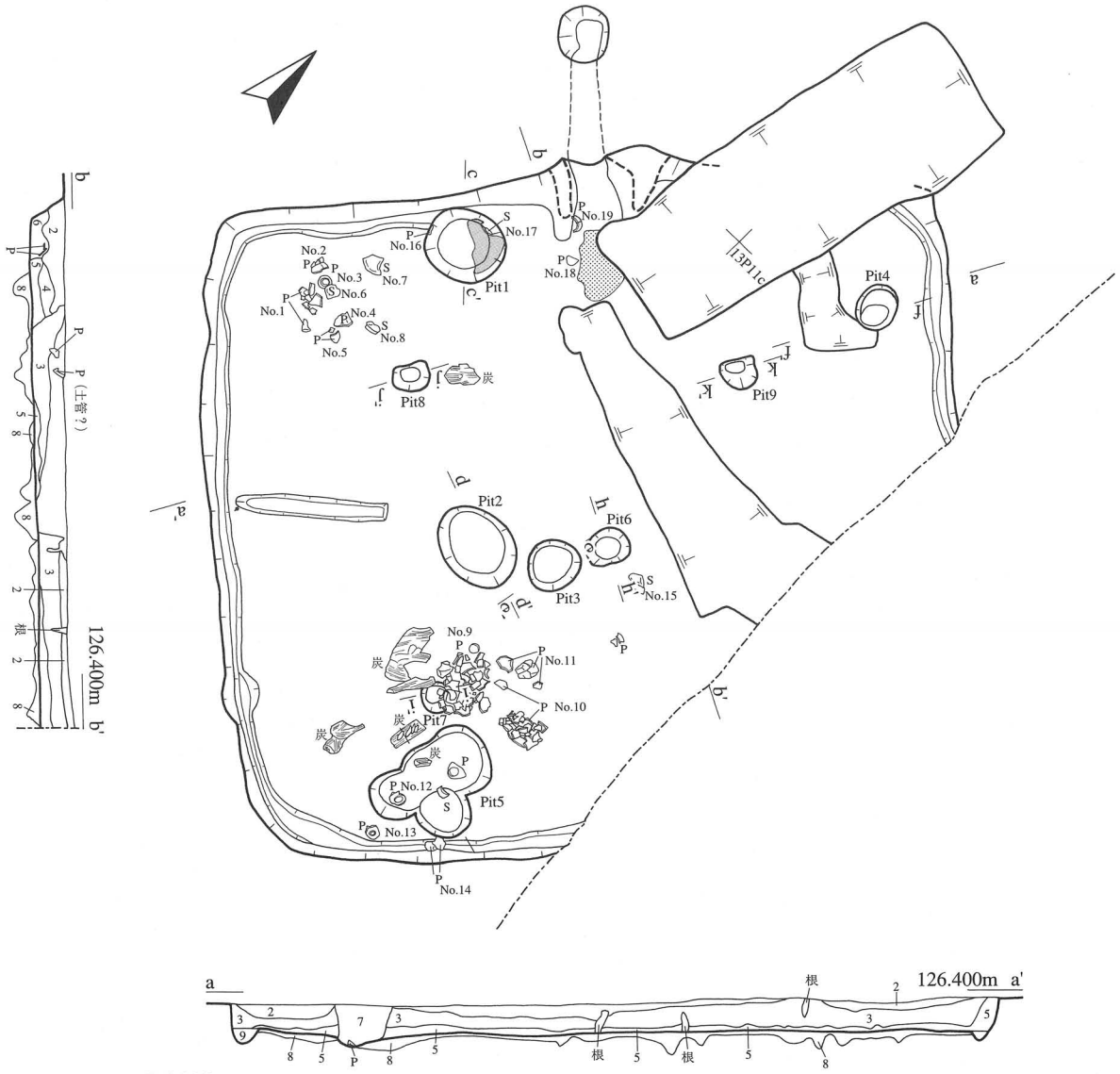
[壁・床面] 調査区外へ続く東側隅、攪乱を受けている西壁一部以外がすべて良好に残存する。北西側壁は緩やかな角度で立ち上がるが、その他の壁は比較的急角度で立ち上がる。床面は固く締まった平滑な面である。多数の遺物と炭化材を検出した。床面直上では、炭化材が散在しており、この住居の建築部材の一部である可能性が高い。床面が顕著に赤化しているような状況がみられないため断定は避けなければならないが、炭化材やまとまった土器の出土状況などを考えると、何らかの理由で焼失した住居である可能性もある。また、カマド付近を除いてすべての壁で周溝検出した。

貼床はほぼ床全面に施されており、除去すると凹凸著しい掘削面が存在する。

[カマド] 北西側壁に設置されており、両袖部ともに基底部が残存している。北側の袖および燃焼部は攪乱によって失われている。また、燃焼部の平面形態は不定形である。

煙道部は煙出し部に向け傾斜してトンネル状に刳り抜かれており、長さ1.4mを測る。埋土は炭化物を多く含んでいる。

[柱穴] ４基のピットを確認した。その他にも５基のピットを検出したが、配置や規模などから考えて柱穴はピット３・ピット５・ピット８・ピット９が有力である。このことから柱穴の平面配置は、



RA068
1．10YR2/1　黒色　シルト〈現代の攪乱〉
2．10YR2/2　黒褐色　シルト（火山灰B.L微量混じる）
3．10YR2/2　黒褐色　シルト（地山B.L微量、細粒砂混じる）
4．10YR2/3　黒褐色　シルト（中～粗粒砂混じる）
5．10YR2/2　黒褐色　シルト（やや粘質）
6．10YR2/3　黒褐色　シルト（地山B.L多く混じる、締まり強）
7．10YR2/1　黒色　粘土〈近現代の攪乱〉
8．10YR2/3　黒褐色　シルト（地山B.L多く混じる）

第10図　RA068〈第23次〉

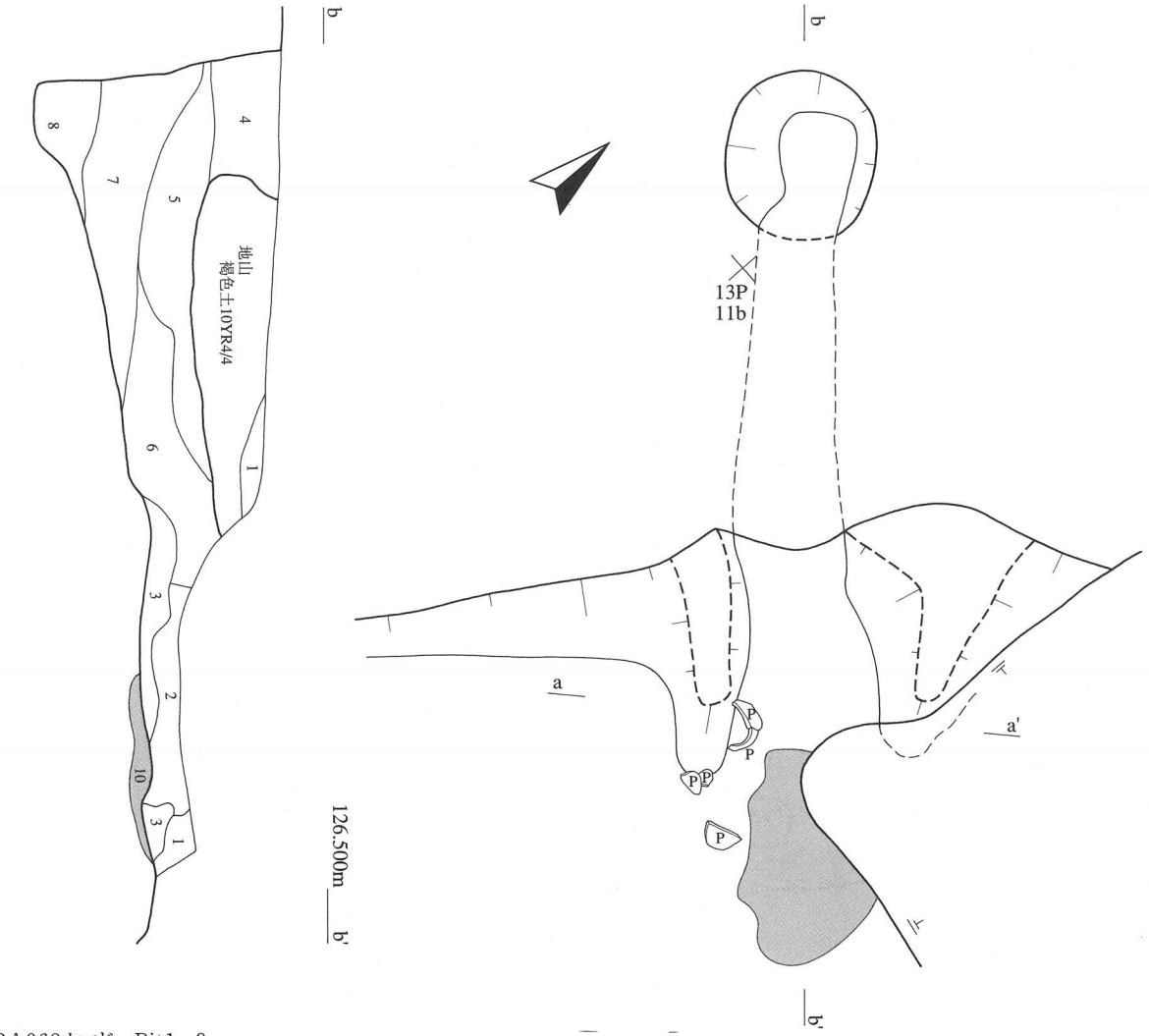
調査区外に１基あると想定され、合計５本の柱が考えられる。すなわち、四方の４本と中央の１本の配置が考えられる。

[土坑]　ピット３・５・８・９以外のピット１・２・４・６・７は土坑であると考えられる。

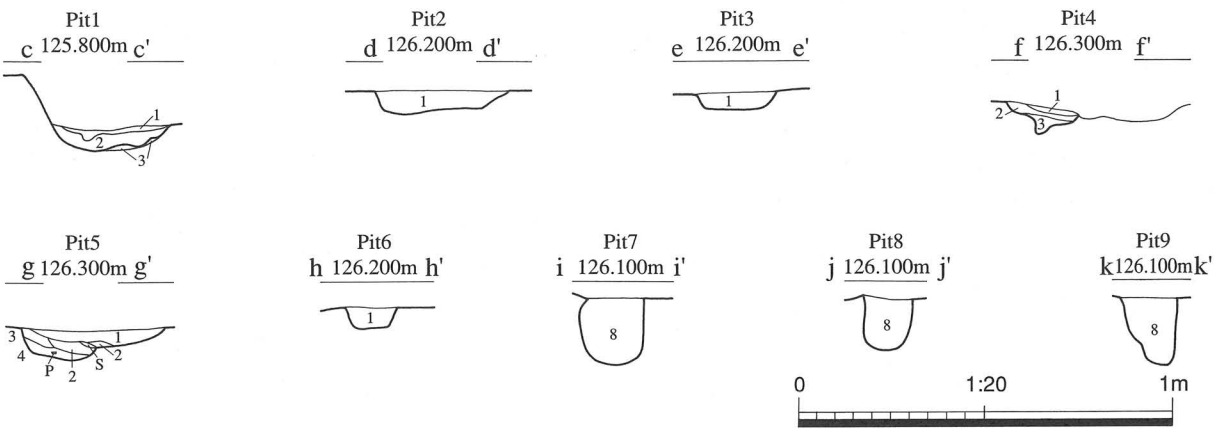
遺物（第12図・写真図版26～28）

堆積土や床面などから土師器、石器が出土した。このうち、図化可能な遺物は土師器21点、石器２点である。

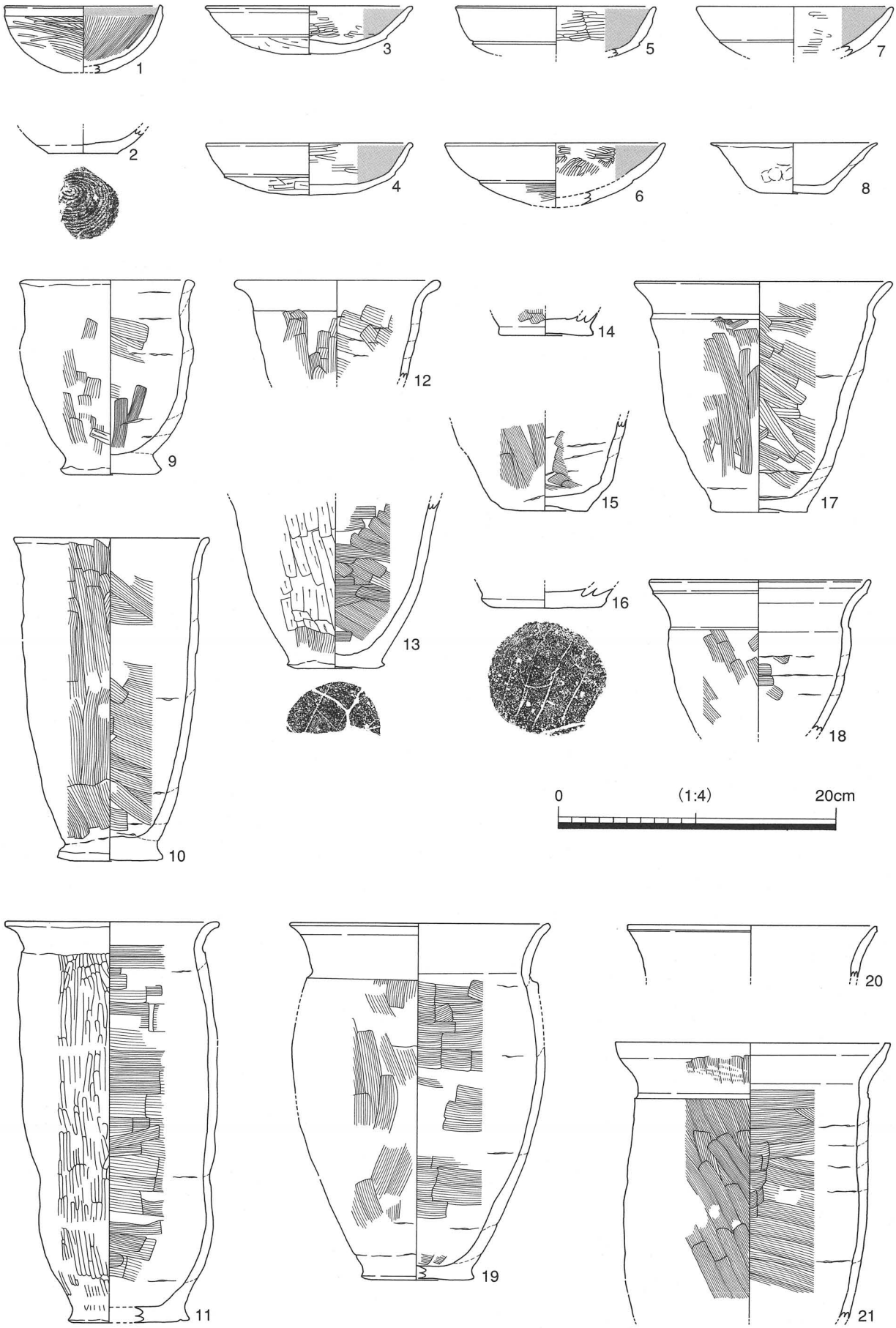
１～８は土師器坏である。



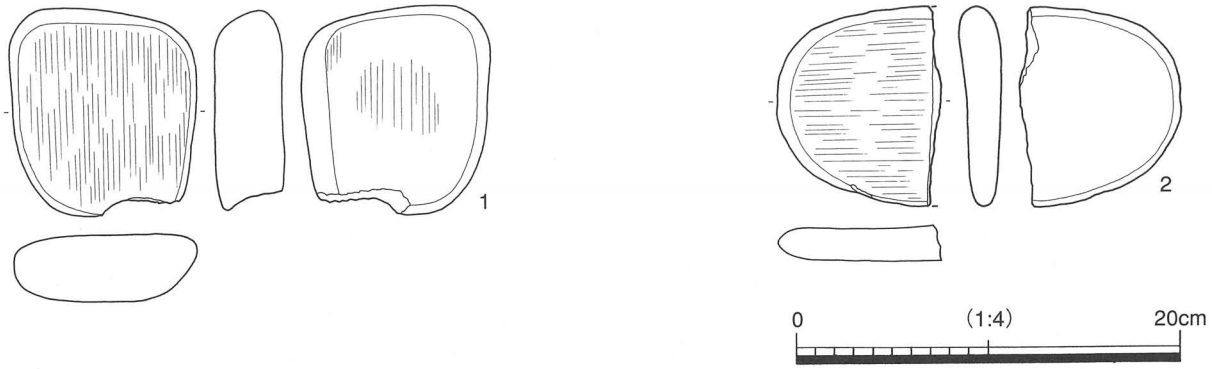
RA068カマド・Pit1～9
1．10YR2/1　黒色　シルト
2．10YR2/3　黒褐色　シルト（やや粘質、焼土・地山B.L少量混じる）
3．10YR3/2　黒褐色　粘土（焼土BL少量混じる）
4．10YR3/3　暗褐色　シルト
5．10YR3/2　黒褐色　粘土（地山BL少量混じる）
6．10YR2/3　黒褐色　シルト（地山B.L少量混じる）
7．10YR2/3　黒褐色　シルト（焼土・地山B.L少量混じる）
8．10YR3/1　黒褐色　シルト（地山B.L少量混じる）
9．10YR5/4　にぶい黄褐色　粘土
10．5YR3/6　暗赤褐色　粘土



第11図　RA068カマド〈第23次〉



第12図　RA068出土遺物（土器）〈第23次〉



第13図　RA068出土遺物（石器）〈第23次〉

1は床面直上より出土した半球形の小形坏である。外面はヘラケズリの後、横方向に細かなミガキが施されている。内面は底部から口縁部まで一息に放射状にストロークの長いミガキが施され、黒色処理されている。また、口縁部のヨコナデは、端部のみをナデる上下幅の狭いものである。これら諸特徴は関東地方、特に現在の千葉県域でみられる7～8世紀代の土師器と似ている。よって、この土師器は関東系土師器の一種であると考えられる。ただし、胎土や色調などは在地の土師器と大きく変わらない。2は埋土の上層より出土した坏である。ロクロが用いられているため平安時代のものである。底部には回転糸切りの痕跡が認められる。埋土上層の堆積時期が想定される土器である。3・4はともに有段の坏である。外面は体部下半において明瞭なヘラケズリが施されている。また、内面は丁寧なミガキと黒色処理が施されている。器高は比較的低く、器壁は比較的薄い特徴を有し、全体的にシャープな作りである。仙台平野など東北南部で特徴的な栗囲式の系譜を持つ坏である。5～7は丸底であるが、段が不明瞭な坏である。いずれも3・4に比して器壁が厚く、外面のヘラケズリも顕著ではない。在地によくみられる坏である。8は粗雑な作りの土師器坏である。外面には指頭圧痕がみられ、調整と呼ぶことができる調整は皆無である。

9～21は土師器甕である。いずれも埋土や床面より出土した。

9～11は当該地域ではみられない独特な甕である。いずれも頸部の括れや段は不明瞭で、底部は極度に厚みがあり、他の甕より粗雑な成形である。9は小形、10は中形、11は大形とみられ、12は下半がないため全体の形状が不明であるが、口径や器壁の傾きから9と同じく小形である可能性が高い。11は外面に縦方向のミガキが施されているが、その他はハケ調整である。また、11は土器自体の歪みが著しく、形状も異様である。18は小形の甕であるが、頸部の括れがなく、体部から一定の傾きを維持しながら口縁部が開口する形態である。

18と21は口縁部上端が上方に摘み上げられ、受け口状の形態を呈する。

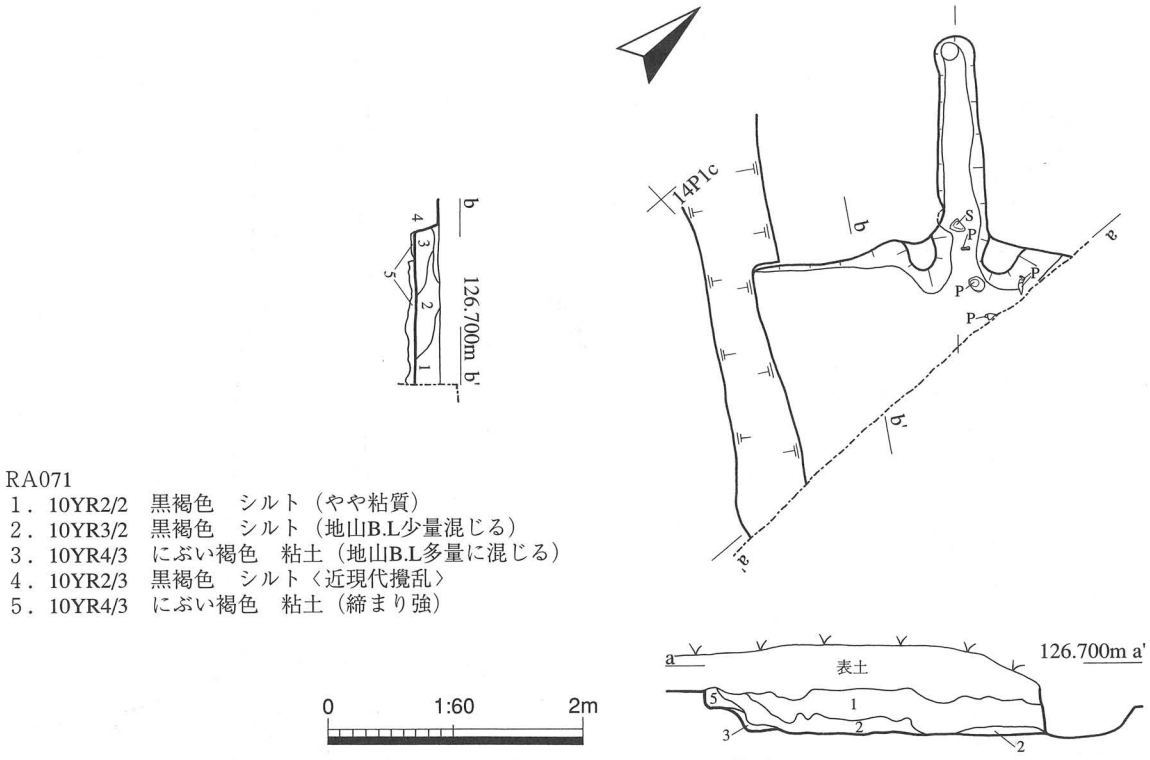
22・23は礫石器である。ともに扁平な形状を呈しており、擦痕が認められる。用途は不明であるが、縄文時代の石皿のような用途が想定される。

小結　遺構の時期は、出土遺物より7世紀末～8世紀初頭であると考えられる。

RA071

遺構（第14・15図・写真図版8・9）

[位置]　第23次調査区南側13P25cグリッド付近に位置する。他の遺構と切り合い関係は認められないが、住居西側壁が大きく攪乱（現代の水路）によって失われている。また、住居の南には、RA066が位置している。住居の大半が調査区外へ延びており、今回調査したのは北西のわずかな部分である。



RA071
1．10YR2/2　黒褐色　シルト（やや粘質）
2．10YR3/2　黒褐色　シルト（地山B.L少量混じる）
3．10YR4/3　にぶい褐色　粘土（地山B.L多量に混じる）
4．10YR2/3　黒褐色　シルト〈近現代攪乱〉
5．10YR4/3　にぶい褐色　粘土（締まり強）

第14図　RA071〈第23次〉

[平面形・規模] 平面全体が不明であるが、方形であると考えられる。残存する南北長0.6m、東西長2.8m、深さ13cmを測る。

[堆積土]　概ね3層のシルトからなる。堆積は攪乱を除けば、乱れが無く自然堆積であると判断される。

[壁・床面]　北西側壁の一部のみが確認できた。それ以外は、攪乱で失われている南西側壁、調査区外へ続く北東、南東側壁は現時点では不明である。検出した北西側壁は比較的急角度で立ち上がる。床面は固く締まった平滑な面である。床面直上では、遺物の出土はみられなかった。貼床は検出した床面のほぼ床全面に施されており、除去すると凹凸著しい掘削面が存在する。

[カマド]　北西側壁に設置されており、両袖部ともに残存しており、ともにシルトで構築されている。燃焼部は顕著な焼土を確認できなかった。しかし、北側袖部よりに土師器甕底部が逆位に置かれた状況で出土した。この甕はカマド支脚として用いられた可能性が高い。

煙道部は、底面が煙出し部に向け傾斜しており、天井部は良好ではなかったが、赤化した天井部が崩落したような痕跡を確認した。このことから、本来煙道部はトンネル状に刳り抜かれていたものと考えられる。

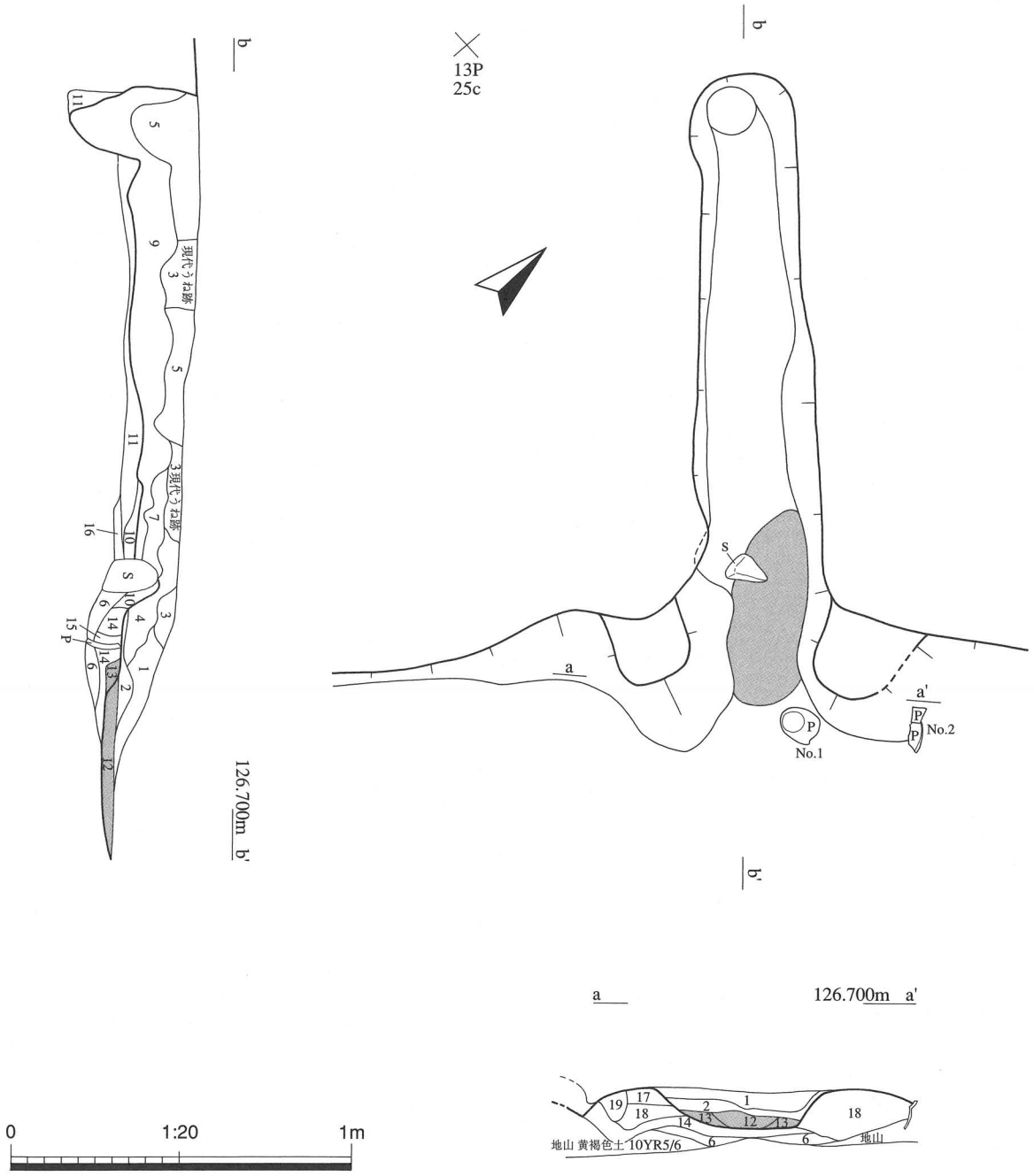
[柱穴]　明確な柱穴は確認されなかった。

[土坑]　確認されなかった。

遺物（第16図・写真図版29）

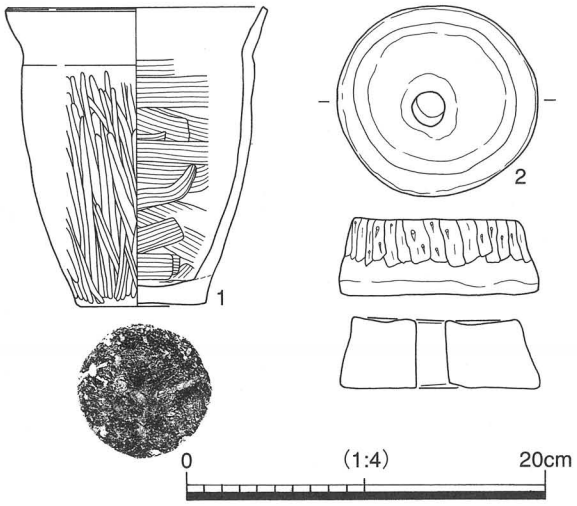
カマドの支脚と考えられる土師器甕1点、堆積土2層より土製紡錘車が1点出土した。

1は底部がカマド北袖部脇において逆位で出土した。また体部上半や口縁部などはカマド袖部周辺で出土し、接合してほぼ完形になった。外面は縦方向のミガキ、内面は横方向にハケが施される。頸部の括れは弱く、外傾はするもののやや直線的な器壁が特徴的である。また、器高が低めの器種である



RA071カマド
1．10YR5/3　にぶい黄褐色　粘土（地山B.L多量に混じる）
2．10YR5/6　黄褐色　粘土（焼土B.L混じる）
3．10YR4/4　褐色　粘土（地山B.L、焼土B.L微量に混じる）
4．10YR3/3　暗褐色　粘土（地山B.L混じる）
5．10YR3/2　黒褐色　シルト（地山B.L微量に混じる）
6．5YR3/6　暗赤褐色　粘土（地山B.L少量混じる）
7．10YR5/4　にぶい黄褐色　粘土
8．10YR4/4　にぶい赤褐色　粘土（やや粘質、地山B.L多量に混じる）
9．5YR3/4　暗赤褐色　粘土（地山B.L混じる、赤化）
10．10YR3/4　暗褐色　シルト（地山B.L多く混じる）
11．10YR3/4　暗褐色　粘土（焼土B.L多く混じる）
12．5YR3/6　暗赤褐色　粘土
13．5YR2/4　極暗赤褐色　シルト（焼土B.L混じる）
14．10YR3/3　暗褐色　シルト（土器片、焼土B.L混じる）
15．10YR4/4　にぶい赤褐色　シルト（地山B.L混じる）
16．10YR3/4　暗褐色　シルト（やや粘質、地山・焼土B.L混じる）
17．5YR3/4　暗赤褐色　粘土（地山・焼土B.L多く混じる）
18．5YR2/4　極暗赤褐色　シルト（地山・焼土B.L混じる）
19．10YR3/4　暗褐色　粘土（地山・焼土B.L多量に混じる）

第15図　RA071カマド〈第23次〉



第16図　RA071出土遺物〈第23次〉

にもかかわらず、底径はやや大きめである。

2は土製紡錘車である。中央部に焼成前の穿孔がなされている。外測面上半には縦方向のヘラケズリが施されている。焼成は非常に良好で固く締まっている。

小結　出土遺物の特徴より7～8世紀代の遺構であると考えられる。

RA067

遺構（第17・18図・写真図版18・19）

[位置]　第24次調査区南側12P17 nグリッド付近に位置する。他の遺構と切り合い関係は認められないが、住居東隅付近に攪乱によって失われている。また、住居の北東には、RD107が位置している。Ⅰ層直下、Ⅱ層上面の平坦な面である。帯状低地部分に立地しているため、削平を免れており、遺存度が非常に高い。主軸方向は約45°北に傾いた東西方向である。

[平面形・規模]　北壁4.6m、東壁4.75m、南壁4.66m、西壁4.97mをそれぞれ測り、平面形態は形の整った方形であると考えられる。深さは59cmを測り、他の住居よりも深さが保たれている。この深さからも、この竪穴住居が非常に良好な残存状況であることがわかる。

[堆積土]　概ね5層のシルトからなる。いずれも炭化物を多く含む。上層からは平安時代の土師器片が出土している。中層には火山灰が多く認められる層が堆積している。火山灰は十和田a降下火山灰であると考えられ、それよりも上層より平安時代の土器片が出土する状況と矛盾がない。これらのことから、この竪穴住居の最終埋没が平安時代であると考えられる。

[壁・床面]　すべて良好に残存する。北西側壁は急角度で立ち上がるが、その他の壁は比較的緩やかな角度で立ち上がる。

床面は固く締まった平滑な面である。多数の遺物を検出した。床面の遺物は、おもに南隅で集中して出土しており、すべて土師器である。また、床面中央では管玉が1点出土した。貼床はほぼ床全面に施されており、除去すると凹凸著しい掘削面が存在する。特に北西側は、貼床が顕著である。カマド付近を除いてすべての壁で検出した。また、この周溝から分岐する溝を南東と南西で2条確認した。

[カマド]　北西側壁に設置されており、両袖部ともに基底部が残存している。また、燃焼部の平面形態は円形であり、一部両袖部の内側裾に及ぶ。

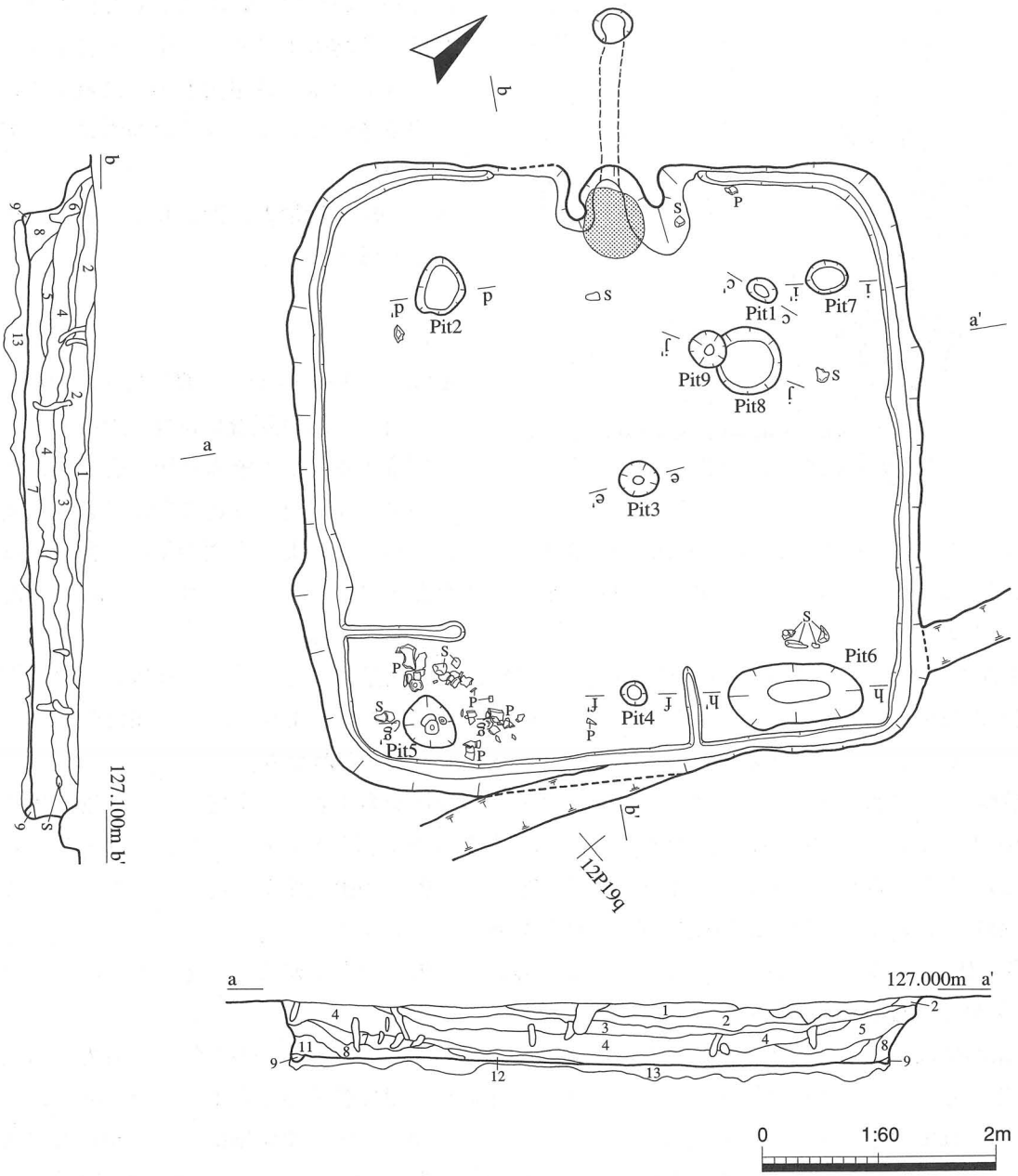
煙道部は煙出し部に向け傾斜してトンネル状に刳り抜かれており、長さ1.2mを測る。埋土は炭化物を多く含んでいる。カマド側の煙道部床面から土師器坏が1点出土した。

[柱穴]　4基の柱穴を確認した。その他にも5基のピットを検出したが、配置や規模などから考えて柱穴はピット1～4が有力である。このことから柱穴の平面配置は、4点で「Y」字形に配されると考えられる。

[土坑]　南隅のピット5は浅い土坑であるが、礫石器が2点まとまって出土した。

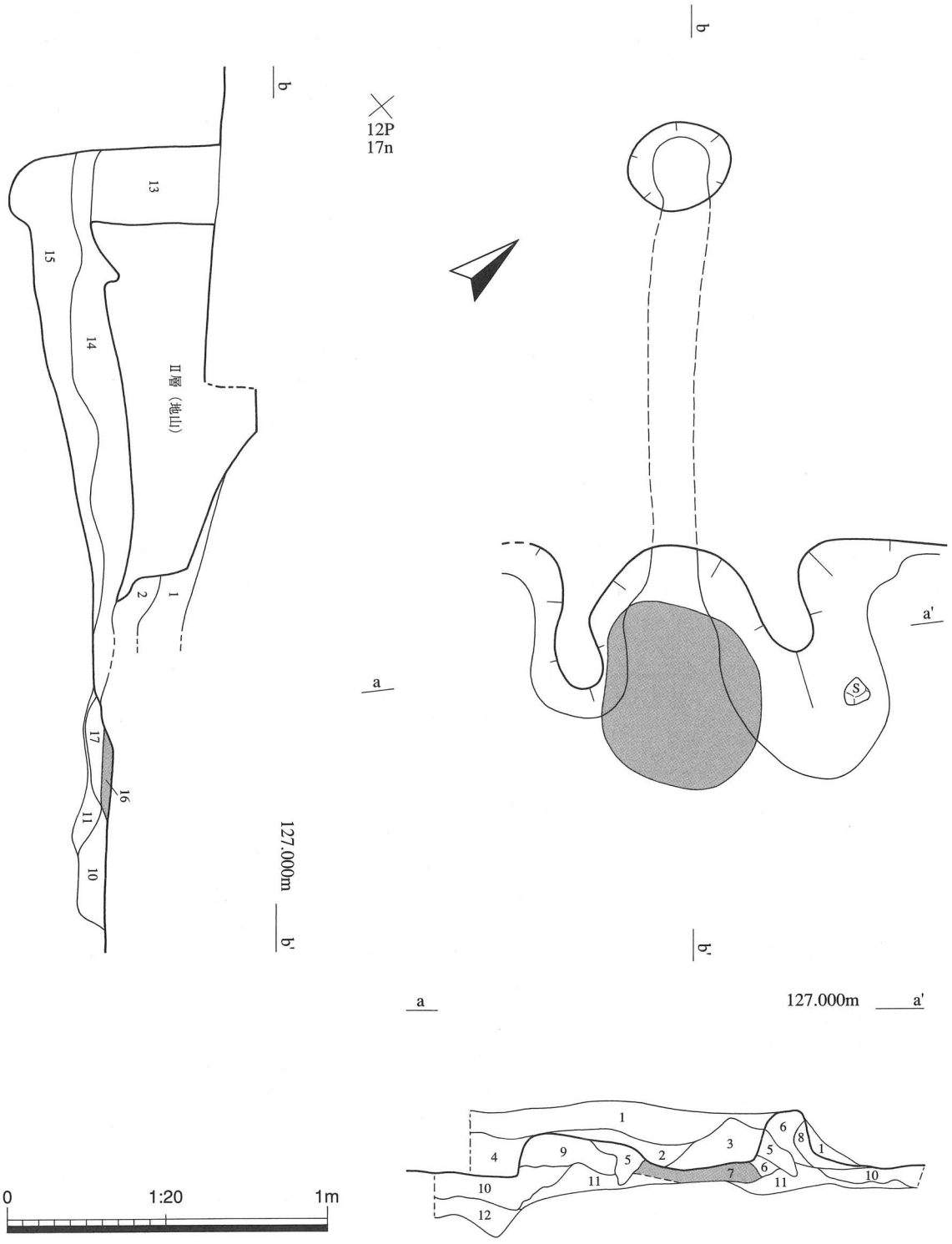
遺物（第20・21図・写真図版29・30）

堆積土や床面などから土師器、礫石器が出土した。このうち、図化可能な遺物は土師器11点、礫石器5点、管玉1点である。



RA067
1．10YR1.7/1　黒色　シルト（細粒砂混じる）
2．10YR2/1　黒色　シルト（小礫少量、火山灰B.L少量混じる）
3．10YR2/1　黒色　シルト（火山灰B.L多量に混じる、締まり弱）
4．10YR2/2　黒褐色　シルト（やや粘質）
5．10YR3/1　黒褐色　シルト（やや粘質）
6．10YR2/1　黒色　シルト（やや粘質）
7．10YR3/2　黒褐色　シルト（やや粘質、地山BL混じる）
8．10YR3/3　暗褐色　シルト（地山B.L多量に混じる）
9．10YR3/2　黒褐色　シルト（地山B.L多量に混じる）
10．7.5YR2/1　黒色　粘質シルト（地山B.L混じる）
11．10YR3/2　黒褐色　シルト（地山BL多量に混じる）
12．10YR3/2　黒褐色　シルト（地山BL多量に混じる）
13．10YR4/4　褐色　シルト（地山B.L、炭化物多量に混じる）

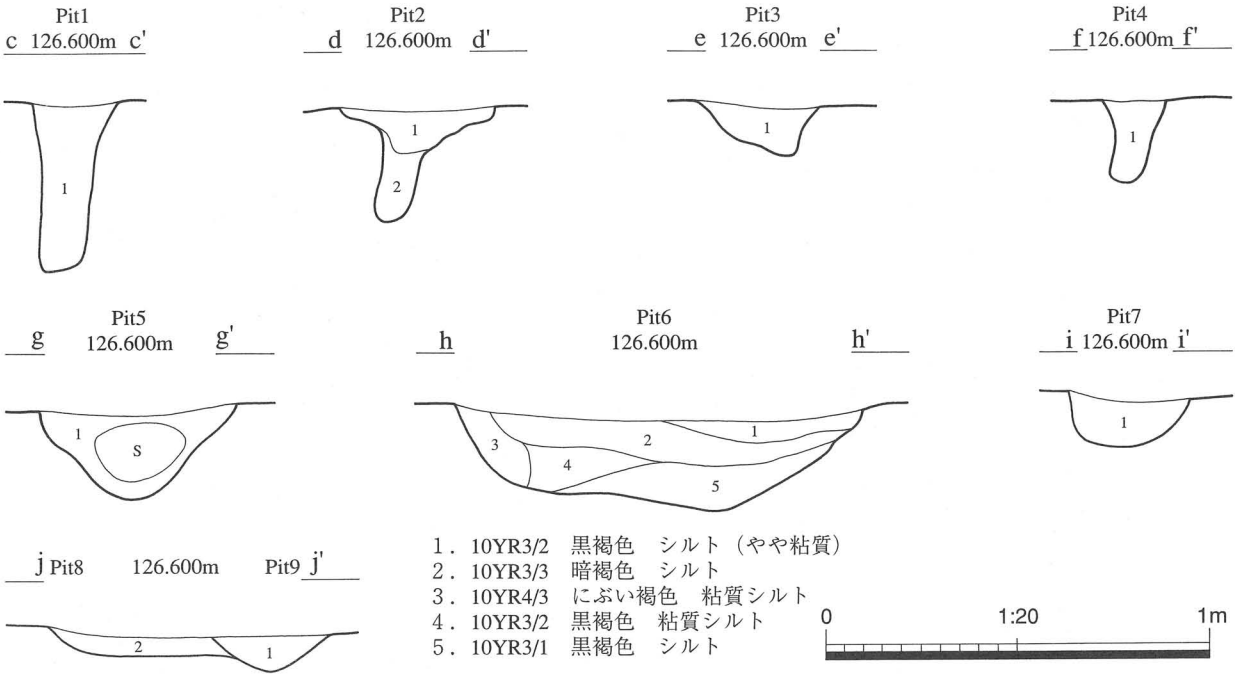
第17図　RA067〈第24次〉



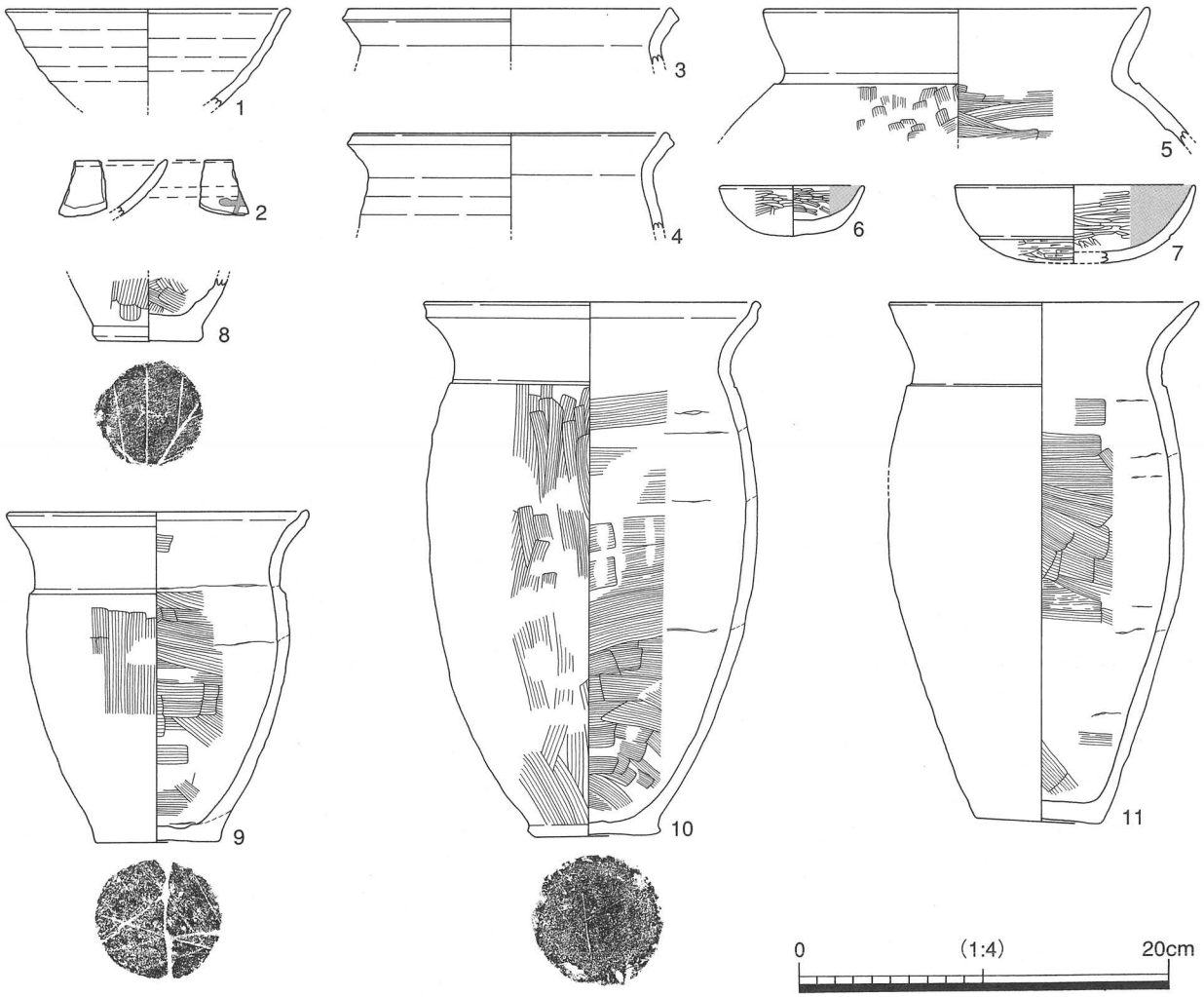
RA067カマド

1．10YR2/2　黒褐色　シルト（地山B.L混じる）
2．10YR2/2　黒褐色　シルト（地山・焼土B.L多く混じる）
3．10YR2/2　黒褐色　シルト（やや粘質）
4．10YR2/1　黒色　シルト（地山B.L混じる）
5．10YR1.7/1　黒色　シルト（焼土B.L混じる）
6．10YR4/3　にぶい褐色　シルト（焼土B.L混じる）
7．10YR3/2　黒褐色　シルト（焼土BL多く混じる）
8．10YR3/3　暗褐色　シルト（やや粘質）
9．10YR4/4　褐色　粘質シルト（一部赤化）
10．10YR4/4　褐色　粘質シルト（地山B.L混じる）
11．10YR5/6　黄褐色　シルト（やや粘質）
12．10YR6/6　明黄褐色　粘土（やや粘質）
13．10YR4/3　にぶい褐色　シルト
14．10YR3/2　黒褐色　シルト
15．10YR1.7/1　黒色　シルト
16．7と同じ、ややしまる
17．10YR5/6　黄褐色　シルト

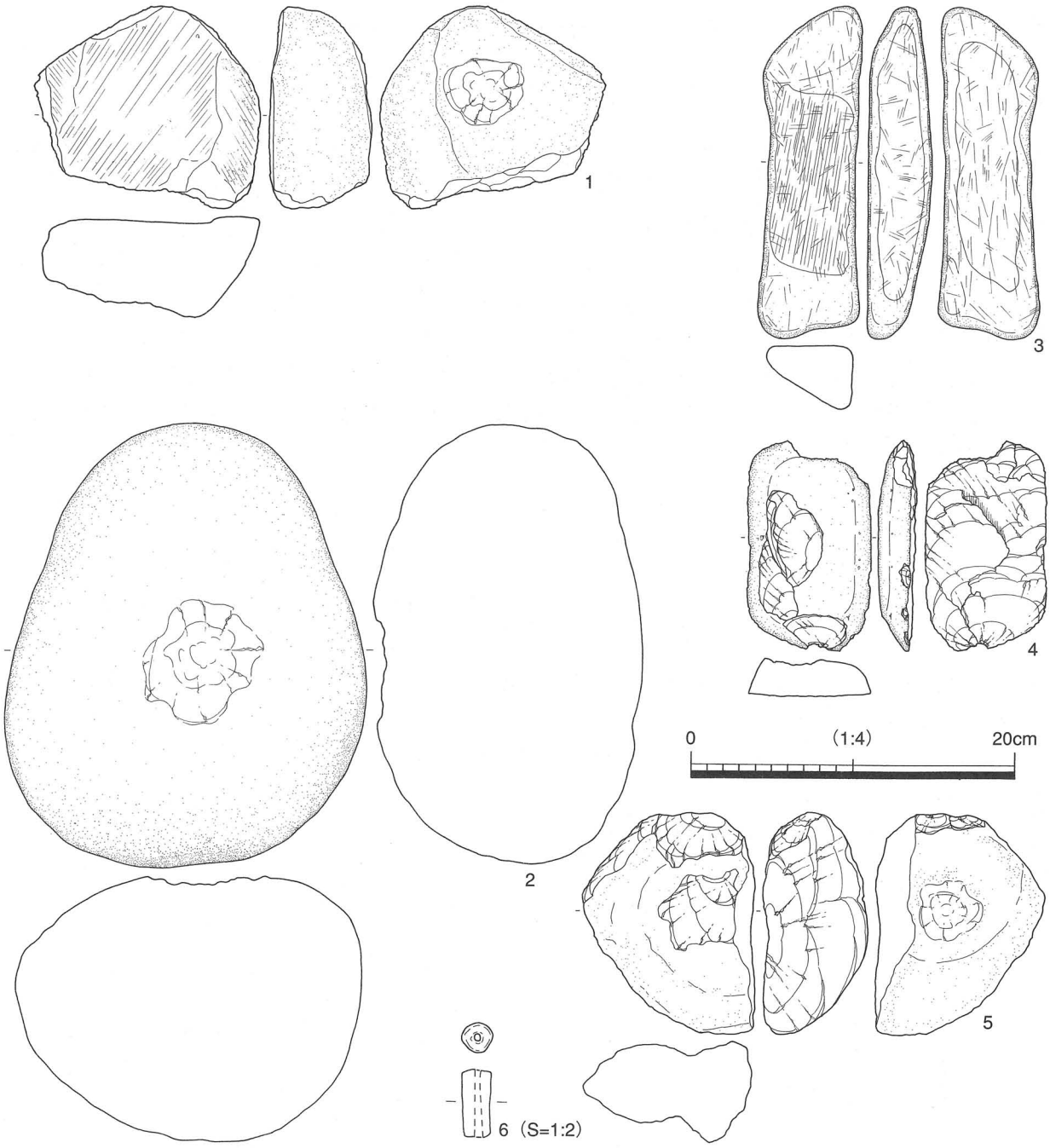
第18図　RA067カマド〈第24次〉



第19図　RA067ピット〈第24次〉



第20図　RA067出土遺物（土器）〈第24次〉



第21図　RA067出土遺物（石器・石製品）〈第24次〉

1・2は土師器坏である。いずれもロクロが用いられており、9世紀後半～10世紀初頭のものであると考えられる。3・4は土師器甕である。いずれもロクロが用いられており、9世紀後半～10世紀初頭のものであると考えられる。1～4は埋土上層より出土した。いずれも火山灰層よりも上層の遺物である。5は貼床より出土した土師器壷である。頸部に段を持ち、直線的に外傾する口縁部を有する。内外面ともにハケ調整が施されている。6・7は土師器坏である。6はカマド北袖部の脇床面より出土した。小皿形の坏で、内外面ともに丁寧にミガキが施されている。7は煙道部底面より出土した。微かな有段、丸底の坏である。お椀形の丸い体部を有し、外面下半はヘラケズリ、内面はミガキが施されている。

8～11は土師器甕である。8が北東隅の床面直上より出土した以外は、すべて南隅の床面直上より出土した。

1～4は礫石器である。

1は北隅床面直上、2・5は南隅ピット5より出土した。片面中央にへそ状の窪みがある。縄文時代のくぼみ石のような形状である。石材はいわゆる軽石素材である。3は砥石である。断面は二等辺三角形を呈し、長辺部分両面に明瞭な擦痕が認められる。この両擦り面は、本来の石材の色調ではなく、光沢を帯びた青灰色を呈する。4は敲打器のような礫石器である。端部に打撃による剥離が認められる。

小結　床面より出土した遺物は、8世紀中ば～後半である。しかし、埋土中位に10世紀初頭と比定される十和田a火山灰が認められる。さらに、埋土上層より9世紀後半～10世紀初頭の土師器が出土した。これらを総合すると、この竪穴住居は8世紀代に営まれ、その後廃絶し、最終的に10世紀前半頃埋没が完了したと考えられる。

RA060

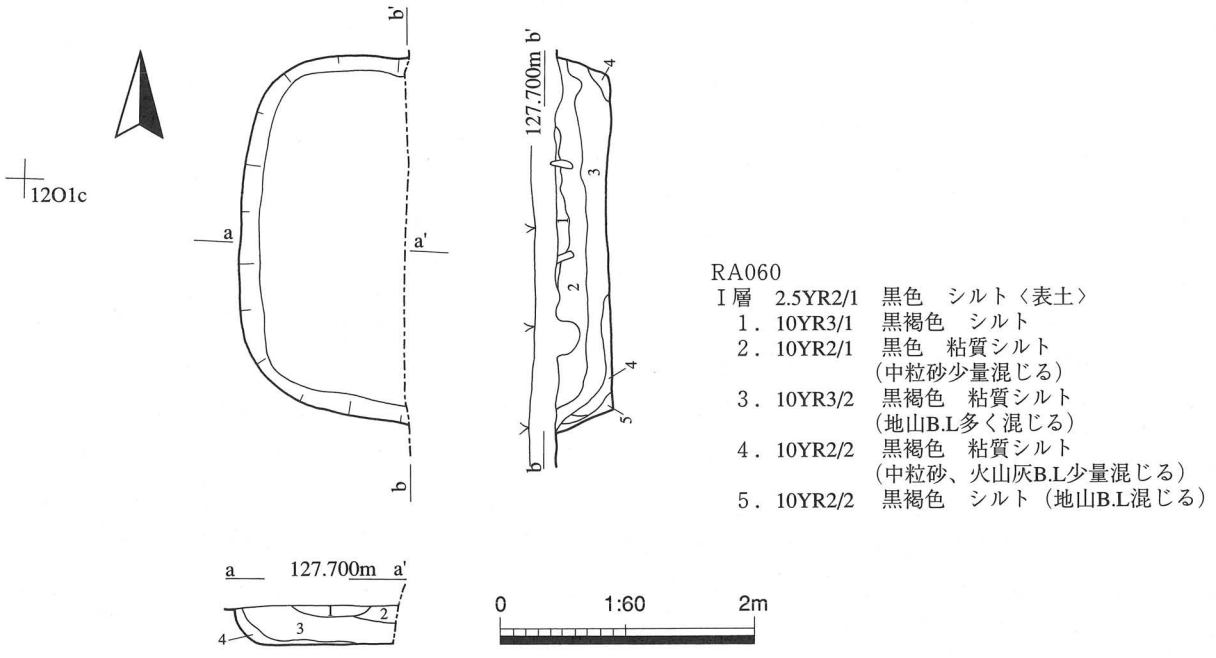
遺構（第22・23図・写真図版9）

[位置]　第23次調査区北側12O 1 cグリッド付近に位置する。他の遺構と切り合い関係は認められないが、住居の半分が調査区外へ延びており、今回調査したのは西半のみである。なお、東側調査区外は第29次北調査区であり、この住居の東半が検出されている。（本書Ⅴ章　第29次調査の成果参照）Ⅰ層直下の平坦な面である。

[平面形・規模]　方形であると考えられ、残存する南北長0.6m、東西長2.8m、深さ13cmを測る。

[堆積土]　概ね2層のシルトからなる。乱れが無く自然堆積であると判断される。堆積土は全体的に締まりがなく、火山灰はみられない。

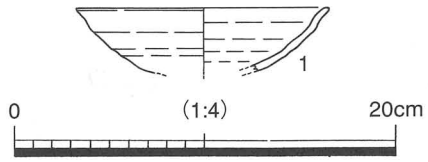
[壁・床面]　第23次調査区では、西側壁と南北両側壁の一部のみを良好に検出した。壁は急ではなく緩やかでもなく立ち上がる。床面は平滑な面である。他の住居に比べ固く締まった様子はない。床面直上では、遺物の出土はみられなかった。



RA060
Ⅰ層　2.5YR2/1　黒色　シルト〈表土〉
1．10YR3/1　黒褐色　シルト
2．10YR2/1　黒色　粘質シルト（中粒砂少量混じる）
3．10YR3/2　黒褐色　粘質シルト（地山B.L多く混じる）
4．10YR2/2　黒褐色　粘質シルト（中粒砂、火山灰B.L少量混じる）
5．10YR2/2　黒褐色　シルト（地山B.L混じる）

第22図　RA060〈第23次〉

床面施設として第23次調査区では、柱穴や土坑などはみられず、壁際の周溝も存在しなかった。貼床は検出した床面範囲ではまったくみられなかった。この貼床が施されていないことが、床面の固く締まっていないことと何らかの関係があるのかもしれない。



第23図　RA060出土遺物〈第23次〉

[カマド]　煙道部ともに第23次調査区では、検出していない。

[柱穴]　第23次調査区では、確認されていない。

[土坑]　第23次調査区では、確認されていない。

遺物（第23図・写真図版30）

第23次調査区では土師器坏が1点のみ埋土より出土した。この土師器坏はロクロが用いられており、黒色処理はされていない。9世紀後半～10世紀初頭の土師器と考えられる。

小結　出土した遺物の特徴より、この竪穴住居は9世紀後半～10世紀初頭の竪穴住居であると考えられる。

RA061

遺構（第24・25図・写真図版10・11）

[位置]　第23次調査区南側12O18yグリッド付近に位置する。他の遺構と切り合い関係は認められない。また、住居の北東にはRA062、南には、RD103が位置している。検出面はⅠ層直下の平坦な面であるが、南側は帯状低地に掛かっているため、わずかに残存するⅡ層上面で検出した。主軸方向はほぼ東西方向である。

[平面形・規模]　北壁5.17m、東壁5.12m、南壁5.25m、西壁4.96mを測り、比較的整った方形である。また、深さは34cmを測る。

[堆積土]　概ね3層のシルトからなる。いずれも炭化物・土器片などを含む。

[壁・床面]　すべて良好に残存する。南北側壁は緩やかな角度で立ち上がるが、その他の壁は比較的急角度で立ち上がる。南側壁は一部で、下部が抉れたようになっている。固く締まった平滑な面であるが、北西部分は他より比較的柔らかである。床面では土器などの遺物を多く検出した。貼床はほぼ床全面に施されており、除去すると凹凸著しい掘削面が存在する。

[カマド]　東側壁南寄りに設置されており、両袖部ともに基底部が残存している。カマド両袖部は低く、緩やかな高まりを検出したが、天上部を含む大半は、崩落しているものと考えられる。燃焼部は、両袖部に挟まれるように存在し、概ね円形の平面形態である。

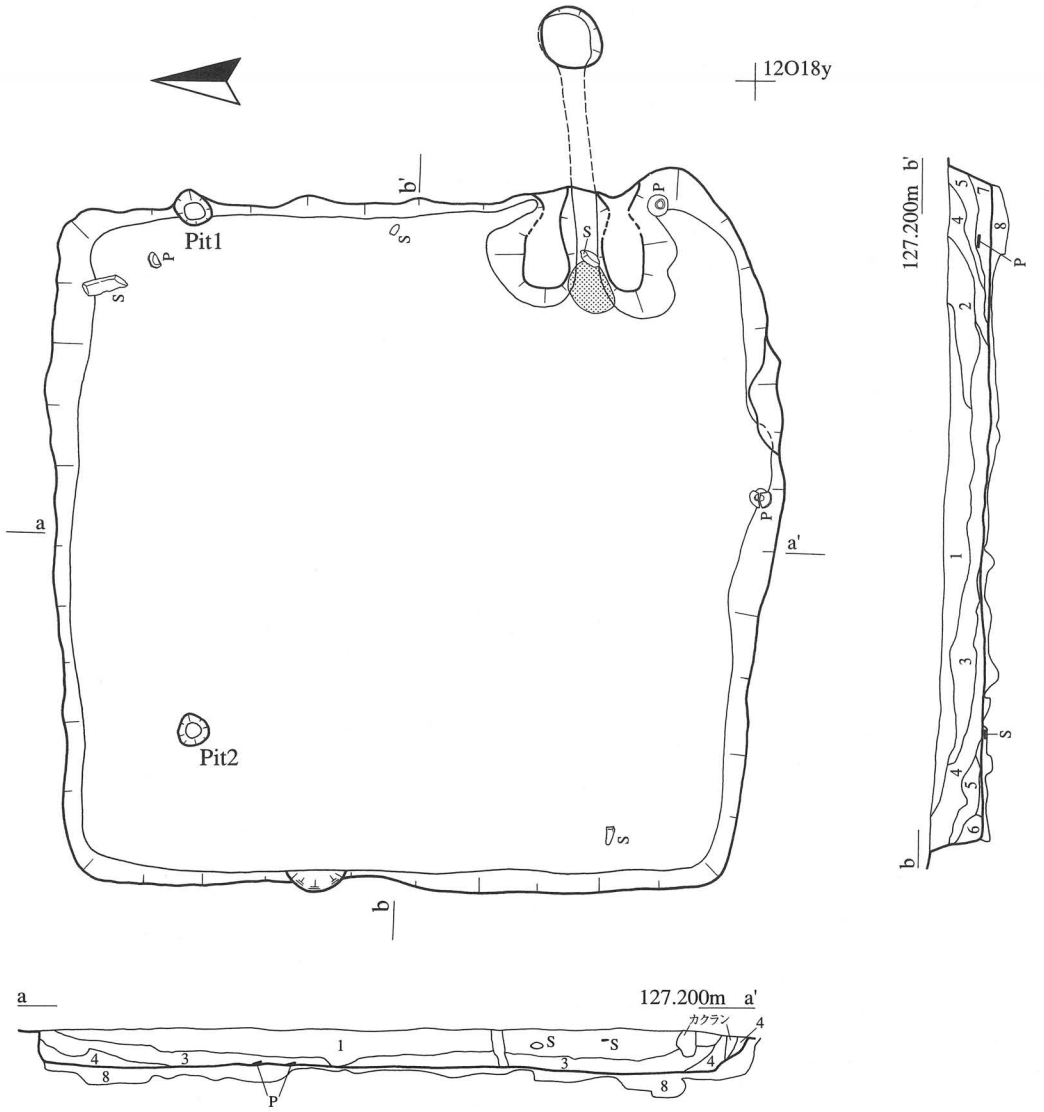
煙道部は煙出し部に向け傾斜してトンネル状に刳り抜かれており、長さ1.44mを測る。天井部は攪乱等で完存ではないが、鈍く赤変している部分もみられる。煙道部埋土は炭化物を多く含んでいるシルトである。煙出し部は平面円形を呈し、筒状に掘り込まれている。

[柱穴]　2基の小形ピットを確認した。ピット1は北西部、ピット2は東側壁際でそれぞれ検出した。2基ともに規模が同じで、北側壁と平行して直線上に並ぶため、柱穴と考えられる。しかし、その他に同様のピットはみられず、貼床を除去した状況にあっても2基以外のピットは確認されなかった。

遺物（第26～28図・写真図版30～35）

堆積土や床面などから多量の土師器、須恵器など土器類と礫石器が出土した。このうち、図化可能な遺物は土器68点、石器1点である。

1・2・4～30・55～67は土師器坏である。内面に、ミガキ・黒色処理が施されている12点以外は内面ミガキ・黒色処理されていない。また、8・12・16・17・18・19・21・64のように底部あるい

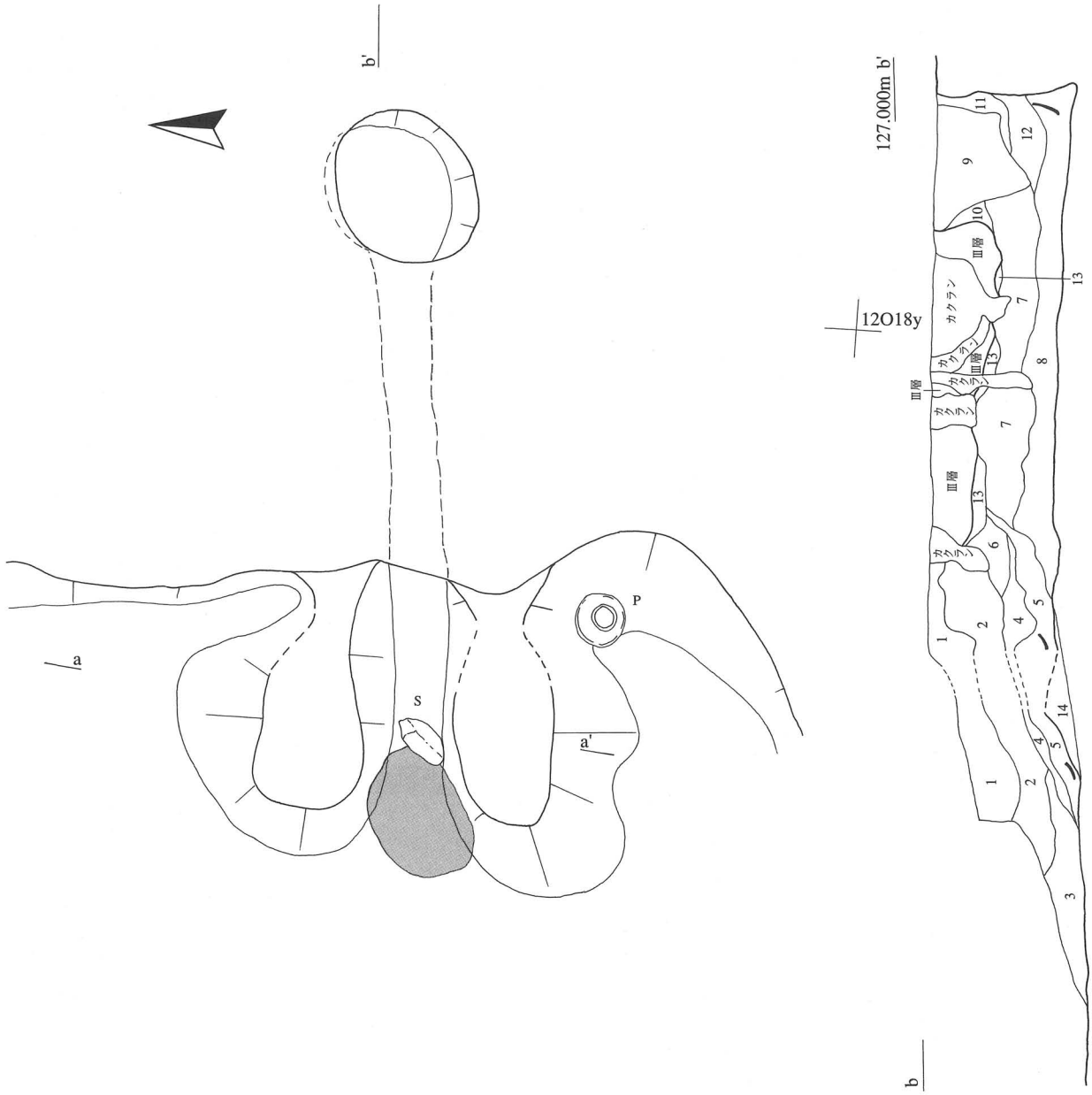


RA061
1．10YR2/1　黒色　シルト（中～細粒砂混じる）
2．10YR2/1　黒色　シルト（やや粘質）
3．7.5YR2/1　黒色　シルト（中粒砂多く混じる）
4．10YR2/3　黒褐色　シルト（中～粗粒砂混じる）
5．10YR1.7/1　黒色　粘質シルト（中粒砂B.L混じる・締まり強）
6．7.5YR3/3　暗褐色　粘質シルト（地山B.L混じる・締まり弱）
7．10YR2/3　黒褐色　シルト（炭化物混じる）
8．10YR4/3　にぶい褐色　シルト（地山B.L混じる）

第24図　RA061〈第23次〉

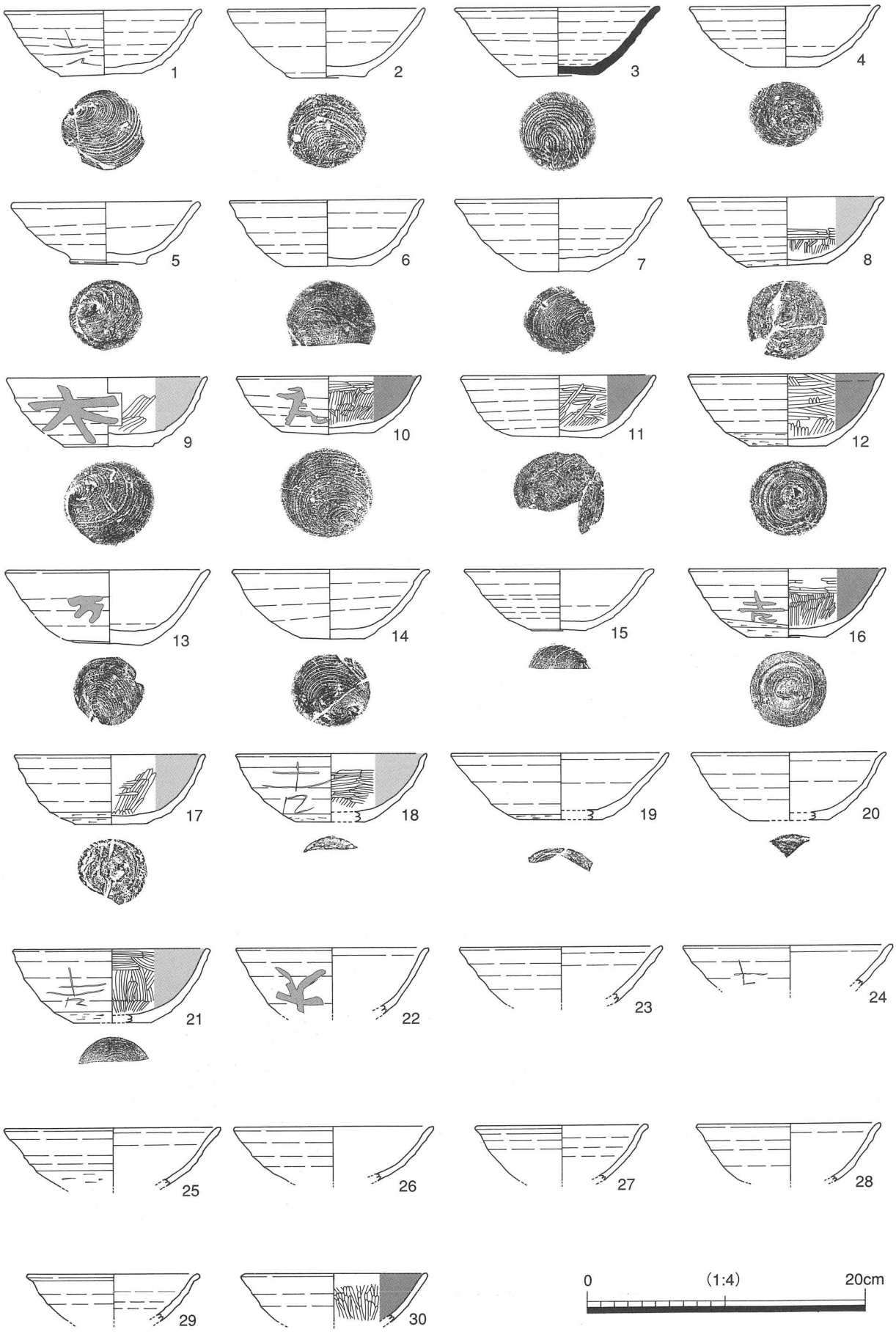
は体部最下端にヘラケズリが施されているものもある。

1は体部外面に刻書が認められる。摩滅により消えている部分もあるが、筆致から上部の「士」が「土」となっている「吉」と考えられる。また、「口」部は3画目と4画目が一連の流れで続けられており、ちょうど「Z」のように見える。9は体部外面に墨書が認められる。正位で「木」と判読できる。非常に大きく太い文字であり、留めや払い、反りなど毛筆の原則は無視されている。この「木」という墨書は台太郎遺跡でよくみられる文字である。また、底部内面には重ね焼きによって生じた痕跡が認められる。10も体部外面に墨書が認められる。欠損しているため文字全体は不明ながら、正位で「成」である可能性が考えられる。もし、「成」であるならば、本宮熊堂B遺跡でしばしばみられる文字と共通する。13も体部外面に墨書が認められる。不明瞭であるが、正位で「万」と書かれてい

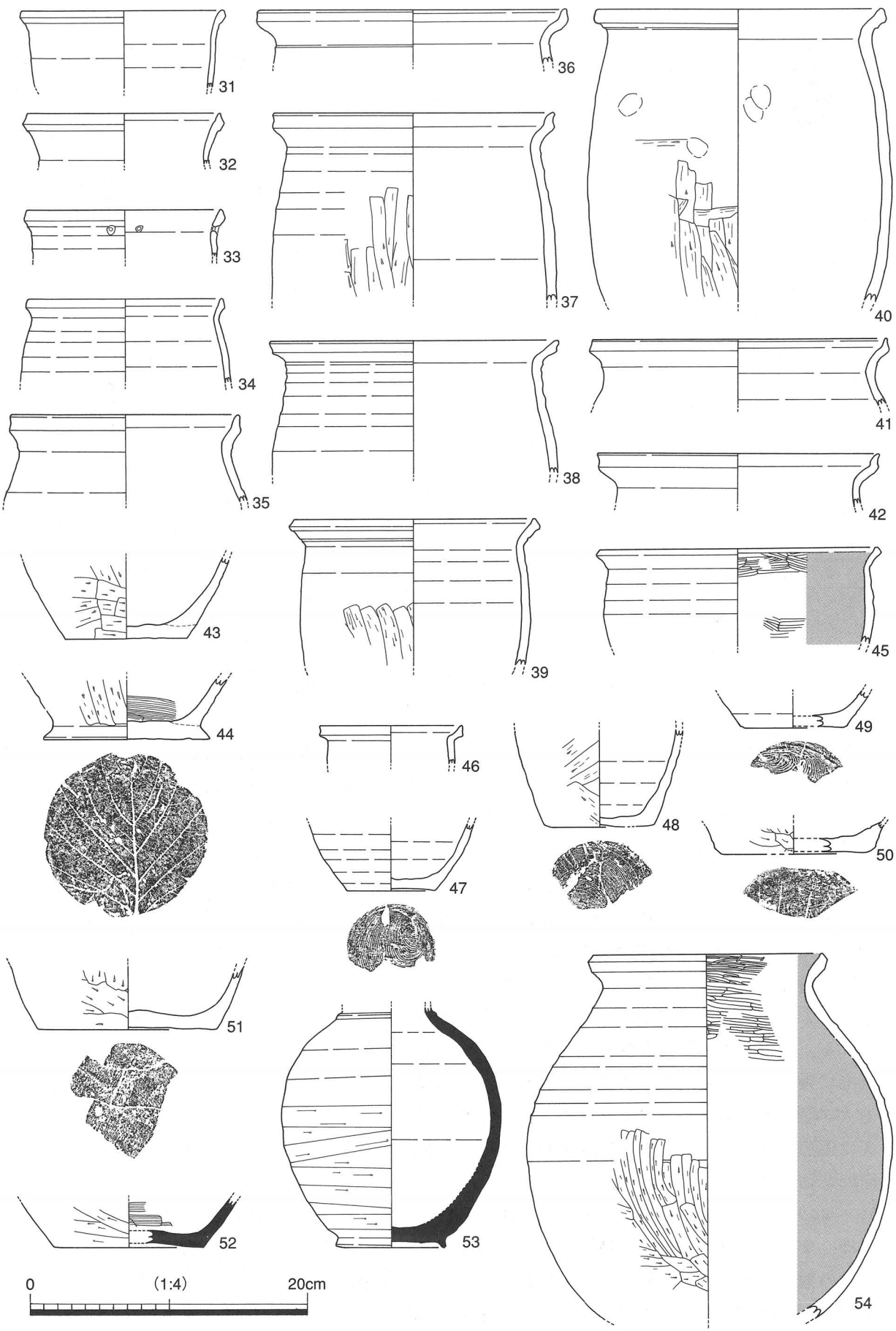


RA061カマド
1．10YR2/1　黒色　シルト(やや粘質)
2．10YR2/2　黒褐色　シルト(中粒砂多く混じる)
3．10YR3/2　黒褐色　シルト(中粒砂混じる)
4．10YR1.7/1　黒色　シルト
(炭化物･焼土B.L少量混じる)
5．7.5YR3/3　暗褐色　シルト
(中粒砂･焼土B.L少量混じる)
6．10YR3/2　黒褐色　シルト(中粒砂多く混じる)
7．10YR3/2　黒褐色　シルト
(やや粘質、中粒砂混じる)
8．10YR1.7/1　黒色　シルト(炭化物混じる)
9．7.5YR3/3　暗褐色　シルト
(中粒砂･焼土B.L多量に混じる)
10．7.5YR3/4　暗褐色　シルト(被熱弱い焼土)
11．7.5YR2/2　黒褐色　シルト(炭化物混じる)
12．10YR2/2　黒褐色　シルト
(やや粘質、地山B.L少量混じる)
13．7.5YR4/1　褐灰色　シルト
14．10YR4/1　褐灰色　シルト

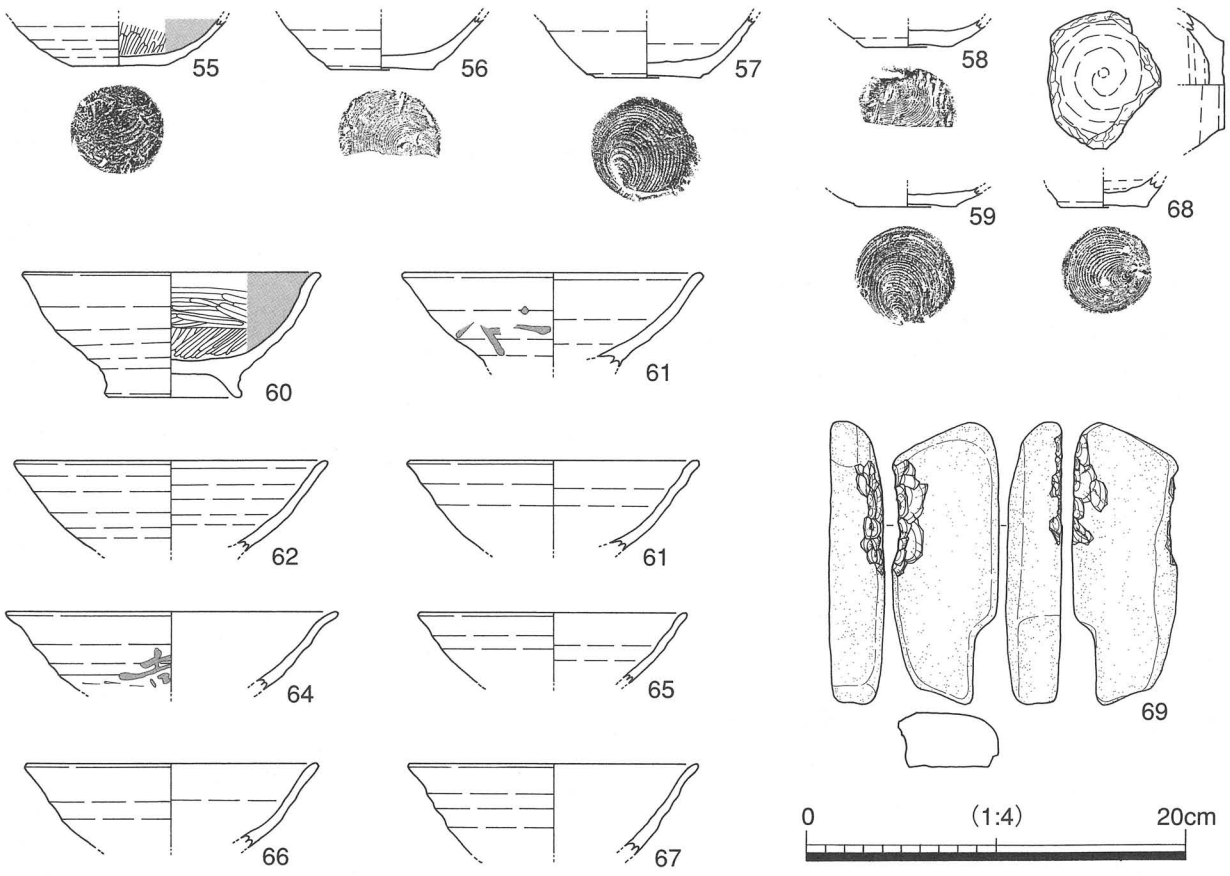
第25図　RA061カマド〈第23次〉



第26図　RA061出土遺物（１）〈第23次〉



第27図　RA061出土遺物（２）〈第23次〉



第28図　RA061出土遺物（３）〈第23次〉

る可能性が高い。16は南壁際の床面で出土した坏である。これも体部外面に墨書が認められる。正位で「吉」と判読できる。１と同じく「士」が「土」となっており、「口」部の最終画が「Z」のように書かれている。22は体部外面に墨書が認められる。逆位に書かれた「大」であると考えられる。この文字は細谷地遺跡で多くみられる墨書である。24は体部外面に刻書が認められる。体部下半が欠損しており、刻書は全部残っていないが、筆致から「吉」の上部である可能性が考えられる。27は北東埋土下層より出土したが、北隣に位置するRA062の南カマド脇より出土した破片と接合関係が認められた。18・21は体部外面に刻書が施されている。１や16と筆致が共通する正位の「吉」である。60は土師器高台付坏である。椀形を呈し、比較的しっかりとした高台が貼り付けられている。内面はミガキ調整および黒色処理が施されている。61も土師器高台付坏であると考えられる。外面には墨書が認められる。墨書は欠損部にも及んでおり、全体をみることができない。しかし、残存部や筆致などから正位に書かれた「木」である可能性が高い。64は体部外面に墨書が認められる。１・16・18・21・24などの墨書や刻書でみられる正位の「吉」と同じであると考えられる。

３は須恵器坏である。口縁部は直線的に外傾するが、端部はわずかに外反傾向である。また、底部は回転糸切り後無調整である。

31～44・46～51は土師器甕である。このうち43・44・50・51はロクロを用いていない甕で、それ以外は、すべてロクロを用いた甕である。これらを大小に分けると、31～35・39・46～49は小形の甕、その他はすべて大形の甕であると考えられる。47は北東埋土下層より出土したが、北隣に位置するRA062南カマド脇より出土した破片と接合関係が認められた。33は小形の甕である。口縁部直下

に1箇所、直径約5 mmの穿孔が施されている。穿孔は焼成後のものとみられ、内外面両方から穿たれている。どのような目的の孔かは判断できないが、この甕の使用に関わるものであると推測される。45は土師器鉢である。基本的にロクロが用いられる甕と同じ作り、同じ形態であるが、内面にミガキと黒色処理が施されている点が大きく異なる。黒色処理は、煮沸など2次的に被熱すると吸着されていた炭素が飛んでしまう。したがって、この種の土器は煮沸用途の甕とは用途が異なると考えられる。したがって、土師器鉢と呼称する。

52・53は須恵器壷である。

52は底部のみの破片であり、全体の形状が不明である。そのため小形の甕である可能性も考えられる。53は須恵器長頸壷である。口縁～頸部は欠損しているが、頸部付け根に凸線が巡る。底部には貼り付けの高台が付けられている。調整はロクロによる調整が主であるが、外面の体部中位～下半には回転ヘラケズリが施されている。全体的に焼成が不良気味で、やや酸化しているが、成形および調整は丁寧である。

54はロクロが用いられた土師器壷である。頸部が括れ、土器の最大径が体部中位にある球胴形の形態を呈する。外面はロクロによる回転ナデの後、縦方向のヘラケズリが施されている。内面は横方向のミガキ・黒色処理が施されている。45と同様にロクロを用いた甕と同じ作りであるが、内面に黒色処理が施されているため、煮沸用途の甕とは用途が異なると考えられる。しかし、45と異なり頸部の括れが顕著であるため、鉢ではなく壷と呼称することとした。45の鉢よりも貯蔵用途に向いた器種であると考えられる。

68は土師器耳皿である。口縁部は残存していないが、通常の坏よりも小さな底径、体部にわずかながら歪みがみられることから耳皿とした。

69は礫石器である。扁平な形態を呈する礫の側面2箇所において打撃によると考えられる剥離がみられる。どのような対象物に打撃を与えたかは不明であるが、敲打器であると考えられる。

小結　出土した遺物より、この竪穴住居は9世紀後半～10世紀初頭の竪穴住居であると考えられる。また、この住居北東に近接するRA062出土遺物の破片と接合関係も認められた。したがって、両竪穴住居は距離的に近いだけでなく、あらゆる点での密接な繋がりが想定される。

RA062

遺構（第29・30・31図・写真図版12・13）

[位置]　第23次調査区北側12P13aグリッド付近に位置する。他の遺構と切り合い関係は認められないが、この住居の南西にはRA061が位置している。検出面はⅠ層直下の平坦な面、ここではⅢ層上面で検出した。主軸方向はほぼ東西方向である。

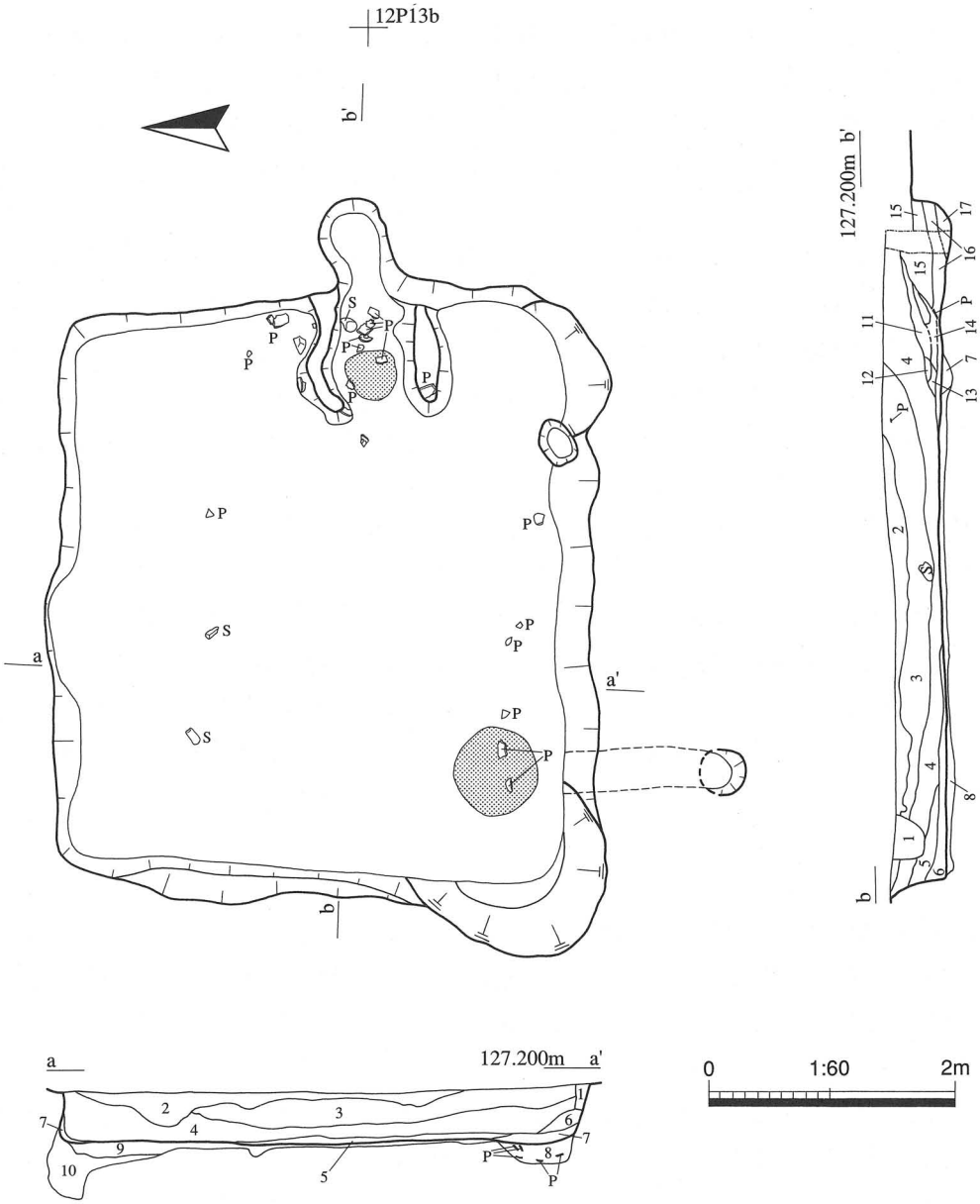
[平面形・規模]　北壁4.31m、東壁3.80m、南壁3.22m、西壁2.95mをそれぞれ測る。平面形態は、やや東西方向に長い長方形である。また、深さは45cmを測る。

[堆積土]　は概ね3層のシルトからなる。いずれも炭化物・土器片などを含む。堆積状況はRA061と似ている。

[壁・床面]　南西隅、南東隅が攪乱により失われている以外はすべて良好に残存する。南側壁は緩やかな角度で立ち上がるが、その他の壁は比較的急角度で立ち上がる。また、北側壁は一部で、下部が抉れたような形状を呈する。床面は固く締まった平滑な面である。床面直上では土器などの遺物を多く検出した。貼床はほぼ床全面に施されており、除去すると凹凸著しい掘削面が存在する。特に床面北半は掘り込みが顕著である。

[カマド]　東と南に２基存在する。東カマドは、東側壁中央やや南寄りに設置されており、両袖部ともに基底部が残存している。カマド両袖部は低く、緩やかな高まりを検出したが、天上部を含む大半は、崩落しているものと考えられる。燃焼部は、両袖部に挟まれるように存在し、概ね円形の平面形態である。

煙道部は極端に短く、煙出し部に向けわずかに傾斜している。本来トンネル状に掘り抜かれていたのかどうか定かではない。煙道部の長さは65cmを測り、埋土は炭化物を多く含んでいるシルトである。



RA062
1．10YR1.7/1　シルト〈近現代攪乱〉
2．10YR2/1　黒色　シルト（中～細粒砂混じる）
3．7.5YR2/1　黒色　シルト質砂
4．10YR2/1　黒色　粘質シルト（中～細粒砂ラミナ状に混じる）
5．10YR2/2　黒褐色　シルト（中粒砂多く混じる）
6．10YR2/1　黒色　粘質シルト（中粒砂B.L、火山灰B.L微量に混じる）
7．7.5YR4/3　褐色　シルト（赤化）
8．10YR3/2　黒褐色　シルト（地山B.L多量に混じる）
9．10YR3/3　黒褐色　シルト（地山B.L多量に混じる）
10．10YR5/4　にぶい黄褐色　シルト～粗粒砂
11．10YR2/1　黒色　シルト（中粒砂混じる）
12．10YR3/3　黒褐色　シルト
13．RA062東カマド３と同じ
14．RA062東カマド１と同じ
15．RA062東カマド２と同じ
16．RA062東カマド４と同じ
17．RA062東カマド５と同じ

第29図　RA062〈第23次〉

南カマドの袖部は残存していない。また、床面をきれいにする作業中にほぼ正円形の燃焼部を検出した。煙道部は南側壁の南西隅近くに位置する。煙道部の長さは1.4ｍを測り、南にある煙出し部に向け、やや傾斜したトンネル状を呈する。煙道部の埋土は炭化物を含むシルトである。煙出し部は平面円形で、筒状に掘り込まれている。

[柱穴]　1基の小形ピットを確認した。ピットは南西部壁際に位置し、柱穴であると考えられる。しかし、その他の柱穴は確認されなかった。

[土坑]　確認されなかった。

遺物（第32図・写真図版36・37）

埋土や床面などから多くの土師器、須恵器など土器類と鉄製品が出土した。このうち、図化可能な遺物は土器27点、鉄製品1点である。

1～12・15・16・22は土師器坏である。1・2・5・12・15・16・18のように内面にミガキ・黒色処理が施されているものと、ミガキ・黒色処理が施されていないものに分けることができる。

1は床面直上より出土した。底部は回転糸切り後無調整であるが、体部下端の側縁部に回転ヘラケズリが施されている。12は体部外面に刻書が認められる。筆致から逆位に書かれた、上部の「士」が「土」となっている「吉」と考えられる。また、「口」部は3画目と4画目が一連の流れで続けられており、ちょうど「Z」のように見える。焼成後に鋭利な金属の先端部などで書かれたと考えられる。なお、同様の刻書「吉」はRA061でも多く認められる。15は破片であるが、高台が付けられた浅い坏であると考えられる。口縁部は極端に外反している。体部外面には正位で「吉」と刻書されている。やはり「吉」の字形は12と同様である。

13・14・19・20・21～27は土師器甕である。13・19・21のようにロクロが用いられないものと、それ以外のようにロクロが用いられるものとに分けることができる。また、19・20・24のような小形のものと、その例外のような大形のものとに分けることができる。13は底部を中心とする破片である。底部には葉脈明瞭な木葉痕がみられる。14も底部を中心とする破片である。底部には、粗い砂が多く付着している。また、体部はタタキの痕跡が明瞭に残り、タタキの上からわずかにヘラケズリが施されている。19は貼床より出土した土師器甕であるが、RA061埋土下層から出土した破片と接合関係にあることが判明した。21は床面直上より出土した土師器甕底部片である。底部には細かな砂が多量に付着している。なお、砂の付着は円の外側にはみられず、中央部円形にみられる。24は小形の土師器甕である。体部のロクロ目が明瞭である。底部は回転糸切り後無調整である。口縁部の括れはほとんどない形態を呈する。

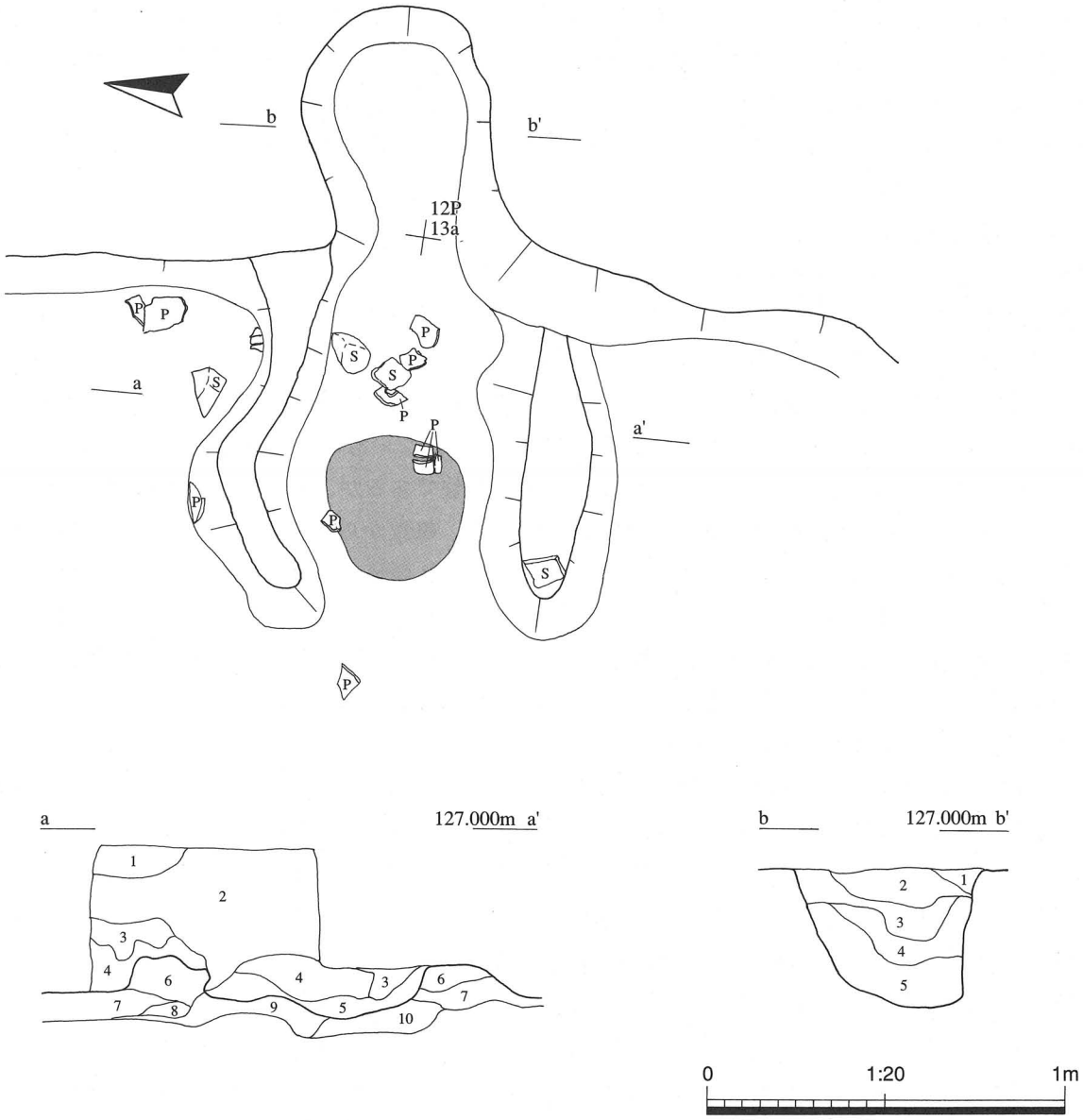
17はカマド燃焼部を被覆している堆積土中より出土した須恵器壷である。底部のみの破片であるため全体の形状は不明であるが、長頸壷である可能性が高い。底部には微かに高台がみられ、体部下半には回転ヘラケズリが施されている。

小結　出土した遺物より、この竪穴住居は9世紀後半～10世紀初頭の竪穴住居であると考えられる。また、この住居北東に近接するRA061出土遺物の破片と接合関係も認められた。したがって、両竪穴住居は距離的に近いだけでなく、あらゆる点での密接な繋がりが想定される。

なお、両住居間で接合関係が認められた資料のそれぞれの出土層位を比較すると、RA062は床面あるいは床面より下位で出土するものばかりで、RA061は埋土の下層で出土するものばかりである。

RA059（第33・34図・写真図版14・15）

[位置]　第23次調査区北側12P 7 fグリッド付近に位置する。RA064と切り合い関係が認められる。



RA062東カマド
1．10YR1.7/1　黒色　粘質シルト（やや粘質、中粒砂混じる）
2．10YR2/1　黒色　シルト（中～粗粒砂混じる）
3．10YR2/1　黒色　シルト質砂
4．10YR1.7/1　黒色　粘質シルト（火山灰B.L混じる）
5．7.5YR3/2　黒褐色　シルト（炭化物・焼土B.L混じる）
6．10YR3/4　砂質シルト（地山B.L混じる）
7．10YR3/2　黒褐色　シルト（中粒砂混じる）
8．10YR4/4　褐色　シルト（焼土B.L混じる）
9．7.5YR3/4　暗褐色　シルト（中～粗粒砂混じる）
10．10YR3/4　砂質シルト

第30図　RA062東カマド〈第23次〉

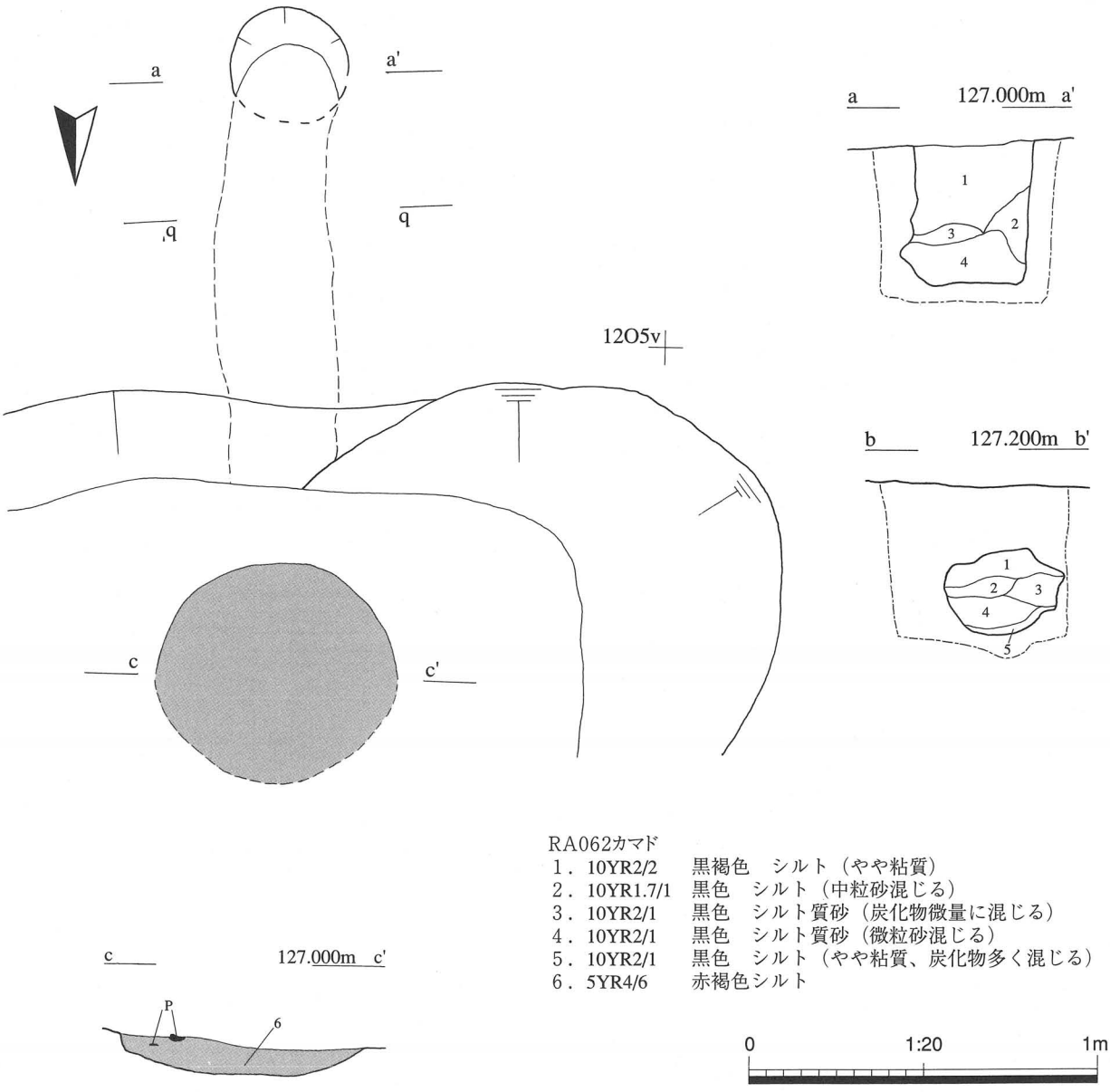
また、この竪穴住居の南西にはRA061が位置している。検出面はⅠ層直下の平坦な面、ここではⅢ層上面で検出した。主軸方向はほぼ東西方向である。

[平面形・規模]　西壁5.2m、深さ8 cmを測り、概ね方形であると考えられる。RA064に切られているため残存状態が良くない。

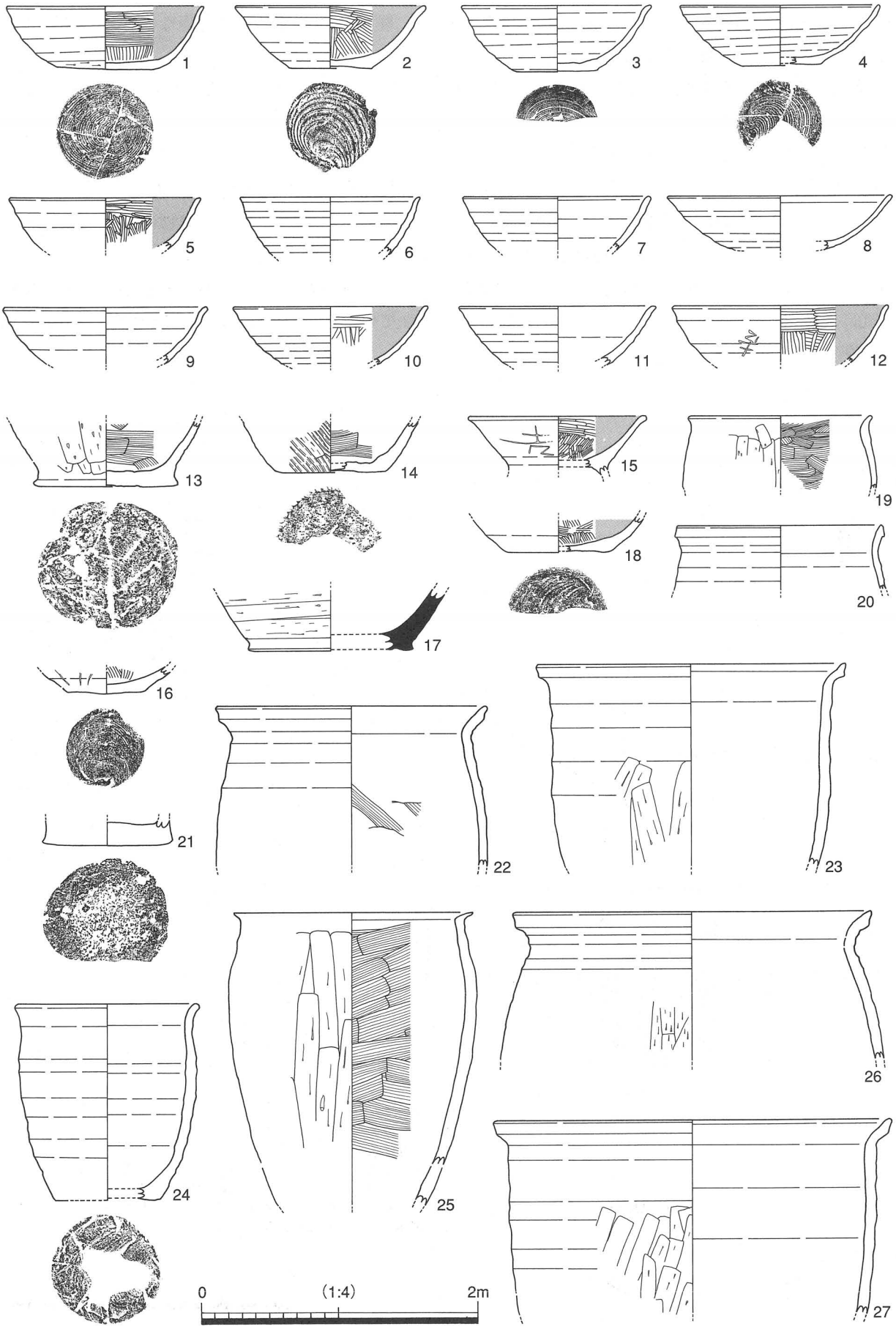
[堆積土]　概ね2層のシルトからなる。

[壁・床面]　南西隅、南側と北側の一部が比較的良好に残存する以外は攪乱、RA064などによって失われている。床面は固く締まった平滑な面であるが、床面直上では土器などの遺物はほとんど出土しなかった。また、床面も多数の攪乱によって本来の形を留めていない。

[カマド]　検出した範囲では確認できず、その痕跡も認められなかった。西側壁中央付近が大きな攪乱坑によって失われているため、仮にカマドが設置されていたのであるならば、この失われている場所に存在したのかもしれない。



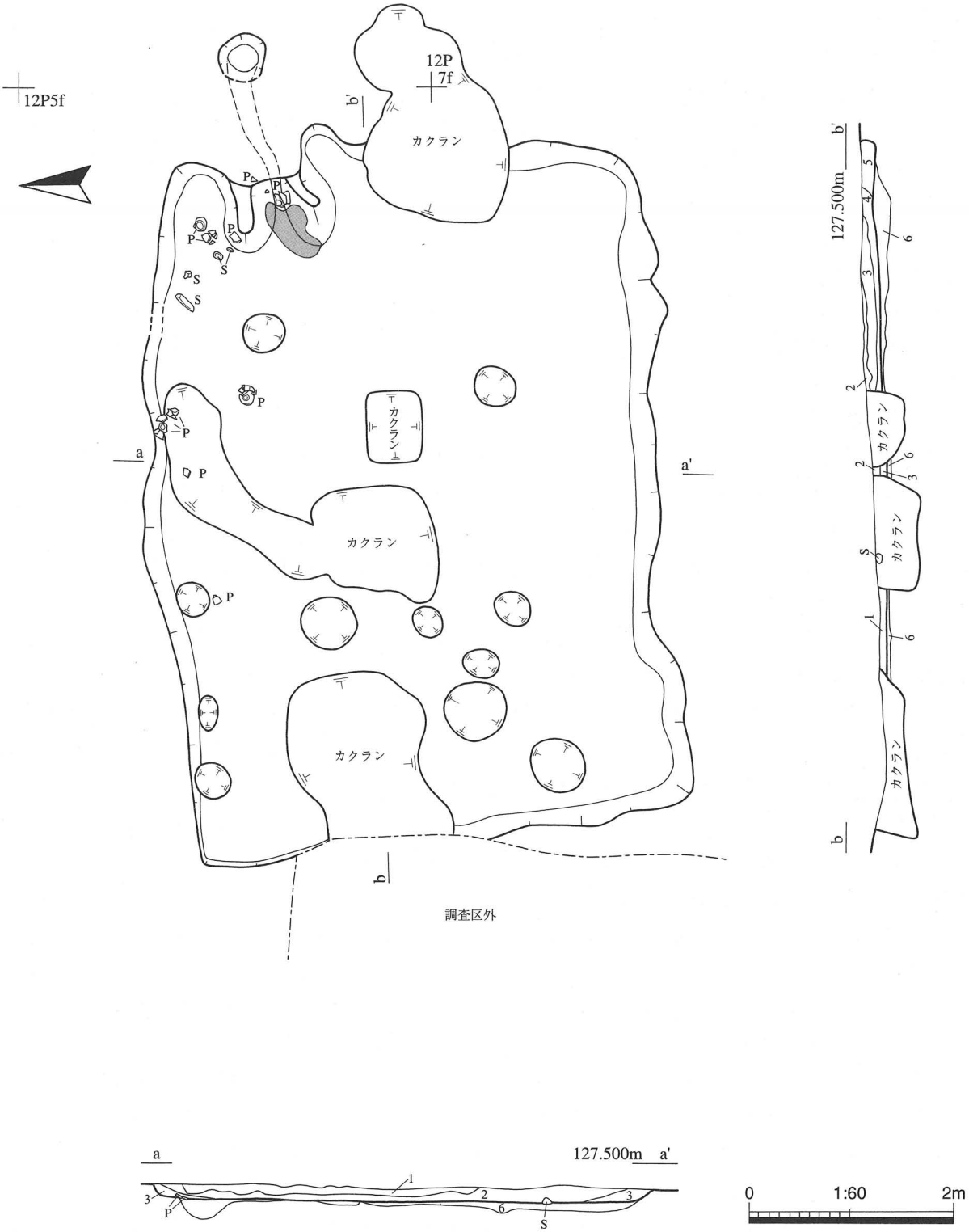
第31図　RA062南カマド〈第23次〉



第32図　RA062出土遺物〈第23次〉

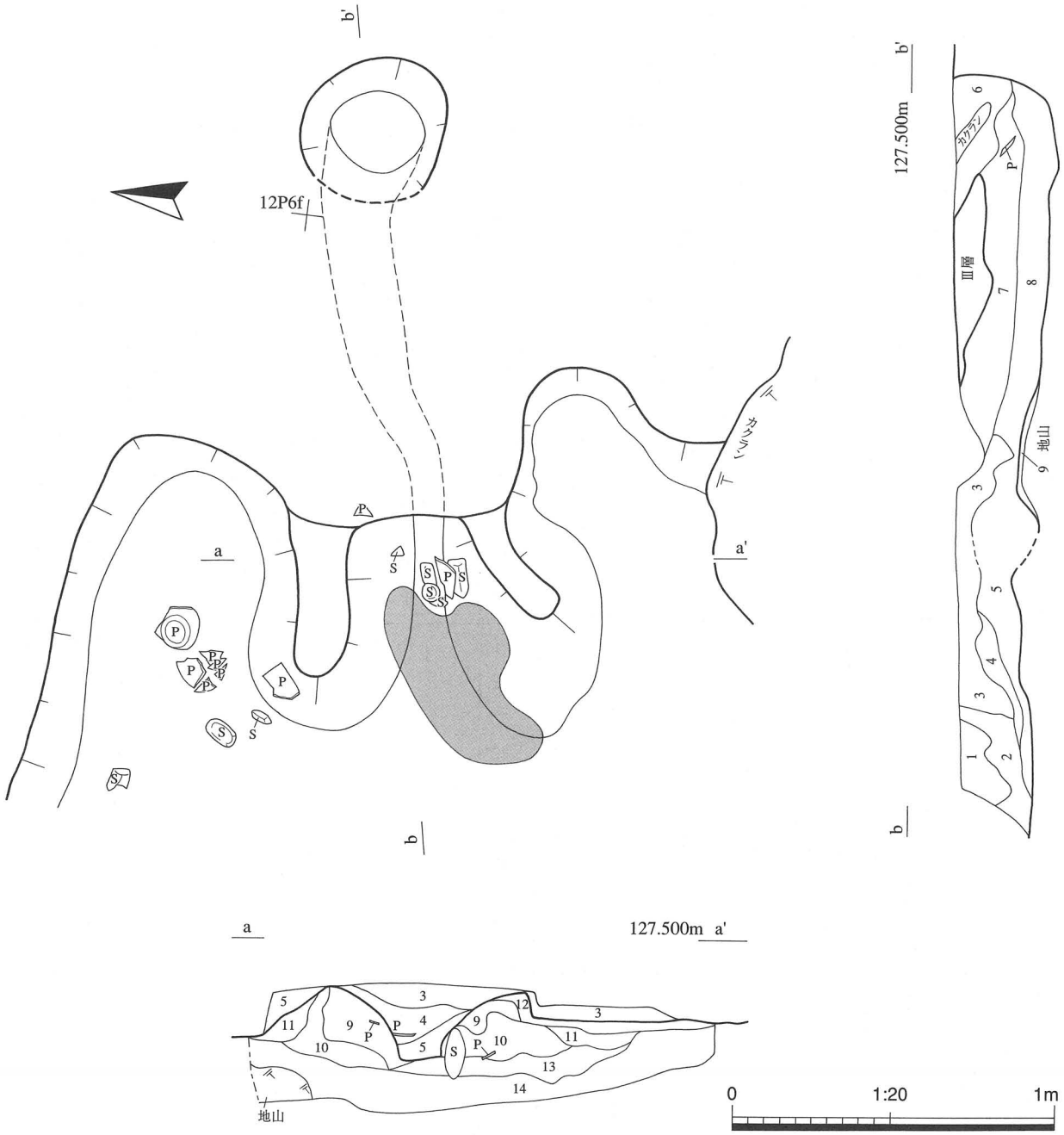
[柱穴]　第23次調査区では、確認されていない。
[土坑]　第23次調査区では、確認されていない。
遺物（第35図・写真図版38・39）
堆積土などから土師器など土器類がわずかに出土した。このうち、図化可能な遺物は土師器2点のみである。この竪穴住居を切るRA064より出土した遺物の中には、本来この竪穴住居に帰属していたものも含まれるかもしれない。そのため、出土遺物の記載はRA064と一括して述べることとする。

RA064
遺構（第33・34図・写真図版14・15）
[位置]　第23次調査区南側12Pに位置する。RA059と切り合い関係が認められる。また、この竪穴住居の南西にはRA061が位置している。検出面はⅠ層直下の平坦な面、ここではⅢ層上面で検出した。主軸方向はほぼ東西方向である。
[平面形・規模]　東壁4.26mを測るが、その他の壁はRA059との重複で定かではないが、3.8～4.5m程度であったと推測される。平面形態は方形であると考えられる。また、深さは13cmを測る。
[堆積土]　概ね2層のシルトからなる。いずれも炭化物・土器片などを含む。
[壁・床面]　西側壁、北西隅および南西隅が確認できなかったが、その他は残存する。残存する壁はいずれも緩やかな角度で立ち上がる。床面は固く締まった平滑な面である。床面では土器などの遺物を多く検出した。特にカマドが寄っている住居北半で顕著である。貼床は明瞭なものではなかった。必要最低限の貼床であった可能性が考えられる。
[カマド]　東側壁北寄りに設置されており、両袖部ともに基底部が残存している。カマド両袖部は低く、緩やかな高まりを検出したが、天上部を含む大半は、崩落しているものと考えられる。燃焼部は、両袖部に挟まれるように存在し、不整な楕円形の平面形態である。
煙道部は煙出し部に向け傾斜してトンネル状に刳り抜かれており、長さ1.45mを測る。煙道部堆積土は炭化物を多く含んでいるシルトである。煙出し部は平面円形を呈し、筒状に掘り込まれている。
遺物（第35図・写真図版38・39）
堆積土や床面などから多量の土師器、須恵器など土器類と礫石器が出土した。このうち、図化可能な遺物は土器23点である。
1～6・8～14・19・22・23は土師器坏である。1・3・5・9・13は内面ミガキ・黒色処理されており、14・22は高台が付き、内外面ともにミガキ・黒色処理が施されている。これら以外はすべて、内外面ともにミガキも黒色処理も施されていない。1は住居北端の床面直上より出土した。内面ミガキ・黒色処理が施されている。また、底部回転糸切り後無調整で、体部下端に回転ヘラケズリが施されている。3は床面直上より出土した。内面ミガキ・黒色処理が施されている。器高が6 cmを超え、やや深めの坏である。5はカマドおよび煙出しより出土した。内面ミガキ・黒色処理が施されている。体部下半に刻書が施されている。焼成後の線刻で、正位で「春」と読むことができるが、他の文字であるかもしれない。12は床面直上より出土した。内外面ともにミガキ・黒色処理は施されておらず、高台が付けられている。また、体部には「キ」字形の刻書がみられる。焼成後に鋭利な金属の先端部などで刻まれたようである。7は住居北端の床面直上より出土した須恵器坏である。底部は回転糸切り後無調整である。16は住居南東埋土より出土した須恵器皿であると考えられる。通常の坏よりも浅い器形であると推定され、小皿状の器種であると考えられる。
17・21は須恵器壷である。17はカマド脇より出土した。体部外面は回転ヘラケズリが施され、底



RA064(059)
1．10YR2/1　黒色　シルト（やや粘質、火山灰B.L混じる）
2．10YR2/1　黒色　シルト（火山灰B.L混じる）
3．10YR2/2　黒褐色　シルト（地山B.L混じる）
4．10YR2/1　黒色　シルト（やや粘質、粗粒砂混じる）
5．10YR4/3　褐色　シルト～粗粒砂
6．10YR2/1　黒色　シルト（やや粘質、粗粒砂混じる）

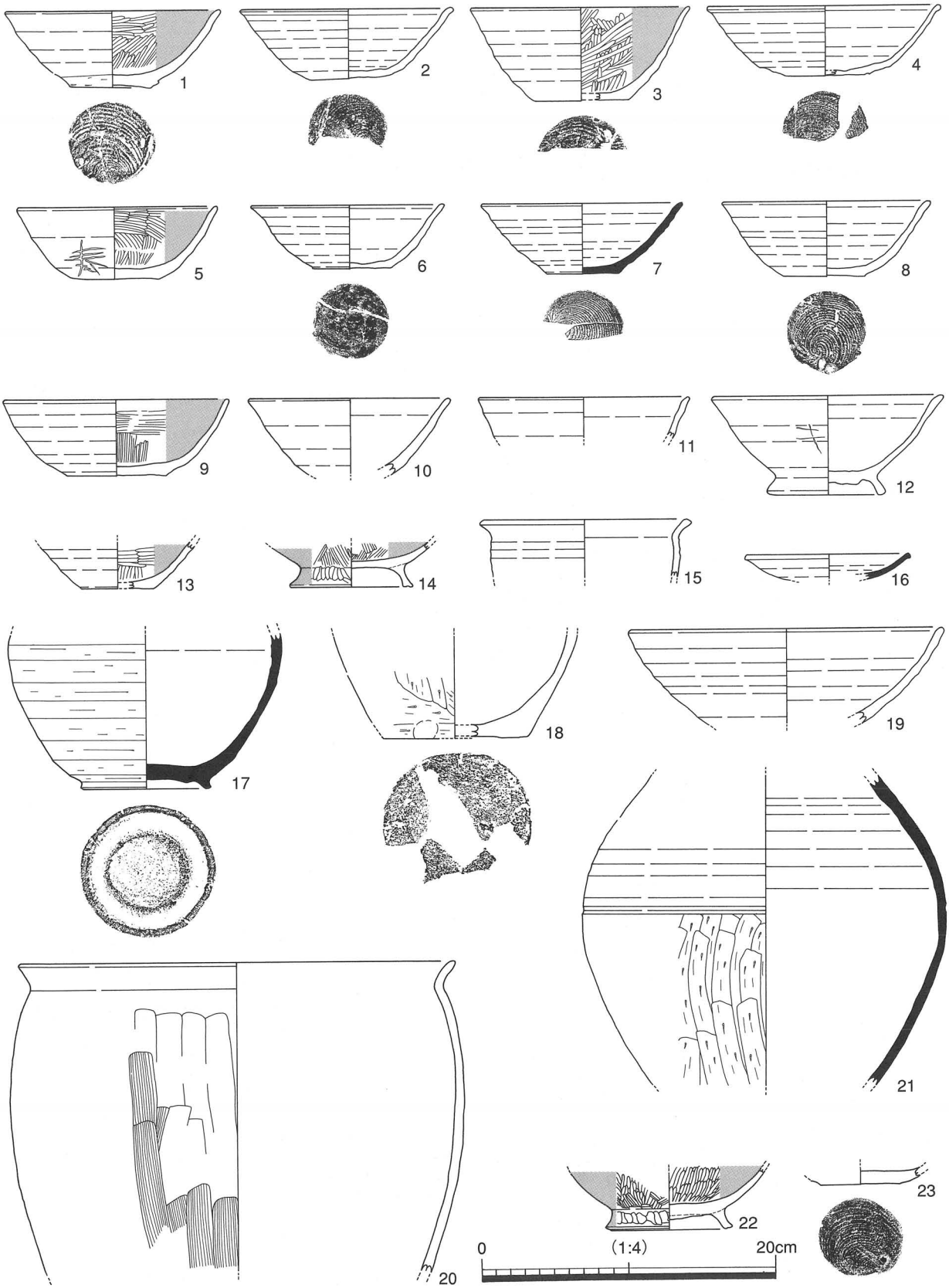
第33図　RA059・064〈第23次〉



RA064カマド

1．10YR2/1　黒色　シルト（火山灰B.L混じる）
2．10YR3/2　黒褐色　シルト（焼土B.L少量混じる）
3．10YR3/1　黒褐色　シルト（火山灰B.L少量混じる）
4．7.5YR3/1　黒褐色　シルト（やや粘質、焼土B.L少量混じる）
5．10YR3/3　暗褐色　シルト（焼土B.L多量に混じる）
6．10YR1.7/1　黒色　シルト（やや粘質、炭化物混じる）
7．10YR3/2　黒褐色　シルト（微粒砂混じる）
8．10YR3/2　黒褐色　シルト（火山灰B.L少量混じる）
9．10YR4/1　褐灰色　シルト（地山）
10．10YR3/3　暗褐色　シルト（焼土B.L多量に混じる）
11．10YR3/3　暗褐色　シルト（地山B.L多量に混じる）
12．10YR3/1　黒褐色　シルト（粗～中粒砂混じる）
13．7.5YR3/2　黒褐色　シルト
14．10YR4/4　褐色　シルト（焼土B.L混じる）

第34図　RA064カマド〈第23次〉



第35図　RA064出土遺物〈第23次〉

部には高台が貼り付けられている。残存器形から長頸壷であると推測される。

21はカマド埋土より出土した。体部外面には縦方向のヘラケズリが施されている。体部中位には横方向に1条の沈線が認められる。残存形態から器種を特定することは困難であるが、17よりも大振りであるため、長頸壷ではないと考えられる。

15・18・20は土師器甕である。15は住居南東埋土より出土した。ロクロが用いられた小形の甕である。18は貼床より出土した。体部は縦横にヘラケズリが施されている。底部には砂粒が多く付着している。

小結　出土した遺物の特徴より、この竪穴住居は9世紀後半～10世紀初頭の竪穴住居であると考えられる。

RA059とRA064との先後関係は調査時に決することができなかった。平面を検出した時点で1棟であると考えたためである。状況証拠のみであるが、床面の遺物出土状況等から考えて、RA064がRA059を切っている可能性がある。

RA070

遺構（第36・37図・写真図版16・17）

[位置]　第23次調査区南側13O 9 xグリッド付近に位置する。住居床面では、RD105を検出し、この土坑と重複すると考えられる。また、この住居の南東にはRA068が位置している。検出面はⅠ層直下の平坦な面であり、Ⅲ層上面で検出した。主軸方向は南東方向である。

[平面形・規模]　北東側壁で4.57mを測り、その他残存する壁の長さは、北西側壁2.66m、南東側壁4.58m、南西側壁0.37mである。平面形態は比較的整った方形であると推測される。また、深さは34cmを測る。

[堆積土]　概ね2層のシルトからなる。

[壁・床面]　北東側壁が良好に残存する以外は、攪乱によって一部あるいは大半が破壊されている。いずれの残存する壁とも比較的緩やかに立ち上がる。床面は固く締まった平滑な面である。床面ではカマド燃焼部周辺において土器などの遺物を多く検出した。貼床はほぼ床全面に施されており、除去するとわずかに凹凸のある掘削面が存在する。

[カマド]　南東側壁の南寄りに設置されており、両袖部ともに基底部の張り出しがわずかに残存している。カマド両袖部は低く、緩やかな高まりを検出したが、天上部を含む大半は、崩落しているものと考えられる。燃焼部は、両袖部に挟まれるように存在し、不整な長楕円形の平面形態である。

煙道部は長さ1.52mを測る。天井部は攪乱等で残存していないが、本来はトンネル状に刳り抜かれていたと考えられる。煙道部埋土は炭化物、地山ブロックを多く含んでいるシルトである。煙出し部は平面楕円形を呈し、筒状に掘り込まれている。

[柱穴]　2基の小形ピットを確認した。ピットは北西壁に平行するように並んでいる。ピット1は西側、ピット2は北側でそれぞれ検出した。2基ともに規模が同じで、北側壁と平行して直線上に並ぶため、柱穴と考えられる。しかし、貼床を除去した状況にあっても同様のピットはみられなかった。

[土坑]　柱穴以外に土坑は確認されなかった。詳細は後述するが、貼床を除去する作業中検出したRD108は、住居埋土および貼床および床面を切っておらず、このRA070に先行する土坑であったと考えられる。

遺物（第38・39図・写真図版40～42）

堆積土や床面などから多くの土師器が出土した。このうち、図化可能な遺物は土師器29点である。

1～15は土師器坏である。1・2・4・5・10・13・15は内面ミガキ・黒色処理が施されているが、それ以外は施されていない。1はカマド付近より出土した。底径に比して器高が低い形態を呈する。底部は回転糸切り後無調整である。4はカマド埋土より出土した。底部糸切り後、体部下半まで回転ヘラケズリが施されている。器厚が比較的薄く、胎土も精良である。5はカマド埋土より出土した。体部外面には墨書が施されている。墨書は3箇所に認められ、それぞれ、太く大きく書かれている。これら墨書はすべて底部にまで及んでいる。文字であるようにみえるが、3つとも判読できない。9は煙出し埋土より出土した。内外面ともにミガキ・黒色処理されておらず、高台が付けられている。高台は「ハ」の字形を呈し、断面は長方形である。15は南東堆積土より出土した。内面ミガキ・黒色処理が施され、他の坏より底径が大きい特徴的な坏である。底部のみの残存であるため全体の大きさは不明であるが、法量の大きな坏である可能性が高い。16～29は土師器甕である。18・19・25はロクロの回転力が用いられていないが、その他はすべて、ロクロが使用されている。16はカマド堆積土より出土した。底部は回転糸切り後無調整である。底部のみの破片であるため坏である可能性も考えられるが、他の坏よりも器厚が厚く、胎土が粗いため小形の甕の底部片であると考えられる。18は煙出し埋土より出土した。底径・口径・器高の寸法差がほとんどなく、極端に短い口縁部が特徴的である。体部の膨らみもほとんどなく寸胴な形態を呈する。色調は極端に赤みが強く、胎土に大粒の砂粒を多く含む。外面は縦方向にヘラケズリが施されており、胎土の砂粒がより際立っている。内面は横方向のハケが施されている。また、底部外面には多量の砂が付着しており、中央には木葉痕も微かに認められる。19は破片がカマドや煙出しなどから出土し、底部は裏返しの状態で燃焼部上より出土した。カマドに伴う支脚であった可能性が考えられる。18同様に底径・口径・器高の寸法差がほとんどなく、短い口縁部が特徴的である。また、体部の膨らみもほとんどなく寸胴な形態を呈する。色調は極端に赤みが強く、胎土に大粒の砂粒を多く含む。内外面ともに粗いハケが施されており、胎土の砂粒が際立っている。また、底部外面には木葉痕が明瞭に認められる。26はカマドや煙出し埋土などから出土した。体部下半から底部にかけて残存している。外面は平行タタキの調整痕跡が明瞭に認められる。一方、内面には細かなハケが縦方向に施されている。また、底部外面には砂粒が付着している。29はカマドおよび住居堆積土下層より出土した。均整のとれた長胴形を呈し、口縁端部は上方に摘み上げられている。また、底部外面には砂粒が付着している。

小結　出土した遺物より、この竪穴住居は9世紀後半～10世紀前半の竪穴住居であると考えられる。ただし、床面で検出した土坑（RD108）は、この竪穴住居に先行する遺構であり、堆積土中に十和田a降下火山灰が認められる。しかし、竪穴住居堆積土では同様の火山灰が認められない。このような事実より、この竪穴住居は十和田a降下火山灰の降下以降、つまり10世紀前半以降の竪穴住居であると考えられる。

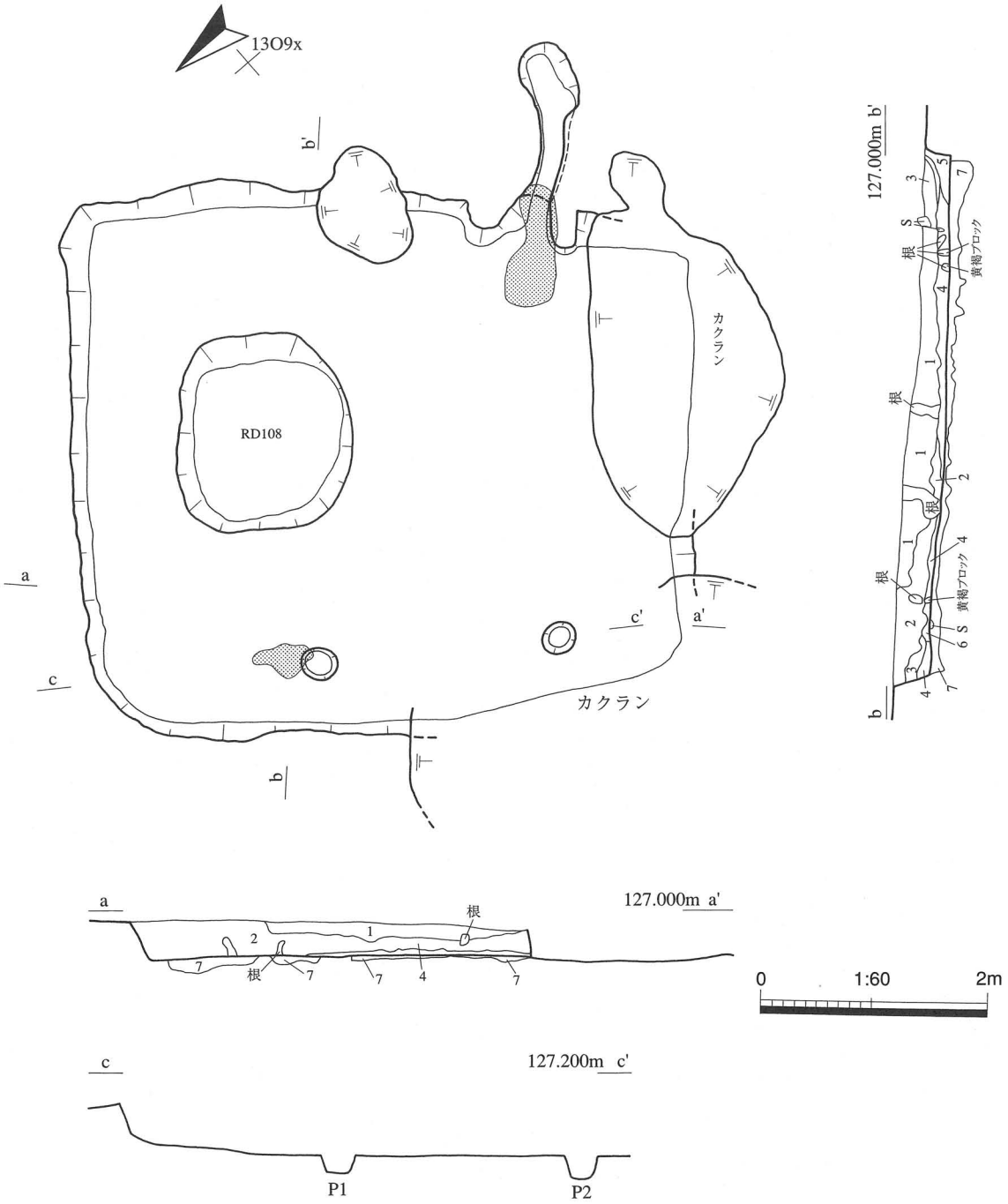
RA063

遺構（第40・41図・写真図版20・21）

[位置]　第24次調査区南側12P19kグリッド付近に位置する。他の遺構との切り合いは認められないが、この竪穴住居の東にはRA067が位置している。また、住居南東隅は調査区外である。検出面はⅠ層直下の平坦な面、ここではⅡ層上面～Ⅲ層上面で検出した。主軸方向はほぼ東西方向である。

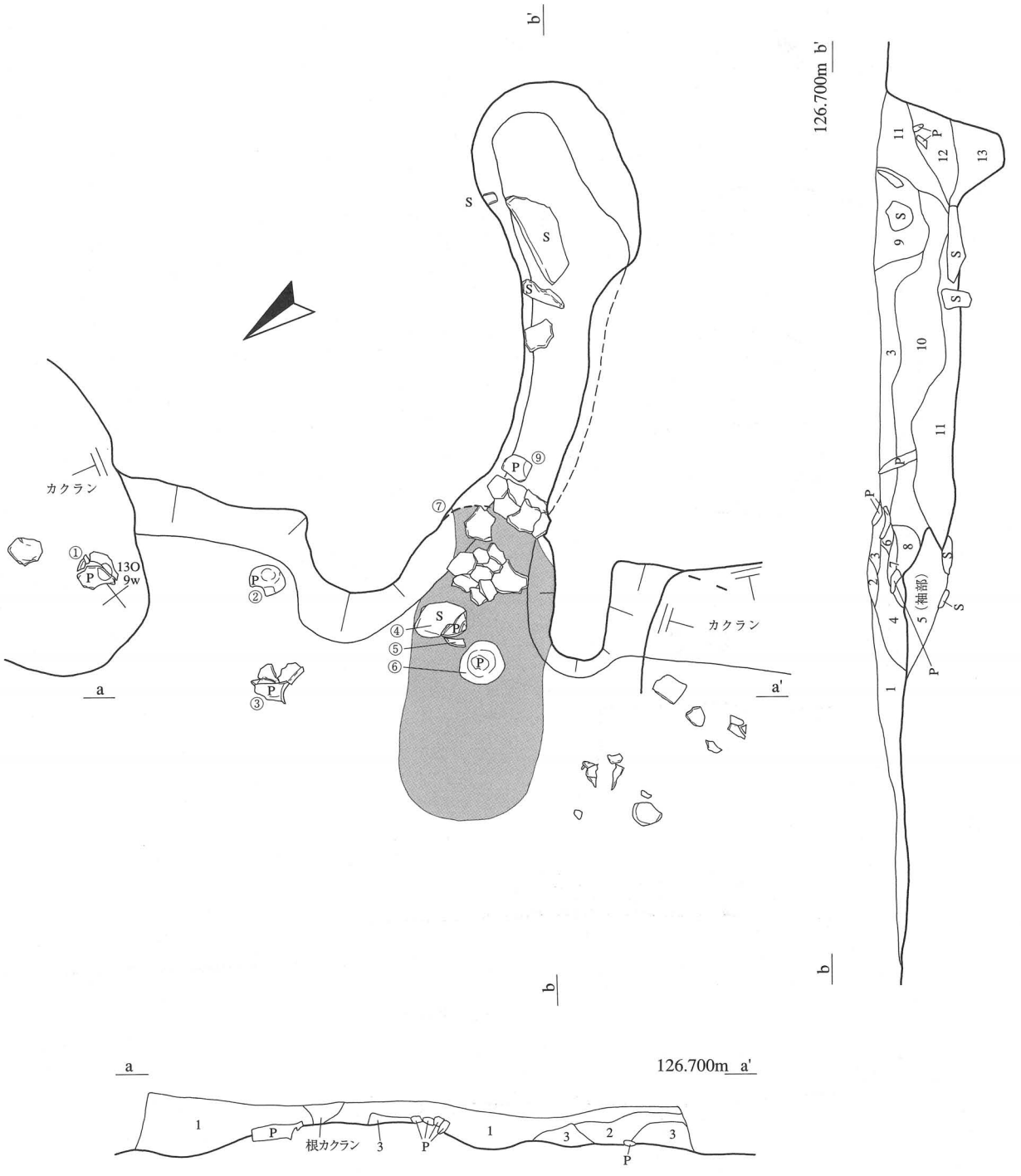
[規模・平面形]　調査区外へ続く南東隅と西半が攪乱のため失われているため定かではないが、一辺約4m程度の方形であると推測される。また、深さは13cmを測る。

[堆積土]　概ね3層のシルトからなる。いずれも炭化物・土器片などを含み、堆積土中位ではわずか



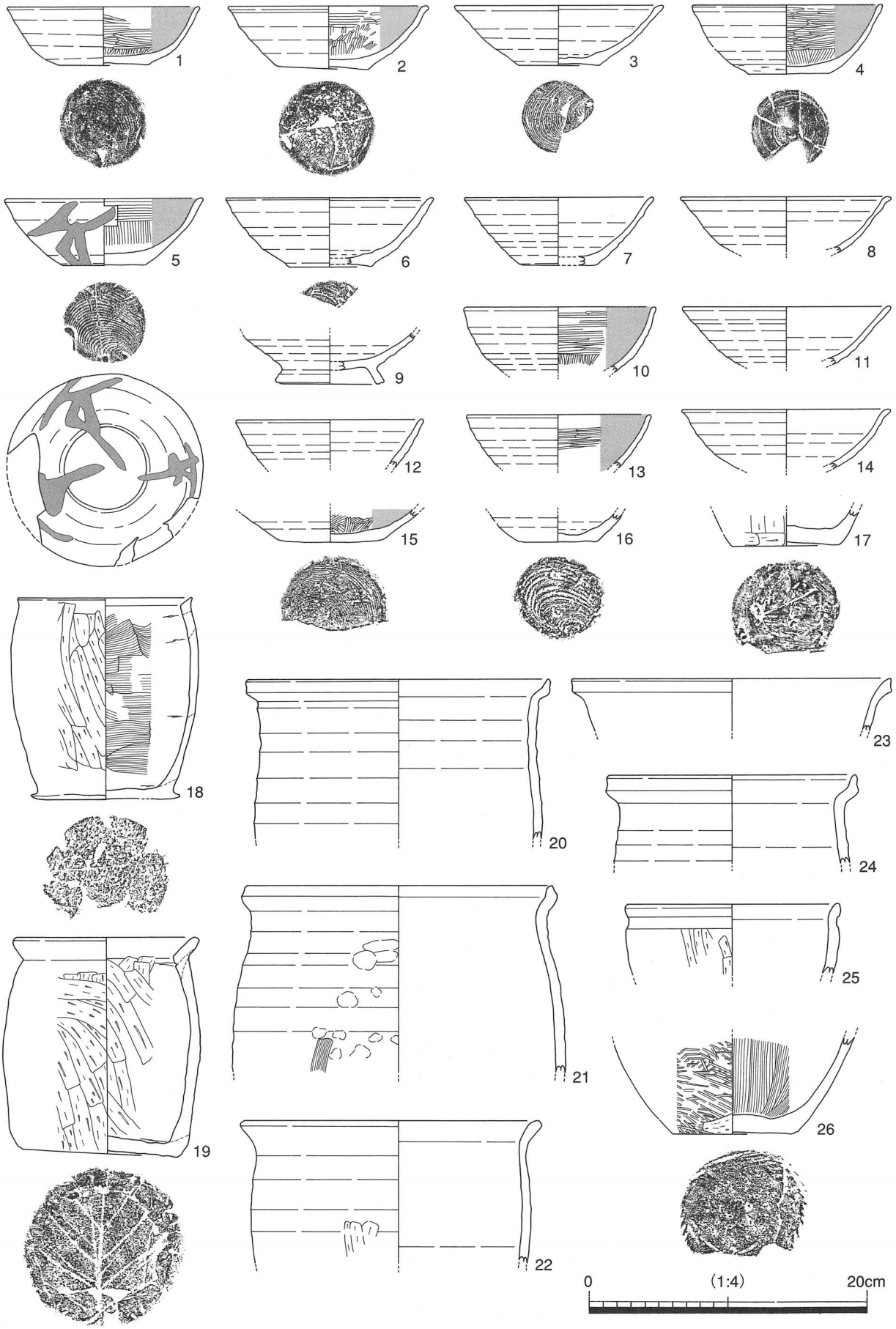
RA070
1．10YR2/1　黒色　シルト（細粒砂微量混じる）
2．10YR2/2　黒褐色　シルト（細粒砂微量混じる）
3．10YR3/1　黒褐色　シルト（やや粘質、焼土B.L少量混じる）
4．10YR2/3　黒褐色　シルト（やや粘質、細粒砂少量混じる）
5．10YR2/1　黒色　シルト（細粒砂少量混じる）
6．2.5YR3/2　暗赤褐色　シルト（焼土）
7．10YR3/3　暗褐色　シルト（やや粘質、細粒砂少量混じる）

第36図　RA070〈第23次〉

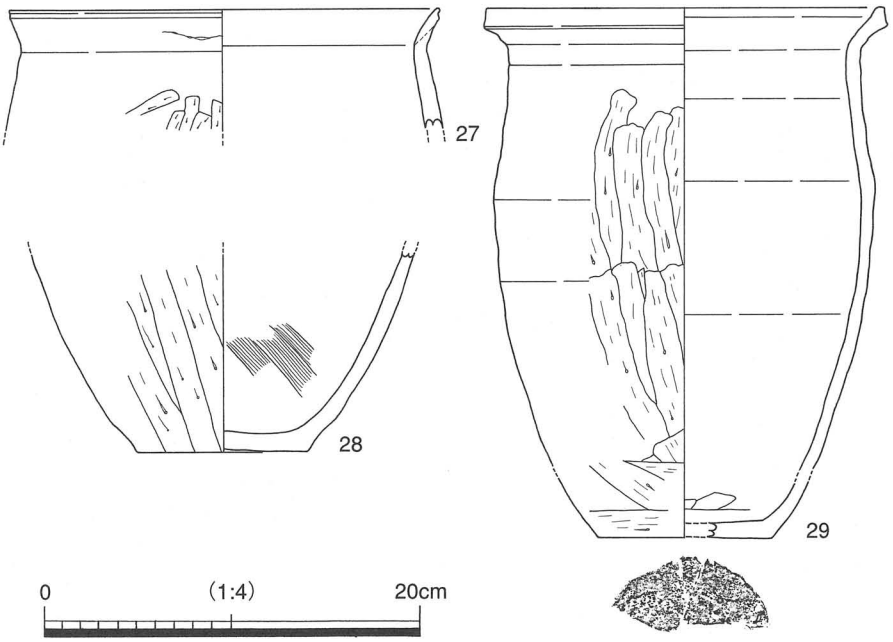


RA070カマド
1．10YR2/1　黒色　シルト（細粒砂微量に混じる）
2．10YR3/1　黒褐色　シルト（地山B.L微量に混じる）
3．10YR2/2　黒褐色　シルト（焼土B.L微量に混じる）
4．10YR4/4　褐色　シルト（地山・焼土B.L微量に混じる）
5．10YR5/3　にぶい黄褐色　粘土（締まり強）
6．10YR2/3　黒褐色　シルト
7．5YR4/6　赤褐色　シルト
8．10YR2/3　黒褐色　シルト（地山B.L少量、焼土B.L微量混じる）
9．10YR3/2　黒褐色　シルト（地山B.L微量に混じる）
10．10YR4/3　にぶい褐色　シルト
11．10YR5/3　にぶい黄褐色　シルト
12．10YR2/3　黒褐色　シルト（地山B.L微量に混じる）
13．10YR5/3　にぶい黄褐色　粘土（地山B.L少量混じる、締まり強）

第37図　RA070カマド〈第23次〉



第38図　RA070出土遺物（１）〈第23次〉



第39図　RA070出土遺物（２）〈第23次〉

に火山灰が認められる。

[壁・床面]　西側壁、南西隅が確認できなかったが、その他は残存する。残存する壁はいずれも緩やかな角度で立ち上がる。床面は固く締まった平滑な面である。床面では土器などの遺物を多く検出した。特にカマドが寄っている住居北半で顕著である。

貼床は明瞭なものではなかった。必要最低限の貼床であった可能性が考えられる。

[カマド]　東側壁北寄りに設置されており、両袖部ともに攪乱のため残存していない。しかし、燃焼部は円形の範囲で焼土を確認しており、本来のカマドの位置を示唆している。

煙道部は煙出し部に向けトンネル状に刳り抜かれており、残存する長さは1.4mを測る。煙道部堆積土は炭化物を多く含んでいるシルトである。煙出し部は平面長楕円形を呈する。

遺物（第42図・写真図版42・43）

堆積土や床面などから土器類が出土した。このうち、図化可能な遺物は土器15点である。１～７は土師器坏である。４・５は内面ミガキ・黒色処理が施されているが、それ以外はすべて内外面ともに施されていない。また、６・７は高台が付けられている。７は堆積土下層より出土した高台付坏である。高台は「ハ」の字形を呈する。体部外面には墨書が施されている。比較的太く波文のように書かれているが、文字かどうか不明である。８は北東堆積土より出土した土師器羽釜である。口縁部下に鍔が巡り、小形のものであると考えられる。

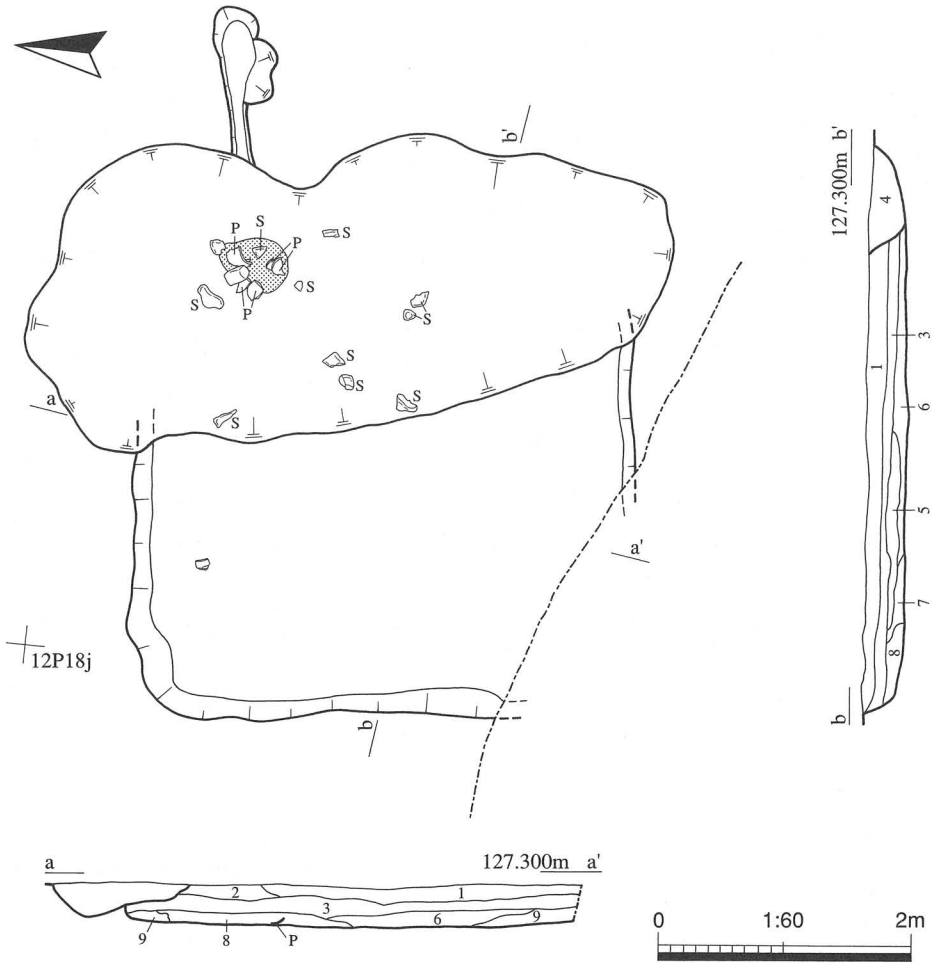
10～15は土師器甕である。９・10・12がロクロの回転力が用いられていないが、その他はロクロが用いられている甕である。10は堆積土下層より出土した。底部に木葉痕が認められる。14は床面直上より出土した。ロクロが用いられていない甕であるが、口縁端部が非常にシャープな形状である。内外面ともに細かなハケが施されている。

小結　出土した遺物および堆積土に十和田a降下火山灰と考えられる火山灰が確認されることより、この竪穴住居は９世紀後半～10世紀初頭の竪穴住居であると考えられる。

RA065（第43図・写真図版22）

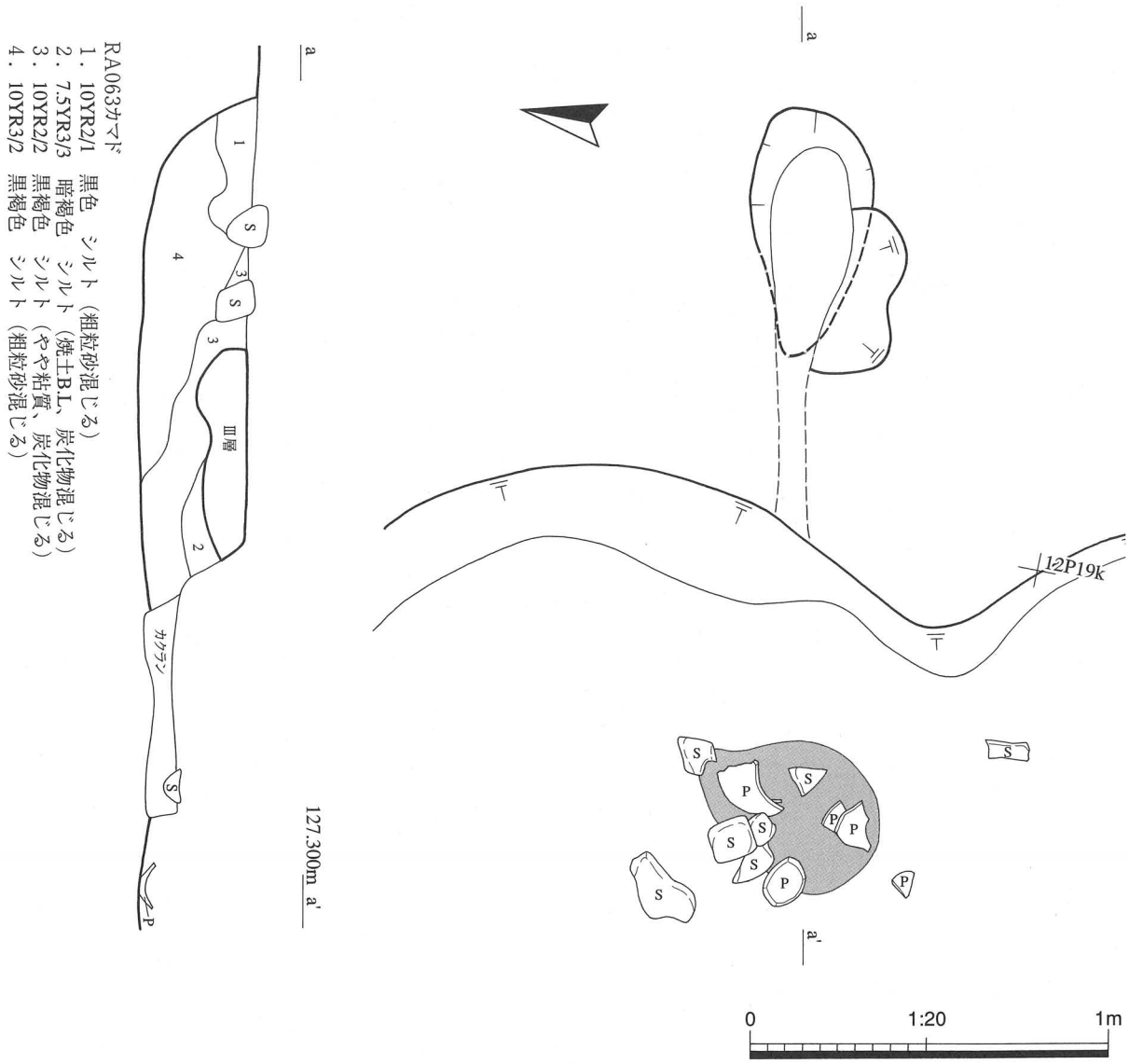
[位置]　第24次調査区北端12P５rに位置する。RD027・028と重複関係が認められ、これら２条の溝は竪穴住居堆積土を切っている。検出面はⅠ層直下の平坦な面であり、Ⅲ層上面で検出した。主軸方向はカマドがみられないため不明であるが、軸方向は正方位より約45°振っている。

[平面形・規模]　調査区外へ続く北隅とその他は大規模な攪乱のため失われている。したがって、規模は定かではないが、一辺約3.5m程度の方形であると推測される。また、深さは25cmを測る。



RA063
1．10YR3/2　黒褐色　シルト（地山B.L多量に混じる）
2．10YR3/2　黒褐色　シルト（火山灰B.L多量に混じる）
3．10YR3/3　黒褐色　シルト（やや粘質火山灰B.L、地山B.L多量に混じる）
4．10YR2/1　黒色　シルト（中粒砂混じる）
5．10YR2/1　黒色　シルト（中粒砂混じる）
6．10YR2/1　黒色　シルト（火山灰B.L混じる）
7．10YR3/2　黒褐色　シルト（粗粒砂混じる）
8．10YR4/6　褐色　細粒砂（シルト混じる）
9．10YR2/1　黒色　シルト（火山灰B.L微量に混じる）

第40図　RA063〈第24次〉



第41図　RA063カマド〈第24次〉

[堆積土]　概ね３層のシルトからなる。堆積土には地山ブロックを含むが、層状に堆積しており自然堆積であると考えられる。

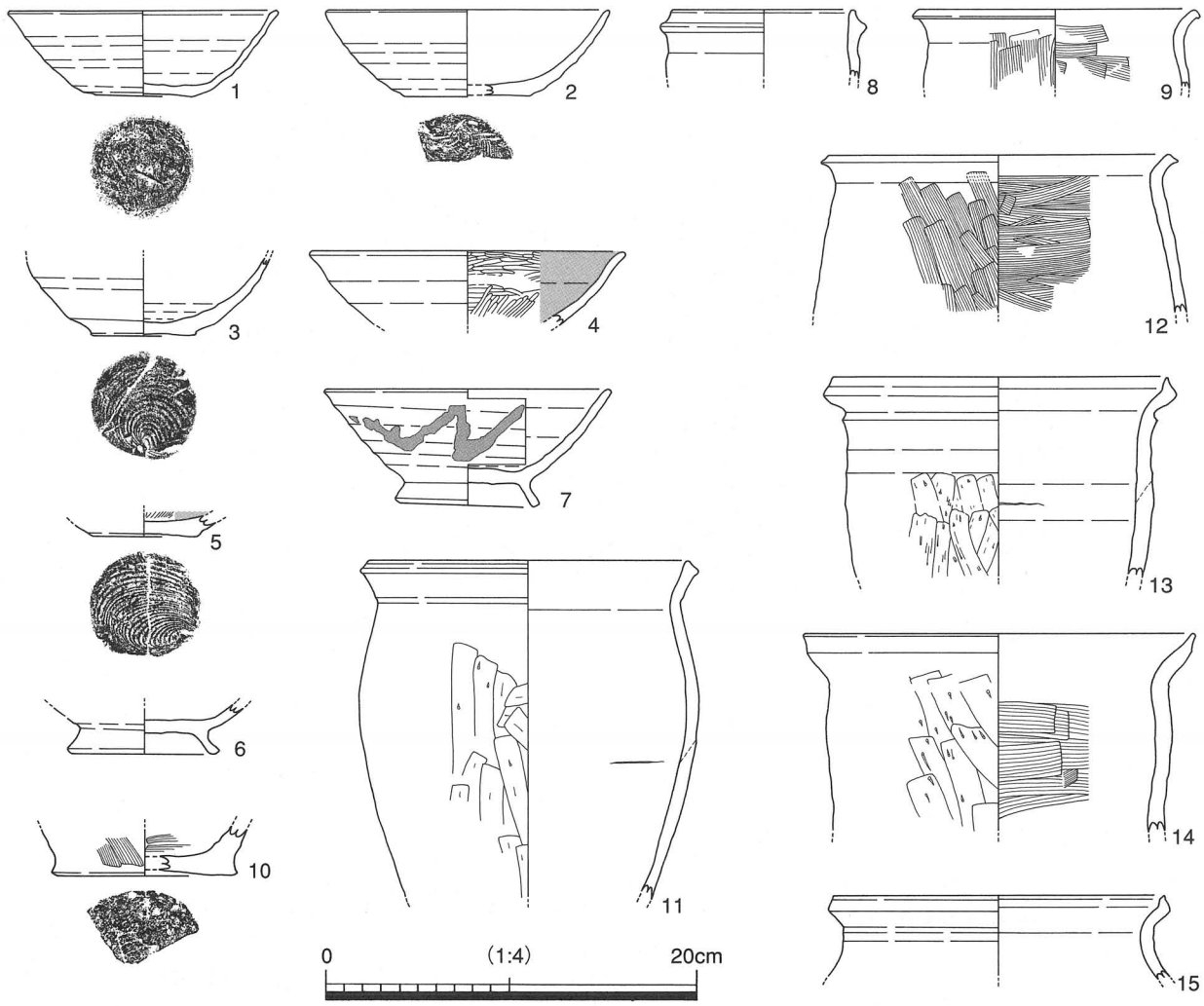
[壁・床面]　攪乱によって一部あるいは大半が破壊されている。残存する壁は比較的緩やかに立ち上がる。床面は固く締まった平滑な面であるが、貼床はみられない。

[カマド]　住居北側が調査区外へ続くため、北側に存在する可能性も考えられる。しかし、この部分は大規模な攪乱坑が位置しているため、すでに失われている可能性が高い。

[柱穴]　確認されていない。

[土坑]　確認されていない。

小結　この竪穴住居に伴う出土遺物は皆無である。したがって、遺物によって時期を特定することはできない。根拠は少なく断定はできないが、住居の立地や規模などから平安時代の竪穴住居であると考えられる。



第42図　RA063出土遺物〈第24次〉

RA069

遺構（第44・45図・写真図版23）

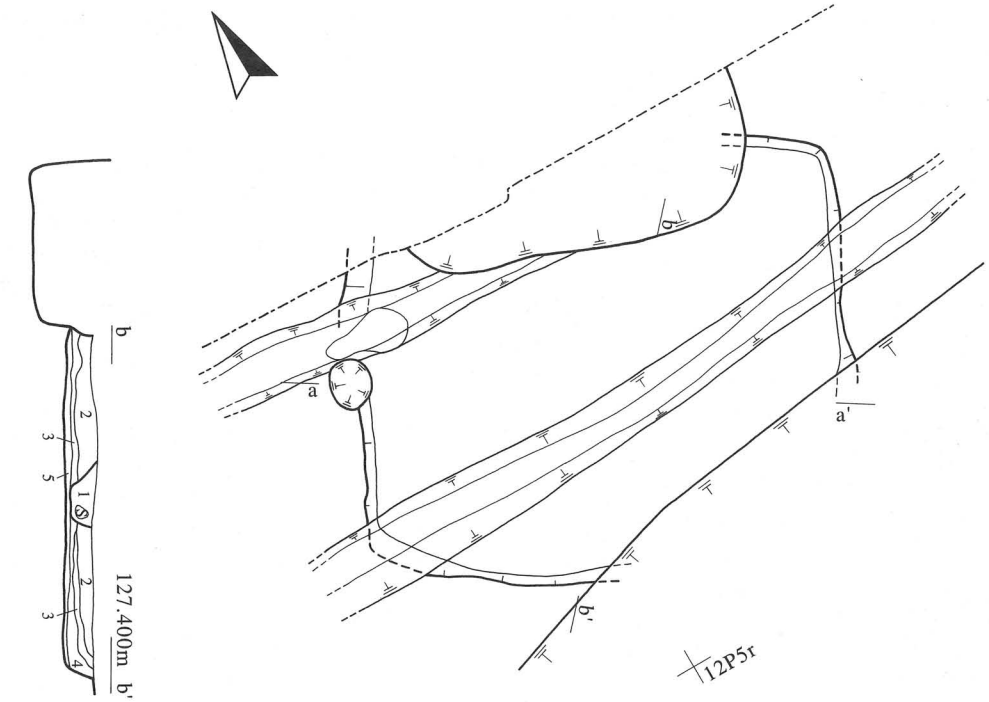
[位置] 第24次調査区東側飛び地12Q 4 qグリッド付近に位置する。他の遺構との切り合いは認められない。また、住居北側および南側は調査区外である。検出面はⅠ層直下の平坦な面、Ⅱ層上面で検出した。主軸方向はほぼ東西方向である。

[平面形・規模] 大半が調査区外へ続くため定かではないが、一辺約4m程度の方形であると推測される。また、深さは35cmを測る。

[堆積土] は概ね2層のシルトからなる。いずれも地山ブロックを含むが、自然堆積であると考えられる。

[壁・床面] 北側壁、南側壁が調査区外に位置するため確認できなかったが、西側壁は一部良好に残存する。残存する壁はいずれも緩やかな角度で立ち上がる。固く締まった平滑な面である。床面では土器などの遺物を多く検出した。特にカマド周辺では遺物の出土が顕著である。貼床はほぼ全面で施されているが、厚みと凹凸はわずかである。必要最低限の貼床であった可能性が考えられる。

[カマド] 東側壁に設置されており、両袖部ともにわずかな高まりを確認した。燃焼部は楕円形の範



RA065
1．10YR1.7/1　黒色　シルト（やや粘質）〈RG027埋土〉
2．7.5YR3/1　黒褐色　シルト（やや粘質）
3．10YR1.7/1　黒褐色　粘質シルト（地山B.L混じる）
4．10YR2/2　黒褐色　シルト（やや粘質、地山B.L多く混じる）
5．10YR4/3　にぶい褐色　シルト（地山B.L混じる）

第43図　RA065〈第24次〉

囲で焼土を確認した。

煙道部は煙出し部に向けトンネル状に刳り抜かれており、残存する長さは1.25mを測る。煙道部埋土は炭化物を多く含んでいるシルトである。煙出し部は平面円形を呈する。

[柱穴]　確認されなかった。

[土坑]　確認されなかった。

遺物（第46図・写真図版44）

堆積土やカマド近く床面などから土器類が出土した。このうち、図化可能な遺物は土器12点である。また、鉄製品も1点出土した。

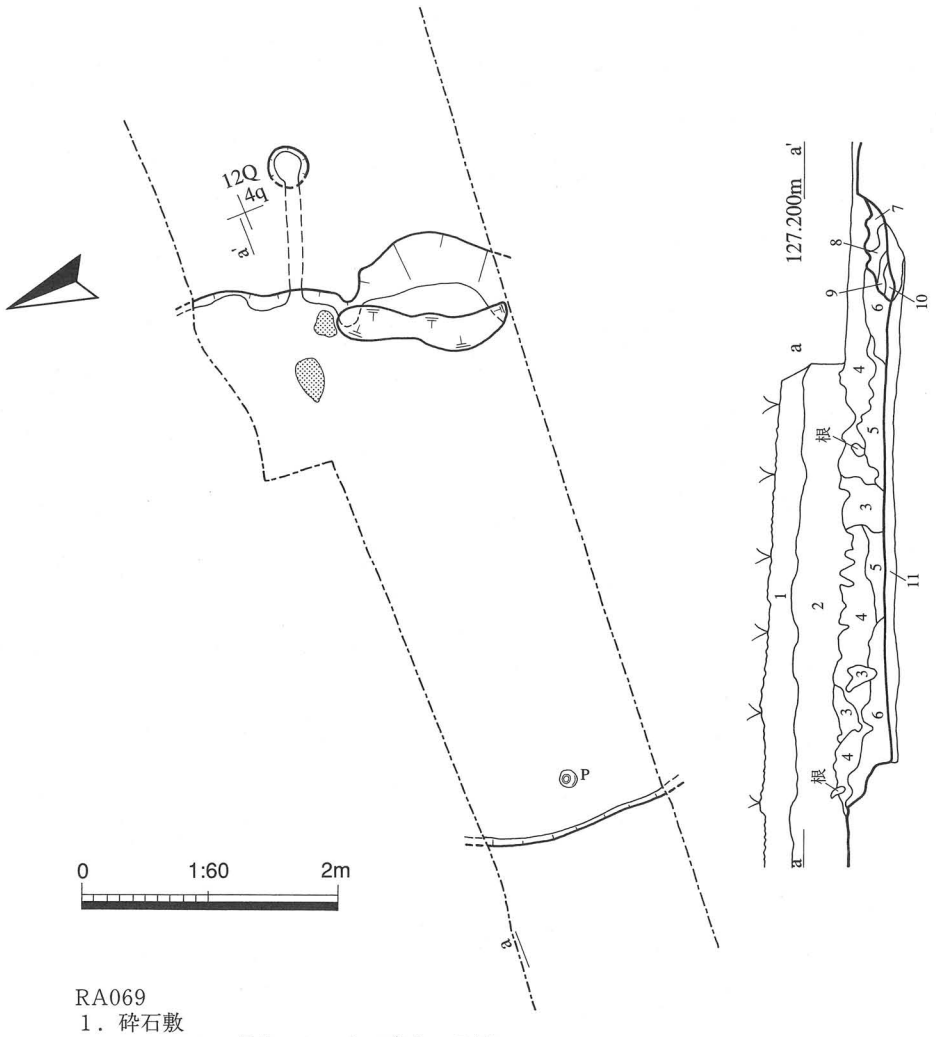
1～3は土師器坏である。1はカマド近くの床面より出土した。内面ミガキ・黒色処理が施され、底部は回転糸切り後無調整である。2はカマド近くの床面より出土した。柱状風の高台が付き、高台下面には静止糸切り痕が明瞭にみられる。器厚もやや厚く、大きさに比して重量感がある。周辺の遺跡を含め、類例の少ない特徴的な形態である。4～12は土師器甕である。4・6・7・9・10はロ

クロの回転力が用いられていないが、その他はロクロが用いられている。4はカマド近くの床面より出土した底部のみの破片である。底部外面には大粒の砂粒が多く付着している。6はカマド近くの床面より出土した体部～底部の破片である。底部外面には木葉痕が明瞭にみられる。また、調整として体部内外面ともにハケが施されている。8はカマド近くの床面より出土した体部～底部の破片である。ロクロが用いられている甕であるが、器壁の歪みが著しく歪な形状である。焼成による変形ではなく、焼成前の変形であると考えられる。

小結　出土した遺物より、この竪穴住居は10世紀前半の竪穴住居であると考えられるが、2の柱状風の高台付坏がこの時代に帰属するのかどうかは不明である。

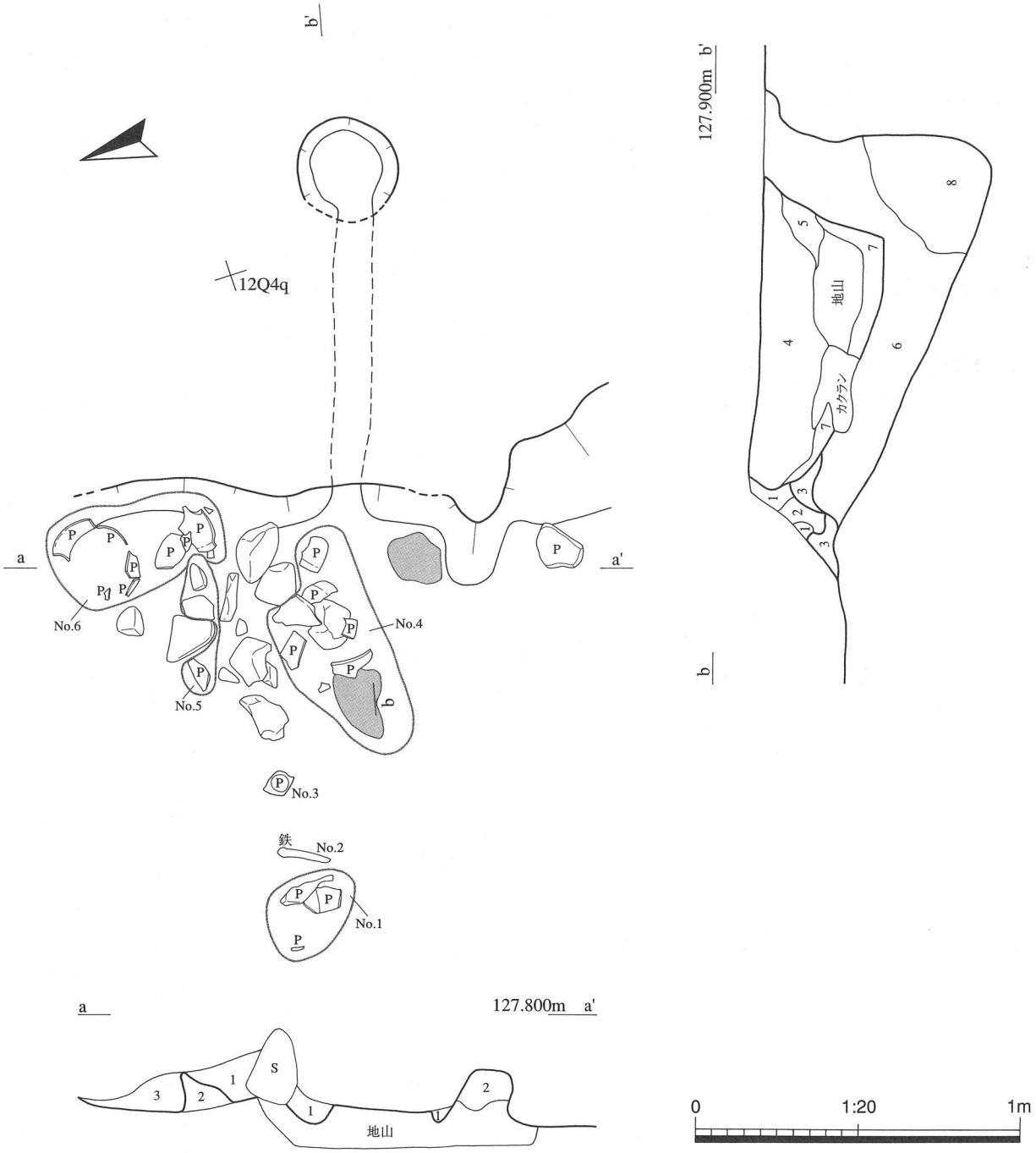
竪穴住居　出土鉄製品（第47図・写真図版47）

ここでは、竪穴住居より出土した鉄製品をまとめて報告する。これら出土した鉄製品は全部で5点



RA069
1．砕石敷
2．10YR2/1　黒色　シルト〈表土・Ⅰ層〉
3．10YR2/2　黒褐色　シルト（地山B.L、細粒砂少量混じる）
4．10YR2/1　黒色　シルト（やや粘質、細粒砂少量混じる）
5．10YR2/3　黒褐色　シルト（やや粘質、地山B.L少量、細粒砂少量混じる）
6．10YR2/2　黒褐色　シルト（地山B.L、細粒砂混じる）
7．10YR2/3　黒褐色　シルト（地山B.L少量、細粒砂少量混じる）
8．10YR4/3　にぶい褐色　シルト（やや粘質、地山B.L混じる）
9．10YR2/3　黒褐色　シルト（地山B.L、細粒砂少量混じる）
10．10YR4/6　褐色　粘土（シルト少量混じる）
11．10YR4/3　にぶい褐色　シルト（やや粘質、地山B.L多量に混じる）

第44図　RA069〈第24次〉

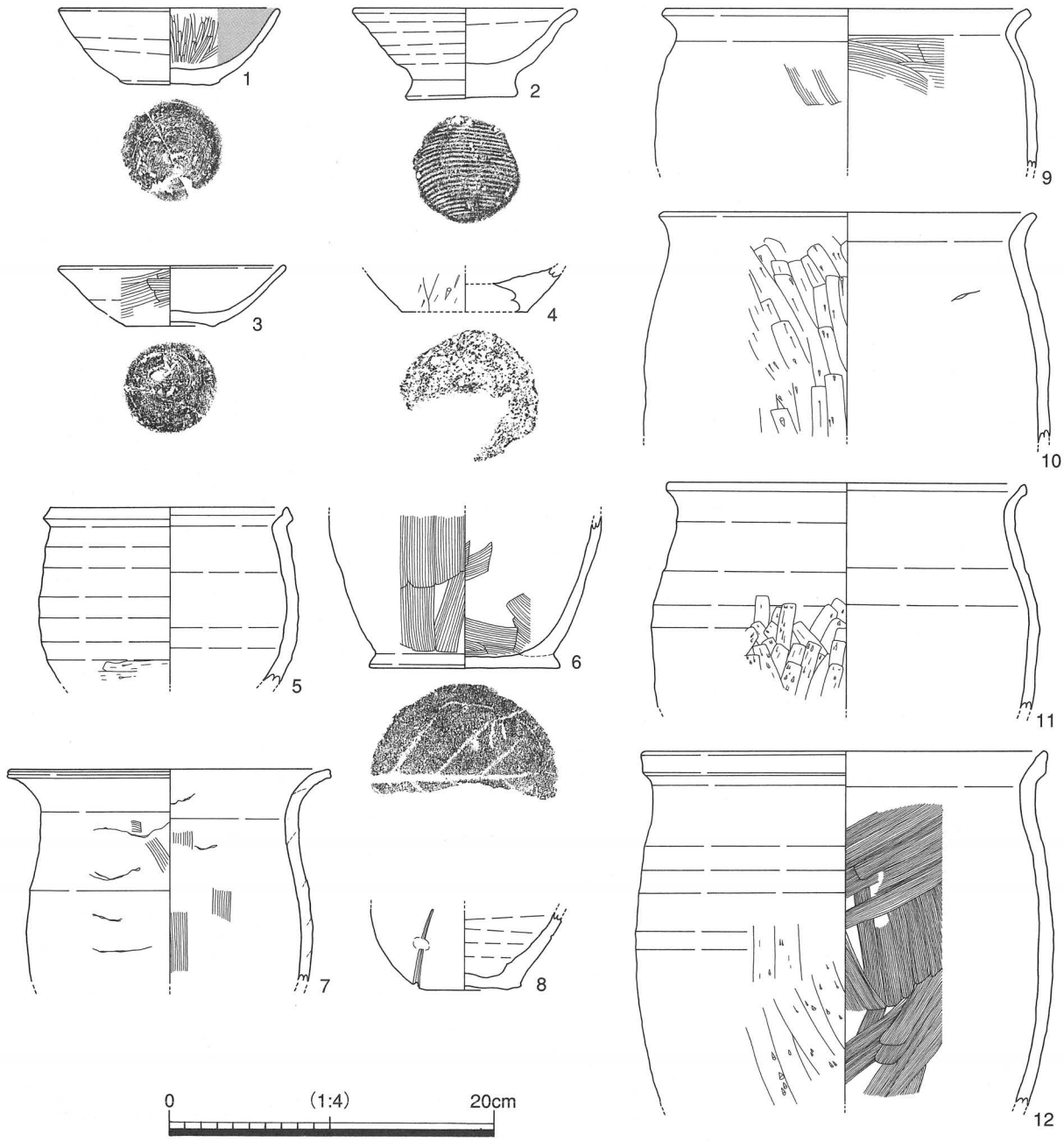


RA069カマド
1．10YR2/2　黒褐色　シルト（地山B.L少量混じる）
2．5YR3/6　暗赤褐色　粘土（赤化）
3．10YR3/3　暗褐色　シルト（焼土・地山B.L少量混じる）
4．10YR2/3　黒褐色　シルト（地山B.L多く混じる）
5．10YR3/1　黒褐色　シルト（地山B.L少量混じる）
6．10YR2/2　黒褐色　シルト（地山B.L微量に混じる）
7．5YR2/4　極暗赤褐色　粘質シルト（赤化）
8．10YR4/2　シルト（地山B.L微量に混じる）

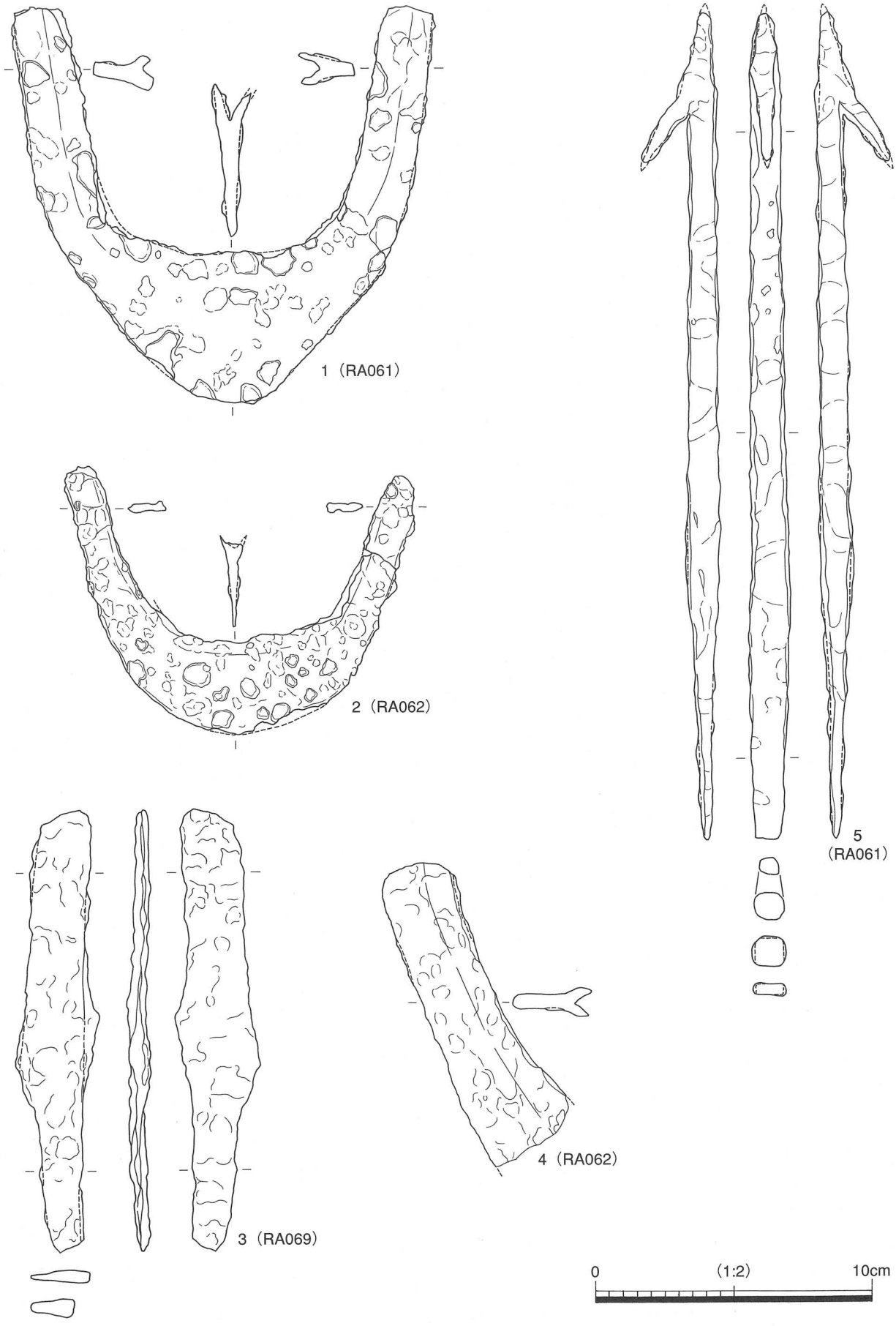
第45図　RA069カマド〈第24次〉

である。

1・2・4はいずれも鋤先である。いずれも「U」字形を呈し、断面「V」の字形の取り付け部がみられる。1はRA061カマド北袖直上より出土した。ほぼ完存している。刃部は幅広で丸みが少なく、逆台形を呈する。2はRA061北端貼床部分より出土した。1と異なり、刃部は緩やかな丸みを有する。また、刃先は鋭利であり、錆がみられるが、比較的良好に残存していると思われる。4はRA062北東埋土下層より出土した。刃部は欠損しており、片側のみが残存しているが、残存部位から推して、1とほぼ同じ大きさの製品であると考えられる。3はRA069の床面より出土した。形態から小刀あるいは刀子であると考えられる。全体が錆で覆われており、詳細な形状は不明である。また、刃部の先端は欠損している可能性が高い。5はRA061埋土下層出土の銛先である。ほぼ完存している。体部は断面正方形であるが、基部は断面扁平な長方形である。先端部は尖り、返しがある。返しの形状は直線的ではなく、やや曲線を描いている。漁労具であると想定されるが、詳細な使用法および用途につい



第46図　RA069出土遺物〈第24次〉



第47図　竪穴住居出土鉄製品

ては定かではない。また、同様の形態を呈する製品の出土例は少なく、今後の資料増加に期待したい。

3　土　　坑

RD103

遺構（第48図・写真図版24）

[位置]　第23次調査区南側12P16aグリッド付近に位置する。RD104と切り合いが認められ、RD104を切っている。この土坑の北にはRA062が位置している。検出面はⅠ層直下の平坦な面、ここではⅢ層上面で検出した。土坑の主軸方向はほぼ東西方向である。

[平面形・規模]　短軸131cm、長軸168cm、深さ52cmを測る。平面形態は整った長方形、断面形は横長の長方形を呈する。

[堆積土]　概ね7層のシルト～砂からなる。いずれも地山のシルトブロックや砂などの不純物が混じる。土坑は地山の砂礫層（Ⅳ層）を掘り抜いており、堆積土との差は砂など不純物の存在で区分される。砂礫層は不条理な堆積ではないものの、ブロックが多く混じる層や他の遺構にみられない砂質の堆積土である。掘削した後に、掘削で生じた土を用いてすぐに埋め戻したような状況である。

[壁・底面]　四方の壁すべてほぼ垂直の角度で立ち上がり、砂礫起源の地山であるため、やや脆弱である。また、底面は平滑である。

遺物（第49図・写真図版45）

堆積土より平安時代の土師器坏が1点出土した。2はRD103埋土最下層より出土した。内面ミガキ・黒色処理が施されている。底部は回転糸切り後無調整である。

出土した遺物より平安時代の遺構であると考えられ、埋土の特徴や遺構の規模・形態などの諸属性を勘案すると墓壙である可能性が考えられる。ただし、土坑内からは人骨等の出土はなかった。また、切り合い関係よりRD104よりも新しい遺構である。

RD104

遺構（第48図・写真図版24）

[位置]　第23次調査区ほぼ中央12Pに位置する。先述したRD103と切り合いが認められ、中央部分をRD103によって大きく切られている。また、この土坑の北にはRA062が位置している。検出面はⅠ層直下の平坦な面、Ⅲ層上面で検出した。土坑の主軸方向はほぼ東西方向である。

[平面形・規模]　平面形態は比較的整った細長い長方形を呈すると推定される。短軸69cm、長軸232cm、深さ22cmを測る。

[堆積土]　単層の砂質シルトであり、地山ブロックが多く混じる。

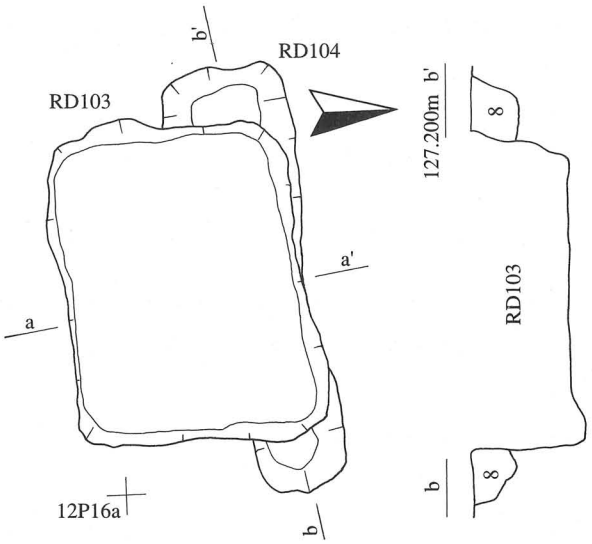
[壁・底面]　残存している部分はすべて緩やかな角度で立ち上がる。底面は凹凸がみられる。

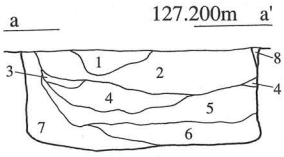
遺物　出土しなかった。

小結　時代を特定することはできない。堆積土の特徴から古代の遺構であると考えられるが、断定はできない。しかし、少なくともRD103よりも古い遺構であると考えられる。この土坑の性格については十分な手掛かりがなく不明である。

RD105

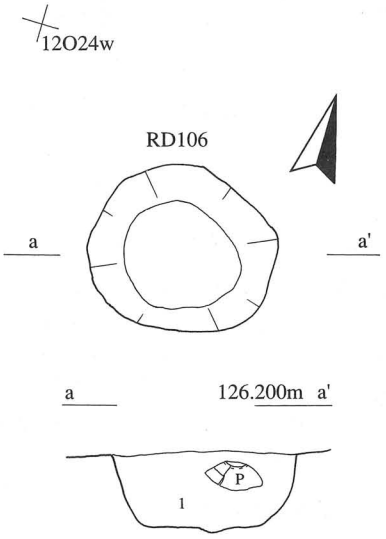
遺構（第48図・写真図版24）





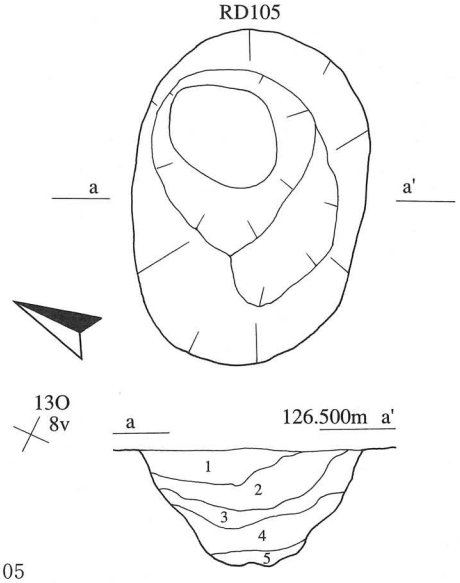
RD103·104

1．7.5YR3/4　暗褐色　中粒砂（細粒砂混じる）
2．7.5YR3/4　暗褐色　中粒砂（粗粒砂・地山B.L多く混じる）
3．10YR3/1　黒褐色　シルト質砂
4．10YR2/3　黒褐色　中粒砂（地山B.L混じる）
5．10YR2/3　黒褐色　シルト（やや粘質）
6．10YR2/2　黒褐色　砂質シルト（粗粒砂混じる）
7．10YR2/2　黒褐色　砂質シルト（粗粒砂混じる）
8．10YR2/2　黒褐色　砂質シルト（地山B.L多く混じる）



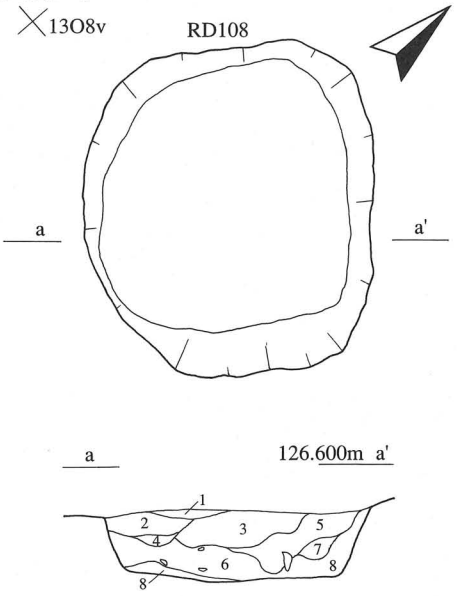
RD106

1．5Y2/1　黒色　シルト
（やや粘質、微粒砂混じる）



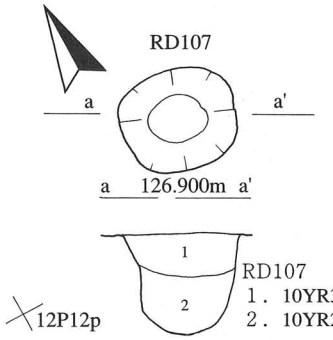
RD105

1．10YR2/1　黒色　シルト（やや粘質、細粒砂少量混じる）
2．10YR2/2　黒褐色　シルト（やや粘質、地山B.L少量混じる）
3．10YR2/1　黒色　シルト（やや粘質、細粒砂混じる）
4．10YR2/1　黒色　シルト（やや粘質、地山B.L微量に混じる）
5．10YR2/2　黒褐色　粘土（地山B.L微量に混じる）



RD108

1．10YR2/1　黒色　シルト（地山細粒砂混じる）
2．10YR2/1　黒色　シルト（地山細粒砂B.L混じる）
3．10YR2/2　黒褐色　シルト（火山灰・地山細粒砂B.L混じる）
4．10YR3/3　暗褐色　砂質シルト（地山細粒砂B.L混じる）
5．2.5Y3/1　黒褐色　シルト（やや粘質、地山細粒砂B.L少量混じる）
6．10YR3/3　暗褐色　シルト質砂（黒色シルトB.L混じる）
7．10YR2/2　黒褐色　シルト質砂（炭化物・地山細粒砂B.L混じる）
8．10YR3/3　暗褐色　シルト質砂



RD107

1．10YR3/2　黒褐色　シルト（火山灰B.L混じる）
2．10YR2/1　黒色　シルト（粗粒砂混じる）

0　1:40　2m

第48図　RD103～108〈第23次〉

[位置]　第23次調査区ほぼ中央13O 8 vに位置する。他の遺構との切り合いは認められないが、この土坑の南東にはRA068が位置している。検出面はⅠ層直下の平坦な面、Ⅱ層上面で検出した。土坑の主軸方向はほぼ東西方向である。
[平面形・規模]　平面形態は楕円形、断面形態は椀形を呈する。短軸123cm、長軸179cm、深さ62cmを測る。
[堆積土]　5層のやや粘性のあるシルトからなる。最上層である1層より土師器坏片が1点出土した。堆積土はすべてレンズ状に層を成して秩序正しく堆積しており、堆積に人為の介在は考えられない。
[壁・底面]　四方の壁すべて緩やかな角度で立ち上がり、不整な部分が多くみられる。また、土坑底面は平坦な部分が少ない。
遺物（第49図・写真図版45）
　先述したとおり、最上層より古墳～奈良時代の土師器坏片が1点出土した。
　1は内外面ともに丁寧なミガキ、体部下半にはヘラケズリが施されている。体部の段は比較的明瞭で、内面にも稜が認められる。2次的な被熱を受けているようで変色、黒色処理が飛んでいる。
小結　出土した坏は1点のみで、出土層位が堆積土上層であるため、この土坑の時代および性格を特定することは困難である。

RD106
遺構（第48図・写真図版24）
[位置]　第23次調査区ほぼ中央12O24wに位置する。他の遺構との切り合いは認められないが、この土坑の北にはRA061が位置している。また、この土坑は帯状の微低地部分に立地する。検出面はⅠ層直下の平坦な面、Ⅱ層上面で検出した。
[平面形・規模]　直径98cmを測る円形である。
[堆積土]　単層のシルトである。この堆積土中よりほぼ完形の土師器坏が逆位の状態で1点出土した。底面より浮いているが、いかにも埋納されたかのような出土状況である。
[壁・底面]　四方の壁すべて緩やかな角度で立ち上がり、黒色シルトの低地部分が基盤となっているため埋土と基盤層との層境は不明瞭である。また、底面は比較的平滑である。
遺物（第49図・写真図版45）
　先述したとおり、埋土より平安時代の土師器坏が1点出土した。3は内外面ともにミガキ・黒色処理は施されていない。底部は回転糸切り後無調整である。
小結　出土した遺物より平安時代の遺構であると考えられるが、土坑の性格は不明である。

RD107
遺構（第48図・写真図版24）
[位置]　第24次調査区西側12P12 pに位置する。他の遺構との切り合いは認められないが、この土坑の南にはRA067が位置している。また、この土坑は帯状の微低地部分に立地する。検出面はⅠ層直下の平坦な面、Ⅱ層上面で検出した。
[平面形・規模]　直径54cmを測る円形である。
[堆積土]　上下2層のシルトからなり、上層では火山灰ブロックが認められる。
[壁・底面]　四方の壁すべてほぼ垂直の角度で立ち上がる。底面は丸みを持つ。
遺物　出土しなかった。

小結　堆積土に十和田a降下火山灰が含まれることから平安時代の遺構であると考えられる。性格は不明である。

RD108（第48図・写真図版24）

[位置]　第23次調査区ほぼ中央13O 8 vに位置する。RA070と切り合いが認められ、このRA070によって切られている。検出面はRA070貼床直下の凹凸のある面である。主軸方向は約45°東に振った南北方向である。

[平面形・規模]　短軸138cm、長軸173cm、深さ39cmを測り、やや不整な隅丸長方形を呈する。

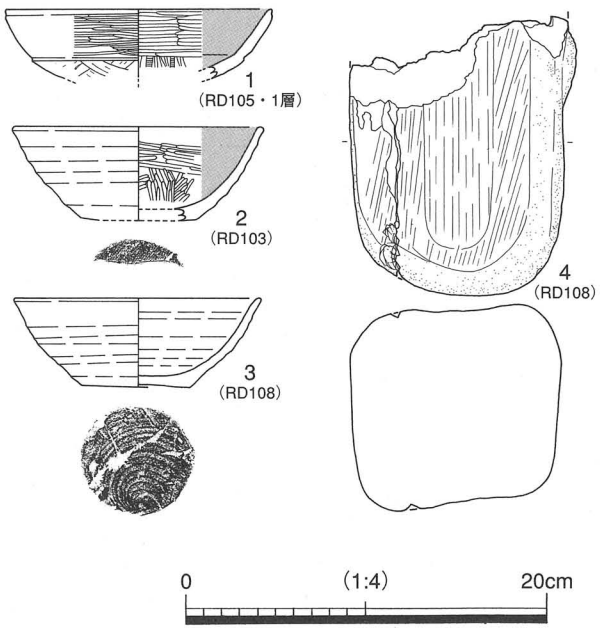
[堆積土]　8層のシルト～砂からなる。3層では火山灰が混じっている。また、いずれの層にも地山のシルトブロック・砂などの不純物が混じる。土坑は地山の砂礫層（Ⅳ層）を掘り抜いており、埋土との差は砂など不純物の存在で区分される。砂礫層は不条理な堆積ではないものの、ブロックが多く混じる層や他の遺構にみられない砂質の堆積土が特徴的である。掘削した後に、掘削で生じた土を用いて埋め戻したような状況である。

[壁・底面]　四方の壁すべて比較的急な角度で立ち上がり、砂礫起源の地山であるため、やや脆弱である。また、底面はほぼ平坦である。

遺物（第49図・写真図版47）

堆積土最下層より礫石器が1点出土した。4は擦り石であると考えられる。欠損しているため全体の形状は不明であるが、概ね直方体であると考えられる。1面のみ縦方向の擦痕が認められる。

小結　堆積土中層に十和田a火山灰を検出したことより平安時代の遺構であると考えられ、堆積土の特徴や遺構の規模・形態などの諸属性を勘案すると墓壙である可能性が考えられ、出土した礫石器は埋葬に伴う遺物である可能性が考えられる。



第49図　土坑出土遺物

4　溝　　跡

RG024

遺構（第50図・写真図版25）

[位置]　第23次調査区南端、14P14d付近に位置する。東側は未調査の調査区外へ続き、西側は平成15年度おこなわれた第19次調査区へ続く。検出面はⅠ層直下の平坦な面、Ⅲ層上面である。主軸方向はほぼ東西を指向する。

[規模]　北側の長さ2.54m、南側の長さ0.95m、深さ17cmを測る。

[堆積土]　4層のシルトからなり、自然堆積であると考えられる。

遺物　3層より土師器片が1点のみ出土した。

小結　出土遺物が1点のみであるため時期の特定は困難であるが、堆積土の特徴より古代の遺構であると考えられる。

RG027

遺構（第51図・写真図版25）

［位置］　第23次調査区北側の東端～第24次調査区、12O ～ 12Pに位置する。RG029・RA065と切り合いが認められる。この溝と直交するRG029に切られ、RA065を切る。また、RG028と近接し、平行する。検出面はⅠ層直下である。入念な検出作業をおこなわずとも明瞭に輪郭が確認できる。主軸方向はほぼ東東西を指向する。

［規模］　長さ72.3 m、深さ15cmを測る。

遺物　土師器片がわずかに出土したが、微細な破片であるため詳細は不明である。

小結　遺構の時期は不明であるが、切り合い関係より少なくともRG029より古く、RA065よりも新しいと考えられる。また、堆積土が古代の遺構と異なり、現代の下水管と平行すること、近現代の地境に近接することなどから近世以降の遺構である可能性が高い。

RG028

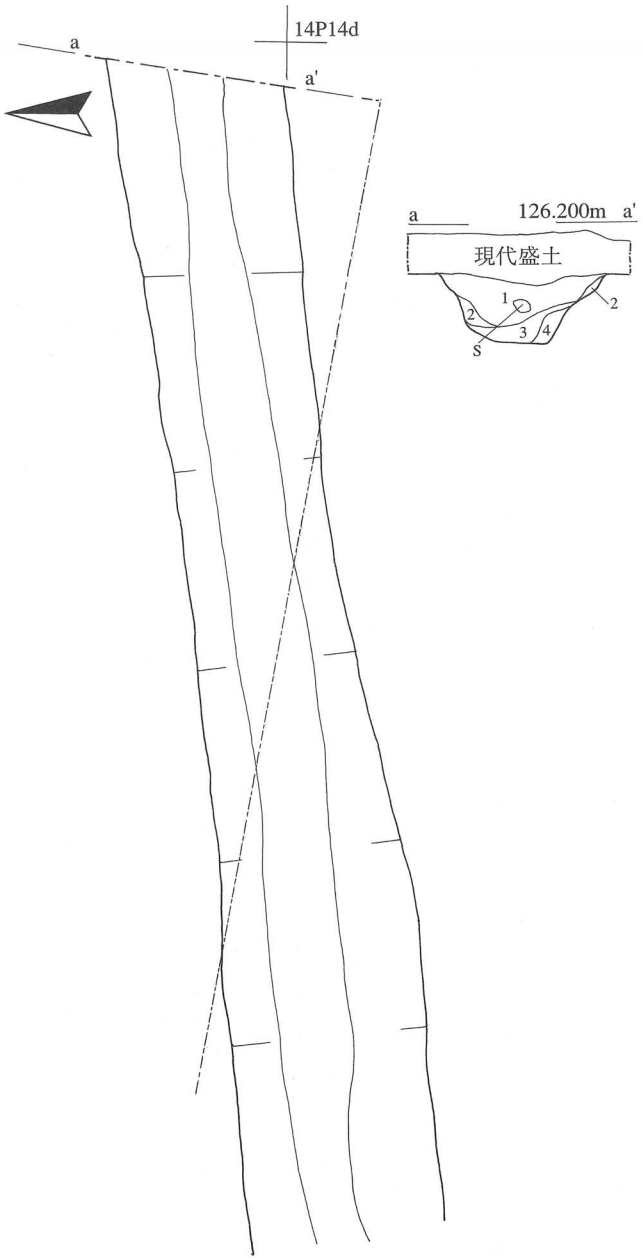
遺構（第51図・写真図版25）

［位置］　第23次調査区北側の東端～第24次調査区、12O ～ 12Pに位置する。RG029・RA065と切り合いが認められる。この溝と直交するRG029に切られ、RA065を切る。また、RG028と近接し、平行する。検出面はⅠ層直下である。入念な検出作業をおこなわずとも明瞭に輪郭が確認できる。主軸方向はほぼ東西を指向する。

［規模］　長さ72.3 m、深さ15cmを測る。

遺物　土師器片がわずかに出土したが、微細な破片であるため詳細は不明である。

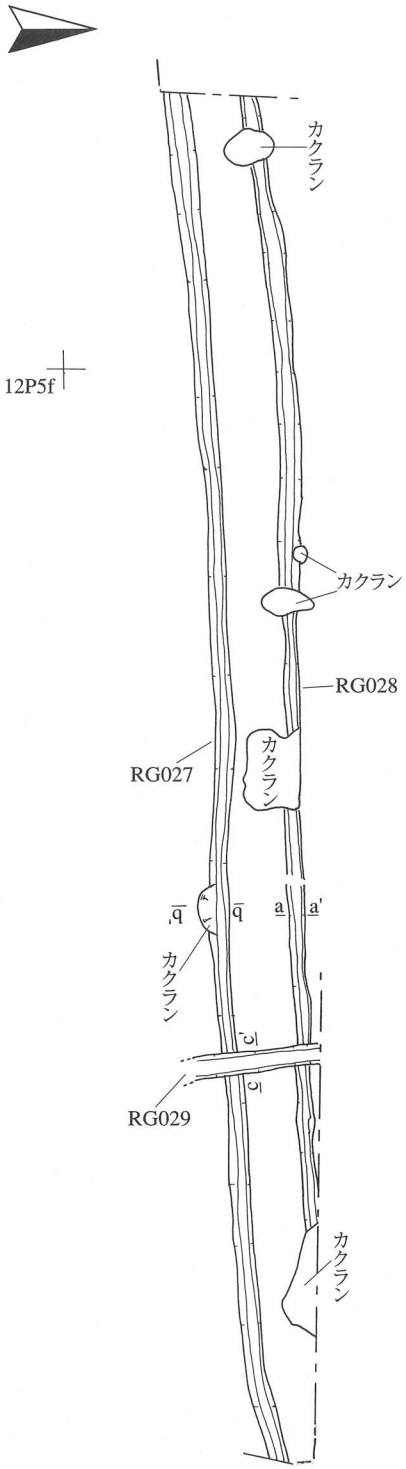
小結　遺構の時期は不明であるが、切り合い関係より少なくともRG029より古く、RA065よりも新しいと考えられる。また、埋土が古代の遺構と異なり、現代の下水管と平行すること、近現代の地境に近接することなどから近世以降の遺構である可能性が高い。

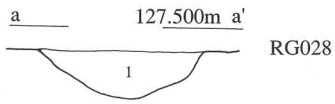


RG024
1．10YR2/1　黒色　粘土（植物根による攪乱多い）
2．10YR3/1　黒褐色　シルト（地山B.L混じる）
3．10YR2/2　黒褐色　シルト（土師器片出土）
4．10YR3/1　黒褐色　粘土（地山B.L少量混じる）

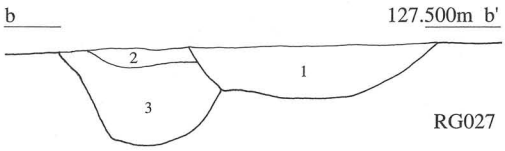
0　1:20　1m

第50図　RG024〈第23次〉

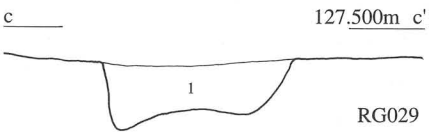




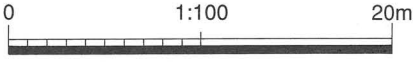
RG028
1．10YR3/1　黒褐色　シルト（やや粘質）



RG027
1．10YR2/1　黒色　シルト（雑物混じる）
2．10YR3/1　黒褐色　シルト
2．10YR2/2　黒褐色　シルト（やや粘質）



RG029
1．10YR2/1　黒色　シルト（粗粒砂混じる）



第51図　RG027～029〈第24次〉

RG029

遺構（第51図・写真図版25）

［位置］　第24次調査区北端、12Pに位置する。RG027・028と切り合いが認められ、この2条の溝を切る。検出面はⅠ層直下である。入念な検出作業をおこなわずとも明瞭に輪郭が確認できる。主軸方向は南北を指向する。

［規模］　長さ3.2m、深さ16cmを測る。

遺物　出土しなかった。

小結　時期不明であるが、RG017・028が比較的新しい遺構であるため、この溝も近世以降であると考えられる。

5　遺構外出土遺物

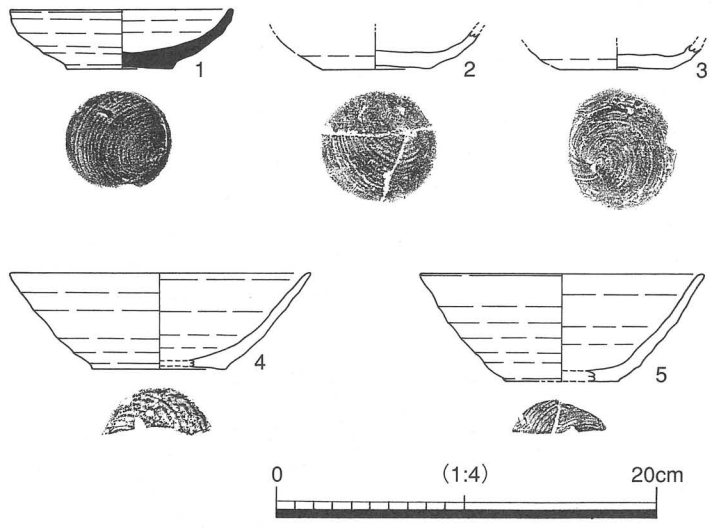
遺構外出土遺物はきわめて少量である。大半が現代の攪乱から出土したものである。これら遺構外出土遺物は図化可能なもの5点をまとめて報告する（第52図・写真図版45）。

1は須恵器坏（皿）・2～5は土師器坏である。1は器高が低く浅い器種である。坏という名称よりも皿という名称の方が適切かもしれない。底部は回転糸切り後無調整である。やや焼成が不良気味であり、一部で還元が不足している。2～5はいずれも内外面ともにミガキ・黒色処理が施されていない。底部は回転糸切り後無調整である。

6　ま　と　め

第23次調査区は南北に長く、第24次調査区は第23次調査区の東西にそれぞれ分かれて存在する。過去の調査成果と比較して遺構密度は決して高くないが、古代に属する竪穴住居や土坑などを検出した。このような遺構の存在により、今回の調査範囲が集落の縁辺部に位置するものと考えられる。本節では第23・24次調査で検出した遺構と遺物について若干のまとめをおこなうこととする。

第23・24次調査では、合計12棟を数える古代の竪穴住居跡（RA）を検出した。これら竪穴住居の所属時期は4棟が7世紀末～8世紀、9棟が9世紀後半～10世紀前半に属する。検出した7世紀末～8世紀の竪穴住居跡はすべて座標軸より約45°振れており、カマドの設置方位は北西である。これに対して9世紀後半～10世紀前半の竪穴住居跡はカマドの設置方位が概ね東である。また、両時期間での竪穴住居跡同士の重複はみられない。Ⅱ層が残存している帯状の微低地部で検出したRA067などは床面の出土遺物から奈良時代の竪穴住居跡であると考えられ



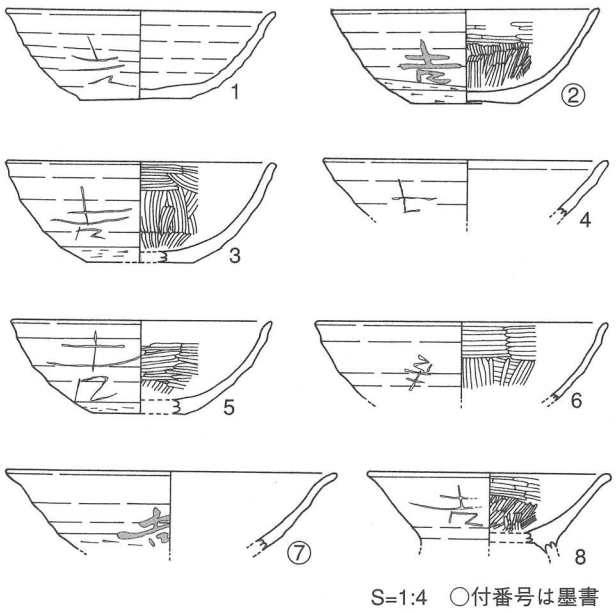
第52図　遺構外出土遺物

る。しかし、堆積土上層に含まれる十和田a降下火山灰や平安時代の遺物の存在から、最終的な埋没時期が平安時代の竪穴住居跡機能時期と大きな時間差を持たないと考えられる。したがって、今回の調査区で検出した平安時代の竪穴住居が営まれる段階においても完全に埋没せず、やや窪んだ状況であったと考えられ、このような廃絶した竪穴住居跡の痕跡である窪地を避けて、平安時代の竪穴住居跡が構築されたと推測される。その結果として、両時代の竪穴住居跡間での重複現象が認められないのかもしれない。

竪穴住居跡以外の古代の遺構では、6基の土坑を検出した。このうち、RD103・108は墓壙である可能性が考えられる。土坑掘削後、すぐに埋め戻したような埋土の状況や規模・比較的整った平面および断面形態、平坦な底面など諸属性より墓壙である可能性を考えた。このような墓壙が居住域に近接して存在することは、古代の葬法や宗教観・思想等を探るうえで貴重な事例となるものと考えられる。

出土遺物は土器がコンテナ5箱の出土であった。特に、RA061は掲載した土器69点を数え、圧倒的な土器の出土量を誇る。

また、7世紀末～8世紀の土器では、関東系土師器と考えられるRA068坏1点、在地の土器にはみられない特徴を有するRA068出土土師器甕などが珍しい土器として挙げられる。これら非在地的特徴を持つ土器の出土は他地域との交流を示すものであると考えられる。また、9世紀後半～10世紀前半の土器では、器表面に墨書や刻書が施された坏が多く出土し、甕ではロクロが用いられているもの用いられていないもの問わず、底部に砂粒が付着したいわゆる砂底土器と呼ばれる種類の甕が多く出土した。墨書および刻書土器には、文字として判読不明のものが多い中、「吉」と読むことができる資料が8点出土した（第53図）。これらのうち6・8はRA062より出土したが、それ以外はRA061より出土した。この2棟は近接した竪穴住居で、住居間での遺物接合が認められた。さらに、これら「吉」はすべて字形が同じである。すなわち、「士」部分が「土」となっており、「口」部分の2・3画目は画数を省略した「Z」字のように書かれている。このような字の癖を持った同一人物の手によるもの、一つの見本をその他が忠実に模したものなのかは不明であるが、この「吉」は吉祥句でもあるため、何らかの意味合いがあったのかもしれない。



S=1:4　○付番号は墨書

第53図　「吉」字土器集成

土器以外の出土遺物ではいずれも古代の土製品・鉄製品・石製品・礫石器などが出土した。特に、RA067より出土した管玉は野古A遺跡では初出である。また、鉄製銛先は遺跡が所在する盛南開発地域の調査では出土例がない。

第１表　遺物観察表（１）RA066・068住居跡

図	9	1	遺構	23次RA066	寸法	口径	—	調整	外	ハケ（タテ）	色調	外	10YR6/4にぶい黄橙色
写真	26	1	位置	カマド		底径	—		内	ハケ（ヨコ）		断	10YR5/1褐灰色
種別	土師器		層位	燃焼部埋土		器高	6.8	胎土	精良（白色砂、黒雲母）			内	10YR6/4にぶい黄橙色
器種	甕		焼成	良好		器厚	0.7				時期	７Ｃ後半～８Ｃ前半	
残存	30％		黒斑	底部側面	底部	木葉痕見られず平滑					備考		

図	12	1	遺構	23次RA068	寸法	口径	10.2	調整	外	ヘラケズリ後ミガキ	色調	外	10YR7/4にぶい黄橙色
写真	26	2	位置	No５		底径	(4.9)		内	ﾐｶﾞｷ(放射状)層文黒ﾐｶﾞｷ		断	10YR4/1褐灰色
種別	土師器		層位	床面直上		器高	—	胎土	精良(白色砂、石英)			内	10YR2/1黒色
器種	坏		焼成	良好		器厚	0.7				時期	７Ｃ後半～８Ｃ前半	
残存	50％		黒斑	体部	底部						備考	関東系土師器	

図	12	2	遺構	23次RA068	寸法	口径	—	調整	外	回転ナデ	色調	外	2.5YR6/1黄灰色
写真	26	7	位置	南東		底径	5.0		内	回転ナデ		断	5YR7/6橙色
種別	須恵器		層位	埋土上層		器高	(1.5)	胎土	精良（スコリア、白色砂）			内	7.5YR7/3にぶい橙色
器種	坏		焼成	非常に良好		器厚	(0.7)				時期	９Ｃ後半～10Ｃ前半	
残存	20％		黒斑		底部	回転糸切り後無調整					備考	一部還元	

図	12	3	遺構	23次RA068	寸法	口径	(15.0)	調整	外	ヘラケズリ「下半」	色調	外	7.5YR7/4にぶい橙色
写真	26	3	位置	南西		底径	—		内	ミガキ		断	10YR7/3にぶい黄橙色
種別	土師器		層位	埋土下層		器高	3.5	胎土	精良（白色砂）			内	10YR2/1黒色
器種	坏		焼成	良好		器厚	0.55				時期	７Ｃ後半～８Ｃ前半	
残存	30％		黒斑	底部上半	底部						備考		

図	12	4	遺構	23次RA068	寸法	口径	15.0	調整	外	ﾍﾗｹｽﾞﾘ「下半」ﾅﾃﾞ?「底部」	色調	外	7.5YR7/4にぶい橙色
写真	26	4	位置			底径	—		内	ミガキ		断	7.5YR8/3浅黄橙色
種別	土師器		層位	床面直上		器高	3.75	胎土	精良（白色砂、スコリア）			内	10YR2/1黒色
器種	坏		焼成	やや不良		器厚	0.5				時期	７Ｃ後半～８Ｃ前半	
残存	50％		黒斑		底部						備考	段明瞭	

図	12	5	遺構	23次RA068	寸法	口径	(14.4)	調整	外	不明「下半」	色調	外	10YR7/4にぶい黄橙色
写真	26	6	位置	南西		底径	—		内	ミガキ		断	10YR4/1褐灰色
種別	土師器		層位	埋土上層		器高	(3.3)	胎土	精良（石英多い）			内	10YR2/1黒色
器種	坏		焼成	良好		器厚	0.65				時期	７Ｃ後半～８Ｃ前半	
残存	20％		黒斑		底部						備考	段明瞭	

図	12	6	遺構	23次RA068	寸法	口径	(16.0)	調整	外	ヘラケズリ「下半」	色調	外	10YR3/1黒褐色
写真	26	10	位置			底径	—		内	ミガキ		断	10YR3/1黒褐色
種別	土師器		層位			器高	(2.4)	胎土	精良（白色砂、雲母）			内	10YR7/1灰白色
器種	坏		焼成	良好		器厚	0.7				時期	７Ｃ後半～８Ｃ前半	
残存	20％		黒斑		底部						備考		

図	12	7	遺構	23次RA068	寸法	口径	(14.0)	調整	外	ヘラケズリ？「下半」	色調	外	10YR7/3にぶい黄橙色
写真	26	9	位置			底径	—		内	ミガキ		断	10YR5/1褐灰色
種別	土師器		層位			器高	(3.6)	胎土	精良（スコリア）			内	10YR4/1褐灰色
器種	坏		焼成	やや不良		器厚					時期	７Ｃ後半～８Ｃ前半	
残存	25％		黒斑		底部						備考		

図	12	8	遺構	23次RA068	寸法	口径	12.0	調整	外	ナデ・ユビオサエ	色調	外	7.5YR6/4にぶい橙色
写真	26	5	位置	No13		底径	5.0		内	ナデ・ユビオサエ		断	7.5YR6/4にぶい橙色
種別	土師器		層位	床面直上		器高	3.6	胎土	精良（白色砂）			内	7.5YR6/4にぶい橙色
器種	坏？		焼成	良好		器厚	0.4				時期	７Ｃ後半～８Ｃ前半	
残存	90％		黒斑		底部						備考	異形	

図	12	9	遺構	23次RA068	寸法	口径	12.5	調整	外	ハケ（タテ・ヨコ）	色調	外	5YR7/6橙色
写真	27	15	位置	床直、南西埋土、P5		底径	6.5		内	ハケ（タテ・ヨコ）		断	2.5YR6/6橙色
種別	土師器		層位	埋土下層		器高	14.35	胎土	精良（大粒の石英）			内	2.5YR6/6橙色
器種	甕		焼成	やや不良		器厚	0.75				時期	７Ｃ後半～８Ｃ前半	
残存	45％		黒斑		底部	横方向に突出					備考	段なし	

図	12	10	遺構	23次RA068	寸法	口径	(14.0)	調整	外	ハケ（タテ）	色調	外	10YR7/4にぶい黄橙色
写真	27	12	位置	南西埋土、No9・11		底径	7.5		内	ハケ（ヨコ）		断	10YR6/1褐灰色
種別	土師器		層位			器高	23.8	胎土	精良（白色砂）			内	10YR7/4にぶい黄橙色
器種	甕		焼成	良好		器厚	0.6				時期	７Ｃ後半～８Ｃ前半	
残存	40％		黒斑		底部						備考	段なし	

図	12	11	遺構	23次RA068	寸法	口径	(16.6)	調整	外	ミガキ（タテ）	色調	外	7.5YR7/3にぶい橙色
写真	27	14	位置	北東		底径	(9.4)		内	ハケ（ヨコ）		断	10YR6/3にぶい黄橙色
種別	土師器		層位	埋土上層		器高	31.4	胎土	やや粗（白色砂、雲母）			内	7.5YR6/4にぶい橙色
器種	甕		焼成	良好		器厚	0.7				時期	７Ｃ後半～８Ｃ前半	
残存	70％		黒斑	有	底部						備考	県北に見られる形態（異形）	

図	12	12	遺構	23次RA068	寸法	口径	(15.0)	調整	外	ハケ（タテ）	色調	外	7.5YR8/2灰白色
写真	26	11	位置	No10		底径	—		内	ハケ（ヨコ）		断	10YR7/1灰白色
種別	土師器		層位	床面直上		器高	(7.3)	胎土	やや粗（大粒の石英）			内	10YR8/3浅黄橙色
器種	甕		焼成	やや不良		器厚	0.55				時期	７Ｃ後半～８Ｃ前半	
残存	%		黒斑		底部						備考	段不明瞭	

図	12	13	遺構	23次RA068	寸法	口径	—	調整	外	ヘラケズリ（タテ）	色調	外	10YR7/4にぶい黄橙色
写真	28	19	位置	南東埋土、P5、No10・14		底径	7.1		内	ハケ（ヨコ）		断	7.5YR8/4浅黄橙色
種別	土師器		層位			器高	12.3	胎土	精良（白色砂、スコリア）			内	7.5YR7/6橙色
器種	甕		焼成	良好		器厚	0.75				時期	７Ｃ後半～８Ｃ前半	
残存	35％		黒斑		底部	木葉痕					備考	内面に微量のコゲ	

図	12	14	遺構	23次RA068	寸法	口径	—	調整	外	不明	色調	外	7.5YR8/6浅黄橙色
写真	28	17	位置	南西		底径	7.0		内	不明		断	7.5YR6/1褐灰色
種別	土師器		層位	埋土上層		器高	(1.6)	胎土	非常に精良（白色砂）			内	7.5YR7/6橙色
器種	甕		焼成	良好		器厚	—				時期	７Ｃ後半～８Ｃ前半	
残存	10％		黒斑		底部						備考		

第１表　遺物観察表（２）RA068・071・067住居跡

図	12	15	遺構	23次RA068	寸法	口径	—	調整	外	ハケ（タテ）	色調	外	10YR6/4にぶい黄橙色
写真	28	18	位置	No13		底径	6.15		内	ハケ（ヨコ）		断	10YR5/4にぶい黄褐色
種別	土師器		層位	床面直上		器高	(6.8)	胎土	精良（白色砂、角閃岩）			内	10YR5/4にぶい黄褐色
器種	甕		焼成	良好		器厚	0.65				時期	７Ｃ後半～８Ｃ前半	
残存	30％		黒斑		底部						備考		

図	12	16	遺構	23次RA068	寸法	口径	(10.0)	調整	外	ナデ	色調	外	7.5YR6/4にぶい橙色
写真	27	16	位置	南東		底径	8.5		内	—		断	7.5YR7/3にぶい橙色
種別	土師器		層位	埋土上層		器高	(1.8)	胎土	精良（白色砂）			内	7.5YR7/4にぶい橙色
器種	甕		焼成	良好		器厚	—				時期	７Ｃ後半～８Ｃ前半	
残存	10％		黒斑		底部	木葉痕					備考		

図	12	17	遺構	23次RA068	寸法	口径	(18.5)	調整	外	ハケ（タテ）	色調	外	7.5YR7/4にぶい橙色
写真	28	21	位置	南西		底径	6.6		内	ハケ（ヨコ）		断	7.5YR6/1褐灰色
種別	土師器		層位	埋土上層・下層		器高	17.0	胎土	精良（白色砂、雲母）			内	7.5YR6/4にぶい橙色
器種	甕		焼成	良好		器厚	0.85				時期	７Ｃ後半～８Ｃ前半	
残存	％		黒斑		底部						備考		

図	12	18	遺構	23次RA068	寸法	口径	(16.0)	調整	外	ハケ（タテ）	色調	外	7.5YR7/4にぶい橙色
写真	28	20	位置	床面直上No3、P5		底径	—		内	ハケ（ヨコ）		断	7.5YR6/6橙色
種別	土師器		層位			器高	(11.1)	胎土	精良（白色砂）			内	7.5YR6/6橙色
器種	甕		焼成	良好		器厚	０．６				時期	７Ｃ後半～８Ｃ前半	
残存	35%		黒斑		底部						備考		

図	12	19	遺構	23次RA068	寸法	口径	20.3	調整	外	ハケ（タテ）	色調	外	5YR6/4にぶい橙色
写真	27	13	位置	南西埋土上層・下層、No9		底径	8.6		内	ハケ（ヨコ）		断	5YR5/1褐灰色
種別	土師器		層位			器高	27.9	胎土	精良（白色砂）			内	5YR6/6橙色
器種	甕		焼成	やや不良		器厚	0.7				時期	７Ｃ後半～８Ｃ前半	
残存	80％		黒斑		底部						備考	外面スス、内面微量のコゲ、二次焼成痕	

図	12	20	遺構	23次RA068	寸法	口径	(18.0)	調整	外	ヨコナデ	色調	外	10YR6/4にぶい黄橙色
写真	26	8	位置	北西		底径	—		内	ヨコナデ		断	10YR6/4にぶい黄橙色
種別	土師器		層位	埋土上層		器高	(3.75)	胎土	精良（白色砂、雲母）			内	10YR6/4にぶい黄橙色
器種	甕		焼成	良好		器厚	0.6				時期	７Ｃ後半～８Ｃ前半	
残存	10％		黒斑	内面	底部						備考		

図	12	21	遺構	23次RA068	寸法	口径	11.2	調整	外	ハケ（タテ）	色調	外	7.5YR6/4にぶい橙色
写真	28	22	位置	No9		底径	—		内	ハケ（ヨコ）		断	7.5YR5/1褐灰色
種別	土師器		層位	床面直上		器高	21.6	胎土	精良（白色砂）			内	7.5YR6/4にぶい橙色
器種	甕		焼成	良好		器厚	0.8				時期	７Ｃ後半～８Ｃ前半	
残存	60％		黒斑	有	底部						備考		

図	16	1	遺構	23次RA071	寸法	口径	15.0	調整	外	ミガキ（タテ）	色調	外	5YR6/6橙色
写真	29	23	位置	南東埋土下層、P5、No10・14		底径	7.4		内	ハケ（ヨコ）		断	
種別	土師器		層位			器高	16.95	胎土	非常に精良（白色砂）			内	7.5YR6/4にぶい橙色
器種	甕		焼成	良好		器厚	0.6				時期	８Ｃ	
残存			黒斑		底部						備考	内面にコゲ（喫水線有）	

図	20	1	遺構	24次RA067	寸法	口径	(14.8)	調整	外	回転ナデ	色調	外	5YR7/8橙色
写真	29	26	位置	北東		底径	—		内	回転ナデ		断	5YR6/4にぶい橙色
種別	土師器		層位	埋土2層（火山灰）の上		器高	(5.3)	胎土	精良（白色砂、雲母）			内	5YR7/8橙色
器種	坏		焼成	やや不良		器厚	0.5				時期	９Ｃ後半～10Ｃ前半	
残存	40％		黒斑		底部						備考		

図	20	2	遺構	24次RA067	寸法	口径	—	調整	外	回転ナデ	色調	外	7.5YR7/6橙色
写真	29	27	位置	北西		底径	—		内	回転ナデ		断	7.5YR7/6橙色
種別	土師器		層位	埋土3層		器高	—	胎土	非常に精良（雲母）			内	7.5YR6/6橙色
器種	坏		焼成	良好		器厚	0.55				時期	９Ｃ後半～10Ｃ前半	
残存	5%		黒斑		底部						備考	墨書「吉？」	

図	20	3	遺構	24次RA067	寸法	口径	(17.5)	調整	外	回転ナデ？	色調	外	7.5YR7/6橙色
写真	29	29	位置	埋土上2層、東西ベルト、南北ベルト3層		底径	—		内	回転ナデ		断	7.5YR7/6橙色
種別	土師器		層位			器高	(2.9)	胎土	非常に精良（白色砂）			内	7.5YR7/6橙色
器種	甕		焼成	良好		器厚	0.65				時期		
残存	10％		黒斑		底部						備考	28と同一個体？	

図	20	4	遺構	24次RA067	寸法	口径	(17.0)	調整	外	回転ナデ	色調	外	5YR6/6橙色
写真	29	28	位置	北西		底径	—		内	回転ナデ		断	5YR6/4にぶい橙色
種別	土師器		層位	埋土2層（火山灰上）		器高	(5.2)	胎土	非常に精良（白色砂）			内	5YR6/6橙色
器種	甕		焼成	良好		器厚	0.6				時期	９Ｃ後半～10Ｃ前半	
残存	10％		黒斑		底部						備考	29と同一個体	

図	20	5	遺構	24次RA067	寸法	口径	(21.0)	調整	外	ハケ（タテ）	色調	外	5YR7/8橙色
写真	29	30	位置			底径	—		内	ハケ（ヨコ）		断	10YR7/2にぶい黄橙色
種別	土師器		層位	貼床		器高	(6.9)	胎土	精良（白色砂、雲母）			内	5YR7/8橙色
器種	壷		焼成	良好		器厚	0.65				時期	８Ｃ	
残存	10％		黒斑		底部						備考		

図	20	6	遺構	24次RA067	寸法	口径	7.9	調整	外	ミガキ（ヨコ）	色調	外	10YR8/4浅黄橙色
写真	29	24	位置	カマド袖脇		底径	—		内	ミガキ（ヨコ）		断	10YR5/1褐灰色
種別	土師器		層位			器高	2.7	胎土	非常に精良（雲母）			内	10YR2/1黒色
器種	小形坏		焼成	良好		器厚	0.5				時期	８Ｃ	
残存	100％		黒斑		底部						備考		

図	20	7	遺構	24次RA067	寸法	口径		調整	外	ヘラケズリ（不定）	色調	外	
写真	29	25	位置	煙道		底径			内	ミガキ（ヨコ）		断	
種別	土師器		層位	底面		器高		胎土	非常に精良（白色砂混）			内	
器種	坏		焼成	良好		器厚					時期	８Ｃ	
残存	45％		黒斑		底部						備考	2次被熱	

第１表　遺物観察表（３）RA067・060・061住居跡

図	20	8	遺構	24次RA067	寸法	口径	－	調整	外	ハケ（タテ）	色調	外	10YR8/6黄橙色
写真	29	31	位置	北東隅		底径	5.5		内	ハケ（ヨコ）		断	10YR8/3浅黄橙色
種別	土師器		層位	床面直上		器高	(3.6)	胎土	精良（白色砂、雲母）			内	10YR8/3浅黄橙色
器種	甕		焼成	良好		器厚	1.0				時期		８Ｃ？
残存	10％		黒斑		底部	木葉痕					備考		

図	20	9	遺構	24次RA067	寸法	口径	16.2	調整	外	ハケ（タテ）	色調	外	5YR5/6明赤褐色
写真	29	32	位置	床直、南東隅まとまり、貼床、南東埋土下層、東西ベルト下層		底径	6.6		内	ハケ（ヨコ）		断	7.5YR6/4にぶい橙色
種別	土師器		層位			器高	18.1	胎土	精良（白色砂、スコリア）			内	7.5YR6/4にぶい橙色
器種	甕		焼成	やや不良		器厚	0.7				時期		８Ｃ
残存	50%		黒斑		底部						備考		内面ススあり

図	20	10	遺構	24次RA067	寸法	口径	18.0	調整	外	ハケ（タテ）	色調	外	7.5YR6/4にぶい橙色
写真	30	34	位置	床面直上、南東隅まとまり、南東埋土下層		底径	7.1		内	ハケ（ヨコ）		断	7.5YR6/4にぶい橙色
種別	土師器		層位			器高	0.7	胎土	精良（白色砂）			内	5YR6/6橙色
器種	甕		焼成	良好		器厚					時期		８Ｃ
残存	95%		黒斑	体部	底部						備考		内面コゲ、外面スス

図	20	11	遺構	24次RA067	寸法	口径	16.6	調整	外	ハケ？（タテ）	色調	外	10YR6/4にぶい黄橙色
写真	30	33	位置	床面直上、南東隅まとまり、北東埋土上層・下層・2層・3層、南東埋土下層、東西ベルト下層		底径	6.8		内	ハケ（ヨコ）		断	－
種別	土師器		層位			器高	28.45	胎土	精良（白色砂、雲母）			内	7.5YR6/4にぶい橙色
器種	甕		焼成	良好		器厚	0.7				時期		８Ｃ
残存	70%		黒斑	底部～体部	底部						備考		内面コゲ

図	23	1	遺構	23次RA060	寸法	口径	13.4	調整	外	回転ナデ	色調	外	7.5YR7/6橙色
写真	30	35	位置			底径	－		内	回転ナデ		断	7.5YR7/6橙色
種別	土師器		層位	埋土		器高	3.5	胎土	精良（白色砂）			内	7.5YR7/6橙色
器種	坏		焼成	やや不良		器厚	0.3				時期		９Ｃ後半～10Ｃ前半
残存	20％		黒斑		底部						備考		

図	26	1	遺構	23次RA061	寸法	口径	14.3	調整	外	回転ナデ	色調	外	7.5YR8/4浅黄橙色
写真	31	46	位置	貼床、カマド袖内及び燃焼部、北東		底径	5.95		内	回転ナデ		断	－
種別	土師器		層位			器高	4.65	胎土	非常に精良（白色砂）			内	5YR6/6橙色
器種	坏		焼成	良好		器厚	0.45				時期		９Ｃ後半～10Ｃ前半
残存	70％		黒斑		底部	回転糸切り後無調整					備考		刻書「吉」

図	26	2	遺構	23次RA061	寸法	口径	14.2	調整	外	回転ナデ	色調	外	10YR7/4にぶい黄橙色
写真	32	52	位置			底径	5.75		内	回転ナデ		断	10YR8/3浅黄橙色
種別	土師器		層位			器高	5.0	胎土	粗（スコリア、雲母）			内	7.5YR7/6橙色
器種	坏		焼成	良好		器厚	0.5				時期		９Ｃ後半～10Ｃ前半
残存	35％		黒斑		底部	回転糸切り後無調整					備考		

図	26	3	遺構	23次RA061	寸法	口径	15.0	調整	外	回転ナデ	色調	外	7.5Y6/1灰色
写真	32	55	位置			底径	5.7		内	回転ナデ		断	7.5Y7/1灰白色
種別	須恵器		層位			器高	4.95	胎土	非常に精良（白色砂）			内	7.5Y6/1灰色
器種	坏		焼成	良好		器厚	0.5				時期		９Ｃ後半～10Ｃ前半
残存	90％		黒斑		底部	回転糸切り後無調整					備考		

図	26	4	遺構	23次RA061	寸法	口径	(13.8)	調整	外	回転ナデ	色調	外	7.5YR7/6橙色
写真	32	58	位置	カマド		底径	4.7		内	回転ナデ		断	5YR7/6橙色
種別	土師器		層位	埋土		器高	4.4	胎土	やや粗（白色砂）			内	5YR6/6橙色
器種	坏		焼成	良好		器厚	0.4				時期		９Ｃ後半～10Ｃ前半
残存	25%		黒斑		底部	回転糸切り後無調整					備考		

図	26	5	遺構	23次RA061	寸法	口径	13.7	調整	外	回転ナデ	色調	外	5YR6/6橙色
写真	31	47	位置	北東隅		底径	5.6		内	回転ナデ		断	5YR6/6橙色
種別	土師器		層位	埋土下層		器高	4.45	胎土	精良（雲母多量）			内	5YR6/6橙色
器種	坏		焼成	非常に良好		器厚	0.55				時期		９Ｃ後半～10Ｃ前半
残存	70％		黒斑		底部	回転糸切り後無調整					備考		

図	26	6	遺構	23次RA061	寸法	口径	(14.0)	調整	外	回転ナデ	色調	外	7.5YR7/4にぶい橙色
写真	32	51	位置	カマド袖内及び燃焼部		底径	6.0		内	回転ナデ		断	10YR8/4浅黄橙色
種別	土師器		層位			器高	4.8	胎土	非常に精良（白色砂）			内	5YR7/6橙色
器種	坏		焼成	やや不良		器厚	0.5				時期		９Ｃ後半～10Ｃ前半
残存	35%		黒斑		底部	回転糸切り後無調整					備考		

図	26	7	遺構	23次RA061	寸法	口径	15.1	調整	外	回転ナデ	色調	外	5YR6/8橙色
写真	31	50	位置	貼床、カマド袖内、北東埋土上層・下層、南北ベルト下層		底径	4.9		内	回転ナデ		断	7.5YR8/4浅黄橙色
種別	土師器		層位			器高	5.25	胎土	精良（白色砂、石英）			内	5YR7/6橙色
器種	坏		焼成	良好		器厚	0.55				時期		９Ｃ後半～10Ｃ前半
残存	50％		黒斑		底部	回転糸切り後無調整					備考		

図	26	8	遺構	23次RA061	寸法	口径	14.2	調整	外	回転ナデ	色調	外	10YR8/3浅黄橙色
写真	31	48	位置	南壁（中央）際、床面直上		底径	5.7		内	ミガキ		断	10YR6/2灰黄褐色
種別	土師器		層位			器高	4.9	胎土	精良（スコリア）			内	10YR6/2灰黄褐色
器種	坏		焼成	良好		器厚	0.5				時期		９Ｃ後半～10Ｃ前半
残存	80％		黒斑		底部	切り離し後回転ヘラケズリ					備考		

図	26	9	遺構	23次RA061	寸法	口径	(14.4)	調整	外	回転ナデ	色調	外	7.5YR6/4にぶい橙色
写真	31	49	位置	北西隅西壁に貼り付いた土器		底径	6.4		内	ミガキ		断	10YR7/3にぶい黄橙色
種別	土師器		層位			器高	5.0	胎土	精良（白色砂、スコリア、雲母）			内	7.5YR6/6橙色
器種	坏		焼成	良好		器厚	0.45				時期		９Ｃ後半～10Ｃ前半
残存	65％		黒斑		底部	回転糸切り後無調整					備考		墨書「木」、底部内面重ね焼痕

図	26	10	遺構	23次RA061	寸法	口径	13.3	調整	外	回転ナデ	色調	外	7.5YR6/4にぶい橙色
写真	30	37	位置	北東		底径	6.5		内	ミガキ		断	－
種別	土師器		層位	埋土下層		器高	4.2	胎土	精良（白色砂、スコリア）			内	10YR2/1黒色
器種	坏		焼成	良好		器厚	0.45				時期		９Ｃ後半～10Ｃ前半
残存	75％		黒斑		底部	回転糸切り後無調整					備考		

第１表　遺物観察表（４）RA061住居跡

図	26	11	遺構	23次RA061	寸法	口径	14.2	調整	外	回転ナデ	色調	外	10YR6/4にぶい黄橙色
写真	31	43	位置	北東隅埋土下層、北東埋土上層		底径	6.3		内	ミガキ		断	10YR5/1褐灰色
種別	土師器		層位			器高	4.5	胎土	やや粗（雲母）			内	10YR3/1黒褐色
器種	坏		焼成	良好		器厚	0.55				時期	９Ｃ後半～10Ｃ前半	
残存	50％		黒斑		底部	回転糸切り後周辺のみヘラケズリ（不定方向）					備考	内黒	

図	26	12	遺構	23次RA061	寸法	口径	(14.2)	調整	外	回転ナデ	色調	外	7.5YR6/6橙色
写真	31	42	位置	カマド		底径	5.5		内	ミガキ		断	10YR7/1灰白色
種別	土師器		層位	埋土		器高	(5.2)	胎土	精良（白色砂、石英）			内	10YR5/2灰黄褐色
器種	坏		焼成	良好		器厚	0.6				時期	９Ｃ後半～10Ｃ前半	
残存	60％		黒斑		底部	切り離し後回転ヘラケズリ					備考	墨付き、二次被熱	

図	26	13	遺構	23次RA061	寸法	口径	14.9	調整	外	回転ナデ	色調	外	5YR7/6橙色
写真	31	45	位置	北東		底径	5.1		内	回転ナデ		断	5YR7/6橙色
種別	土師器		層位	埋土下層		器高	5.35	胎土	非常に精良（石英、雲母）			内	5YR7/6橙色
器種			焼成	やや不良		器厚	0.45				時期	９Ｃ後半～10Ｃ前半	
残存	55％		黒斑		底部	回転糸切り後無調整					備考	墨書「万？」	

図	26	14	遺構	23次RA061	寸法	口径	14.2	調整	外	回転ナデ	色調	外	5YR7/8橙色
写真	31	44	位置	南西		底径	4.6		内	回転ナデ		断	5YR7/6橙色
種別	土師器		層位	埋土下層		器高	5.0	胎土	精良（白色砂）			内	5YR7/8橙色
器種	坏		焼成	良好		器厚	0.45				時期	９Ｃ後半～10Ｃ前半	
残存	90％		黒斑		底部	回転糸切り後無調整					備考		

図	26	15	遺構	23次RA061	寸法	口径	(13.8)	調整	外	回転ナデ	色調	外	5YR7/8橙色
写真	32	57	位置	カマド袖内及び燃焼部		底径	(4.0)		内	回転ナデ		断	5YR6/6橙色
種別	土師器		層位			器高	4.4	胎土	精良（白色砂）			内	2.5YR7/8橙色
器種	坏		焼成	非常に良好		器厚	0.5				時期	９Ｃ後半～10Ｃ前半	
残存	20％		黒斑		底部	回転糸切り後無調整					備考		

図	26	16	遺構	23次RA061	寸法	口径	14.2	調整	外	回転ナデ	色調	外	10YR6/4にぶい黄橙色
写真	30	36	位置	南壁（中央）際		底径	5.5		内	ミガキ		断	－
種別	土師器		層位	床面直上		器高	5.0	胎土	精良（角閃岩）			内	10YR2/1黒色
器種	坏		焼成	良好		器厚	0.45				時期	９Ｃ後半～10Ｃ前半	
残存	90％		黒斑		底部	切り離し後回転ヘラケズリ					備考	墨書「吉」	

図	26	17	遺構	23次RA061	寸法	口径	(13.8)	調整	外	回転ナデ	色調	外	10YR7/4にぶい黄橙色
写真	30	40	位置			底径	5.0		内	ミガキ		断	10YR4/1褐灰色
種別	土師器		層位	貼床		器高	5.0	胎土	非常に精良（スコリア、石英）			内	10YR2/1黒色
器種	坏		焼成	良好		器厚	0.4				時期		
残存	45％		黒斑	体部下半	底部	切り離し後回転ヘラケズリ					備考		

図	26	18	遺構	23次RA061	寸法	口径	(13.8)	調整	外	回転ナデ	色調	外	7.5YR7/6橙色
写真	31	41	位置	北西		底径	(5.0)		内	ミガキ		断	10YR4/1褐灰色
種別	土師器		層位	埋土下層		器高	4.9	胎土	精良（角閃岩、白色砂）			内	10YR2/1黒色
器種	坏		焼成	良好		器厚	0.6				時期	９Ｃ後半～10Ｃ前半	
残存	45％		黒斑	底部	底部	切り離し後回転ヘラケズリ					備考	刻書「吉」	

図	26	19	遺構	23次RA061	寸法	口径	(16.0)	調整	外	回転ナデ	色調	外	7.5YR7/6橙色
写真	33	74	位置	カマド袖内及び燃焼部		底径	(6.0)		内	回転ナデ		断	7.5YR7/4にぶい橙色
種別	土師器		層位			器高	4.8	胎土	精良（白色砂）			内	7.5YR6/4にぶい橙色
器種	坏		焼成	良好		器厚	0.7				時期	９Ｃ後半～10Ｃ前半	
残存	30％		黒斑		底部	切り離し後回転ヘラケズリ					備考		

図	26	20	遺構	23次RA061	寸法	口径	(14.1)	調整	外	回転ナデ	色調	外	7.5YR8/4浅黄橙色
写真	33	73	位置	北西		底径	(5.8)		内	回転ナデ		断	7.5YR8/4浅黄橙色
種別	土師器		層位	埋土上層		器高	4.9	胎土	精良（白色砂）			内	7.5YR8/4浅黄橙色
器種	坏		焼成	やや不良		器厚	0.5				時期	９Ｃ後半～10Ｃ前半	
残存	30％		黒斑		底部						備考		

図	26	21	遺構	23次RA061	寸法	口径	(14.4)	調整	外	回転ナデ	色調	外	7.5YR7/6橙色
写真	30	38	位置	カマド脇		底径	(5.6)		内	ミガキ		断	
種別	土師器		層位	床面直上		器高	5.3	胎土	非常に精良（石英）			内	10YR4/1褐灰色
器種	坏		焼成	良好		器厚	0.5				時期	９Ｃ後半～10Ｃ前半	
残存	50％		黒斑		底部	切り離し後回転ヘラケズリ					備考	刻書「吉」	

図	26	22	遺構	23次RA061	寸法	口径	(13.9)	調整	外	回転ナデ	色調	外	10YR8/4浅黄橙色
写真	33	70	位置	貼床、埋土、南北ベルト下層		底径	－		内	回転ナデ		断	7.5YR8/4浅黄橙色
種別	土師器		層位			器高	(4.8)	胎土	精良（白色砂、スコリア、雲母）			内	7.5YR8/4浅黄橙色
器種	坏		焼成	良好		器厚	0.45				時期	９Ｃ後半～10Ｃ前半	
残存	40％		黒斑		底部						備考	墨書「大」	

図	26	23	遺構	23次RA061	寸法	口径	(14.8)	調整	外	回転ナデ	色調	外	7.5YR6/4にぶい橙色
写真	33	76	位置			底径	－		内	回転ナデ		断	7.5YR3/1黒褐色
種別	土師器		層位	貼床		器高	(4.1)	胎土	やや粗（白色砂、雲母）			内	7.5YR7/4にぶい橙色
器種	坏		焼成	良好		器厚	0.55				時期	９Ｃ後半～10Ｃ前半	
残存	20％		黒斑		底部						備考	内面にタール付着	

図	26	24	遺構	23次RA061	寸法	口径	(15.0)	調整	外	回転ナデ	色調	外	7.5YR7/4にぶい橙色
写真	33	65	位置			底径	－		内	回転ナデ		断	7.5YR7/4にぶい橙色
種別	土師器		層位	貼床		器高	(3.0)	胎土	精良（白色砂）			内	7.5YR7/4にぶい橙色
器種	坏		焼成	良好		器厚	0.5				時期	９Ｃ後半～10Ｃ前半	
残存	10％		黒斑		底部	回転糸切り後無調整					備考		

図	26	25	遺構	23次RA061	寸法	口径	(15.8)	調整	外	回転ナデ	色調	外	7.5YR7/4にぶい橙色
写真	33	71	位置	カマド袖内及び燃焼部、カマド袖		底径	－		内	回転ナデ		断	7.5YR8/4浅黄橙色
種別	土師器		層位			器高	(4.2)	胎土	非常に精良（白色砂）			内	7.5YR7/6橙色
器種	坏		焼成	良好		器厚	0.45				時期	９Ｃ後半～10Ｃ前半	
残存	30％		黒斑		底部						備考		

第１表　遺物観察表（５）RA061住居跡

図	26	26	遺構	23次RA061	寸法	口径	(14.6)	調整	外	回転ナデ	色調	外	7.5YR6/4にぶい橙色
写真	32	60	位置	カマド袖		底径	−		内	回転ナデ		断	7.5YR4/1褐灰色
種別	土師器		層位			器高	(3.95)	胎土	精良（白色砂）			内	5YR7/6橙色
器種	坏		焼成	良好		器厚	0.35				時期	９Ｃ後半～10Ｃ前半	
残存	20％		黒斑		底部						備考		

図	26	27	遺構	23次RA061	寸法	口径	(12.6)	調整	外	回転ナデ	色調	外	5YR6/6橙色
写真	33	68	位置	北東埋土下層、RA062南カマド脇土坑		底径	−		内	回転ナデ		断	5YR6/4にぶい橙色
種別	土師器		層位			器高	(4.0)	胎土	精良（白色砂）			内	5YR6/6橙色
器種	坏		焼成	良好		器厚	0.4				時期	９Ｃ後半～10Ｃ前半	
残存	30％		黒斑		底部						備考		

図	26	28	遺構	23次RA061	寸法	口径	(13.2)	調整	外	回転ナデ	色調	外	7.5YR6/6橙色
写真	33	64	位置	北西		底径	−		内	回転ナデ		断	7.5YR6/6橙色
種別	土師器		層位	埋土下層		器高	(4.2)	胎土	精良（白色砂、石英）			内	7.5YR6/6橙色
器種	坏		焼成	良好		器厚	0.4				時期	９Ｃ後半～10Ｃ前半	
残存	15％		黒斑		底部						備考		

図	26	29	遺構	23次RA061	寸法	口径	12.6	調整	外	回転ナデ	色調	外	5YR6/6橙色
写真	33	63	位置	南東		底径	−		内	回転ナデ		断	5YR6/4にぶい橙色
種別	土師器		層位	隅		器高	(3.3)	胎土	精良（白色砂）			内	5YR6/4にぶい橙色
器種	坏		焼成	非常に良好		器厚	0.45				時期	９Ｃ後半～10Ｃ前半	
残存	10％		黒斑		底部						備考		

図	26	30	遺構	23次RA061	寸法	口径	(13.6)	調整	外	回転ナデ	色調	外	7.5YR7/6橙色
写真	32	62	位置	南西		底径	−		内	ミガキ		断	10YR5/1褐灰色
種別	土師器		層位	埋土下層		器高	(3.55)	胎土	精良（スコリア）			内	10YR2/1黒色
器種	坏		焼成	良好		器厚	0.4				時期	９Ｃ後半～10Ｃ前半	
残存	20％		黒斑		底部						備考		

図	27	31	遺構	23次RA061	寸法	口径	(14.8)	調整	外	回転ナデ	色調	外	7.5YR6/4にぶい橙色
写真	34	83	位置	南西		底径	−		内	回転ナデ		断	7.5YR8/6浅黄橙色
種別	土師器		層位	埋土下層		器高	(5.7)	胎土	精良（白色砂、スコリア）			内	7.5YR8/6浅黄橙色
器種	甕		焼成	良好		器厚	0.4				時期	９Ｃ後半～10Ｃ前半	
残存	20％		黒斑		底部						備考	内面コゲ	

図	27	32	遺構	23次RA061	寸法	口径	(14.0)	調整	外	回転ナデ	色調	外	5YR7/6橙色
写真	34	85	位置	カマド		底径	−		内	回転ナデ		断	7.5YR7/4にぶい橙色
種別	土師器		層位	直上		器高	(3.7)	胎土	精良（スコリア）			内	7.5YR6/6橙色
器種	甕		焼成	良好		器厚	0.4				時期	９Ｃ後半～10Ｃ前半	
残存	15％		黒斑		底部						備考		

図	27	33	遺構	23次RA061	寸法	口径	(14.2)	調整	外	回転ナデ	色調	外	7.5YR8/6浅黄橙色
写真	34	86	位置	カマド		底径	−		内	回転ナデ		断	7.5YR7/4にぶい橙色
種別	土師器		層位	直上		器高	(3.5)	胎土	精良（白色砂、石英）			内	7.5YR7/6橙色
器種	甕		焼成	良好		器厚	0.45				時期	９Ｃ後半～10Ｃ前半	
残存	10％		黒斑		底部						備考	穿孔あり	

図	27	34	遺構	23次RA061	寸法	口径	(14.2)	調整	外	回転ナデ	色調	外	7.5YR6/6橙色
写真	34	89	位置	東西ベルト		底径	−		内	回転ナデ		断	7.5YR5/4にぶい褐色
種別	土師器		層位	下層		器高	(6.1)	胎土	精良（白色砂）			内	7.5YR6/6橙色
器種	甕		焼成	非常に良好		器厚	0.4				時期	９Ｃ後半～10Ｃ前半	
残存	10％		黒斑		底部						備考	外面スス、内面コゲ	

図	27	35	遺構	23次RA061	寸法	口径	(16.7)	調整	外	回転ナデ	色調	外	7.5YR8/4浅黄橙色
写真	34	87	位置	南北ベルト		底径	−		内	回転ナデ		断	7.5YR8/4浅黄橙色
種別	土師器		層位	下層		器高	(6.3)	胎土	精良（白色砂、石英）			内	7.5YR8/4浅黄橙色
器種	甕		焼成	やや不良		器厚	0.6				時期	９Ｃ後半～10Ｃ前半	
残存	20％		黒斑		底部						備考		

図	27	36	遺構	23次RA061	寸法	口径	(22.4)	調整	外	回転ナデ	色調	外	7.5YR7/4にぶい橙色
写真	34	82	位置	カマド袖内		底径	−		内	回転ナデ		断	7.5YR8/4浅黄橙色
種別	土師器		層位			器高	(3.9)	胎土	精良（白色砂、スコリア）			内	5YR7/6橙色
器種	甕		焼成	良好		器厚	0.7				時期	９Ｃ後半～10Ｃ前半	
残存	15％		黒斑		底部						備考	外面スス	

図	27	37	遺構	23次RA061	寸法	口径	(20.4)	調整	外	回転ナデ、ヘラケズリ（タテ）	色調	外	7.5YR7/4にぶい橙色
写真	35	94	位置	カマド直上、北西埋土上層、南西埋土上層		底径	−		内	回転ナデ		断	7.5YR7/3にぶい橙色
種別	土師器		層位			器高	(13.6)	胎土	精良（白色砂、石英）			内	7.5YR7/6橙色
器種	甕		焼成	良好		器厚	0.8				時期	９Ｃ後半～10Ｃ前半	
残存	30％		黒斑		底部						備考		

図	27	38	遺構	23次RA061	寸法	口径	(21.0)	調整	外	回転ナデ	色調	外	7.5YR6/6橙色
写真	34	80	位置	南東		底径	−		内	回転ナデ		断	7.5YR7/6橙色
種別	土師器		層位	埋土下層		器高	(9.7)	胎土	精良（白色砂、スコリア）			内	7.5YR7/6橙色
器種	甕		焼成	やや不良		器厚	0.6				時期	９Ｃ後半～10Ｃ前半	
残存	20％		黒斑		底部						備考		

図	26	39	遺構	23次RA061	寸法	口径	(17.4)	調整	外	回転ナデ	色調	外	5YR6/8橙色
写真	34	84	位置			底径	−		内	回転ナデ		断	7.5YR7/6橙色
種別	土師器		層位			器高	(10.7)	胎土	精良（白色砂多量）			内	5YR7/8橙色
器種	甕		焼成	良好		器厚	0.6				時期	９Ｃ後半～10Ｃ前半	
残存	30%		黒斑		底部						備考		

図	27	40	遺構	23次RA061	寸法	口径	(20.6)	調整	外	回転ナデ、ヘラケズリ（タテ）、ユビオサエ	色調	外	7.5YR7/4にぶい橙色
写真	35	95	位置	床直、カマド直上、カマド埋土		底径	−		内	回転ナデ、ユビオサエ		断	7.5YR7/6橙色
種別	土師器		層位			器高	(21.4)	胎土	粗（白色砂、石英）			内	7.5YR7/6橙色
器種	甕		焼成	良好		器厚	0.8				時期	９Ｃ後半～10Ｃ前半	
残存	30％		黒斑		底部						備考		

第１表　遺物観察表（６）RA061住居跡

図	27	41	遺構	23次RA061	寸法	口径	(21.3)	調整	外	回転ナデ	色調	外	7.5YR7/4にぶい橙色
写真	34	88	位置			底径	–		内	回転ナデ		断	7.5YR6/3にぶい褐色
種別	土師器		層位			器高	(4.7)	胎土	非常に精良（白色砂）			内	7.5YR6/4にぶい橙色
器種	甕		焼成	良好		器厚	0.7				時期	９Ｃ後半～10Ｃ前半	
残存	20％		黒斑		底部						備考		

図	27	42	遺構	23次RA061	寸法	口径	(20.4)	調整	外	回転ナデ	色調	外	10YR8/4浅黄橙色
写真	34	81	位置	北東		底径	–		内	回転ナデ		断	10YR8/4浅黄橙色
種別	土師器		層位	埋土下層		器高	(3.65)	胎土	精良（石英、白色砂）			内	10YR8/4浅黄橙色
器種	甕		焼成	やや不良		器厚	0.5				時期	９Ｃ後半～10Ｃ前半	
残存	10%		黒斑		底部						備考		

図	27	43	遺構	23次RA061	寸法	口径	–	調整	外	ヘラケズリ（不定）	色調	外	7.5YR7/4にぶい橙色
写真	34	91	位置			底径	(8.8)		内	ナデ		断	7.5YR7/4にぶい橙色
種別	土師器		層位			器高	(5.7)	胎土	精良（白色砂）			内	7.5YR7/4にぶい橙色
器種	甕		焼成	やや不良		器厚	1.25				時期	９Ｃ後半～10Ｃ前半	
残存	20％		黒斑		底部						備考		

図	27	44	遺構	23次RA061	寸法	口径	–	調整	外	ヘラケズリ（タテ）	色調	外	10YR3/2黒褐色
写真	35	100	位置			底径	12.0		内	ハケ（ヨコ）		断	10YR5/3にぶい黄褐色
種別	土師器		層位			器高	(4.2)	胎土	粗（白色砂、石英）			内	10YR3/1黒褐色
器種	甕		焼成	良好		器厚	0.7				時期	９Ｃ後半～10Ｃ前半	
残存	20％		黒斑	底部	底部	木葉痕					備考		

図	27	45	遺構	23次RA061	寸法	口径	(20.0)	調整	外	回転ナデ	色調	外	10YR6/4にぶい黄橙色
写真	34	79	位置			底径	–		内	ミガキ（ヨコ）		断	10YR6/1褐灰色
種別	土師器		層位	貼床		器高	(7.1)	胎土	精良（雲母多量）			内	10YR3/1黒褐色
器種	鉢		焼成	良好		器厚	0.7				時期	９Ｃ後半～10Ｃ前半	
残存	20％		黒斑		底部						備考		

図	27	46	遺構	23次RA061	寸法	口径	(10.4)	調整	外	回転ナデ	色調	外	7.5YR7/4にぶい橙色
写真	34	90	位置	カマド		底径	–		内	回転ナデ		断	7.5YR7/6橙色
種別	土師器		層位	直上		器高	(2.8)	胎土	精良（石英）			内	7.5YR7/6橙色
器種	甕		焼成	やや不良		器厚	0.4				時期	９Ｃ後半～10Ｃ前半	
残存	15％		黒斑		底部						備考		

図	27	47	遺構	23次RA061	寸法	口径	–	調整	外	ヘラケズリ（不定）	色調	外	5YR6/6橙色
写真	35	102	位置	北東埋土下層、RA062南カマド脇土坑		底径	(6.4)		内	回転ナデ		断	7.5YR7/4にぶい橙色
種別	土師器		層位			器高	(4.7)	胎土	精良（白色砂）			内	7.5YR7/4にぶい橙色
器種	甕		焼成	良好		器厚	0.5				時期	９Ｃ後半～10Ｃ前半	
残存	10％		黒斑		底部	回転糸切り後無調整					備考		

図	27	48	遺構	23次RA061	寸法	口径	–	調整	外	ヘラケズリ（不定）	色調	外	7.5YR5/2灰褐色
写真	35	101	位置			底径	8.0		内	回転ナデ		断	10YR4/1褐灰色
種別	土師器		層位	貼床		器高	(7.1)	胎土	精良（石英）			内	5YR7/6橙色
器種	甕		焼成	良好		器厚	0.7				時期	９Ｃ後半～10Ｃ前半	
残存	10％		黒斑		底部	回転糸切り後無調整					備考	内面コゲ（喫水線）	

図	27	49	遺構	23次RA061	寸法	口径	–	調整	外	回転ナデ	色調	外	10YR7/4にぶい黄橙色
写真	35	99	位置	カマド直上、カマド埋土		底径	(7.6)		内	回転ナデ		断	7.5YR7/4にぶい橙色
種別	土師器		層位			器高	(2.3)	胎土	精良（白色砂、石英）			内	7.5YR6/6橙色
器種	甕		焼成	良好		器厚	0.6				時期	９Ｃ後半～10Ｃ前半	
残存	5％		黒斑		底部	回転糸切り後無調整					備考		

図	27	50	遺構	23次RA061	寸法	口径	–	調整	外	ヘラケズリ（不定）	色調	外	5YR5/6明赤褐色
写真	34	93	位置			底径	(10.2)		内	ナデ		断	5YR6/6橙色
種別	土師器		層位	貼床		器高	(2.0)	胎土	精良（白色砂、石英）			内	5YR6/6橙色
器種	甕		焼成	良好		器厚	1.1				時期	９Ｃ後半～10Ｃ前半	
残存	10％		黒斑	底部	底部	木葉痕					備考		

図	27	51	遺構	23次RA061	寸法	口径	–	調整	外	ヘラケズリ（不定）	色調	外	7.5YR5/3にぶい褐色
写真	34	92	位置	貼床、北西埋土下層		底径	(13.0)		内	ナデ		断	7.5YR8/4浅黄橙色
種別	土師器		層位			器高	(4.6)	胎土	精良（白色砂）			内	7.5YR6/4にぶい橙色
器種	甕		焼成	良好		器厚	0.7				時期	９Ｃ後半～10Ｃ前半	
残存	10％		黒斑		底部	砂底					備考		

図	27	52	遺構	23次RA061	寸法	口径	–	調整	外	ヘラケズリ（不定）	色調	外	N6/0灰色
写真	35	98	位置			底径	(10.9)		内	ハケ（ヨコ）		断	7.5Y7/1灰白色
種別	須恵器		層位	床面直上		器高	(3.3)	胎土	精良（白色砂）			内	10Y7/1灰白色
器種	甕？		焼成	非常に良好		器厚	0.65				時期	９Ｃ後半～10Ｃ前半	
残存	15％		黒斑		底部						備考		

図	27	53	遺構	23次RA061	寸法	口径	–	調整	外	回転ナデ、回転ヘラケズリ	色調	外	5YR5/1褐灰色
写真	35	103	位置	南東隅		底径	7.8		内	回転ナデ		断	5YR7/4にぶい橙色
種別	須恵器		層位			器高	(17.7)	胎土	非常に精良（白色砂、			内	10YR5/2灰黄褐色
器種	長頸壺		焼成	やや不良		器厚	1.0		石英）		時期	９Ｃ後半～10Ｃ前半	
残存	65％		黒斑		底部	切り離し後高台貼り付け					備考		

図	27	54	遺構	23次RA061	寸法	口径	(16.5)	調整	外	回転ナデ、ヘラケズリ（タテ）	色調	外	7.5YR6/6橙色
写真	35	96	位置	カマド袖内及び燃焼部、北東隅埋土下層		底径	–		内	回転ナデ、ミガキ		断	10YR6/3にぶい黄橙色
種別	土師器		層位			器高	(26.7)	胎土	非常に精良（白色砂、			内	7.5YR2/1黒色
器種	壷		焼成	良好		器厚	0.6		石英）		時期	９Ｃ後半～10Ｃ前半	
残存	40％		黒斑		底部						備考		

図	28	55	遺構	23次RA061	寸法	口径	–	調整	外	回転ナデ	色調	外	7.5YR6/4にぶい橙色
写真	33	77	位置	北東		底径	5.0		内	ミガキ		断	7.5YR5/1褐灰色
種別	土師器		層位	埋土下層		器高	(2.3)	胎土	精良（雲母多量）			内	7.5YR5/1褐灰色
器種	坏		焼成	良好		器厚	0.3				時期	９Ｃ後半～10Ｃ前半	
残存	25％		黒斑		底部	回転糸切り後無調整					備考		

第１表　遺物観察表（７）RA061・062住居跡

図	28	56	遺構	23次RA061	寸法	口径	－	調整	外	回転ナデ	色調	外	7.5YR7/4にぶい橙色
写真	32	56	位置	南東		底径	5.5		内	回転ナデ		断	7.5YR6/3にぶい褐色
種別	土師器		層位	埋土下層		器高	(2.7)	胎土	非常に精良（白色砂、石英）			内	7.5YR6/4にぶい橙色
器種	坏		焼成	やや不良		器厚	0.6				時期	９Ｃ後半～10Ｃ前半	
残存	30%		黒斑		底部	回転糸切り後無調整					備考		

図	28	57	遺構	23次RA061	寸法	口径	－	調整	外	回転ナデ	色調	外	10YR8/4浅黄橙色
写真	32	54	位置	カマド袖内及び燃焼部		底径	5.5		内	回転ナデ		断	10YR7/3にぶい黄橙色
種別	土師器		層位			器高	(3.0)	胎土	精良（白色砂）			内	10YR7/4にぶい黄橙色
器種	坏		焼成	やや不良		器厚	0.5				時期	９Ｃ後半～10Ｃ前半	
残存	30％		黒斑		底部	回転糸切り後無調整					備考		

図	28	58	遺構	23次RA061	寸法	口径	－	調整	外	回転ナデ	色調	外	7.5YR6/4にぶい橙色
写真	33	78	位置	北東隅		底径	(4.6)		内	回転ナデ		断	5YR5/6明赤褐色
種別	土師器		層位	埋土下層		器高	(1.1)	胎土	精良（白色砂）			内	7.5YR6/4にぶい橙色
器種	坏		焼成	非常に良好		器厚	0.5				時期	９Ｃ後半～10Ｃ前半	
残存	20％		黒斑		底部	回転糸切り後無調整					備考		

図	28	59	遺構	23次RA061	寸法	口径	－	調整	外	回転ナデ	色調	外	7.5YR8/4浅黄橙色
写真	33	75	位置	カマド袖内及び燃焼部		底径	(5.2)		内	回転ナデ		断	7.5YR8/6浅黄橙色
種別	土師器		層位			器高	(1.0)	胎土	精良（白色砂）			内	7.5YR8/6浅黄橙色
器種	坏		焼成	良好		器厚	0.65				時期		
残存	20％		黒斑		底部	回転糸切り後無調整					備考		

図	28	60	遺構	23次RA061	寸法	口径	15.8	調整	外	回転ナデ	色調	外	7.5YR7/6橙色
写真	30	39	位置	北西		底径	7.25		内	ミガキ		断	10YR5/1褐灰色
種別	土師器		層位			器高	6.6	胎土	精良（石英）			内	10YR2/1黒色
器種	坏		焼成	良好		器厚	0.5				時期	９Ｃ後半～10Ｃ前半	
残存	100％		黒斑		底部	切り離し後高台貼り付け					備考		

図	28	61	遺構	23次RA061	寸法	口径	(15.7)	調整	外	回転ナデ	色調	外	7.5YR7/4にぶい橙色
写真	32	53	位置	北東隅埋土下層、北東埋土上層		底径	－		内	回転ナデ		断	10YR7/2にぶい黄橙色
種別	土師器		層位			器高	(5.0)	胎土	精良（白色砂、スコリア、雲母）			内	10YR6/3にぶい黄橙色
器種	坏		焼成	良好		器厚	0.7				時期	９Ｃ後半～10Ｃ前半	
残存	30％		黒斑		底部	高台有？					備考	墨付き	

図	27	62	遺構	23次RA061	寸法	口径	(16.6)	調整	外	回転ナデ	色調	外	5YR7/8橙色
写真	33	72	位置	北西隅西壁に貼り付いた土器		底径	－		内	回転ナデ		断	5YR6/6橙色
種別	土師器		層位			器高	(4.75)	胎土	精良（白色砂、スコリア）			内	5YR7/6橙色
器種	坏		焼成	やや不良		器厚	0.55				時期	９Ｃ後半～10Ｃ前半	
残存	25％		黒斑		底部						備考		

図	28	63	遺構	23次RA061	寸法	口径	(15.6)	調整	外	回転ナデ	色調	外	5YR7/6橙色
写真	33	69	位置			底径	－		内	回転ナデ		断	7.5YR7/4にぶい橙色
種別	土師器		層位	貼床		器高	(4.8)	胎土	やや粗（白色砂）			内	5YR7/6橙色
器種	坏		焼成	良好		器厚	0.45				時期	９Ｃ後半～10Ｃ前半	
残存	25％		黒斑		底部						備考		

図	28	64	遺構	23次RA061	寸法	口径	(17.6)	調整	外	回転ナデ	色調	外	7.5YR6/4にぶい橙色
写真	32	61	位置	カマド		底径	－		内	回転ナデ		断	7.5YR7/4にぶい橙色
種別	土師器		層位	直上		器高	4.2	胎土	精良（白色砂、スコリア）			内	7.5YR7/4にぶい橙色
器種	坏		焼成	良好		器厚	0.5				時期	９Ｃ後半～10Ｃ前半	
残存	40％		黒斑		底部						備考		

図	28	65	遺構	23次RA061	寸法	口径	(14.2)	調整	外	回転ナデ	色調	外	5YR6/8橙色
写真	33	66	位置	カマド袖内		底径	－		内	回転ナデ		断	5YR6/6橙色
種別	土師器		層位			器高	(4.2)	胎土	精良（白色砂、石英）			内	5YR6/8橙色
器種	坏		焼成	良好		器厚	0.4				時期	９Ｃ後半～10Ｃ前半	
残存	20％		黒斑		底部						備考		

図	28	66	遺構	23次RA061	寸法	口径	(15.6)	調整	外	回転ナデ	色調	外	5YR7/6橙色
写真	32	59	位置	カマド直上、北東埋土下層、RA062南カマド脇土坑		底径	－		内	回転ナデ		断	7.5YR8/4浅黄橙色
種別	土師器		層位			器高	(4.45)	胎土	精良（白色砂）			内	7.5YR8/4浅黄橙色
器種	坏		焼成	良好		器厚	0.5				時期	９Ｃ後半～10Ｃ前半	
残存	35％		黒斑		底部						備考		

図	28	67	遺構	23次RA061	寸法	口径	(15.4)	調整	外	回転ナデ	色調	外	7.5YR7/3にぶい橙色
写真	33	67	位置	北東		底径	－		内	回転ナデ		断	7.5YR8/4浅黄橙色
種別	土師器		層位	埋土下層		器高	(4.8)	胎土	非常に精良（白色砂）			内	7.5YR7/3にぶい橙色
器種	坏		焼成	やや不良		器厚	0.65				時期	９Ｃ後半～10Ｃ前半	
残存	20％		黒斑		底部						備考		

図	28	68	遺構	23次RA061	寸法	口径	－	調整	外	回転ナデ	色調	外	10YR4/2灰黄褐色
写真	35	97	位置			底径	4.8		内	回転ナデ		断	10YR4/2灰黄褐色
種別	土師器		層位			器高	(2.0)	胎土	精良（白色砂、石英）			内	10YR4/1褐灰色
器種	耳皿		焼成	良好		器厚	(0.9)				時期	９Ｃ後半～10Ｃ前半	
残存	50％		黒斑		底部	回転糸切り後無調整					備考		

図	32	1	遺構	23次RA062	寸法	口径	14.2	調整	外	回転ナデ	色調	外	10YR6/4にぶい黄橙色
写真	36	104	位置	床面直上、南カマド脇土坑、南北ベルト下層		底径	7.0		内	ミガキ		断	10YR5/1褐灰色
種別	土師器		層位			器高	4.65	胎土	精良（白色砂、雲母）			内	10YR2/1黒色
器種	坏		焼成	良好		器厚	0.5				時期	９Ｃ後半～10Ｃ前半	
残存	75％		黒斑	底部	底部	回転糸切り後無調整					備考	口縁部にタール付着	

図	32	2	遺構	23次RA062	寸法	口径	(13.8)	調整	外	回転ナデ	色調	外	10YR7/4にぶい黄橙色
写真	36	105	位置	床下落ち込み（北端）		底径	6.0		内	ミガキ		断	10YR7/1灰白色
種別	土師器		層位			器高	4.5	胎土	やや粗（白色砂、石英）			内	10YR2/1黒色
器種	坏		焼成	良好		器厚	0.6				時期	９Ｃ後半～10Ｃ前半	
残存	70%		黒斑		底部	回転糸切り後無調整					備考		

第１表　遺物観察表（８）RA062住居跡

図	32	3	遺構	23次RA062	寸法	口径	13.8	調整	外	回転ナデ	色調	外	5YR7/6橙色
写真	36	106	位置	南東埋土、北東埋土中層、東北ベルト埋土中層		底径	5.9		内	回転ナデ		断	7.5YR6/4にぶい橙色
種別	土師器		層位			器高	4.75	胎土	非常に精良（白色砂）			内	7.5YR7/6橙色
器種	坏		焼成	良好		器厚	0.55				時期	９Ｃ後半～10Ｃ前半	
残存	45％		黒斑		底部	回転糸切り後無調整					備考	墨書「？」	

図	32	4	遺構	23次RA062	寸法	口径	(14.4)	調整	外	回転ナデ	色調	外	5YR6/6橙色
写真	36	107	位置	貼床、南カマド脇土坑		底径	(5.4)		内	回転ナデ		断	5YR6/6橙色
種別	土師器		層位			器高	(4.35)	胎土	精良（白色砂、スコリア）			内	5YR6/6橙色
器種	坏		焼成	良好		器厚	0.4				時期	９Ｃ後半～10Ｃ前半	
残存	50％		黒斑		底部	回転糸切り後無調整					備考		

図	32	5	遺構	23次RA062	寸法	口径	(13.9)	調整	外	回転ナデ	色調	外	10YR4/2灰黄褐色
写真	36	113	位置	カマド		底径	–		内	ミガキ		断	10YR6/3にぶい黄橙色
種別	土師器		層位	埋土		器高	(3.75)	胎土	精良（雲母多量）			内	10YR2/1黒色
器種	坏		焼成	良好		器厚	0.4				時期	９Ｃ後半～10Ｃ前半	
残存	10％		黒斑		底部						備考		

図	32	6	遺構	23次RA062	寸法	口径	(13.0)	調整	外	回転ナデ	色調	外	7.5YR7/4にぶい橙色
写真	36	116	位置	南カマド燃焼部		底径	–		内	回転ナデ		断	7.5YR6/2灰褐色
種別	土師器		層位			器高	(4.2)	胎土	精良（白色砂）			内	7.5YR7/4にぶい橙色
器種	坏		焼成	良好		器厚	0.5				時期	９Ｃ後半～10Ｃ前半	
残存	20％		黒斑		底部						備考		

図	32	7	遺構	23次RA062	寸法	口径	(13.7)	調整	外	回転ナデ	色調	外	5YR6/6橙色
写真	36	115	位置	カマド燃焼部埋土		底径	–		内	回転ナデ		断	7.5YR6/4にぶい橙色
種別	土師器		層位			器高	(3.9)	胎土	精良（白色砂、スコリア）			内	7.5YR6/4にぶい橙色
器種	坏		焼成	良好		器厚	0.45				時期	９Ｃ後半～10Ｃ前半	
残存	20％		黒斑		底部						備考		

図	32	8	遺構	23次RA062	寸法	口径	(16.2)	調整	外	回転ナデ	色調	外	7.5YR8/6浅黄橙色
写真	36	112	位置	カマド北袖脇		底径	–		内	回転ナデ		断	7.5YR8/4浅黄橙色
種別	土師器		層位	埋土		器高	(4.0)	胎土	精良（白色砂、雲母）			内	7.5YR8/4浅黄橙色
器種	坏		焼成	良好		器厚	0.35				時期	９Ｃ後半～10Ｃ前半	
残存	20％		黒斑		底部						備考	焼けひずみ	

図	32	9	遺構	23次RA062	寸法	口径	(14.8)	調整	外	回転ナデ	色調	外	5YR7/6橙色
写真	36	114	位置	北東		底径	–		内	回転ナデ		断	7.5YR7/3にぶい橙色
種別	土師器		層位	埋土下層		器高	(4.1)	胎土	精良（白色砂、石英）			内	7.5YR7/4にぶい橙色
器種	坏		焼成	やや不良		器厚	0.45				時期	９Ｃ後半～10Ｃ前半	
残存	15%		黒斑		底部						備考		

図	32	10	遺構	23次RA062	寸法	口径	(14.1)	調整	外	回転ナデ	色調	外	10YR6/3にぶい黄橙色
写真	36	111	位置	南カマド脇土坑		底径	–		内	ミガキ		断	10YR5/2灰黄褐色
種別	土師器		層位			器高	(4.2)	胎土	精良（雲母多量）			内	10YR2/1黒色
器種	坏		焼成	良好		器厚	0.35				時期	９Ｃ後半～10Ｃ前半	
残存	15%		黒斑		底部						備考		

図	32	11	遺構	23次RA062	寸法	口径	(14.4)	調整	外	回転ナデ	色調	外	5YR6/6橙色
写真	36	108	位置	貼床、南カマド脇土坑		底径	–		内	回転ナデ		断	5YR7/4にぶい橙色
種別	土師器		層位			器高	(4.2)	胎土	精良（白色砂）			内	5YR7/6橙色
器種	坏		焼成	良好		器厚	0.5				時期	９Ｃ後半～10Ｃ前半	
残存	30％		黒斑		底部	回転糸切り後無調整					備考		

図	32	12	遺構	23次RA062	寸法	口径	(15.6)	調整	外	回転ナデ	色調	外	7.5YR6/4にぶい橙色
写真	36	117	位置	カマド燃焼部埋土、カマド埋土		底径	–		内	ミガキ		断	10YR6/2灰黄褐色
種別	土師器		層位			器高	(4.1)	胎土	精良（雲母）			内	10YR2/1黒色
器種	坏		焼成	良好		器厚	0.35				時期	９Ｃ後半～10Ｃ前半	
残存	20％		黒斑		底部						備考	刻書「吉」逆位	

図	32	13	遺構	23次RA062	寸法	口径	–	調整	外	ヘラケズリ（タテ）	色調	外	10YR5/3にぶい黄褐色
写真	37	129	位置	貼床、カマド北袖脇埋土、カマド埋土		底径	(10.2)		内	ハケ（ヨコ）		断	10YR7/4にぶい黄橙色
種別	土師器		層位			器高	(4.6)	胎土	粗（白色砂、石英）			内	10YR5/3にぶい黄褐色
器種	甕		焼成	良好		器厚	0.6				時期	９Ｃ後半～10Ｃ前半	
残存	15％		黒斑	底部	底部						備考		

図	32	14	遺構	23次RA062	寸法	口径	–	調整	外	回転ナデ	色調	外	10YR4/2灰黄褐色
写真	36	109	位置	南		底径	(7.2)		内	ミガキ（ヨコ）		断	10YR5/1褐灰色
種別	土師器		層位	下層		器高	(2.4)	胎土	精良（雲母多量）			内	10YR3/1黒褐色
器種	坏		焼成	良好		器厚	0.6				時期	９Ｃ後半～10Ｃ前半	
残存	25%		黒斑		底部	回転糸切り後無調整					備考		

図	32	15	遺構	23次RA062	寸法	口径	(11.6)	調整	外	回転ナデ	色調	外	10YR6/3にぶい黄橙色
写真	36	118	位置	北西		底径	–		内	ミガキ		断	10YR6/1褐灰色
種別	土師器		層位	埋土中層		器高	(4.05)	胎土	精良（白色砂、雲母）			内	10YR2/1黒色
器種	高台付坏		焼成	良好		器厚	0.5				時期	９Ｃ後半～10Ｃ前半	
残存	20％		黒斑		底部	高台貼り付け					備考	刻書「吉」	

図	32	16	遺構	23次RA062	寸法	口径	–	調整	外	回転ナデ	色調	外	10YR6/3にぶい黄橙色
写真	36	110	位置	南		底径	5.5		内	ミガキ		断	10YR4/1褐灰色
種別	土師器		層位	下層		器高	(1.5)	胎土	精良（雲母多量）			内	10YR3/1黒褐色
器種	坏		焼成	良好		器厚	0.6				時期	９Ｃ後半～10Ｃ前半	
残存	25％		黒斑	底部	底部	回転糸切り後無調整					備考	刻書	

図	32	17	遺構	23次RA062	寸法	口径	–	調整	外	回転ヘラケズリ	色調	外	5BG4/1暗青灰色
写真	37	120	位置	カマド燃焼部		底径	(12.0)		内	回転ナデ		断	5YR4/3にぶい赤褐色
種別	須恵器		層位	埋土		器高	(4.1)	胎土	非常に精良（白色砂）			内	7.5YR5/3にぶい褐色
器種	壺		焼成	良好		器厚	(1.2)				時期	９Ｃ後半～10Ｃ前半	
残存	15％		黒斑		底部	高台貼り付け					備考		

第１表　遺物観察表（９）RA062・064住居跡

図	32	18	遺構	23次RA062	寸法	口径	—	調整	外	タタキ	色調	外	7.5YR7/4にぶい橙色
写真	37	122	位置	カマド埋土、南下層		底径	(7.8)		内	ハケ（ヨコ）		断	7.5YR7/4にぶい橙色
種別	土師器		層位			器高	(3.6)	胎土	精良（石英）			内	7.5YR6/3にぶい褐色
器種	甕		焼成	良好		器厚	0.7				時期	９Ｃ後半～10Ｃ前半	
残存	10％		黒斑		底部	砂底					備考		

図	32	19	遺構	23次RA062	寸法	口径	(12.2)	調整	外	ヘラケズリ（タテ）	色調	外	7.5YR6/4にぶい橙色
写真	37	128	位置	貼床、RA061東西ベルト下層		底径	—		内	ハケ（ヨコ）		断	7.5YR5/4にぶい褐色
種別	土師器		層位			器高	(5.3)	胎土	精良（白色砂、石英）			内	7.5YR5/4にぶい褐色
器種	甕		焼成	非常に良好		器厚	0.7				時期	９Ｃ後半～10Ｃ前半	
残存	10％		黒斑		底部						備考		

図	32	20	遺構	23次RA062	寸法	口径	(14.9)	調整	外	回転ナデ	色調	外	7.5YR7/6橙色
写真	37	127	位置			底径	—		内	回転ナデ		断	7.5YR8/6浅黄橙色
種別	土師器		層位	床面直上		器高	(4.7)	胎土	精良（白色砂、石英）			内	7.5YR8/6浅黄橙色
器種	甕		焼成	やや不良		器厚	0.5				時期	９Ｃ後半～10Ｃ前半	
残存	10％		黒斑		底部						備考		

図	32	21	遺構	23次RA062	寸法	口径	—	調整	外	—	色調	外	7.5YR7/4にぶい橙色
写真	37	121	位置			底径	(9.4)		内	ナデ		断	7.5YR7/2明褐灰色
種別	土師器		層位	床直		器高	(1.8)	胎土	精良（白色砂、石英）			内	5YR7/6橙色
器種	甕		焼成	良好		器厚	0.85				時期	９Ｃ後半～10Ｃ前半	
残存	30％		黒斑		底部						備考		

図	32	22	遺構	23次RA062	寸法	口径	(19.6)	調整	外	回転ナデ	色調	外	7.5YR6/4にぶい橙色
写真	37	124	位置	南カマド煙道		底径	—		内	ハケ（不定）		断	5YR6/6橙色
種別	土師器		層位			器高	(11.5)	胎土	精良（白色砂）			内	7.5YR5/3にぶい褐色
器種	甕		焼成	良好		器厚	0.7				時期	９Ｃ後半～10Ｃ前半	
残存	30％		黒斑		底部						備考	外面にスス	

図	32	23	遺構	23次RA062	寸法	口径	(22.4)	調整	外	回転ナデ、ヘラケズリ	色調	外	7.5YR7/4にぶい橙色
写真	37	123	位置	貼床、カマド袖構築土、南下層		底径	—		内	回転ナデ		断	10YR5/3にぶい黄褐色
種別	土師器		層位			器高	(14.7)	胎土	精良（白色砂、雲母）			内	10YR5/3にぶい黄褐色
器種	甕		焼成	良好		器厚	0.8				時期	９Ｃ後半～10Ｃ前半	
残存	20％		黒斑		底部						備考		

図	32	24	遺構	23次RA062	寸法	口径	(13.5)	調整	外	回転ナデ	色調	外	7.5YR6/6橙色
写真	37	130	位置	貼床、カマド埋土、南下層、東西ベルト		底径	7.7		内	回転ナデ		断	7.5YR6/4にぶい橙色
種別	土師器		層位			器高	14.25	胎土	精良（白色砂、石英）			内	5YR6/6橙色
器種	甕		焼成	良好		器厚	0.6				時期	９Ｃ後半～10Ｃ前半	
残存	40％		黒斑		底部	回転糸切り？					備考	内面にコゲ	

図	32	25	遺構	23次RA062	寸法	口径	(17.2)	調整	外	ヘラケズリ（タテ）	色調	外	7.5YR7/6橙色
写真	37	119	位置	貼床、床下落ち込み（西端）		底径	—		内	ハケ（ヨコ）		断	7.5YR7/4にぶい橙色
種別	土師器		層位			器高	(21.5)	胎土	やや粗（白色砂、その他）			内	7.5YR7/4にぶい橙色
器種	甕		焼成	良好		器厚	0.8				時期	９Ｃ後半～10Ｃ前半	
残存	35％		黒斑		底部						備考		

図	32	26	遺構	23次RA062	寸法	口径	2.0	調整	外	回転ナデ、ヘラケズリ（タテ）	色調	外	7.5YR8/4浅黄橙色
写真	37	126	位置	南カマド燃焼部、RA061北東隅埋土下層		底径			内	回転ナデ		断	7.5YR8/4浅黄橙色
種別	土師器		層位			器高		胎土	精良（白色砂、石英、スコリア）			内	7.5YR8/4浅黄橙色
器種	甕		焼成	やや不良		器厚					時期	９Ｃ後半～10Ｃ前半	
残存	30％		黒斑		底部						備考		

図	32	27	遺構	23次RA062	寸法	口径	(28.4)	調整	外	回転ナデ、ヘラケズリ（タテ）	色調	外	7.5YR7/4にぶい橙色
写真	37	125	位置	南西埋土上層、カマド埋土、南北ベルト下層		底径	—		内			断	7.5YR7/2明褐灰色
種別	土師器		層位			器高	(12.5)	胎土	やや粗（白色砂）			内	5YR7/6橙色
器種	甕		焼成	良好		器厚	0.85				時期	９Ｃ後半～10Ｃ前半	
残存	30％		黒斑		底部						備考	外面にスス、内面にコゲ	

図	35	1	遺構	23次RA064	寸法	口径	(14.8)	調整	外	回転ナデ	色調	外	7.5YR7/4にぶい橙色
写真	38	131	位置	北端		底径	6.1		内	ミガキ		断	10YR5/1褐灰色
種別	土師器		層位	床面直上		器高	5.3	胎土	精良（雲母、石英）			内	10YR2/1黒色
器種	甕		焼成	良好		器厚	0.6				時期	９Ｃ後半～10Ｃ前半	
残存	45％		黒斑		底部	回転糸切り後無調整					備考		

図	35	2	遺構	23次RA064	寸法	口径	(14.6)	調整	外	回転ナデ	色調	外	5YR6/8橙色
写真	38	135	位置	南東カクラン		底径	5.2		内	回転ナデ		断	5YR6/8橙色
種別	土師器		層位			器高	4.8	胎土	精良（白色砂、石英、スコリア）			内	5YR6/8橙色
器種	坏		焼成	やや不良		器厚	0.4				時期	９Ｃ後半～10Ｃ前半	
残存	40%		黒斑		底部	回転糸切り後無調整					備考		

図	35	3	遺構	23次RA064	寸法	口径	(15.0)	調整	外	回転ナデ	色調	外	7.5YR7/6橙色
写真	38	140	位置	床面直上、貼床、南西埋土		底径	(6.4)		内	ミガキ		断	7.5YR8/8黄橙色
種別	土師器		層位			器高	(6.4)	胎土	精良（石英）			内	10YR2/1黒色
器種	坏		焼成	やや不良		器厚	0.6				時期	９Ｃ後半～10Ｃ前半	
残存	40％		黒斑		底部	回転糸切り後無調整					備考	No135と接合	

図	35	4	遺構	23次RA064	寸法	口径	(16.0)	調整	外	回転ナデ	色調	外	7.5YR7/6橙色
写真	38	136	位置	RA059と埋土重複、貼床、北西埋土		底径	(6.0)		内	回転ナデ		断	7.5YR7/6橙色
種別	土師器		層位			器高	(4.7)	胎土	やや粗（白色砂）			内	7.5YR7/6橙色
器種	坏		焼成	やや不良		器厚	0.4				時期	９Ｃ後半～10Ｃ前半	
残存	50％		黒斑		底部						備考		

図	35	5	遺構	23次RA064	寸法	口径	(13.9)	調整	外	回転ナデ	色調	外	10YR5/3にぶい黄褐色
写真	38	133	位置	東カマド煙出し		底径	6.0		内	ミガキ		断	10YR4/1褐灰色
種別	土師器		層位			器高	4.9	胎土	精良（雲母多量）			内	10YR2/1黒色
器種	坏		焼成	良好		器厚	0.4				時期	９Ｃ後半～10Ｃ前半	
残存	70%		黒斑		底部	切り離し後ナデ					備考	刻書「春？」	

第１表　遺物観察表（10）RA064・070住居跡

図	35	6	遺構	23次RA064	寸法	口径	13.2	調整	外	回転ナデ	色調	外	7.5YR6/6橙色
写真	38	134	位置	カマド北脇		底径	5.4		内	回転ナデ		断	7.5YR7/6橙色
種別	土師器		層位			器高	4.3	胎土	精良（白色砂、石英）			内	7.5YR7/6橙色
器種	坏		焼成	やや不良		器厚	0.5				時期	９Ｃ後半～10Ｃ前半	
残存	65%		黒斑		底部	回転糸切り後無調整					備考		

図	35	7	遺構	23次RA064	寸法	口径	(13.6)	調整	外	回転ナデ	色調	外	10Y6/1灰色
写真	38	141	位置	北端		底径	(5.0)		内	回転ナデ		断	10Y5/1灰色
種別	須恵器		層位	床面直上		器高	4.8	胎土	精良（白色砂）			内	10Y6/1灰色
器種	坏		焼成	良好		器厚	0.5				時期	９Ｃ後半～10Ｃ前半	
残存	35％		黒斑		底部	回転糸切り後無調整					備考		

図	35	8	遺構	23次RA064	寸法	口径	14.4	調整	外	回転ナデ	色調	外	5YR5/4にぶい赤褐色
写真	38	132	位置	東カマド煙道		底径	5.7		内	回転ナデ		断	7.5YR6/4にぶい橙色
種別	土師器		層位	埋土		器高	5.0	胎土	精良（白色砂、石英）			内	7.5YR6/4にぶい橙色
器種	坏		焼成	良好		器厚	0.5				時期	９Ｃ後半～10Ｃ前半	
残存	75%		黒斑		底部	回転糸切り後無調整					備考		

図	35	9	遺構	23次RA064	寸法	口径	(15.4)	調整	外	回転ナデ	色調	外	10YR5/3にぶい黄褐色
写真	38	139	位置	南西埋土、埋土		底径	(6.8)		内	ミガキ		断	10YR7/3にぶい黄橙色
種別	土師器		層位			器高	5.2	胎土	精良（雲母多量）			内	10YR2/1黒色
器種	坏		焼成	良好		器厚	0.5				時期	９Ｃ後半～10Ｃ前半	
残存	35％		黒斑		底部	切り離し後ナデ					備考		

図	35	10	遺構	23次RA064	寸法	口径	(13.8)	調整	外	回転ナデ	色調	外	5YR6/8橙色
写真	39	144	位置	北端		底径	－		内	回転ナデ		断	5YR7/8橙色
種別	土師器		層位	床面直上		器高	(5.2)	胎土	精良（白色砂、石英）			内	5YR7/8橙色
器種	坏		焼成	やや不良		器厚	0.5				時期	９Ｃ後半～10Ｃ前半	
残存	30%		黒斑		底部						備考		

図	35	11	遺構	23次RA064	寸法	口径	(14.4)	調整	外	回転ナデ	色調	外	5YR7/6橙色
写真	39	146	位置			底径	－		内	回転ナデ		断	7.5YR6/6橙色
種別	土師器		層位	貼床		器高	(2.8)	胎土	精良（白色砂）			内	7.5YR6/6橙色
器種	坏		焼成	良好		器厚	0.4				時期	９Ｃ後半～10Ｃ前半	
残存	10％		黒斑		底部						備考		

図	35	12	遺構	23次RA064	寸法	口径	16.0	調整	外	回転ナデ	色調	外	5YR6/6橙色
写真	38	138	位置			底径	8.2		内	回転ナデ		断	5YR7/8
種別	土師器		層位	床面直上		器高	7.2	胎土	精良（白色砂、スコリア、石英）			内	－
器種	高台付坏		焼成	やや不良		器厚	0.4				時期	９Ｃ後半～10Ｃ前半	
残存	100％		黒斑		底部	切り離し後高台貼り付け					備考		

図	35	13	遺構	23次RA064	寸法	口径	－	調整	外		色調	外	
写真	39	147	位置	南西		底径	(5.0)		内			断	
種別	土師器		層位	埋土		器高	(2.9)	胎土				内	
器種	坏		焼成			器厚	0.55				時期	９Ｃ後半～10Ｃ前半	
残存	15％		黒斑		底部						備考	№129と接合	

図	35	14	遺構	23次RA064	寸法	口径	－	調整	外	ミガキ	色調	外	10YR2/1黒色
写真	39	142	位置	カクラン		底径	8.4		内	ミガキ		断	10YR4/1褐灰色
種別	土師器		層位			器高	(2.7)	胎土	非常に精良（雲母多量）			内	10YR2/1黒色
器種	埦		焼成	良好		器厚	0.4				時期	９Ｃ後半～10Ｃ前半	
残存	30％		黒斑		底部	切り離し後高台貼り付け					備考		

図	35	15	遺構	23次RA064	寸法	口径	(14.5)	調整	外	回転ナデ	色調	外	7.5YR6/6橙色
写真	39	143	位置	南東		底径	－		内	回転ナデ		断	7.5YR6/4にぶい橙色
種別	土師器		層位	埋土		器高	(4.0)	胎土	精良（白色砂、石英）			内	7.5YR7/4にぶい橙色
器種	甕		焼成	良好		器厚	0.4				時期	９Ｃ後半～10Ｃ前半	
残存	10％		黒斑		底部						備考		

図	35	16	遺構	23次RA064	寸法	口径	11.2	調整	外	回転ナデ	色調	外	5GY5/1オリーブ灰色
写真	39	145	位置	南東		底径	－		内	回転ナデ		断	10Y5/1灰色
種別	須恵器		層位	埋土		器高	(1.7)	胎土	非常に精良（白色砂）			内	10Y4/2オリーブ灰色
器種	台付皿？		焼成	非常に良好		器厚	0.4				時期	９Ｃ後半～10Ｃ前半	
残存	20%		黒斑		底部						備考	施釉陶器模倣	

図	35	17	遺構	23次RA064	寸法	口径	－	調整	外	回転ヘラケズリ	色調	外	10BG5/1青灰色
写真	39	150	位置	カマド北脇、北西埋土		底径	8．9		内	回転ナデ		断	5B5/1青灰色
種別	須恵器		層位			器高	(10.6)	胎土	精良（白色砂）			内	5B5/1青灰色
器種	壺		焼成	非常に良好		器厚	0.7				時期	９Ｃ後半～10Ｃ前半	
残存	40%		黒斑		底部	砂底					備考		

図	35	18	遺構	23次RA064	寸法	口径	－	調整	外	ヘラケズリ	色調	外	5YR5/4にぶい赤褐色
写真	39	151	位置	貼床、北カマド煙道、南東埋土		底径	(9.95)		内	ナデ		断	5YR7/4にぶい橙色
種別	土師器		層位			器高	(7.0)	胎土	精良（石英）			内	5YR6/6橙色
器種	甕		焼成	良好		器厚	0.7				時期	９Ｃ後半～10Ｃ前半	
残存	20％		黒斑		底部						備考		

図	35	19	遺構	23次RA064	寸法	口径	21.7	調整	外	回転ナデ	色調	外	5YR6/4にぶい橙色
写真	38	137	位置	床面直上（北端）、貼床、西南埋土		底径	－		内	回転ナデ		断	5YR5/6明赤褐色
種別	土師器		層位			器高	(6.5)	胎土	精良（白色砂）			内	5YR5/6明赤褐色
器種	？		焼成	良好		器厚	0.5				時期	９Ｃ後半～10Ｃ前半	
残存	40%		黒斑		底部						備考		

図	35	20	遺構	23次RA064	寸法	口径	(30.0)	調整	外	ハケ、ナデ（タテ）	色調	外	10YR4/3にぶい黄褐色
写真	39	148	位置	東カマド煙出し		底径	－		内	ナデ		断	10YR5/2灰黄褐色
種別	土師器		層位			器高	(21.4)	胎土	精良（石英）			内	10YR5/2灰黄褐色
器種	甕		焼成	良好		器厚	0.55				時期	９Ｃ後半～10Ｃ前半	
残存	35％		黒斑		底部						備考		

第１表　遺物観察表（11）RA064・059・070住居跡

図	図なし	遺構	23次RA064	寸法	口径	(17.5)	調整	外		色調	外	
写真	39　149	位置	北東カマド脇		底径	－		内			断	
種別	土師器	層位			器高	(11.4)	胎土				内	
器種	甕	焼成			器厚	0.65				時期	９Ｃ後半～10Ｃ前半	
残存	20％	黒斑		底部						備考	RA063・198と同一個体	

図	35　21	遺構	23次RA064	寸法	口径	－	調整	外	回転ナデ、ヘラケズリ（タテ）	色調	外	5BG4/1暗青灰色
写真	39　152	位置	東カマド脇埋土、北西埋土		底径	－		内	回転ナデ		断	2.5GY5/1オリーブ色
種別	須恵器	層位			器高	(21.3)	胎土		非常に精良（白色砂）		内	2.5GY5/1オリーブ灰色
器種	甕	焼成	良好		器厚	0.6				時期	９Ｃ後半～10Ｃ前半	
残存	25％	黒斑		底部						備考	内外面に降灰	

図	35　22	遺構	23次RA059	寸法	口径	－	調整	外	ミガキ	色調	外	7.5YR2/1黒色
写真	39　154	位置	埋土		底径	(8.7)		内	ミガキ		断	10YR4/1褐灰色
種別	土師器	層位			器高	(3.95)	胎土		非常に精良（雲母多量）		内	7.5YR2/1黒色
器種	甕	焼成	良好		器厚	0.5				時期	９Ｃ後半～10Ｃ前半	
残存	30％	黒斑		底部	回転糸切り後高台貼り付け					備考		

図	35　23	遺構	23次RA059	寸法	口径	－	調整	外	回転ナデ	色調	外	7.5YR8/6浅黄橙色
写真	39　153	位置	埋土		底径	5.4		内	回転ナデ		断	7.5YR8/6浅黄橙色
種別	土師器	層位			器高	(1.7)	胎土		精良（白色砂、石英）		内	7.5YR8/6浅黄橙色
器種	坏	焼成	良好		器厚	0.55				時期	７Ｃ後半～８Ｃ前半	
残存	20％	黒斑		底部	回転糸切り後無調整					備考		

図	38　1	遺構	23次RA070	寸法	口径	13.8	調整	外	回転ナデ	色調	外	10YR6/4にぶい黄橙色
写真	40　155	位置	No2		底径	6.4		内	ミガキ		断	10YR7/3にぶい黄橙色
種別	土師器	層位	床面直上		器高	4.25	胎土		精良（雲母多量）		内	10YR2/1黒色
器種	坏	焼成	良好		器厚	0.45				時期	９Ｃ後半～10Ｃ前半	
残存	80％	黒斑		底部	回転糸切り後無調整					備考		

図	38　2	遺構	23次RA070	寸法	口径	(14.4)	調整	外	回転ナデ	色調	外	10YR6/4にぶい黄橙色
写真	40　156	位置	カマド上部一括、No6、南東部埋土下部（カマド近接）、埋土（南東）		底径	6.5		内	ミガキ		断	10YR6/1褐灰色
種別	土師器	層位			器高	4.5	胎土		精良（雲母多量）		内	10YR3/1黒褐色
器種	坏	焼成	良好		器厚	0.5				時期	９Ｃ後半～10Ｃ前半	
残存	50％	黒斑	底部	底部	回転糸切り後無調整					備考		

図	38　3	遺構	23次RA070	寸法	口径	(15.0)	調整	外	回転ナデ	色調	外	5YR6/6橙色
写真	40　158	位置	埋土上部一括、埋土（北東）、埋土（南東）		底径	(5.8)		内	回転ナデ		断	5YR7/8橙色
種別	土師器	層位			器高	4.3	胎土		精良（白色砂）		内	5YR7/8橙色
器種	坏	焼成	良好		器厚	0.4				時期	９Ｃ後半～10Ｃ前半	
残存	50％	黒斑		底部	回転糸切り後無調整					備考		

図	38　4	遺構	23次RA070	寸法	口径	(13.4)	調整	外	回転ナデ	色調	外	10YR7/4にぶい黄橙色
写真	40　159	位置	カマド、埋土（南東）		底径	5.7		内	ミガキ		断	10YR6/1褐灰色
種別	土師器	層位			器高	5.0	胎土		精良（白色砂、雲母）		内	N3/0暗灰色
器種	坏	焼成	良好		器厚	0.4				時期	９Ｃ後半～10Ｃ前半	
残存	40％	黒斑	底部	底部	切り離し後回転ヘラケズリ					備考		

図	38　5	遺構	23次RA070	寸法	口径	14.0	調整	外	回転ナデ	色調	外	10YR6/4にぶい黄橙色
写真	40　157	位置	カマド範囲、カマド上部、No1、埋土（南西）		底径	6.0		内	ミガキ		断	10YR5/1褐灰色
種別	土師器	層位			器高	4.85	胎土		精良（雲母多量）		内	10YR2/1黒色
器種	坏	焼成	良好		器厚	0.6				時期	９Ｃ後半～10Ｃ前半	
残存	75%	黒斑		底部	回転糸切り後無調整					備考	墨書３文字	

図	38　6	遺構	23次RA070	寸法	口径	(15.0)	調整	外	回転ナデ	色調	外	10YR7/4にぶい黄橙色
写真	40　162	位置	No9		底径	(6.0)		内	ミガキ		断	10YR8/2灰白色
種別	土師器	層位			器高	(5.0)	胎土		精良（雲母多量）		内	10YR7/4にぶい黄橙色
器種	坏	焼成	良好		器厚	0.7				時期	９Ｃ後半～10Ｃ前半	
残存	30％	黒斑		底部	回転糸切り後無調整					備考		

図	38　7	遺構	23次RA070	寸法	口径	(13.6)	調整	外	回転ナデ	色調	外	7.5YR5/4にぶい褐色
写真	40　161	位置	カマド上部一括、No5、No6		底径	5.0		内	回転ナデ		断	10YR7/3にぶい黄橙色
種別	土師器	層位			器高	4.9	胎土		やや粗（白色砂、石英）		内	7.5YR7/4にぶい橙色
器種	坏	焼成	良好		器厚	0.55				時期	９Ｃ後半～10Ｃ前半	
残存	40％	黒斑		底部	不明					備考		

図	38　8	遺構	23次RA070	寸法	口径	(15.4)	調整	外	回転ナデ	色調	外	7.5YR7/6橙色
写真	40　166	位置	カマド南側一括、床面		底径	－		内	回転ナデ		断	7.5YR7/6橙色
種別	土師器	層位			器高	(4.0)	胎土		精良（白色砂）		内	7.5YR7/6橙色
器種	坏	焼成	やや不良		器厚	0.35				時期	９Ｃ後半～10Ｃ前半	
残存	15%	黒斑		底部						備考		

図	38　9	遺構	23次RA070	寸法	口径	－	調整	外	回転ナデ	色調	外	5YR7/6橙色
写真	40　160	位置	煙出し一括		底径	(7.8)		内	回転ナデ		断	7.5YR7/6橙色
種別	土師器	層位			器高	(3.5)	胎土		精良（白色砂）		内	7.5YR7/6橙色
器種	高台付坏	焼成	不良		器厚	0.5				時期	９Ｃ後半～10Ｃ前半	
残存	20％	黒斑		底部	切り離し後高台貼り付け					備考		

図	38　10	遺構	23次RA070	寸法	口径	(13.7)	調整	外	回転ナデ	色調	外	10YR5/4にぶい黄褐色
写真	40　165	位置	No7		底径	－		内	回転ナデ		断	10YR5/1褐灰色
種別	土師器	層位	床面直上		器高	(4.75)	胎土		非常に精良（雲母多量）		内	10YR3/1黒褐色
器種	坏	焼成	良好		器厚	0.45				時期	９Ｃ後半～10Ｃ前半	
残存	15%	黒斑		底部						備考		

図	38　11	遺構	23次RA070	寸法	口径	(15.2)	調整	外	回転ナデ	色調	外	10YR7/3にぶい黄橙色
写真	40　164	位置	カマド内一括		底径	－		内	回転ナデ		断	10YR7/3にぶい黄橙色
種別	土師器	層位			器高	(4.2)	胎土		精良（雲母多量）		内	7.5YR6/4にぶい橙色
器種	坏	焼成	やや不良		器厚	0.4				時期	９Ｃ後半～10Ｃ前半	
残存	30％	黒斑		底部						備考		

第１表　遺物観察表（12）RA070住居跡

図	38	12	遺構	23次RA070	寸法	口径	(13.4)	調整	外	回転ナデ	色調	外	7.5YR6/4にぶい橙色
写真	40	167	位置	カマド内一括		底径	−		内	回転ナデ		断	7.5YR5/4にぶい褐色
種別	土師器		層位			器高	(3.5)	胎土	精良（白色砂）			内	7.5YR6/6橙色
器種	坏		焼成	良好		器厚	0.5				時期	9Ｃ後半～10Ｃ前半	
残存	15%		黒斑		底部						備考		

図	38	13	遺構	23次RA070	寸法	口径	(13.5)	調整	外	回転ナデ	色調	外	10YR5/4にぶい黄褐色
写真	40	168	位置	埋土上部一括、埋土（南東）		底径	−		内	ミガキ		断	10YR6/3にぶい黄橙色
種別	土師器		層位			器高	(3.8)	胎土	精良（雲母多量）			内	10YR2/1黒色
器種	坏		焼成	良好		器厚	0.35				時期	9Ｃ後半～10Ｃ前半	
残存	10%		黒斑		底部						備考		

図	38	14	遺構	23次RA070	寸法	口径	(15.2)	調整	外	回転ナデ	色調	外	5YR6/6橙色
写真	40	163	位置	pit南西		底径	−		内	回転ナデ		断	5YR6/6橙色
種別	土師器		層位			器高	(4.3)	胎土	精良（白色砂、石英）			内	7.5YR6/6橙色
器種	坏		焼成	やや不良		器厚	0.5				時期	9Ｃ後半～10Ｃ前半	
残存	30％		黒斑		底部						備考		

図	38	15	遺構	23次RA070	寸法	口径	−	調整	外	回転ナデ	色調	外	10YR5/3にぶい黄褐色
写真	40	169	位置	埋土（南東）		底径	(7.4)		内	ミガキ		断	10YR4/1褐灰色
種別	土師器		層位			器高	(2.35)	胎土	精良（白色砂、雲母）			内	10YR2/1黒色
器種	坏		焼成	良好		器厚	0.6				時期	9Ｃ後半～10Ｃ前半	
残存	25％		黒斑		底部	回転糸切り後無調整					備考		

図	38	16	遺構	23次RA070	寸法	口径	−	調整	外	回転ナデ	色調	外	10YR8/3浅黄橙色
写真	41	178	位置	カマド		底径	5.3		内	回転ナデ		断	10YR8/4浅黄橙色
種別	土師器		層位			器高	2.0	胎土	やや粗（スコリア、石英）			内	10YR8/4浅黄橙色
器種	甕？		焼成	良好		器厚	0.6				時期	9Ｃ後半～10Ｃ前半	
残存	10％		黒斑	底部	底部	回転糸切り後無調整					備考		

図	38	17	遺構	23次RA070	寸法	口径	−	調整	外	ヘラケズリ	色調	外	7.5YR4/3褐色
写真	41	179	位置			底径	7.8		内	ナデ		断	7.5YR4/1褐灰色
種別	土師器		層位			器高	(2.4)	胎土				内	7.5YR8/4浅黄橙色
器種	甕		焼成	良好		器厚	0.75				時期	9Ｃ後半～10Ｃ前半	
残存	10％		黒斑		底部	木葉痕後ナデ					備考		

図	38	18	遺構	23次RA070	寸法	口径	(12.6)	調整	外	ヘラケズリ（タテ）	色調	外	5YR4/2灰褐色
写真	42	182	位置	煙出し一括		底径	(10.8)		内	ハケ（ヨコ）		断	5YR6/6橙色
種別	土師器		層位			器高	14.55	胎土	やや粗（白色砂、石英）			内	5YR5/4にぶい赤褐色
器種	甕		焼成	非常に良好		器厚	0.5				時期	9Ｃ後半～10Ｃ前半	
残存	50％		黒斑		底部	砂底・木葉痕					備考		

図	38	19	遺構	23次RA070	寸法	口径	13.0	調整	外	ヘラケズリ（不定）	色調	外	2.5YR4/6赤褐色
写真	42	181	位置	カマド上部一括、煙出し一括、カマド支脚		底径	11.2		内	ヘラケズリ（不定）		断	2.5YR4/6赤褐色
種別	土師器		層位			器高	16.0	胎土	粗（白色砂、石英）			内	5YR5/6明赤褐色
器種	甕		焼成	非常に良好		器厚	0.8				時期	9Ｃ後半～10Ｃ前半	
残存	90%		黒斑		底部	木葉痕					備考	粗製品	

図	38	20	遺構	23次RA070	寸法	口径	(22.0)	調整	外	回転ナデ	色調	外	10YR5/4にぶい黄褐色
写真	41	170	位置	No3		底径	−		内	回転ナデ		断	10YR4/3にぶい黄褐色
種別	土師器		層位	床面直上		器高	(11.55)	胎土	精良（白色砂、雲母）			内	10YR5/2灰黄褐色
器種	甕		焼成	良好		器厚	0.55				時期	9Ｃ後半～10Ｃ前半	
残存	35％		黒斑		底部						備考	外面スス、内面コゲ	

図	38	21	遺構	23次RA070	寸法	口径	(22.2)	調整	外	回転ナデ	色調	外	7.5YR8/4浅黄橙色
写真	41	180	位置	カマド範囲、No3、埋土（南東）		底径	−		内	回転ナデ、ナデ		断	7.5YR8/4浅黄橙色
種別	土師器		層位			器高	(13.5)	胎土	精良（石英、スコリア）			内	7.5YR8/4浅黄橙色
器種	甕		焼成	やや不良		器厚	0.7				時期	9Ｃ後半～10Ｃ前半	
残存	35％		黒斑		底部						備考		

図	38	22	遺構	23次RA070	寸法	口径	(21.0)	調整	外	回転ナデ, ヘラケズリ（タテ）	色調	外	10YR5/3にぶい黄褐色
写真	41	172	位置	煙出し		底径	−		内	回転ナデ		断	10YR5/2灰黄褐色
種別	土師器		層位			器高	(10.3)	胎土	精良（雲母多量）			内	10YR4/2灰黄褐色
器種	甕		焼成	良好		器厚	0.75				時期	9Ｃ後半～10Ｃ前半	
残存	15％		黒斑		底部						備考		

図	38	23	遺構	23次RA070	寸法	口径	(22.8)	調整	外	回転ナデ	色調	外	5YR6/6橙色
写真	41	173	位置			底径	−		内	回転ナデ		断	5YR7/8橙色
種別	土師器		層位			器高	(3.8)	胎土	精良（白色砂）			内	5YR7/8橙色
器種	甕		焼成	やや不良		器厚	0.45				時期	9Ｃ後半～10Ｃ前半	
残存	10％		黒斑		底部						備考		

図	38	24	遺構	23次RA070	寸法	口径	(18.2)	調整	外	回転ナデ	色調	外	5YR6/6橙色
写真	41	175	位置	南東		底径	−		内	回転ナデ		断	5YR7/4にぶい橙色
種別	土師器		層位	埋土		器高	(6.4)	胎土	精良（白色砂）			内	5YR6/6橙色
器種	甕		焼成	良好		器厚	0.6				時期	9Ｃ後半～10Ｃ前半	
残存	10%		黒斑		底部						備考		

図	38	25	遺構	23次RA070	寸法	口径	(15.5)	調整	外	ヘラケズリ	色調	外	5YR4/3にぶい赤褐色
写真	41	174	位置			底径	−		内	ナデ		断	5YR2/3極暗赤褐色
種別	土師器		層位			器高	(5.1)	胎土	やや粗（白色砂）			内	5YR4/4にぶい赤褐色
器種	甕_		焼成	良好		器厚	0.7				時期	9Ｃ後半～10Ｃ前半	
残存	15％		黒斑		底部						備考		

図	38	26	遺構	23次RA070	寸法	口径	−	調整	外	タタキ	色調	外	10YR6/3にぶい黄橙色
写真	42	183	位置	カマド範囲、カマド上部、煙出し一括		底径	(8.6)		内	ハケ（タテ）		断	7.5YR5/4にぶい褐色
種別	土師器		層位			器高	(7.0)	胎土	精良（白色砂）			内	5YR6/6橙色
器種	甕		焼成	良好		器厚	1.2				時期	9Ｃ後半～10Ｃ前半	
残存	40%		黒斑		底部	砂底					備考		

第１表　遺物観察表（13）RA070・063住居跡

図	39	27	遺構	23次RA070	寸法	口径	(23.0)	調整	外	ヘラケズリ（不定）	色調	外	7.5YR8/3浅黄橙色
写真	41	171	位置			底径	–		内	ナデ		断	7.5YR8/3浅黄橙色
種別	土師器		層位			器高	6.55	胎土	精良（白色砂）			内	10YR6/3にぶい黄橙色
器種	甕		焼成	やや不良		器厚	0.9				時期		９Ｃ後半～10Ｃ前半
残存	15％		黒斑		底部						備考		

図	39	28	遺構	23次RA070	寸法	口径	–	調整	外	ヘラケズリ（タテ）	色調	外	10YR6/4にぶい黄橙色
写真	41	177	位置	カマド範囲、煙出し一括、No７		底径	(9.0)		内	ハケ（不定）		断	7.5YR8/4浅黄橙色
種別	土師器		層位			器高	(10.6)	胎土	精良（白色砂）			内	5YR7/6橙色
器種	甕		焼成	良好		器厚	0.9				時期		９Ｃ後半～10Ｃ前半
残存	40％		黒斑		底部						備考		

図	39	29	遺構	23次RA070	寸法	口径	(21.0)	調整	外	回転ナデ、ヘラケズリ（タテ）	色調	外	10YR5/4にぶい黄褐色
写真	41	176	位置	カマド範囲、南東区埋土下部（カマド近接）、埋土（南東）、No７		底径	(9.0)		内	回転ナデ、ハケ「底部」		断	10YR4/3にぶい黄褐色
種別	土師器		層位			器高	(30.0)	胎土	やや粗（石英）			内	10YR5/2灰黄褐色
器種	甕		焼成	良好		器厚	0.7				時期		
残存	％		黒斑		底部	砂底					備考		

図	42	1	遺構	24次RA063	寸法	口径	(14.6)	調整	外	回転ナデ	色調	外	7.5YR8/4浅黄橙色
写真	42	187	位置			底径	5.2		内	回転ナデ		断	7.5YR8/4浅黄橙色
種別	土師器		層位	埋土		器高	4.6	胎土	精良（白色砂、石英）			内	7.5YR8/6浅黄橙色
器種	坏		焼成	やや不良		器厚	0.4				時期		９Ｃ後半～10Ｃ前半
残存	60％		黒斑		底部	回転糸切り後無調整					備考		

図	42	2	遺構	24次RA063	寸法	口径	(15.4)	調整	外	回転ナデ	色調	外	7.5YR6/4にぶい橙色
写真	42	191	位置			底径	(6.6)		内	回転ナデ		断	10YR5/4にぶい黄褐色
種別	土師器		層位	貼床		器高	(4.7)	胎土	精良（雲母多量）			内	10YR7/4にぶい黄橙色
器種	坏		焼成	良好		器厚	0.7				時期		９Ｃ後半～10Ｃ前半
残存	40%		黒斑		底部	回転糸切り後無調整					備考		墨書「？」

図	42	3	遺構	24次RA063	寸法	口径	–	調整	外	回転ナデ	色調	外	7.5YR6/6橙色
写真	42	185	位置	埋土下層、埋土最下層		底径	5.6		内	回転ナデ		断	5YR6/8橙色
種別	土師器		層位			器高	(4.2)	胎土	精良（白色砂）			内	5YR6/8橙色
器種	坏		焼成	良好		器厚	(0.8)				時期		９Ｃ後半～10Ｃ前半
残存	40％		黒斑		底部	回転糸切り後無調整					備考		

図	42	4	遺構	24次RA063	寸法	口径	(17.2)	調整	外	回転ナデ	色調	外	10YR7/4にぶい黄橙色
写真	42	190	位置			底径	–		内	回転ナデ		断	10YR5/1褐灰色
種別	土師器		層位	埋土最下層		器高	(4.0)	胎土	精良			内	10YR2/1黒色
器種	坏		焼成	良好		器厚	0.55				時期		９Ｃ後半～10Ｃ前半
残存	30%		黒斑		底部						備考		

図	42	5	遺構	24次RA063	寸法	口径	–	調整	外	回転ナデ	色調	外	10YR7/3にぶい黄橙色
写真	42	189	位置			底径	5.65		内	ミガキ		断	10YR5/1褐灰色
種別	土師器		層位	埋土最下層		器高	(0.75)	胎土	精良（白色砂、石英）			内	10YR2/1黒色
器種	坏		焼成	良好		器厚	0.6				時期		９Ｃ後半～10Ｃ前半
残存	15%		黒斑		底部	回転糸切り後無調整					備考		

図	42	6	遺構	24次RA063	寸法	口径	–	調整	外	回転ナデ	色調	外	7.5YR6/6橙色
写真	42	186	位置			底径	8.2		内	回転ナデ		断	7.5YR6/6橙色
種別	土師器		層位	埋土下層		器高	(2.5)	胎土	精良（白色砂、雲母）			内	7.5YR6/6橙色
器種	高台付坏		焼成	良好		器厚	0.5				時期		９Ｃ後半～10Ｃ前半
残存	35％		黒斑		底部						備考		

図	42	7	遺構	24次RA063	寸法	口径	15.6	調整	外	回転ナデ	色調	外	5YR6/4にぶい橙色
写真	42	184	位置			底径	7.8		内	回転ナデ		断	–
種別	土師器		層位	埋土下層		器高	6.3	胎土	精良（白色砂、石英）			内	5YR6/4にぶい橙色
器種	塊		焼成	良好		器厚	0.65				時期		９Ｃ後半～10Ｃ前半
残存	75％		黒斑		底部	切り離し後無調整					備考		墨書「？」

図	42	8	遺構	24次RA063	寸法	口径	(9.9)	調整	外	–	色調	外	5YR6/6橙色
写真	42	188	位置	北東		底径	–		内	–		断	5YR6/6橙色
種別	土師器		層位	埋土		器高	(3.7)	胎土	非常に精良（白色砂）			内	5YR6/6橙色
器種	羽釜		焼成	良好		器厚	0.5				時期		10Ｃ？
残存	10％		黒斑		底部						備考		外面スス

図	42	9	遺構	24次RA063	寸法	口径	(15.5)	調整	外	ハケ（タテ）	色調	外	7.5YR7/4にぶい橙色
写真	43	195	位置			底径	–		内	ハケ（ヨコ）		断	7.5YR7/3にぶい橙色
種別	土師器		層位	埋土最下層		器高	(4.3)	胎土	精良（白色砂、スコリア）			内	7.5YR7/3にぶい橙色
器種	甕		焼成			器厚	0.55				時期		９Ｃ後半～10Ｃ前半
残存	10%		黒斑		底部						備考		

図	42	10	遺構	24次RA063	寸法	口径	–	調整	外	ハケ	色調	外	10YR5/2灰黄褐色
写真	43	197	位置			底径	(9.9)		内	ハケ		断	10YR8/3浅黄橙色
種別	土師器		層位	埋土下層		器高	(2.5)	胎土	やや粗（白色砂、石英）			内	10YR7/3にぶい黄橙色
器種	甕		焼成			器厚	1.1				時期		９Ｃ後半～10Ｃ前半
残存	10％		黒斑		底部	木葉痕					備考		

図	42	11	遺構	24次RA063	寸法	口径	(17.4)	調整	外	回転ナデ、ヘラケズリ	色調	外	5YR6/6橙色
写真	43	198	位置	カマド袖		底径	–		内	回転ナデ		断	5YR7/6橙色
種別	土師器		層位			器高	(18.4)	胎土	精良（白色砂）			内	5YR6/6橙色
器種	甕		焼成	良好		器厚	0.7				時期		
残存	20％		黒斑		底部						備考		RA064・149と同一個体

図	42	12	遺構	24次RA063	寸法	口径	(18.4)	調整	外	ハケ（タテ）	色調	外	7.5YR6/4にぶい橙色
写真	43	194	位置	床面直上、北東埋土		底径	–		内	ハケ（ヨコ）		断	7.5YR7/1明褐灰色
種別	土師器		層位			器高	(8.6)	胎土	精良（白色砂、石英）			内	5YR7/6橙色
器種	甕		焼成	良好		器厚	(0.65)				時期		９Ｃ後半～10Ｃ前半
残存	20%		黒斑		底部						備考		

第1表　遺物観察表（14）RA063・069住居跡

図	42	13	遺構	24次RA063	寸法	口径	(18.0)	調整	外	回転ナデ、ヘラケズリ（タテ）	色調	外	7.5YR8/4浅黄橙色
写真	43	193	位置			底径	—		内	回転ナデ		断	7.5YR8/4浅黄橙色
種別	土師器		層位	埋土最下層		器高	(10.9)	胎土	精良（白色砂、スコリア）			内	10YR8/4浅黄橙色
器種	甕		焼成			器厚	0.9				時期	9C後半～10C前半	
残存	20％		黒斑		底部						備考		

図	42	14	遺構	24次RA063	寸法	口径	(21.2)	調整	外	ヘラケズリ（タテ）	色調	外	10YR8/4浅黄橙色
写真	43	192	位置	カマド袖		底径	—		内	ハケ（ヨコ）		断	10YR8/4浅黄橙色
種別	土師器		層位			器高	(10.7)	胎土	やや粗（石英、スコリア）			内	7.5YR7/4にぶい橙色
器種	甕		焼成	良好		器厚	0.8				時期	9C後半～10C前半	
残存	20％		黒斑		底部						備考		

図	42	15	遺構	24次RA063	寸法	口径	(18.0)	調整	外	回転ナデ	色調	外	10YR6/3にぶい黄橙色
写真	43	196	位置			底径	—		内	回転ナデ		断	10YR8/2灰白色
種別	土師器		層位	埋土下層		器高	(4.4)	胎土	非常に精良（白色砂、石英）			内	7.5YR6/6橙色
器種	甕		焼成	良好		器厚	0.65				時期	9C後半～10C前半	
残存	10％		黒斑		底部						備考		

図	46	1	遺構	24次RA069	寸法	口径	13.6	調整	外	回転ナデ	色調	外	10YR5/3にぶい黄褐色
写真	43	199	位置	No7		底径	6.1		内	ミガキ		断	10YR7/3にぶい黄橙色
種別	土師器		層位	床面直上		器高	4.7	胎土	精良（雲母多量）			内	10YR2/1黒色
器種	坏		焼成			器厚	0.55				時期	9C後半～10C前半	
残存	95％		黒斑		底部	回転糸切り後無調整					備考	外面スス	

図	46	2	遺構	24次RA069	寸法	口径	(15.8)	調整	外	回転ナデ	色調	外	10YR6/3にぶい黄橙色
写真	43	200	位置	カマド周辺床面一括		底径	6.6		内	回転ナデ		断	10YR7/3にぶい黄橙色
種別	土師器		層位			器高	(5.5)	胎土	精良（白色砂）			内	10YR6/3にぶい黄橙色
器種	坏		焼成			器厚	0.85				時期	10C	
残存	55%		黒斑		底部	静止糸切り					備考	柱状風高台	

図	46	3	遺構	24次RA069	寸法	口径	(14.1)	調整	外	回転ナデ、ハケ	色調	外	5YR7/8橙色
写真	43	201	位置	カマド周辺床面一括、No3		底径	3.7		内	回転ナデ		断	5YR7/8橙色
種別	土師器		層位			器高	5.5	胎土	やや粗（白色砂、石英）			内	5YR7/8橙色
器種	坏		焼成	やや不良		器厚	0.4				時期	9C後半～10C前半	
残存	35%		黒斑		底部	回転糸切り後無調整					備考		

図	46	4	遺構	24次RA069	寸法	口径	—	調整	外	ヘラケズリ（タテ）	色調	外	10YR6/4にぶい黄橙色
写真	43	203	位置	No6		底径	(7.6)		内	—		断	10YR7/3にぶい黄橙色
種別	土師器		層位	床面直上		器高	(2.3)	胎土	精良（石英、スコリア）			内	10YR7/3にぶい黄橙色
器種	甕		焼成	良好		器厚	—				時期	9C後半～10C前半	
残存	10％		黒斑		底部	砂底					備考		

図	46	5	遺構	24次RA069	寸法	口径	(14.6)	調整	外	回転ナデ	色調	外	10YR6/4にぶい黄橙色
写真	44	209	位置	No4		底径	—		内	回転ナデ		断	10YR6/2灰黄褐色
種別	土師器		層位	床面直上		器高	(11.0)	胎土	精良（雲母多量）			内	10YR6/4にぶい黄橙色
器種	甕		焼成	良好		器厚	0.9				時期	9C後半～10C前半	
残存	30％		黒斑		底部						備考		

図	46	6	遺構	24次RA069	寸法	口径	—	調整	外	ハケ（タテ）、ヘラケズリ	色調	外	7.5YR6/6橙色
写真	44	208	位置	No1		底径	(11.6)		内	ハケ（ヨコ）		断	10YR7/4にぶい黄橙色
種別	土師器		層位	床面直上		器高	(9.5)	胎土	非常に精良（白色砂）			内	10YR7/4にぶい黄橙色
器種	甕		焼成			器厚	0.7				時期	9C後半～10C前半	
残存	30％		黒斑		底部	木葉痕					備考		

図	46	7	遺構	24次RA069	寸法	口径	(20.2)	調整	外	ハケ	色調	外	7.5YR8/4浅黄橙色
写真	44	210	位置	No6		底径	—		内	ハケ		断	7.5YR8/4浅黄橙色
種別	土師器		層位	床面直上		器高	(13.2)	胎土	精良（白色砂，石英）			内	7.5YR8/4浅黄橙色
器種	甕		焼成	やや不良		器厚	0.8				時期	不明	
残存	20％		黒斑		底部						備考	同一個体多数あるが接合しない　ロクロ？	

図	46	8	遺構	24次RA069	寸法	口径	—	調整	外	回転ナデ	色調	外	10YR6/4にぶい黄橙色
写真	44	207	位置	No4		底径	(6.2)		内	回転ナデ		断	10YR6/3にぶい黄橙色
種別	土師器		層位	床面直上		器高	(5.0)	胎土	精良（白色砂）			内	10YR6/4にぶい黄橙色
器種	甕		焼成	良好		器厚	1.3				時期	9C後半～10C前半	
残存	20%		黒斑		底部	切り離し不明					備考	焼け歪み	

図	46	9	遺構	24次RA069	寸法	口径	(22.4)	調整	外	ハケ	色調	外	7.5YR5/4にぶい褐色
写真	44	205	位置	カマド周辺床面一括、No4、No5		底径	—		内	ハケ（ヨコ）		断	7.5YR5/4にぶい褐色
種別	土師器		層位			器高	(9.9)	胎土	精良（白色砂、雲母）			内	7.5YR4/3褐色
器種	甕		焼成	良好		器厚	0.6				時期		
残存	20％		黒斑		底部						備考	同一個体多数あるが接合しない	

図	46	10	遺構	24次RA069	寸法	口径	(23.2)	調整	外	ヘラケズリ（タテ）	色調	外	10YR6/3にぶい黄橙色
写真	44	204	位置	No1		底径	—		内	ナデ（ヨコ）		断	10YR8/3浅黄橙色
種別	土師器		層位	床面直上		器高	(13.35)	胎土	やや粗（雲母多量）			内	10YR5/2灰黄褐色
器種	甕		焼成	良好		器厚	0.8				時期	9C後半～10C前半	
残存	30％		黒斑		底部	・					備考	外面スス、内面スス	

図	46	11	遺構	24次RA069	寸法	口径	(22.2)	調整	外	回転ナデ、ヘラケズリ	色調	外	10YR6/4にぶい黄橙色
写真	44	206	位置	カマド周辺床面一括、No6		底径	—		内	回転ナデ		断	10YR7/3にぶい黄橙色
種別	土師器		層位			器高	(14.9)	胎土	精良（白色砂、雲母）			内	10YR6/3にぶい黄橙色
器種	甕		焼成	非常に良好		器厚	0.6				時期	9C後半～10C前半	
残存	26％		黒斑		底部						備考	同一個体多数あるが接合しない	

図	46	12	遺構	24次RA069	寸法	口径	(25.0)	調整	外	回転ナデ、ヘラケズリ（タテ）	色調	外	10YR8/3浅黄橙色
写真	44	211	位置	カマド周辺床面一括、No5、No6		底径	—		内	回転ナデ、ハケ（不定）		断	7.5YR6/4にぶい橙色
種別	土師器		層位			器高	(21.95)	胎土	精良（白色砂，石英）			内	10YR7/3にぶい黄橙色
器種	甕		焼成	やや不良		器厚	0.9				時期	9C後半～10C前半	
残存	40％		黒斑		底部						備考	内面コゲ	

第１表　遺物観察表（15）RD105・103・106土坑・遺構外

図	49	1	遺構	23次RD105	寸法	口径	(14.6)	調整	外	ﾐｶﾞｷ[上半]､ﾍﾗｹｽﾘ[下半]	色調	外	10YR5/4にぶい黄褐色
写真	45	212	位置			底径	－		内	ミガキ		断	10YR5/1褐灰色
種別	土師器		層位	1層		器高	(3.8)	胎土	非常に精良（白色砂）			内	10YR2/1黒色
器種	坏		焼成	非常に良好		器厚	0.55				時期	７Ｃ後半～８Ｃ前半	
残存	25％		黒斑		底部						備考	段明瞭	

図	49	2	遺構	23次RD103	寸法	口径	14.0	調整	外	回転ナデ	色調	外	10YR5/3にぶい黄褐色
写真	45	213	位置			底径	(6.4)		内	ミガキ		断	－
種別	土師器		層位	埋土		器高	5.15	胎土	精良（雲母多量）			内	10YR2/1黒色
器種	坏		焼成	良好		器厚	0.5				時期	９～10Ｃ	
残存	40%		黒斑		底部	不明					備考		

図	49	3	遺構	23次RD106	寸法	口径	(13.8)	調整	外	回転ナデ	色調	外	5YR6/8橙色
写真	45	214	位置			底径	(6.0)		内	回転ナデ		断	5YR6/8橙色
種別	土師器		層位			器高	4.9	胎土	精良（白色砂、石英）			内	5YR6/8橙色
器種	坏		焼成	良好		器厚	0.45				時期	９～10Ｃ	
残存	95%		黒斑		底部	回転糸切り後無調整					備考		

図	52	1	遺構		寸法	口径	13.8	調整	外	回転ナデ	色調	外	7.5YR7/1明褐灰色
写真	45	215	位置	カクラン		底径	5.6		内	回転ナデ		断	7.5YR8/1灰白色
種別	須恵器		層位			器高	3.1	胎土	非常に精良（白色砂）			内	7.5YR7/1明褐灰色
器種	坏		焼成	良好		器厚	0.5				時期	10Ｃ？	
残存	90%		黒斑		底部	回転糸切り後無調整					備考		

図	52	2	遺構	遺構外	寸法	口径	－	調整	外	回転ナデ	色調	外	10YR7/4にぶい黄橙色
写真	45	217	位置	カクラン		底径	5.6		内	回転ナデ		断	10YR7/2にぶい黄橙色
種別	土師器		層位			器高	(1.9)	胎土	精良（雲母多量）			内	10YR7/4にぶい黄橙色
器種	坏		焼成	良好		器厚	0.5				時期	９～10Ｃ	
残存	20%		黒斑	底部	底部	回転糸切り後無調整					備考		

図	52	3	遺構	遺構外	寸法	口径	－	調整	外	回転ナデ	色調	外	10YR7/4にぶい黄橙色
写真	45	218	位置	カクラン		底径	5.7		内	回転ナデ		断	7.5YR7/6橙色
種別	土師器		層位			器高	(1.2)	胎土	精良（白色砂、スコリア）			内	7.5YR7/6橙色
器種	坏		焼成	良好		器厚	0.5				時期	９～10Ｃ	
残存	20%		黒斑		底部						備考		

図	52	4	遺構	遺構外	寸法	口径	(16.0)	調整	外	回転ナデ	色調	外	10YR8/4浅黄橙色
写真	45	216	位置	カクラン		底径	(7.0)		内	回転ナデ		断	10YR8/4浅黄橙色
種別	土師器		層位			器高	(5.1)	胎土	精良（白色砂）			内	10YR8/4浅黄橙色
器種	坏		焼成	やや不良		器厚	0.9				時期	９～10Ｃ	
残存	45%		黒斑	体部下半	底部	回転糸切り後無調整					備考		

図	52	5	遺構	遺構外	寸法	口径	(15.0)	調整	外	回転ナデ	色調	外	5YR7/8橙色
写真	43	202	位置	カクラン		底径	(6.0)		内	回転ナデ		断	5YR7/6橙色
種別	土師器		層位			器高	5.7	胎土				内	5YR7/6橙色
器種	坏		焼成	良好		器厚	0.6				時期	９～10Ｃ	
残存	35%		黒斑		底部	回転糸切り後無調整					備考		

第２表　遺物観察表（その他）

図	13	1	出土遺構	第23次RA068	寸法 (cm・g)	全長	10.9	備考	
写真	45	219	出土位置			全幅	9.7		
種別	石器		出土層位	埋土		最大厚	3.5		
器種	磨石		残存率（％）	80		重量			

図	13	2	出土遺構	第23次RA068	寸法 (cm・g)	全長	10.5	備考	擦痕あり
写真	45	220	出土位置			全幅	8.4		
種別	石器		出土層位	埋土		最大厚	2.0		
器種	石皿		残存率（％）	50		重量			

図	21	1	出土遺構	第24次RA067	寸法 (cm・g)	全長	12.6	備考	
写真	46	223	出土位置	北東隅		全幅	13.8		
種別	石器		出土層位	床面直上		最大厚	6.2		
器種	凹石		残存率（％）	－		重量			

図	21	2	出土遺構	第24次RA067	寸法 (cm・g)	全長	27.5	備考	多孔質
写真	46	226	出土位置	南北ベルト		全幅	22.2		
種別	石器		出土層位	埋土上層		最大厚	16.5		
器種	凹石		残存率（％）	－		重量			

図	21	3	出土遺構	第24次RA067	寸法 (cm・g)	全長	20.7	備考	擦り面の表面はなめらか
写真	46	225	出土位置			全幅	6.2		
種別	石器		出土層位	埋土下層		最大厚	4.1		
器種	砥石		残存率（％）	100		重量			

図	21	4	出土遺構	第24次RA067	寸法 (cm・g)	全長	13	備考	
写真	46	222	出土位置	北西		全幅	7.5		
種別	石器		出土層位			最大厚	2.3		
器種	剥片		残存率（％）	－		重量			

図	21	5	出土遺構	第24次RA067	寸法	全長	13.7	備考	多孔質
写真	46	224	出土位置	南東隅	(cm・g)	全幅	10.5		
種別	石器		出土層位	Pit 5		最大厚	6.5		
器種	凹石		残存率(%)	―		重量			

図	21	6	出土遺構	第24次RA067	寸法	全長	2.1	備考	濃緑色
写真	46	227	出土位置	中央	(cm・g)	全幅	0.9		
種別	石製品		出土層位	床面直上		最大厚	―		
器種	管玉		残存率(%)	100		重量	0.2		

図	28	69	出土遺構	第23次RA061	寸法	全長	15.0	備考	1側面に複数の敲打痕
写真	47	228	出土位置	南西	(cm・g)	全幅	5.6		
種別	石器		出土層位	埋土下層		最大厚	2.9		
器種	敲石		残存率(%)	100		重量			

図	47	1	出土遺構	第23次RA061	寸法	全長	14.55	備考	刃部逆台形
写真	47	230	出土位置	カマド北袖	(cm・g)	全幅	15.35		
種別	鉄製品		出土層位	直上埋土		最大厚	1.35		
器種	鋤先		残存率(%)	100		重量	209.4		

図	47	2	出土遺構	第23次RA062	寸法	全長	9.8	備考	刃部円弧状
写真	47	231	出土位置	北端	(cm・g)	全幅	12.6		
種別	鉄製品		出土層位	貼床		最大厚	0.6		
器種	鋤先		残存率(%)	95		重量	48.3		

図	47	3	出土遺構	第24次RA069	寸法	全長	16.3	備考	錆著しい
写真	47	232	出土位置		(cm・g)	全幅	2.7		
種別	鉄製品		出土層位	埋土下層		最大厚	0.5		
器種	小刀		残存率(%)	80		重量	36.0		

図	47	4	出土遺構	第23次RA062	寸法	全長	11.2	備考	
写真	47	233	出土位置	北東	(cm・g)	全幅	3.7		
種別	鉄製品		出土層位	埋土下層		最大厚	0.7		
器種	鋤先		残存率(%)	35		重量	89.1		

図	47	5	出土遺構	第23次RA061	寸法	全長	31.35	備考	かえしは折り曲げ成形か？
写真	47	234	出土位置	―	(cm・g)	全幅	2.8		
種別	鉄製品		出土層位	埋土下層		最大厚	1.5		
器種	銛先		残存率(%)	100		重量			

図	49	4	出土遺構	第23次RD108	寸法	全長	15.5	備考	
写真	47	229	出土位置		(cm・g)	全幅	12.5		
種別	石器		出土層位	底面付近		最大厚	11.5		
器種	磨石		残存率(%)	―		重量			

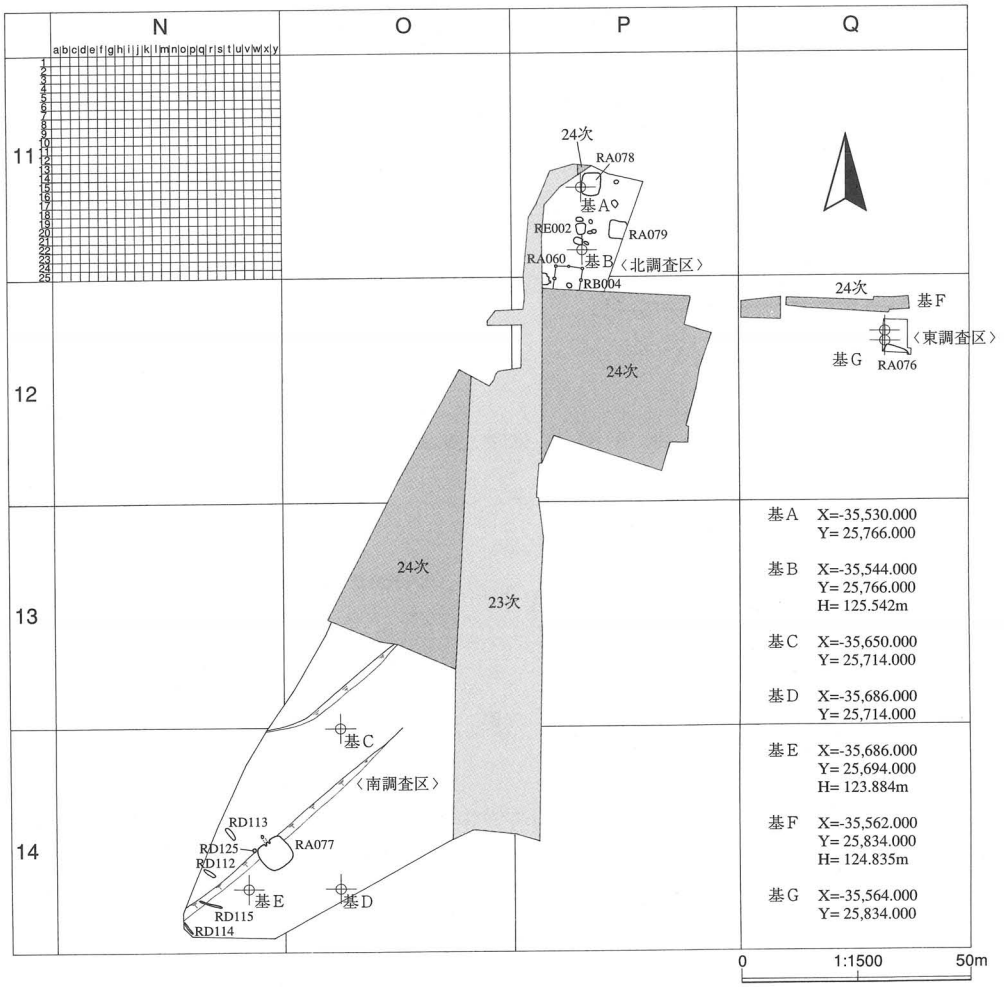
図	16	2	出土遺構	第23次RA071	寸法	全長	5.4	備考	側面上半ヘラケズリ
写真	45	221	出土位置	―	(cm・g)	全幅	5.5		
種別	土製品		出土層位	埋土２層		最大厚	4.1		
器種	紡錘車		残存率(%)	100		重量			

掲載遺物一覧の凡例

- 「寸法」数値の単位はcm
- 「寸法」の〈〉付き数値は推定値、〈〉付き数値は残存値
- 「器厚」の数値は最大値
- 「胎土」の〈〉内は含有鉱物
- 「胎土」の含有鉱物は肉眼観察のみ
- 「黒斑」は１次焼成のものに限定し、その場所を示した

Ⅴ　第29次調査

第29次調査区は3地点に別れ、それぞれ北・東・南調査区とした。観察表の出土地点に記載した調査区名は、第54図に示した北・東・南調査区表記を用いた。第29次調査では、竪穴住居跡5棟（うち1棟は第23次調査区に跨る）・掘立柱建物跡1棟・住居状遺構1棟・陥し穴状土坑4基・土坑10基・柱穴状土坑157個を調査した。土器の掲載遺物選定にあたっては、センター基準に従った。RZ等で胴部のみの出土である場合は、胴部片を掲載した。鉄製品・石器は全点掲載した。各遺構の事実記載の［出土遺物］には、総点数と掲載数を記載した。



第54図　第29次調査遺構配置図

1　竪穴住居跡

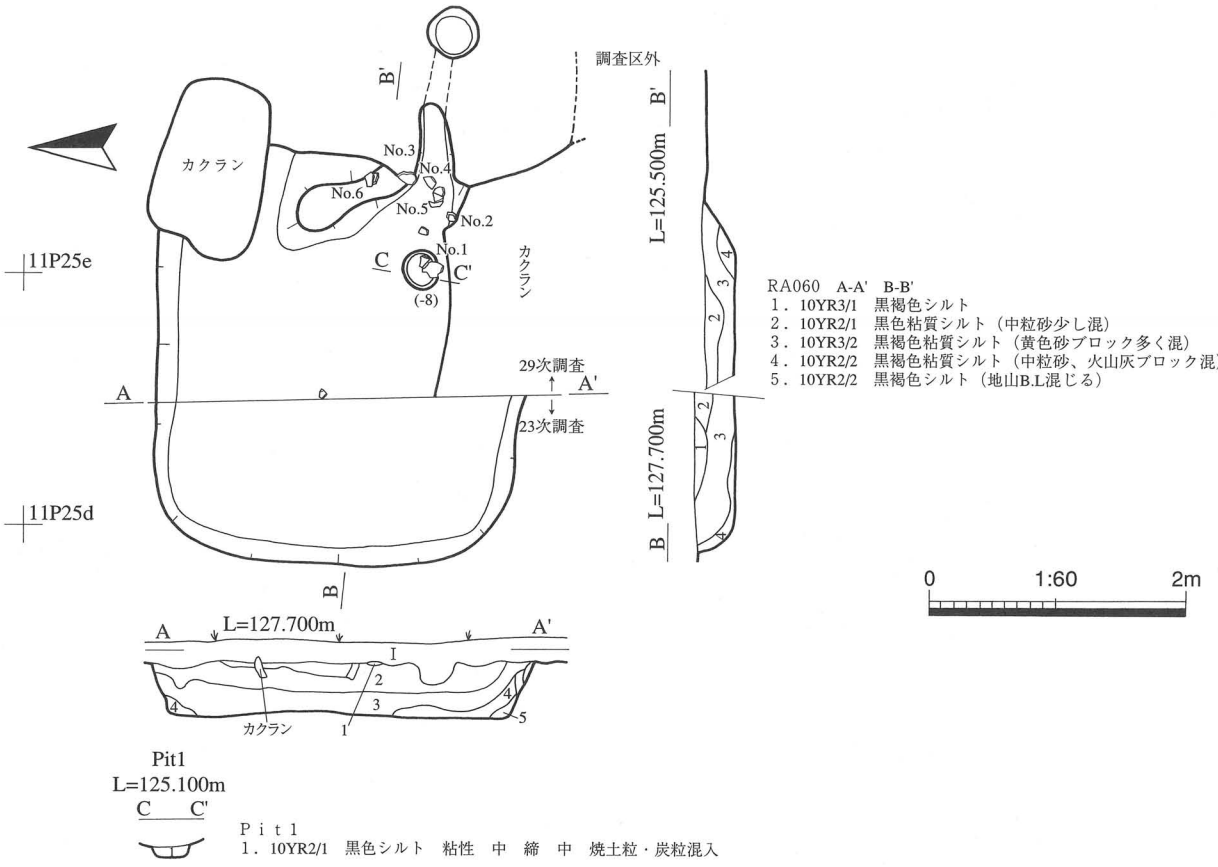
ＲＡ０６０

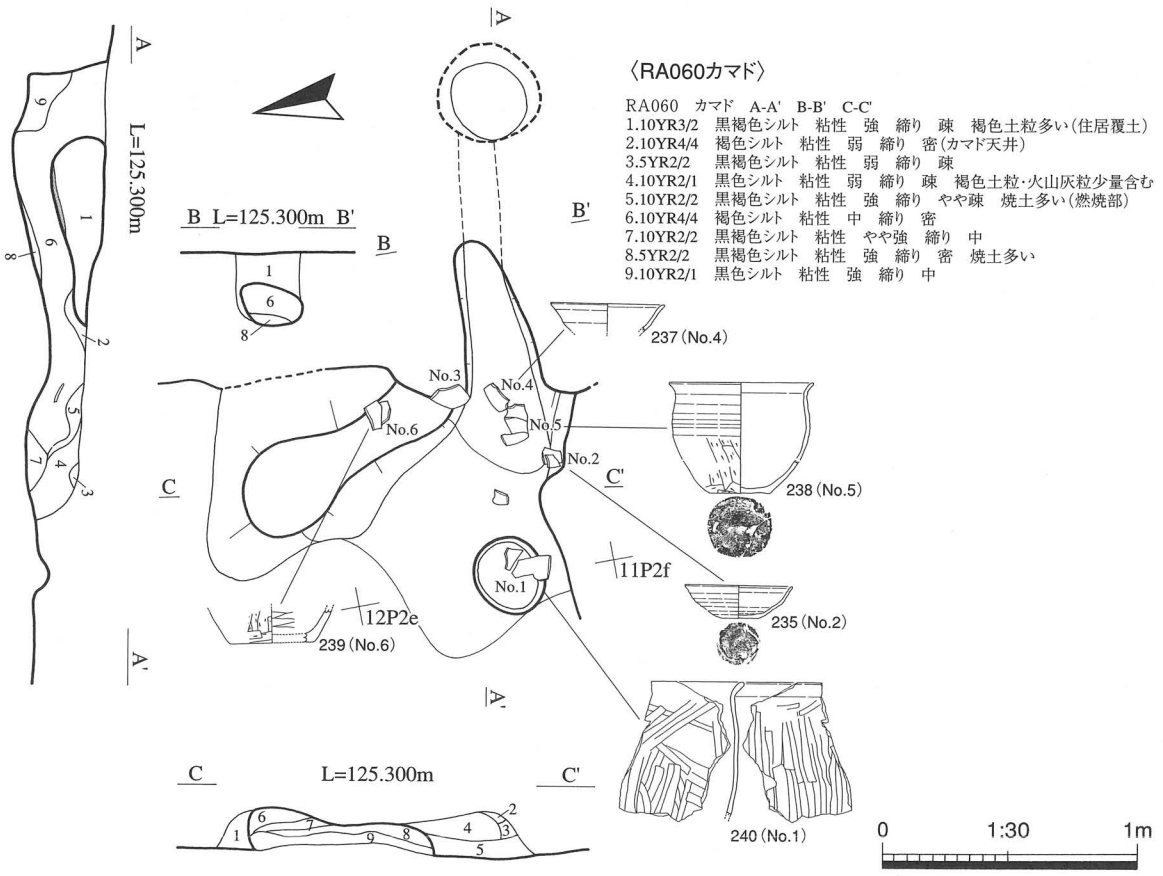
遺構（第55図・写真図版49）

［位置］　西半が第23次調査分、東半が第29次調査分で、北調査区11P23dグリッド付近に位置する。

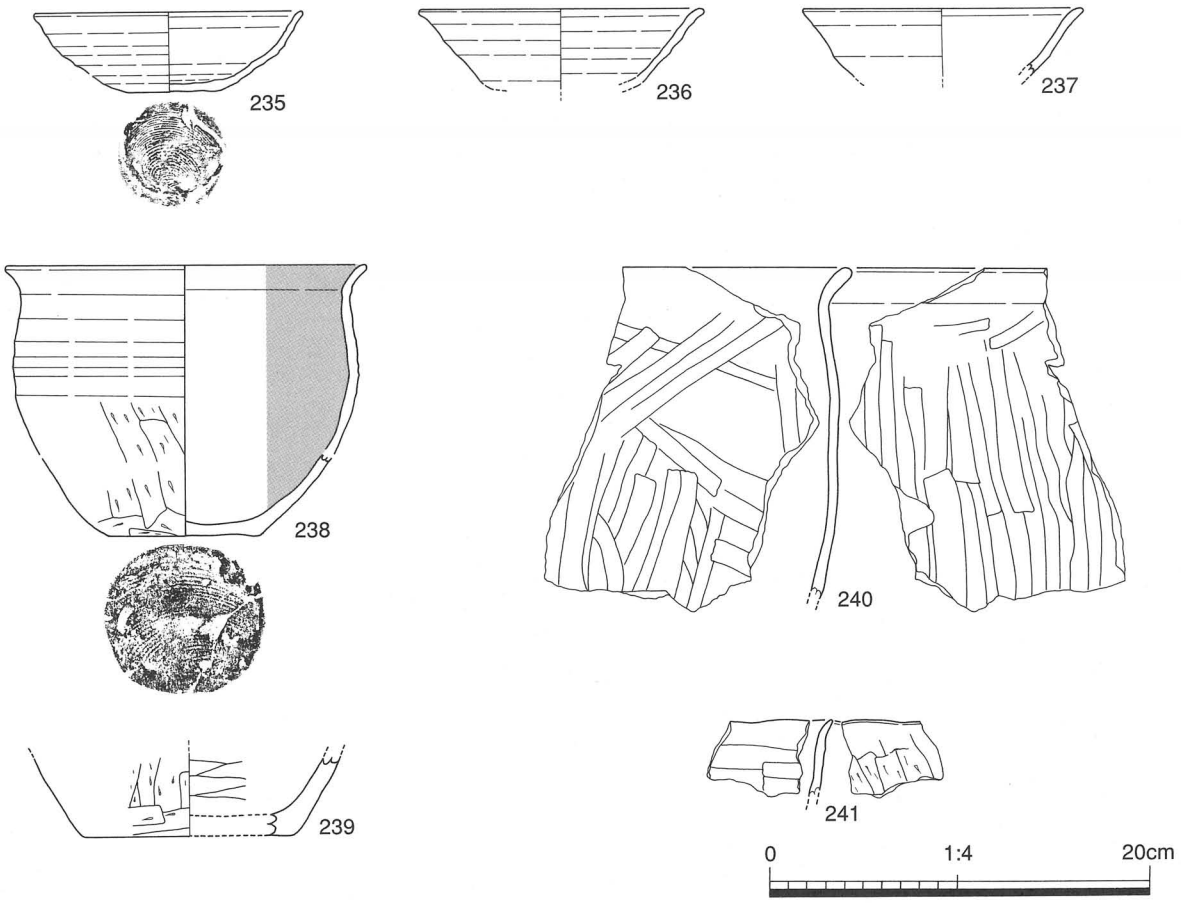
［平面形・規模］　第23次調査分と合成し、方形を呈することが判明した。残存長は北壁3.28ｍ、東壁3.00ｍ、南壁3.00ｍ、西壁は撹乱が認められず2.78ｍである。深さは40㎝を測る。

［堆積土］　4層に分層され、4層に火山灰粒が混入する。堆積土は第23次調査区（住居西半）と共通





第55図　RA060住居跡



第56図　RA060住居跡出土遺物

するため、土層注記は第23次調査区で記録されたものを記載した。1層は23次調査区でのみ確認された。2・3層は黒色堆積土である。堆積は自然のレンズ状堆積の様相を示す。

[壁・床面]　壁はほぼ直立する。カマド周辺の床面は硬く締まっている。

[カマド]　1基東壁で検出している。カマドの主軸方向はN－98°－Eである。南袖部部は撹乱されているが、北袖部部は残存する。北袖部長さは83㎝、黒褐色土と黒色土が互層をなしており、土を数回に分けて盛り上げて作ったと考えられる。カマド内部に支脚は認められない。

煙道部部は全長1.32ｍ・径0.25mで、直径0.35ｍ・深さ35㎝の煙出し部部に向けて緩やかに下降する刳り貫き式である。天井部は著しく被熱しており赤変している。

[柱穴]　明確な柱穴は確認できなかった。カマド西にピットが認められるのみである。

[土坑]　確認されなかった。

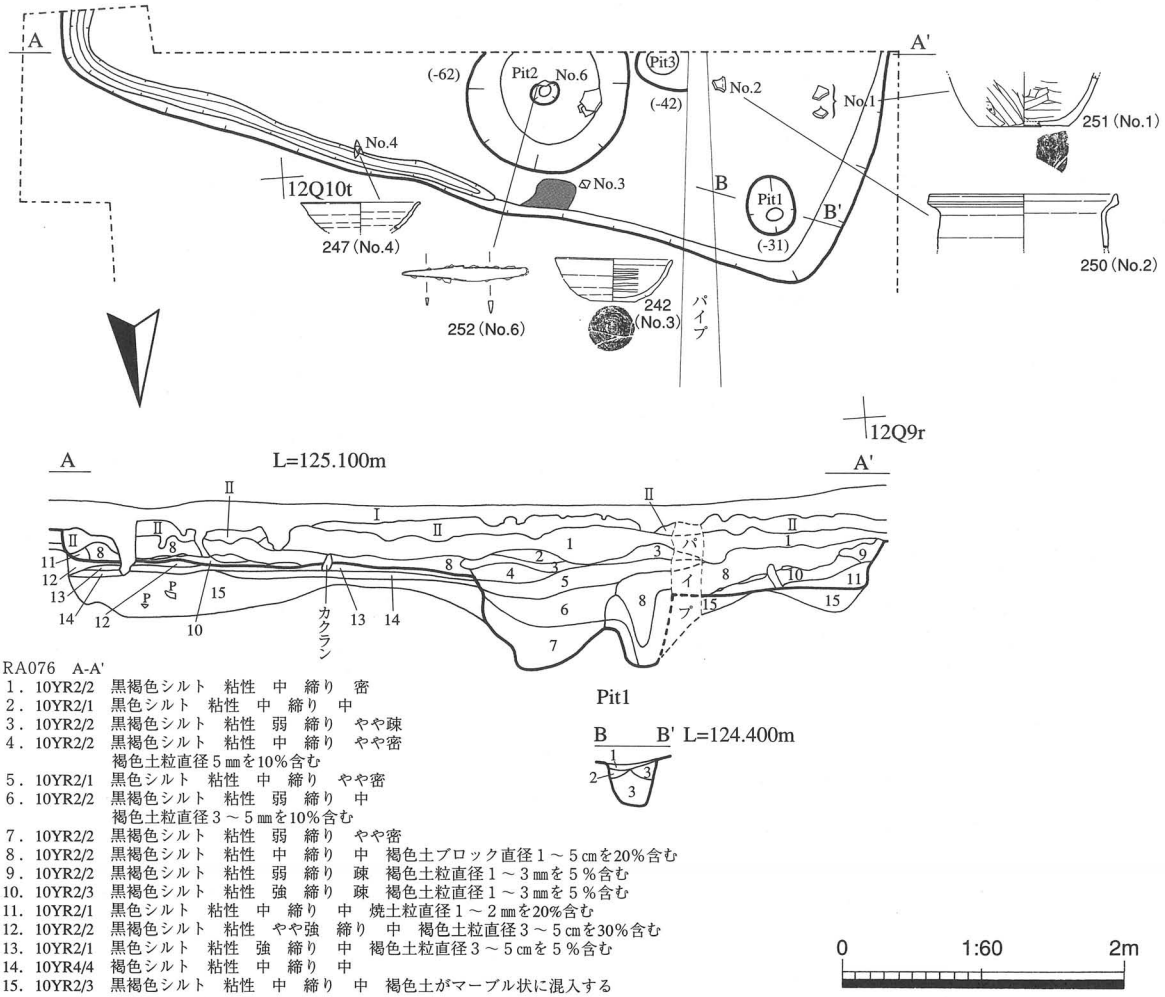
遺物（第56図・写真図版62）

[出土遺物]　土師器（非黒色処理）坏口縁部18点出土しており、3点を掲載する。土師器（黒色処理）口縁部破片1点・土師器台付坏破片1点出土しているが、微小であるため不掲載とした。土師器甕口縁部は8点中2点、底部は1点中1点、土師器鉢は1点中1点掲載した。

遺物は全て第29次調査区のカマド内および周辺から出土している。カマド内の遺物出土状況は、煙道部入口と北袖部内側、ピット上面からの出土である。

土師器坏（235）・鉢（238）とも底面に回転糸切痕が認められる。（238）はロクロ成形が施されている。土師器（黒色処理）坏片が1点出土しているものの、土師器（非黒色処理）坏が18点と卓越する。

小結　遺構の時期は、出土遺物の特徴から9世紀後半～10世紀前半と考えられる。



RA076　A-A'
1．10YR2/2　黒褐色シルト　粘性　中　締り　密
2．10YR2/1　黒色シルト　粘性　中　締り　中
3．10YR2/2　黒褐色シルト　粘性　弱　締り　やや疎
4．10YR2/2　黒褐色シルト　粘性　中　締り　やや密
　褐色土粒直径5㎜を10%含む
5．10YR2/1　黒色シルト　粘性　中　締り　やや密
6．10YR2/2　黒褐色シルト　粘性　弱　締り　中
　褐色土粒直径3～5㎜を10%含む
7．10YR2/2　黒褐色シルト　粘性　弱　締り　やや密
8．10YR2/2　黒褐色シルト　粘性　中　締り　中　褐色土ブロック直径1～5㎝を20%含む
9．10YR2/2　黒褐色シルト　粘性　弱　締り　疎　褐色土粒直径1～3㎜を5%含む
10．10YR2/3　黒褐色シルト　粘性　強　締り　疎　褐色土粒直径1～3㎜を5%含む
11．10YR2/1　黒色シルト　粘性　中　締り　中　焼土粒直径1～2㎜を20%含む
12．10YR2/2　黒褐色シルト　粘性　やや強　締り　中　褐色土粒直径3～5㎝を30%含む
13．10YR2/1　黒色シルト　粘性　強　締り　中　褐色土粒直径3～5㎝を5%含む
14．10YR4/4　褐色シルト　粘性　中　締り　中
15．10YR2/3　黒褐色シルト　粘性　中　締り　中　褐色土がマーブル状に混入する

RA076　Pit1　B-B'
1．10YR2/2　黒褐色シルト　粘性　強　締り　疎
2．10YR3/4　暗褐色シルト　粘性　やや強　締り　やや疎　褐色土ブロック直径5～10㎝を20%含み斑状をなす
3．10YR3/2　黒褐色シルト　粘性　やや強　締り　やや疎

第57図　RA076住居跡

ＲＡ０７６

遺構（第57図・写真図版50）

［位置］　第29次調査の東調査区の12Q10tグリッド付近に位置し、第15次調査区のRA049から5ｍ、RA047から3m（推定）の間隔を置く。検出面はⅢ層上面である。東調査区の南端に一部検出された。調査区内でも調査時使用中のパイプが通っていたため、掘削していない部分がある。

［平面形・規模］　平面形は調査区内だけで確認した範囲から方形を呈すると推測される。規模は北壁5.7mで、他は調査区外に延びるため不明。主軸方向はＮ－20°―Ｅの可能性がある。

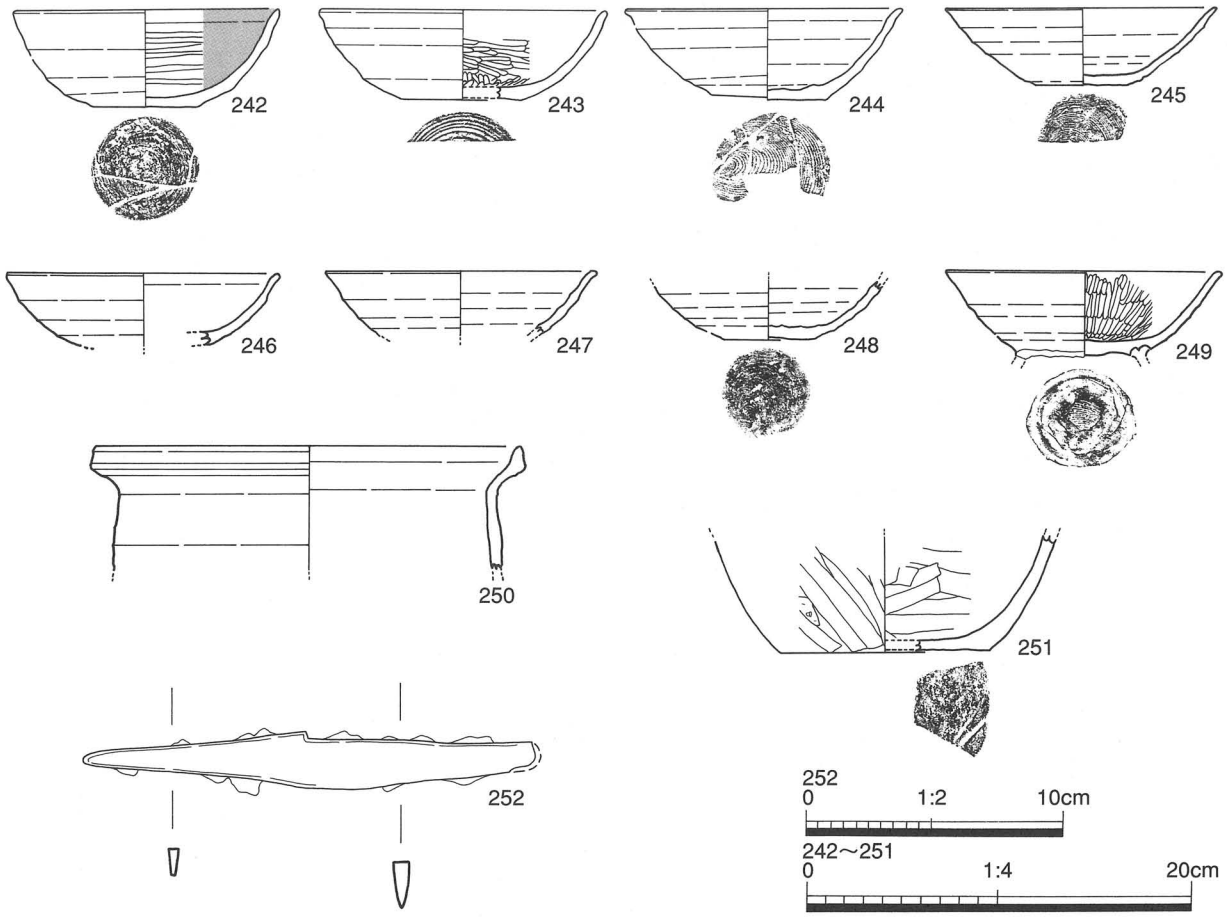
［堆積土］　黒褐色土主体で、褐色土粒が多く含まれる。覆土下層12層上面に焼土および炭が層をなしている。灰白色火山灰は8層中に粒子で含まれる。レンズ状の自然堆積を呈する。

［壁・床面］　北壁は急傾斜で立ち上がる。壁高は東壁12㎝、北壁22㎝、西壁36㎝残存する。掘り方埋土上面を床面としており、ほぼ平坦で床面東ほど硬化している。

［カマド］　第29次調査区では検出していない。調査区範囲外に位置すると思われる。

［柱穴］　北西隅のピット1は柱の痕跡はなく、径35㎝深さ26㎝である。調査区境のピット3は柱痕が顕著で、掘り方を含めた規模は直径36㎝深さ42㎝である。

［土坑］　中央に1基認められる。直径125㎝深さ62㎝で、貯蔵穴と考えられる。層相は住居堆積土



第58図　RA076住居跡出土遺物

に類似する。

遺物（第58図・写真図版62・63）

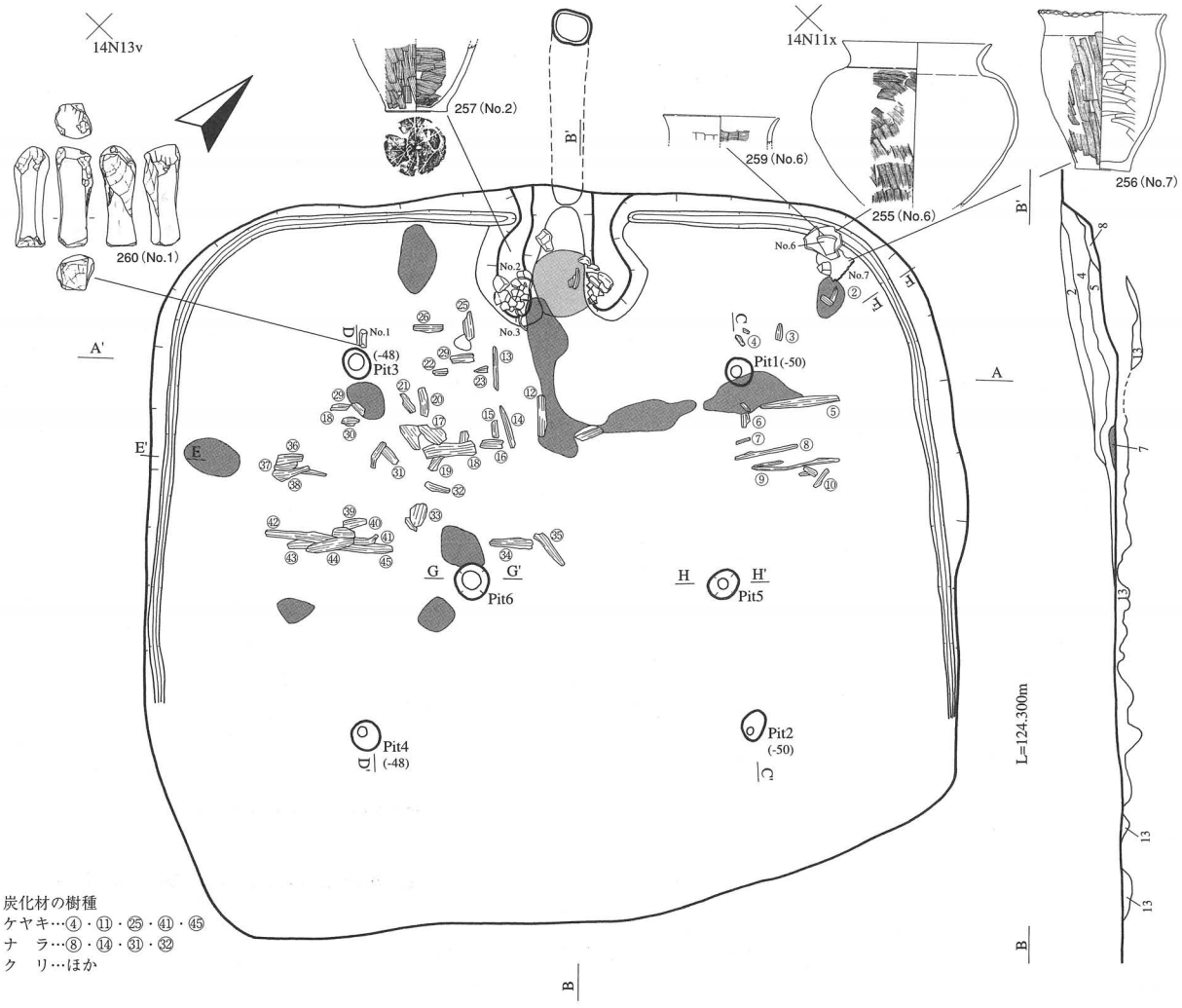
[遺物]　土師器（非黒色処理）口縁部総数5点中4点、土師器（黒色処理）口縁部3点中2点、台付坏口縁部1点中1点、土師器甕口縁部1点中1点、底部2点中1点掲載した。土器以外には刀子1点が出土している。

242・244・245は貼床、246・248・252はピット2、他は床面出土である。覆土中の出土はほとんど認められない。242は底面ヘラケズリ、243～245・248・249は回転糸切りである。249の台部は剥落しているが、回転糸切り後に台部をナデによって貼りつけている痕跡が認められる。土師器（内面黒色処理）の坏・台付坏は放射状のヘラミガキが顕著である。250はロクロ成形による土師器甕である。251は底面砂底である。252はピット2上面から出土した。現存長11.8㎝・（刃部長6.0㎝・幅1.2㎝・厚さ0.4㎝）・（基部長5.8㎝・幅0.7㎝・厚さ0.3㎝）である。

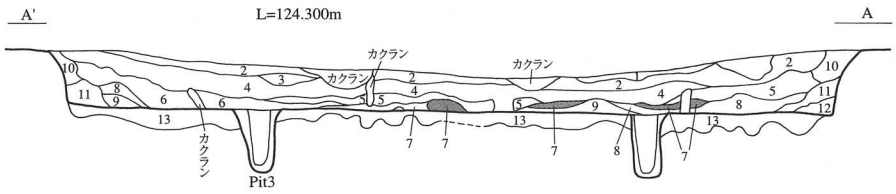
土師器（非黒色処理）坏と（黒色処理）坏との組成比は5：3で、（非黒色処理）がやや多いが、ＲＡ０６０と比較すると、（黒色処理）坏の割合が多い。

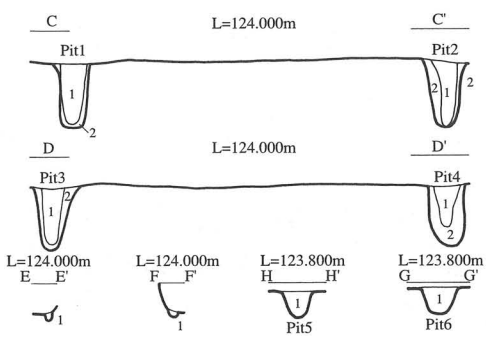
小結　RA076住居跡が位置する東調査区は、第15次調査区に隣接する。第15次調査区で検出されたRA045・047・048・049は奈良時代の竪穴住居跡で、全て北西壁にカマドが作られている。一方で平安時代のカマドは東壁に造られることが多く、RA076に関してもカマドは東壁で検出される可能性が高い。

遺構の時期は、出土遺物の特徴から9世紀後半から10世紀初頭と考えられる。



炭化材の樹種
ケヤキ…④・⑪・㉕・㊶・㊺
ナ　ラ…⑧・⑭・㉛・㉜
ク　リ…ほか





RA077　A-A'　B-B'
1．10YR2/2　黒褐色シルト　粘性　中　締り　中　直径2～3㎝の白色火山灰が5%混入し斑状をなす
2．10YR2/3　黒褐色シルト　粘性　強　締り　やや密
3．10YR2/2　黒褐色シルト　粘性　中　締り　中　直径2～3㎝の白色火山灰が20%混入
4．10YR2/2　黒褐色シルト　粘性　強　締り　やや密　炭粒直径1～2㎜を5%含む
5．10YR2/3　黒褐色シルト　粘性　中　締り　やや密　褐色土粒直径5㎜～1㎝を20%含む
6．10YR2/3　黒褐色シルト　粘性　中　締り　中　褐色土粒直径1～3㎜を10%含む
7．10YR3/3　暗褐色シルト　粘性　強　締り　やや密　焼土粒直径5㎜5%、炭粒直径5㎜5%含む
8．10YR3/4　暗褐色シルト　粘性　強　締り　中　褐色土ブロック直径3～5㎝を40%含み斑状をなす
9．10YR3/2　黒褐色シルト　粘性　中　締り　中　褐色土粒直径1～3㎜を3%含む
10．10YR2/1　黒色シルト　粘性　強　締り　やや密　褐色土ブロック直径3㎝を3%含む
11．10YR2/1　黒色シルト　粘性　やや強　締り　密　褐色土ブロック直径3㎝を1%含む
12．10YR4/4　褐色シルト　粘性　強　締り　中　黒褐色シルトを30%含み斑状をなす
13．10YR4/4　褐色シルト　粘性　強　締り　密　10YR2/2黒褐色シルトを部分的に含む（貼り床）

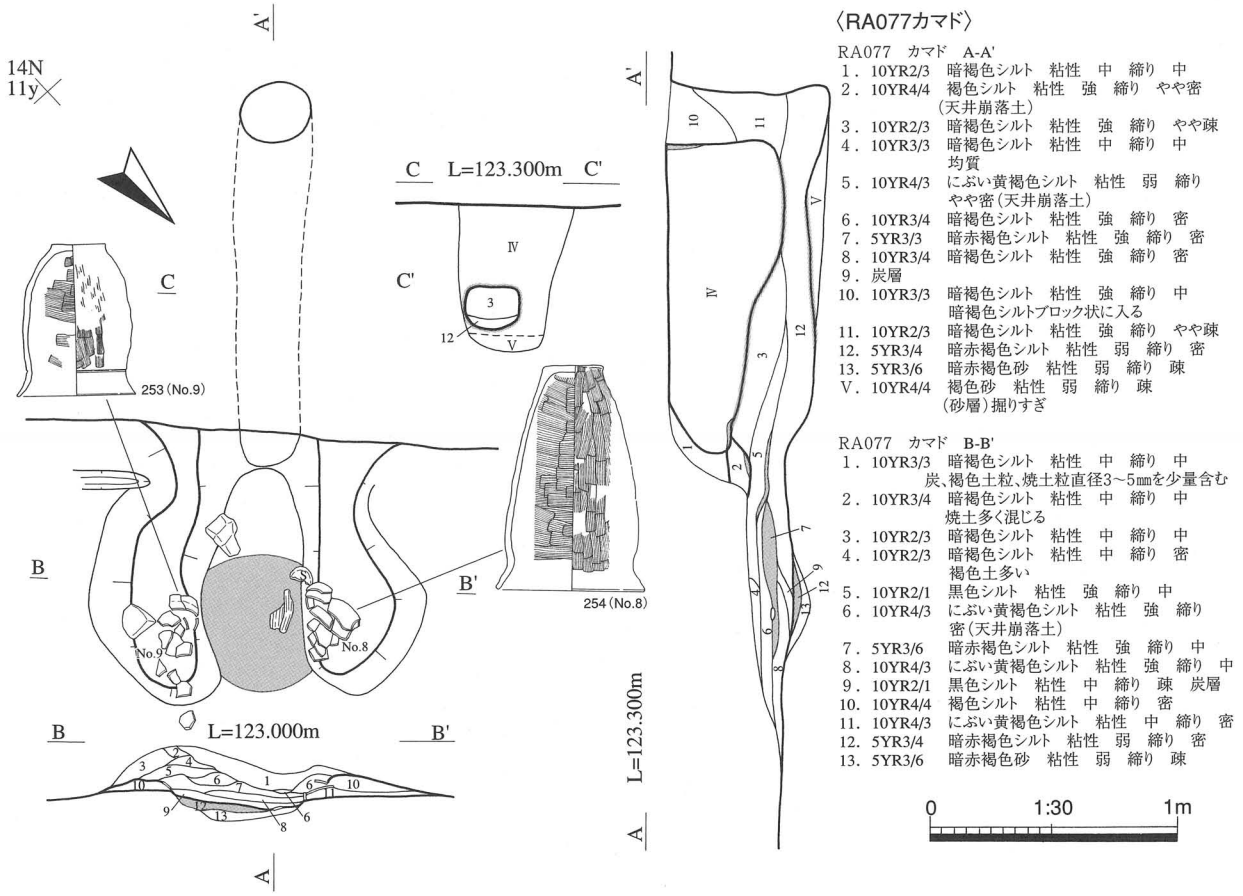
RA077　Pit1～4　C-C'　D-D'
1．10YR2/3　黒褐色シルト　粘性　強　締り　疎　炭少量、焼土多、上面焼土多い
2．10YR4/4　褐色シルト　粘性　強　締り　密　褐色土ブロック多い、掘り方

RA077　周溝　E-E'　F-F'
1．10YR2/1　黒色シルト　粘性　強　締　中

RA077　Pit5･6　H-H'　G-G'
1．10YR3/3　暗褐色シルト　粘性　中　締　中　炭粒少量含む

0　1:60　2m

第59図　RA077住居跡（1）



第60図　RA077住居跡（２）

ＲＡ０７７

遺構（第59・60図・写真図版51・52）

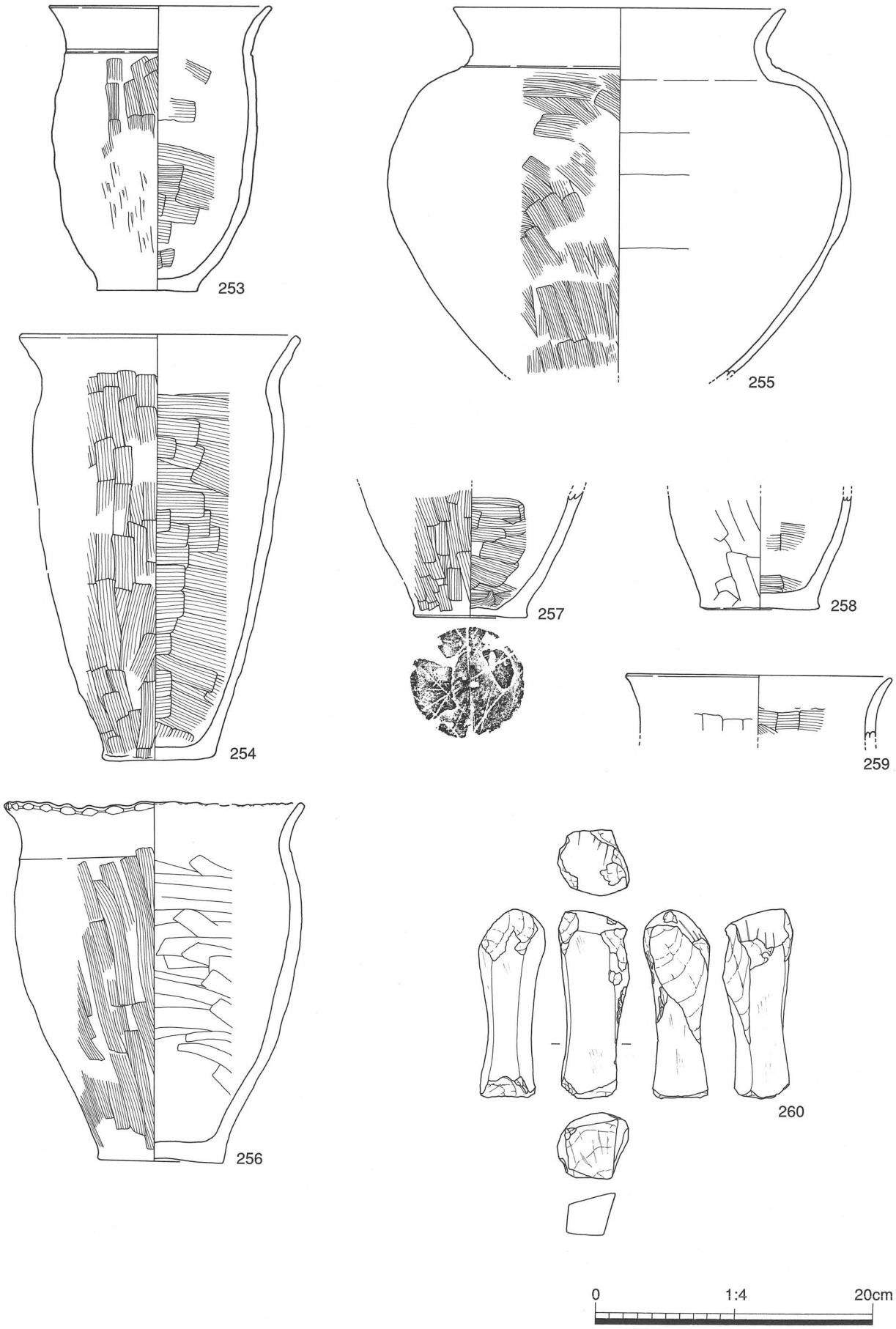
[位置]　第29次調査南調査区の14N11xグリッド付近に位置する。第23次調査区RA066から南西に50ｍの距離を置く。

[平面形・規模]　住居の南東側は水田耕作により削平され、わずかに貼り床を残すのみであるが、貼り床の残存状況から、平面形は方形を呈すると考えられる。規模は6.0ｍ×6.4ｍ。主軸方向はＮ－45°―Ｗである。壁の残存長は、北西壁6.23ｍ、北東壁（推定5.28ｍ）、南東壁6.23ｍ、南西壁5.92ｍである。

[堆積土]　床面直上に炭化材と焼土が多量に検出された。検出範囲はカマド側に偏るが、南東側は撹乱によって削平された結果である。炭化材は南西―北東と北西―南東の２方向に向いて出土しており、上屋構造を知る手掛かりとなりうる。出土炭化材は全て肉眼による樹種同定を行っており、ケヤキが④・⑪・㉕・㊶・㊺、ナラが⑧・⑭・㉛・㉜、他が全てクリとの結果を得ている。炭化材は焼土上面および下面からも出土しており、上屋上面に土が葺いてあった可能性もある。炭化材・焼土堆積後、堆積土は黒色土を主にしておりレンズ状に堆積している。堆積土１・３層に灰白色火山灰の混入が認められる。

[壁・床面]　壁はほぼ垂直に立ち上がる。深さは50㎝程度である。床面はカマド周辺ほど硬化が認められるが、南東側は撹乱を受けているため、全体の様相を知りえない。

床面壁際には周溝が廻る。周溝は幅10～14㎝深さ８㎝程度で、カマド袖部脇から設定されている。



第61図　RA077住居跡出土遺物

南東側は撹乱により貼り床の一部まで削平されており、周溝も削平されている。

［カマド］　北西壁に1基確認した。北西壁のほぼ中央に位置する。カマドの主軸方向はN－44°―W方向である。煙道部は長さ1.58ｍ直径43㎝で、直径29㎝深さ64㎝の煙出し部に向けて下降する刳り貫き式である。煙道部および煙出し部は著しく被熱している。袖部は褐色土を基本に構築されており、南袖部に253、北袖部に254が逆位で据えてあった。南袖部には自然礫も出土しており、カマド構築材料として用いられた可能性もある。南袖部の長さは108㎝、北袖部の長さは96㎝である。支脚は出土していない。北袖部土器No.8の脇の燃焼部から出土した炭化材の樹種はクリである。平坦な板状の形状を呈し、床面から出土したクリ材より繊維が解れており、カマド使用に伴う燃料として使用された可能性がある。

［柱穴］　4本柱で構成される。ピット1～4は柱痕跡を明確に残す柱穴で、平均直径27.5㎝深さ49.25㎝木柱痕跡直径17㎝である。ピット5・6は柱痕跡がなく、深さも浅いため柱穴である可能性は低い。ピット1～4の配置を観察すると、住居の中央を中心とした4本柱構成となっている。

［土坑］　土坑・貯蔵穴は検出されなかった。

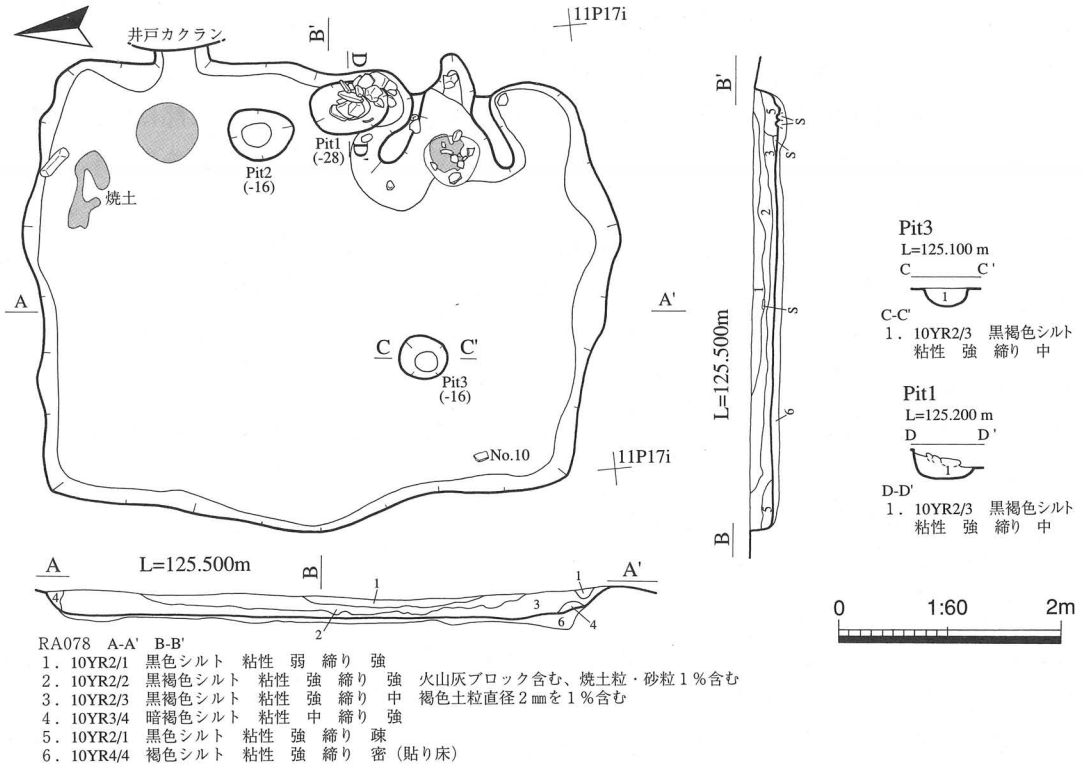
遺物（第61図・写真図版63・64）

［出土遺物］　土師器坏（黒色処理）の極小破片1点（貼り床）、土師器甕口縁部6点、底部7点、砥石1点が出土している。うち土師器甕口縁部5点、底部2点、砥石1点を掲載した。253・254はカマド袖部に再利用されたものである。255・256・259は住居北隅に一括して全て横位の状態で出土した。256の上に255が折り重なるように検出した。256は土圧で割れるもののほぼ完形であるが、255は検出時すでに上片側が失われており、下片側内面を上にした状態で確認した。上片側は耕作により失われた可能性がある。

RA077出土土器で特筆されるのは256である。頸部に括れがあり、口縁部にかけて緩やかに広がる器形を呈する。胴部はやや膨らむが、口縁部が最大径となる。内面はヘラ削り、外面はハケメ調整が施される。胎土・調整・焼成は在地の様相を呈しているが、口縁端部に指頭押圧による加飾が施されている。内面端部は指頭押圧によって波状に膨らむ。口縁端部文様は、縄文時代晩期中葉～後葉に当該地域に多く出土する粗製深鉢に顕著な文様に酷似する。類例として宮城県古川市名生館官衛遺跡SI1255ｂ住居跡に1点認められるものの、全体像を把握できる資料は他になく、非常に希少な例といえる。ただし、名生館官衛遺跡資料は底部から頸部にかけて直立する器形を呈しており、器形の上では256とは異なる。256は、器形と口縁部装飾の点では縄文時代晩期後半の粗製土器に近似し、調整は古代の土師器と共通する。

砥石260はカマド南のピット3脇床面直上で出土した。砥石は凝灰岩製で仕上げ砥石と判断される。5面に使用面が認められ、上面以外の使用面は湾曲しており、非常に使い込まれている。

小結　当住居跡は焼失住居で、床面に多数の炭化材と焼土を検出した。床面に散在する炭化材は、壁際にはほとんど認められず、4本柱穴の内側から多く出土している。床面直上から出土した炭化材には焼土が多量に伴っており、上屋に土が被せてあった可能性も考えられる。壁際には隅の三角堆積の傾斜に沿って焼土が堆積しており、住居廃棄後一定の時間を置いてから上屋構築物が焼失したと考えられる。また、当住居跡からは貼り床出土を除き、坏が1点も出土していない。このことからも住居廃絶後、一定の時間があったと考えられる。住居北隅には在地の球胴甕と一括して口縁端部装飾のある特殊な甕が出土しており注目される。また、甕が多く出土しているにも関わらず、貼り床出土の土師器（黒色処理）坏口縁部小破片以外、坏の出土が認められないことも特筆される。住居形態および出土遺物から奈良時代8世紀と考えられる。



第62図　RA078住居跡（１）

ＲＡ０７８

遺構（第62・63図・写真図版53・54）

[位置]　第29次調査北調査区11P14hグリッド付近に位置する。RA079から6.6ｍ、RE002から5.8ｍ、RA060から18.8ｍを測る。

[平面形・規模]　3.9×4.65ｍの長方形を呈する。壁の残存長は北壁3.9ｍ、東壁4.65ｍ、南壁3.3ｍ、西壁4.64ｍを測る。深さは最も深いところで19㎝である。

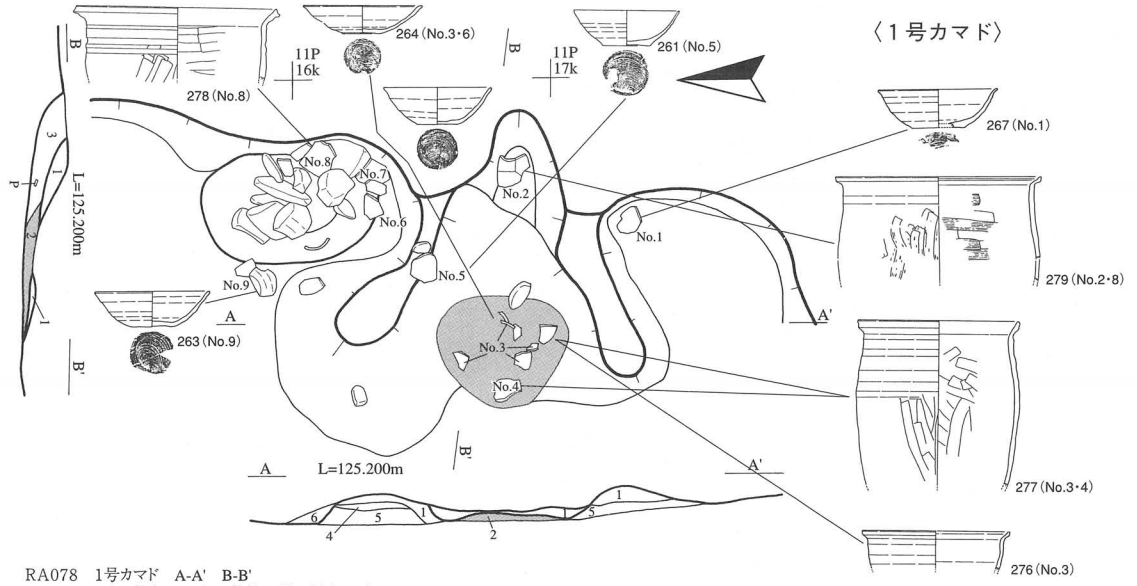
[堆積土]　壁際には暗褐色土の三角堆積が認められ、全体的に黒褐色土の緩やかなレンズ状堆積の様相を示す。２号カマド北脇の床面直上に焼土の堆積が認められるが、RA078には炭化材の出土が認められないため、当住居跡は焼失住居とは考えられない。

[壁・床面]　壁は北・東・西壁においてほぼ垂直に、南壁はやや緩やかに立ち上がる。床面は全体的に硬化が認められるが、１号カマド周辺が著しい。

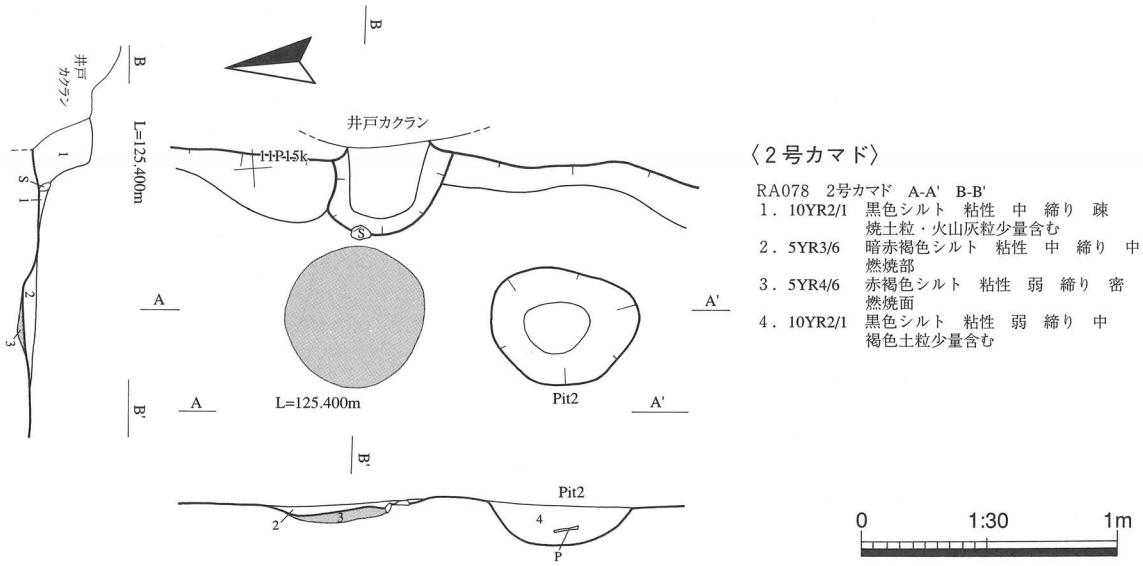
[カマド]　東壁に２基検出した。２号カマドは北寄りに配置され、袖部燃焼部が欠落しており、旧期のカマドと判断される。１号カマドは南寄りに位置し、新期カマドと考えられる。

１号カマドの主軸方向はＮ－100°―Ｅである。遺構は上面が著しく削平されており、浅くしか残存していないため煙道部部分は検出されなかった。煙道部長は残存するだけで35㎝径20㎝である。煙道部部分と同様に煙出し部も検出されなかった。袖部は褐色土と暗褐色土で構成される。煙道部入り口には土師器甕破片279が出土しているが、完形ではないためカマドに据えられた甕とは考えられない。燃焼部からも土師器（非黒色処理）坏・土師器甕破片が出土している。カマド北脇にピット１があり、１号カマドに伴う貯蔵穴と考えられる。

２号カマドの主軸方向は不明だが、１号カマドとほぼ同方向と考えられる。旧期のカマドであるため床面の被熱面のみ残存し、袖部部・燃焼部は喪失している。煙道部は径32㎝長さ35㎝のみで、東側は井戸の撹乱が及んでいる。カマド南脇にピット２があり、２号カマドに伴う貯蔵穴と考えられる。



RA078　1号カマド　A-A'　B-B'
1．10YR4/4　褐色シルト　粘性　弱　締り　密
2．10YR5/6　黄褐色シルト　粘性　中　締り　やや疎　焼土多く含む
3．10YR3/4　暗褐色シルト　粘性　中　締り　中　焼土多く含む
4．10YR3/4　暗褐色シルト　粘性　弱　締り　強　焼土少量含む
5．10YR3/4　暗褐色シルト　粘性　弱　締り　強　焼土少量含む、褐色土粒直径２～３㎜を多く含む
6．10YR3/2　黒褐色シルト　粘性　弱　締り　中　焼土粒・褐色土粒少量含む



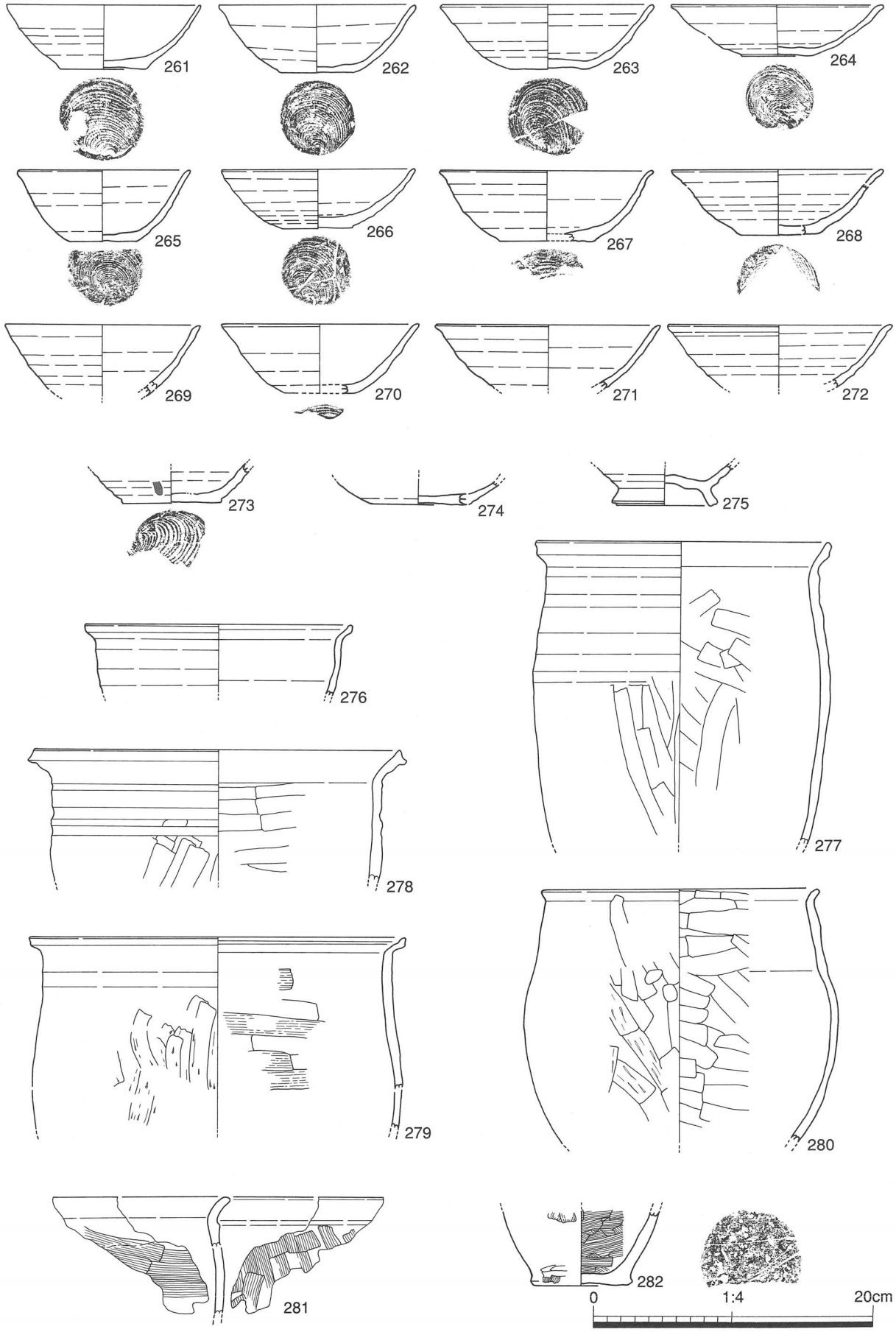
RA078　2号カマド　A-A'　B-B'
1．10YR2/1　黒色シルト　粘性　中　締り　疎
　焼土粒・火山灰粒少量含む
2．5YR3/6　暗赤褐色シルト　粘性　中　締り　中
　燃焼部
3．5YR4/6　赤褐色シルト　粘性　弱　締り　密
　燃焼面
4．10YR2/1　黒色シルト　粘性　弱　締り　中
　褐色土粒少量含む

第63図　RA078住居跡（２）

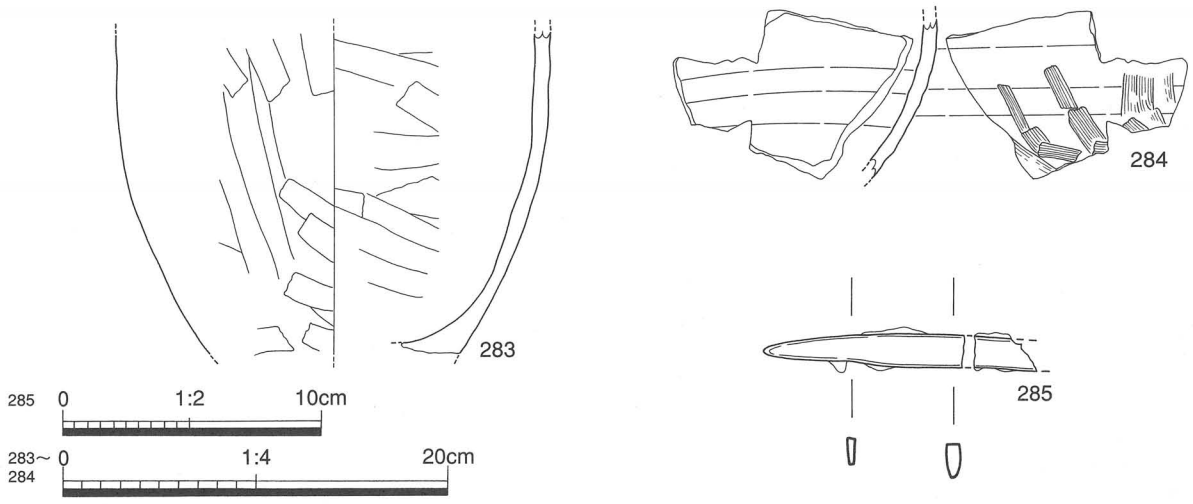
[柱穴]　１個検出した。ピット３は住居南西に位置し、径42×40㎝深さ16㎝で、黒色土で構成される単層を示す。柱痕が認められない上にごく浅く、対応する柱穴も検出されなかったため、柱穴でない可能性もある。

[土坑]　各カマド脇に１個ずつ貯蔵穴が検出された。ピット１は１号カマドに伴う貯蔵穴と考えられ、堆積土は単層である。堆積土中から土師器（非黒色処理）坏262・土師器甕278が出土している。壁際からピット上面にかけて自然礫を多量に検出している。土器は自然礫に混入するものや、自然礫上面からも出土している。

ピット２は２号カマドに伴う貯蔵穴と考えられる。堆積土は単層で、黒色土で構成される。土師器（非黒色処理）坏３点・土師器（黒色処理）坏２点の極小破片が出土している。



第64図　RA078住居跡出土遺物（１）



第65図　RA078住居跡出土遺物（２）

遺物（第64・65図・写真図版64・65・66）

[出土遺物]　土師器（非黒色処理）坏口縁部片総数42点中12点、底部11点中２点を掲載した。坏は他に土師器（黒色処理）口縁部２点・底部５点、須恵器口縁部１点が出土しているが、極小破片であったため不掲載とした。台付坏は土師器（非黒色処理）台部が１点出土しており、１点掲載した。土師器（内外黒色処理）台部が１点出土しているが、小破片のため不掲載とした。甕は土師器（非黒色処理）口縁部片が20点出土しており、うち６点を掲載した。底部片は７点中２点を掲載した。胴部片では、須恵器壺の破片が１点出土している。

土器は覆土からも出土しているが、残存状態が良く、器形復元できる個体は大部分が下層および床面直上・カマド周辺からの出土である。

坏で底面が残存しているものは全て回転糸切り痕が認められる。坏口縁部点数の組成比をみると、土師器（非黒色処理）が42点で坏全体の94％、土師器（内外面黒色処理）１点・２％、土師器（内面黒色処理）１点・２％、須恵器１点・２％を占めており、圧倒的に土師器（非黒色処理）が卓越する。この構成比はRA060の土師器（非黒色処理）１：土師器（黒色処理）18の割合に類似する。甕は全てロクロ成形による。

273は墨書土器である。胴部下半～底部の破片資料であるため、全体の様相を知り得ないが、胴部下半に縦線が引かれている。Q2下層、１号カマド周辺からの出土である。

土器以外には、刀子が１点出土している。１号カマド周辺の覆土下層から出土した。現存長7.0㎝、幅0.6～0.9㎝、厚さ0.2～0.35㎝を測る。端部を持たない破片があり、接合しないが同一個体と考えられる。

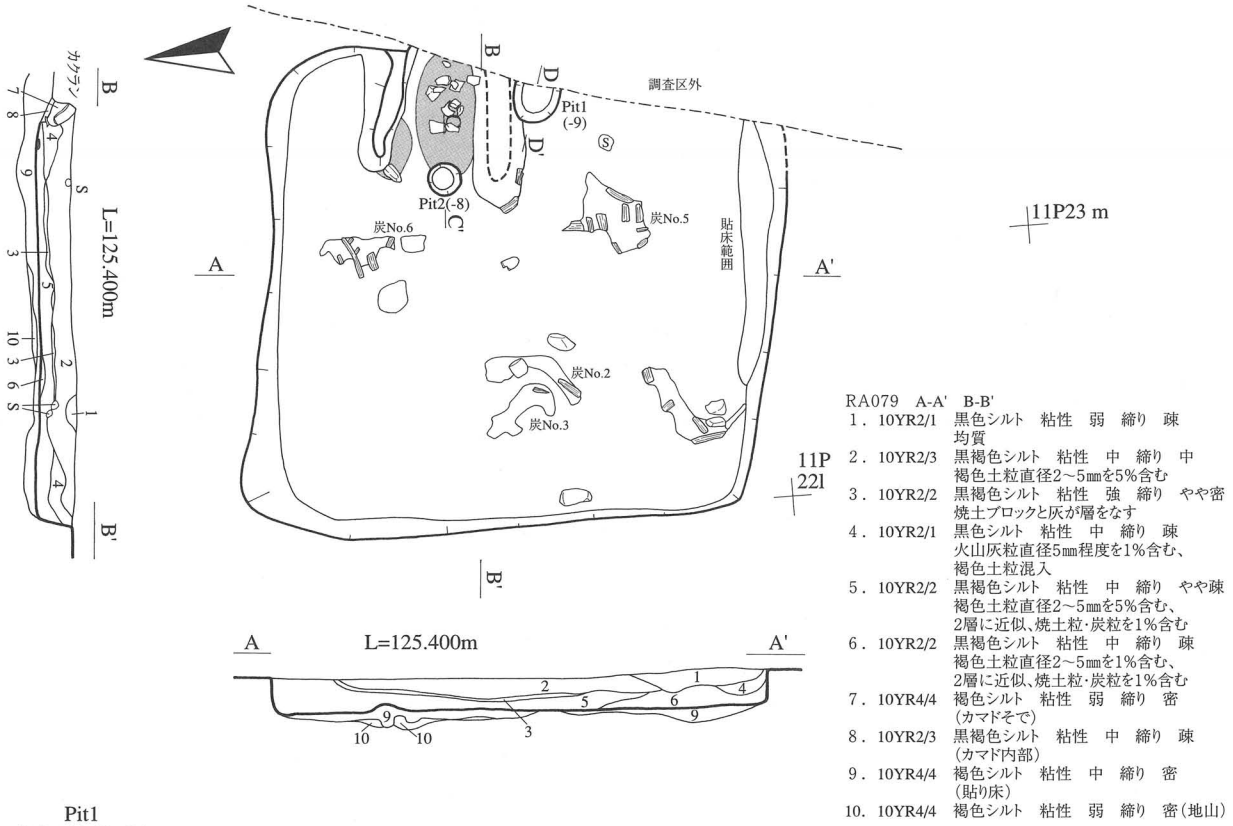
小結　当住居跡は東壁にカマドが２基作られている。北側の２号カマドは旧カマドで、ピット２が貯蔵穴、南側の１号カマドは新カマドでピット２が貯蔵穴である。住居跡の時期は、住居構造と出土遺物から９世紀後半から10世紀初頭と考えられる。

ＲＡ０７９

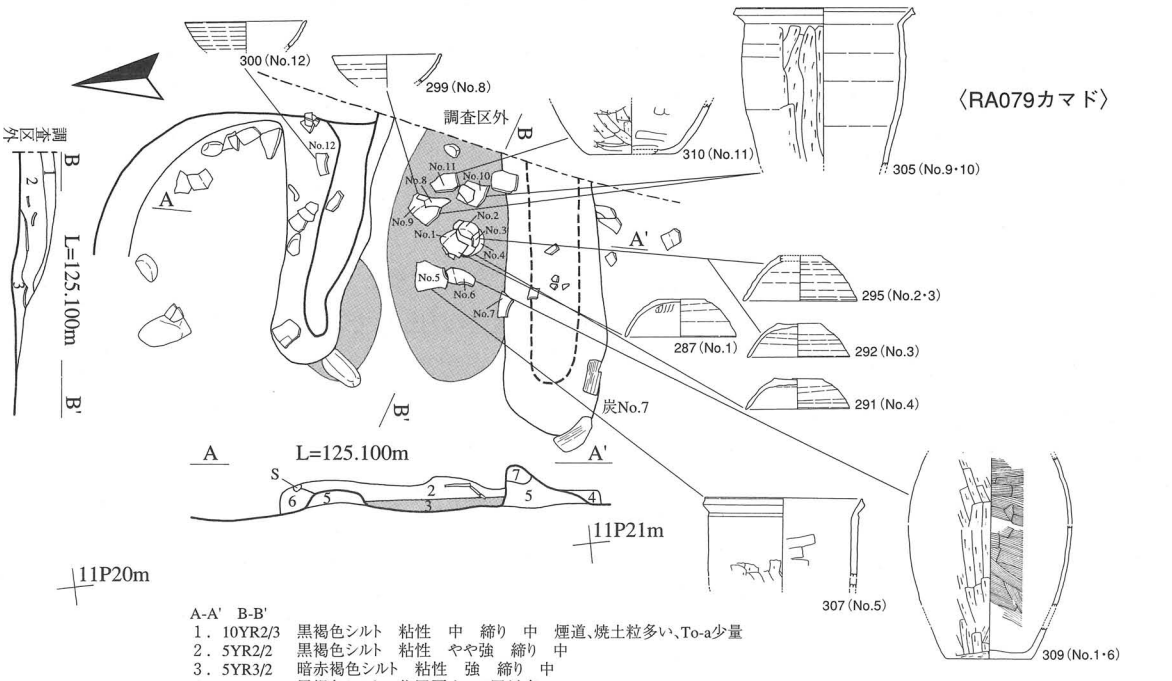
遺構（第66図・写真図版55・56）

[位置]　第29次調査北調査区11P20mグリッド付近に位置する。

[平面形・規模]　規模は４×3.84ｍで方形を呈する。主軸方向はN―98°―E。南東端が調査区外へ延



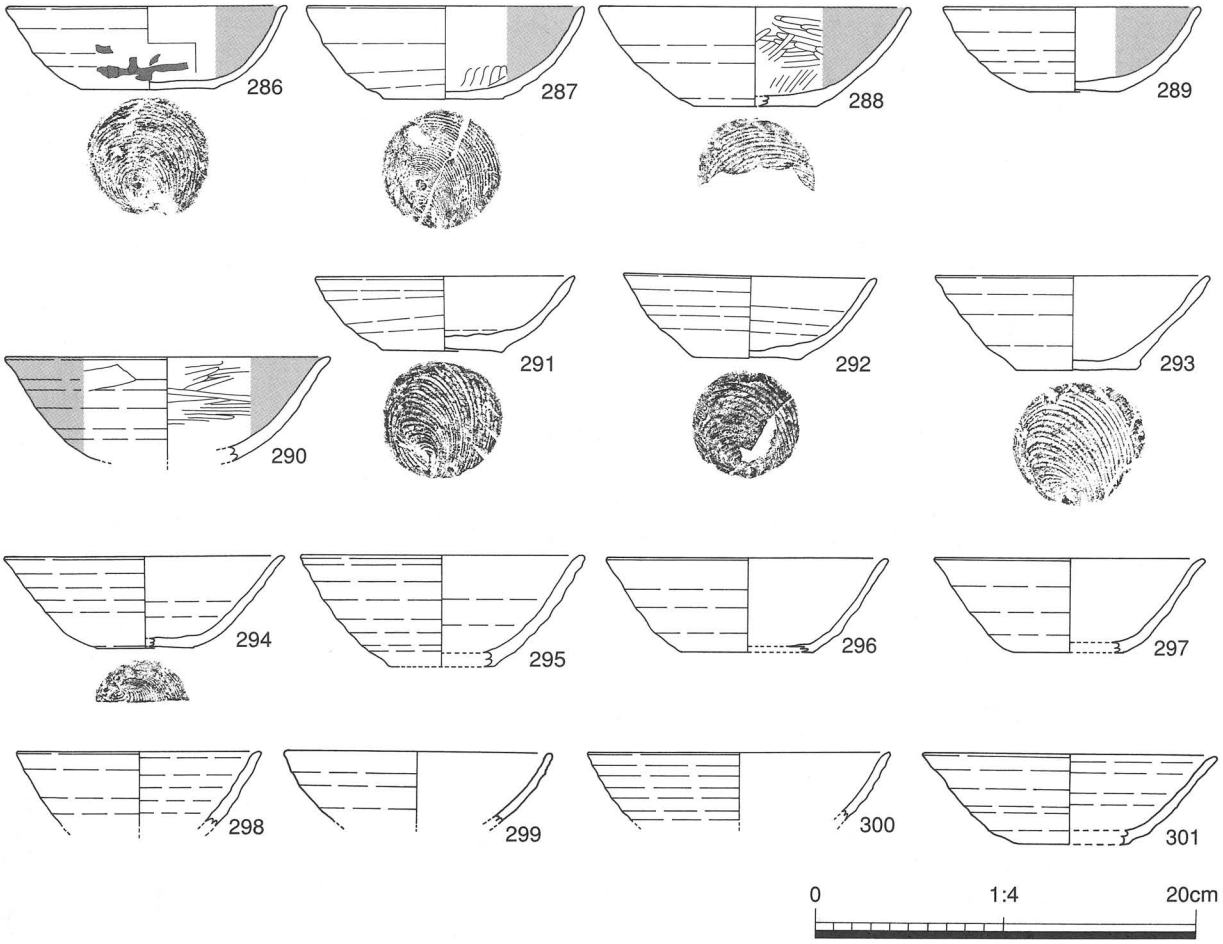
RA079　A-A'　B-B'
1．10YR2/1　黒色シルト　粘性　弱　締り　疎　均質
2．10YR2/3　黒褐色シルト　粘性　中　締り　中　褐色土粒直径2～5㎜を5%含む
3．10YR2/2　黒褐色シルト　粘性　強　締り　やや密　焼土ブロックと灰が層をなす
4．10YR2/1　黒色シルト　粘性　中　締り　疎　火山灰粒直径5㎜程度を1%含む、褐色土粒混入
5．10YR2/2　黒褐色シルト　粘性　中　締り　やや疎　褐色土粒直径2～5㎜を5%含む、2層に近似、焼土粒・炭粒を1%含む
6．10YR2/2　黒褐色シルト　粘性　中　締り　疎　褐色土粒直径2～5㎜を1%含む、2層に近似、焼土粒・炭粒を1%含む
7．10YR4/4　褐色シルト　粘性　弱　締り　密　(カマドそで)
8．10YR2/3　黒褐色シルト　粘性　中　締り　疎　(カマド内部)
9．10YR4/4　褐色シルト　粘性　中　締り　密　(貼り床)
10．10YR4/4　褐色シルト　粘性　弱　締り　密(地山)



A-A'　B-B'
1．10YR2/3　黒褐色シルト　粘性　中　締り　中　煙道、焼土粒多い、To-a少量
2．5YR2/2　黒褐色シルト　粘性　やや強　締り　中
3．5YR3/2　暗赤褐色シルト　粘性　強　締り　中
4．10YR2/2　黒褐色シルト　住居覆土　5層対応
5．10YR3/4　暗褐色シルト　粘性　中　締り　やや密(ソデ)
6．10YR2/2　住居覆土　5層対応
7．10YR3/4　暗褐色シルト　粘性　中　締り　やや疎(ソデ)　7層と同層

0　1:30　1m

第66図　RA079住居跡



第67図　RA079住居跡出土遺物（１）

びるため現存値となるが、壁残存長は北壁3.84m、東壁（4.00）m、南壁（3.08）m、西壁3.88mである。

[堆積土]　黒色土を基本とし、レンズ状の自然堆積の様相を呈する。全体的に褐色土粒・焼土粒を多く含む。床面広範囲に焼土および炭化材が出土しており、焼失住居の可能性がある。炭化材は全点肉眼による樹種同定を行った。№１―サクラ（ヤマザクラ？）、№２―クワ、№３・４―カヤ、№５―ウルシ、№６・７―クリという結果を得た。RA077よりバラエティー富んでいる。

[壁・床面]　壁はほぼ垂直に立ち上がる。深さは最も深いところで32.0㎝である。床面は全体的に硬化が認められ、カマド周辺がやや強い。

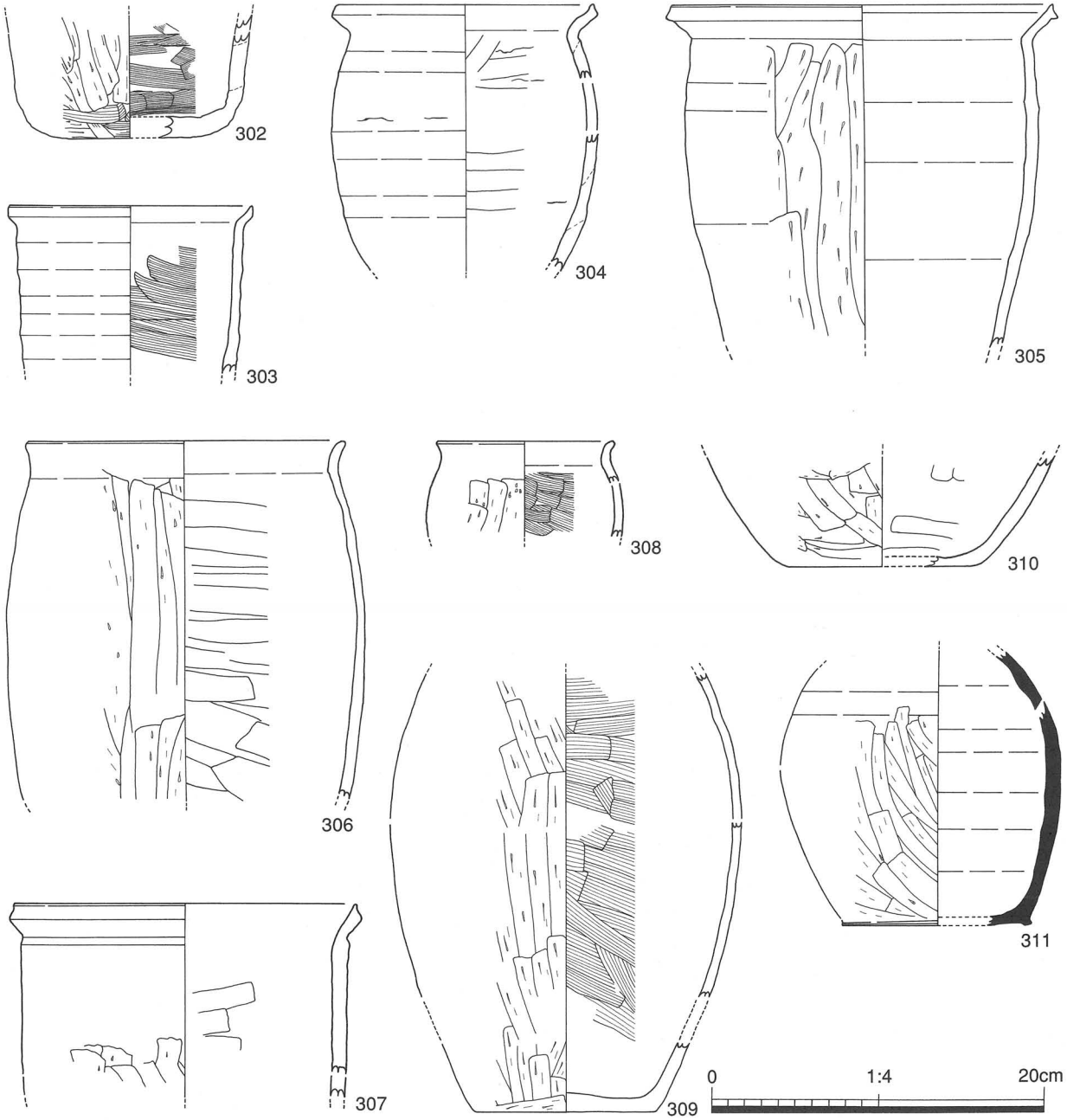
[カマド]　東壁に１基検出した。燃焼部は調査できたが、煙道部は調査区外へ延び、原地表面には現在の建物があったため調査を行っていない。推定値となるが、主軸方向はN－98°―Eである。袖部は暗褐色土で構成される。支脚として下から291・292・295の坏が逆位で配置され、その上にさらに309土師器甕底部が重ねられていた状態で検出した。検出時の支脚全体の高さは９㎝である。

[柱穴]　ピット１（直径34㎝深さ９㎝）・２（直径24㎝深さ８㎝）の２個を調査したが柱痕が認められず、また配置からも柱穴の可能性が低い。

[土坑]　検出していない。

遺物（第67・68図・写真図版67～69）

[出土遺物]　土師器（非黒色処理）坏口縁部総数40点中11点、土師器（内面黒色処理）坏口縁部総数７点中４点、土師器（内外面黒色処理）坏４点中１点、土師器甕口縁部17点中６点・底部10点中３点、須恵器瓶類底部１点を掲載した。他に土師器（非黒色処理）坏底部11点、土師器（黒色処理）



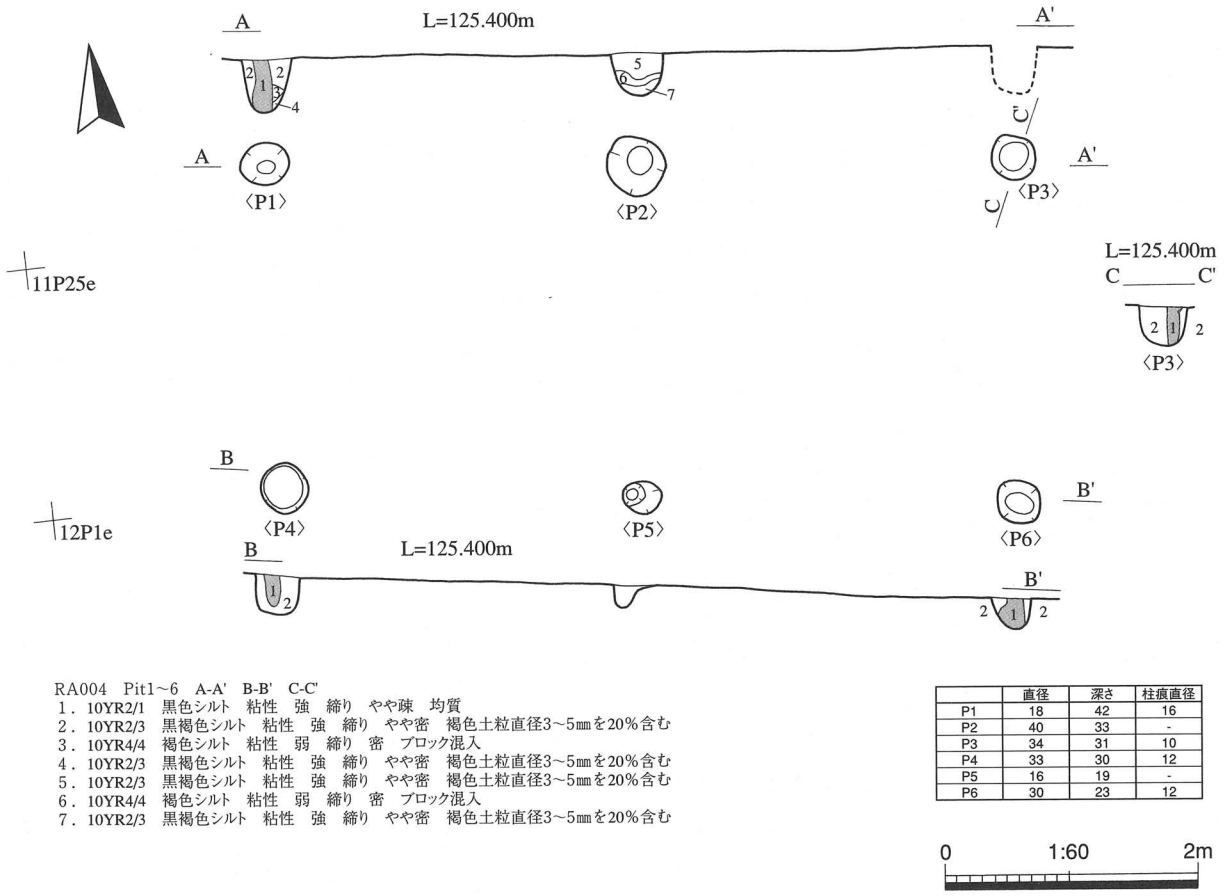
第68図　RA079住居跡出土遺物（２）

坏底部２点、須恵器坏口縁部６点・底部２点は小破片のため不掲載とした。

遺物は大部分がカマド周辺からの出土である。坏の底面調整は全て回転糸切りによるもので、坏口縁部の組成比は、土師器（非黒色処理）40点・土師器（内面黒色処理）８点・土師器（内外面黒色処理）３点・須恵器６点で、土師器（非黒色処理）が卓越するものの、黒色処理が一定量組成し、須恵器が第29次調査中では最も多く出土している。

甕はロクロ使用・非使用の両者が出土している。

286はカマドおよび床面直上からの出土である。底面を上、口縁部を下にした状態で体部に墨書で「方」と記されてる。「亠」の留め、撥ねが観察され、書の心得がある識字者による墨書と考えられる。「冂」部分は摩滅しているが、器面全体が摩滅しているのではなく、墨書の「冂」部分のみ摩滅している。



RA004　Pit1～6　A-A'　B-B'　C-C'
1．10YR2/1　黒色シルト　粘性　強　締り　やや疎　均質
2．10YR2/3　黒褐色シルト　粘性　強　締り　やや密　褐色土粒直径3～5㎜を20％含む
3．10YR4/4　褐色シルト　粘性　弱　締り　密　ブロック混入
4．10YR2/3　黒褐色シルト　粘性　強　締り　やや密　褐色土粒直径3～5㎜を20％含む
5．10YR2/3　黒褐色シルト　粘性　強　締り　やや密　褐色土粒直径3～5㎜を20％含む
6．10YR4/4　褐色シルト　粘性　弱　締り　密　ブロック混入
7．10YR2/3　黒褐色シルト　粘性　強　締り　やや密　褐色土粒直径3～5㎜を20％含む

	直径	深さ	柱痕直径
P1	18	42	16
P2	40	33	-
P3	34	31	10
P4	33	30	12
P5	16	19	-
P6	30	23	12

第69図　RB004掘立柱建物跡

小結　当住居跡は焼失住居の可能性があり、カマドの位置および出土遺物から9世紀後半から10世紀初頭と考えられる。

2　掘立柱建物跡

ＲＢ００４

遺構（第69図・写真図版57）

[位置]　第29次調査北調査区11P24eグリッド付近に位置する。RA060から東に1.8ｍの地点に隣接する。

[平面形・規模]　南端が第29次調査区外に延びるため全体の様相を知りえず、現況では1間×2間であるが、過去の調査事例から、2間×2間の建物跡の可能性がある。残存長は東西柱列総長6.23ｍ、南北柱列総長（3.08）ｍ、軸方向はＮ－84°―Ｗもしくは Ｎ―4°―Ｅである。柱間はP1～2・P2～3が2.9ｍ、P3～4が2.7ｍ、P1～4が2.55ｍである。

[柱穴]　調査区内で6個を確認した。P5は規模および堆積土が異なるため、掘立柱建物を構成しない可能性もあるが、位置的要素から報告に至った。黒色土からなる柱痕跡がP1・3・4・6で認められた。埋土は褐色土粒を含む黒褐色土である。柱穴の掘り方は円形で、直径平均31㎝、深さ10～16㎝である。

遺物（第72図・写真図版69）

[出土遺物]　土師器（非黒色処理）坏口縁部破片がＰ６から出土している。

小結　出土遺物から9世紀後半から10世紀初頭と考えられる。

3　土　　坑

（1）陥し穴状土坑

遺構（第70図・写真図版58・59）

第29次調査南調査区南端において、溝状の陥し穴状土坑4基を検出した。遺構検出面はRD112・113がⅢ層上面である。RD114・115は水田耕作によって削平され一段低くなった地点で検出しており、検出面はⅣ層である。第19・20次調査区で同様の陥し穴状土坑14基を確認しており、第29次調査において検出した4基も一連の陥し穴状土坑と判断される。

RD112・113は隣接している。RD113はRA077から5m、RD112はRD113から8mに位置する。RD114・115は隣接しており、6m間隔がある。規模の共通する2基が1組で配置されている。

ＲＤ１１２(第70図・写真図版58)

[配置]　14N16gグリッド付近に位置する。RA077から南西に11mの地点に位置する。

[形状]　細長い溝状の平面形を呈する。

[規模]　開口部径3.12×0.58m、底面径3.52×0.18m、深さ1mである。

[堆積土]　底面に黒褐色土が堆積した後、壁崩落黄褐色土の堆積が認められる。

ＲＤ１１３（第70図・写真図版58）

[位置]　14N12tグリッド付近に位置する。RD112から北東に8mの地点に位置する。

[形状]　壁崩落により開口部の形状がやや細長い溝状の平面形を呈する。

[規模]　開口部径3.52×1.02m、底面径3.58×0.13m、深さ0.9mである。

[堆積土]　底面に黒褐色土が堆積した後、壁崩落黄褐色土の堆積が認められる。

ＲＤ１１４（第70図・写真図版59）

[位置]　14N22oグリッド付近に位置する。RD112から南東に6mの地点である。

[形状]　南東端が撹乱されているが、現存範囲からRD112・113より細長い形状と判断できる。

[規模]　現存値で、開口部径(3.30)×(0.20)m、底面径(3.20)×(0.13)mである。

[堆積土]　底面付近に黒褐色土の堆積が多く、中位は経黄崩落褐色土が堆積、さらに上位には黒～暗褐色土が堆積している。いずれも自然堆積と判断される。

ＲＤ１１５（第70図・写真図版59）

[位置]　14N20qグリッド付近に位置する。RD114から北東に6mの地点である。

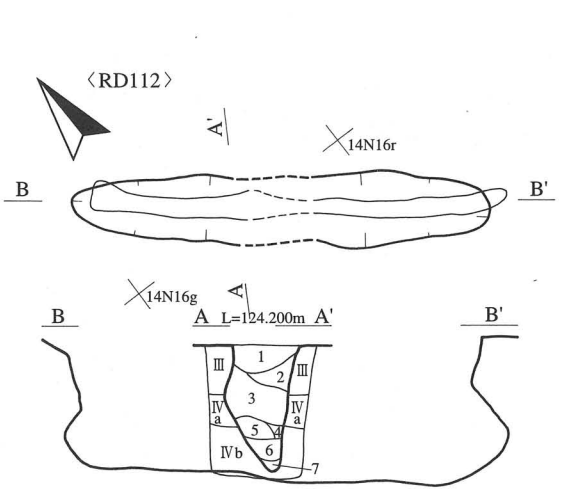
[形状]　本来の掘り込み面は検出面より上位であると考えられるが、上部を撹乱されており行く中位～下位のみが残存している。そのため、平面形は非常に細長い形状を呈する。

[規模]　開口部径4.3×0.1m、底面径4.3×0.1mである。

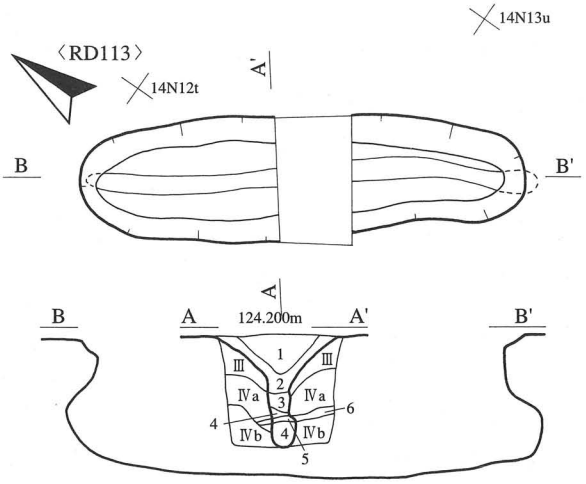
[堆積土]　底面にはⅣ層の再堆積が認められる。下層は黒色土で構成され、上層は壁崩落褐色土が堆積している。

第3表　第29次陥し穴状土坑観察表

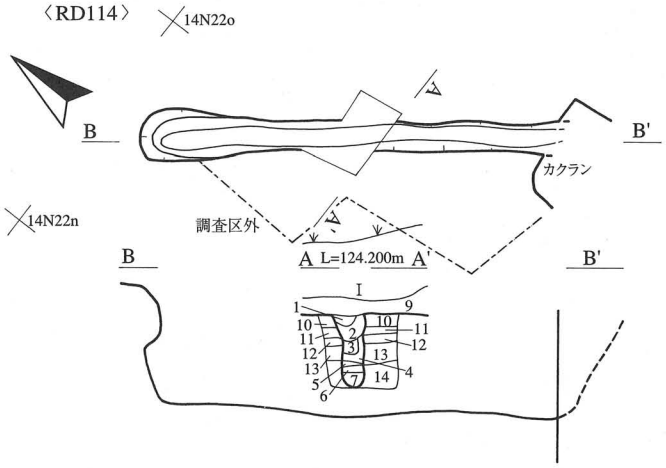
遺構名	位置	平面形	開口径(cm)		底面径(cm)		深さ	等高線との位置関係	標高	出土遺物	備考
			長軸	短軸	長軸	短軸	(cm)		(m)		
RD112	14N15q	溝状	312	58	352	18	100	垂直	124.1	遺物なし	
RD113	14N11v	溝状	352	102	358	13	90	垂直	124.1	遺物なし	
RD114	14N22o	両頭形	(330)	(20)	(320)	(13)	58	垂直	124.1	遺物なし	一部撹乱
RD115	14N20r	両頭形	430	10	430	10	72	垂直	124	遺物なし	



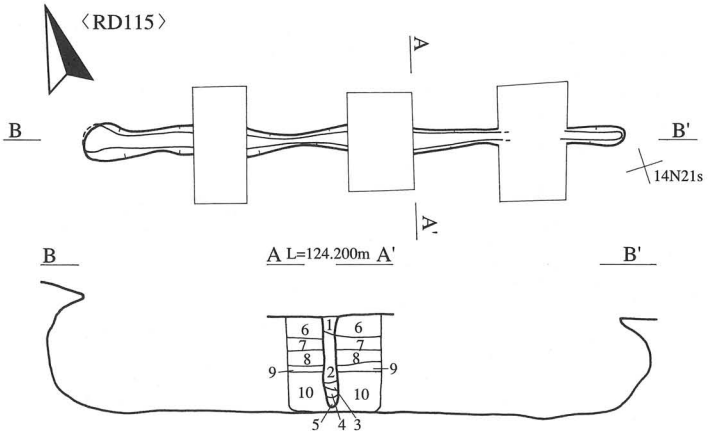
RD112
1．7.5YR2/1　黒色シルト
2．10YR2/2　黒褐色シルト地に10YR4/4褐色シルトが混じる、粘土質シルト
　Ⅱ層とⅢ層の混土
3．10YR5/6　黄褐色シルト地に10YR3/1黒褐色シルトが混じる、粘土
　Ⅲ層の汚れ再堆積
4．10YR5/6　黄褐色シルト地に10YR3/1黒褐色シルトが混じる、砂～砂質シルト
　3層に似るが砂混じり、Ⅲ～Ⅳ層の汚れ再堆積
5．10YR3/2　黒褐色シルト　砂　Ⅳa層の再堆積にⅢ層？のブロック含む
6．10YR4/4　褐色シルト　砂　Ⅳ層の再堆積（aとbの混土？）
7．10YR3/1　黒褐色シルト　砂　やや粘性持つ部分あり



RD113
1．7.5YR2/1　黒色シルト　黒ボク土
2．7.5YR2/1　黒褐色シルトと10YR5/6黄褐色シルトが同じくらい入り混じる、
　粘土　Ⅲ層の汚れ再堆積
3．10YR5/6　黄褐色シルト地に　わずかに　10YR4/2灰黄褐色シルトを含む、
　粘土と砂の混土　ややもろい　Ⅳa層の汚れ再堆積土
4．10YR5/6　黄褐色シルト　もろい　Ⅳa層の再堆積
5．7.5YR2/1　黒色シルト地に　わずかに10YR5/6黄褐色シルトが混じる、
　非常にもろい　根による撹乱でⅡ層が貫入したもの
6．10YR4/2　灰黄褐色砂　根による撹乱でⅣb層が変化したものと思われる



RD114
1．7.5YR2/1　黒色シルト地に　10YR3/5暗褐色シルト混じる、
　粘土質シルト　Ⅲ層再堆積含む、RD113'の２層の中間的
2．10YR3/4　暗褐色シルト地に　7.5YR2/1黒色シルト混じる、
　粘土質シルト　Ⅲ層の汚れ再堆積　RD113の２層に相当
3．10YR5/6　黄褐色シルト　粘土
　Ⅲ層かⅣ層のグライ化した部分の再堆積
4．10YR4/3　にぶい黄褐色シルト　もろい　Ⅳ層の再堆積
5．7.5YR2/1　黒色シルト　非常にもろい　Ⅱ層再堆積か根による撹乱
6．10YR4/2　にぶい黄褐色シルト　粘土質シルト　もろい
　４層と同じと思われるが、より汚れている
7．10YR4/4　褐色シルト　粘土　Ⅳ層の再堆積、
　底に　10YR2/1黒褐色土
8．Ⅰ層の一部　盛土と思われる
9．Ⅰ層の一部　10YR2/1黒褐色シルト地に10YR5/6黄褐色シルトの
　細かいブロック含む、畑の耕作土であろう
10．Ⅲ層
11．Ⅳa層の一部
12．Ⅳa層がグライ化してシルト質になったもの
13．Ⅳa層の一部
14．Ⅳb層



RD115
1．10YR2/1　黒色シルトと　10YR5/6黄褐色シルトの混土
2．10YR5/6　黄褐色シルト地に　10YR2/1黒色シルトが混じる、
　粘土Ⅲ層の汚れ再堆積
3．10YR1.7/1　黒色シルト　非常にもろい
4．10YR1.7/1　黒色シルト地に　10YR4/4褐色シルトを含む、
　シルトもろい
5．10YR4/4　褐色シルト　砂　非常にもろい、Ⅳ層汚れ再堆積
6．Ⅲ層
7．Ⅳa層の一部だが、酸化鉄多く赤い
8．Ⅳa層の一部、上面中心にグライ化してシルト質に変化
9．Ⅳa層の一部でグライ化してシルト質になったもの、
　上下酸化鉄砂層
10．Ⅳb層だが、薄い縞状堆積の集まり

0　1:60　2m

第70図　RD112～115陥し穴状土坑

（2）土坑［第71図・写真図版60・61］

陥し穴状土坑と判断される溝状土坑を除いた検出数は10基に上る。土坑は9基が北調査区、1基は南調査区のRA077南西隅の南西に隣接する地点で確認した。出土遺物や他遺構との位置関係および堆積土の観察から古代と考えられるものが多い一方で、時期・用途ともに不明をせざるをえない土坑もある。

本節では個別の記載は省略し、墓壙の可能性がある土坑、他の出土遺物・堆積土から古代の可能性が高い土坑について記述する。本文中で触れないものについては、第5表に各土坑の概要を一覧表でまとめている。

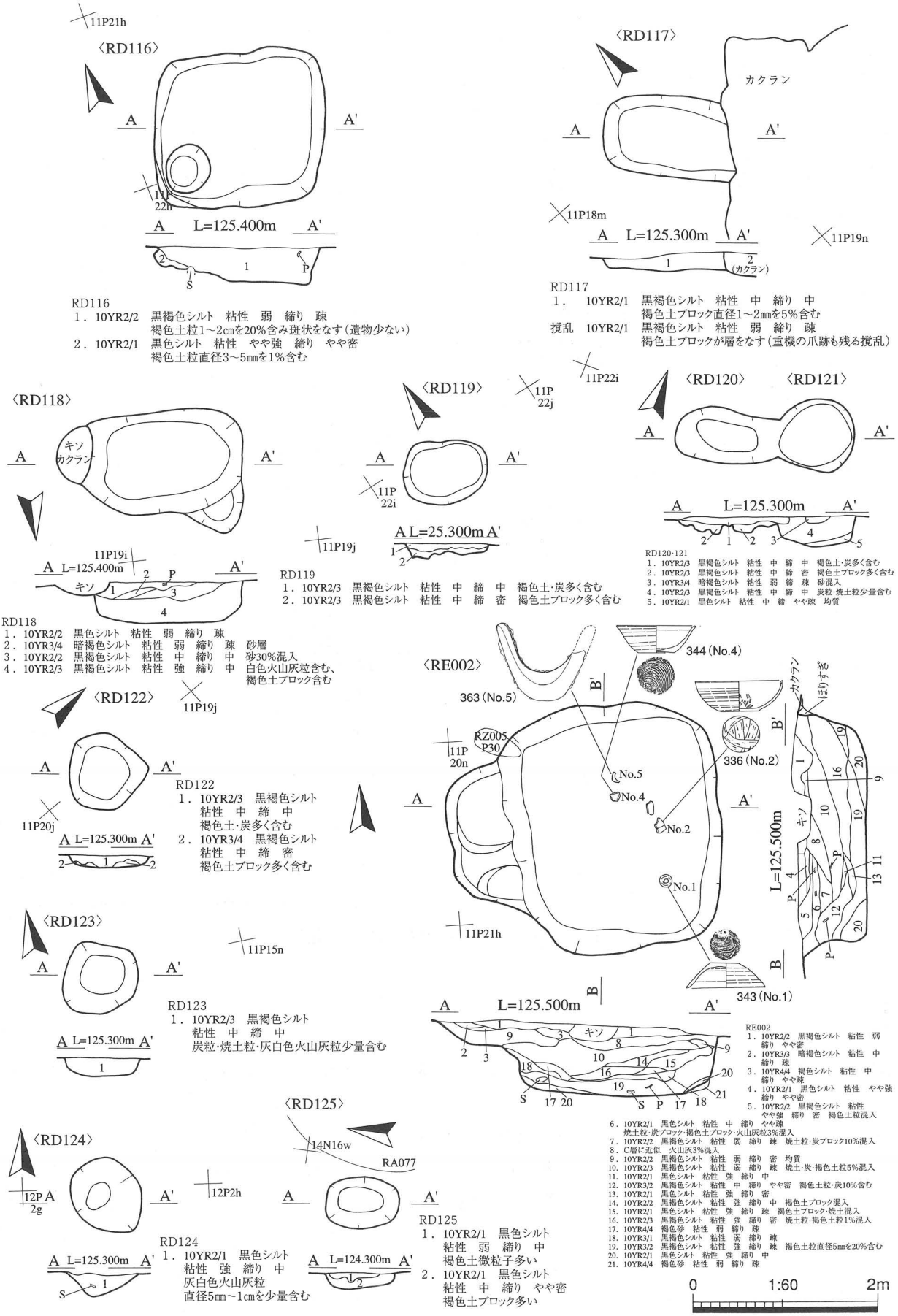
墓壙　第29次調査区で墓壙の可能性が高い土坑はRD116である。RE002の南60㎝、RA079から南西に6m、RB004から北に5.2m、11P21hグリッド付近に位置する。規模は1.8×1.68mで、深さ38㎝を測る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、土層堆積は褐色土粒を多量に含み斑状をなす黒褐色土で、人為堆積層と判断される。堆積土層中に遺物はほとんど含まれず、床面からの出土が多い。南西端には円形の凹みがあり、黒色土が堆積している。床面から出土した遺物は土師器（非黒色処理）坏2点、土師器甕2点があり、全点掲載した。RD116は方形であるが、規模が小さい点と床面に硬化が認められないことから土坑とし、堆積土の様相から墓壙と判断した。墓壙の帰属時期は、出土遺物とRA079堆積土と共通する点から、9世紀後半から10世紀初頭と考えられる。

その他の土坑　墓壙以外の土坑としてはRD117～125がある。褐色土・炭が混入する土坑は、RD119・120・121・122・125である。土層中に灰白色火山灰が混入するのはRD118・123・124がある。遺物はRD118・119・121・124から出土しており、回転糸切り痕の認められる土師器（非黒色処理）・（黒色処理）坏、土師器甕が出土している。土坑から出土した口縁部・底部は全点掲載した。

RD117は黒色土単層で構成されるため、時期・性格について考察できない。遺物が出土し、灰白色火山灰の混入が認められるRD118・119・120・121・122・123・124・125は9世紀後半から10世紀初頭の時期が考えられ、他の土坑は堆積土の様相から古代の可能性が指摘できる。

第4表　第29次土坑観察表

遺構名	位置	平面形	長軸（cm）	短軸（cm）	深さ（cm）	堆積土	検出面	出土遺物	備考
RD116	11P21h	方形	180	168	38	ほぼ単層で構成。褐色土が多量に混入し斑状をなす。人為堆積。	Ⅳ層上面	第72図313～316	
RD117	11P18m	楕円形	144	90	20	単層	Ⅳ層上面		
RD118	11P19i	楕円形	157	110	44	4層に灰白色火山灰粒・褐色土ブロック混入。	Ⅳ層上面	第72図317～324	RE002の北に隣接
RD119	11P22i	楕円形	88	70	22	褐色土・炭多く混入。	Ⅳ層上面	第72図325	
RD120	11P21i	楕円形	120	58	18	褐色土・炭多く混入。	Ⅳ層上面		RD121を切る
RD121	11P21j	円形	82	80	33	炭・焼土粒少量含む	Ⅳ層上面	第72図326～329	RD120に切られる
RD122	11P20j	円形	84	84	12	褐色土・炭多く混入。	Ⅳ層上面		
RD123	11P15m	円形	80	78	20	灰白色火山灰粒含む	Ⅳ層上面		
RD124	12P2g	円形	90	72	25	灰白色火山灰粒含む	Ⅳ層上面	第72図330～335	
RD125	14N16W	楕円形	80	56	18	褐色土ブロック多量に含む。RA077住居覆土に共	Ⅳ層上面		RA077南西隅に隣接



RD116
1．10YR2/2　黒褐色シルト　粘性　弱　締り　疎
　褐色土粒1～2㎝を20%含み斑状をなす（遺物少ない）
2．10YR2/1　黒色シルト　粘性　やや強　締り　やや密
　褐色土粒直径3～5㎜を1%含む

RD117
1．　10YR2/1　黒褐色シルト　粘性　中　締り　中
　褐色土ブロック直径1～2㎜を5%含む
撹乱　10YR2/1　黒褐色シルト　粘性　弱　締り　疎
　褐色土ブロックが層をなす（重機の爪跡も残る撹乱）

RD118
1．10YR2/2　黒色シルト　粘性　弱　締り　疎
2．10YR3/4　暗褐色シルト　粘性　弱　締り　疎　砂層
3．10YR2/2　黒褐色シルト　粘性　中　締り　中　砂30%混入
4．10YR2/3　黒褐色シルト　粘性　強　締り　中　白色火山灰粒含む、
　褐色土ブロック含む

RD119
1．10YR2/3　黒褐色シルト　粘性　中　締　中　褐色土・炭多く含む
2．10YR2/3　黒褐色シルト　粘性　中　締　密　褐色土ブロック多く含む

RD120・121
1．10YR2/3　黒褐色シルト　粘性　中　締　中　褐色土・炭多く含む
2．10YR2/3　黒褐色シルト　粘性　中　締　密　褐色土ブロック多く含む
3．10YR3/4　暗褐色シルト　粘性　弱　締　疎　砂混入
4．10YR2/3　黒褐色シルト　粘性　中　締　中　炭粒・焼土粒少量含む
5．10YR2/1　黒色シルト　粘性　中　締　やや疎　均質

RD122
1．10YR2/3　黒褐色シルト
　粘性　中　締　中
　褐色土・炭多く含む
2．10YR3/4　黒褐色シルト
　粘性　中　締　密
　褐色土ブロック多く含む

RD123
1．10YR2/3　黒褐色シルト
　粘性　中　締　中
　炭粒・焼土粒・灰白色火山灰粒少量含む

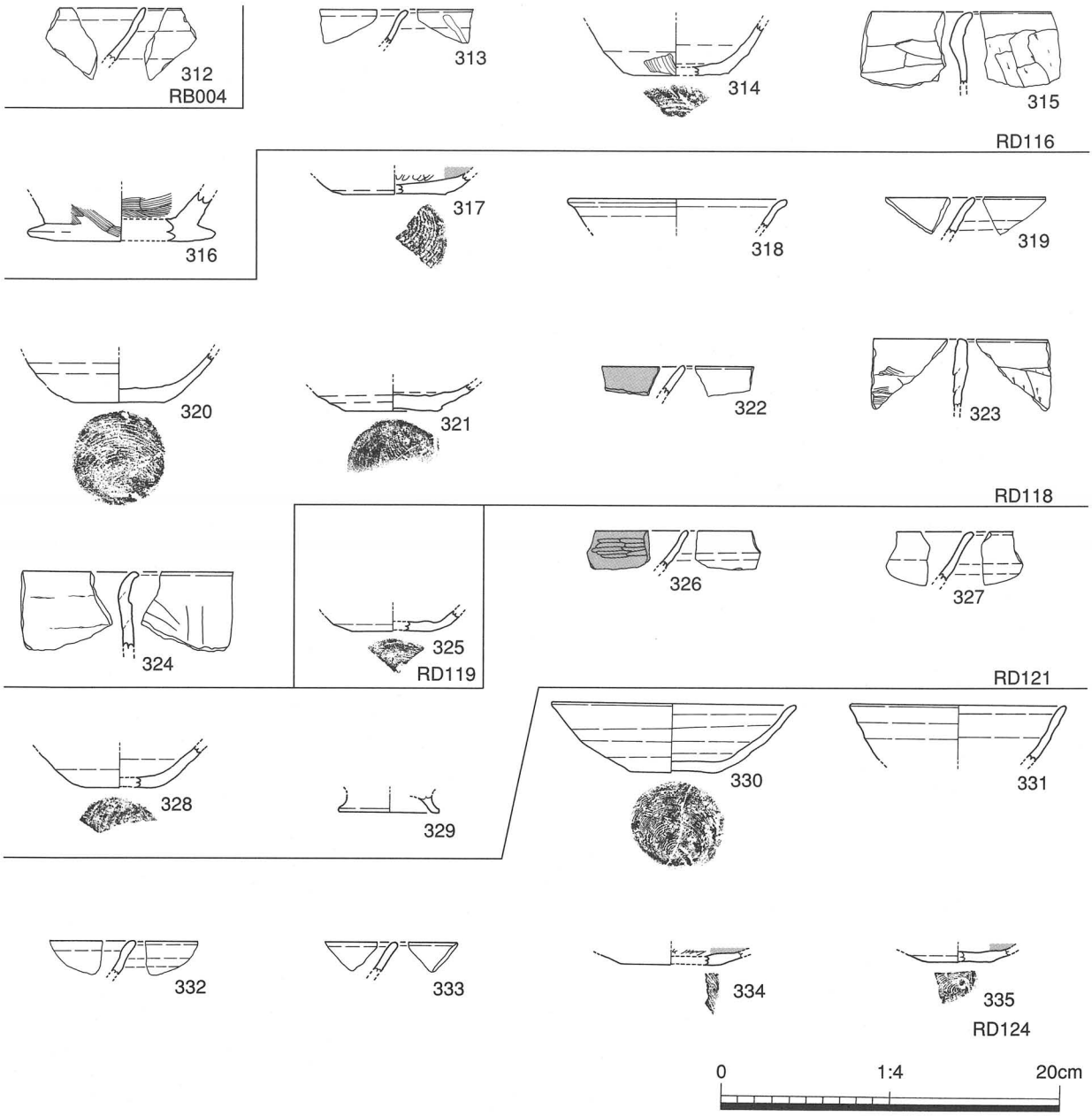
RD124
1．10YR2/1　黒色シルト
　粘性　強　締り　中
　灰白色火山灰粒
　直径5㎜～1㎝を少量含む

RD125
1．10YR2/1　黒色シルト
　粘性　弱　締り　中
　褐色土微粒子多い
2．10YR2/1　黒色シルト
　粘性　中　締り　やや密
　褐色土ブロック多い

RE002
1．10YR2/2　黒褐色シルト　粘性　弱　締り　やや密
2．10YR3/3　暗褐色シルト　粘性　中　締り　疎
3．10YR4/4　褐色シルト　粘性　中　締り　やや疎
4．10YR2/1　黒色シルト　粘性　やや強　締り　やや密
5．10YR2/2　黒褐色シルト　粘性　やや強　締り　密　褐色土粒混入
6．10YR2/1　黒色シルト　粘性　中　締り　やや疎　焼土粒・炭ブロック・褐色土ブロック・火山灰粒3%混入
7．10YR2/2　黒褐色シルト　粘性　弱　締り　疎　焼土粒・炭ブロック10%混入
8．C層に近似　火山灰3%混入
9．10YR2/2　黒褐色シルト　粘性　弱　締り　密　均質
10．10YR2/3　黒褐色シルト　粘性　弱　締り　疎　焼土・炭・褐色土粒5%混入
11．10YR2/1　黒色シルト　粘性　強　締り　中
12．10YR3/2　黒褐色シルト　粘性　中　締り　やや密　褐色土粒・炭10%含む
13．10YR2/1　黒色シルト　粘性　強　締り　密
14．10YR2/2　黒褐色シルト　粘性　強　締り　中　褐色土ブロック混入
15．10YR2/1　黒色シルト　粘性　強　締り　疎　褐色土ブロック・焼土混入
16．10YR2/3　黒褐色シルト　粘性　強　締り　密　焼土粒・褐色土粒1%混入
17．10YR4/4　褐色砂　粘性　弱　締り　疎
18．10YR3/1　黒褐色シルト　粘性　弱　締り　疎
19．10YR3/2　黒褐色シルト　粘性　強　締り　疎　褐色土粒直径5㎜を20%含む
20．10YR2/1　黒色シルト　粘性　強　締り　中
21．10YR4/4　褐色砂　粘性　弱　締り　疎

0　1:60　2m

第71図　RD116～125土坑・RE002住居状遺構



第72図　RB004掘立柱建物跡・RD土坑出土遺物

4　住居状遺構

ＲＥ００２

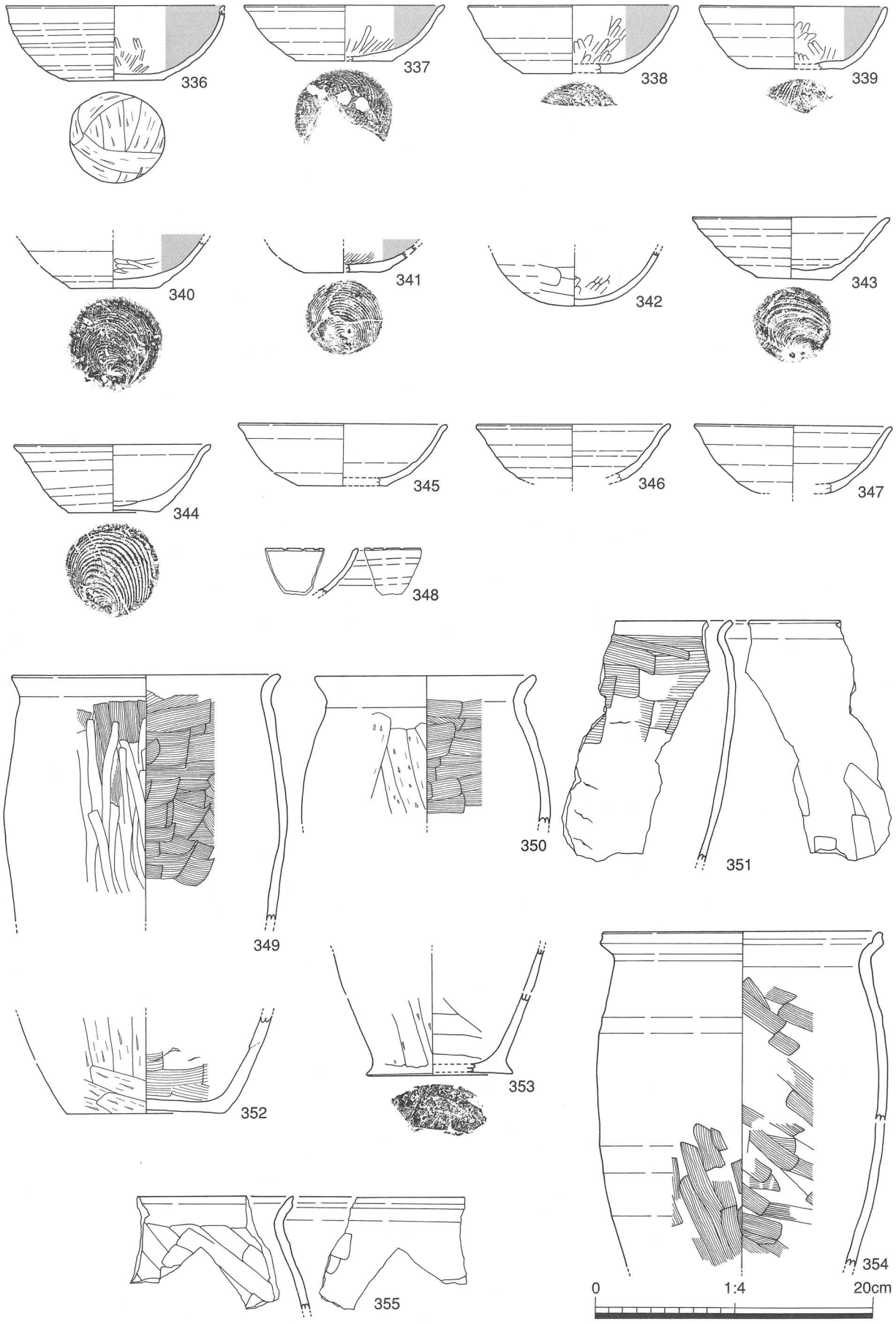
遺構（第71図・写真図版61）

[位置]　RD118と116の中間、RA060から北東に10.6ｍ、RA078から南に5.8ｍ、RA079から西に5ｍの11P21hグリッドに位置する。

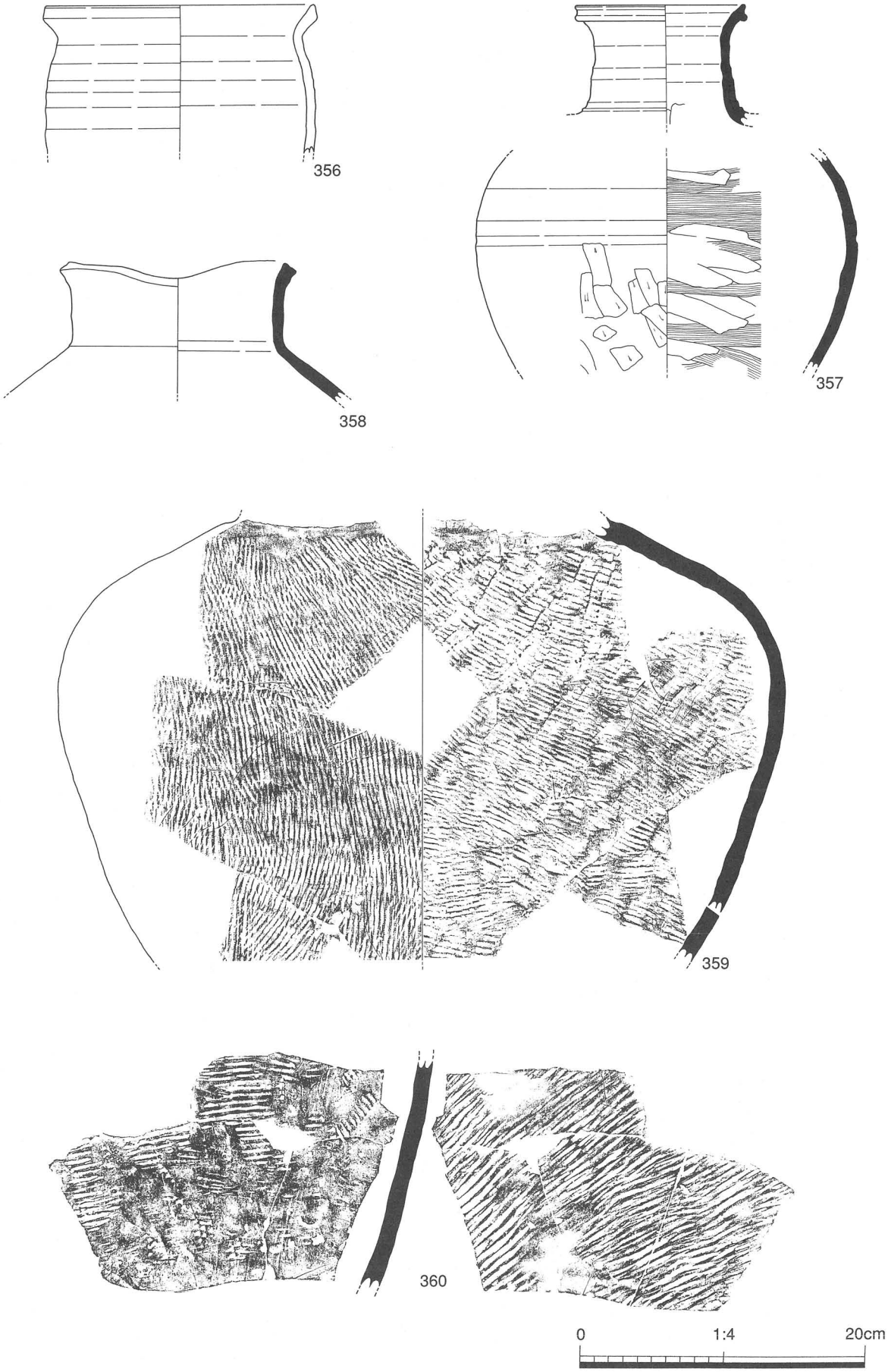
[平面形・規模]　規模は2.68×2.25ｍの方形を呈する。

[堆積土]　黒褐色土を基本とし、褐色土ブロック・焼土・炭・灰白色火山灰粒が混入する層が互層をなす。堆積の方向は南北東方向からが著しい。焼土は間隔をあけて堆積しており、数回にわたって廃棄土が堆積していることが伺える。

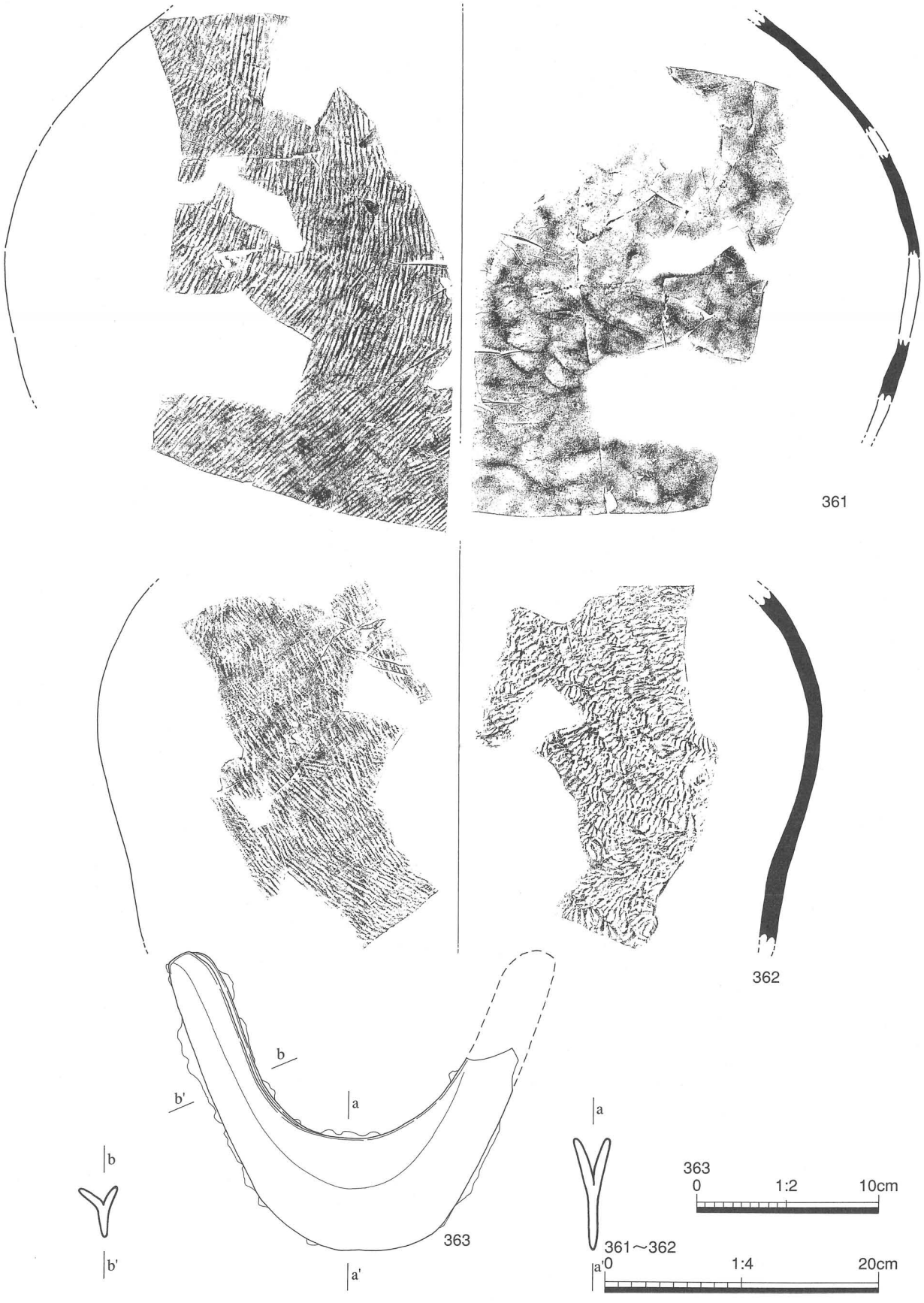
[壁・床面]　壁は西壁で一段段差が設けられているものの、他の3面はほぼ垂直に立ち上がる。床面は硬化が全く認められない。



第73図　RE002住居状遺構出土遺物（１）



第74図　RE002住居状遺構出土遺物（２）



第75図　RE002住居状遺構出土遺物（３）

遺物（第 73 ～ 75 図・写真図版 70 ～ 73）

[出土遺物] 遺物は各層および床面から多量に出土している。RE002 から出土した遺物は、土師器（非黒色処理）坏口縁部総数 46 点中掲載 6 点・底部 14 点中 0 点、土師器（黒色処理）坏口縁部 27 点中 4 点・底部 5 点中 3 点、土師器（内外黒色処理）坏口縁部 1 点中 0 点、土師器甕口縁部 19 点中 5 点・底部 7 点中 2 点、須恵器胴部片 4 点中 4 点、瓶類口縁部 2 点中 2 点を掲載した。坏の組成比は、土師器（非黒色処理）が 47 点で 61％、土師器（黒色処理）が 30 点で 39％である。割合としては RA079 の組成比により近い様相を呈する。床面から出土しているのは、土師器（非黒色処理）坏 343 が逆位、底面ヘラ削り調整が施された土師器（内面黒色処理）坏 336、回転糸切り土師器坏 344、鋤先 363 がある。

小結　RE002 はカマド・床面の硬化が認められなかったことから住居状遺構とした。しかし、土層堆積の様相を観察すると、焼土・被熱した褐色土ブロック等の投げ込みや、多量の遺物廃棄も認められ、周辺遺構構築の際に生じた土・遺物を廃棄したものと考えられる。遺構の時期は、出土遺物から 9 世紀後半から 10 世紀初頭と考えられる。

5　柱穴状土坑

北調査区で 84 個、南調査区で 73 個確認した。

第76図　RZ005柱穴状土坑

ＲＺ００５

遺構（第76図・写真図版61）

［位置］　第29次調査北調査区で検出した柱穴状土坑群をRZ005とした。総数84個を調査した。

［平面形・規模］　ほぼ円形で、径14～64㎝、深さ3.5～33㎝に分布する。

［堆積土］　褐色土粒・灰白色火山灰が混入するものが多い。周辺遺構と共通することから古代に属すると考えられるが、平面分布から建物を構成する可能性は低い。

遺物（第78図・写真図版73）

［出土遺物］　土師器坏・土師器甕・須恵器甕・須恵器瓶類の胴部破片が出土している。

小結　出土遺物および堆積土層から古代に属すると考えられる。

ＲＺ００６

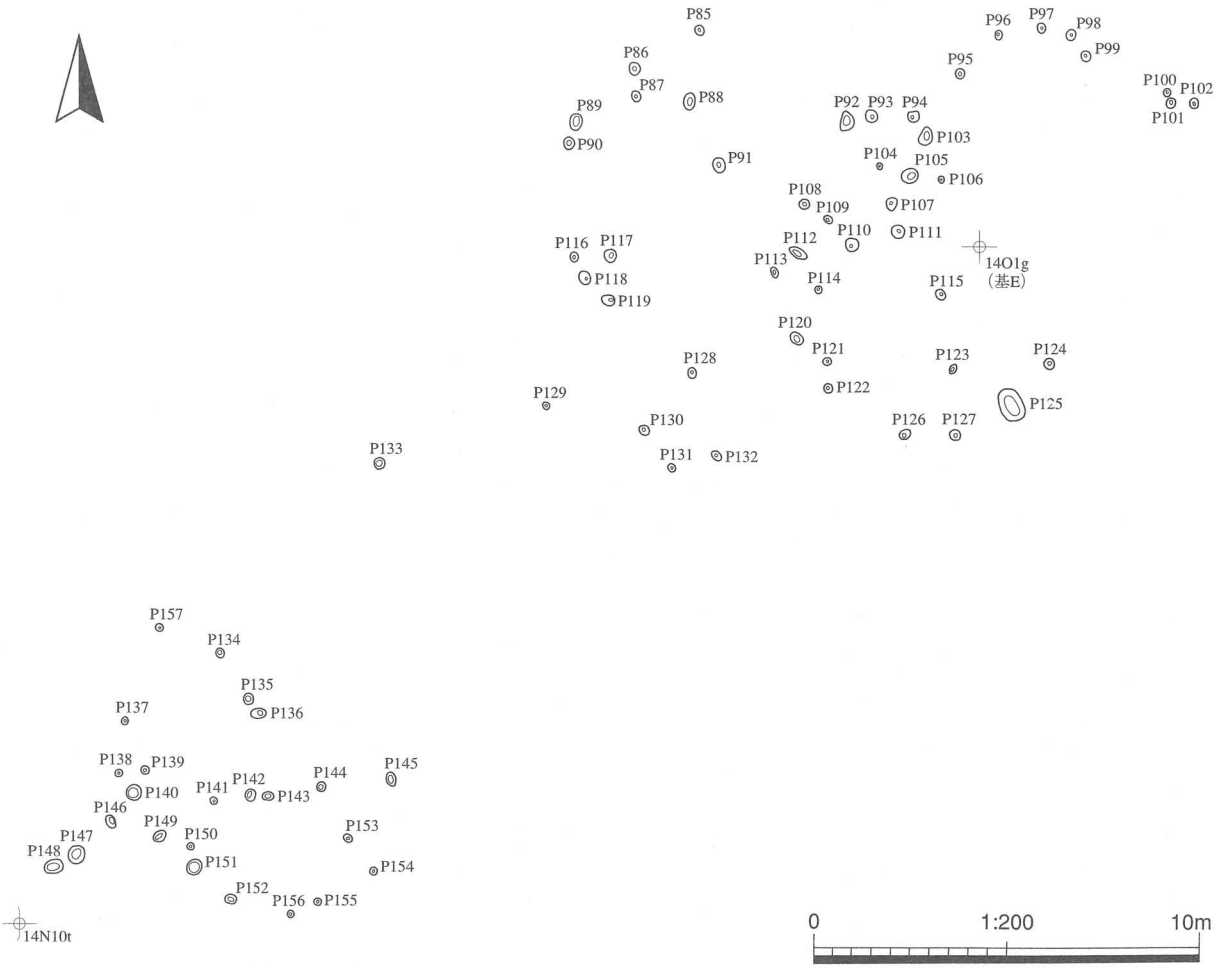
遺構（第77図・写真図版61）

［位置］　第29次調査南調査区で検出した柱穴状土坑群をRZ006とした。総数73個を調査した。

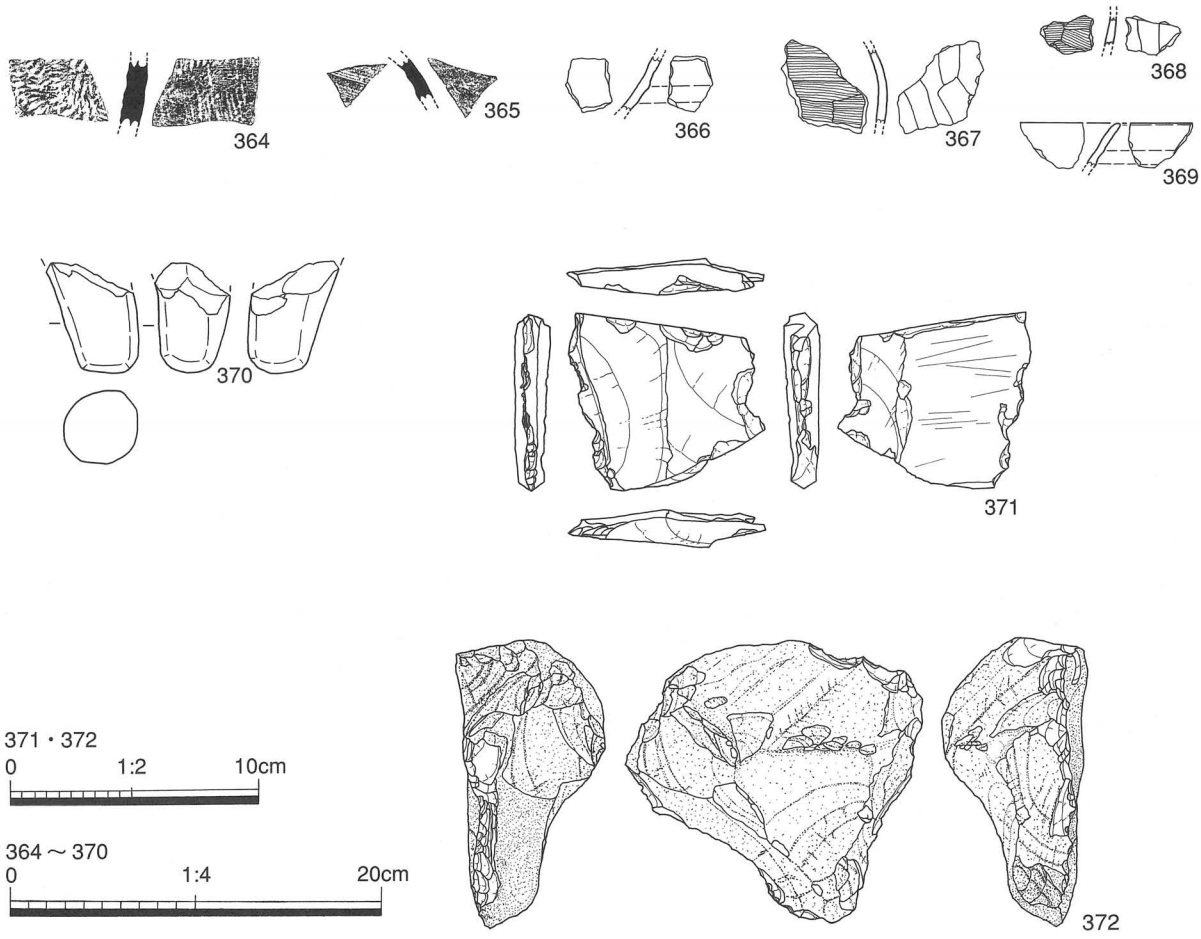
［平面形・規模］　ほぼ円形で、径12～38㎝、深さ4.4～30.4㎝に分布する。

［堆積土］　褐色土ブロックを含むものもあるが、遺構の輪郭が明瞭であるため、ごく新しい柱穴状土坑である可能性が高い。

小結　出土遺物は認められず、堆積土もごく新しい様相を呈しており、古代に帰属するとは考え難い。



第77図　RZ006柱穴状土坑



第78図　RZ005柱穴状土坑・遺構外出土遺物

6　遺構外出土遺物（第78図・写真図版73）

東調査区から土製脚状遺物が出土している（370）。表面はナデ調整が施され、胎土に微小砂粒を含む。色調は表面が明黄褐色、内部が褐灰色を呈する。土師器甑とも考えられるが、焼成と形態から縄文時代晩期後葉の浅鉢に付けられる脚である可能性もある。

371は北調査区表土から出土している。凝灰岩製で、左右に鋸歯状の刃部が作られている。

372は南調査区から出土している。石材は頁岩である。端部に剥離が認められ、石核と考えられる

7　総括

第29次調査区では、竪穴住居跡5棟・掘立柱建物跡1棟・住居状遺構1棟・土坑10基・柱穴状土坑157個・陥し穴状土坑4基を調査した。

東・北調査区で確認した竪穴住居跡・掘立柱建物跡は全て9世紀後半から10世紀初頭の時期である。南調査区で確認した竪穴住居跡は奈良時代である。隣接する第23次調査区でも奈良時代の住居を検出している。しかし、調査区西側は一段高くなっており、別集落である可能性もある。

南調査区において縄文時代と考えられる陥し穴状土坑を4基確認した。これらは第19・20次調査区において多量に検出した陥し穴状土坑の続きと考えられる。

出土遺物として注目されるのは、RA077出土の土師器甕である（第61図256）。口縁部に指頭押圧による文様が施され、類例に乏しい。（八木）

第5表　第29次柱穴状土坑観察表

遺構名	ピット名	グリッド	径	深さ	底面標高	土層
RZ005	P1	11P16g	43	14.9	125.19	-
RZ005	P2	11P16g	52	28.3	125.25	10YR2/3黒色シルト　粘性　中　締り　中
RZ005	P3	11P16 h	42	22.6	125.054	10YR2/3黒色シルト　粘性　中　締り　中
RZ005	P4	11P18e	26	23	125.15	10YR2/2黒褐色シルト　粘性　弱　締り　密　褐色土ブロック直径5㎜～3㎝を20%含む
RZ005	P5	11P18 f	62	7.9	125.17	10YR2/2黒褐色シルト　粘性　弱　締り　中　褐色土粒直径2～3㎜を少量含む　白色火山灰粒直径5㎜～1㎝少量含む
RZ005	P6	11P19e	36	25.9	125.115	10YR2/2黒褐色シルト　粘性　弱　締り　密　褐色土ブロック直径5㎜～3㎝を20%含む
RZ005	P7	11P19f	21	15.5	125.22	10YR2/2黒褐色シルト　粘性　弱　締り　密　褐色土ブロック直径5㎜～3㎝を20%含む
RZ005	P8	11P19e	58	12.5	125.237	10YR2/2黒褐色シルト　粘性　弱　締り　中　褐色土粒直径2～3㎜を少量含む　白色火山灰粒直径5㎜～1㎝少量含む
RZ005	P9	11P20e	20	17.6	125.188	10YR2/2黒褐色シルト　粘性　弱　締り　密　褐色土ブロック直径5㎜～3㎝を20%含む
RZ005	P10	11P19e	28	29	125.079	10YR2/2黒褐色シルト　粘性　弱　締り　中　褐色土粒直径2～3㎜を少量含む　白色火山灰粒直径5㎜～1㎝少量含む
RZ005	P11	11P19f	42	18.3	125.187	10YR2/2黒褐色シルト　粘性　弱　締り　中　褐色土粒直径2～3㎜を少量含む　白色火山灰粒直径5㎜～1㎝少量含む
RZ005	P12	11P16k	20	14.6	124.995	10YR2/2黒褐色シルト　粘性　弱　締り　密　褐色土ブロック直径5㎜～3㎝を20%含む
RZ005	P13	11P16m	24	14.7	124.955	10YR2/2黒褐色シルト　粘性　弱　締り　中　褐色土粒直径2～3㎜を少量含む　白色火山灰粒直径5㎜～1㎝少量含む
RZ005	P14	11P17j	40	22.9	125.045	10YR2/1黒色シルト　粘性　中　締り　中　褐色土粒直径2～3㎜を少量含む　2層に分層され、下層は10YR3/2
RZ005	P15	11P17k	26	19.5	124.997	10YR2/2黒褐色シルト　粘性　弱　締り　密　褐色土ブロック直径5㎜～3㎝を20%含む
RZ005	P16	11P17l	22	13.4	125	10YR2/2黒褐色シルト　粘性　弱　締り　密　褐色土ブロック直径5㎜～3㎝を20%含む
RZ005	P17	11P18i	44	13.4	125.15	10YR2/1黒色シルト　褐色土粒直径2～3㎜を少量含む
RZ005	P18	11P18j	22	23.1	125.01	10YR2/2黒褐色シルト　粘性　弱　締り　密　褐色土ブロック直径5㎜～3㎝を20%含む
RZ005	P19	11P17k	20	14.2	125.057	10YR2/2黒褐色シルト　粘性　弱　締り　密　褐色土ブロック直径5㎜～3㎝を20%含む
RZ005	P20	11P17l	22	13.5	125.007	10YR2/2黒褐色シルト　粘性　弱　締り　密　褐色土ブロック直径5㎜～3㎝を20%含む
RZ005	P21	11P18k	22	25.1	124.987	10YR2/2黒褐色シルト　粘性　弱　締り　密　褐色土ブロック直径5㎜～3㎝を20%含む
RZ005	P22	11P18l	22	9.7	125.157	10YR2/2黒褐色シルト　粘性　弱　締り　中　褐色土粒直径2～3㎜を少量含む　白色火山灰粒直径5㎜～1㎝少量含む
RZ005	P23	11P18k	38	16	125.05	10YR2/1黒色シルト　褐色土粒直径2～3㎜を少量含む
RZ005	P24	11P18l	28	15.8	124.985	10YR2/1黒色シルト　褐色土粒直径2～3㎜を少量含む
RZ005	P25	11P18l	24	14.6	124.99	10YR2/1黒色シルト　褐色土粒直径2～3㎜を少量含む
RZ005	P26	11P18i	24	19	125.084	10YR2/2黒褐色シルト　粘性　弱　締り　密　褐色土ブロック直径5㎜～3㎝を20%含む
RZ005	P27	11P19h	40	26.5	125.091	10YR2/2黒褐色シルト　粘性　弱　締り　密　褐色土ブロック直径5㎜～3㎝を20%含む
RZ005	P28	11P20 f	28	21.1	125.155	10YR2/2黒褐色シルト　粘性　弱　締り　密　褐色土ブロック直径5㎜～3㎝を20%含む
RZ005	P29	11P20g	40	15.8	125.244	-
RZ005	P30	11P19h	30	33	125.05	10YR2/2黒褐色シルト　粘性　弱　締り　中　褐色土粒直径2～3㎜を少量含む　白色火山灰粒直径5㎜～1㎝少量含む
RZ005	P31	11P19c	22	3.5	125.197	10YR2/2黒褐色シルト　粘性　弱　締り　密　褐色土ブロック直径5㎜～3㎝を20%含む
RZ005	P32	11P19j	22	23.8	124.976	10YR2/2黒褐色シルト　粘性　弱　締り　密　褐色土ブロック直径5㎜～3㎝を20%含む
RZ005	P33	11P19j	24	24.1	124.984	10YR2/1黒色シルト　粘性　中　締り　中　褐色土粒直径2～3㎜を少量含む　2層に分層され、下層は10YR3/2
RZ005	P34	11P19l	30	17.6	124.999	10YR2/2黒褐色シルト　粘性　弱　締り　密　褐色土ブロック直径5㎜～3㎝を20%含む
RZ005	P35	11P19m	26	11.9	125.048	10YR2/2黒褐色シルト　粘性　弱　締り　密　褐色土ブロック直径5㎜～3㎝を20%含む
RZ005	P36	11P20i	22	10	125.102	10YR2/1黒色シルト　褐色土粒直径2～3㎜を少量含む
RZ005	P37	11P20j	14	15.5	125.105	10YR2/2黒褐色シルト　粘性　弱　締り　密　褐色土ブロック直径5㎜～3㎝を20%含む
RZ005	P38	11P20j	40	13	125.098	10YR2/2黒褐色シルト　粘性　弱　締り　密　褐色土ブロック直径5㎜～3㎝を20%含む
RZ005	P39	11P21i	24	22.6	125.026	10YR2/2黒褐色シルト　粘性　弱　締り　密　褐色土ブロック直径5㎜～3㎝を20%含む

遺構名	ピット名	グリッド	径	深さ	底面標高	土層
RZ005	P40	11P21 g	20	25.5	124.995	10YR2/2黒褐色シルト　粘性　弱　締り　密　褐色土ブロック直径5㎜～3㎝を20%含む
RZ005	P41	11P21h	26	20.7	125.037	10YR2/2黒褐色シルト　粘性　弱　締り　中　褐色土粒直径2～3㎜を少量含む　白色火山灰粒直径5㎜～1㎝少量含む
RZ005	P42	11P21g	44	10.3	125.147	-
RZ005	P43	11P21e	16	21.5	125.12	10YR2/1黒色シルト　褐色土粒直径2～3㎜を少量含む
RZ005	P44	11P21e	20	21.5	125.062	10YR2/1黒色シルト　褐色土粒直径2～3㎜を少量含む
RZ005	P45	11P22f	20	8.1	125.135	10YR2/2黒褐色シルト　粘性　弱　締り　密　褐色土ブロック直径5㎜～3㎝を20%含む
RZ005	P46	11P21j	24	16.6	125.072	10YR2/2黒褐色シルト　粘性　弱　締り　密　褐色土ブロック直径5㎜～3㎝を20%含む
RZ005	P47	11P22 h	22	27.4	124.915	10YR2/2黒褐色シルト　粘性　弱　締り　密　褐色土ブロック直径5㎜～3㎝を20%含む
RZ005	P48	11P22i	26	15.8	125.07	10YR2/1黒色シルト　褐色土粒直径2～3㎜を少量含む
RZ005	P49	11P22J	20	13.9	125.104	10YR2/2黒褐色シルト　粘性　弱　締り　密　褐色土ブロック直径5㎜～3㎝を20%含む
RZ005	P50	11P22k	32	13.6	125.122	10YR2/2黒褐色シルト　粘性　弱　締り　密　褐色土ブロック直径5㎜～3㎝を20%含む
RZ005	P51	11P22f	26	12.8	125.07	10YR2/2黒褐色シルト　粘性　弱　締り　密　褐色土ブロック直径5㎜～3㎝を20%含む
RZ005	P52	11P23f	28	7.2	125.12	10YR2/2黒褐色シルト　粘性　弱　締り　密　褐色土ブロック直径5㎜～3㎝を20%含む
RZ005	P53	11P23e	28	29.4	124.901	10YR2/2黒褐色シルト　粘性　弱　締り　密　褐色土ブロック直径5㎜～3㎝を20%含む
RZ005	P54	11P23f	20	25.5	124.96	10YR2/2黒褐色シルト　粘性　弱　締り　密　褐色土ブロック直径5㎜～3㎝を20%含む
RZ005	P55	11P22h	24	23.5	124.985	10YR2/2黒褐色シルト　粘性　弱　締り　中　褐色土粒直径2～3㎜を少量含む　白色火山灰粒直径5㎜～1㎝少量含む
RZ005	P56	11P22h	26	14.6	124.982	10YR2/2黒褐色シルト　粘性　弱　締り　密　褐色土ブロック直径5㎜～3㎝を20%含む
RZ005	P57	11P23i	27	17.9	125.046	10YR2/1黒色シルト　粘性　中　締り　中　褐色土粒直径2～3㎜を少量含む　2層に分層され、下層は10YR3/2
RZ005	P58	11P23g	14	18.5	125.006	10YR2/2黒褐色シルト　粘性　弱　締り　密　褐色土ブロック直径5㎜～3㎝を20%含む
RZ005	P59	11P23g	21	12.6	125.058	10YR2/2黒褐色シルト　粘性　弱　締り　密　褐色土ブロック直径5㎜～3㎝を20%含む
RZ005	P60	11P23h	22	6.2	125.117	10YR2/2黒褐色シルト　粘性　弱　締り　密　褐色土ブロック直径5㎜～3㎝を20%含む
RZ005	P61	11P23h	40	15.4	125.026	10YR2/3黒色シルト　粘性　中　締り　中
RZ005	P62	11P23g	22	17.3	125.024	10YR2/2黒褐色シルト　粘性　弱　締り　密　褐色土ブロック直径5㎜～3㎝を20%含む
RZ005	P63	11P23h	48	20.5	125.015	10YR2/3黒色シルト　粘性　中　締り　中
RZ005	P64	11P23g	22	11.8	125.11	10YR2/2黒褐色シルト　粘性　弱　締り　密　褐色土ブロック直径5㎜～3㎝を20%含む
RZ005	P65	11P23h	20	21.3	125.008	10YR2/1黒色シルト　粘性　中　締り　中　褐色土粒直径2～3㎜を少量含む　2層に分層され、下層は10YR3/2
RZ005	P66	11P23i	22	8.5	125.129	-
RZ005	P67	11P23j	20	11.8	125.142	10YR2/2黒褐色シルト　粘性　弱　締り　密　褐色土ブロック直径5㎜～3㎝を20%含む
RZ005	P68	11P3j	22	21.4	125.016	10YR2/2黒褐色シルト　粘性　弱　締り　密　褐色土ブロック直径5㎜～3㎝を20%含む
RZ005	P69	11P24g	58	24.8	124.942	10YR2/1黒色シルト　粘性　中　締り　中　褐色土粒直径2～3㎜を少量含む　2層に分層され、下層は10YR3/2
RZ005	P70	11P25g	28	10.5	125.1	10YR2/2黒褐色シルト　粘性　弱　締り　密　褐色土ブロック直径5㎜～3㎝を20%含む
RZ005	P71	11P25g	32	22.5	124.985	10YR2/1黒色シルト　粘性　中　締り　中　褐色土粒直径2～3㎜を少量含む　2層に分層され、下層は10YR3/2
RZ005	P72	11P24h	64	20.6	124.99	10YR2/2黒褐色シルト　粘性　弱　締り　密　褐色土ブロック直径5㎜～3㎝を20%含む
RZ005	P73	11P25g	32	23.5	124.97	10YR2/2黒褐色シルト　粘性　弱　締り　密　褐色土ブロック直径5㎜～3㎝を20%含む
RZ005	P74	11P25g	24	9.2	125.11	10YR2/2黒褐色シルト　粘性　弱　締り　密　褐色土ブロック直径5㎜～3㎝を20%含む
RZ005	P75	12P1f	24	14	125.07	10YR2/2黒褐色シルト　粘性　弱　締り　中　褐色土粒直径2～3㎜を少量含む　白色火山灰粒直径5㎜～1㎝少量含む
RZ005	P76	12P1f	22	11.6	125.079	10YR2/2黒褐色シルト　粘性　弱　締り　密　褐色土ブロック直径5㎜～3㎝を20%含む
RZ005	P77	12P1g	22	23.1	124.994	-
RZ005	P78	12P1h	16	29.7	124.93	10YR2/2黒褐色シルト　粘性　弱　締り　中　褐色土粒直径2～3㎜を少量含む　白色火山灰粒直径5㎜～1㎝少量含む
RZ005	P79	12P1g	24	14.3	125.102	10YR2/2黒褐色シルト　粘性　弱　締り　密　褐色土ブロック直径5㎜～3㎝を20%含む

遺構名	ピット名	グリッド	径	深さ	底面標高	土層
RZ005	P80	12P1g	22	6.8	125.177	10YR2/2黒褐色シルト　粘性　弱　締り　密　褐色土ブロック直径5㎜～3㎝を20%含む
RZ005	P81	12P1g	31	6.3	125.165	10YR2/2黒褐色シルト　粘性　弱　締り　密　褐色土ブロック直径5㎜～3㎝を20%含む
RZ005	P82	12P1i	34	20.8	125.05	10YR2/2黒褐色シルト　粘性　弱　締り　密　褐色土ブロック直径5㎜～3㎝を20%含む
RZ005	P83	12P1j	14	-	-	10YR2/2黒褐色シルト　粘性　弱　締り　密　褐色土ブロック直径5㎜～3㎝を20%含む
RZ005	P84	12P2k	26	19.5	125.01	10YR2/2黒褐色シルト　粘性　弱　締り　密　褐色土ブロック直径5㎜～3㎝を20%含む
RZ006	P85	13O23c	24	19.5	123,99	10YR2/1黒色シルト　粘性　弱　締り　中　均質
RZ006	P86	13O23b	30	9	124.04	10YR2/1黒色シルト　粘性　中　締り　やや疎　褐色土ブロック少量含む
RZ006	P87	13O24b	22	6.6	124.114	10YR2/1黒色シルト　粘性　中　締り　やや疎　褐色土ブロック少量含む
RZ006	P88	13O24a	26	8.1	124.146	10YR2/1黒色シルト　粘性　中　締り　やや疎　褐色土ブロック少量含む
RZ006	P89	13O24a	30	7.2	124.065	10YR2/1黒色シルト　粘性　中　締り　やや疎　褐色土ブロック少量含む
RZ006	P90	13O24a	28	6.4	124.076	10YR2/1黒色シルト　粘性　中　締り　やや疎　褐色土ブロック少量含む
RZ006	P91	13O24c	32	14	124.072	10YR2/1黒色シルト　粘性　中　締り　やや疎　褐色土ブロック少量含む
RZ006	P92	13O24e	38	15	124.06	10YR2/1黒色シルト　粘性　強　締り　中　褐色土ブロック直径5㎝を含む
RZ006	P93	13O24e	26	7.7	124.144	10YR2/1黒色シルト　粘性　中　締り　やや疎　褐色土ブロック少量含む
RZ006	P94	13O24f	30	19.4	124.032	10YR2/1黒色シルト　粘性　中　締り　やや疎　褐色土ブロック少量含む
RZ006	P95	13O23g	22	8.1	124.14	10YR2/1黒色シルト　粘性　強　締り　中　褐色土ブロック直径5㎝を含む
RZ006	P96	13O23g	18	9.9	124.098	10YR2/1黒色シルト　粘性　強　締り　中　褐色土ブロック直径5㎝を含む
RZ006	P97	13O23g	18	7.6	124.052	10YR2/1黒色シルト　粘性　中　締り　やや疎　褐色土ブロック少量含む
RZ006	P98	13O23h	22	6.4	124.075	10YR2/1黒色シルト　粘性　中　締り　やや疎　褐色土ブロック少量含む
RZ006	P99	13O23h	22	7	124.085	10YR2/1黒色シルト　粘性　中　締り　やや疎　褐色土ブロック少量含む
RZ006	P100	13O23i	18	9	124.06	10YR2/1黒色シルト　粘性　強　締り　中　褐色土ブロック直径5㎝を含む
RZ006	P101	13O24i	23	4.4	124.114	10YR2/1黒色シルト　粘性　中　締り　やや疎　褐色土ブロック少量含む
RZ006	P102	13O24i	24	7.5	124.09	10YR2/1黒色シルト　粘性　中　締り　やや疎　褐色土ブロック少量含む
RZ006	P103	13O24f	30	7.6	124.152	10YR2/1黒色シルト　粘性　強　締り　中　褐色土ブロック直径5㎝を含む
RZ006	P104	13O24e	12	14.4	124.1	10YR2/1黒色シルト　粘性　強　締り　中　褐色土ブロック直径5㎝を含む
RZ006	P105	13O25e	32	10.8	124.13	10YR2/1黒色シルト　粘性　強　締り　中　褐色土ブロック直径5㎝を含む
RZ006	P106	13O25f				10YR2/1黒色シルト　粘性　強　締り　中　褐色土ブロック直径5㎝を含む
RZ006	P107	13O25e	26	18.9	124.049	10YR2/1黒色シルト　粘性　強　締り　中　褐色土ブロック直径5㎝を含む
RZ006	P108	13O25d	26	16.8	124.084	10YR2/1黒色シルト　粘性　強　締り　中　褐色土ブロック直径5㎝を含む
RZ006	P109	13O25d	16	15.6	124.104	10YR2/1黒色シルト　粘性　中　締り　やや疎　褐色土ブロック少量含む
RZ006	P110	13O25e	32	27.4	123.985	10YR2/1黒色シルト　粘性　強　締り　中　褐色土ブロック直径5㎝を含む
RZ006	P111	13O25e	12	6.3	124.069	10YR2/1黒色シルト　粘性　強　締り　中　褐色土ブロック直径5㎝を含む
RZ006	P112	14O1d	22	20.2	123.883	10YR2/1黒色シルト　粘性　弱　締り　中　均質
RZ006	P113	14O1d	12	7	214.075	10YR2/1黒色シルト　粘性　強　締り　中　褐色土ブロック直径5㎝を含む
RZ006	P114	14O1d	16	18.9	124.099	10YR2/1黒色シルト　粘性　中　締り　やや疎　褐色土ブロック少量含む
RZ006	P115	14O1f	26	10.9	124.105	10YR2/1黒色シルト　粘性　中　締り　やや疎　褐色土ブロック少量含む
RZ006	P116	14O1a	22	5.9	124.131	10YR2/1黒色シルト　粘性　中　締り　やや疎　褐色土ブロック少量含む
RZ006	P117	14O1b	28	11.3	124.088	10YR2/1黒色シルト　粘性　中　締り　やや疎　褐色土ブロック少量含む
RZ006	P118	14O1a	34	15.6	124.054	10YR2/1黒色シルト　粘性　中　締り　やや疎　褐色土ブロック少量含む
RZ006	P119	14O1a	22	16.7	124.051	10YR2/1黒色シルト　粘性　中　締り　やや疎　褐色土ブロック少量含む

遺構名	ピット名	グリッド	径	深さ	底面標高	土層
RZ006	P120	14O2d	22	8.8	124.19	10YR2/1黒色シルト　粘性　中　締り　やや疎　褐色土ブロック少量含む
RZ006	P121	14O2d	16	18.1	124.01	10YR2/1黒色シルト　粘性　弱　締り　中　均質
RZ006	P122	14O2d	20	30.4	123.922	10YR2/1黒色シルト　粘性　弱　締り　中　均質
RZ006	P123	14O2f	12	5.1	124.204	10YR2/1黒色シルト　粘性　中　締り　やや疎　褐色土ブロック少量含む
RZ006	P124	14O2g	23	4.5	124.145	10YR2/1黒色シルト　粘性　中　締り　やや疎　褐色土ブロック少量含む
RZ006	P125	14O3g	58/84	16.3	124.037	10YR2/1黒色シルト　粘性　強　締り　中　褐色土ブロック直径5cmを含む
RZ006	P126	14O3e	24	8.6	124.148	10YR2/1黒色シルト　粘性　強　締り　中　褐色土ブロック直径5cmを含む
RZ006	P127	14O3f	28	22.2	123.985	10YR2/1黒色シルト　粘性　弱　締り　中　均質
RZ006	P128	14O2c	24	19	123.924	10YR2/1黒色シルト　粘性　弱　締り　中　均質
RZ006	P129	14O3a	22	8.5	123.965	10YR2/1黒色シルト　粘性　弱　締り　中　均質
RZ006	P130	14O3b	21	16.6	123.91	10YR2/1黒色シルト　粘性　強　締り　中　褐色土ブロック直径5cmを含む
RZ006	P131	14O3b	19	19	123.969	10YR2/1黒色シルト　粘性　弱　締り　中　均質
RZ006	P132	14O3c	20	12.3	124.108	10YR2/1黒色シルト　粘性　中　締り　やや疎　褐色土ブロック少量含む
RZ006	P133	14N3x	28	-	-	10YR2/1黒色シルト　粘性　中　締り　やや疎　褐色土ブロック少量含む
RZ006	P134	14N6u	20	6.3	124.082	10YR2/1黒色シルト　粘性　中　締り　やや疎　褐色土ブロック少量含む
RZ006	P135	14N7v	22	14.7	124.035	10YR2/1黒色シルト　粘性　弱　締り　中　均質
RZ006	P136	14N7v	28	22.8	213.958	10YR2/1黒色シルト　粘性　中　締り　やや疎　褐色土ブロック少量含む
RZ006	P137	14N7t	12	15	123.955	10YR2/1黒色シルト　粘性　中　締り　やや疎　褐色土ブロック少量含む
RZ006	P138	14N7t	16	13.6	124.004	10YR2/1黒色シルト　粘性　中　締り　やや疎　褐色土ブロック少量含む
RZ006	P139	14N7t	20	13.6	124.024	10YR2/1黒色シルト　粘性　弱　締り　中　均質
RZ006	P140	14N8t	38	5.7	124.11	10YR2/1黒色シルト　粘性　強　締り　中　褐色土ブロック直径5cmを含む
RZ006	P141	14N8u	15	17.8	124.017	10YR2/1黒色シルト　粘性　中　締り　やや疎　褐色土ブロック少量含む
RZ006	P142	14N8v	27	7.9	124.138	10YR2/1黒色シルト　粘性　強　締り　中　褐色土ブロック直径5cmを含む
RZ006	P143	14N8v	20	8	124.137	10YR2/1黒色シルト　粘性　中　締り　やや疎　褐色土ブロック少量含む
RZ006	P144	14N8w	24	20.5	124.014	10YR2/1黒色シルト　粘性　中　締り　やや疎　褐色土ブロック少量含む
RZ006	P145	14N8x	20	20.4	124.05	10YR2/1黒色シルト　粘性　中　締り　やや疎　褐色土ブロック少量含む
RZ006	P146	14N8t	20	13.2	124.055	10YR2/1黒色シルト　粘性　強　締り　中　褐色土ブロック直径5cmを含む
RZ006	P147	14N9t	38	11.6	124.028	10YR2/1黒色シルト　粘性　強　締り　中　褐色土ブロック直径5cmを含む
RZ006	P148	14N9s	31	11.9	124.026	10YR2/1黒色シルト　粘性　強　締り　中　褐色土ブロック直径5cmを含む
RZ006	P149	14N8u	22	20.7	123.967	10YR2/1黒色シルト　粘性　中　締り　やや疎　褐色土ブロック少量含む
RZ006	P150	14N8u	16	7.7	124.112	10YR2/1黒色シルト　粘性　中　締り　やや疎　褐色土ブロック少量含む
RZ006	P151	14N9u	38	22	123.887	10YR2/1黒色シルト　粘性　中　締り　やや疎　褐色土ブロック少量含む
RZ006	P152	14N9v	25	25.5	123.97	10YR2/1黒色シルト　粘性　弱　締り　中　均質
RZ006	P153	14N9v	20	24.9	123.986	10YR2/1黒色シルト　粘性　弱　締り　中　均質
RZ006	P154	14N9w	18	12.3	124.127	10YR2/1黒色シルト　粘性　弱　締り　中　均質
RZ006	P155	14N9w	14	19.1	124	10YR2/1黒色シルト　粘性　弱　締り　中　均質
RZ006	P156	14N9v	14	24.2	123.99	10YR2/1黒色シルト　粘性　弱　締り　中　均質
RZ006	P157	14N6u	16	13.2	123.965	10YR2/1黒色シルト　粘性　中　締り　やや疎　褐色土ブロック少量含む

第6表　第29次遺物観察表

RA060［第55図］

掲載No.	出土遺構	種別	器種	残存率		法量(cm)				調整			色調			胎土	焼成	備考
				口縁部	底部	口径	底径	器高	器厚	調整	内面	底面	外面	内面	断面			
235	RA060 No.2、覆土	土師器	坏	7/24	24/24	(14.2)	4.3	4.3	0.4	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	橙	橙	橙	砂粒含む	良好	
236	RA060 カマド	土師器	坏	4/24	-	(15.2)	-	(4.3)	0.4	ロクロナデ	ロクロナデ		橙	橙	橙	砂粒少量含む	良好	
237	RA060 No.4	土師器	坏	6/24	-	(15.0)	-	(3.7)	0.5	ロクロナデ	ロクロナデ		にぶい褐	にぶい褐	にぶい褐	砂粒含む	良好	
238	RA060 No.5、覆土、RD124	土師器	鉢	1/24	24/24	(19.0)	8.0	14.6	0.6	回転ヘラケズリ	ナデ	回転糸切り	にぶい褐	にぶい黄褐	にぶい黄褐	金雲母含む	良好	内面黒色処理
239	RA060 No.6	土師器	甕	-	6/24	-	11.2	(4.3)	1.2	ナデ	ヘラケズリ		にぶい黄褐	にぶい黄褐	にぶい黄褐	砂粒多量に含む	良好	
240	RA060 No.1	土師器	甕	-	-	-	-	(18.6)	0.5				橙	にぶい橙	にぶい黄褐			
241	RA060 No.2	土師器	甕	1/24	-	-	-	(4.2)	0.45	ヘラケズリ	ナデ		橙	橙	にぶい橙	砂粒多量に含む	良好	

RA076［第57図］

掲載No.	出土遺構	種別	器種	残存率		法量(cm)				調整			色調			胎土	焼成	備考
				口縁部	底部	口径	底径	器高	器厚	調整	内面	底面	外面	内面	断面			
242	RA076 No.3、貼床、東調査区 表土	土師器	坏	3/24	24/24	14.0	5.4	5.2	0.65	ロクロナデ	ヘラミガキ	ヘラ切り	浅黄橙	青黒	にぶい黄橙	砂粒含む	良好	内面黒色処理、底面ヘラ切り
243	RA076、RA078 Q3下層	土師器	坏	9/24	9/24	(15.0)	(6.4)	4.8	0.5	ロクロナデ	ロクロナデ、ヘラミガキ	回転糸切り	橙	黒褐	にぶい黄橙	砂粒少量含む	良好	内面黒色処理
244	RA076 No.5、Pit2、貼床、東調査区 表土	土師器	坏	7/24	15/24	14.2	6.3	4.8	0.4	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	にぶい橙	にぶい橙	褐灰	砂粒含む	良好	
245	RA076 貼床	土師器	坏	9/24	8/24	(14.4)	(4.8)	4.1	0.4	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	橙	橙	橙	砂粒多量に含む	良好	
246	RA076 Pit2	土師器	坏	7/24	-	(14.2)	-	(3.8)	0.5	ロクロナデ	ロクロナデ	砂底	橙	橙	橙	砂粒少量含む	良好	
247	RA076 No.4	土師器	坏	6/24	-	(14.2)	-	(3.5)	0.4	ロクロナデ	ロクロナデ		橙	橙	橙	砂粒含む	良好	
248	RA076 Pit2	土師器	坏	-	24/24	-	4.8	(4.1)	0.4	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	橙	橙	橙	砂粒含む	良好	
249	RA076	土師器	台付坏	1/24	24/24	(14.4)	(6.85)	(4.8)	0.45	ロクロナデ	ヘラミガキ（放射状）	回転糸切り	橙	橙	橙	砂粒含む	良好	赤焼、底面回転糸切→台ナデ
250	RA076 No.2	土師器	甕	3/24	-	(22.4)	-	(6.6)	0.7	ロクロナデ	ロクロナデ		にぶい橙	橙	にぶい橙	砂粒多量に含む	良好	
251	RA076 No.1	土師器	甕	-	4/24	-	(11.0)	(6.1)	0.6	ヘラナデ	ヘラナデ		にぶい橙	橙	橙	砂粒多量に含む	良好	底面砂底

RA077［第60図］

掲載No.	出土遺構	種別	器種	残存率		法量(cm)				調整			色調			胎土	焼成	備考
				口縁部	底部	口径	底径	器高	器厚	調整	内面	底面	外面	内面	断面			
253	RA077 No.9、カマド	土師器	甕	24/24	24/24	16.0	7.2	20.9	0.8	ハケメ、ヘラケズリ	ハケメ		にぶい黄橙	にぶい黄橙	明黄褐	砂粒多く含む	良好	
254	RA077 No.8	土師器	甕	24/24	24/24	10.6	8.2	31.0	0.9	ハケメ、口縁部ナデ	ハケメ		明褐	明褐	明褐	砂粒多く含む	良好	
255	RA077 No.6	土師器	甕	7/24	-	24.0	-	(26.8)	0.6	ハケメ	ナデ、スス多		橙	橙	橙	砂粒多く含む	良好	
256	RA077No.7	土師器	甕	24/24	11/24	21.4	8.8	26.1	0.7	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ハケメ		にぶい橙	橙		砂粒多く含む	良好	
257	RA077 No.2	土師器	甕	-	24/24	-	8.25	(9.3)	0.85	ハケメ	ハケメ	木葉痕	にぶい橙	にぶい橙	にぶい橙	砂粒多く含む	良好	
258	RA077 Q4埋土上位	土師器	甕	-	19/24	-	(8.6)	(8.3)	0.8	ヘラナデ	ハケメ		赤褐	にぶい赤褐	明赤褐	砂粒多量に含む	良好	底面ナデ
259	RA077 No.6	土師器	甕	3/24	-	(19.2)	-	(4.6)	0.7	ヘラケズリ	ハケメ		橙	にぶい褐	にぶい橙	砂粒含む	良好	

RA078［第63・64図］

掲載No.	出土遺構	種別	器種	残存率		法量(cm)				調整			色調			胎土	焼成	備考
				口縁部	底部	口径	底径	器高	器厚	調整	内面	底面	外面	内面	断面			
261	RA078 No.5	土師器	甕	9/24	24/24	13.9	6.2	4.8	0.4	ロクロナデ	ナデ	回転糸切り	浅黄橙	淡黄	淡黄	砂粒多く含む	良好	
262	RA078 No.7	土師器	坏	16/24	24/24	13.9	5.4	4.9	0.45	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	浅黄橙	浅黄橙	浅黄橙	砂粒多く含む	良好	
263	RA078 No.9、検出面	土師器	坏	2/24	24/24	(15.4)	6.0	4.7	0.5	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	にぶい橙	にぶい橙	にぶい橙	砂粒ほとんど入っていない	良好	赤焼
264	RA078 No.3、No.6	土師器	坏	2/24	24/24	(15.5)	5.0	3.8	0.4	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	橙	橙	橙	砂粒多く含む	良好	
265	RA078 Q1上層	土師器	坏	2/24	8/24	(12.4)	(4.8)	5.2	0.4	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	橙	にぶい橙	にぶい橙	砂粒多く含む	良好	赤焼(?)
266	RA078、pit1	土師器	坏	12/24	24/24	(13.8)	5.0	4.3	0.6	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	にぶい橙	にぶい橙	にぶい橙	金雲母多く含む	良好	赤焼
267	RA078 No.1	土師器	坏	3/24	6/24	(15.4)	(7.0)	5.2	0.5	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	淡橙	にぶい橙	浅黄橙	砂粒含む	良好	
268	RA078 Q1、Q2、Q4上層	土師器	坏	1/24	13/24	(15.2)	(5.8)	4.7	0.4	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	橙	橙	橙	砂粒含む	良好	赤焼
269	RA078 Q4上層、Q4下層	土師器	坏	4/24	-	(13.8)	-	(5.0)	0.55	ロクロナデ	ロクロナデ		橙	橙	橙	砂粒少量含む	良好	
270	RA078 Q1上層、Q4下層、検出時	土師器	坏	1/24	1/24	(14.0)	(5.0)	(5.0)	0.6	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	黄橙	橙	橙	砂粒少量含む	良好	
271	RA078 Q1下層	土師器	坏	6/24	-	(16.0)	-	(4.7)	0.5	ロクロナデ	ロクロナデ		橙	橙	橙	砂粒多く含む	良好	No.31と同一?
272	RA078 No.9	土師器	坏	5/24	-	(16.0)	-	(4.5)	0.4	ロクロナデ	ロクロナデ		橙	橙	浅黄橙	砂粒含む	良好	

掲載No.	出土遺構	種別	器種	残存率		法量(cm)				調整			色調			胎土	焼成	備考
				口縁部	底部	口径	底径	器高	器厚	調整	内面	底面	外面	内面	断面			
273	RA078 Q2下層	土師器	坏	-	8/24	-	7.0	(2.3)	0.6	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	浅黄橙	浅黄橙	浅黄橙	砂粒含む	良好	墨書
274	RA078 Q4下層	土師器	坏	-	24/24	-	6.6	(1.8)	0.5	ロクロナデ	ロクロナデ	摩滅	にぶい黄橙	にぶい黄橙	にぶい黄橙	金雲母多く含む、砂粒少量含む	良好	底面回転ヘラ切
275	RA078 Q1下層	土師器	台付坏	-	13/24	-	7.6	(3.1)	0.5	ロクロナデ	ロクロナデ	ナデ・摩滅	橙	橙	橙	砂粒多く含む	良好	
276	RA078 No.3	土師器	甕	3/24	-	(19.2)	-	(5.1)	0.5	ロクロナデ	ロクロナデ		橙	橙	橙	砂粒多く含む	良好	
277	RA078 No.3、No.4、1号カマド、Q2下層	土師器	甕	6/24	-	(20.6)	-	(21.9)	0.6	ロクロナデ→ヘラナデ	ヘラナデ		橙	橙	橙	砂粒多く含む	良好	
278	RA078 No.8、pit1	土師器	甕	3/24	-	26.0	-	(9.6)	0.9	ロクロナデ→ヘラナデ	ロクロナデ→ヘラナデ		黄橙	黄橙	黄橙	砂粒多く含む	良好	
279	RA078 No.2、No.8、RA079 Q2上層、Q4上層、Q4下層	土師器	甕	10/24	-	27.0	-	(13.9)	0.75	ロクロナデ→ヘラケズリ	ヘラナデ		にぶい赤褐	にぶい赤褐	にぶい赤褐	砂粒多く含む	良好	
280	RA078 pit1、Q2下層	土師器	甕	12/24	-	(19.6)	-	(13.4)	0.6	ヘラナデ、ヘラケズリ	ヘラナデ		明黄橙	にぶい黄橙	にぶい黄橙	砂粒多く含む	良好	
281	RA078 Q2下層	土師器	甕	-	-	-	-	(8.5)	0.6	ナデ→ハケメ	ナデ→ハケメ		橙	橙	橙	砂粒多く含む	良好	
282	RA078 Q4下層	土師器	甕	-	16/24	-	7.2	(5.4)	0.8	ナデ→ハケメ	ハケメ	木葉痕	明赤橙	明赤褐	明赤褐	砂粒多く含む	良好	
283	RA078 Q2上層、Q2下層、1号カマド、北調査区 表土	土師器	甕	-	-	-	-	(17.1)	0.7	ヘラナデ	ヘラナデ		にぶい褐	橙	橙	砂粒多く含む	良好	
284	RA078 Q4下層、RA079 Q4上層	土師器	瓶	-	-	-	-	(8.5)	0.8	ロクロナデ	ロクロナデ		灰褐	黒褐	にぶい褐	金雲母多く含む	良好	内面黒色処理

RA079 [第66・67図]

掲載No.	出土遺構	種別	器種	残存率		法量(cm)				調整			色調			胎土	焼成	備考
				口縁部	底部	口径	底径	器高	器厚	調整	内面	底面	外面	内面	断面			
286	RA079 カマド	土師器	坏	15/24	24/24	(14.7)	7.0	4.5	0.4	ロクロナデ	ナデ	回転糸切り	灰黄褐	灰黄褐	-	金雲母	良好	内面黒色処理
287	RA079 No.1	土師器	坏	15/24	24/24	(14.7)	6.3	5.0	0.6	ロクロナデ	ナデ、ヘラミガキ	回転糸切り	にぶい橙	黒	にぶい黄橙	砂粒多く含む	良好	内面黒色処理
288	RA079 検出面	土師器	坏	3/24	12/24	(16.3)	(6.4)	5.3	0.6	ロクロナデ	ヘラミガキ	回転糸切り	にぶい橙	黒	にぶい橙	金雲母含む	良好	内面黒色処理
289	RA079Q4上層	土師器	坏	2/24	5/24	(13.7)	(4.5)	4.5	0.5	ロクロナデ	ミガキ	ナデ・摩滅	にぶい褐	黒褐	にぶい褐	金雲母含む	良好	内面黒色処理
290	RA079 Q1下層、床直、カマド、検出面	土師器	坏	9/24	-	(17.2)	-	(5.5)	0.5	ロクロナデ	ヘラミガキ		黒	黒	にぶい橙	砂粒含む	良好	内外面黒色処
291	RA079 No.4	土師器	坏	24/24	24/24	13.7	6.4	4.1	0.5	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	橙	橙	橙	砂粒含む	良好	理
292	RA079 No.3、Q4下層	土師器	坏	22/24	24/24	13.9	5.7	4.4	0.5	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	にぶい橙	浅黄橙	浅黄橙	金雲母	良好	赤焼
293	RA079 Q4下層、床直	土師器	坏	16/24	24/24	14.3	6.6	5.1	0.4	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	浅黄橙	浅黄橙	浅黄橙	砂粒多く含む	良好	
294	RA079 下層	土師器	坏	9/24	12/24	(14.8)	(5.0)	4.9	0.5	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	橙	橙	褐灰	砂粒含む	良好	
295	RA079 No.2、No.3	土師器	坏	12/24	2/24	(14.9)	(5.7)	6.9	0.6	ロクロナデ	ロクロナデ		橙	黄橙	黄橙	砂粒含む	良好	
296	RA079 検出面	土師器	坏	11/24	-	(15.0)	-	5.0	0.5	ロクロナデ	ロクロナデ		橙	橙	橙	砂粒含む	良好	
297	RA079 Q4上層	土師器	坏	6/24	6/24	(14.2)	(5.8)	5.0	0.5	ロクロナデ	ロクロナデ		橙	橙	橙	砂粒含む	良好	
298	RA079 カマド、検出面	土師器	坏	9/24		(12.8)		(4.0)	0.5	ロクロナデ	ロクロナデ		橙	橙	橙	砂粒含む	良好	
299	RA079 No.8	土師器	坏	7/24	-	14.0	-	(3.9)	0.45	ロクロナデ	ロクロナデ		にぶい橙	にぶい橙	にぶい橙	金雲母多く含む	良好	
300	RA079 No.12	土師器	坏	4/24	-	(16.0)	-	(3.7)	0.4	ロクロナデ	ロクロナデ		にぶい橙	にぶい褐	にぶい褐	金雲母含む	良好	
301	RA079 Q4下層	土師器	坏	6/24	4/24	(15.4)	(6.0)	4.8	0.5	ロクロナデ	ロクロナデ		にぶい橙	にぶい橙	橙	砂粒多く含む	良好	
302	RA079 Q4上層	土師器	甕?	-	6/24	-	(8.0)	(7.5)	0.9	ヘラケズリ	ハケメ		橙	橙	橙	砂粒多く含む	良好	
303	RA079 No.13、Q1下層、Q4下層、カマド	土師器	甕	8/24	-	(14.8)	-	(10.3)	0.8	ロクロナデ	ロクロナデ→ハケメ		にぶい褐	にぶい黄橙	にぶい褐	砂粒多く含む	良好	
304	RA079 Q4下層、検出面	土師器	甕	11/24	-	(15.5)	-	(16.4)	0.9	ロクロナデ	ロクロナデ→ヘラナデ		浅黄橙	浅黄橙	浅黄橙	砂粒多く含む	良好	
305	RA079 No.9、No.10	土師器	甕	4/24		(23.0)		(21.2)	0.8	ロクロナデ→ヘラケズリ	ロクロナデ		明赤橙	橙	橙	砂粒多く含む	良好	
306	RA079 床直、上層、下層	土師器	甕	10/24	-	(19.1)	-	(22.0)	0.5	ナデ→ヘラケズリ	ナデ→ヘラナデ		にぶい橙	にぶい橙	にぶい橙	砂粒多く含む	良好	
307	RA079 No.5	土師器	甕	5/24	-	(20.6)	-	(10.9)	0.9	ロクロナデ、ナデ→ヘラケズリ	ナデ、ヘラナデ		橙	浅黄橙	浅黄橙	砂粒多く含む	良好	
308	RA079 No.13、Q1下層、カマド	土師器	甕	17/24	-	(10.5)	-	(5.9)	0.5	ヘラケズリ	ハケメ		にぶい橙	淡黄	淡黄	砂粒多く含む	良好	
309	RA079 No.1、No.6、Q1下層、カマド、床直、RE002 Q4上層焼土層	土師器	甕	-	11/24	-	(11.0)	(26.8)	0.8	ヘラケズリ	ハケメ	ナデ	にぶい黄褐	にぶい褐	明褐	砂粒多く含む	良好	
310	RA079 No.11	土師器	甕	-	4/24	-	(12.0)	(6.7)	0.8	ヘラケズリ	ヘラナデ	ヘラケズリ→ナデ	橙	浅黄橙	浅黄橙	砂粒少量含む	良好	

掲載No.	出土遺構	種別	器種	残存率		法量(cm)				調整			色調			胎土	焼成	備考
				口縁部	底部	口径	底径	器高	器厚	調整	内面	底面	外面	内面	断面			
311	RA079 Q1上層、Q2上層、Q4下層、検出面、貼床	須恵器	瓶	-	4/24	-	(10.8)	(16.8)	0.8	ロクロナデ→ヘラケズリ	ロクロナデ	ナデ	灰	灰	灰	白色砂粒少量	良好	

RB004［第71図］

掲載No.	出土遺構	種別	器種	残存率		法量(cm)				調整			色調			胎土	焼成	備考
				口縁部	底部	口径	底径	器高	器厚	調整	内面	底面	外面	内面	断面			
312	RB004 P6	土師器	坏	-	-	-	-	(4.3)	0.4	ロクロナデ	ロクロナデ		橙	にぶい褐	橙	ごく細かい砂が少量	良好	

RD［第71図］

掲載No.	出土遺構	種別	器種	残存率		法量(cm)				調整			色調			胎土	焼成	備考
				口縁部	底部	口径	底径	器高	器厚	調整	内面	底面	外面	内面	断面			
313	RD116 覆土	土師器	坏	-	-	-	-	(2.0)	0.3	ロクロナデ	ロクロナデ		橙	橙	橙	砂粒含む	良好	
314	RD116 覆土	土師器	坏	-	5/24	-	(6.2)	3.2	0.6	ロクロナデ→ハケメ	ロクロナデ		灰黄	暗灰黄	灰黄褐	小さい砂粒微量含む	良好	
315	RD116 覆土	土師器	甕	-	-	-	-	(4.3)	0.4	ヘラケズリ	ヘラナデ		褐	褐色	にぶい褐	砂粒多く含む	良好	
316	RD116 覆土	土師器	甕	-	4/24	-	(11.2)	3.0	1.1	ハケメ	ハケメ		にぶい赤褐	暗灰黄	橙	砂粒多く含む	良好	
317	RD118 上層	土師器	坏	-	6/24	-	(3.0)	(1.2)	0.4	ロクロナデ	ヘラミガキ		橙	黒	橙	金雲母含む	良好	内面黒色処理
318	RD118 上層	土師器	坏	4/24	-	(12.8)	-	(1.8)	0.4	ロクロナデ	ロクロナデ		にぶい橙	にぶい橙	にぶい橙	均質	良好	
319	RD118 覆土	土師器	坏	-	-	-	-	(2.2)	0.4	ロクロナデ	ロクロナデ		橙	橙	橙	砂粒少ない	良好	
320	RD118 上層	土師器	坏	-	24/24	-	5.5	(3.0)	0.45	ロクロナデ	ロクロナデ		橙	橙	橙	砂粒多く含む	良好	
321	RD118 覆土	土師器	坏	-	24/24	-	5.8	(1.6)	0.4	ロクロナデ	ロクロナデ		浅黄橙	浅黄橙	浅黄橙	砂粒含む	良好	
322	RD118 上層	土師器	坏	-	-	-	-	(1.8)	0.4	ロクロナデ	ロクロナデ		明黄橙	明黄褐	明黄褐	金雲母含む	良好	内面黒色処理
323	RD118 上層	土師器	甕	-	-	-	-	(4.1)	0.6	ヘラケズリ	ハケメ		橙	橙	橙	砂粒多く含む	良好	
324	RD118 覆土	土師器	甕	-	-	-	-	(4.7)	0.6	ナデ・マメツ	ナデ		黄橙	にぶい橙	黄橙	砂粒含む	良好	
325	RD119	土師器	坏	-	5/24	-	(5.2)	(1.3)	0.5	ロクロナデ	ロクロナデ		橙	橙	橙	砂粒含む	良好	
326	RD121	土師器	坏	-	-	-	-	(2.5)	0.4	ロクロナデ	ロクロナデ		浅黄橙	黒	浅黄橙	金雲母含む	良好	内面黒色処理
327	RD121	土師器	坏	-	-	-	-	(3.2)	0.45	ロクロナデ	ロクロナデ		橙	橙	橙	砂粒少量含む	良好	
328	RD121	土師器	坏	-	7/24	-	(5.0)	(2.6)	0.6	ロクロナデ	ロクロナデ		橙	橙	橙	砂粒含む	良好	
329	RD121	土師器	高坏	-	3/24	-	(5.8)	(1.1)	0.5	ナデ	ナデ		橙	にぶい橙	橙	金雲母多く含む	良好	
330	RD124	土師器	坏	12/24	24/24	(14.3)	5.1	4.1	0.5	ロクロナデ	ロクロナデ		橙	橙	橙	砂粒多く含む	良好	
331	RD124	土師器	坏	2.5/24	-	(12.7)	-	3.4	0.35	ロクロナデ	ロクロナデ		橙	橙	橙	砂粒少ない	良好	内面黒色処理
332	RD124	土師器	坏	-	-	-	-	(2.1)	0.5	ロクロナデ	ロクロナデ		橙	橙	橙	砂粒少ない	良好	
333	RD124	土師器	坏	-	-	-	-	(1.9)	0.4	ロクロナデ	ロクロナデ		橙	橙	橙	金雲母含む	良好	
334	RD124	土師器	坏	-	4/24	-	(6.0)	(0.9)	0.4	ロクロナデ	ヘラミガキ		にぶい橙	黒褐	にぶい橙	均質	良好	内面黒色処理
335	RD124	土師器	坏	-	6/24	-	(4.2)	(0.8)	0.4	ロクロナデ	ロクロナデ		橙	褐灰	橙	均質	良好	内面黒色処理

RE002［第72・73・74図］

掲載No.	出土遺構	種別	器種	残存率		法量(cm)				調整			色調			胎土	焼成	備考
				口縁部	底部	口径	底径	器高	器厚	調整	内面	底面	外面	内面	断面			
336	RE002 No.2、Q1中層	土師器	坏	18/24	24/24	(16.0)	6.9	5.5	0.4	ロクロナデ	ヘラミガキ	手持ちヘラケズリ	にぶい黄橙	黒	にぶい黄橙	砂粒含む	良好	内面黒色処理
337	RE002 Q2下層	土師器	坏	3/24	16/24	(14.4)	(7.0)	(4.1)	0.4	ロクロナデ	ヘラミガキ	回転糸切り	にぶい褐	黒褐	にぶい褐	金雲母少量含む	良好	内面黒色処理
338	RE002 Q4上層（焼土層）	土師器	坏	2/24	6/24	(15.2)	(7.0)	(5.0)	0.7	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	にぶい橙	黒	にぶい黄橙	砂粒少ない、金雲母多い	良好	内面黒色処理
339	RE002 Q1上層、Q1中層（ベルト）、Q4上層（焼土層）	土師器	坏	9/24	6/24	(14.0)	(7.0)	4.6	0.6	ロクロナデ	ヘラミガキ	回転糸切り	にぶい黄橙	黒	にぶい黄橙	砂粒含む	良好	内面黒色処理
340	RD118 上層、RE002 Q1上層、Q4上層	土師器	坏	-	24/24	-	6.2	3.4	0.5	ロクロナデ	ヘラミガキ	回転糸切り	にぶい橙	黒	にぶい橙	金雲母含む	良好	内面黒色処理
341	RE002 Q2上層	土師器	坏	-	14/24	-	(2.8)	(2.1)	0.4	ロクロナデ	ヘラミガキ	回転糸切り	橙	褐	浅黄橙	金雲母少量含む	良好	内面黒色処理
342	RE002 Q4上層焼土層	土師器	坏	-	24/24	-	-	(4.0)	0.5	ナデ	ナデ		にぶい黄橙	にぶい黄橙	灰黄褐	砂粒含む	良好	
343	RE002 No.1	土師器	坏	24/24	24/24	14.4	5.4	4.6	0.4	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	橙	橙	-	金雲母多く含む	良好	赤焼
344	RE002 No.4、Q1下層ベルト、Q4上層焼土層	土師器	坏	17/24	24/24	14.1	6.6	5.0	0.4	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	浅黄橙	浅黄橙	浅黄橙	砂粒含む	良好	

掲載No.	出土遺構	種別	器種	残存率		法量(cm)				調整			色調			胎土	焼成	備考
				口縁部	底部	口径	底径	器高	器厚	調整	内面	底面	外面	内面	断面			
345	RD118 上層、RE002 Q2上層、Q4上層焼土層	土師器	坏	4/24	2/24	(15.0)	(6.0)	4.5	0.5	ロクロナデ	ロクロナデ		橙	橙	橙	砂粒含む	良好	赤焼(?)
346	RE002 Q2下層	土師器	坏	5/24	-	(14.0)	-	(4.2)	0.5	ロクロナデ	ロクロナデ		浅黄橙	にぶい橙	浅黄橙	砂粒ほとんど入っていない	良好	
347	RE002 Q2上層	土師器	坏	5/24	-	(14.2)	-	(5.0)	0.5	ロクロナデ	ロクロナデ		浅黄橙	橙	浅黄橙	砂粒多く含む	良好	
348	RE002 Q1下層ベルト、Q4上層(焼土中)	土師器	坏	2/24	-	(16.0)	-	(3.3)	0.4	ロクロナデ	ロクロナデ		浅黄橙	浅黄橙	浅黄橙	砂粒少量含む	良好	口縁部刻みあり
349	RE002 Q1下層ベルト、Q3下層、Q4上層焼土層	土師器	甕	9/24	-	19.6	-	(18.0)	0.5	ハケメ→ヘラナデ	ハケメ		橙	橙	橙	砂粒を多く含む	良好	外面スス多い
350	RE002 Q2下層	土師器	甕	6/24	-	(15.7)	-	(10.8)	(0.8)	ヘラケズリ	ハケメ		橙	浅黄橙	にぶい橙	砂粒多く含む	良好	
351	RE002 Q4上層焼土層	土師器	甕	2/24	-	-	-	(17.6)	0.5	ヘラナデ	ハケメ		にぶい褐	にぶい褐	にぶい褐	砂粒多く含む	良好	
352	RE002 Q2中層ベルト、Q3上層、Q4上層(焼土層)	土師器	甕	-	24/24	-	11.4	7.0	1.0	ヘラケズリ	ハケメ		にぶい黄褐	にぶい褐	にぶい褐	砂粒多く含む	良好	底面スス多い
353	RE002 Q4上層、上層焼土層	土師器	甕	-	5/24	-	5.8	(9.0)	0.6	ヘラケズリ	ヘラナデ	木葉痕	橙	橙	橙	砂粒多く含む	良好	
354	北調査区 表土、RD116埋土、RE002 Q1上層ベルト、Q2下層、Q4上層、Q4上層焼土層	土師器	甕	4/24	-	(22.0)	-	(24.5)	0.7	回転ナデ→ハケメ	ハケメ		橙	橙	橙	砂粒を多く含む	良好	
355	RE002 Q2上層、北調査区 表土	土師器	甕	3/24	-	-	-	(8.2)	0.7	回転ナデ	ヘラナデ		橙	橙	橙	砂粒多く含む	良好	
356	RE002 Q4上層焼土層	土師器	甕	8/24	-	(18.4)	-	(10.4)	(0.6)	ロクロナデ	ロクロナデ		橙	にぶい赤褐	橙	砂粒多く含む	良好	
357	RE002 Q1下層ベルト	須恵器	瓶	1/24	-	(11.5)	-	(8.6)	0.6	ロクロナデ	ロクロナデ		黄灰	黄灰	にぶい褐	砂粒多く含む	良好	
358	RE002 Q1上層、Q1中層	須恵器	甕	10/24	-	(14.7)	-	(9.4)	0.75	ロクロナデ	ロクロナデ		黄灰	灰	灰	砂粒多く含む	良好	
359	RE002 Q4上層焼土層	須恵器	甕	-	-	-	-	(31.3)	1.2	タタキメ	タタキメ		暗青灰	灰	オリーブ灰	均質	良好	
360	RE002 Q4上層焼土層、RD121	須恵器	甕	-	-	-	-	(15.9)	1.1	タタキメ	タタキメ		にぶい橙	にぶい黄橙	にぶい黄橙	砂粒目立たない	良好	赤焼
361	RE002 Q1上層、Q3上層、Q4上層焼土層	須恵器	甕	-	-	-	-	(31.2)	0.7	タタキメ	工具痕ナシ		褐灰	褐灰	褐灰		良好	
362	RD118 、RE002Q1Q2下層	須恵器	甕	-	-	-	-	(26.3)	1.0	タタキメ	タタキメ		黒	褐灰	灰褐	均質	良好	

RZ005 [第77図]

掲載No.	出土遺構	種別	器種	残存率		法量(cm)				調整			色調			胎土	焼成	備考
				口縁部	底部	口径	底径	器高	器厚	調整	内面	底面	外面	内面	断面			
364	RZ005 P11	須恵器	甕	-	-	-	-	(3.6)	1.1	タタキメ	タタキメ		青黒	青黒	灰褐	白色砂粒含む	良好	
365	RZ005 P11	須恵器	瓶	-	-	-	-	(2.4)	0.6	ロクロナデ	ロクロナデ		褐灰	黒褐	にぶい赤褐	砂粒少量含む	良好	
366	RZ005 P9	土師器	坏	-	-	-	-	(3.1)	0.5	ロクロナデ	ロクロナデ		橙	にぶい褐	にぶい褐	砂粒多く含む	良好	
367	RZ005 P9	土師器	甕	-	-	-	-	(5.1)	0.45	ヘラナデ	ハケメ		にぶい褐	灰褐	にぶい褐	砂粒多く含む	良好	
368	RZ005 P10	土師器	甕	-	-	-	-	(2.1)	0.4	ヘラナデ	ハケメ		にぶい赤褐	にぶい赤褐	明赤褐	砂粒含む	良好	No.135と同一の可能性あり
369	RZ005 P4	土師器	坏	-	-	-	-	(2.5)	0.3	ロクロナデ	ロクロナデ		橙	橙	橙	砂粒少ない	良好	

遺構外 [第77図]

掲載No.	出土地点	種別	法量(cm)			重量(g)	石材	備考
			長さ	幅	厚さ			
370	東調査区	土製品脚?	2.79	2.77	2.04	11.6		
371	北調査区 表土		4.57	5.45	0.96	24.3	凝灰岩	
372	南調査区 表土		7.92	8.16	3.9	185.6	頁岩	

鉄製品[第57図252・写真図版63、第64図285・写真図版66、第74図363・写真図版73]

掲載No.	出土遺構	種別	法量(cm)			重量(g)	備考
			長さ	幅	厚さ		
252	RA076Pit2 No.6	刀子	11.8	1.5	2.04	0.4	
285	RA078 Q2 下層	刀子	7	0.9	0.96	0.35	
363	RE002床面直上 No.5	鋤先	11.1	12.6	3.9	0.4	

石製品[第60図260]

掲載cm	出土地点	種別	法量(cm)			重量(g)	石材	備考
			長さ	幅	厚さ			
260	RA077床面直上 No.1	砥石	13.560	4.833	4.872	312.21	凝灰岩	

Ⅵ 考　　察

1　野古Ａ遺跡第23・24・29次調査検出竪穴住居跡について

第23・24・29次調査において検出された竪穴住居跡は、第23次8棟・第24次4棟・第23—29次1棟・第29次4棟の合計17棟である。これらのうち奈良時代5棟、平安時代12棟である。遺構の詳細な時期決定は出土土器に依るため、本節では遺構のみでの検討を行う。なお、住居跡の分析に際して、過去の調査である第6次・6次補（盛岡市教委1998）、第12次（菅原2003）、第15次（阿部2003）調査成果を含めて遺跡全体の把握に努めることとした。ただし、住居が調査されている第11・18・21・25次調査に関しては報告書未刊のため住居構造の分析には入れず、全体遺構配置図および時代区分にのみ成果を盛り込むこととする。

（1）　時期区分

野古Ａ遺跡は奈良時代と平安時代の複合集落遺跡である。竪穴住居跡はこれまでに総数75棟見つかっている。うち未報告が15棟あり、未調査分の1棟（RA07）も除外し、土器から分類できる時代区分によって、奈良時代住居跡25棟、平安時代住居跡34棟と判断できる（表7）。

本報告書で報告する第23・24・29次調査では奈良時代5棟、平安時代12棟を検出した。各遺構の時期区分に関しては、野古Ａ遺跡から南東に750ｍに位置する細谷地遺跡平安時代集落の遺構分析による住居時期区分分析において、十和田a降下火山灰の堆積の有無と火山灰堆積状況から検証が行われている（高木2003）。この方法を野古Ａ遺跡奈良時代・平安時代集落に用い、火山灰混入層を覆土上位・中位・下位にグループ化し、各住居の堆積状況を検証した。結果、層として灰白色火山灰が堆積している住居は覆土上位のRA077（奈良）と覆土中位のRA067（奈良）で、他はブロック状に堆積している。ブロック状に堆積している住居跡は、覆土上位がRA018（平安）・RA039（平安）・RA040（平安）・RA063（平安）・RA064（平安）、覆土中位がRA019（平安）・RA 028（平安）・RA 048（奈良）・RA061（平安）・RA 078（平安）・RA 079（平安）、覆土下位がRA020（平安）・RA 021（奈良）・RA 022（平安）・RA 023（平安）・RA 041（平安）となり、各時代の細分だけでなく時代区分さえ混在する状況で、細谷地遺跡第4・5次調査のような結果を得ることができなかった。野古Ａ遺跡の火山灰再堆積状況が細谷地遺跡と異なる環境下にあった可能性がある。また細谷地遺跡の場合は同一調査員によって調査がなされているが、野古Ａ遺跡は4人の調査員が各調査次に配備されており、異なる視点によって土層観察がなされた結果、今回の結果となった可能性がある。従って、野古Ａ遺跡の時代毎の細分は、層相からアプローチできなかった。

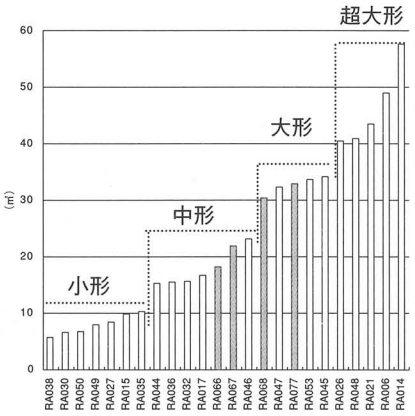
住居の配置を見ると、奈良時代と平安時代での住居の切り合いはRA034・RA035で認められるのみである。平安時代集落が営まれた時代において、十和田a降下火山灰（西暦915年）が覆土上位に堆積する住居（RA077）が認められ、奈良時代住居は埋没する過程にあったと推測されることから、平安時代集落は奈良時代住居を避けて住居を構築することが可能であったと考えられる。奈良時代同士での住居の切り合いはなく、また、平安時代同士の切り合いはRA059・RA064以外では認められないことから、各時代において全ての住居跡が同時期に存在した可能性がある。しかし、これ以上の検討は遺構からは望めず、各時代の細分に関しては土器の分析に譲ることとする。

（2）　規模（床面積）

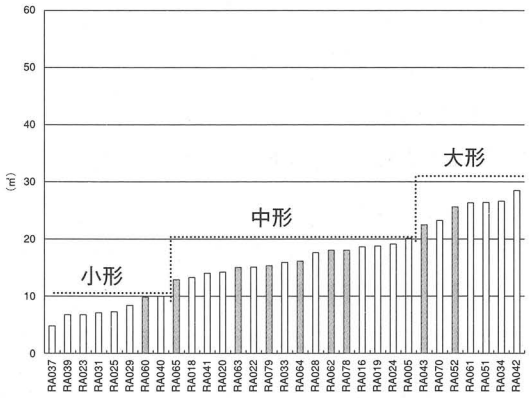
住居の壁2辺を掛けて床面積の概算を行った結果をグラフにした。第79・80図参照。第79図は奈良時代住居跡の規模を概算した床面積で表したものである。グラフを見ると3箇所に断絶が認められる。この断絶を境とし、5.64～10.24㎡を小形、15.2～23.1㎡を中形、30.37～34.1㎡を大形、40.47

㎡以上を超大形と分類することができる。第80図に示した平安時代は4.8～10.11を小形、12.92～19.2㎡を中形、22.56～28.6㎡を大形と分類することができる。

棒グラフ中のトーンがかかった棒は第23・24・29次調査において検出された住居跡で、奈良時代では中形2棟・大形2棟、平安時代では小形1棟・中形6棟・大形2棟で、奈良時代は小形・超大形が欠落し、平安時代では各規模が揃っているといえる。第23・24・29次調査区で検出された平安時代住居は第12・15次調査区と同じ面の段丘高位面に立地する。第81図野古A遺跡集落竪穴住居跡配置図を見ると、平安時代集落にはまとまりが認められる。一方で奈良時代では第23・24・29次調査区は集落の中心からやや離れており、そのため小形・超大形が欠落した可能性がある。



第79図　奈良時代住居床面積



第80図　平安時代住居床面積

（3）　焼失住居

明らかに焼失住居と判断できるのは、RA077の1棟のみである。RA015・RA026・RA029・RA068・RA079は少量だが炭化材・焼土が出土しており、焼失住居の可能性がある。報告書で報告されている住居が59棟であるので、焼失住居の少なさが際立つ。

（4）　柱　　穴

柱穴ははっきりしないものが多い。奈良時代では明確なものが多く、RA067（6？個）、RA068（4？個）、RA077（4個）で方形に配置される。平安時代住居は不明確である。第12・15次調査においても同様で、奈良時代住居であるRA014（6個）、RA021（4個）、RA026（4個）、RA046（4個＋建て替え？4個）、RA053（4個）は主柱穴が明確である。

（5）　貯　蔵　穴

RA068（奈良）・RA076（平安）・RA078（平安）においてカマド脇の貯蔵穴を確認した。RA076は調査区内ではカマドを検出していないが、規模から貯蔵穴の可能性があるピットが検出されている。第12・15次調査ではRA019・020・022・024・026？・028・029・032・034・041・042・047・048・050・051・052において貯蔵穴が作られている。

（6）　周　　溝

周溝はRA066（奈良）・RA068（奈良）・RA067（奈良）・RA076（平安）・RA077（奈良）において検出された。いずれも幅10㎝未満でほぼ全周する可能性がある。圧倒的に奈良時代住居跡に多い。第12・15次調査においてはRA014の半周、RA026・RA044のほぼ全周、RA046・RA047・RA048・RA053の一部に周溝が認められる。全て奈良時代住居跡であり、遺跡全体の構造として奈良時代住居跡のうち、大形を中心に周溝が検出されるものが多いと言える。

（7）　カ　マ　ド

①　**燃焼部**　RA077カマド燃焼部に両袖の芯材として土師器甕が逆位で使用されている。RA064

第81図　野古A遺跡　古代住居跡分布図

第７表　野古Ａ遺跡検出住居一覧

調査次数	住居名	時期
6･6補	RA005	平安
	RA006	奈良
	RA007	-
11次 (H12調査)	RA008	未報告
	RA009	
	RA010	
	RA011	
	RA012	
	RA013	
12次	RA014	奈良
	RA015	奈良
	RA016	平安
	RA017	奈良
	RA018	平安
	RA019	平安
	RA020	平安
	RA021	奈良
	RA022	平安
	RA023	平安

調査次数	住居名	時期
12次	RA024	平安
	RA025	平安
	RA026	奈良
	RA027	奈良
	RA028	平安
	RA029	平安
	RA030	奈良
	RA031	平安
	RA032	奈良
	RA033	平安
	RA034	平安
	RA035	奈良
	RA036	奈良
	RA037	平安
	RA038	奈良
	RA039	平安
	RA040	平安
15次	RA041	平安
	RA042	平安

調査次数	住居名	時期
15次	RA043	平安
	RA044	奈良
	RA045	奈良
	RA046	奈良
	RA047	奈良
	RA048	奈良
	RA049	奈良
	RA050	奈良
	RA051	平安
	RA052	平安
18次 (H14調査)	RA053	奈良
	RA054	未報告
21次 (H15調査)	RA055	
	RA056	未報告
	RA057	
	RA058	
23･24次	RA059	平安
23･29次	RA060	平安

調査次数	住居名	時期
23･24次	RA061	平安
	RA062	平安
	RA063	平安
	RA064	平安
	RA065	平安
	RA066	奈良
	RA067	奈良
	RA068	奈良
	RA069	平安
	RA070	平安
	RA071	奈良
25次 (H16調査)	RA072	未報告
	RA073	
	RA074	
	RA075	
29次	RA076	平安
	RA077	奈良
	RA078	平安
	RA079	平安

第8表　第23・24・29次　竪穴住居跡計測表

	住居名	時期	北壁/北西 (m)	東壁/北東 (m)	南壁/南東 (m)	西壁/南西 (m)	深さ (cm)	面積(㎡)	主軸方向	カマド	貯蔵穴位置	貯蔵穴規模	柱穴	周溝	その他	火山灰
23次	RA059	平安	-	-	-	(4.80)	8	-	-	なし(欠?)					復元不可	
	RA061	平安	5.17	5.12	5.25	4.96	34	26.25	N-84°-E	東壁1			2			
	RA062	平安	4.31	3.8(4.2)	3.22(4.55)	2.95(4.3)	45	(18.83)	N-90°-E	東壁1・(南壁1)						
	RA064	平安	(3.80)	4.26	(4.20)	(4.90)	13	(18.38)	N-85°-E	東壁1						
	RA066	奈良	4.90	2.2(3.7)	2.81(50)	3.50	23	(12.48)	N-45°-W	北西壁1				有り		
	RA068	奈良	5.84	1.95(5.2)	2.43(5.8)	5.20	25	(30.26)	N-49°-W	北西壁1	カマド南西	68×62	4?	有り		
	RA070	平安	2.66(5.1)	4.57	4.58(5.4)	0.37(4.7)	34	(24.34)	N-139°-E	南東壁1			2			
24次	RA071	奈良	-	-	2.55	-	35	-	N-48°-W	北西壁1					復元不可	
	RA063	平安	1.91(4.2)	(3.60)	10.5(4.3)	2.72(3.9)	35	(15.95)	N-80°-E	東壁1						
	RA065	平安	2.0(3.4)	0.62(3.8)	0.16(3.5)	0.13(3.9)	28	(13.29)	-	(欠か調査区外)						
	RA067	奈良	4.60	4.75	4.66	4.97	59	22.50	N-47°-W	北西壁1			6?	有り		
	RA069	平安	-	2.38	1.44	-	41	-	N-109°-E	東壁					復元不可	
23・29次	RA060	平安	(3)	(3.00)	(3.00)	2.78	40	(6.30)	N-98°-E	東壁1	-	-	1	-		カマド内堆積土
29次	RA076	平安	5.38	-	-	-	48	(5.20)	-	-	Pit2	110×(-)	2	有り		覆土下層・土坑上面
	RA077	奈良	6.23	(5.28)	6.23	5.92	50	34.60	N-44°-W	北西壁1	-	-	4	有り		覆土上位
	RA078	平安	3.9	4.65	3.30	4.64	19	16.70	N-100°-E	東壁2	1号カマド北	68×48	1	-		覆土中位
											2号カマド南	58×45				
	RA079	平安	3.84	4.00	(3.08)	3.88	32	12.60	N-98°-E	東壁1	-	-	2	-		覆土中位

( )内推定値

第9表　第23・24・29次　カマド計測表

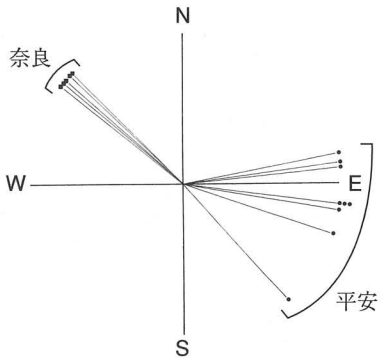
調査次	遺構名	位置	壁長(m)	煙道方向	煙道		煙出		煙道種類	袖構成	袖長(cm)	燃焼部規模	支脚	天井石	煙出礫
					長さ(cm)	径(cm)	径(cm)	深さ(cm)							
23次	RA059	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
	RA061	東	5.12	N-84°-E	144.00	15	44	42	刳り貫き	シルト	100	30×40			-
	RA062 東カマド	東	(4.20)	N-83°-E	65.00	46	52	38	-	シルト	110	40×40			
	RA062 南カマド	南	(4.20)	NS	140.00	34	34	40	刳り貫き	-	-	70×64			
	RA064	西	(4.90)	N-70°-W	145.00	20	45	31	刳り貫き	シルト十礫	74	35×66			
	RA066	北西	4.09	N-45°-W	135.00	28	31	44	刳り貫き	シルト	58	50×50			
	RA068	北西	5.84	N-49°-W	132.00	25	41	66	刳り貫き	シルト	68	60×40			
	RA070	南東	(4.70)	N-139°-E	141.00	25	45	40	-	シルト	42	100×45			わずかに有り
	RA071	北西	(2.56)	N-48°-W	150.00	35	30	38	-	シルト	42	58×22	土師器甕		
24次	RA063	東	(3.60)	N-80°-E	146.00	14	34	29	刳り貫き	シルト	-	50×43			
	RA065	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	RA067	北西	4.60	N-47°-W	134.00	15	32	65	刳り貫き	シルト	80	60×50			
	RA069	東	2.38	N-109°-E	114.00	12	31	70	刳り貫き	シルト	(25)	不明瞭			
23・29次	RA060	東	3	N-98°-E	132	25	28	35	刳り貫き	シルト	83		-	-	-
29次	RA077	北西	6.13	N-44°-W	158	43	29	64	刳り貫き	土器	102		-	-	-
	RA078 1号カマド	東	4.65	N-100°-E	(35)	(20)	-	-	-	シルト	68		-	-	-
	RA078 2号カマド	東	4.65	(N-98°-E)	(35)	(32)	-	-	-	-	-		-	-	-
	RA079	東	4	N-98°-E	-	-	-	-	刳り貫き	シルト	86		坏	-	-

は自然礫が出土しており、芯材の可能性がある。ほかは地山土積み上げによって構成されている。地山削り出しによる構築の痕跡は認められない。

②　**支脚**　RA071は土師器甕が支脚である可能性がある。RA079においてカマド燃焼部に土師器坏が逆位で4個体重ねられた状態で出土している。被熱による劣化は認められない。

③　**煙道・煙出**　煙道は刳り貫き式が主である。刳り貫き式と判断できなかったカマドは検出面から遺構床面までの深さが非常に浅く、煙道天井部が失われている可能性もある。煙出にはRA070に投げ込みの礫が認められるほかは遺物の出土はない。

④ **カマド方位**　第82図参照。奈良時代のカマド方位はN-44～49°-Wに納まり、北西壁に作られる規則性が高い。また、カマドは北西壁のほぼ中央に作られる傾向が認められる。一方平安時代はN-80°-EからSNまでと奈良時代ほどの規則性ではないが、奈良時代のように西壁には作られない傾向がある。これは第12・15次調査においても同様である（阿部2003）。



第82図　カマド方位

⑤　**作り替え**　カマドの作り変えがあるのはRA062・RA078の2棟で、それぞれカマドが新旧2基検出された。RA062は南壁にカマドが作られた後、東壁に作り替えがなされている。一方、RA078は東壁北寄りにカマドが作られた後、同じ東壁の南寄りに作り替えがなされている。RA062・RA078は床面積がほぼ同じ中形の規模である。第15次調査ではRA042・048・051において新旧2基が認められる。RA042・048は同じ壁面での移動、RA051は隣り合う壁面に移動している。全体数として、カマドの作り替え行為は少ない傾向にある。

⑥　**貯蔵穴**　カマド脇に貯蔵穴が認められるのはRA068・RA078である。RA076は貯蔵穴と思われるピットが検出されたが、カマドを検出していないため位置関係が不明である。RA078はカマドに向かって左、RA078は旧カマドが右、新カマドが左に作られている。規則性があるのではなく、住居構造上の制限による配置の可能性が高い。

小結　野古A遺跡竪穴住居跡は奈良時代と平安時代のものがある。奈良時代住居の床面積は小形から超大形まで4パターンが認められる。第23・24・29次調査においては中形から大形の住居が検出された。カマドは全て西壁の中央に作られる。主柱穴は4本柱が多い。一方平安時代住居跡は小形から大形までの3パターンが認められる。奈良時代のような超大形は検出されていない。第23・24・29次調査においては小形から大形までバラエティーに富む。カマドは東側に多いが、奈良時代のような厳密な規格性ではない。主柱穴は明瞭なものが少ない傾向である。各時代住居跡の立地は、奈良時代が高位面からやや低い地点まで分布範囲が広く、平安時代は高い段丘面に限定される。奈良時代と平安時代住居はほぼ重複が認められないため、平安時代の人々は埋まりきらない奈良時代住居を避けて集落を構築した可能性がある。　（八木）

参考文献

盛岡市教育委員会　1998　「(15) 野古遺跡」『盛岡市埋蔵文化財調査年報　平成5・6年度』盛岡市教育委員会

高木晃ほか　2003　『細谷地遺跡発掘調査報告書—第4・5次調査—』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第414集

菅原靖男　2003　『野古A遺跡第12次発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第420集

阿部眞澄　2003　『野古A遺跡第15次発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第421集

2　野古A遺跡　第19・20・29次調査区検出の陥し穴状土坑について

雫石川右岸の盛岡南新都市土地区画整理地域では古代の集落跡が多数確認・調査され、注目を浴びている。他の時代では本宮熊堂A遺跡や細谷地遺跡に縄文時代晩期の集落跡が認められるほか、狩猟場と考えられる陥し穴状土坑群も6遺跡・14次回の調査で見つかっている。

野古A遺跡では今回の第29次調査南調査区において縄文時代と考えられる陥し穴状土坑4基を確認した。過去の調査では、平成15年度の第19・20次調査において溝状形態の陥し穴状土坑が14基検出されている。ここでは第19・20・29次調査の18基を合せ、盛岡南新都市土地区画整理地区における縄文時代晩期の陥し穴状土坑について考察を行う。

（1）第19・20・29次調査区検出陥し穴状土坑

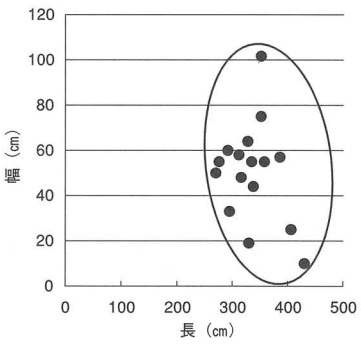
第19・20次調査区と第29次調査南調査区南西端に縄文時代の陥し穴状土坑と考えられる溝状の土坑は18基まとまって検出した。19次調査区に隣接する、平成16年度調査の第23次調査区では検出していない。以下、野古A遺跡の陥し穴状土坑の傾向を提示する。

[規模]　開口部は長さ270～430㎝(平均334.7㎝)・幅10～102㎝(平均54.5㎝)に分布し、底面は長さ255～440㎝(平均335.7㎝)、幅8～43㎝(平均19.37㎝)にまとまる。現況の幅は、上面の削平の状態によっては実態を現さない可能性が大きいため、検出面の差異による影響がないと考えられる底面における長幅分布図を第84図に示した。図を見ると、長さは連続するが幅において8～19㎝と28～43㎝に断絶が認められる。

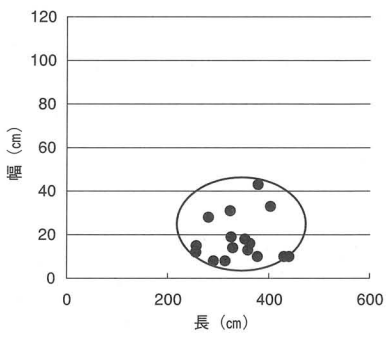
[堆積土]　最下層に黒色土が堆積し、中位に褐色土壁面崩落土が堆積、上位には黒色土が堆積していることが多い。このような堆積の様相は、使用時、あるいは廃絶後に表土の黒色土が流入し、壁面崩落土が堆積、上位の黒色土は再び表土が流入するという自然堆積の様相を呈していると考えられる。

[深さ]　深さは検出面と上部の撹乱により上下するが、49～105㎝(平均76.84㎝)に分布する。

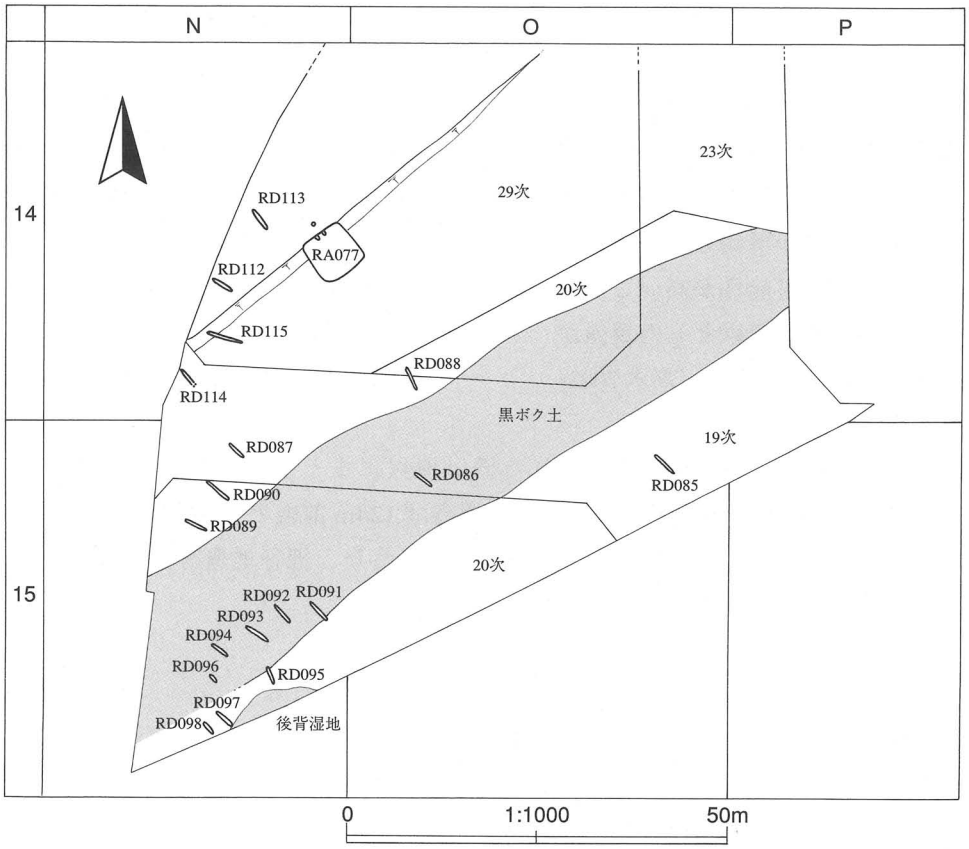
[立地・配列]　第85図参照。第19・20次調査区において北東―南西に帯状に黒ボク層が認められた。また、20次調査区南端において後背湿地が確認されている。第29次調査区においても黒ボク層に並行する段差が確認され、18基全て等高線に垂直に配置されるものと判断できる。また、等高線に垂直なだけでなく、平坦面中央には配置されず、傾斜変換線沿いに大きく3列で配列されていることが判る。第29次調査では北側2基と南側2基はそれぞれ規模が近似しており、2基1セットとして作られた可能性もある。



第83図　陥し穴状土坑開口部長幅分布図



第84図　陥し穴状土坑底面長幅分布図



第85図　野古A遺跡　陥し穴状土坑配置図

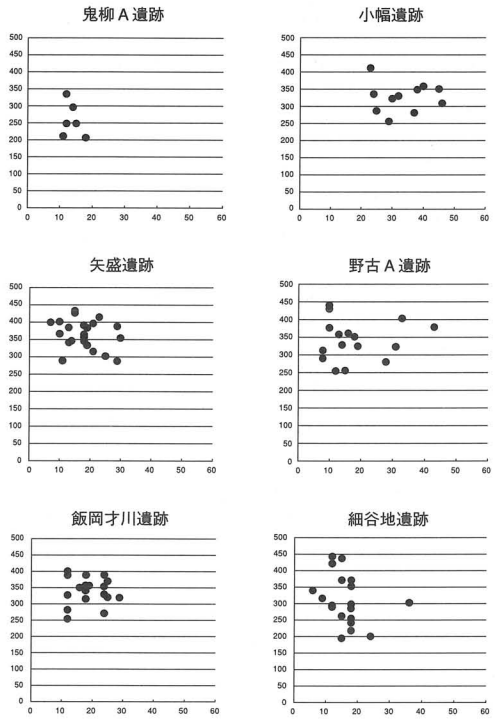
（2）盛岡南新都市土地区画整理地域の陥し穴状土坑

8遺跡19次回の調査で112基が検出されている。

[規模]　第86図参照。全体の平均値で開口部の長さ342㎝幅63.3㎝、底面長さ330㎝幅19.4㎝、深さ82.3㎝である。遺跡毎に底面平均長幅分布を見ると、小幅遺跡326×34㎝、鬼柳A遺跡257.3×13.67㎝、矢盛遺跡363×18㎝、飯岡才川遺跡339×18.9㎝、細谷地遺跡310×16.26㎝である。本宮熊堂B遺跡は1基のみの検出で116×25㎝である。

[立地・配列]　野古A遺跡・鬼柳A遺跡本宮熊堂B遺跡・矢盛遺跡の陥し穴状土坑はほぼ全て等高線に垂直あるいはほぼ垂直に配置されている。飯岡才川遺跡は遺構配置図に標高線がないため詳細には確認できなかったが、現況の地形図から判断するとほぼ垂直に配置されているものが多い。細谷地遺跡は15基（79%）が等高線に垂直、4基（21%）が並行に配置されている。

それぞれの立地は、細谷地遺跡・矢盛遺跡は隣接しており一続きの旧河道沿いに立地している。また飯岡才川遺跡

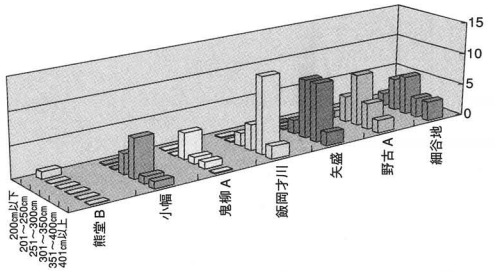


第86図　近隣遺跡検出陥し穴状土坑開口部長幅分布図

も同じ旧河道を挟んだ対岸に位置しており、一帯が大規模な狩場として利用されていたことが窺える。

小結

細谷地遺跡では、2本の旧河道に挟まれた微高地上に陥し穴状土坑が集中している。このことに関し、「旧河道の堆積土はシルト質ないし粘土質で、陥し穴が構築された当時には帯水性の窪地であった可能性が高いことから、水場に集まる動物を対象獣とした罠猟が行われていたものと考えられる。」（高木2003）との分析結果が得られている。



第87図　陥し穴状土坑底辺長さ別検出数

野古A遺跡では、古代集落の中心から離れた低い地点にまとまっている。標高も集落の中心は125m前後であるのに対し、陥し穴状土坑集中区の標高は124m前後と1m程の標高差が認められる。また、第19・20次調査区の南端は後背湿地も確認されており、細谷地遺跡同様、水場に集まる動物を対象とした罠猟が行われていたものと考えられる。（八木）

参考文献

＊以下、次の通り省略する。（財）岩文埋セ：（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

岩文埋文化財調査報告書：岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書

福田友之　1981「「溝状ピット」研究に関する覚書」『弘前大学考古学研究』第1号　弘前大学考古学研究会

坂本真弓・杉野森淳子　1997「青森近県における陥し穴集成」『研究紀要』第2号　青森県埋蔵文化財調査センター

（財）岩文埋セ　1996『小幅遺跡第2次発掘調査報告書』岩文埋文化財調査報告書第244集

盛岡市教育委員会　1998『盛岡市埋蔵文化財調査年報　平成5・6年度』盛岡市教育委員会

（財）岩文埋セ　1998『大宮北遺跡・本宮熊堂A遺跡発掘調査報告書』岩文埋文化財調査報告書第281集

（財）岩文埋セ　1998「野古A遺跡第10次調査」『岩手県埋蔵文化財発掘調査略報』岩文埋文化財調査報告書第282集

（財）岩文埋セ　1999「飯岡才川遺跡第2次調査」『岩手県埋蔵文化財発掘調査略報』岩文埋文化財調査報告書第311集

（財）岩文埋セ　1999『本宮熊堂B遺跡第4次・鬼柳A遺跡第4次発掘調査報告書』岩文埋文化財調査報告書第308集

（財）岩文埋セ　2001「飯岡才川遺跡第4次調査」『岩手県埋蔵文化財発掘調査略報』岩文埋文化財調査報告書第370集

（財）岩文埋セ　2001「鬼柳A遺跡第7次調査」『岩手県埋蔵文化財発掘調査略報』岩文埋文化財調査報告書第370集

（財）岩文埋セ　2002『熊堂B遺跡第10次発掘調査報告書』岩文埋文化財調査報告書第377集

（財）岩文埋セ　2003「矢盛遺跡第4次調査」『岩手県埋蔵文化財発掘調査略報』岩文埋文化財調査報告書第423集

（財）岩文埋セ　2003『細谷地遺跡発掘調査報告書―第4・5次調査―』岩文埋文化財調査報告書第414集

（財）岩文埋セ　2004『矢盛遺跡第3次・熊堂B遺跡第14次発掘調査報告書』岩文埋文化財調査報告書第451集

（財）岩文埋セ　2004「飯岡才川遺跡第5次調査」『岩手県埋蔵文化財発掘調査略報』岩文埋文化財調査報告書第455集

（財）岩文埋セ　2004「飯岡才川遺跡第6次調査」『岩手県埋蔵文化財発掘調査略報』岩文埋文化財調査報告書第455集

（財）岩文埋セ　2004「野古A遺跡第19次調査」『岩手県埋蔵文化財発掘調査略報』岩文埋文化財調査報告書第455集

（財）岩文埋セ　2004「野古A遺跡第20次調査」『岩手県埋蔵文化財発掘調査略報』岩文埋文化財調査報告書第455集

（財）岩文埋セ　2005「矢盛遺跡第5次調査」『平成16年度発掘調査報告書』岩文埋文化財調査報告書第469集

第10表　盛岡開発地域内陥し穴状土坑一覧（1）

遺跡名		遺構名	位置	平面形	開口径(cm)		底面径(cm)		深さ	等高線	標高	備考
					長さ	幅	長さ	幅	(cm)			
大宮北遺跡	1	RD06	5UU-98	溝状	337	57	348	13	21	-	126.3	遺物なし
小幅遺跡 第2次	2	RD058	RX+59　RY-99	溝状	400	98	412	23	98	垂直	126.3	遺物なし
	3	RD059	RX+56　RY-100	溝状	346	98	287	25	80	垂直	126.3	遺物なし
	4	RD061	RX+59　RY-97	溝状	310	94	281	37	102	垂直	126.3	遺物なし
	5	RD062	RX+73　RY-91	溝状	424	102	358	40	108	垂直	126.2	遺物なし
	6	RD063	RX+76　RY-92	溝状	424	102	350	45	106	垂直	126.2	遺物なし
	7	RD064	RX+79　RY-95	溝状	346	100	322	30	106	垂直	126.2	遺物なし
	8	RD065	RX+79　RY-97	溝状	360	104	308	46	112	垂直	126.2	遺物なし
	9	RD066	RX+59　RY-99	溝状	330	94	256	29	28	垂直	126.2	遺物なし
	10	RD073	RX+75　RY-86	溝状	374	108	330	32	104	垂直	126.3	遺物なし
	11	RD074	RX+71　RY-88	溝状	394	106	348	38	90	垂直	126.2	遺物なし
	12	RD075	RX+71　RY-85	溝状	364	110	335	24	28	垂直	126.3	遺物なし
野古A 第12次	13	RD042	11R12s	溝状	294	39	321	30	45	垂直	123.6	遺物なし
	14	RD055	10M24s	溝状	385	73	339	30	31	垂直	125.3	遺物なし
	15	RD061	11M23r	溝状	305	113	248	20	75	垂直	125.4	遺物なし
野古A 第19次	16	RD085	15O3v	溝状	358	55	403	33	90	垂直	123.9	遺物なし
	17	RD086	15O5b	溝状	335	55	323	31	79	垂直	123.6	遺物なし・柱穴伴う
	18	RD087	15N3s	溝状	295	33	290	8	49	垂直	123.9	陥し穴？
	19	RD088	14N23e	両頭形	330	19	313	8	60	垂直	123.9	遺物なし
野古A 第20次	20	RD089	15N7p	溝状	328	64	325	19	75	垂直	123.9	遺物なし
	21	RD090	15N5q	両頭形	406	25	440	10	72	垂直	123.9	遺物なし
	22	RD091	15N14x	溝状	316	48	377	10	105	垂直	123.6	遺物なし
	23	RD092	15N14u	溝状	338	44	328	14	84	垂直	123.9	遺物なし
	24	RD093	15N16u	溝状	386	57	378	43	88	垂直	123.3	遺物なし
	25	RD094	15N16g	溝状	292	60	280	28	75	垂直	123.5	遺物なし
	26	RD095	15N18u	溝状	276	55	255	12	100	垂直	123.6	遺物なし
	27	RD096	15N18f	溝状	(149)	(80)	(142)	(22)	88	垂直	123.7	遺物なし・半分残存
	28	RD097	15N21f	溝状	352	75	362	16	86	垂直	123.8	遺物なし
	29	RD098	15N21f	溝状	270	50	256	15	84	垂直	123.8	遺物なし
野古A 第29次	30	RD112	14N15q	溝状	312	58	352	18	100	垂直	124.1	遺物なし
	31	RD113	14N11v	溝状	352	102	358	13	90	垂直	124.1	遺物なし
	32	RD114	14N22o	両頭形	(330)	(20)	(320)	(13)	58	垂直	124.1	遺物なし・一部撹乱
	33	RD115	14N20r	両頭形	430	10	430	10	72	垂直	124	遺物なし
鬼柳A 第7次	34	RD014	5E6w	両頭形	267	48	248	15	36	ほぼ垂直	125.2	遺物なし
	35	RD015	5E6x	溝状	267	48	248	12	42	ほぼ垂直	125.2	遺物なし
鬼柳A 第4次	36	RZ001	8D7d	溝状	310	83	296	14	55	垂直	125.7	遺物なし
	37	RZ002	4E20n	溝状	396	54	334	12	51	不明	125.9	遺物なし
	38	RZ003	4F19c	両頭形	252	36	212	11	77	垂直	125.4	遺物なし
	39	RZ004	4F17e	溝状	262	52	206	18	73	垂直	125.4	遺物なし
熊堂B第10次	40	RD61	7P1h	溝状	200	35	116	25	48	不明	123.9	遺物なし
矢盛 第3次	41	RD011	2C12k	溝状	(175)	32	(202)	18	88	垂直	122.6	遺物なし
	42	RD012	2C15g	溝状	(182)	34	(178)	20	85	垂直	122.7	遺物なし
	43	RD013	2C17e	溝状	(83)	52	(77)	22	69	垂直	122.6	遺物なし
	44	RD014	2C19b	溝状	290	35	300	25	92	垂直	122.5	遺物なし
	45	RD015	2C19b	溝状	314	35	314	21	94	垂直	122.5	遺物なし
	46	RD016	2C20d	溝状	319	54	345	18	107	垂直	122.5	遺物なし
	47	RD017	2C20f	溝状	311	59	332	19	100	垂直	122.5	遺物なし
	48	RD018	2C21c	溝状	287	56	286	29	79	垂直	122.5	遺物なし
	49	RD019	2C22c	溝状	(113)	50	(103)	26	79	垂直	122.3	遺物なし
	50	RD020	2B23x	溝状	377	48	383	19	76	垂直	122.5	遺物なし
	51	RD021	2B24y	溝状	344	37	390	18	102	垂直	122.5	遺物なし
矢盛 第4次	52	RD005	2C5x	溝状	440	57	413	23	85	垂直	122.6	遺物なし
	53	RD006	2C5w	溝状	393	80	353	30	103	垂直	122.6	遺物なし
	54	RD007	2C6u	両頭形	385	52	386	29	99	垂直	122.6	遺物なし
	55	RD008	2C7t	溝状	(254)	46	(272)	24	79	垂直	122.6	遺物なし・一部撹乱
	56	RD009	2C5s	両頭形	(266)	46	(218)	14	65	垂直	122.6	遺物なし・一部調査区外

第10表　盛岡開発地域内陥し穴状土坑一覧（2）

遺跡名		遺構名	位置	平面形	開口径(cm)		底面径(cm)		深さ	等高線	標高	備考
					長さ	幅	長さ	幅	(cm)			
矢盛第4次	57	RD010	2C10m	溝状	414	41	432	15	115	垂直	122.6	遺物なし
	58	RD022	3B1u	両頭形	334	44	363	18	103	垂直	122.5	遺物なし
	59	RD023	3B3s	溝状	384	25	398	7	75	垂直	122.5	遺物なし
	60	RD024	3B4r	両頭形	381	31	384	13	74	垂直	122.6	遺物なし・風倒木？付随ピット
	61	RD025	3B4p	溝状	322	46	345	14	96	垂直	122.6	2個あり
	62	RD026	3B4o	溝状	370	48	395	21	100	垂直	122.7	遺物なし
	63	RD027	3B5r	溝状	322	36	357	18	95	垂直	122.6	遺物なし
	64	RD028	3B6t	溝状	334	27	287	11	92	垂直	122.4	遺物なし
	65	RD032	3B5u	溝状	323	25	340	13	81	垂直	122.4	遺物なし
矢盛第5次	66	RD038	3A25t	溝状	390	30	400	10	66	垂直	122.6	遺物なし
	67	RD040	3A24u	溝状	346	30	365	10	104	垂直	122.6	遺物なし
	68	RD039	3A24v	溝状	363	34	425	15	89	垂直	122.6	遺物なし
飯岡才川第2次	69	RD02	X-36,003 Y26,015	溝状	356	55	356	18	85		123.4	遺物なし
	70	RD03	X-35,967 Y26,043	溝状	352	42	356	19	61		123.6	遺物なし
	71	RD04	X-35,962 Y26,050	溝状	261	55	254	12	70		123.6	遺物なし
飯岡才川第4次	72	RD21	X-36,006 Y26,366	溝状	333	49	327	12	67		122.1	遺物なし
	73	RD25	X-36,006 Y26,350	溝状	303	67	315	18	36		122.2	遺物なし
飯岡才川第5次	74	RD033	-1B7t	溝状	372	55	370	25	50		123.5	遺物なし
	75	RD034	-1B6f	溝状	398	25	320	25	55		123.5	遺物なし
	76	RD035	-1B7n	溝状	320	43	282	12	65		123.5	遺物なし・風倒木？
	77	RD036	-1C7g	溝状	375	98	350	16	67		123.5	遺物なし
飯岡才川第6次	78	RD043	-1C18f	溝状	400	82	329	24	76		123.4	遺物なし
	79	RD044	-1C6a	溝状	341	94	271	24	59		123.5	遺物なし
	80	RD045	-1B2v	溝状	353	71	318	29	94		123.7	遺物なし
	81	RD046	-1D17f	溝状	365	71	388	24	118		123	遺物なし
	82	RD047	-1C18f	溝状	412	94	400	12	88		123	遺物なし
	83	RD048	-1C21w	溝状	376	59	400	12	106		123	遺物なし
	84	RD049	-1C20s	溝状	365	59	388	18	94		123	遺物なし
	85	RD050	-1C18g	溝状	388	59	353	24	59		123.1	遺物なし
	86	RD051	-1C12s	溝状	376	82	341	18	76		123.1	遺物なし
	87	RD052	-1C19i	溝状	300	82	271	24	82		123.1	遺物なし
	88	RD053	-1C16f	溝状	412	71	388	12	82		123.1	遺物なし
細谷地第4・5次	89	RD71	2I1k	溝状	308	52	290	12	68	垂直	122.2	遺物なし
	90	RD91	2I2f	溝状	377	60	370	18	48	垂直	122	遺物なし
	91	RD92	1I25h	溝状	(228)	25	(230)	9	44	垂直	122	遺物なし
	92	RD93	1I22q	溝状	342	20	339	6	28	並行	122	一部調査区外
	93	RD95	2E18h	溝状	(316)	80	(303)	15	106	垂直	122.4	遺物なし
	94	RD97	2E14s	溝状	426	105	421	12	100	垂直	122.2	一部調査区外
	95	RD98	2E18n	溝状	360	54	370	15	70	垂直	122.4	遺物なし
	96	RD100	2E16p	溝状	256	76	242	18	75	垂直	122.4	遺物なし
	97	RD101	2E18p	溝状	372	62	352	18	78	垂直	122.4	遺物なし
	98	RD102	2E19k	溝状	(270)	84	(242)	12	70	垂直	122.5	遺物なし
	99	RD104	2E17l	溝状	276	70	261	15	70	並行	122.4	一部調査区外
	100	RD114	3E1t	溝状	310	102	303	36	85	並行	不明	頁岩製剥片出土
	101	RD120	2F10e	溝状	(275)	60	(273)	9	98	垂直	122.2	遺物なし
	102	RD121	2F10g	溝状	320	55	315	9	98	垂直	不明	一部調査区外
	103	RD122	2F12g	溝状	422	106	436	15	120	垂直	122.1	遺物なし
	104	RD123	2E24s	溝状	250	90	194	15	90	並行	122.3	遺物なし
	105	RD127	2E24y	溝状	300	108	254	18	105	垂直	122.3	遺物なし
	106	RD128	2F21f	溝状	285	73	294	12	100	垂直	122.2	遺物なし
	107	RD129	2F21h	溝状	255	80	218	18	105	垂直	122.2	遺物なし
	108	RD130	2F18l	溝状	418	83	442	12	108	垂直	122.2	遺物なし
	109	RD132	2E14t	溝状	314	100	297	18	106	垂直	122.3	遺物なし
	110	RD133	2E16y	溝状	346	112	285	18	90	垂直	不明	遺物なし
	111	RD134	2E19p	溝状	242	78	200	24	104	垂直	122.3	遺物なし
小幅遺跡	112											遺物なし

3　墓　　壙

（1）抽出と特徴

野古A遺跡では過去の調査も含めると100基を超える多数の土坑（RD）が検出されている。その中で、性格を特定することができる土坑はきわめて少ない。しかし、これら土坑の中には墓壙である可能性が高いものがいくつか存在する。本書で報告した野古A遺跡第23・24・29次調査では、墓壙であると考えられる土坑を計3基検出した。第23次RD103・108、第29次RD116の3基である。3基ともに骨片等の出土はみられなかったが、以下の理由で、墓壙である可能性を指摘した。いずれも平面形態は長方形・方形を基調としており、比較的整った形態である。また、底面は平坦で、壁は垂直に近い急角度で立ち上がる。やはり整った断面形を呈し、方形基調の形態である。埋土は各種ブロックを多く含み、人為的に埋め戻しがおこなわれた様相を呈する。特に、RD103・108は、砂質の地山を掘り込んでおり、砂質の埋土である。このことから掘削後、掘削排土による埋め戻しが一連の作業の中でおこなわれたと考えられる。すなわち、穴を掘った後あまり時間を空けず、埋め戻すという行為が想定され、土坑が墓壙や何らかの埋納遺構などの特殊な特性を持つことが考えられる。同様に、過去の調査におけるこのような土坑は、第12次調査RD039が挙げられ、これを含めた4基の土坑について詳しく分析する。

平面形態は方形と長方形のものの2種認められる。RD116が方形であり、その他の3基は長方形である。なお、方形・長方形と2種の平面形態があることは周辺遺跡においても確認されている。さらに、長方形のRD039・103・108は短辺と長辺の比が、それぞれ1：1.31・1：1.28・1：1.25である。平均すると短辺1に対して長辺1.25の長方形である。野古A遺跡では検出されていないが、近隣の本宮熊堂B遺跡第18次や台太郎遺跡第26次などでは、約1：2の比の長方形プランを呈する墓壙も確認されている。検出された4基の墓壙の主軸方向は必ずしも一定ではないが、もっとも近接する竪穴住居と概ね同じ主軸方向にある。住居に対して何らかの意識があったのかもしれない。また、RD108・116は底面より遺物が出土した。RD108からは礫石器1点、RD116からは土師器坏や土師器甕片などが出土した。これらは墓壙に伴う遺物であると考えられる。しかし、遺物が副葬品のような性格を有するものであるかどうかは不明である。

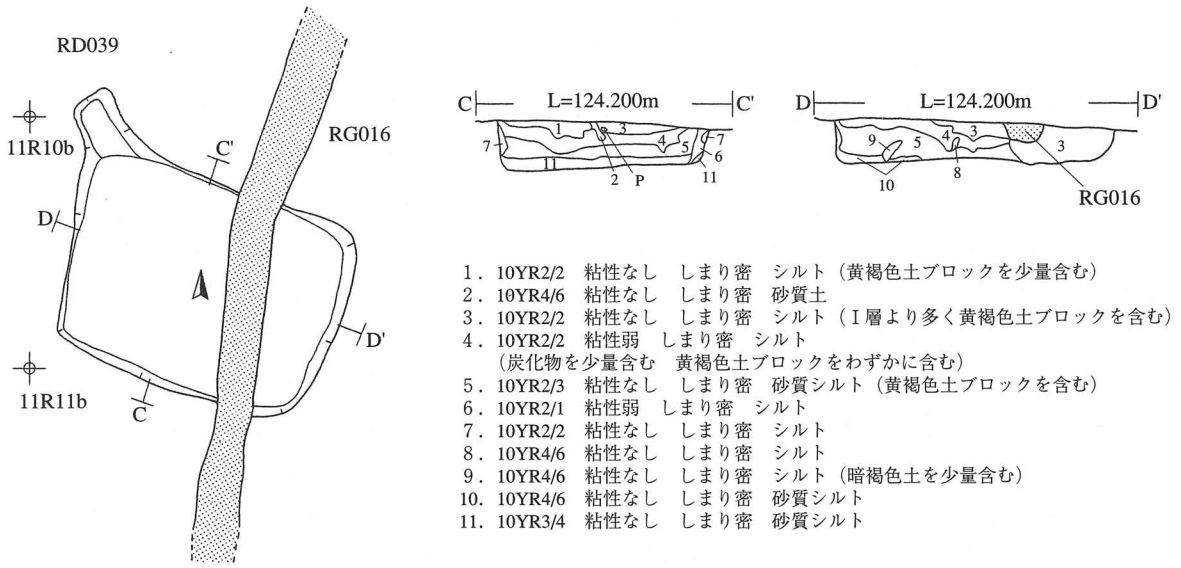
（2）分布と時期

以上の条件より墓壙である可能性の高い土坑は集落内居住域に展開する。これは集落中心部でもなく、集落外縁部でもない位置に存在する。さらに、比較的竪穴住居に近い場所に位置している。また、これら墓壙同士はそれぞれ近接せず、30～100ｍの距離を置いて存在する。つまり、墓群を形成せず、単独で集落内に散在するという分布状況である。

時期については、4基ともに遺物や埋土中に含まれる火山灰より平安時代に属するものと考えられる。また、周辺集落における同様の墓壙も平安時代（9～10世紀）に属するものが多い傾向である。ちなみに、古墳～奈良時代において、この種の墓壙は周辺遺跡では確認されていない状況である。周辺遺跡でも古墳～奈良時代の竪穴住居は検出されていることを考えると、この時期は今回取り上げているような墓壙は出現していない可能性が考えられ、平安時代（9～10世紀）に特有の葬法であるのもしれない。また、墓壙の時期は火山灰や出土する遺物より、遺跡内で検出された平安時代の竪穴住居と大きく隔たるとは考えられない。したがって、墓壙と竪穴住居とは同時期に併存している可能性が考えられる。

（3）葬法と墓制

規模・形態を考えると成人男性が伸展あるいは横臥屈葬される状態に適している。また、鉄釘が出



1．10YR2/2　粘性なし　しまり密　シルト（黄褐色土ブロックを少量含む）
2．10YR4/6　粘性なし　しまり密　砂質土
3．10YR2/2　粘性なし　しまり密　シルト（Ⅰ層より多く黄褐色土ブロックを含む）
4．10YR2/2　粘性弱　しまり密　シルト
（炭化物を少量含む　黄褐色土ブロックをわずかに含む）
5．10YR2/3　粘性なし　しまり密　砂質シルト（黄褐色土ブロックを含む）
6．10YR2/1　粘性弱　しまり密　シルト
7．10YR2/2　粘性なし　しまり密　シルト
8．10YR4/6　粘性なし　しまり密　シルト
9．10YR4/6　粘性なし　しまり密　シルト（暗褐色土を少量含む）
10．10YR4/6　粘性なし　しまり密　砂質シルト
11．10YR3/4　粘性なし　しまり密　砂質シルト

第88図　野古A遺跡　第12次RD039（S=1:40）

土しないこと、堆積土に棺の痕跡が認められないことから、遺骸を直接埋葬している可能性が高い。また、墓壙に付属する墳丘・周溝・覆い屋・墓標などの施設も確認できない。以上のことから、これら墓壙はいわゆる土壙墓と呼ばれる比較的簡素な形態の墓であると考えられる。

この盛南地域では、9～10世紀、集落内に簡素な長方形あるいは方形の土坑墓が造られていたと考えられる。野古A遺跡では、これまで34棟もの平安時代の竪穴住居が検出されているが、これに比べ土壙墓の数は4基と極めて少ない。仮に、これら34棟すべての竪穴住居が同時併存していなかったとしても、土壙墓の検出数は極端に少ないと思われる。また、近接する本宮熊堂B遺跡の集落ように居住域内で土壙墓が検出されていても、古代の居住域から外れている低位面（本宮熊堂A遺跡）、高位面（稲荷遺跡）など集落外れに土壙墓が検出されていない。このことを考えると居住域の外れには土壙墓は存在していないようである。また、検出数を考えると集落内で生活を営んでいた人々すべてが土壙墓に埋葬されたとは考えられない。しかし、平安時代の竪穴住居には身分的な格差を示すような特徴はみられない。このように集落内の土壙墓にどのような人が葬られたのか想像すらできないが、身分の優劣は別として、ある程度限られた特定の人物がこのような土壙墓に葬られたのではないだろうか。（福島）

引用・参考文献

盛岡市教育委員会　1998「野古遺跡」『盛岡市埋蔵文化財調査年報　平成5・6年度』盛岡市教育委員会

菅原靖男　2003『野古A遺跡第12次発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第420集（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

阿部眞澄　2003『野古A遺跡第15次発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第421集（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

福島正和　2005『本宮熊堂B遺跡第18次発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第458集（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

東日本埋蔵文化財協会　1995『東日本における奈良・平安時代の墓制』東日本埋蔵文化財協会

4　土　　器

（1）分類と器種構成

〈古墳～奈良時代〉（集成図RA067・068・077）

当概期における供膳形態は土師器坏が主体であり、坏類はロクロを用いないものである。また、ほとんどが内面に黒色処理が施される。本稿では、このようにロクロの回転力を用いない土師器坏を土師器坏Ⅰ群と分類した。第23・24次、RA067・068などの竪穴住居より出土している。これら坏類は段・稜線・沈線などによって口縁部と底部が区分される例が多い。今回の調査では坏の出土数が少なく、明確に分化することはできないが、周辺集落も視野に入れるならば、法量により大（A類）・中（B類）・小（C類）の3形態に分類可能である。しかし、主体となるのは中（B類）である。

また、これら土師器坏Ⅰ群B類の中には器壁がやや薄く全体にシャープであり、体部の段が明瞭で、器高の低いものが認められる。また、これらは底部にヘラケズリの痕跡が認められ、丸底ながらもやや扁平な形態である。宮城・福島県域など東北地方南部を中心とする栗囲式あるいは、それに後続する国分寺下層式などに直接系譜を求められる形態の坏である。集成図に掲げたRA068－3や4などがこれに該当し、便宜的に土師器坏Ⅰ群B類a形態としておく。

一方、体部に段・稜・沈線があるが、器壁が厚く、器高が高めのものも存在する。これらは概ね半球形の丸底である。東北地方北部を中心にみられ、宮城県域では北部で多くみられる形態である。集成図に掲げたRA068－5～7などがこれに該当し、便宜的に土師器坏Ⅰ群B類b形態としておく。

今回の調査では出土していないが、以上の2形態以外に体部に段・稜・沈線など口縁部と底部とが明確に区分されないものを便宜的に土師器坏Ⅰ群B類c形態としておく。

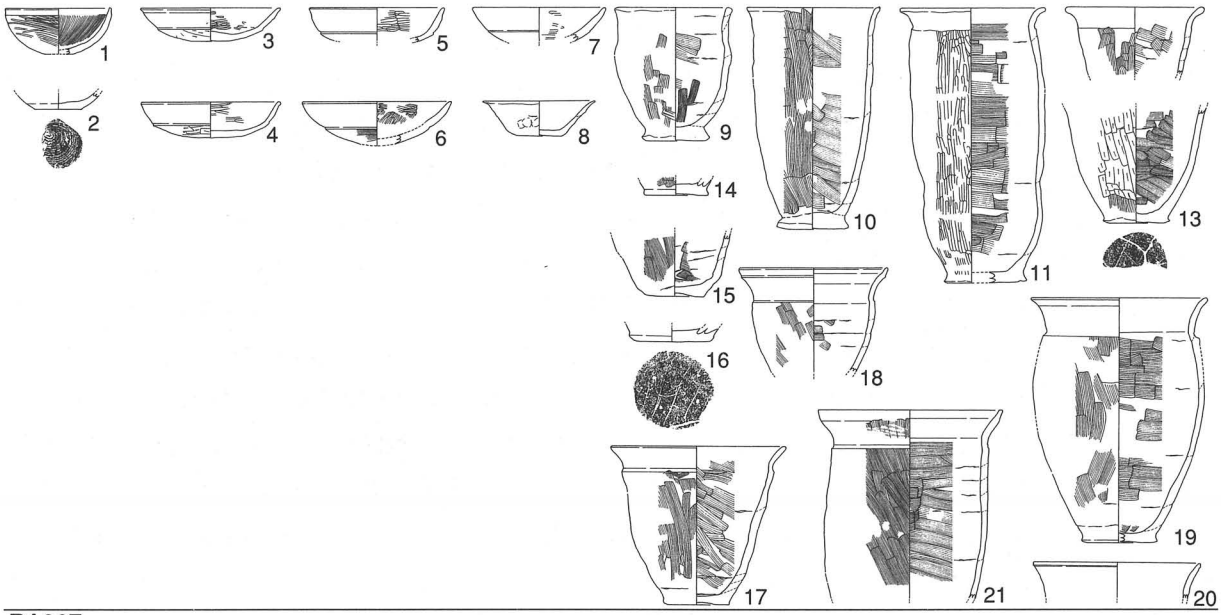
さらに、関東系土師器と呼ばれる土師器も周辺集落を含めわずかながら出土している。今回の調査ではRA068－1がこれに該当する。関東系土師器の中にも様々な形態のものが存在しているが、ここでは一括して土師器坏Ⅰ群B類d形態としておく。

当概期における煮沸形態は土師器甕が主体である。坏類と同様、ロクロを用いないもので構成されている。このように製作に際してロクロの回転力を利用しない土師器甕を土師器甕Ⅰ群と分類した。第23・24・29次調査では、RA068・RA067・RA077などの竪穴住居より出土している。体部でわずかな膨らみを持つのみの長胴形を呈し、口縁部と体部の境目には段・稜・沈線などの区分が比較的明瞭なものが主である。これら土師器甕Ⅰ群は、法量により大（A類）・小（B類）に2分することが可能である。また、それぞれ段・稜・沈線などで口縁部が区分されるもの（a形態）とされないもの（b形態）に分けられる。後述するが、周辺遺跡を含め盛岡地域でみられない県北特有の形態を有する土師器甕がRA068より出土している。これら特徴的な甕を亜種として今回はc形態としておく。今回出土したもので主となるのは、土師器甕Ⅰ群A類a形態である。

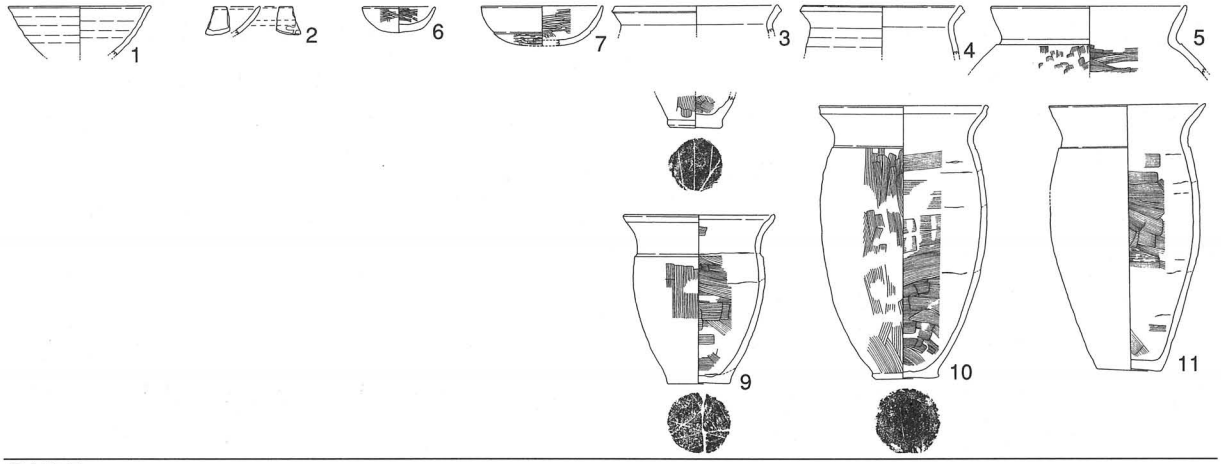
当概期における貯蔵形態は土師器壷が主体である。これは球胴甕とも呼ばれる器種であり、原則的に煮沸痕跡が認められる土師器（長胴）甕とは区別した。これらもやはりロクロを用いないもので構成されている。このように製作に際してロクロの回転力を利用しない土師器壷を土師器壷Ⅰ群と分類した。第23・24・29次調査では、RA067・RA077などの竪穴住居より出土している。出土頻度は土師器甕に比べると全体的にかなり少ない傾向である。体部で横に膨らみを持つ球胴形を呈し、口縁部と体部の境目には段・稜・沈線などの区分が比較的明瞭なものが主である。これら土師器壷Ⅰ群は、法量により大（A類）・小（B類）に2分することが可能である。今回の調査では大（A類）のみの出土であるが、周辺集落も視野に入れると小（B類）も存在するため今回も2つに分類した。

土師器壷Ⅰ群A類は形態の特性上、体部に最大径が生じる。その体部の最大径の位置について、上

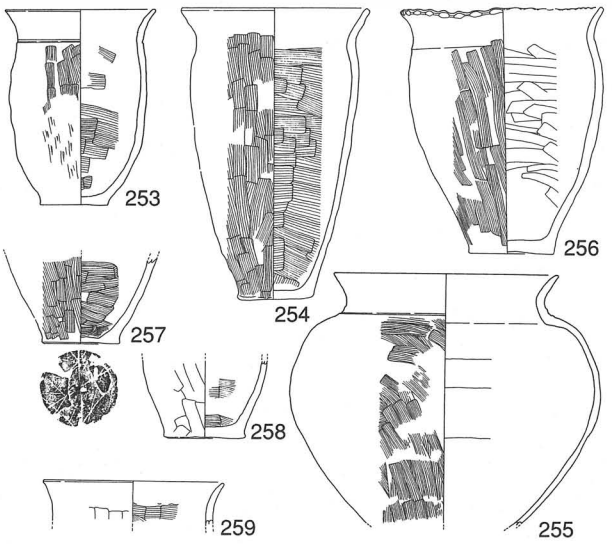
RA068



RA067

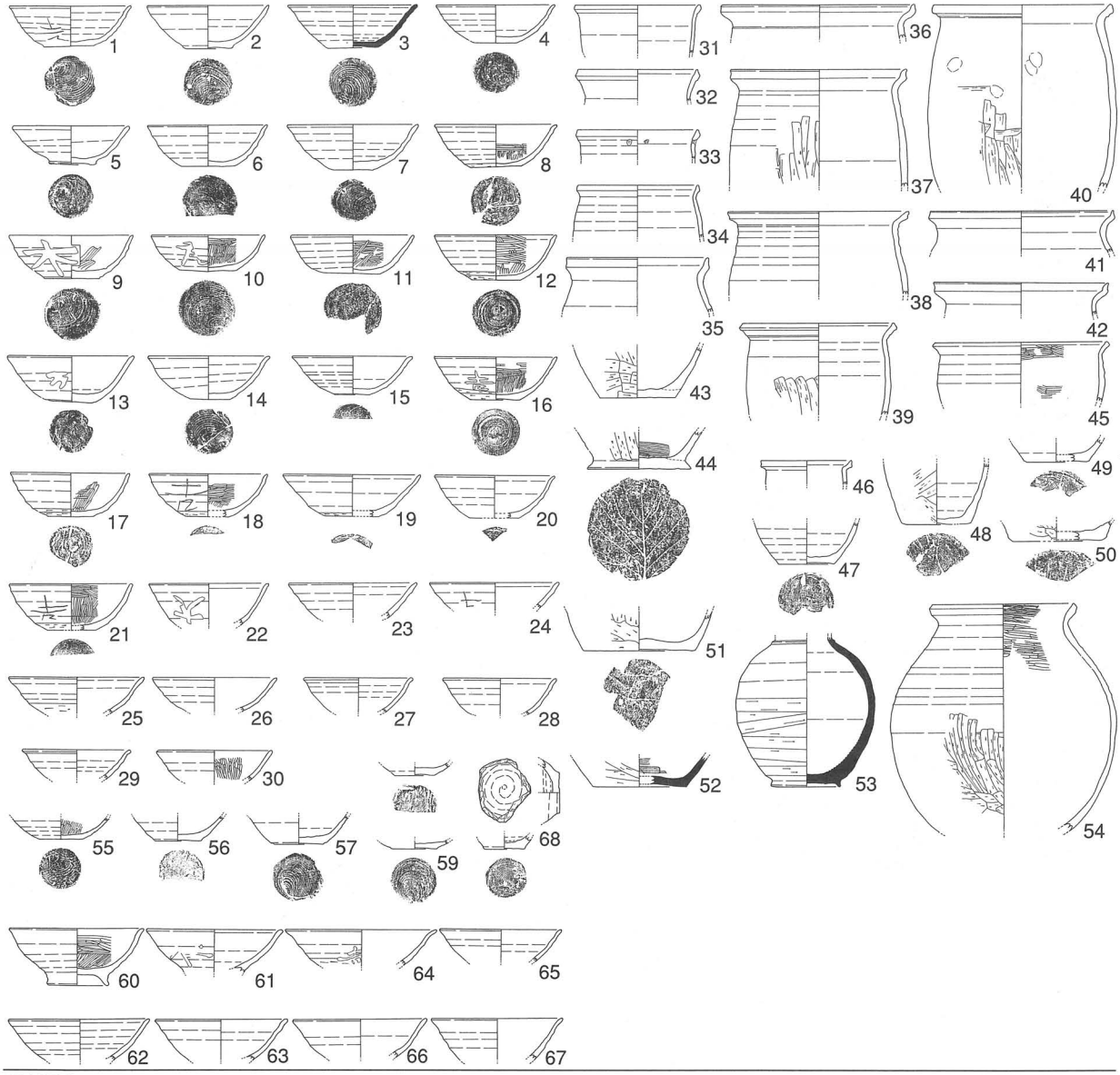


RA077

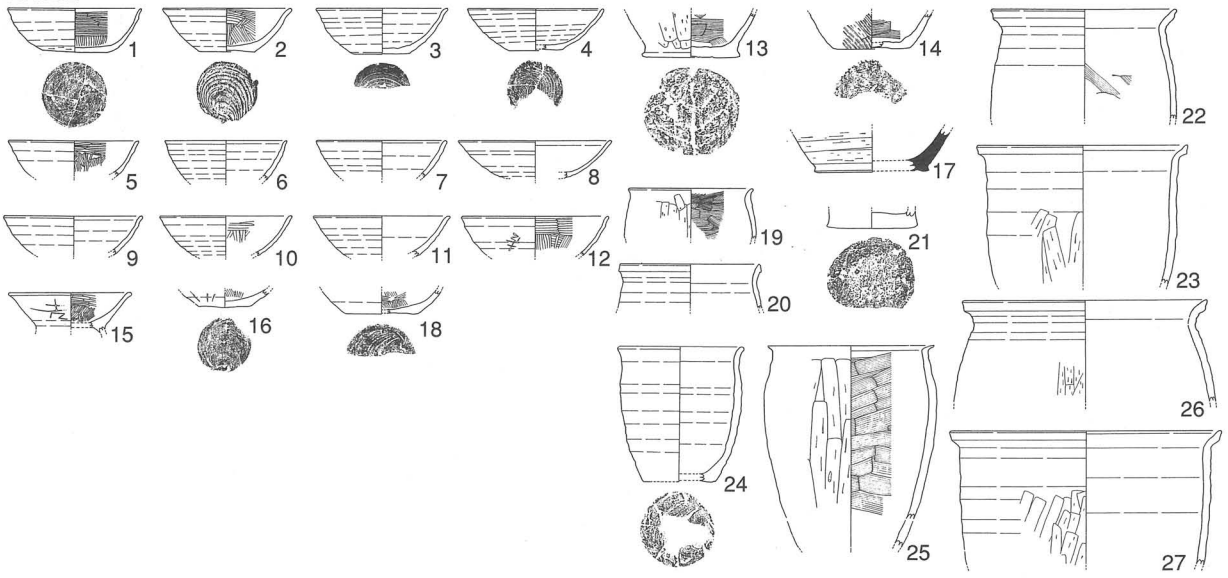


第89図　土器集成図（1）

RA061

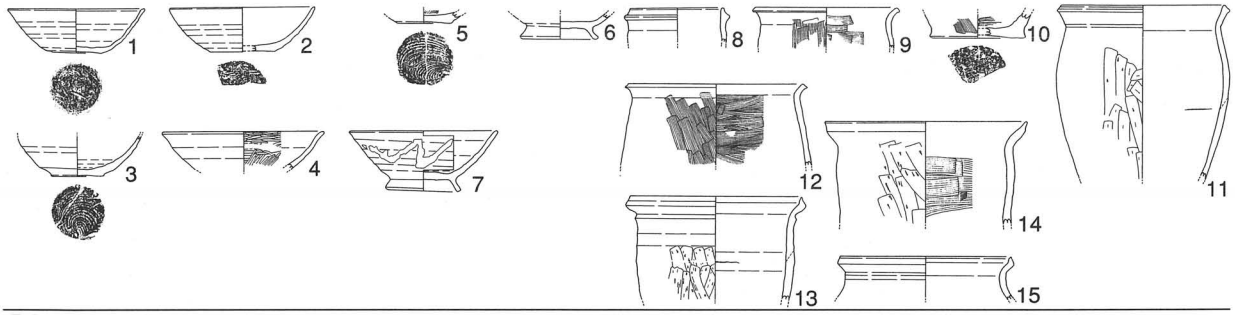


RA062

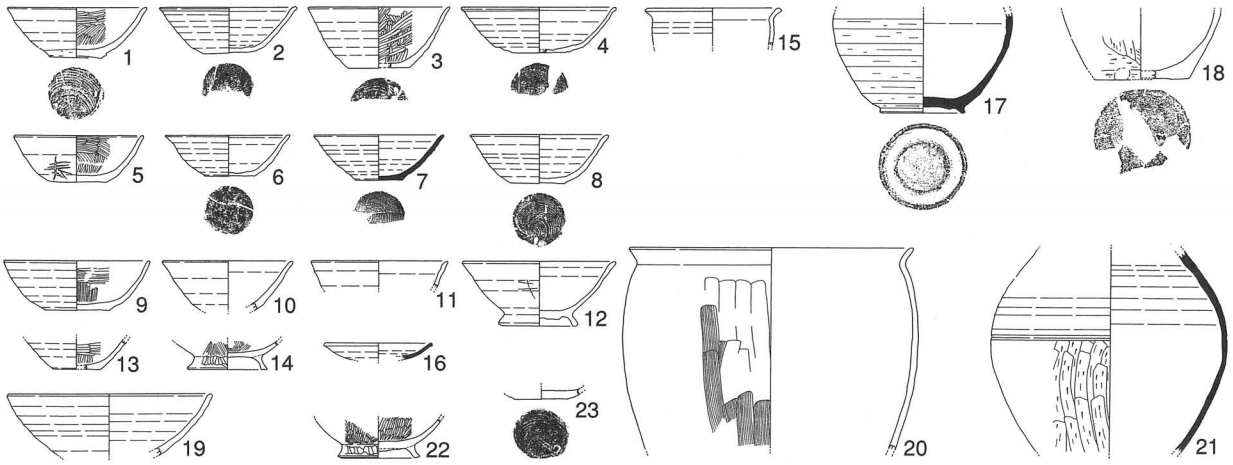


第90図　土器集成図（２）

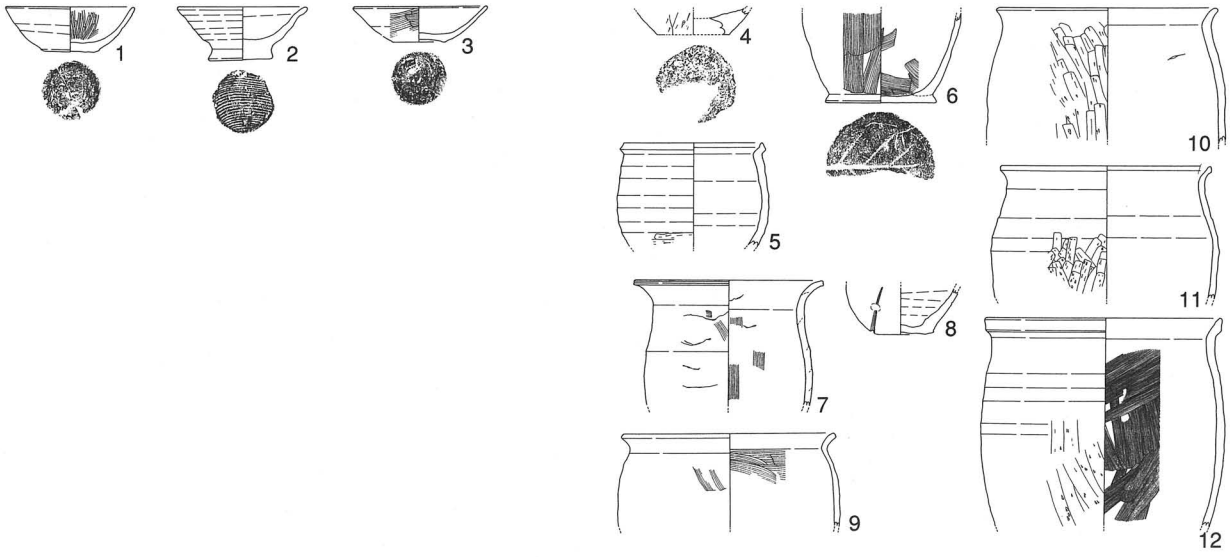
RA063



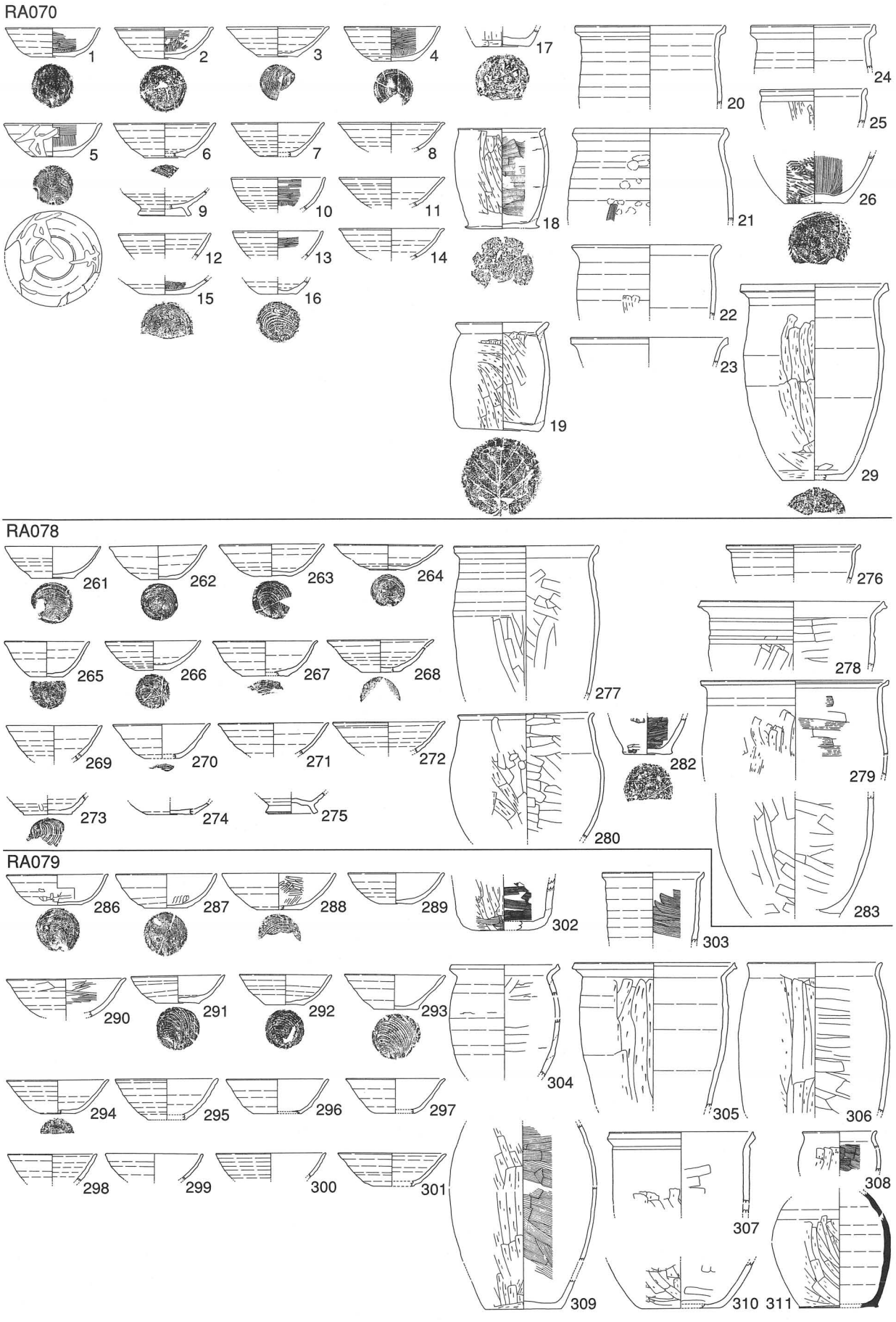
RA064



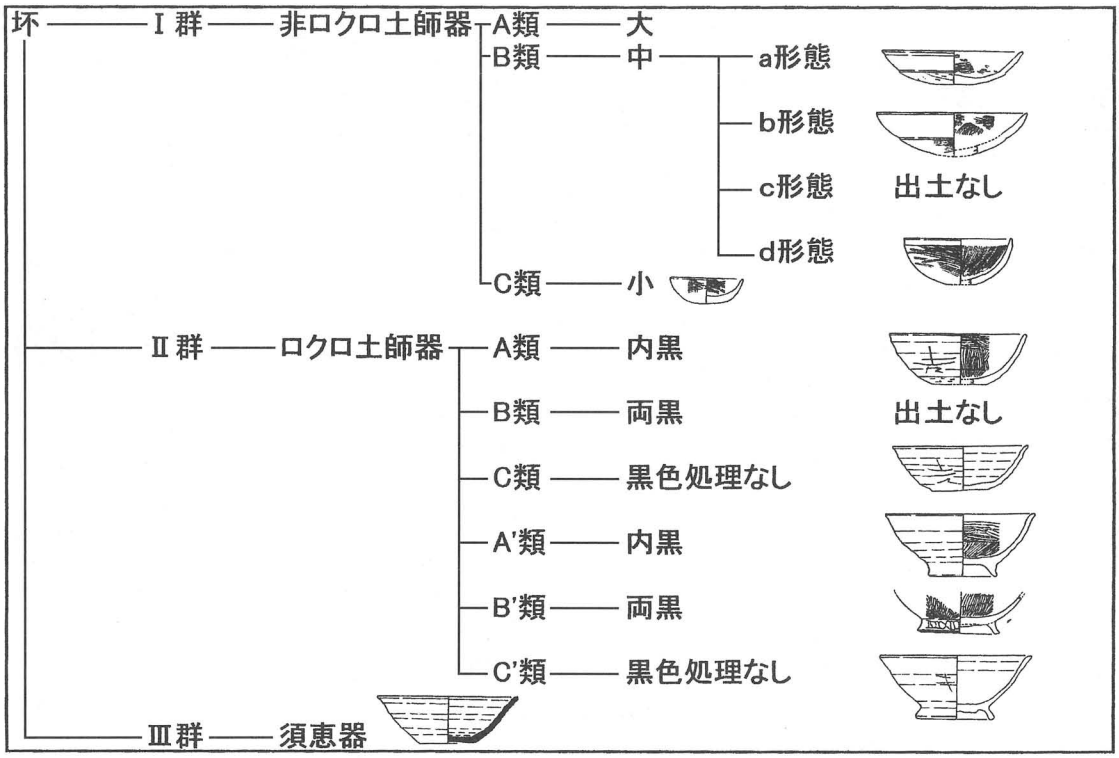
RA069

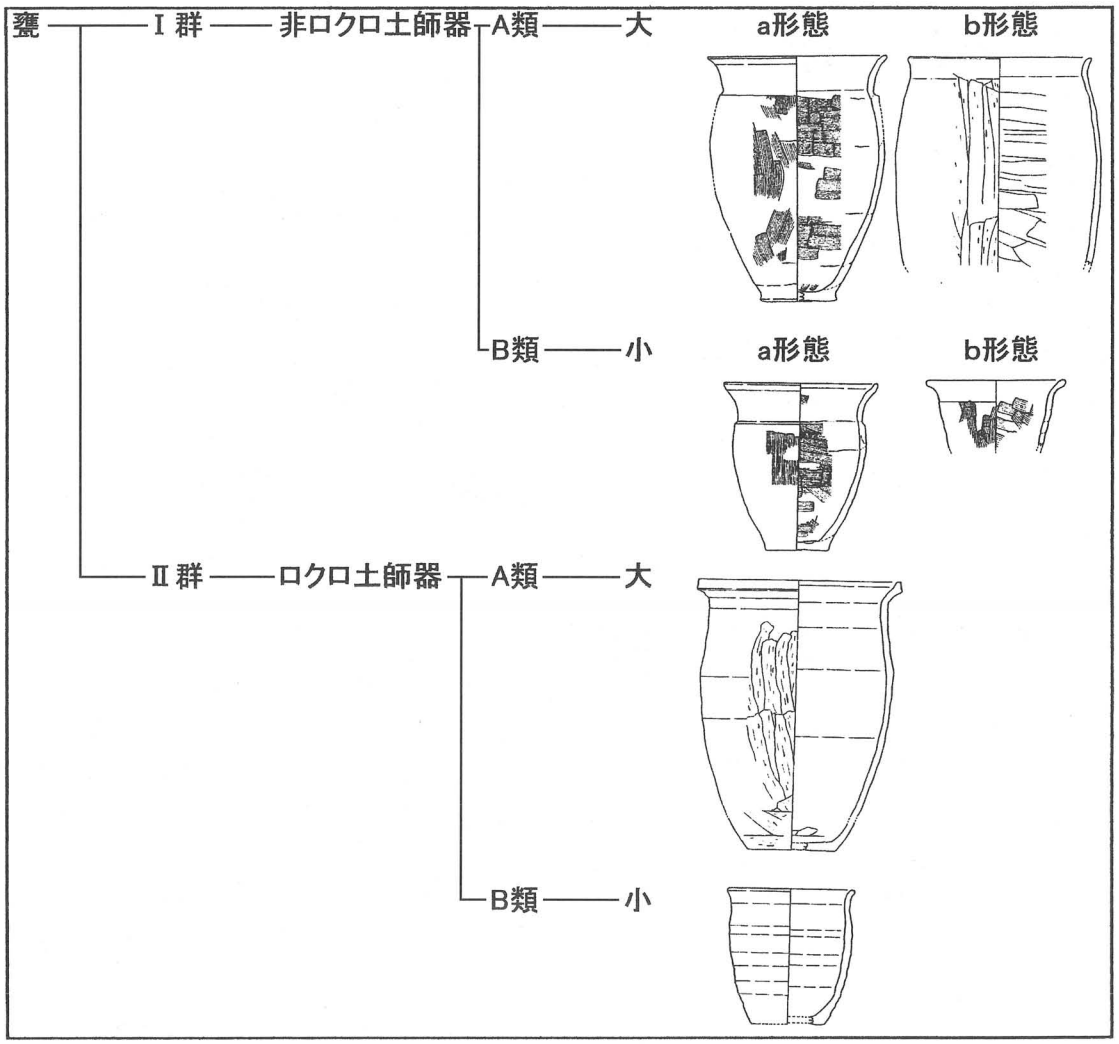


第91図　土器集成図（3）


RA070
1
2
3
4
17
20
24
25
5
6
7
8
9
10
11
18
21
26
12
13
14
15
16
22
23
19
29
RA078
261
262
263
264
276
265
266
267
268
277
278
269
270
271
272
282
279
273
274
275
280
RA079
286
287
288
289
302
303
283
290
291
292
293
304
305
306
294
295
296
297
298
299
300
301
307
308
309
310
311

第92図　土器集成図（4）


坏
Ⅰ群
非ロクロ土師器
A類
大
B類
中
a形態
b形態
c形態
出土なし
d形態
C類
小
Ⅱ群
ロクロ土師器
A類
内黒
B類
両黒
出土なし
C類
黒色処理なし
A'類
内黒
B'類
両黒
C'類
黒色処理なし
Ⅲ群
須恵器


甕
Ⅰ群
非ロクロ土師器
A類
大
a形態
b形態
B類
小
a形態
b形態
Ⅱ群
ロクロ土師器
A類
大
B類
小

第93図　土器分類図

位にあるもの（a形態）・中位にあるもの（b形態）・下位にあるもの（c形態）の3種に分けることができる。今回の調査出土資料で、このような形態が判明するのはRA077出土の土師器壷のみで、集成図では255である。これは土師器壷Ⅰ群A類a形態と分類することができる。

〈平安時代〉（集成図RA061～064・069・070・078・079）

当概期における供膳形態は前代と比較すると、土師器坏が主体であることに変わりはないが、これに須恵器坏が加わる。また、土師器坏はロクロが用いられたものに変わる。したがって、供膳形態はロクロの回転力を用いる土器のみの構成となる。このようにロクロを用いる土師器坏は土師器坏Ⅱ群とした。内面ミガキ・黒色処理されるもの（A類）、内外面ともにミガキ・黒色処理されるもの（B類）、ミガキ・黒色処理のまったく施されないもの（C類）の3種に分けることができる。また、これら土師器坏Ⅱ群A類～C類は、それぞれ高台の付かないもの（A～C類）と、高台の付くもの（A´類・B´類・C´類）とに分けられる。

当概期における煮沸形態は前代と同様に土師器甕が主体である。しかし、前代はロクロが用いられない土師器甕Ⅰ群のみの構成であったのに対して、当概期はロクロが用いられる土師器甕Ⅱ群が加わる。土師器甕Ⅰ群は法量により大（A類）・小（B類）の2分することができる。同様に、土師器甕Ⅱ群においても、法量により大（A類）・小（B類）の2分することが可能である。前代より続く形態である土師器甕Ⅰ群は、前代とは異なり段・稜・沈線などで口縁部が区分されないもの（b形態）のみで構成される。さらに、土師器甕Ⅰ群はA類、B類ともに、口縁部が外反あるいは外傾し頸部が明瞭なもの（b1形態）と体部と口縁部が直線的に連続し、括れが小さいもの（b2形態）、頸部の括れはないが、急角度で口縁部のみが外方に短く折れ曲がるもの（b3形態）に分かれる。次に土師器甕Ⅱ群は口縁端部の形状の差により、上方へ顕著に摘み上げられたようなもの（a形態）、上方へは伸びないが端面を持つもの（b形態）、端面を持たず丸く収められているもの（c形態）に分けられる。

当概期における貯蔵形態は須恵器甕、須恵器壷が主体で、土師器壷や鉢がこれらを補う。土師器壷は前代においてロクロを用いない土師器壷Ⅰ群のみであったが、当概期においてはロクロを用いる土師器壷Ⅱ群のみとなる。この土師器壷Ⅱ群は体部が球胴形に膨らみ、内面にミガキ・黒色処理が施される。このような内面調整から、煮沸機能を念頭に置いたものではなく貯蔵目的で製作されたとみるべきである。また、土師器甕Ⅱ群の内面にミガキ・黒色処理を施したような器種である土師器鉢は、頸部に括れがほとんどないため土師器壷とは区分した。須恵器の貯蔵形態は壷・甕からなる。壷は大半が長頸壷（瓶）であると考えられる。今回出土した須恵器長頸壷は、いずれも底部に高台が付くもので占められている。また、口縁部や頸部を欠いているものが多いため分類が難しいところであるが、体部下半の調整について差異が認められる。この調整差は、ロクロの回転力を用いる横方向ヘラケズリのもの（a調整）、ロクロの回転力を用いない縦方向のヘラケズリのもの（b調整）に分けられる。

（2）土器の年代について

〈古墳～奈良時代〉

今回、土師器坏Ⅰ群B類a形態としたものは、東北地方南部では栗囲式新段階、八戸地域では三段階に位置付けられている。これらの具体的な時期は7世紀後葉～8世紀前葉である。特に第89図RA068－3・4坏は口縁部と体部（底部）との境が明瞭で7世紀代の特徴が色濃いと考えられる。また、関東系土師器（第89図RA068－1）について、千葉県域では7世紀末～8世紀初頭と考えられており、その他の坏類と共伴しても何ら矛盾はなさそうである。一方、第89図RA067－7坏は口縁部と体部（底部）が不明瞭で連続的な形状を呈しており、先述したものより新しい要素であると考えられる。なお、過去の調査で土師器坏Ⅰ群B類a形態は、第12次調査RA015・032、第15次調査RA047

・053などでも出土している。
土師器甕は口頸部に段・稜がある土師器甕Ⅰ群A類a形態から徐々に段・稜の無い土師器甕Ⅰ群A類b形態へと型式変化すると考えられている。また、土師器甕Ⅰ群A類a形態は7世紀～8世紀半ばまで存続し、b形態へ型式変化する画期は8世紀後半～9世紀初頭とみられている。RA067・068は土師器甕Ⅰ群A類a形態が主体である。しかし、RA077は土師器甕Ⅰ群A類b形態である第88図254が存在し、8世紀後半に位置付けられる。また、これら土師器甕Ⅰ群（非ロクロ）は、底部内面の断面形状が丸みを持つ「U」字形から扁平な形へと変化すると考えられており、RA067－10・RA068－19などは前者、RA067－11およびRA077－254は後者の形状である。この形態的変化は体部下半の膨らみとも連動するようで、体部下半が膨らみを持つものから膨らみを持たず、直線的に立ち上がるものへと変遷するようである。総合すると、土器がある程度まとまって出土した当概期の3棟（RA067・068・077）は時期的に古いものからRA068→RA067→RA077の順に並べることができる。
〈平安時代〉
この時期の土器は、先述した前代に比べると地域的な特徴があまりみられず、県内各地で出土する土器類は地域色の極めて乏しい状況にあるとされている。これまでの先行研究でなされた編年観を援用すると9世紀初頭～半ばについては県内の各城柵の出土資料が基準となっている。9世紀後半以降に関しては胆沢城およびその周辺資料が基準となっている。9世紀半ばを含む前半代は須恵器坏の形態・製作技法状の特徴が標章として挙げられる。すなわち、低い器高・大きな底径（6 cm超）・底部のヘラ切りなどである。これらの特徴を持つ坏は、野古A遺跡では出土しておらず、この時期以降の土器群で占められている。また、胆沢城が機能を失う10世紀半ば以降は古代的な土器様式から中世的な土器様式へと変容する時期に当たり、煮沸形態が激減し、供膳具（皿）が増加する。野古A遺跡の出土資料は新しくとも10世紀前半頃に収まると考えられる。この9世紀後半～10世紀前半の期間で、さらに詳細な時期を土器から特定することは容易ではないが、おおまかな時期決定をおこなう。
土師器坏は、詳細な時期を特定する資料は多く含まれていない。つまり、どの土器についてもこの時期に存在する通有のものである。ただし、RA069出土資料2の柱状高台坏は周辺ではみられない特殊な形態である。盛岡市域では同様の坏が堰根遺跡で出土しており、10世紀半ばから後半の土器であると考えられている。したがって、この土器を積極的に評価するならば、野古A遺跡の古代集落ではもっとも新しい時期とみられる。このような目でみれば、同じRA069出土3の坏についてもやや扁平な器形、外面調整など9世紀後半～10世紀前半にはみられない形態の坏である。資料が乏しいため即断はできないが、この2点の坏は10世紀前半以降の土器である可能性が考えられる。
ロクロが用いられない土師器甕Ⅰ群は、前代の型式変化を踏襲することが志波城などで確認されている。したがって、口縁形態にその特徴は現れ、頸部の括れが明瞭なものから不明瞭なものへと変化する。実年代は判明していないが、10世紀半ば以降にはほとんど頸部と呼ぶことができる形態を有する甕はみられない。このことから、前項で分類した通り、土師器甕Ⅰ群b1形態からb2形態あるいはb3形態のものへと時期が下るにつれて変化すると考えられる。土師器甕Ⅰ群b1形態に属するものはRA063－12・RA069－9などが挙げられ、土師器甕Ⅰ群b1形態に属するものはRA062－19・25、RA078－280などが挙げられる。

（3）特殊な土器について
＜第23次調査RA068出土土師器坏＞
本書の報告でも述べたが、この土師器坏は関東系土師器坏ではないかと疑われる。千葉県域で出土

する７世紀後半～８世紀前半の土師器坏に似ている。形態が類似することは考えられるが、製作技法上の特徴が酷似する。また、このような技法は在地の土師器坏ではみられないものである。これらの点からみて「関東系土師器」と考えられる。

＜第23次調査RA068出土土師器甕＞

盛岡市域より北の地域でみられる甕の特徴を有する。通常の甕と比較した際に目に付く特徴は、細長い円筒状の体部、頸部から口縁部にかけての括れが小さく、段もみられない。底部は極度に厚く、接地部がやや外方に張り出す。以上のような特徴を有する甕が大・中・小の各サイズがRA068より出土した。このような土師器甕によく似た形態の甕が岩手県北部で出土している。久慈市平沢Ⅰ遺跡GⅡ－１住居出土資料の甕類は今回野古Ａ遺跡で出土した特異な甕と形態的な共通点が多くみられる。これら独特な特徴を有する土師器を羽柴直人は「九戸型土師器」と呼称し、分析をおこなっている。また、「九戸型土師器」は九戸地方における地域色の強い土師器と捉えている。「九戸型土師器」の中において、上記平沢Ⅰ遺跡出土資料を「２群土器」とし、７世紀後半の年代観を与えている。一方、本書では野古Ａ遺跡RA068の土師器は７世紀末～８世紀初頭頃と報告しており、大幅な年代のズレはない。なお、盛岡市周辺では滝沢村諸葛川遺跡において出土している。

＜第29次出土土師器甕＞

花弁状の口縁端部を有する。非常に特異な形態であるため類例を探すことが困難である。

＜第24次調査出土土師器羽釜＞

羽釜という器種自体が類例として僅少であるが、多賀城跡第61次調査で出土している。関東地方においては平安時代の土器様式の中にみられる。

以上のように周辺集落ではほとんどみられない土器がこの野古Ａ遺跡で出土している。このことから、どのような交流であったかはまだわからないが、他地域との何らかの交流があったことを示すものと考えられる。

（４）まとめ

以上のように、土器から遺跡を概観すると概ね７世紀後半から集落形成が始まり、９世紀前半に断絶しながらも10世紀前半、場合によって半ば以降まで存続する可能性が考えられる。また、各時代ともに他地域との交流が土器から窺うことができ、周辺を含め遠距離の集落と何らかの交流があったと考えられる。

（福島）

引用・参考文献

宇部則保　2002「東北北部型土師器にみる地域性」『海と考古学とロマン―市川金丸先生古稀記念献呈論文集―』市川金丸先生古稀を祝う会

福島正和　2005『台太郎遺跡第54次発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第486集（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

集落遺跡検討会編　2004『岩手県土師器集成』集落遺跡検討会

羽柴直人　1995「岩手県九戸地方のロクロ使用以前の土師器」『紀要ＸＶ』（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

八木光則ほか　1985『志波城Ⅰ』盛岡市教育委員会

桐生正一　1987『諸葛川遺跡』滝沢村教育委員会

市原市文化財センター　1989『文作遺跡』市原市教育委員会・市原市文化財センター

5　礫石器の使用痕跡

（1）　観察方法

奈良・平安期の庶民の暮らしには依然として敲石・磨石・凹石などの敲磨器類が利用されている。今回の野古A遺跡第23・24次調査でも敲磨器類が出土しており、使用痕跡と考えられる明確な光沢面と線状痕が観察された。古代の石器に関する機能論的検討事例は少ないので、今後の研究の一助となりうると考え報告することとした。なお、主として磨面を観察対象としたため微小剥離痕については記載しない。観察に際し、光沢面タイプは御堂島分類（御堂島1986・1988）に従い、観察には金属顕微鏡オリンパスBM51を使用した。また、写真撮影はデジタルカメラで行った。

（2）　観察結果

観察結果は第11表の通りである。器機の性能上、大型礫石器については観察していない。確認できた光沢はB・Cタイプなど明るいものが多い。線状痕は直線的な外観を呈するタイプaを主体とする。特徴的な使用痕は砥石に見られたため、現在発掘調査現場で利用している砥石を比較試料1として観察した。その結果、明瞭なCタイプ光沢が多数確認できた（写4）。225の表面でもCタイプを確認した。確認したCタイプは石器表面の凸部にしかみられない点に特徴がある（写1）。また、225の研磨面に青色の付着物が確認された（写2）。Cタイプ光沢面上にも確認されており石器表面凸部にのみ分布する。この付着物は凹部には見られない。ペイントスプレーの塗料や顔料成分を含む硬度の低い岩石であった可能性は低いだろう。考えられるのは接触した鉄製品の中に含まれる微量な銅・鉛などの成分か、何らかの酸化物質であろう。本遺跡では実施していないが、奈良・平安期の鉄製品主成分分析では銅・鉛などの微量元素の含有報告例がいくつかある。あくまで推定であり、理化学分析による検証を必要とするが、磨面に青色の付着物が確認されCタイプ光沢がある場合、225のような石器は鉄製品を研磨した砥石として評価できる可能性が高い。

今回の使用痕分析による機能推定によって、磨面にCタイプなど明るく貼り付くような光沢が見られ、線状痕aを主体のものを砥石と認定できる可能性を指摘した。また青色付着物が確認できる可能性も合わせて指摘した。顕微鏡観察によって機能論的に砥石を判別できたことは磨具として一括されてきた研磨具の位置づけを明確にする一助となろう。　（米田）

第11表　礫石器の使用痕観察表

図No.	登録	器種	石材	光沢	線状痕	所　見
第21図1	223	石皿	安山岩	B	a主体、b少量	光沢は明るく丸みをもつ。光沢面上に線状痕aが多数見られる。
第21図3	225	砥石	安山岩	C	a主体、b少量	光沢は器面表面の最も高い場所にのみ貼り付くように形成。線状痕も見られる。表裏面に平滑な磨面を有し、研磨痕と考えられる。磨面上の擦痕は器体長軸に「平行」が主体で、長軸に「直行」、「斜行」のものは少ない。磨面上に青色の付着物が点在する。
第21図5	224	石皿	安山岩	B	a主体、b少量	第20図1と同一個体か？裏面の凹痕周辺に丸みをもつ明るいBタイプ光沢が見られる。
第13図1	219	磨石（砥石）	安山岩	C	a主体	光沢は局所的に発達し、範囲は狭い。光沢は稜が明瞭で明るく貼りついたような外観で、アルミ片が貼り付いているような印象である。光沢中に線状痕aが多数見られる。
比較資料	比較試料1	砥石	粘板岩	C	a	発掘調査現場で使用している鉄製研磨具のうち、磨耗の激しいものを選択した。

参考・引用文献

阿古島　香　1989　『石器の使用痕』ニュー・サイエンス社

御堂島　正　1986　「黒曜石製石器の使用痕　－ポリッシュに関する実験的研究」『神奈川考古』22　神奈川考古同人会

御堂島　正　1988　「使用痕と石材　－チャート、サヌカイト、凝灰岩に形成されるポリッシュ」『考古学雑誌』74－2

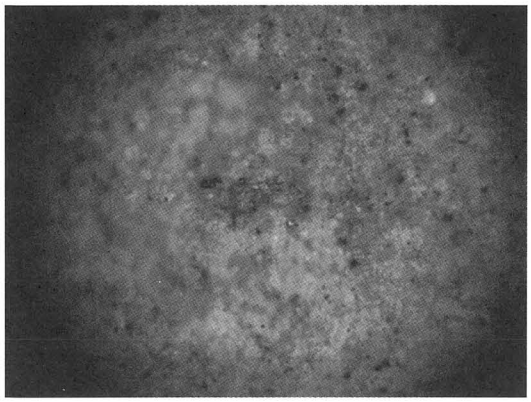


写真1　225（第21図3）の表面のCタイプ光沢（200倍）

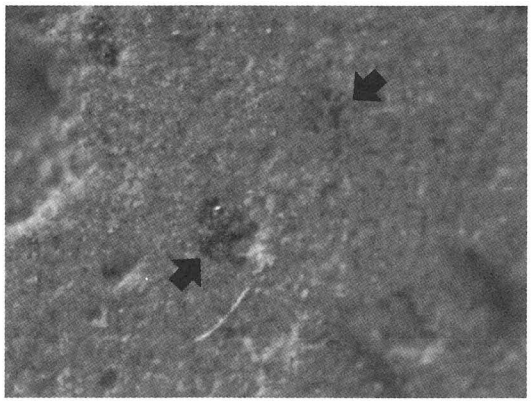


写真2　225（第21図3）の表面の青色付着物(200倍)

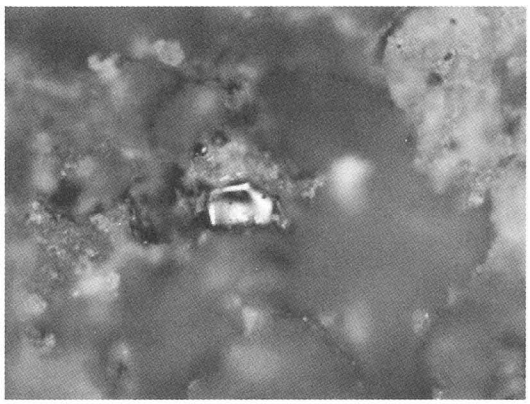


写真3　224（第21図5）のBタイプ光沢（200倍）

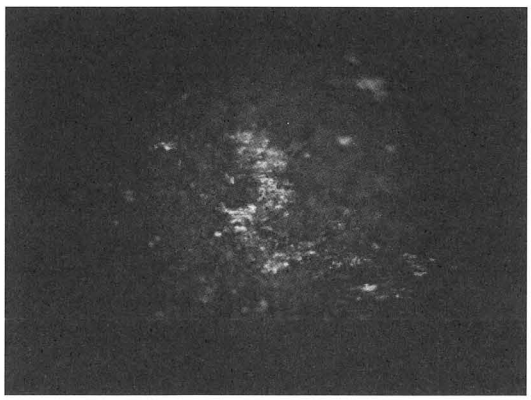
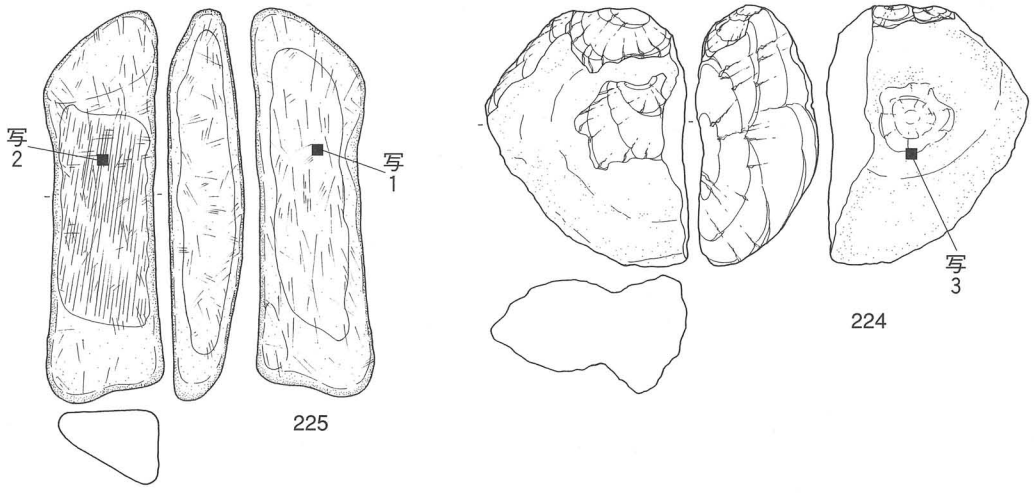


写真4　比較資料1表面のCタイプ光沢（200倍）



第94図　礫石器の使用痕跡

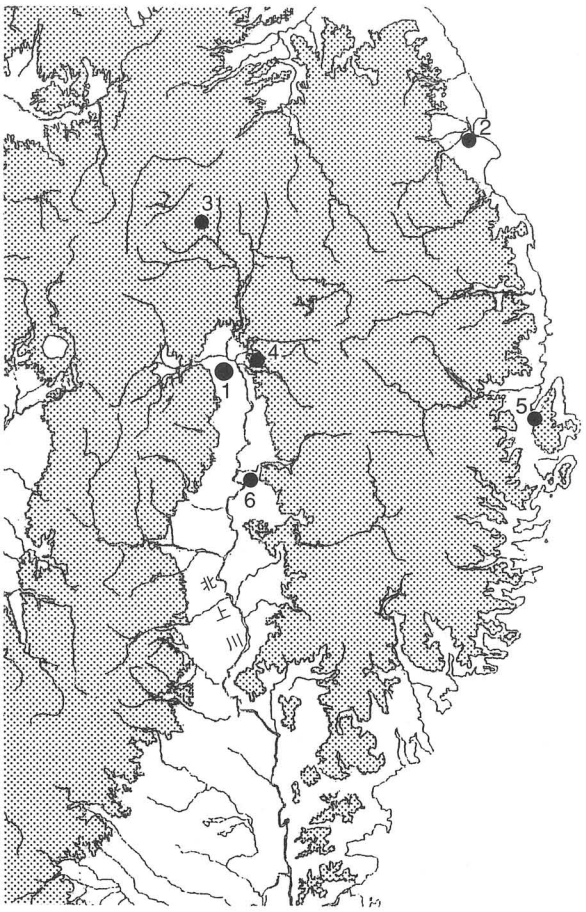
6　鉄製銛先

野古A遺跡23次調査で、RA061より鉄製銛先が出土した。岩手県内では資料が少なく、定量分析が行える状況にない。しかし、その性格上、古代人の生業の一端を示す貴重な資料であり、今後の検討のために、県内出土例の集成を試みた。

今回集成するにあたり、既刊の報告書に掲載されているものを基本としているが、出土が確認できた未報告のものも含まれている。それら未報告のものについては、調査担当者の方々の協力の下、現時点で報告に近い形で取り上げられるよう努めた。

鉄製銛先が出土した遺跡は、野古A遺跡をはじめ、久慈市中長内遺跡、旧西根町（現八幡平市）子飼沢山遺跡、盛岡市堰根遺跡、旧石鳥谷町（現花巻市）大西遺跡、宮古市赤前V遺跡の6遺跡で、遺跡毎の出土点数状況を見ると、中長内遺跡、子飼沢山遺跡、堰根遺跡、大西遺跡が各2点ずつ、野古A遺跡と赤前V遺跡が各1点ずつの計10点となっている。2点出土している遺跡はいずれも同一遺構内での出土である。

以下、各資料についての特徴等を報告より一部引用しつつ見ていくことにする（第96図・第12表）。なお、No. 1（野古A遺跡出土遺物）については本書にて紹介しているため割愛する。



1．野古A遺跡　2．中長内遺跡　3．子飼沢山遺跡
4．堰根遺跡　5．赤前V遺跡　6．大西遺跡

第95図　岩手県における鉄製銛先出土分布

No. 2, 3 久慈市 中長内遺跡出土資料

RA516号住居内のほぼ同一地点、同一層位よりの出土である。時期は平安時代とされている。「いずれも断面形は四角形状で先端部にはかえしが設けられており、」「茎部はやや平らになる」かえしは反り気味のものと直線的なものとがある。

No. 4, 5 旧西根町（現八幡平市） 子飼沢山遺跡出土資料

5号竪穴住居跡（焼失住居）北側床面よりの出土である。時期は平安時代とされている。「2つの個体を撚り糸で縛っ」た状態での出土である。断面形は茎部がやや平らな板状、体部が四角形状、先端部に向かうに従い楕円状となっている。

No. 6, 7 盛岡市 堰根遺跡出土資料（未報告）

RA508（焼失住居）内、同一グリッド同一層位よりの出土である。時期は平安時代。断面形は茎部がやや平らな板状で、先端に向かうにつれ四角形状になる。かえしが後からつけられた痕跡が見受けられる。

No. 8 宮古市 赤前V柳沢遺跡出土資料

A－2号竪穴住居跡床面よりの出土である。時期は「平安時代？」とされている。断面形は「1㎝角に面取りしている」。茎部はやや平ら気味になる。「ミツマタ銛の一本か」とある。

No. 9，10 旧石鳥谷町（現花巻市） 大西遺跡出土資料

A区住居跡4（焼失住居）内、「2本が一組になった状態で」の出土である。時期は平安時代とされている。断面形は体部に至っても幅に対して厚さがやや小さい長方形状である。9は先端部が欠損しているものの、10と対になって出土していることから、銛の茎部とされているようである。

以上、岩手県内における鉄製銛先の出土事例をみてきた。特徴として、多くの遺跡で2点ずつ出土しており、しかも2点が1対になった状態で出土している点と、いずれも平安時代の竪穴住居跡からの出土である点が挙げられる。中でも、子飼沢山遺跡出土例は2点が撚糸で束ねられた状態で出土しており、このような事例から本来2本一組であった可能性が考えられる。なお、赤前Ⅴ柳沢遺跡出土例は1点のみの出土であるが、A－2号竪穴住居跡は大部分が調査区外に位置しており、未調査部分に対となる鉄製銛先が存在する可能性もある。

次に、寸法については長いもの、短いものに分類することが可能である。長いものは全長30㎝前後、短いものは全長25㎝前後でまとまる傾向にある。しかし、これら長短の差が何に起因するものか現段階ではわからない。今回の野古A遺跡出土資料は、子飼沢山遺跡出土資料とともに長いタイプに属する。

また、出土遺跡の分布についてであるが、当初は漁撈具という性格上、沿岸地域に多く分布するものと予想していたが、内陸地域での出土も比較的高い割合で認められた。鉄製銛先が漁労具であるとすれば、内陸地域においては河川などの淡水域で使用された可能性も視野に入れる必要があろう。

いずれにせよ現段階では、分布傾向や使用状況等を検討するには事例があまりに乏しく、今回は資料紹介にとどめる事とする。今後の更なる調査の積み重ねによる資料の充実に期待したい。　（立花）

参考文献

久慈市教育委員会 1995『中長内遺跡』久慈市埋蔵文化財発掘調査報告書 第8集

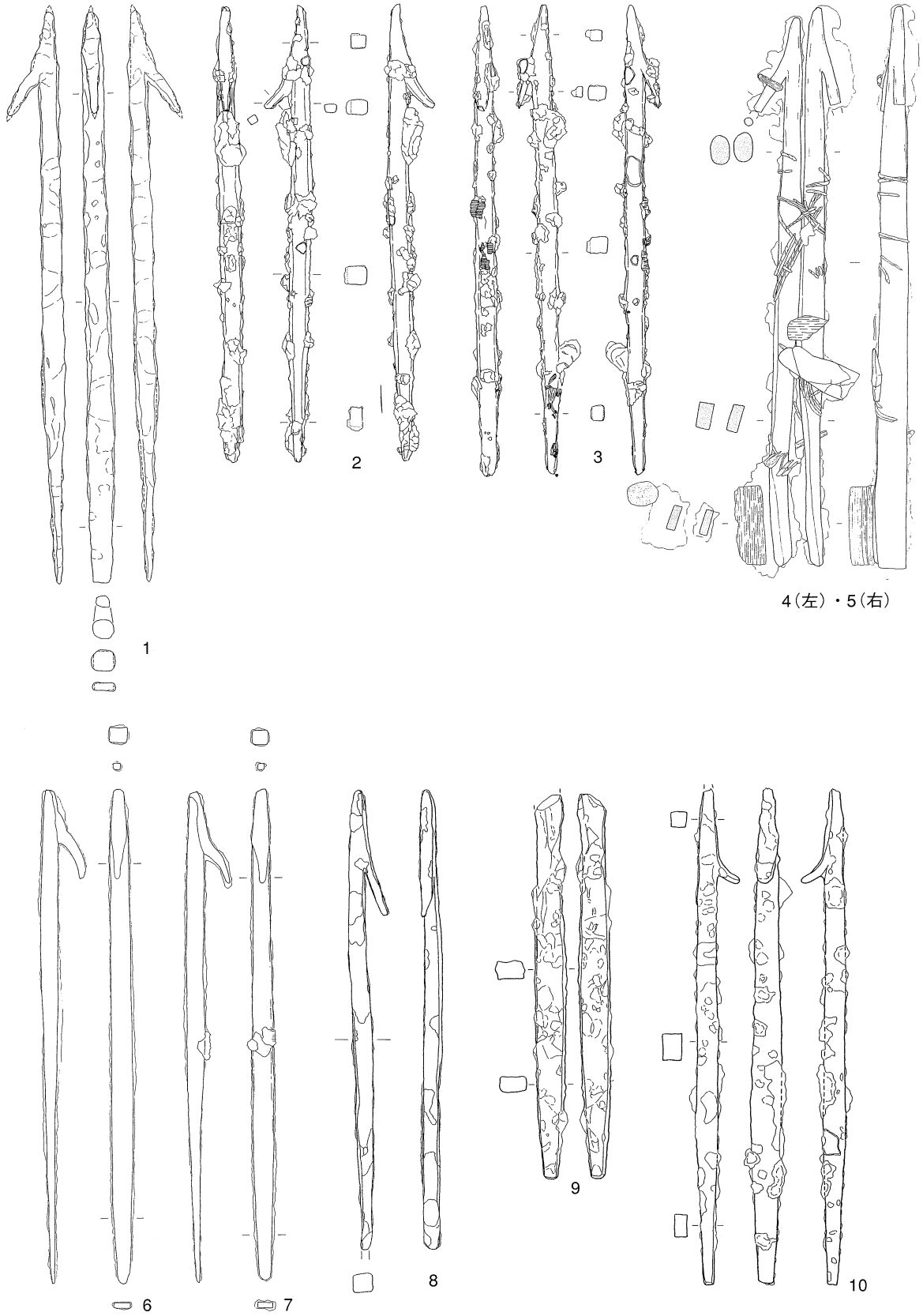
福島大学行政社会科学部考古学研究室 2000「調査報告 西根町子飼沢山遺跡、暮坪遺跡発掘調査概要Ⅱ」『岩手考古学』第12号

宮古市教育委員会 1999『赤前Ⅲ遺跡 赤前Ⅳ八枚田遺跡 赤前Ⅴ柳沢遺跡 赤前Ⅵ釜屋ヶ沢遺跡 小堀内Ⅲ遺跡』宮古市埋蔵文化財調査報告書53

（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2006『大西遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団文化財調査報告書第479集

第12表　岩手県内出土鉄製銛先

No.	遺跡名	市町村	報告書掲載No.	遺物名称	出土遺構	出土層位	計測値（cm）			長短
							全長	幅	厚さ	
1	野古A	盛岡市	第47図5	銛先	RA061	埋土下層	31.4	2.8	1.5	長
2	中長内	久慈市	第146図61（F-1）	銛	RA516	床やや上	24.0	1.0	1.1	短
3	中長内	久慈市	第146図62（F-2）	銛	RA516	床やや上	24.7	0.9	1.0	短
4	子飼沢山	旧西根町（現八幡平市）	第17図9（図上）	鉄製品（銛）	5号竪穴住居跡	床面	29.4	1.5	1.0	長
5	子飼沢山	旧西根町（現八幡平市）	第17図9（図下）	鉄製品（銛）	5号竪穴住居跡	床面	30.0	1.4	1.0	長
6	堰根	盛岡市	未報告	銛1	RA508	C層	26.2	1.1	1.0	短
7	堰根	盛岡市	未報告	銛2	RA508	C層	26.0	1.1	0.9	短
8	赤前Ⅴ	宮古市	第58図5	銛	A－2号竪穴住居跡	床面	24.1	1.0	1.0	短
9	大西	旧石鳥谷町（現花巻市）	第25図59	銛？	A区住居跡4		20.1	1.9	1.0	－
10	大西	旧石鳥谷町（現花巻市）	第25図60	銛？	A区住居跡4		25.7	2.2	1.4	短



第96図　岩手県内出土鉄製銛先（S=1/3）

7　まとめ

以上、本書で報告した野古A遺跡第23・24・29次調査について遺構および遺物に関する様々な角度から分析と考察をおこなった。ここでは、これら考察を受け、本書で報告した野古A遺跡第23・24・29次調査成果について今一度整理し、評価をおこなうこととする。

（1）遺構

中心となる遺構は古代の竪穴住居である。第23次では8棟（うち1棟は第29次でも検出）、第24次では5棟、第29次では5棟（うち1棟は第23次でも検出）の内訳である。第23次の7棟中2棟が7～8世紀、5棟が9～10世紀の住居である。第24次の5棟中2棟が7～8世紀、3棟が9～10世紀の住居である。第29次では4棟中1棟が8世紀、3棟が9～10世紀の住居である。すなわち、7世紀後半から集落が営まれ、8世紀を通じて居住域が展開し、その後連続せず、9世紀後半以降に再展開するようである。7～8世紀（古墳～奈良時代）の竪穴住居は概ね整然と主軸が揃うことが特徴的である。一方、9世紀後半以降（平安時代）のものは主軸方向にばらつきがあり、前代と比べ一定でないことが特徴である。また、前代の竪穴住居を切ることなく広がることから、前代に使用されていた住居の埋没が完全に終わらないうちにこれらを避けた選地がおこなわれたものと考えられる。したがって、平安時代の居住域は古墳～奈良時代の集落域とは近接しながらも重ならない状況である。野古A遺跡全体の奈良時代住居床面積には4類型が認められ、第23・24・29次調査では中～大形の住居、一方平安時代は小～大形の3類型がみられ、バラエティに富む傾向である。また、段丘面での立地において、奈良時代は高い地点から低い地点まで、平安時代は高い地点に限定されるという傾向がみられる。

竪穴住居以外の遺構では、墓壙と考えられる遺構が確認されている。いずれも方形あるいは長方形を基調とし、集落内居住域とあまり離れない場所に位置している。いずれも平安時代のものと考えられ、同時期の竪穴住居数を考えると墓壙はきわめて少なく被葬者が限定されていた可能性が考えられる。

また、野古A遺跡では過去の調査とも合わせると18基を数える縄文時代の陥し穴状土坑が調査されている。これらは、すべて溝状の形態を呈し遺跡南側の低地に偏在する傾向があり、等高線に垂直方向に配置されている。このような傾向は、周辺遺跡でもほぼ同様であり、水場を求めて集まる獲物を狙った狩猟地点が点在していたことを示す。

（2）遺物

出土した古代の土器から概ね竪穴住居の時間的位置付けが推察できた。土器がまとまって出土した住居に関しては、古墳～奈良時代においてRA068、RA067、RA077の順に時期変遷することが考えられる。7世紀代まで遡る可能性があるのはRA068で、その他は8世紀代の範疇で納まると考えられる。一方、平安時代はどの住居も9世紀後半～10世紀前半に納まると考えられ、明確な時期変遷を述べることは難しい。しかし、RA069は柱状高台風の土師器坏が出土しており、この1点のみみれば、この住居は他の住居より後出する可能性が考えられる。古墳～奈良時代の住居群は比較的長期間にわたり営まれているが、平安時代の住居群は短期間に集中して営まれたものと考えられる。また、古代全般を通じて、出土した土器の中に在地の土器の特徴から逸脱する特徴を有する土器がいくらかみられ、他地域と何らかの交流があったものと考えられる。

土器以外では礫石器、鉄製品が出土しており、これらは道具として使用されたと考えられる。礫石器には使用痕跡が認められた。特に、砥石表面には鉄製品の研磨によって生じた線状痕が確認され、これら痕跡の付着物から研磨した鉄製品の成分中に銅や鉛が含まれている可能性が考えられる。また、

これまで野古A遺跡では鋤先などの鉄製農具類が出土している。しかし、第23次調査では鉄製銛先が出土した。このような鉄製銛先は漁労具であると考えられており、岩手県内10遺跡で出土している。しかし、その出土分布は沿岸に限らず、野古A遺跡のような内陸部でも出土しており、野古A遺跡では雫石川、北上川などの河川での漁労活動を想定することができる。

（3）今後の課題

最後に今後の課題としていくつか提起しておく。竪穴住居群が多数検出されている野古A遺跡では概ね集落の中心部から外縁まで把握できつつあるが、集落の広がりと他遺跡との関わりは不明である。これまで調査されてきた周辺諸集落との比較検討が必要であろう。さらに平安時代における墓壙についても集落様相と合わせて検討しなければならない。また、被葬者像についても同様である。また、野古A遺跡は縄文時代の狩猟域でもあるが、縄文時代晩期の集落が確認されている本宮熊堂A遺跡との関連についても考えなければならない。

また、蓄積された土器などの資料の分析をより精緻におこない、土器による編年を今一歩進めることが必要とされる。土器以外では周辺集落を含め古代であっても実用利器として石器の使用が認められ、鉄製品とともに生業との関わりを明らかにする必要があろう。

以上のように野古A遺跡は、縄文時代から人々の活動の場として利用されてきた。特に、古代においては集落が形成されている。長い期間、人々がこの地で残してきた痕跡について検討することは容易なことではない。課題は多く残っているが、これらをクリアにして人々の活動がリアルに甦るような総合的な視点によるアプローチが必要であろう。（福島）

写　真　図　版

第23・24次調査

調査区遠景（南から）

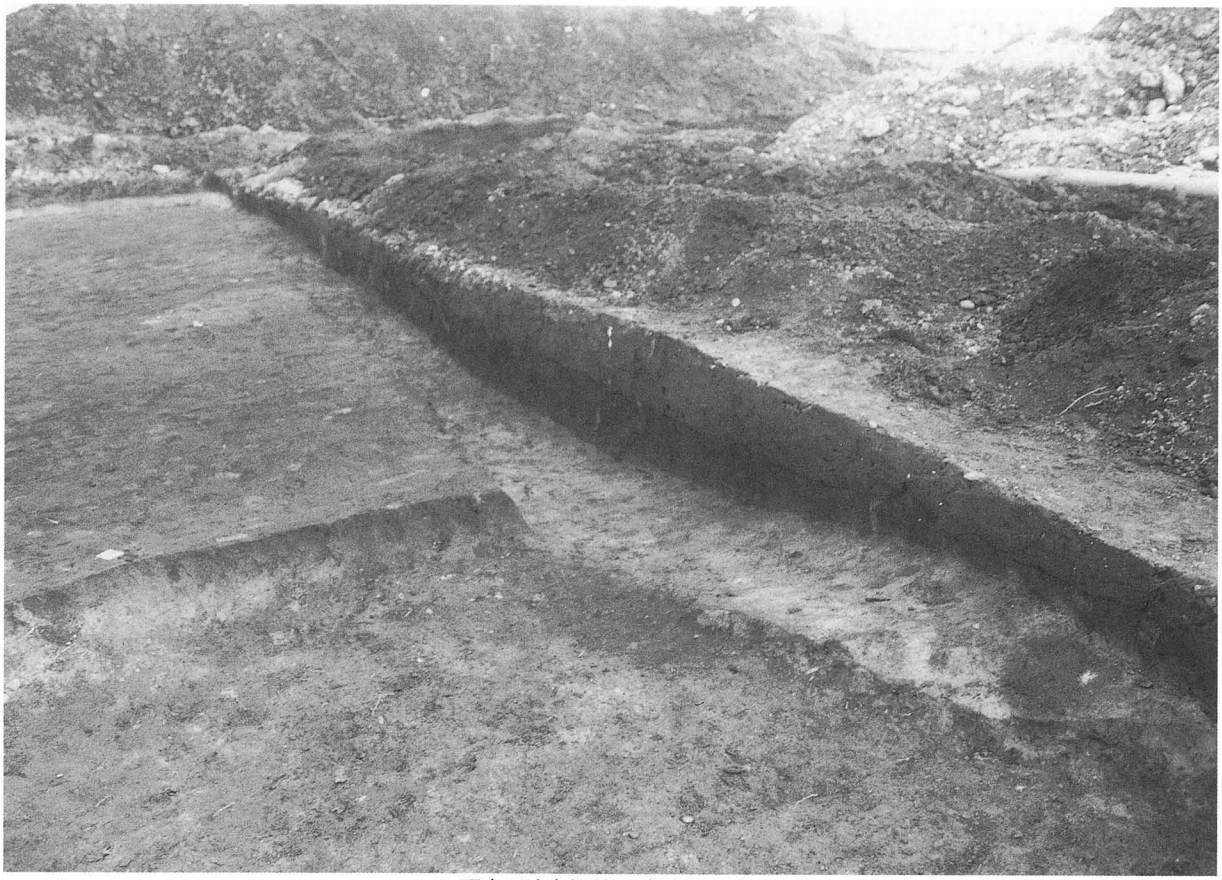
調査区近景（直上から）

写真図版１　航空写真

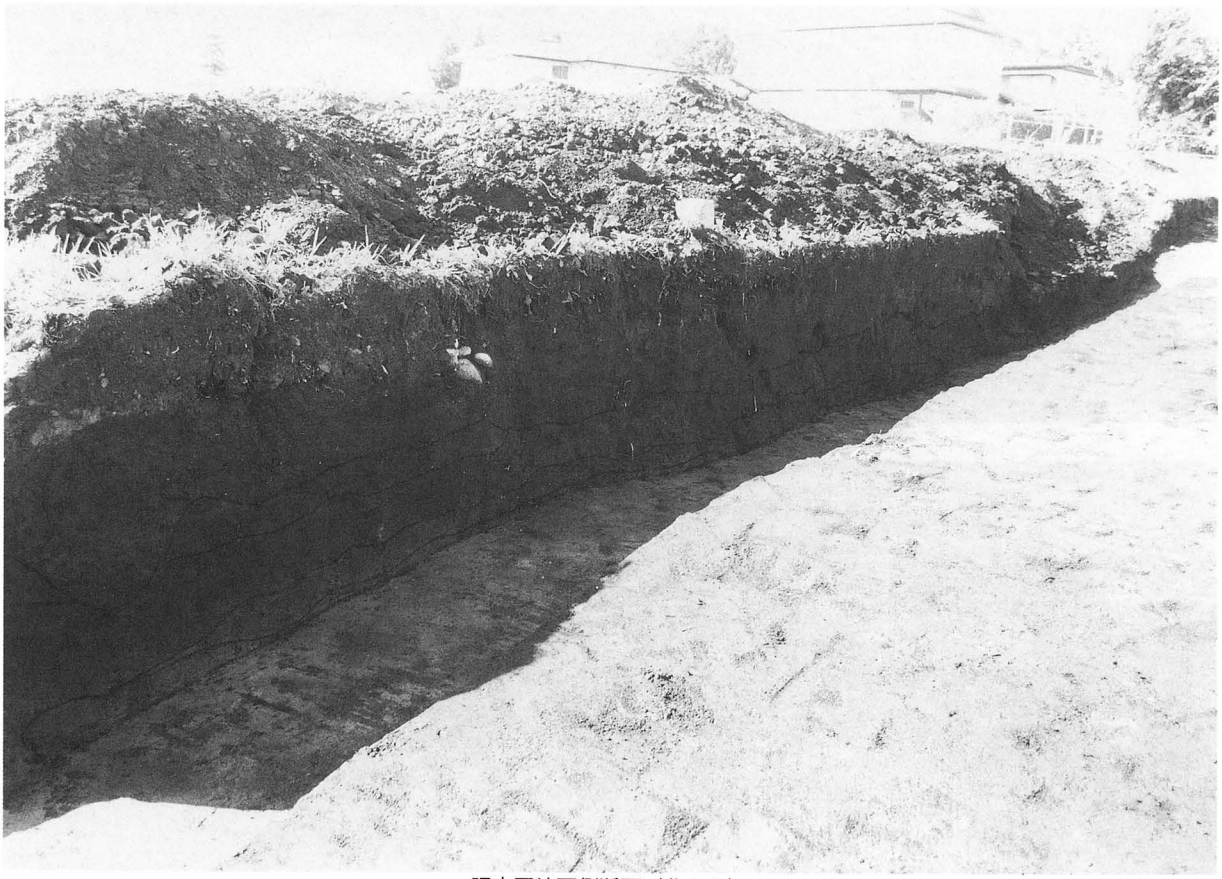
調査区北端（北から）

調査区中央（北から）

写真図版２　調査前状況



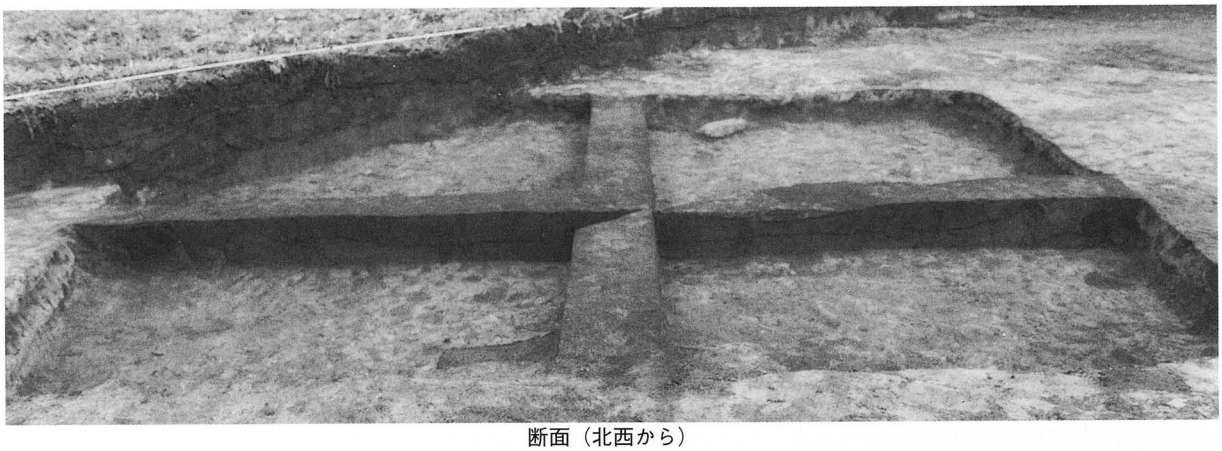
調査区境東側断面（北西から）



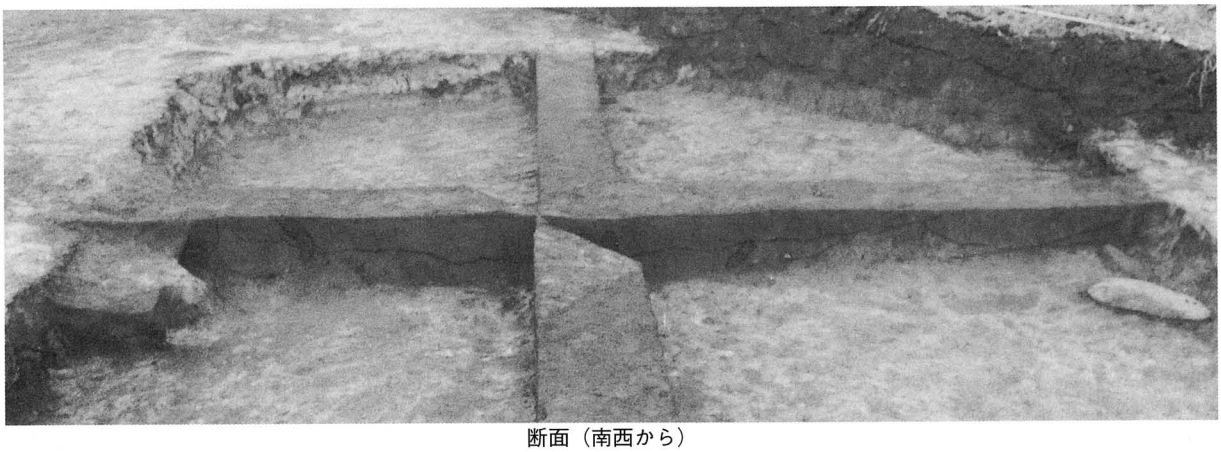
調査区境西側断面（北から）

写真図版３　基本層序（微低地）

全景（南東から）

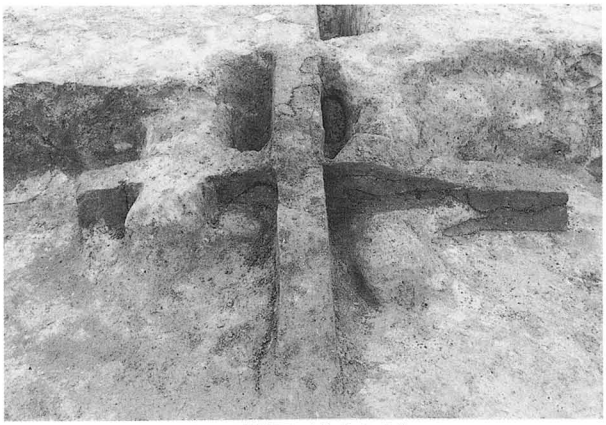


断面（北西から）



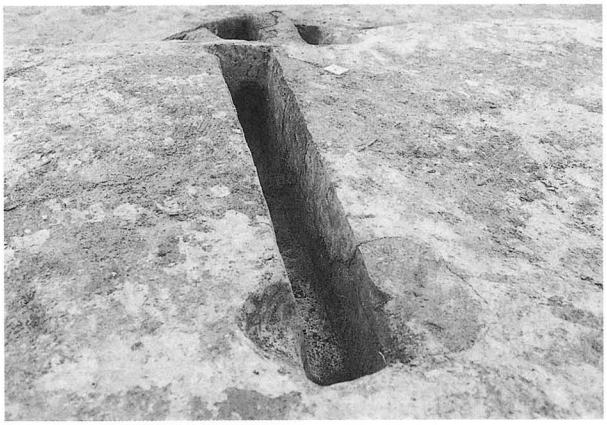
断面（南西から）

写真図版 4　RA066（1）〈第23次〉



カマド断面（南東から）

カマド断面（北東から）



煙道・煙出し断面（北西から）

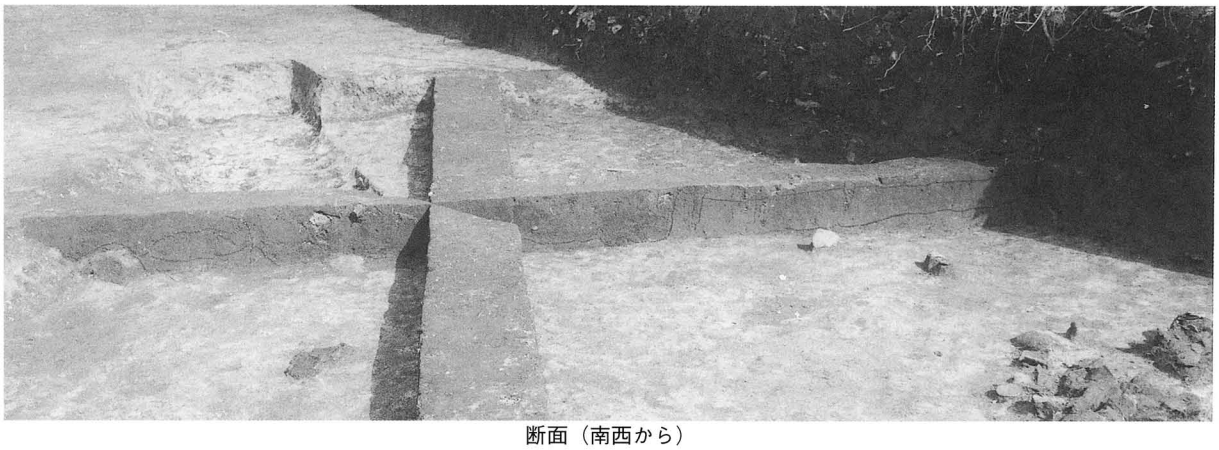
カマド袖部断面（南東から）

貼床断面（南西から）

貼床断面（北西から）

写真図版５　RA066（2）〈第23次〉

全景（南東から）



断面（南西から）

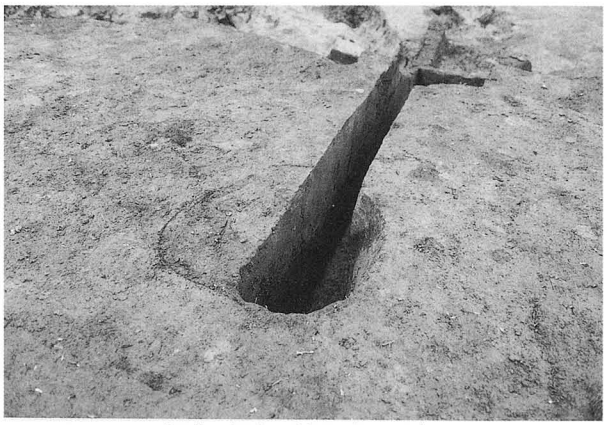
断面（北西から）

写真図版 6　RA068（1）〈第23次〉

カマド（南東から）

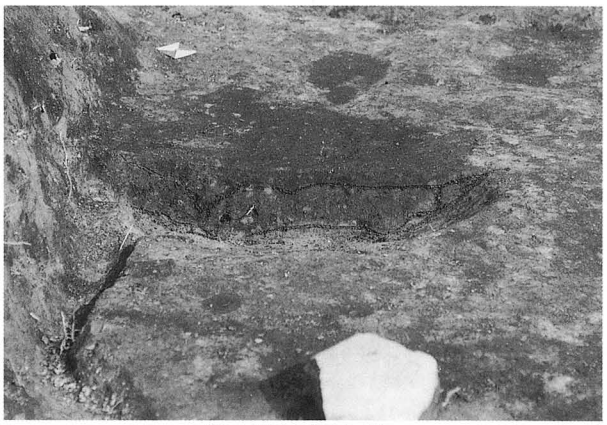
カマド断面（南東から）

カマド断面（北東から）

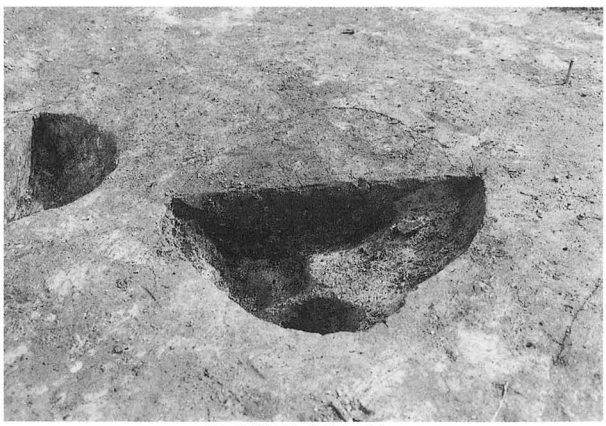


煙道・煙出し断面（西から）

カマド袖部断面（南から）



Pit 1 断面（南から）



Pit 3 断面（西から）

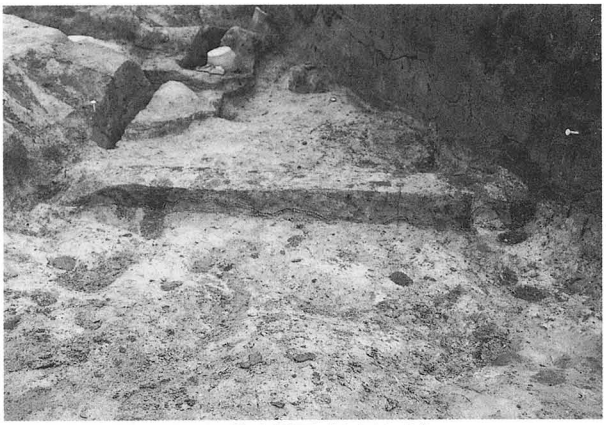
写真図版 7　RA068（2）〈第23次〉

全景（南から）

断面（南西から）

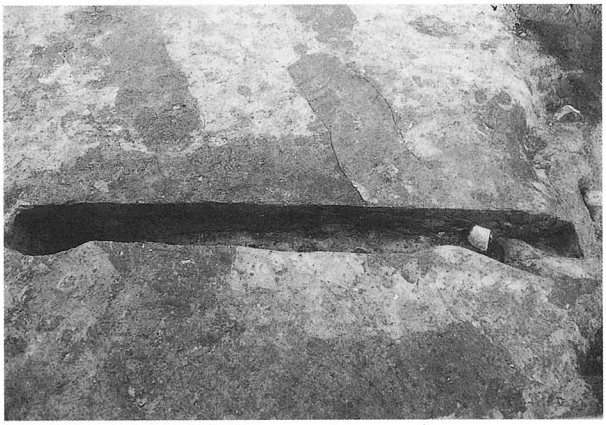
断面（西から）

写真図版 8　RA071 (1) 〈第23次〉



RA071貼床断面（南西から）

RA071完掘（南西から）



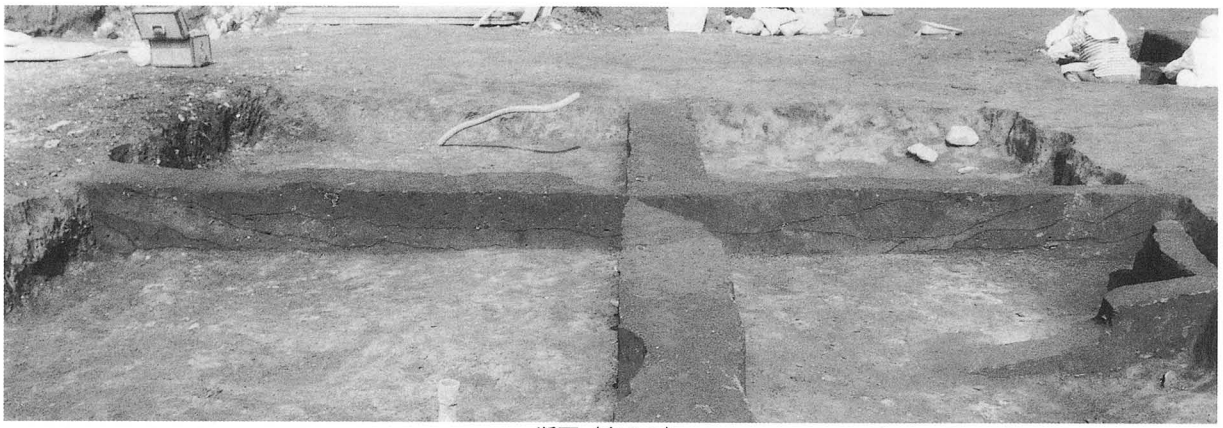
RA071煙道断面（南西から）

RA071カマド袖部断面（南から）

RA060断面（南西から）

写真図版 9　RA071（2）・RA060〈第23次〉

全景（西から）



断面（南から）

断面（西から）

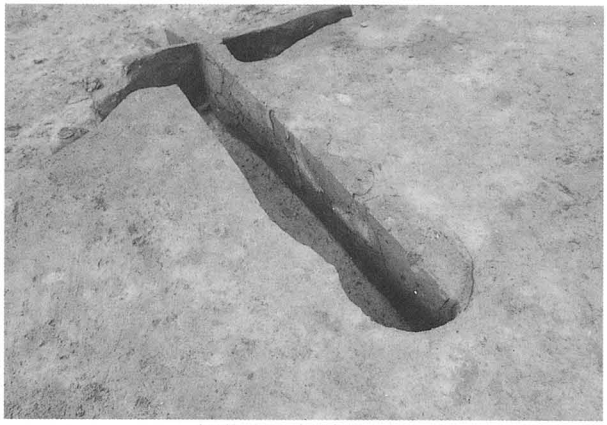
写真図版10　RA061（1）〈第23次〉

カマド（西から）

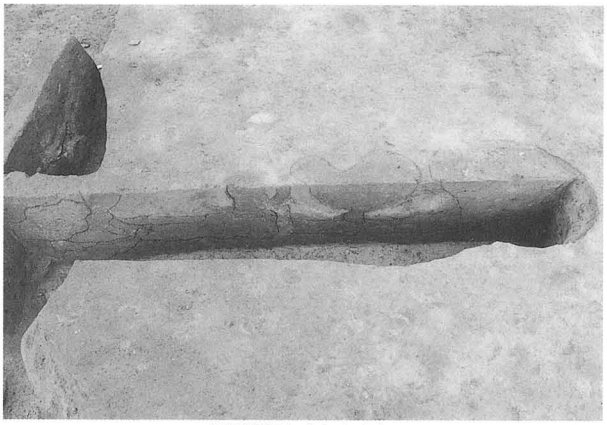
カマド袖部断面（西から）

カマド断面（西から）

カマド断面（南から）



煙道断面（南東から）

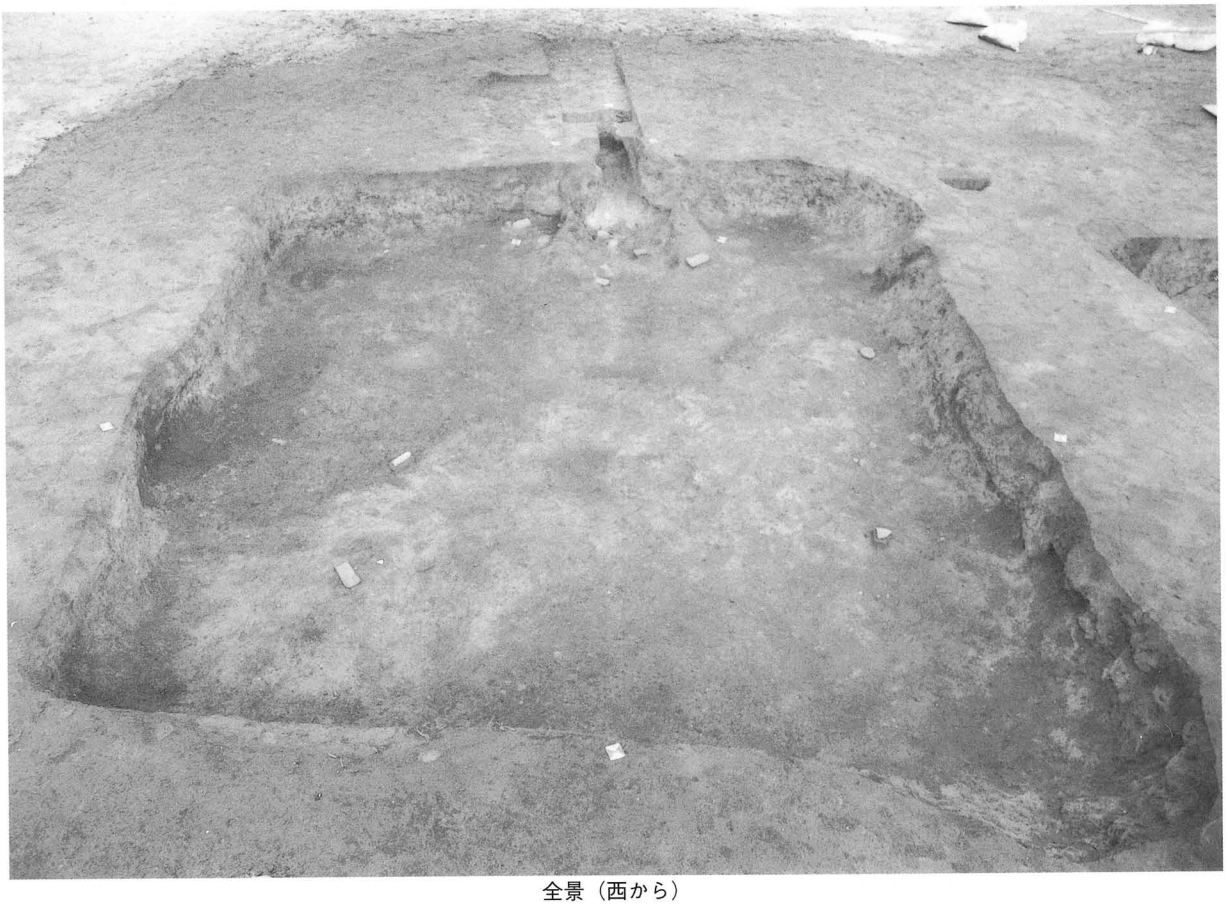


煙道断面（南から）

Pit 1 断面（北西から）

作業風景

写真図版11　RA061（2）・作業風景〈第23次〉



全景（西から）

断面（南から）

断面（西から）

写真図版12　RA062(1)〈第23次〉

東側カマド（西から）

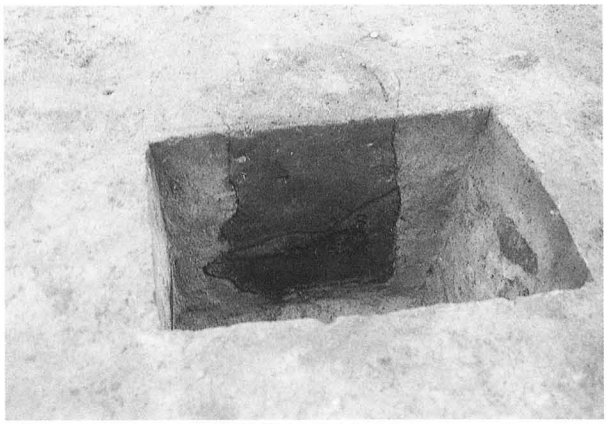
東側カマド袖部断面（西から）

東側カマド断面（西から）

東側煙道断面（東から）

南側カマド（北から）

南側煙道断面（南から）



南側煙出し（北から）

南側カマド燃焼部断面（北から）

写真図版13　RA062(2)〈第23次〉

全景（西から）

断面（南から）

写真図版14　RA064（1）・RA059〈第23次〉

断面（西から）

カマド断面（南西から）

カマド断面（西から）

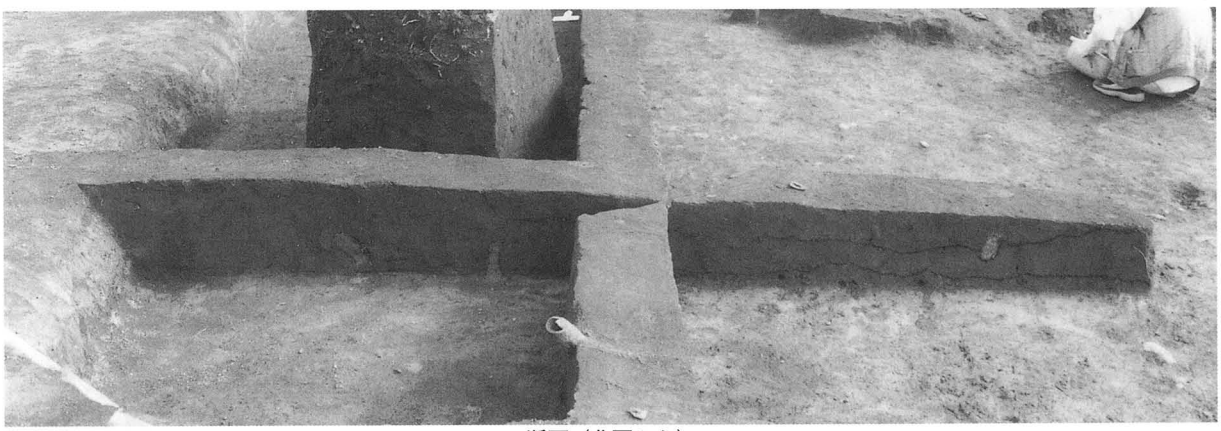
煙道断面（南西から）

北側壁撹乱（南西から）

写真図版15　RA064（2）〈第23次〉

全景（北西から）

断面（南西から）

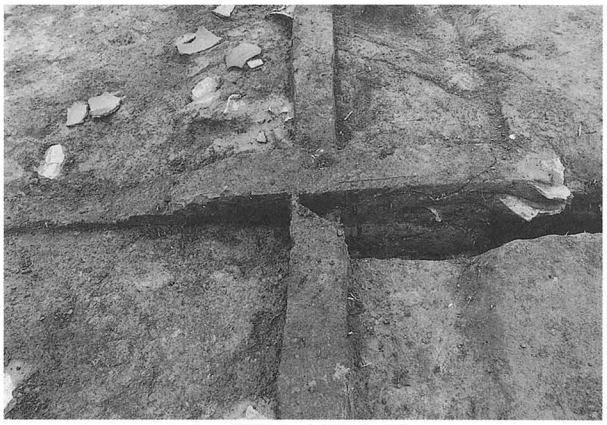


断面（北西から）

写真図版16　RA070(1)〈第23次〉

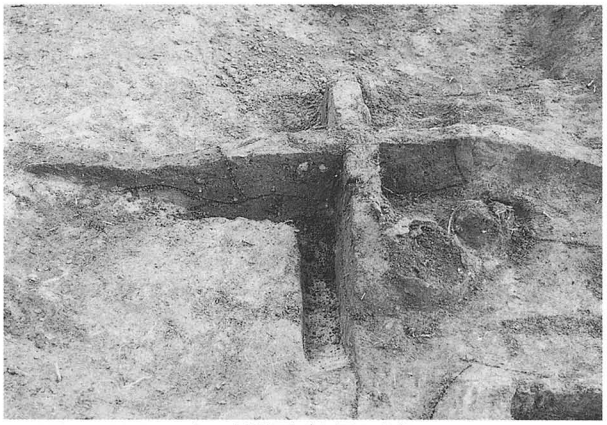
カマド（北西から）

カマド袖部断面（北西から）

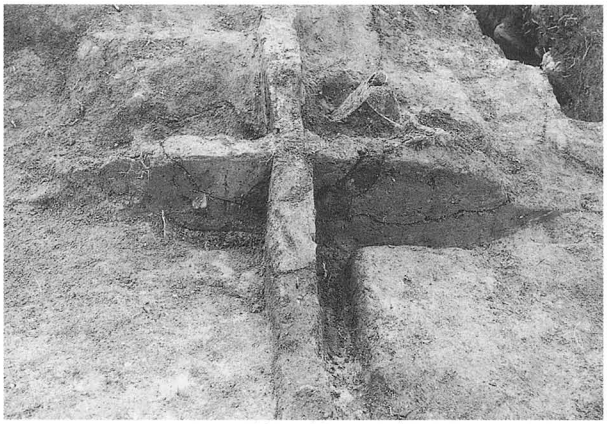


カマド断面（南西から）

カマド断面（北西から）

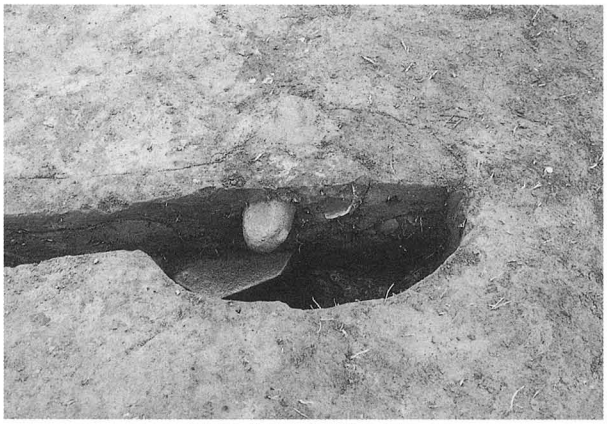


カマド断面（南西から）



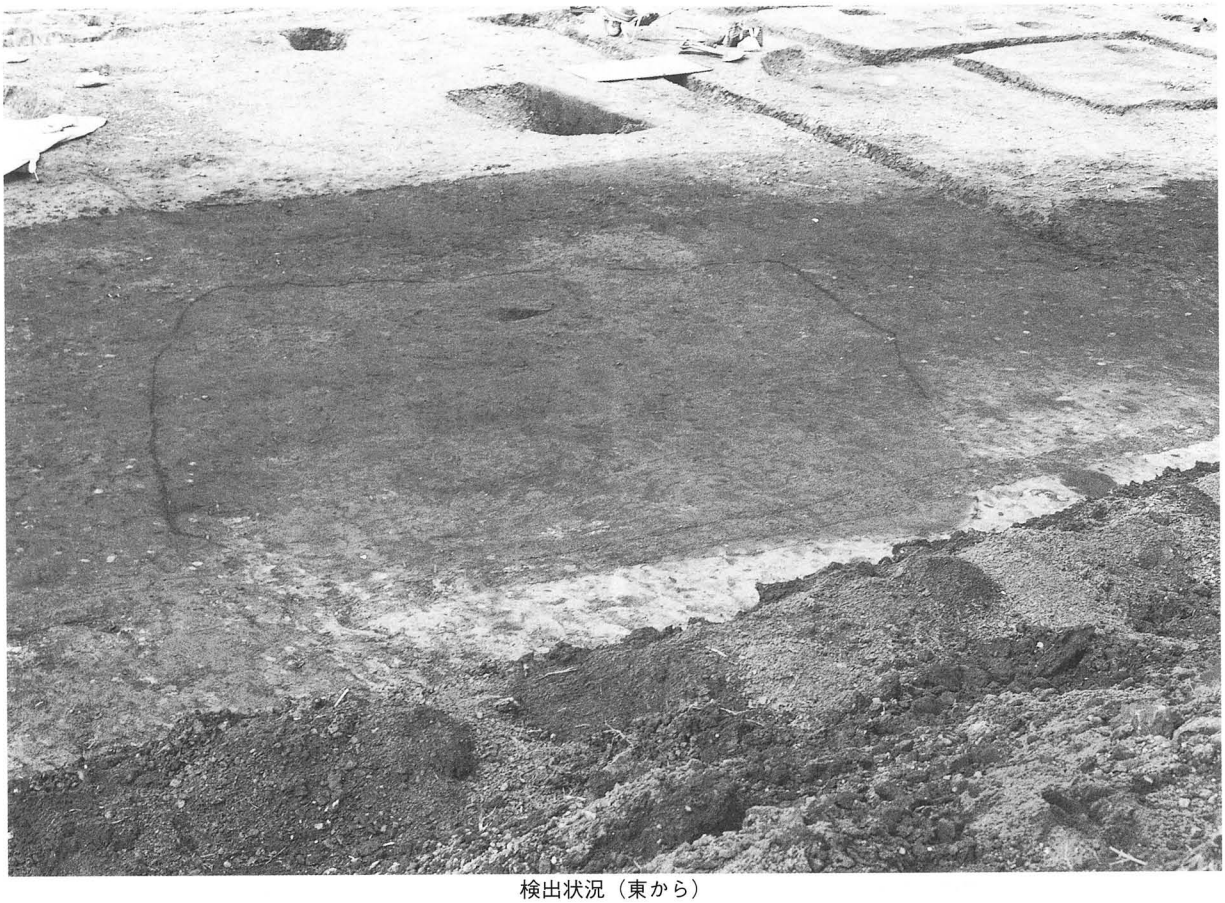
カマド断面（北西から）

煙道断面（南西から）



煙出し断面（南西から）

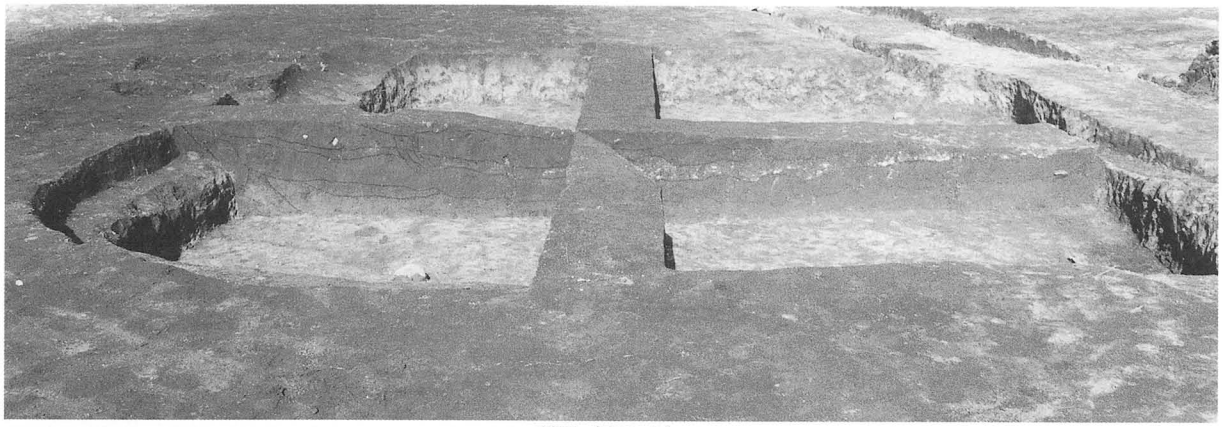
写真図版17　RA070(2)〈第23次〉



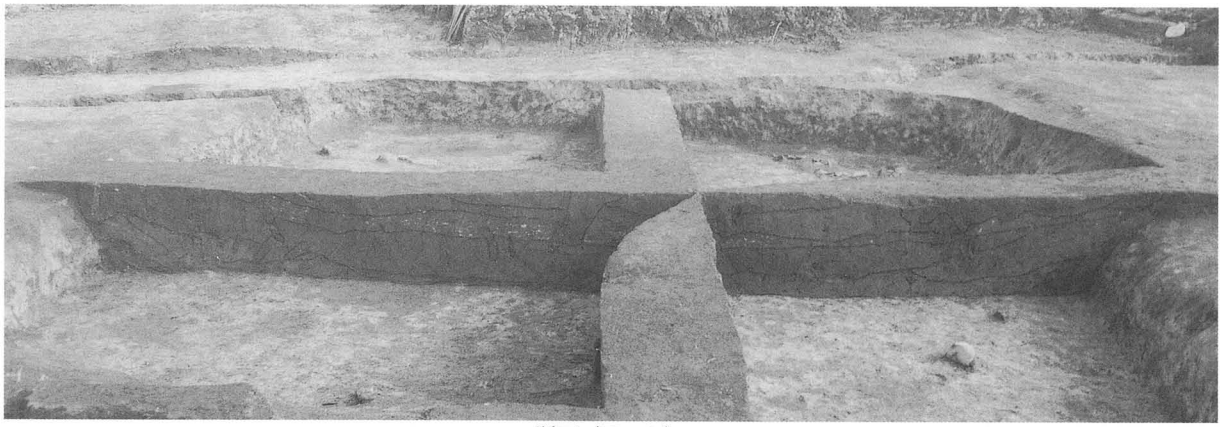
検出状況（東から）

全景（東から）

写真図版18　RA067(1)〈第24次〉

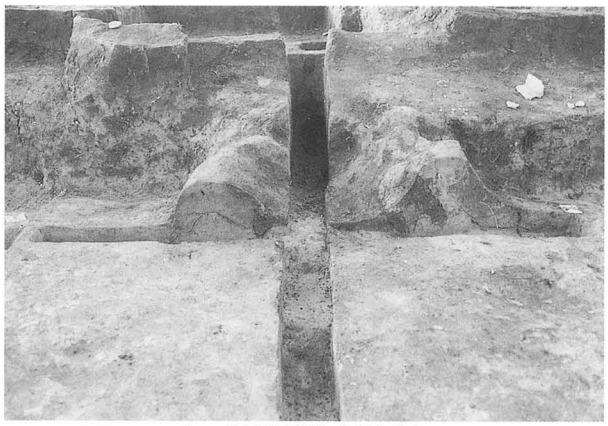


断面（南から）



断面（西から）

カマド断面（東から）

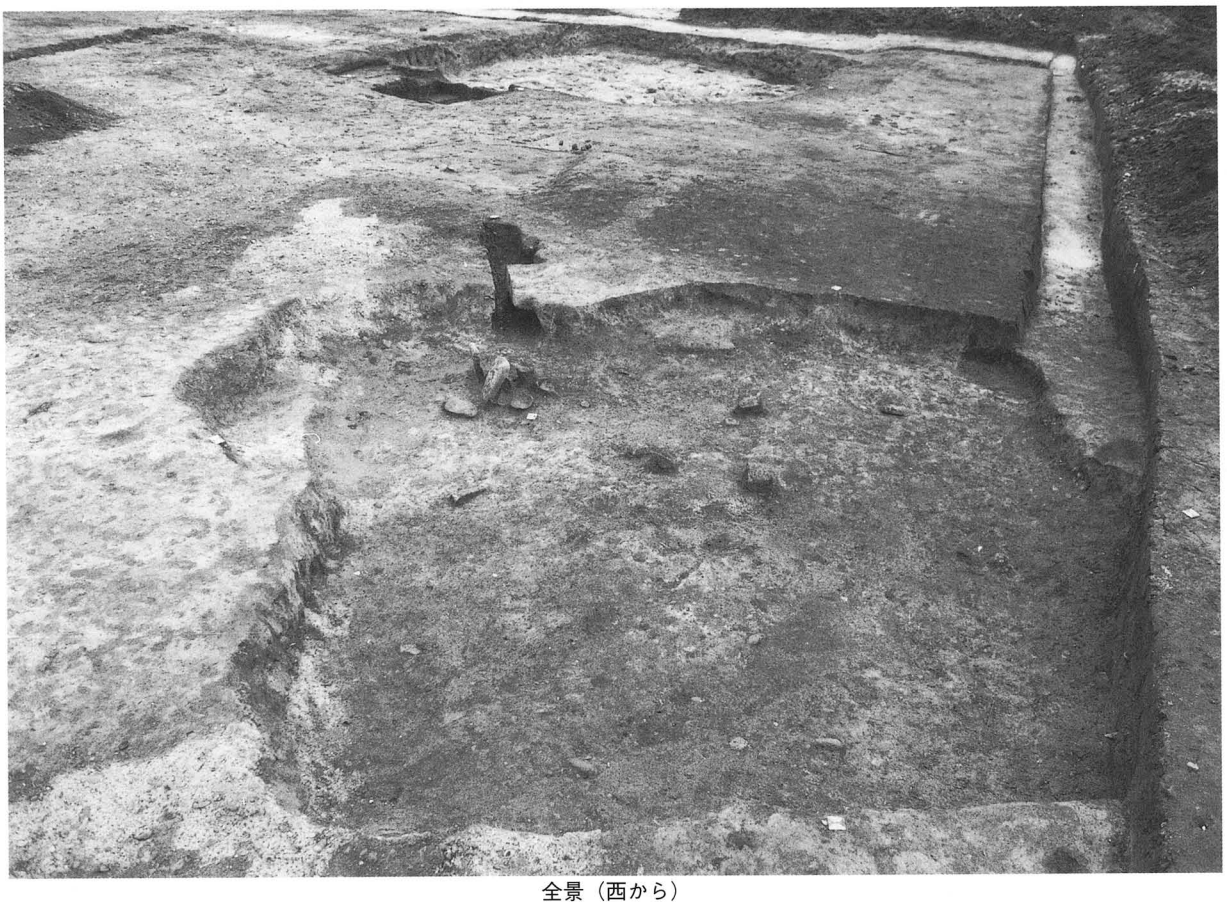


カマド袖部断面（東から）

南東隅土器出土状況

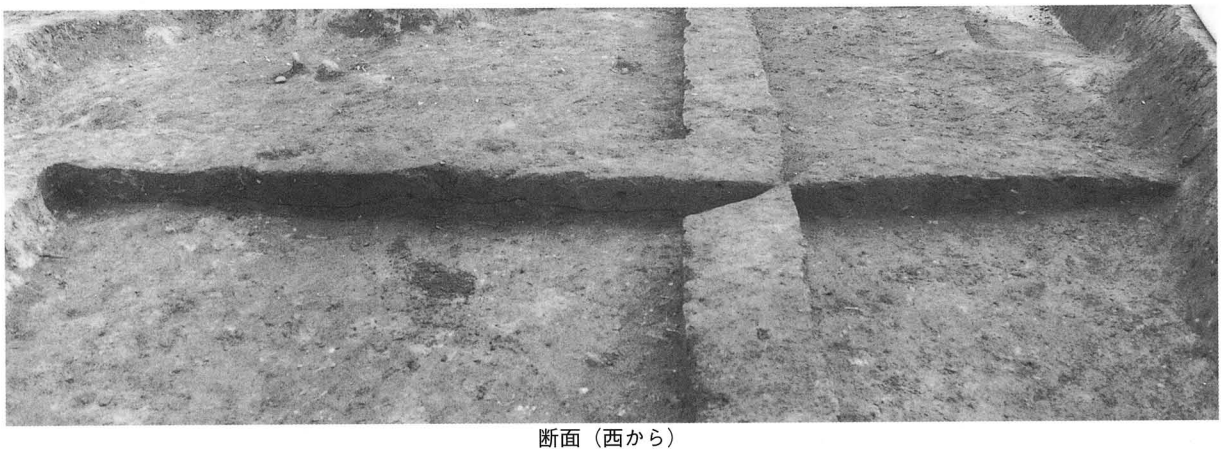
南東隅石器出土状況

写真図版19　RA067（2）〈第24次〉



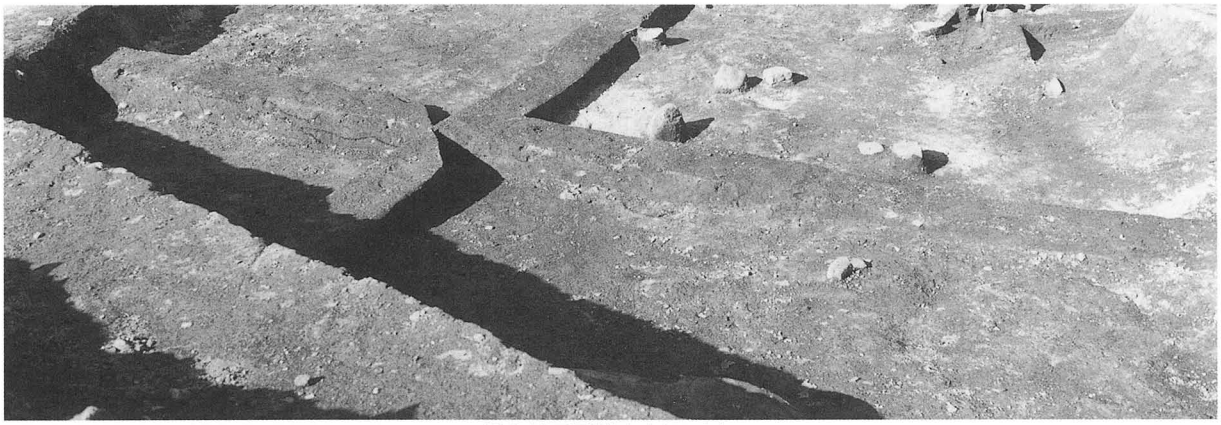
全景（西から）

断面（南から）

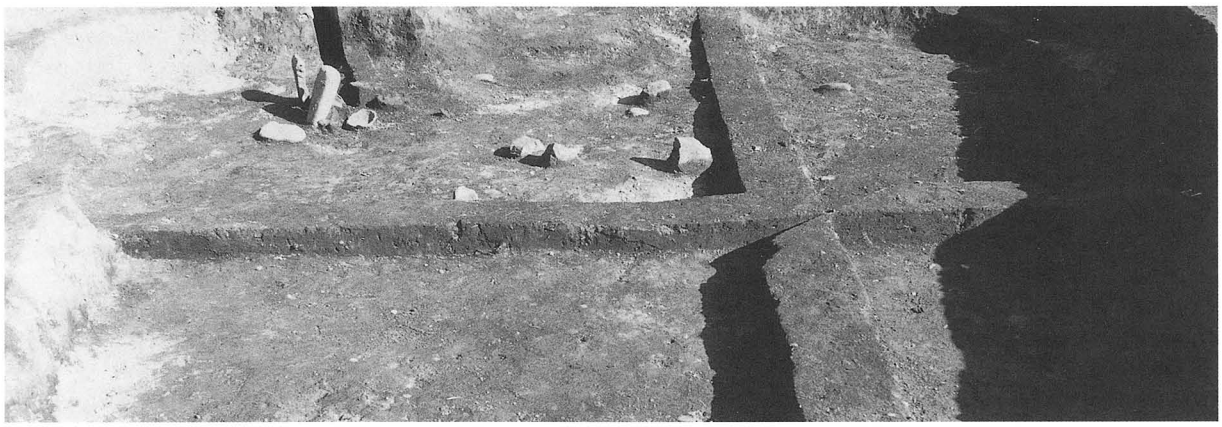


断面（西から）

写真図版20　RA063(1)〈第24次〉



埋土最下層断面（南から）



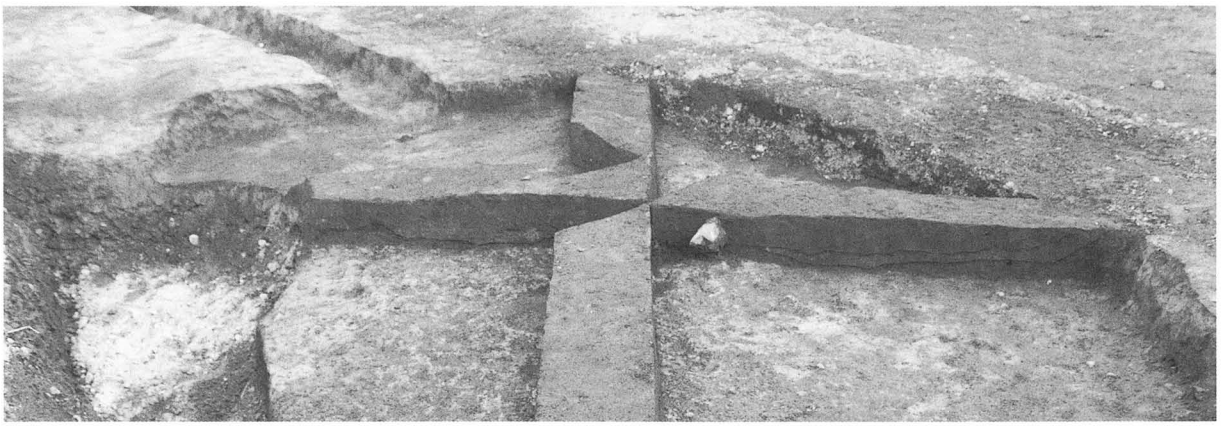
埋土最下層断面（西から）

煙道断面（西から）

写真図版21　RA063（2）〈第24次〉

全景（東から）

断面（南西から）



断面（北西から）

写真図版22　RA065〈第24次〉

全景（南西から）

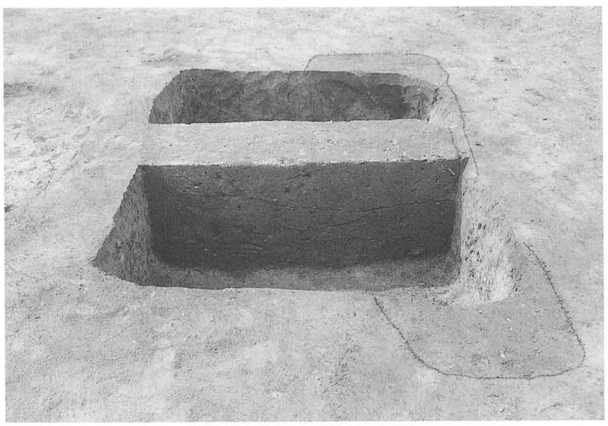
断面（南から）

煙道断面（南西から）

カマド脇遺物出土状況（西から）

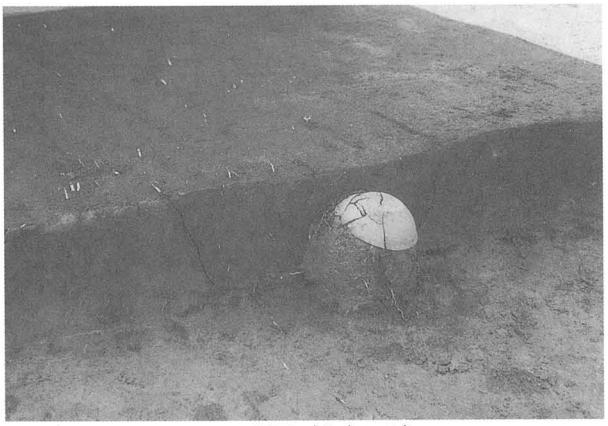
写真図版23　RA069〈第24次〉

RD104全景（東から）

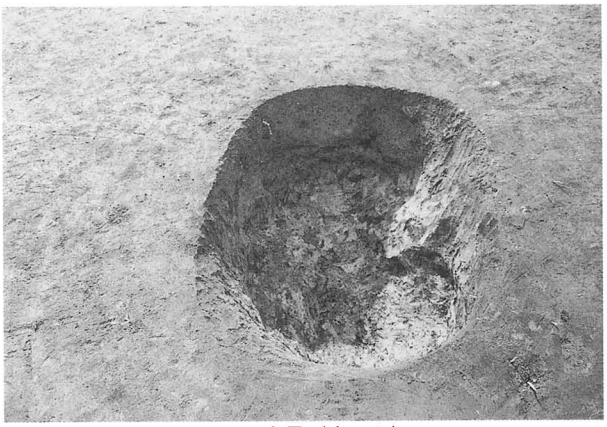


RD104断面（東から）

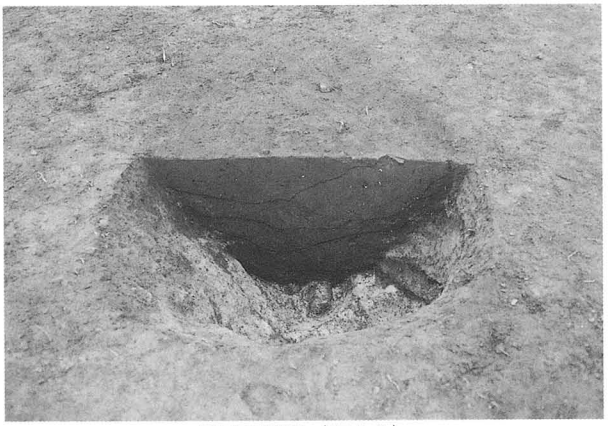
RD103断面（南東から）



RD106断面（北東から）

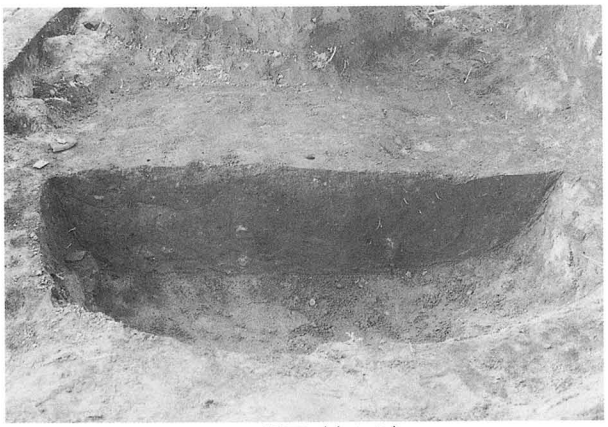


RD105全景（東から）



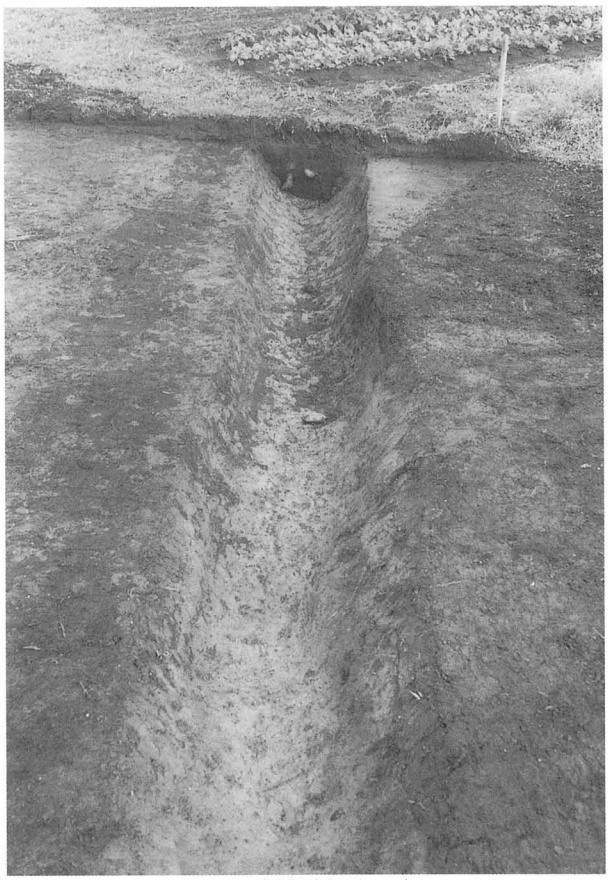
RD105断面（西から）

RD108全景（東から）



RD108断面（東から）

写真図版24　RD103～106・108〈第23次〉



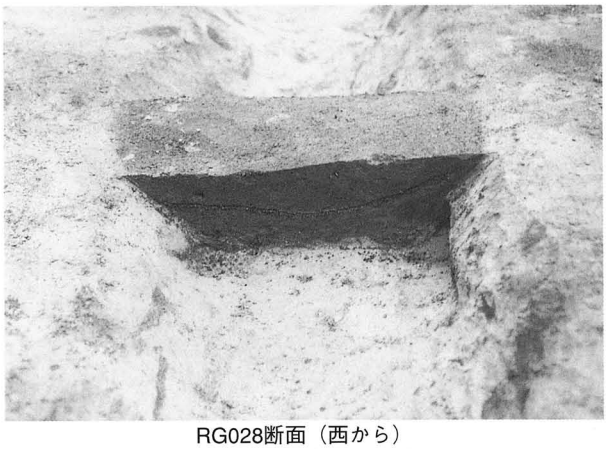
RG024全景（南西から）

RG024断面（西から）

RD107断面（東から）

RG027・028全景（西から）

RG027断面（西から）



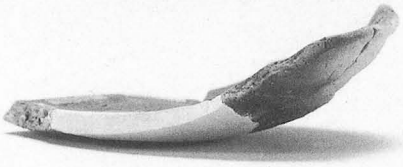
RG028断面（西から）

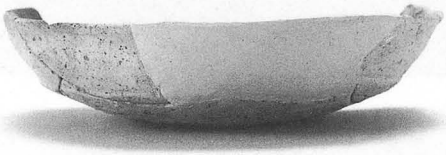
RG029断面（南から）

写真図版25　RG024〈第23次〉・027～029・RD107〈第24次〉

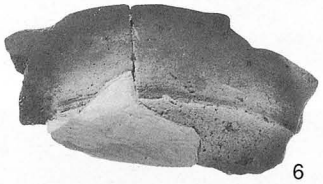
1

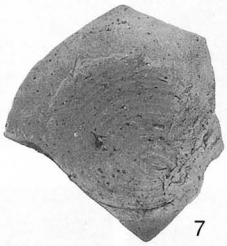
2


3

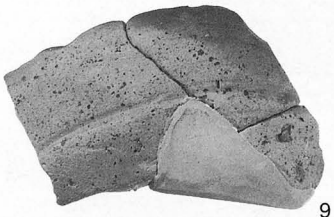

4

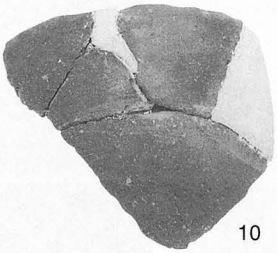
5

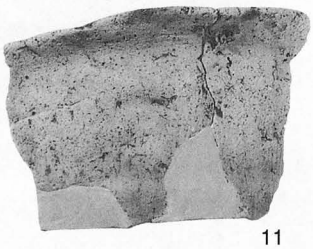

6


7

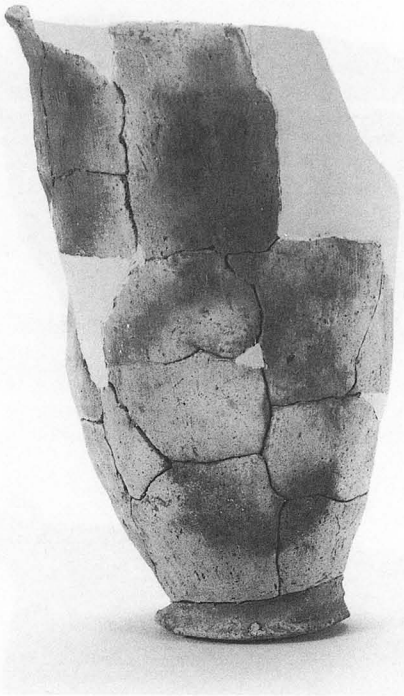
8


9


10

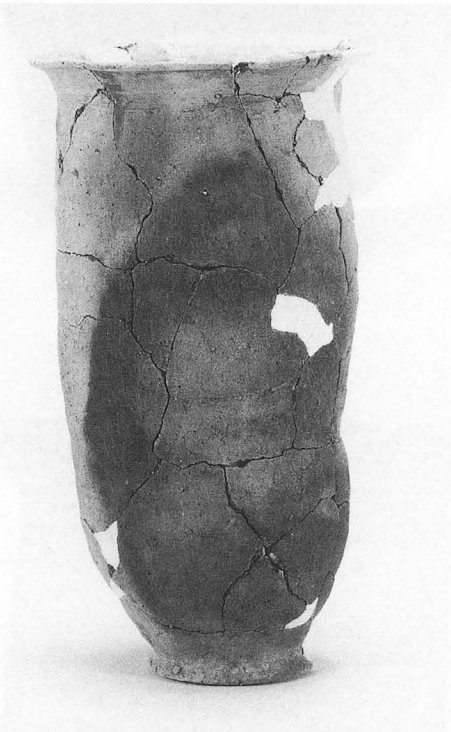

11

写真図版26　RA066・068(1)出土遺物〈第23次〉



12

13

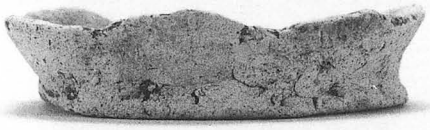


14

15

16

写真図版27　RA068(2)出土遺物〈第23次〉



17

18

19

20

21

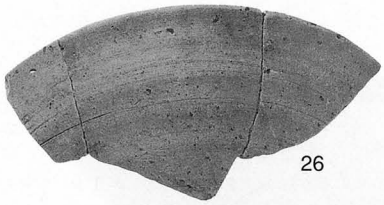
22

写真図版28　RA068（3）出土遺物〈第23次〉

23

24

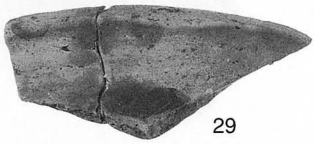
25



26

27

28



29

30

31

32

写真図版29　RA071〈第23次〉・067(1)出土遺物〈第24次〉

33

34

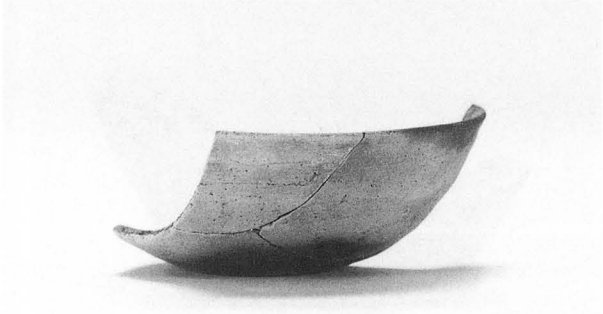
35

36

37

38

39

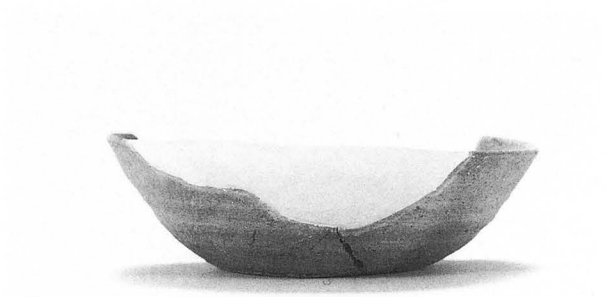


40

写真図版30　RA067(2)〈第24次〉・060・061(1)出土遺物〈第23次〉

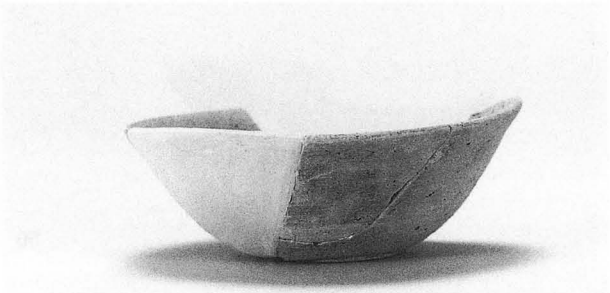
41

42

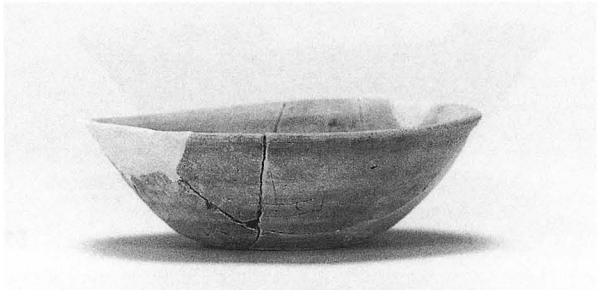


43

44



45

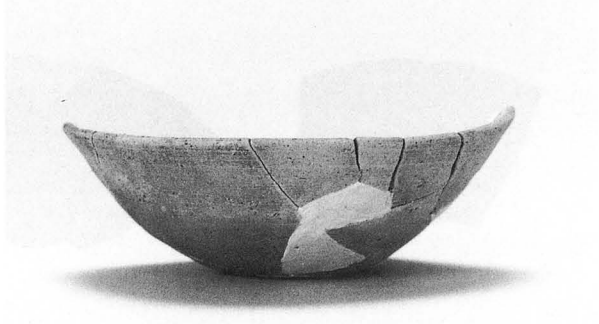


46

47

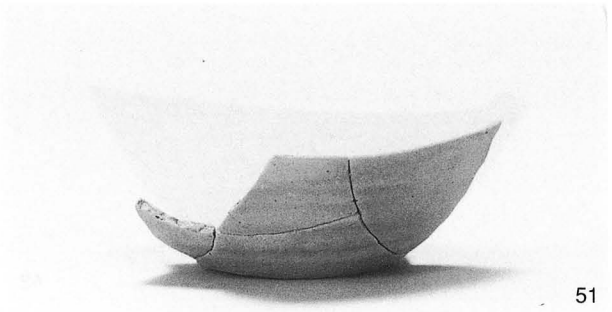
48

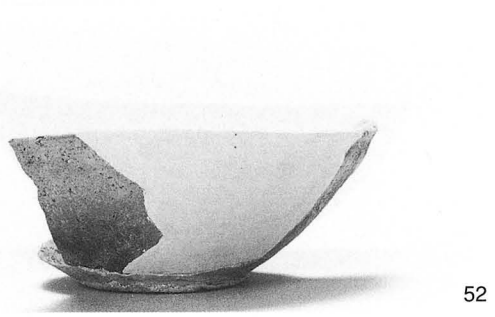
49

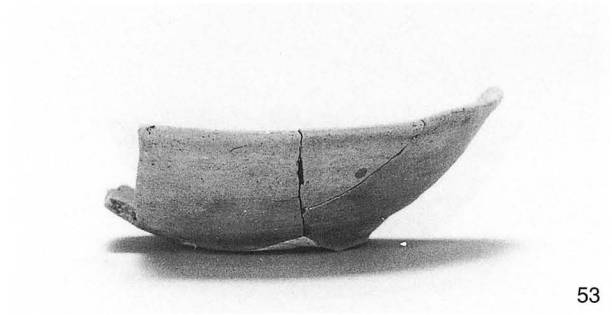


50

写真図版31　RA061（2）出土遺物〈第23次〉

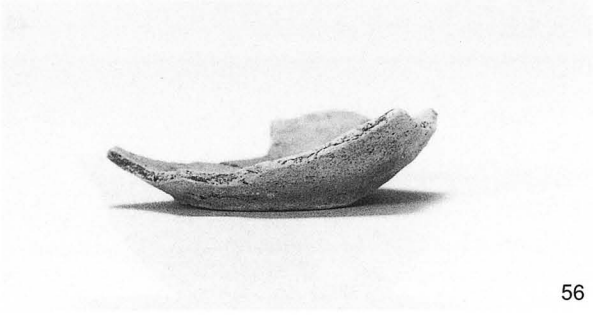

51


52


53

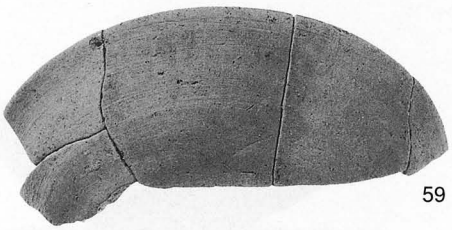
54

55

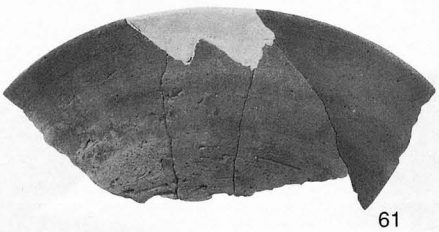

56

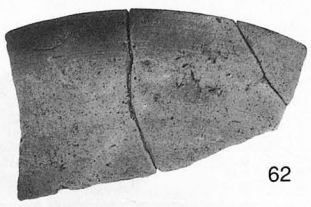
57

58

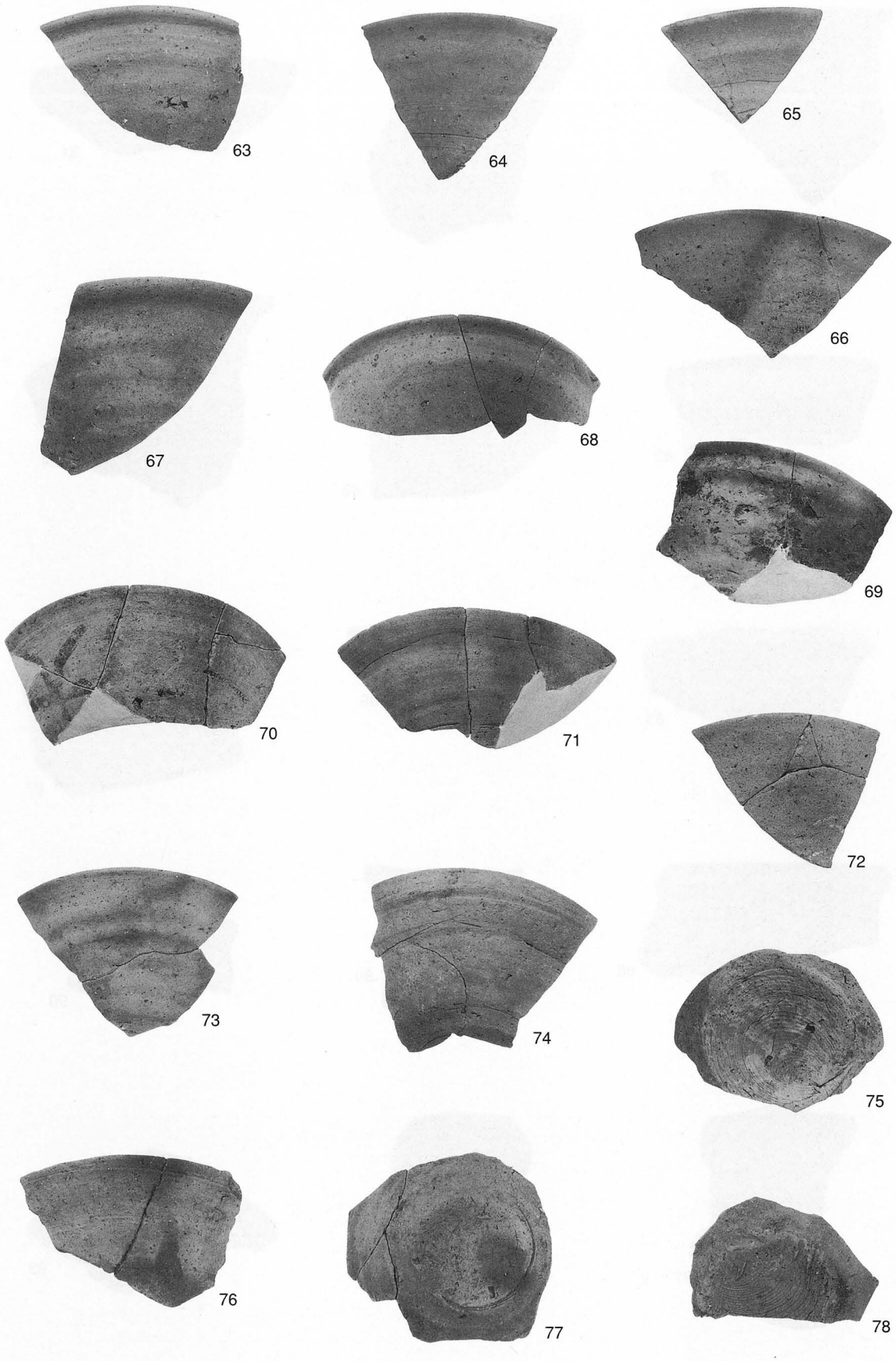

59

60

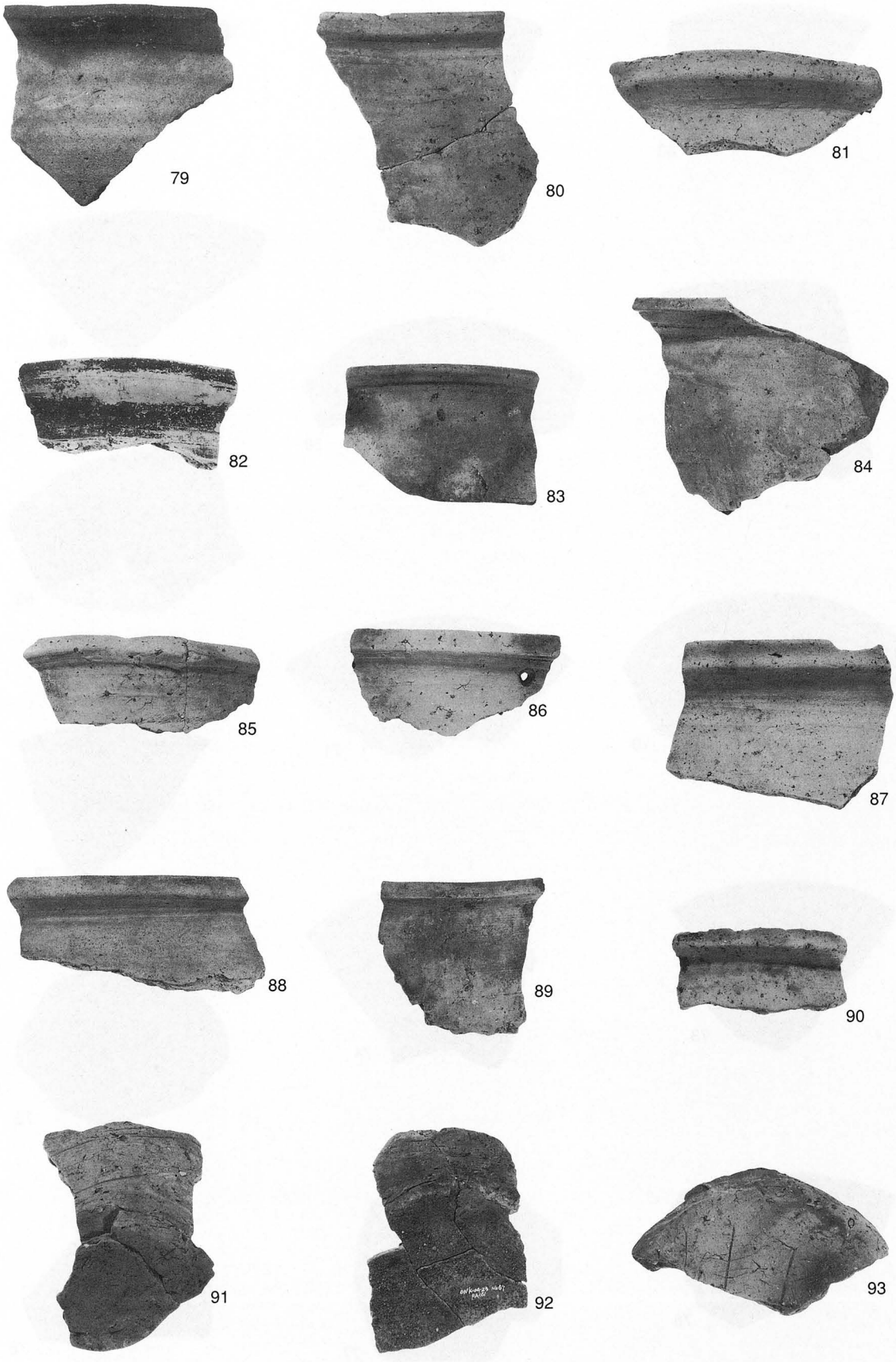

61


62

写真図版32　RA061（3）出土遺物〈第23次〉

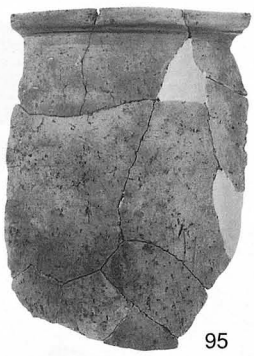


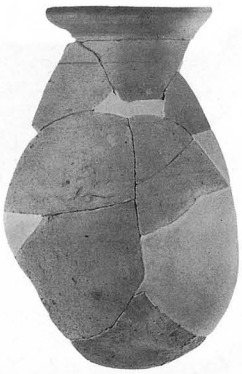
写真図版33　RA061（4）出土遺物〈第23次〉



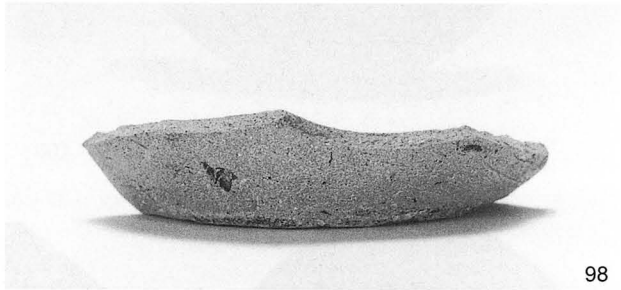
写真図版34　RA061（5）出土遺物〈第23次〉

94


95

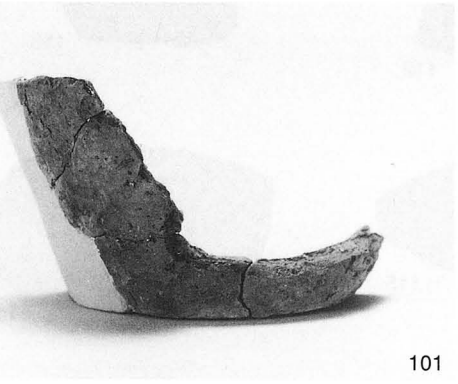

96

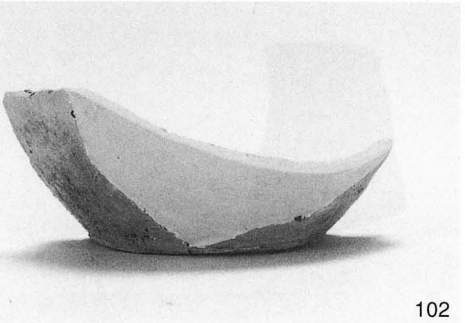
97


98

99

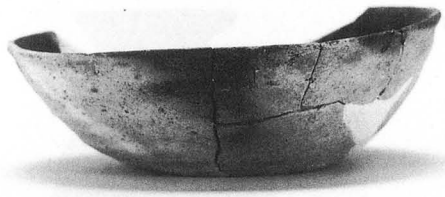
100


101


102

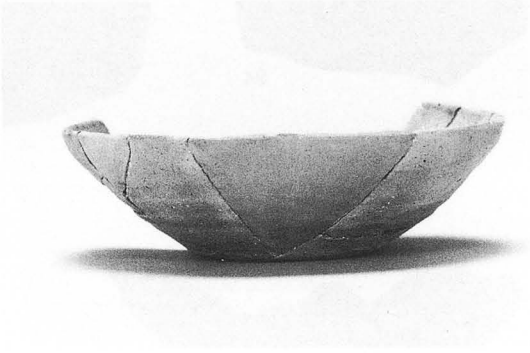
103

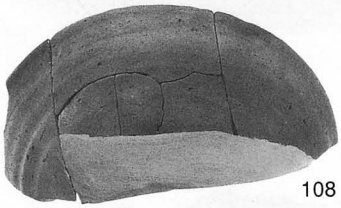
写真図版35　RA061(6)出土遺物〈第23次〉


104

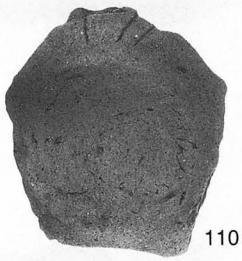
105

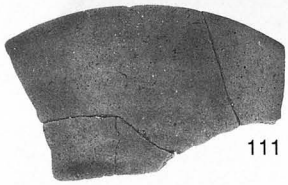
106

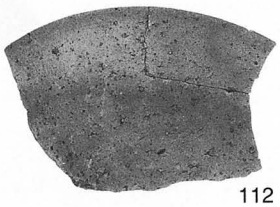

107

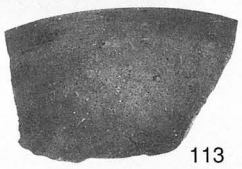

108

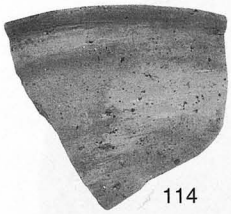
109

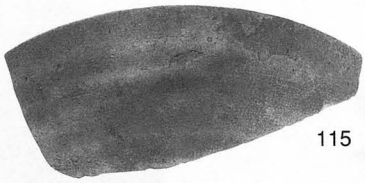

110

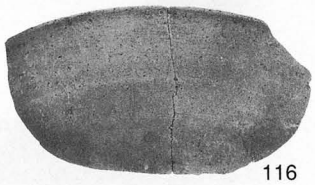

111

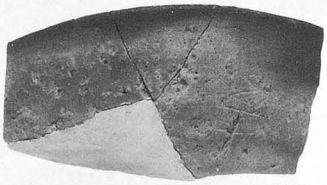

112


113


114


115

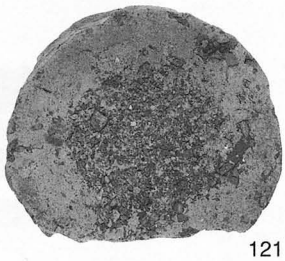

116


117

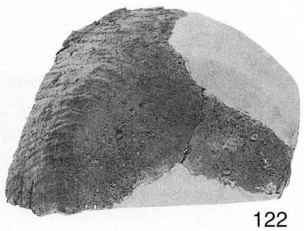
118

写真図版36　RA062（1）出土遺物〈第23次〉

119

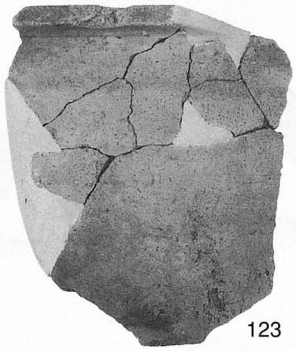


121



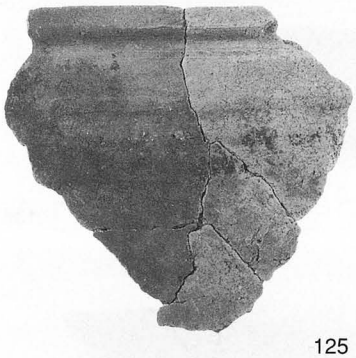
122

120

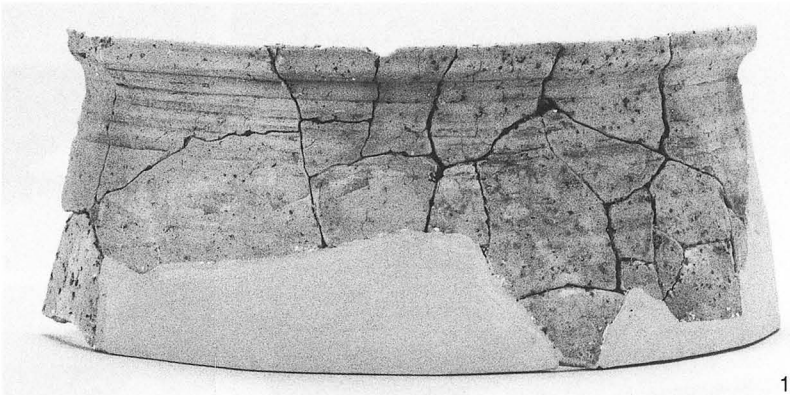


123

124

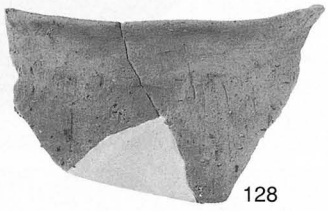


125



126

127



128

129

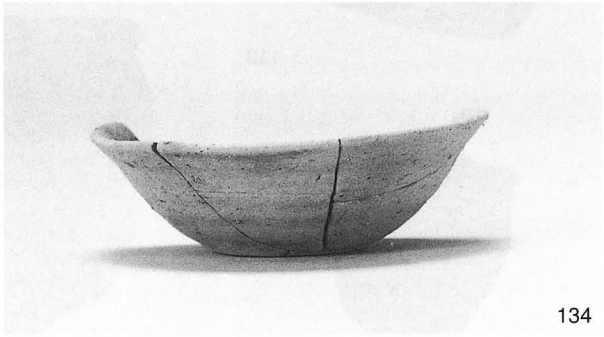
130

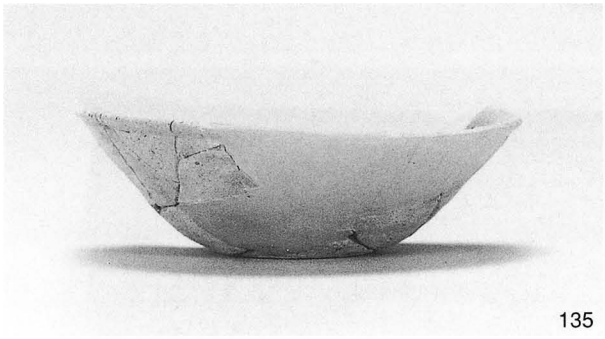
写真図版37　RA062(2)出土遺物〈第23次〉

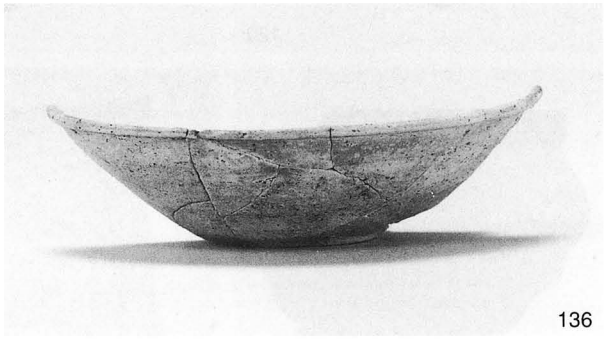
131

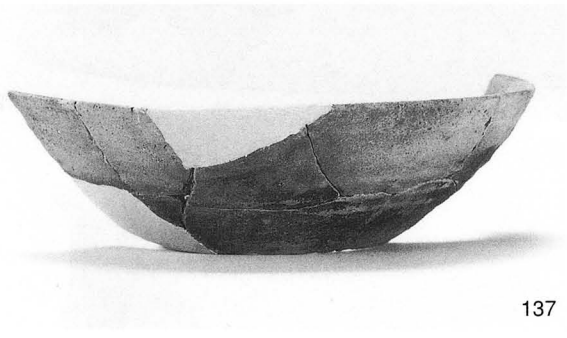
132

133


134

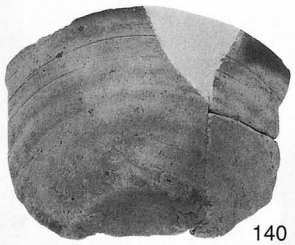

135

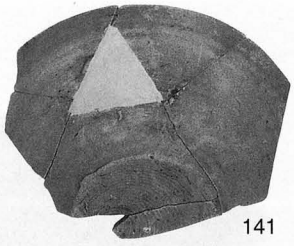

136


137

138

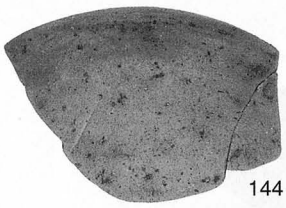
139


140

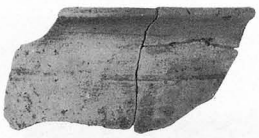

141

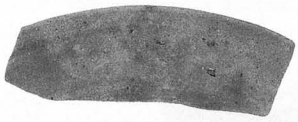
写真図版38　RA064（1）出土遺物〈第23次〉

142


144

145


143


146

147

148

150

149

151

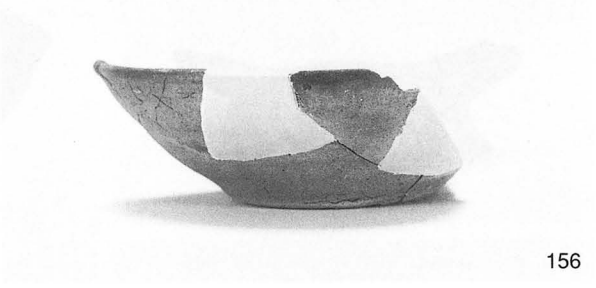
152

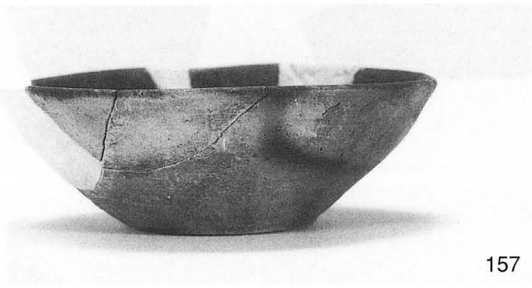
153

154

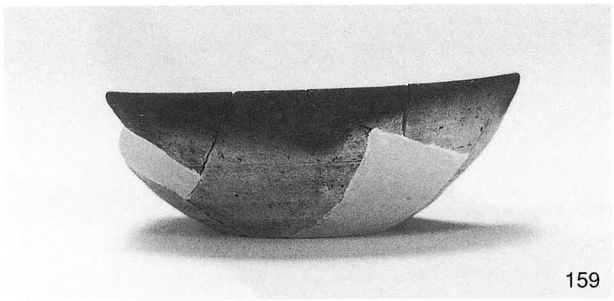
写真図版39　RA064（2）出土遺物〈第23次〉

155


156

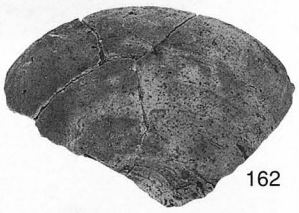

157

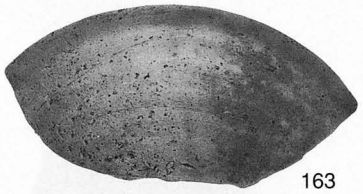
158

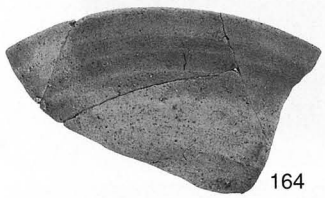

159

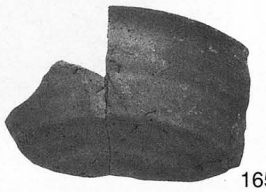
160

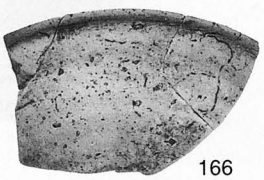
161

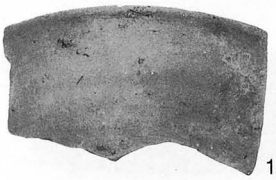

162

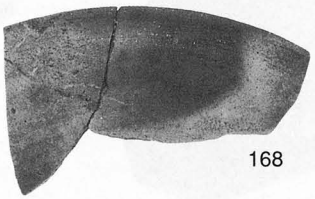

163

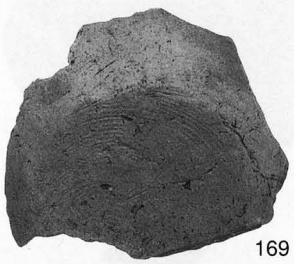

164


165

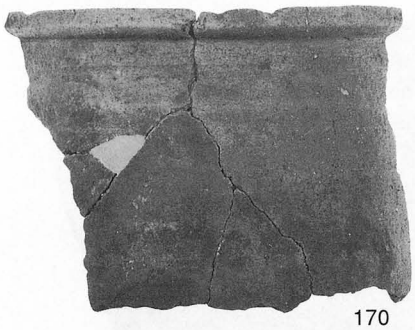

166

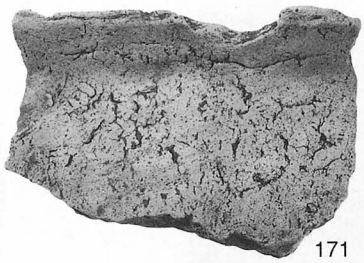

167

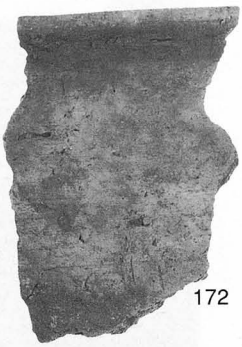

168

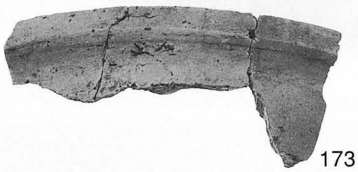

169

写真図版40　RA070(1)出土遺物〈第23次〉

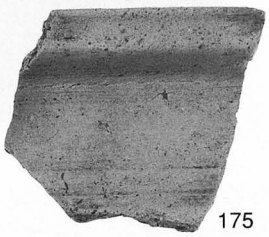

170


171


172


173

174


175

176

176

177

178

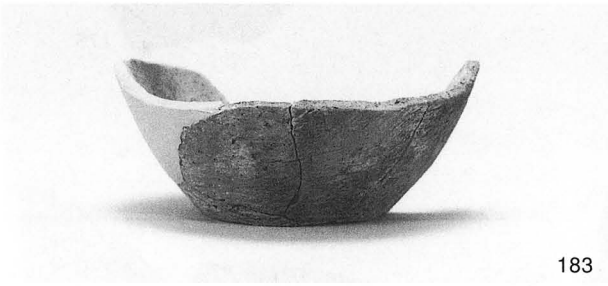
179

180

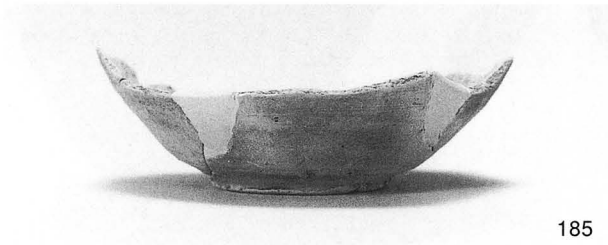
写真図版41　RA070（2）出土遺物〈第23次〉

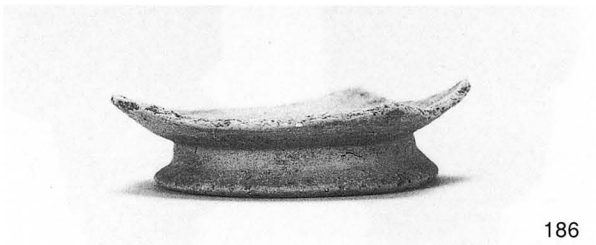
181

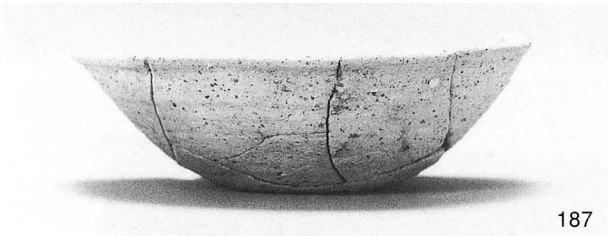
182


183

184


185


186


187

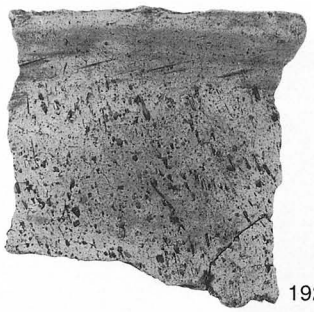
188

189

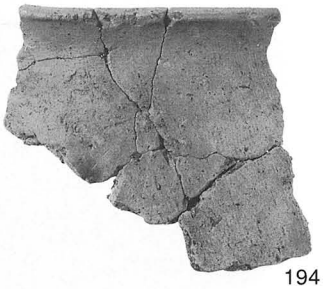
190

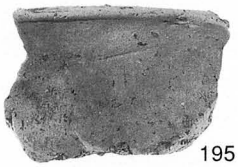
191

写真図版42　RA070(3)〈第23次〉・063(1)出土遺物〈第24次〉

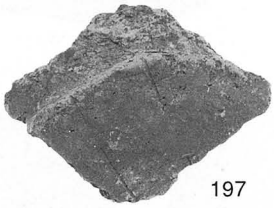

192

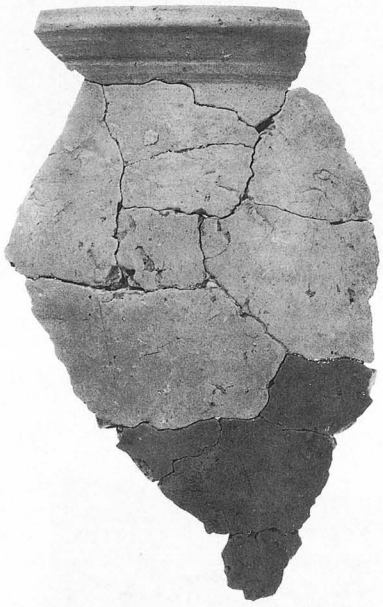
193


194

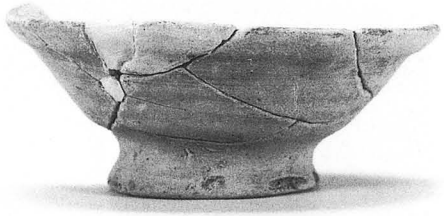

195

196

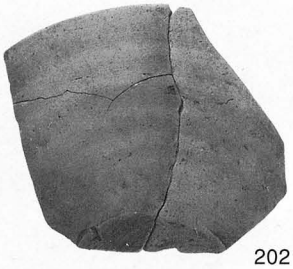

197

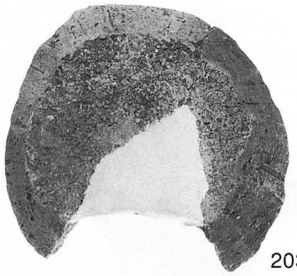

198

199

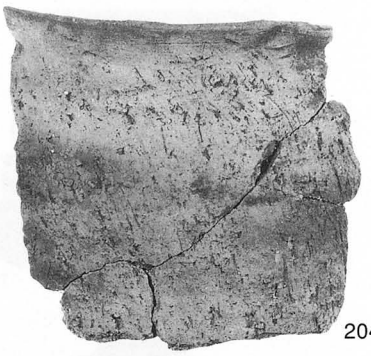

200

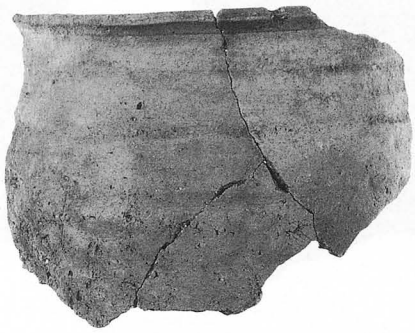
201

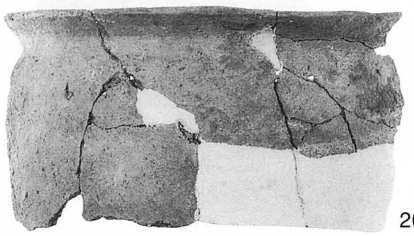

202

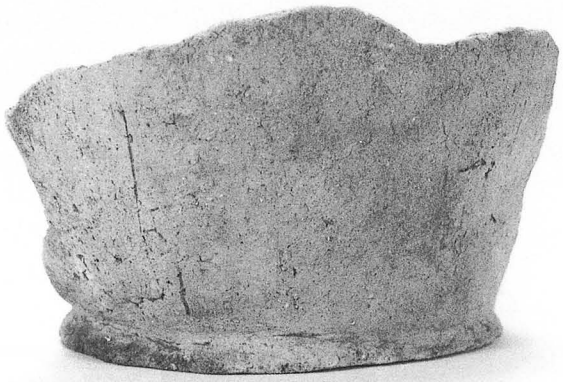

203

写真図版43　RA063（2）・069（1）出土遺物〈第24次〉

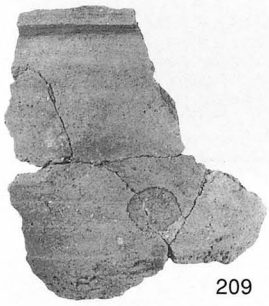

204

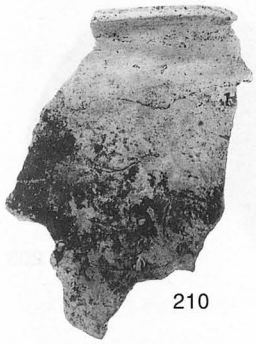

206


205


208

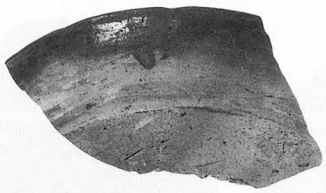
207


209


210

211

写真図版44　RA069(2)出土遺物〈第24次〉

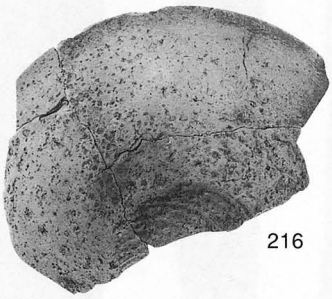


212

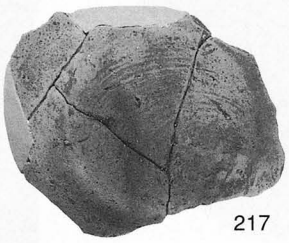
213

214

215

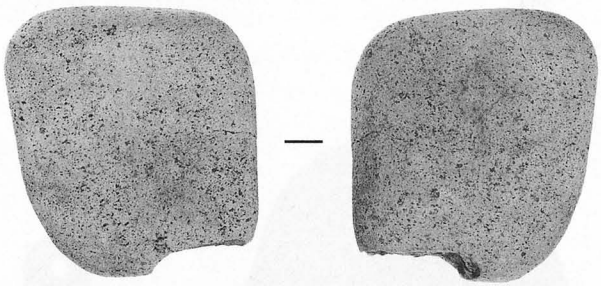


216

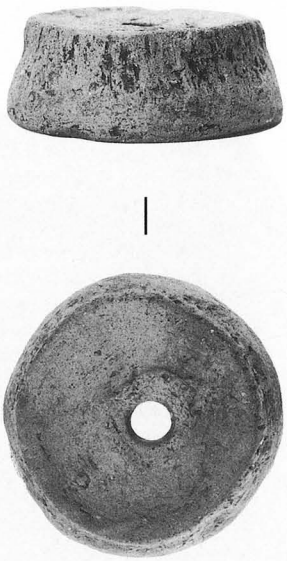


217

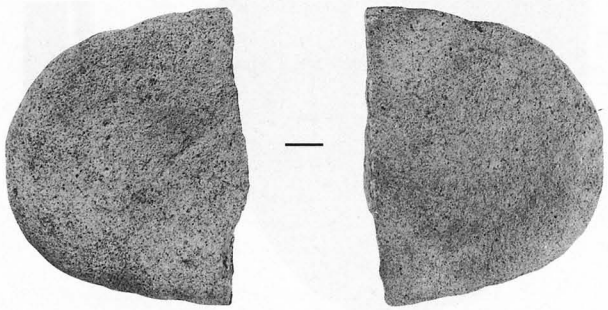
218



219

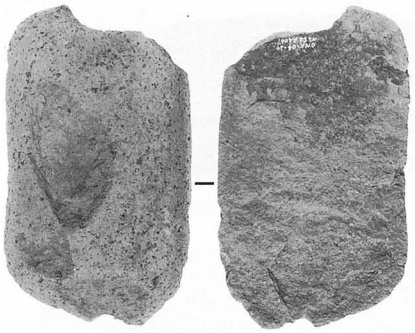


221

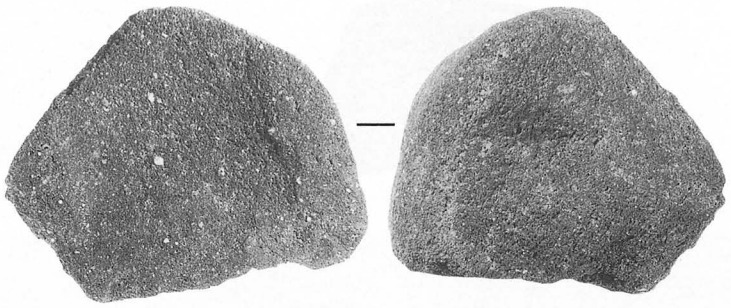


220

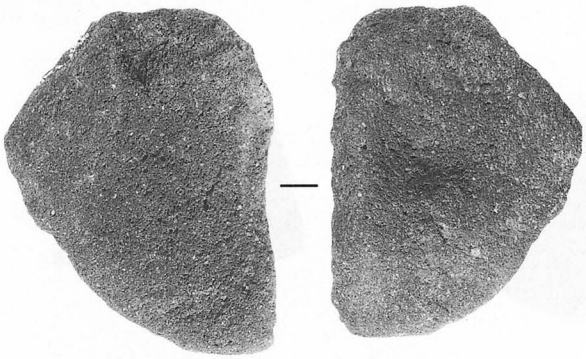
写真図版45　土坑・遺構外出土土器、RA068出土石器、RA071出土土製品



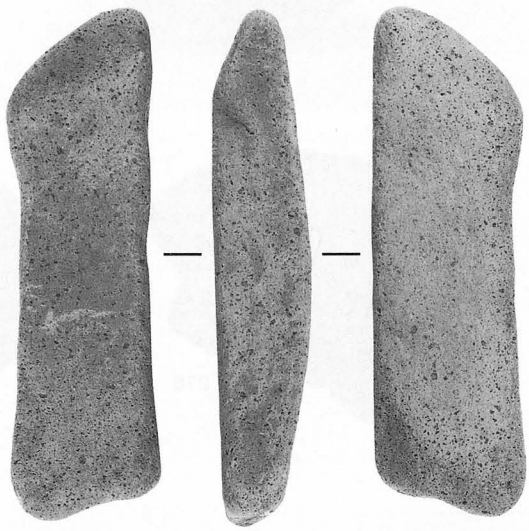
222



223



224

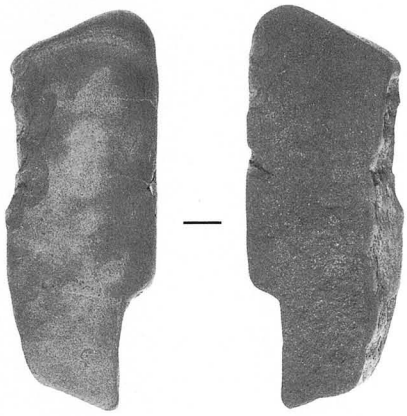


225

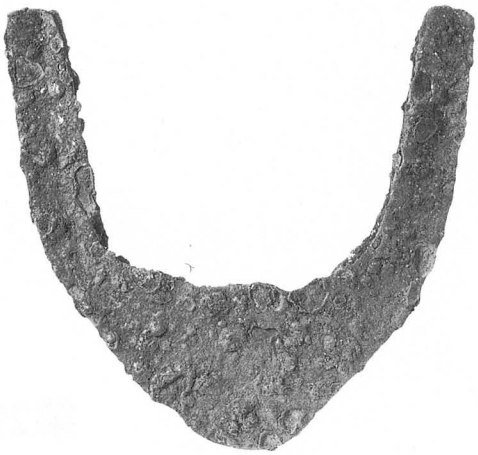
226

227

写真図版46　RA067出土石器・石製品



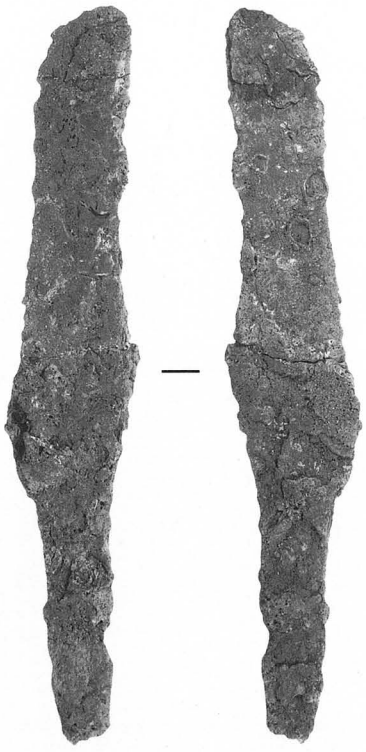
228



230

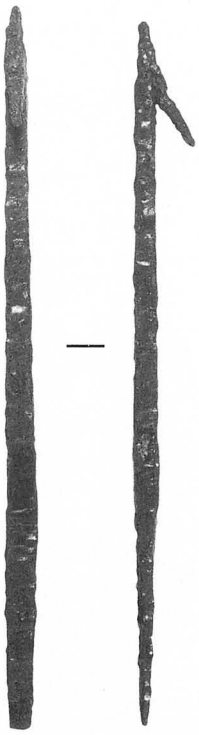
229

231



232

233



234

写真図版47　RA061出土石器、RD108出土石器、竪穴住居出土鉄製品

第29次調査

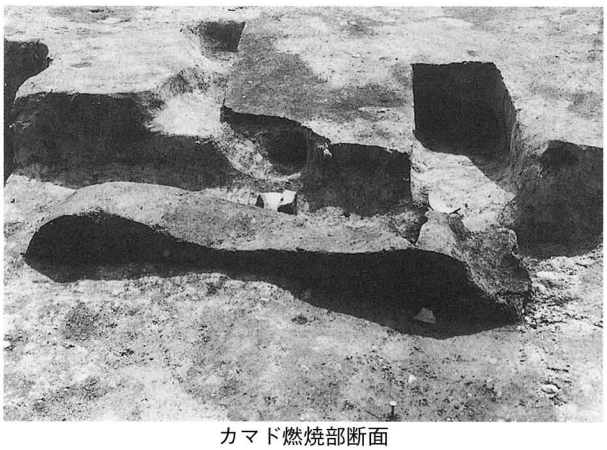
第29次調査区全景

南調査区基本土層

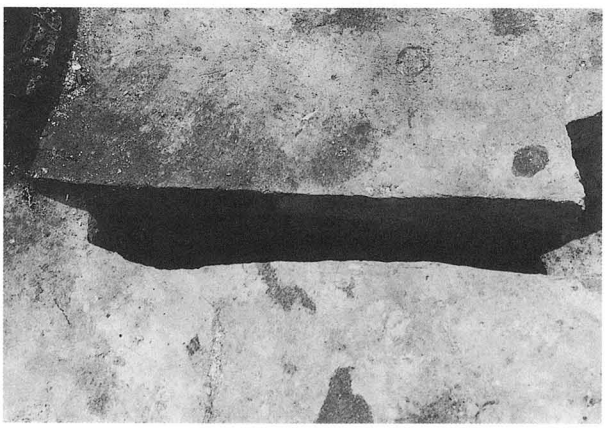
写真図版48　調査区全景・南調査区基本土層

RA060全景（南から）

東西断面（南から）



カマド燃焼部断面



カマド煙道断面

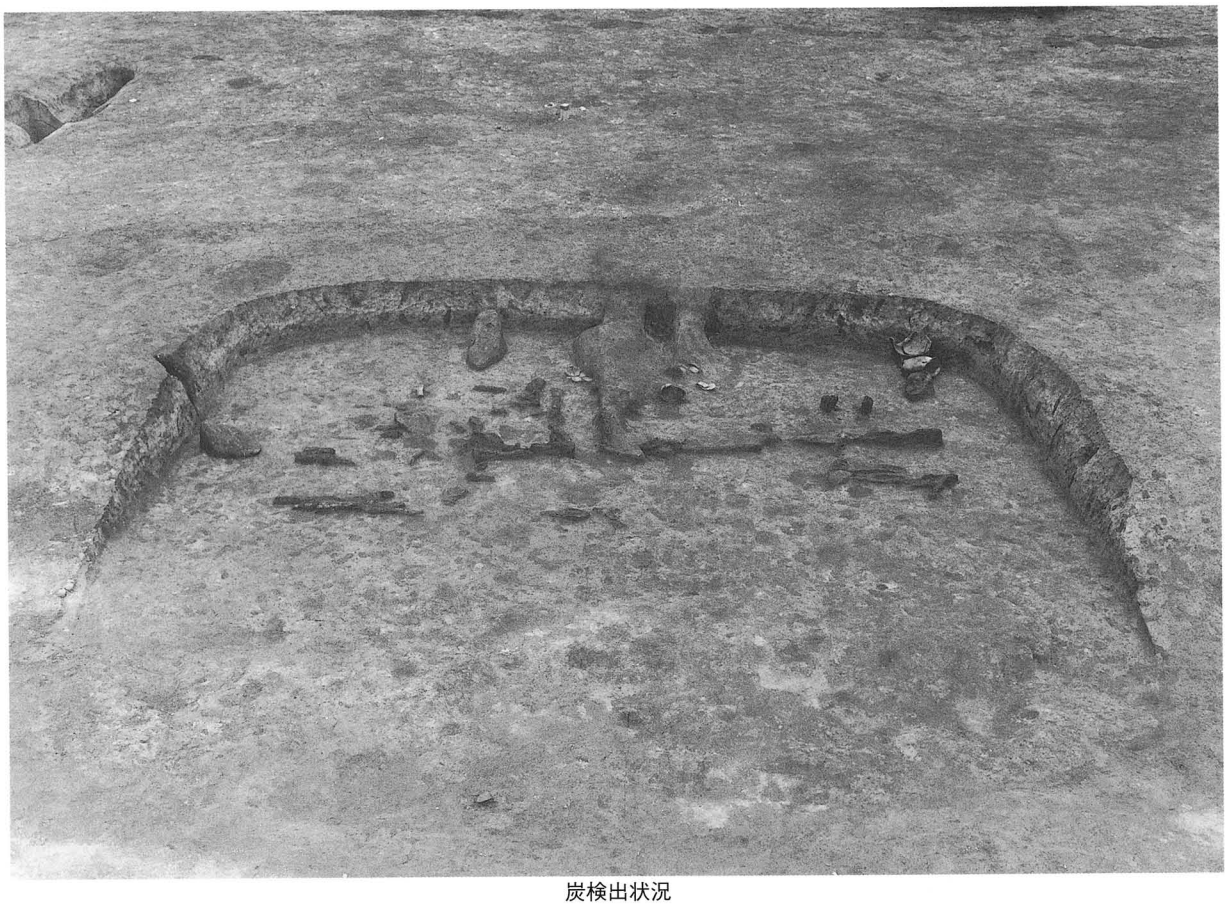
写真図版49　RA060住居跡

貼床除去後全景

RA076全景

Pit2・3断面

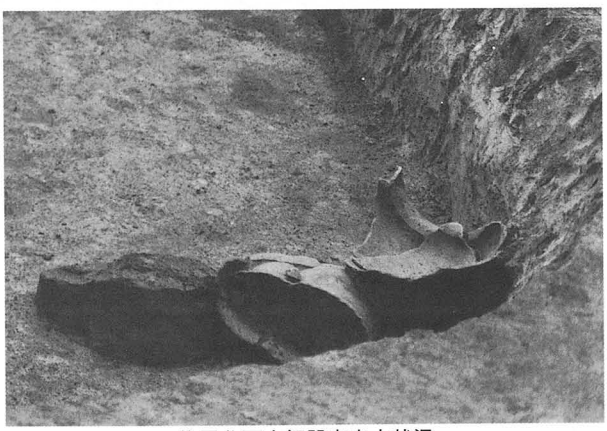
写真図版50　RA076住居跡



炭検出状況

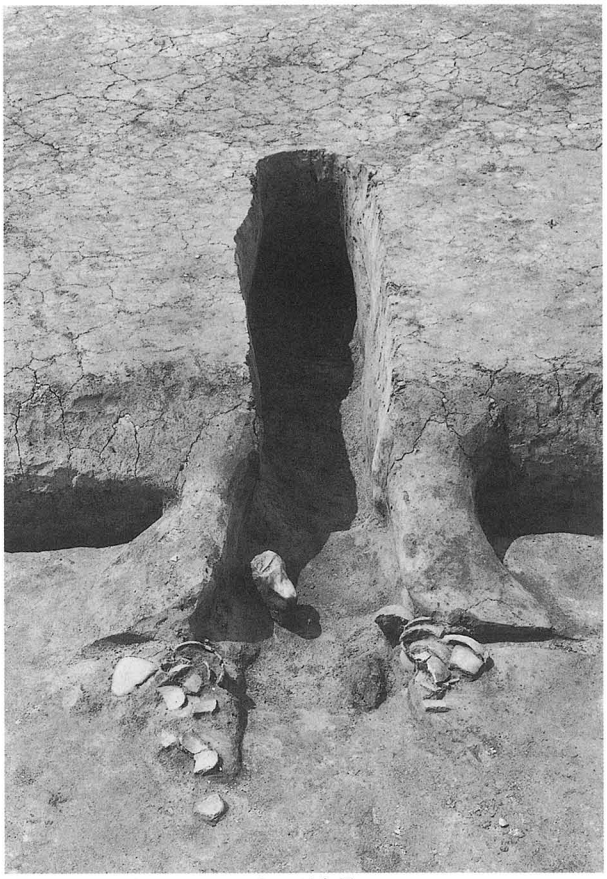
南北断面（西から）

東西断面（北から）

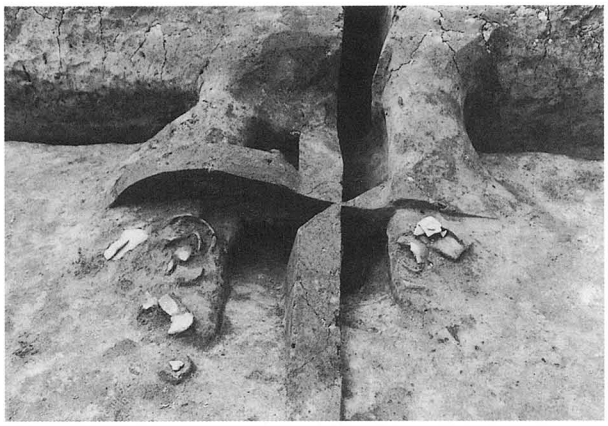


住居北西土師器甕出土状況

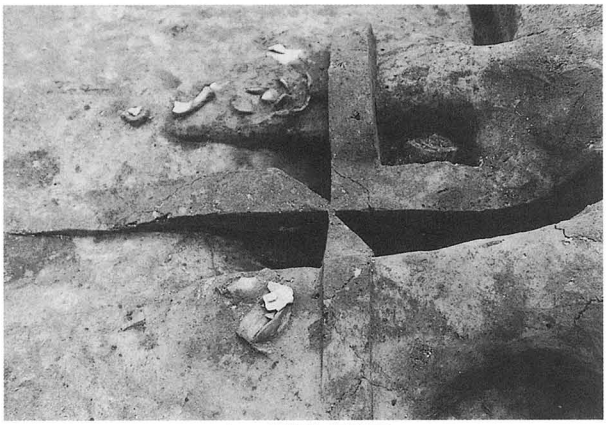
写真図版51　RA077住居跡（1）



カマド全景

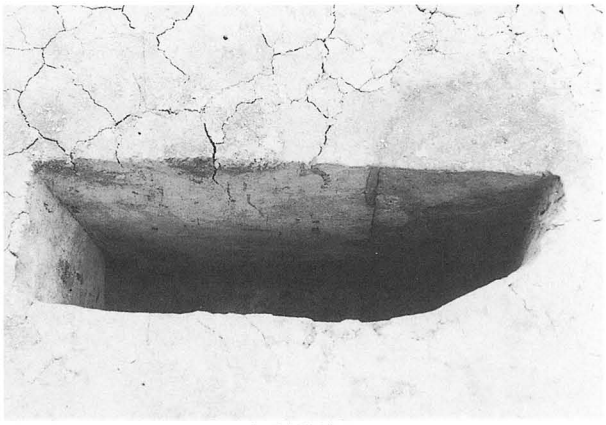


カマド燃焼部断面



カマド燃焼部断面

カマド煙道横断面



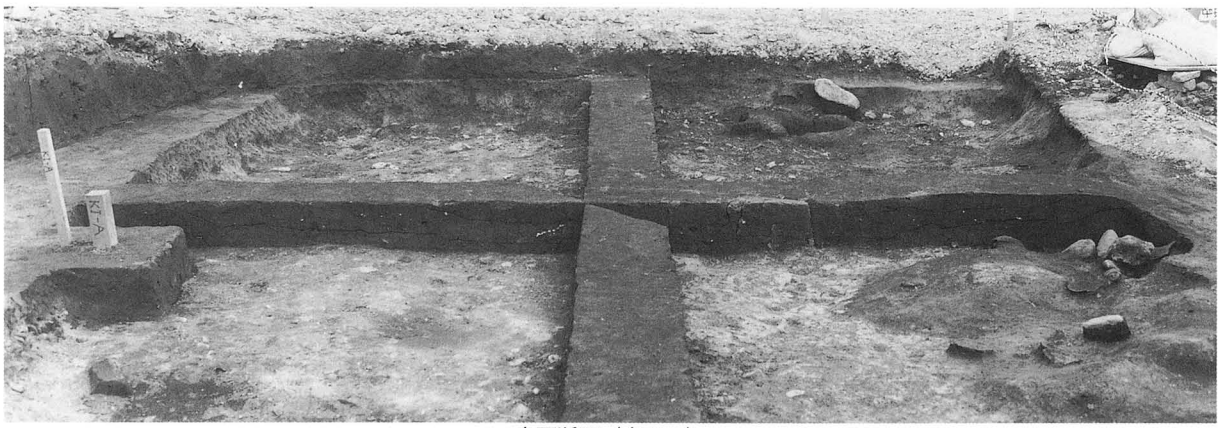
煙道縦断面

RA077全景

写真図版52　RA077住居跡（2）

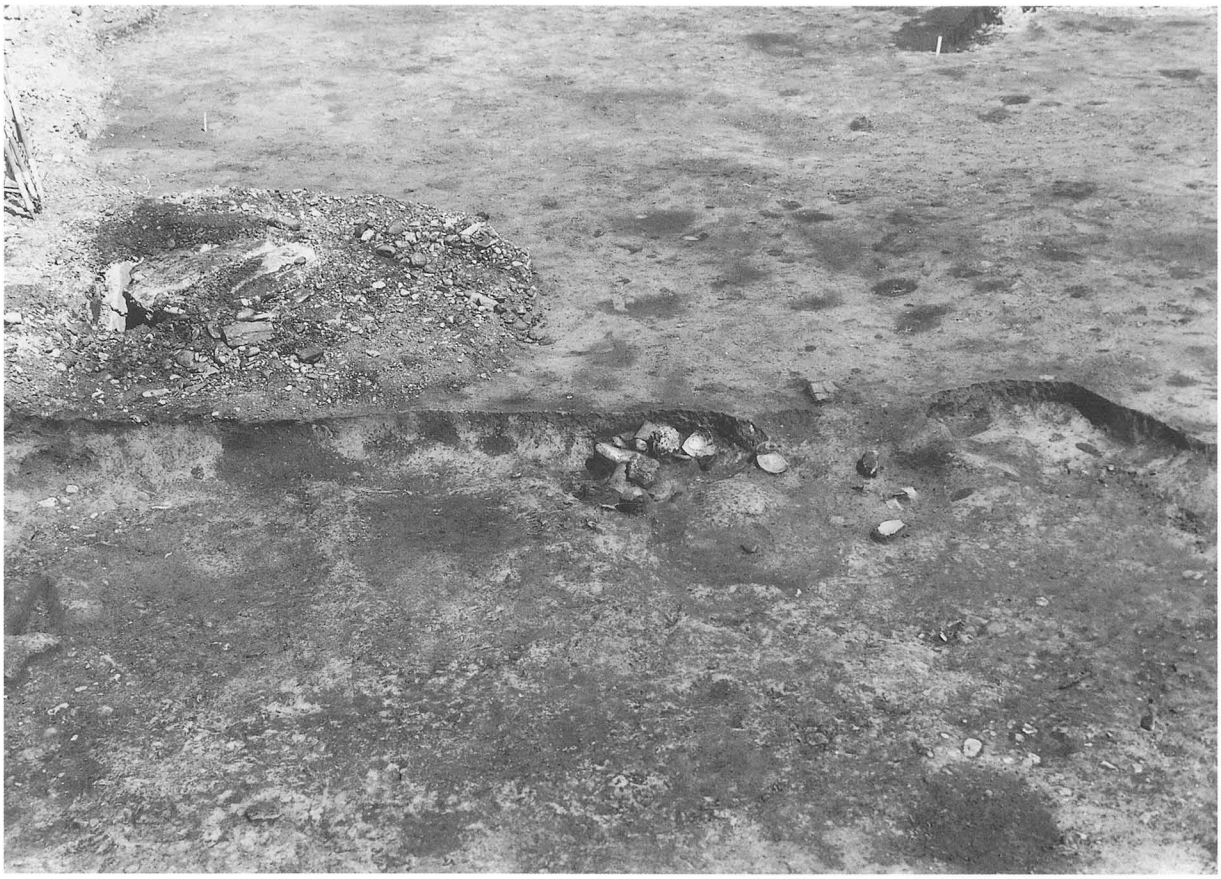
RA078全景

南北断面（西から）



東西断面（南から）

写真図版53　RA078住居跡（1）



RD078カマド

1号カマド横断面

1号カマド縦断面

2号カマド横断面

2号カマド縦断面

写真図版54　RA078住居跡（2）

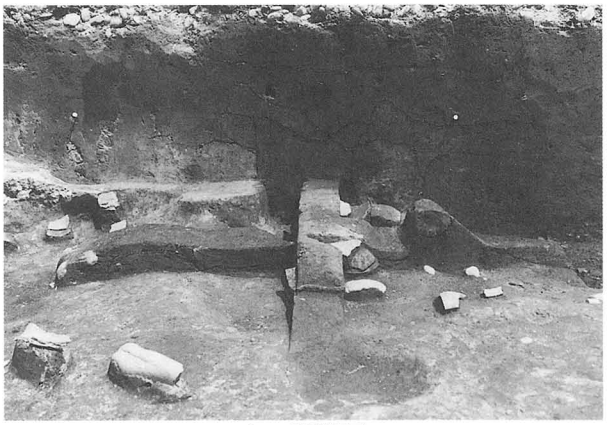
RA079全景

南北断面（西から）

東西断面（南から）

写真図版55　RA079住居跡（1）

カマド検出・炭化材検出

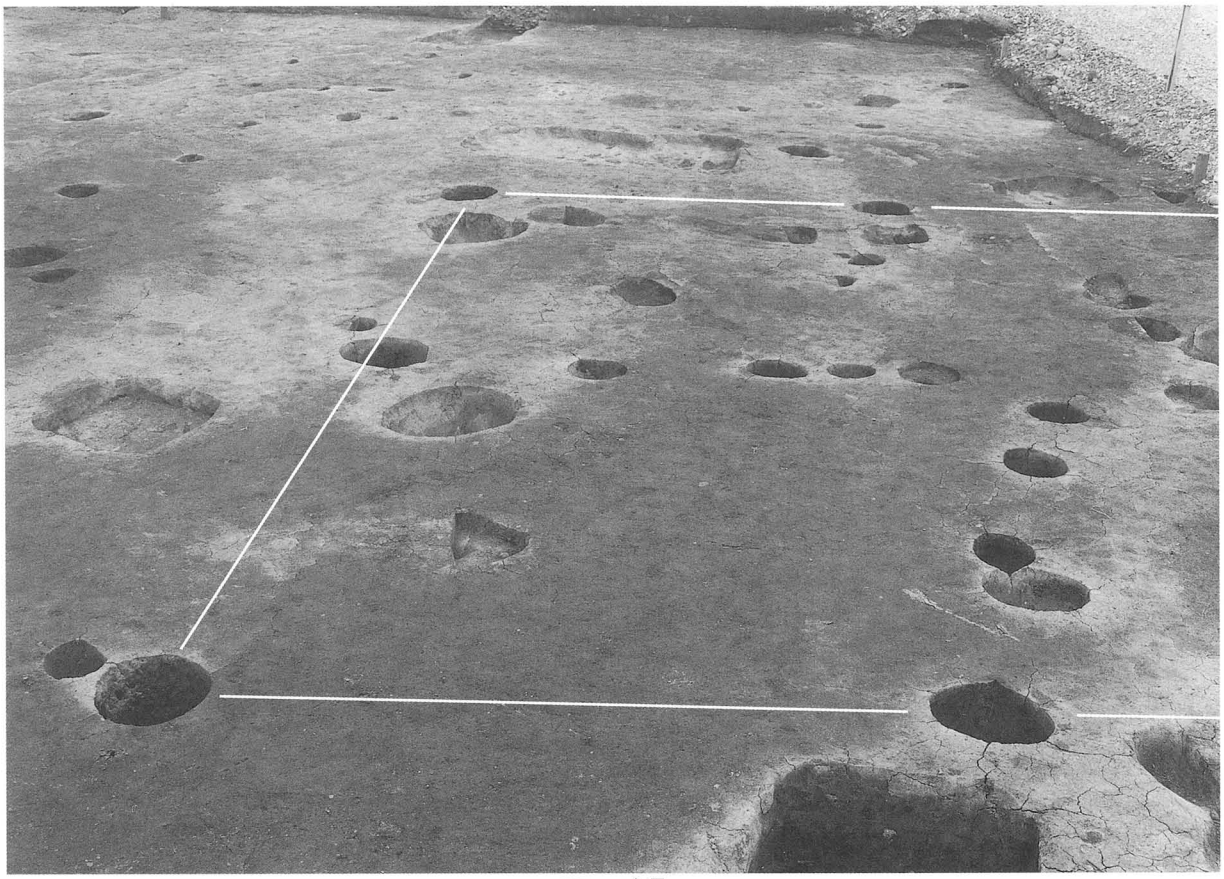


カマド横断図

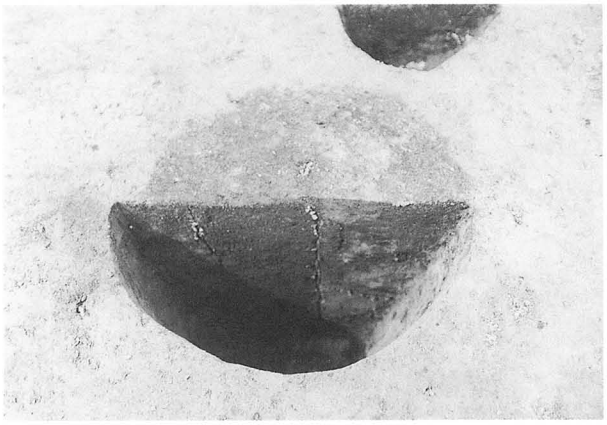
カマド縦断図

カマド内遺物出土状況

写真図版56　RA079住居跡（2）

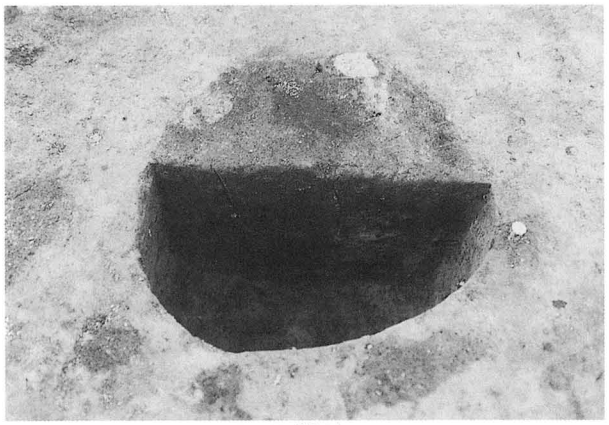


RB004全景



P1断面

P3断面

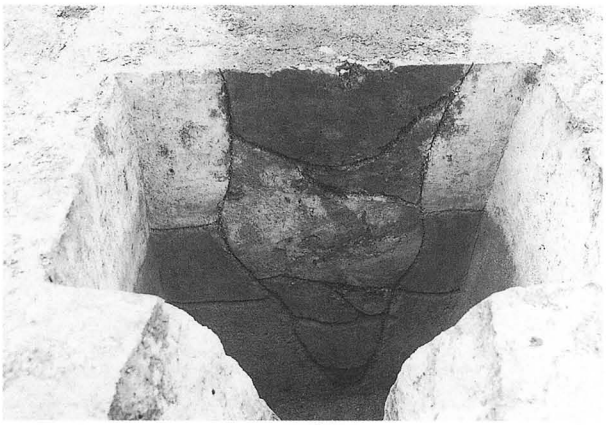


P4断面

P6断面

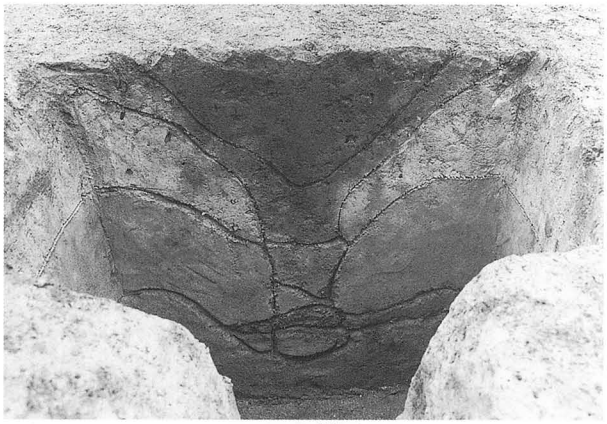
写真図版57　RB004掘立柱建物跡

RD112

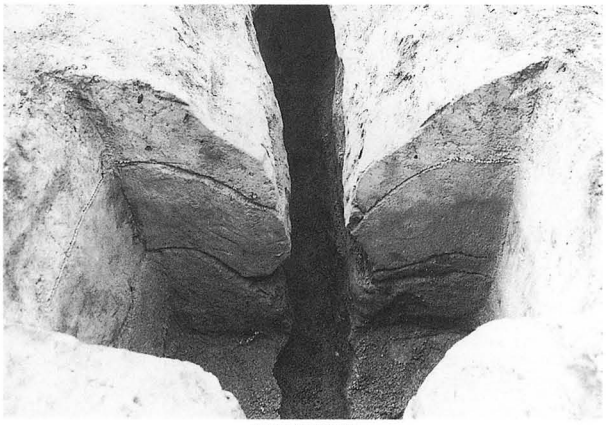


RD112断面

RD113



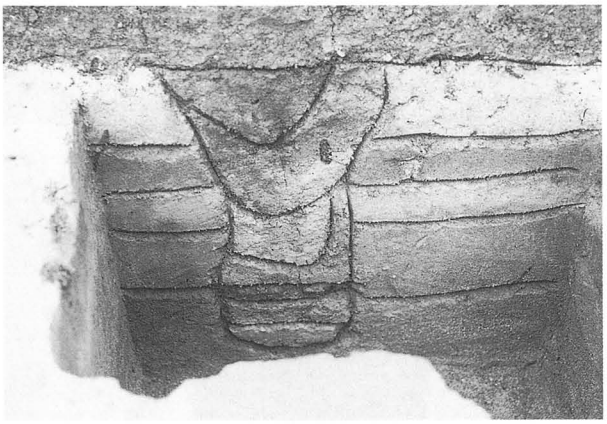
RD113断面



RD113断面

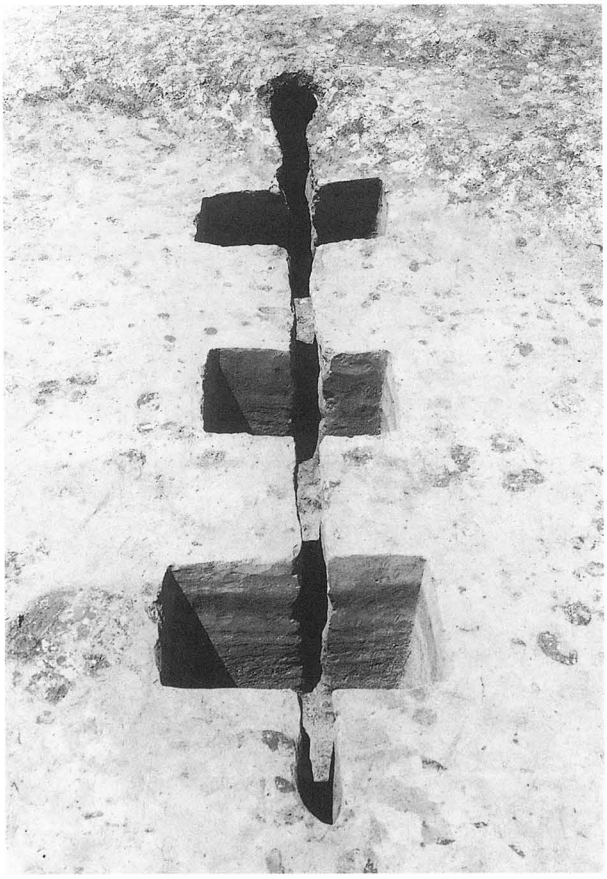
写真図版58　RD112・113陥し穴状土坑

RD114

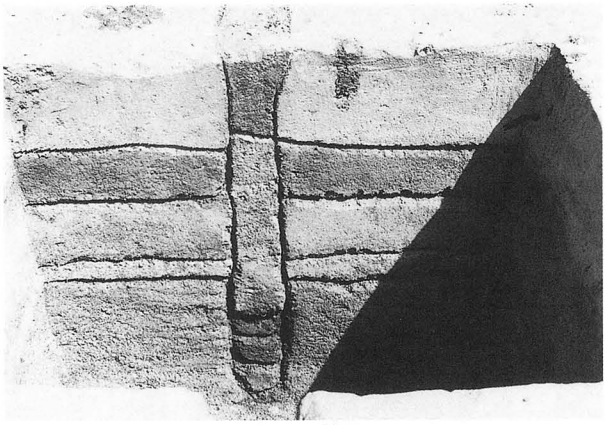


RD114断面

RD114

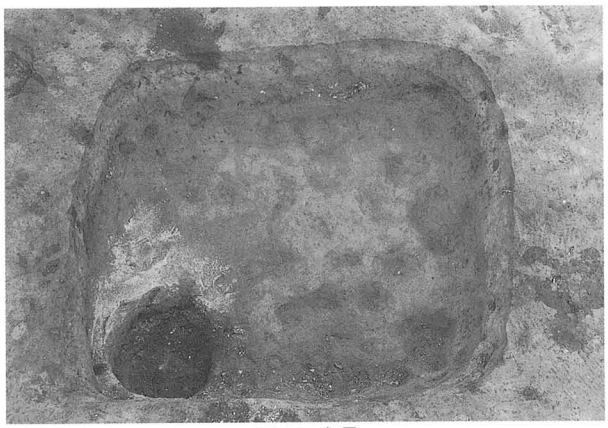


RD115



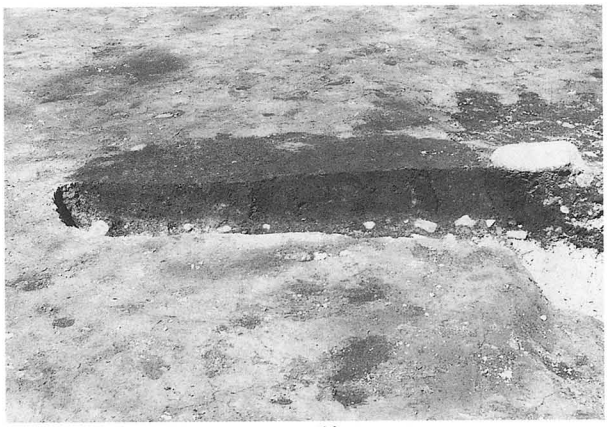
RD115断面

写真図版59　RD114・115陥し穴状土坑

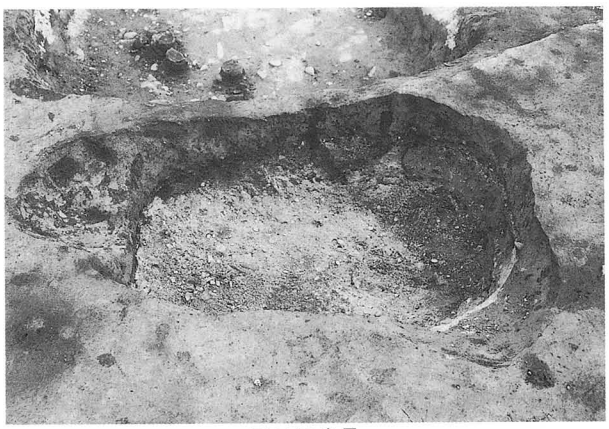


RD116全景

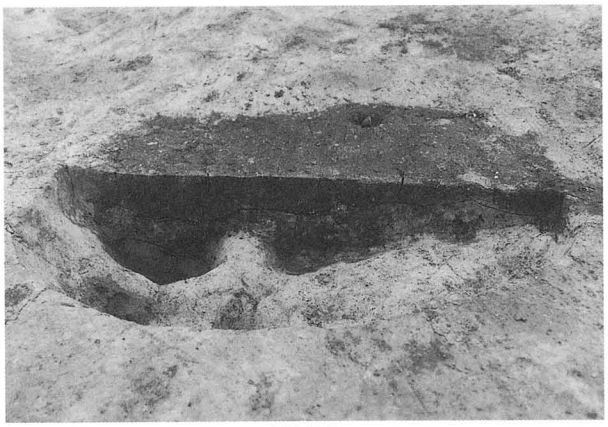
RD116断面



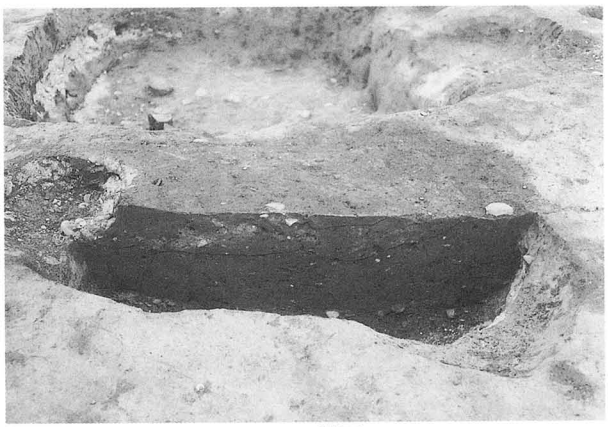
RD117断面



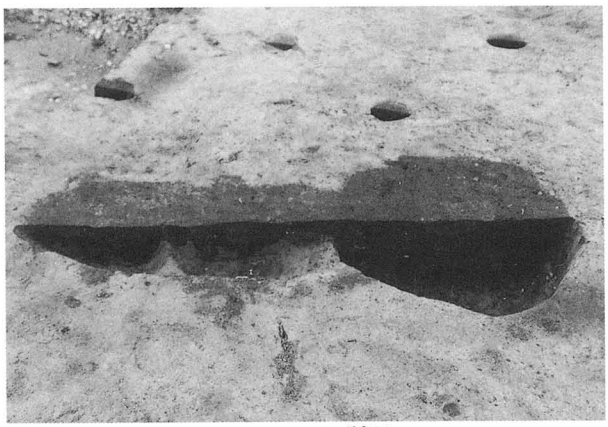
RD118全景



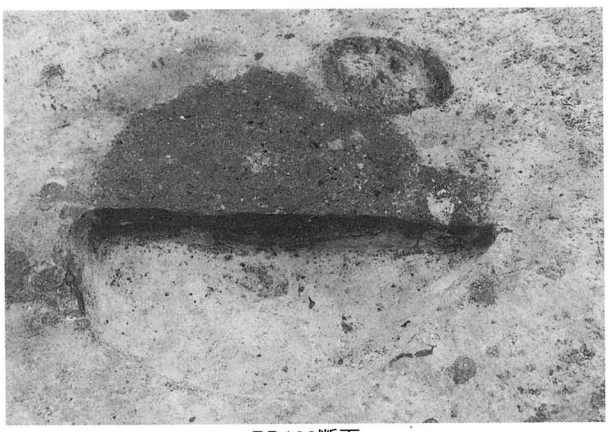
RD119



RD118断面

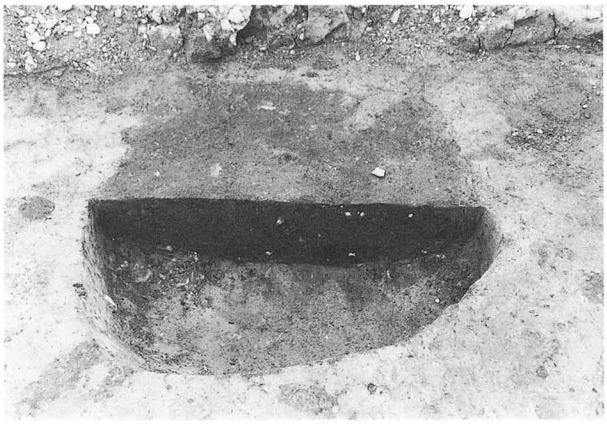


RD120・121断面

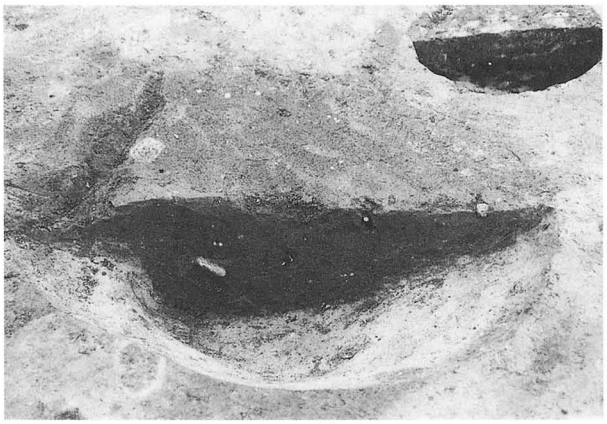


RD122断面

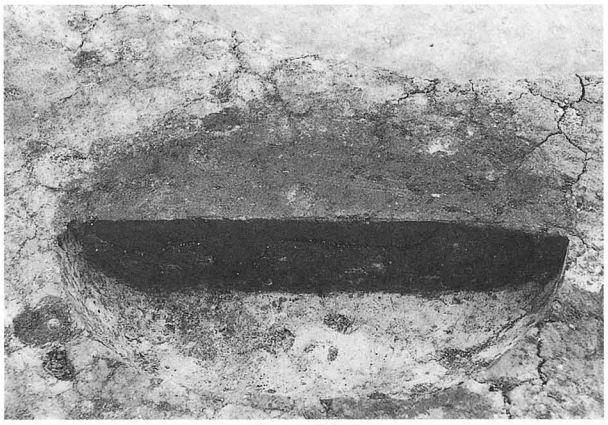
写真図版60　RD116・117・118・119・120・121・122土坑



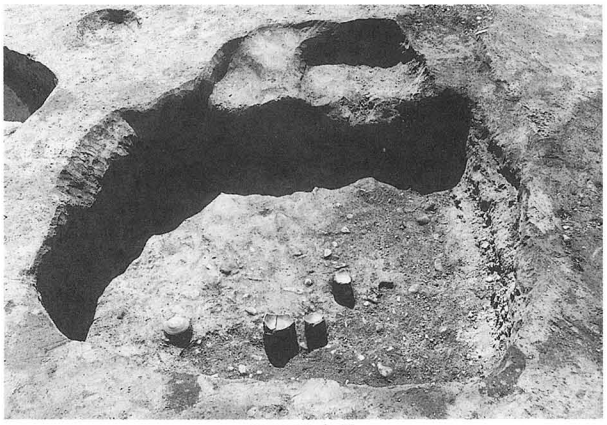
RD123断面



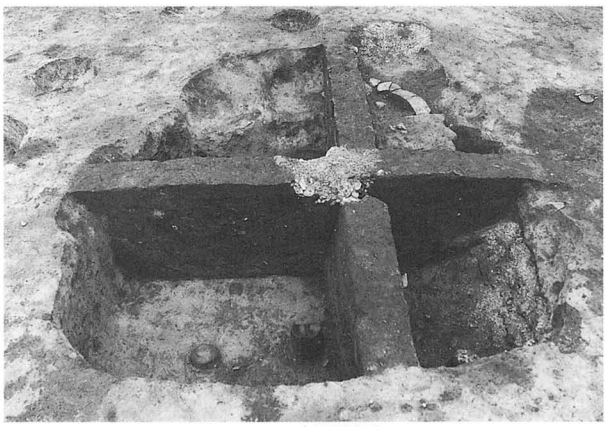
RD124断面



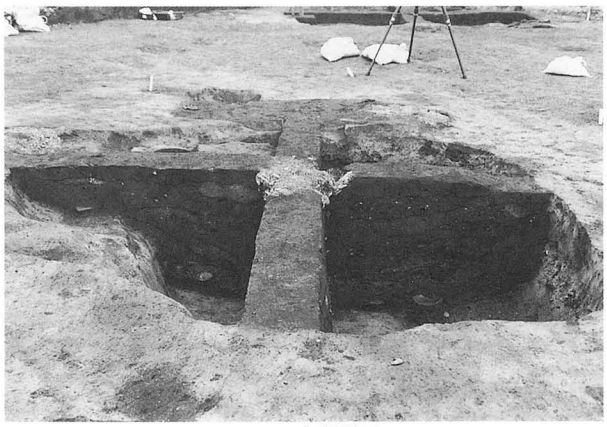
RD125断面



RE002全景



RE002東西断面

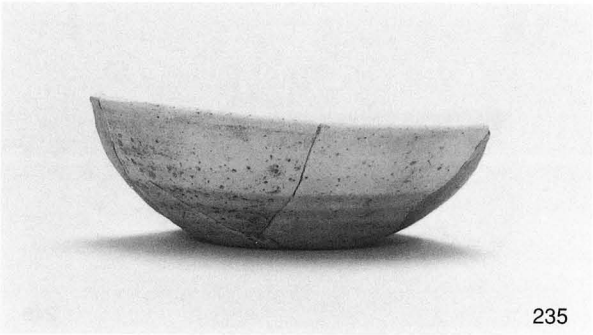


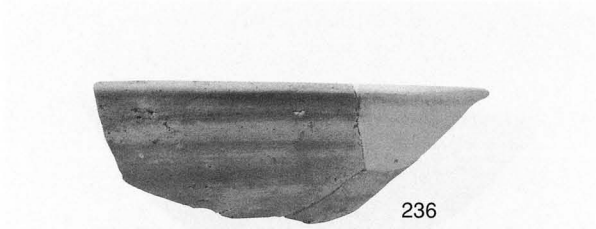
RE002南北断面

RZ005全景

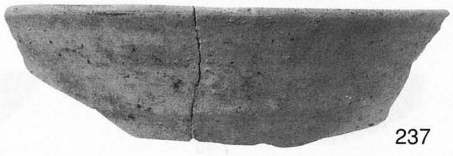
RZ006全景

写真図版61　RD122・124土坑、RE002住居状遺構・RZ005・006柱穴状土坑

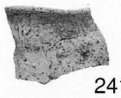

235


236

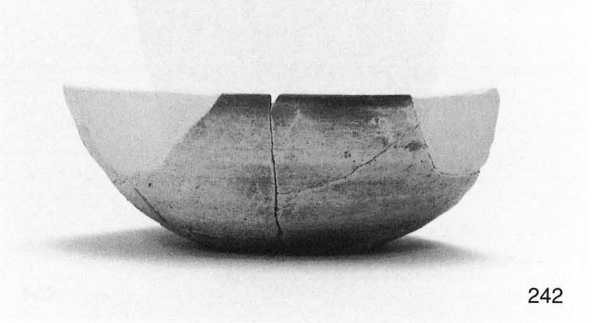
238


237

240


241

239


242

243

写真図版62　RA060・RA076住居跡出土遺物

244

245

246

247

248

249

250

251

252

253

254

写真図版63　RA076・RA077住居跡出土遺物

255

256

257

258

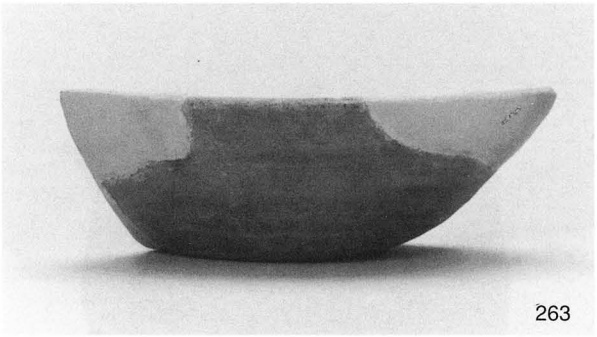
260

259

261

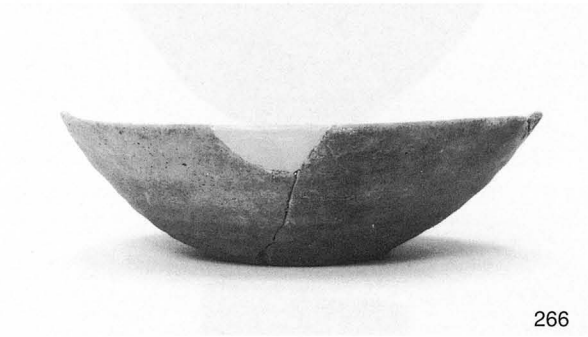
262

写真図版64　RA077・RA078住居跡出土遺物

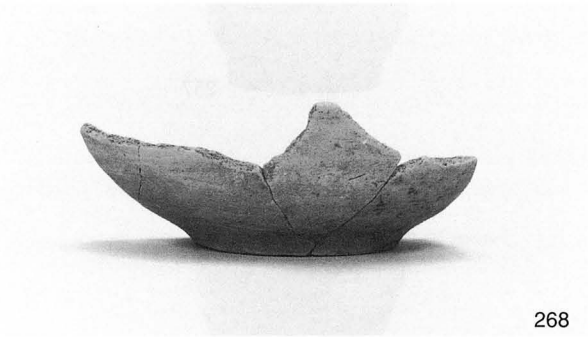

263

264

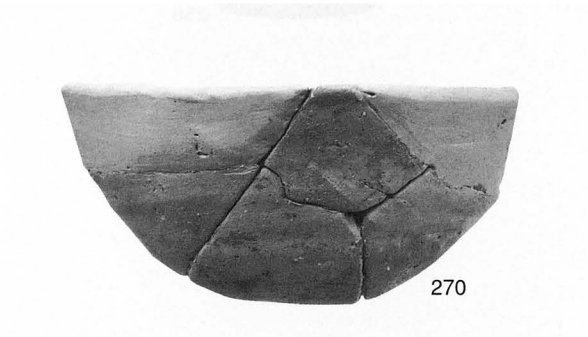
265


266

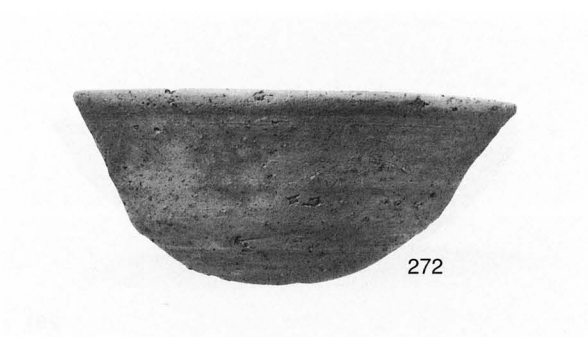
267


268

269


270

271


272

写真図版65　RA078住居跡出土遺物（1）

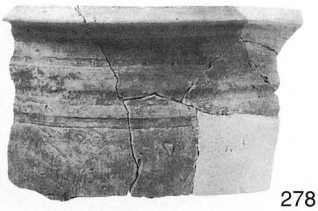
273

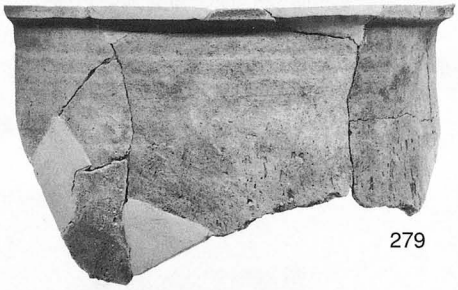
274

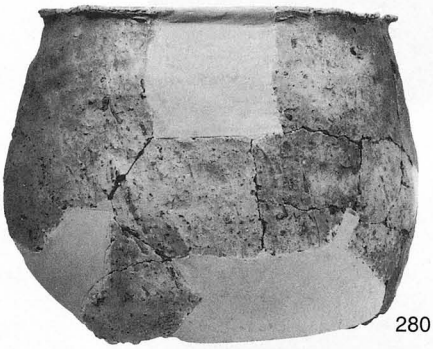
275

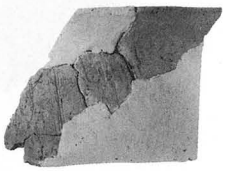
276

277

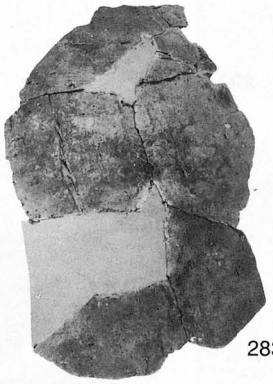

278

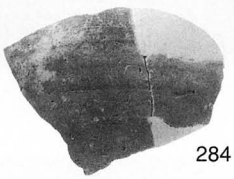

279


280


281

282


283


284

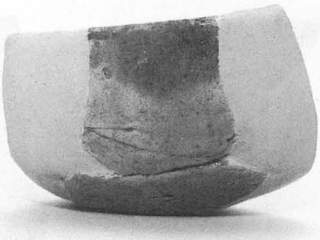
285

写真図版66　RA078住居跡出土遺物（2）

286

287

288



289

290

291

292

293

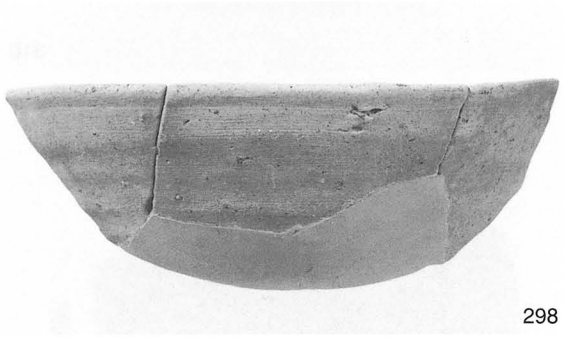
294

295

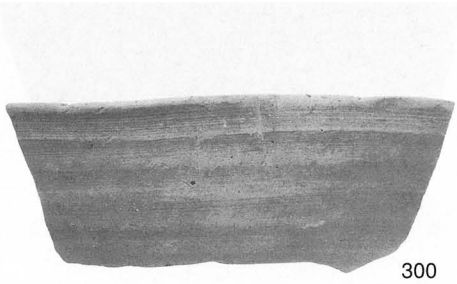
写真図版67　RA079住居跡出土遺物（1）

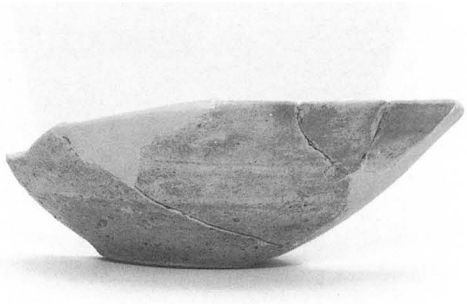
296

297


298

299

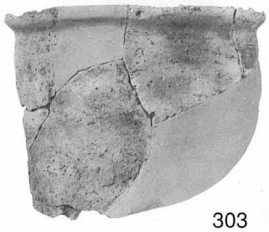

300


301

302

305

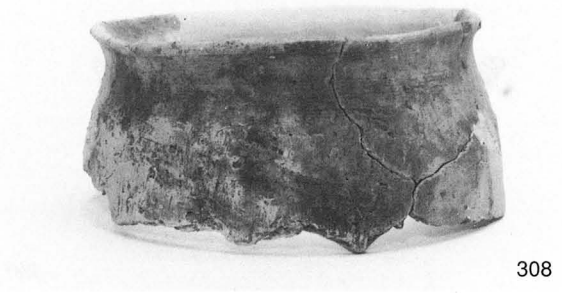
306


303

304

307

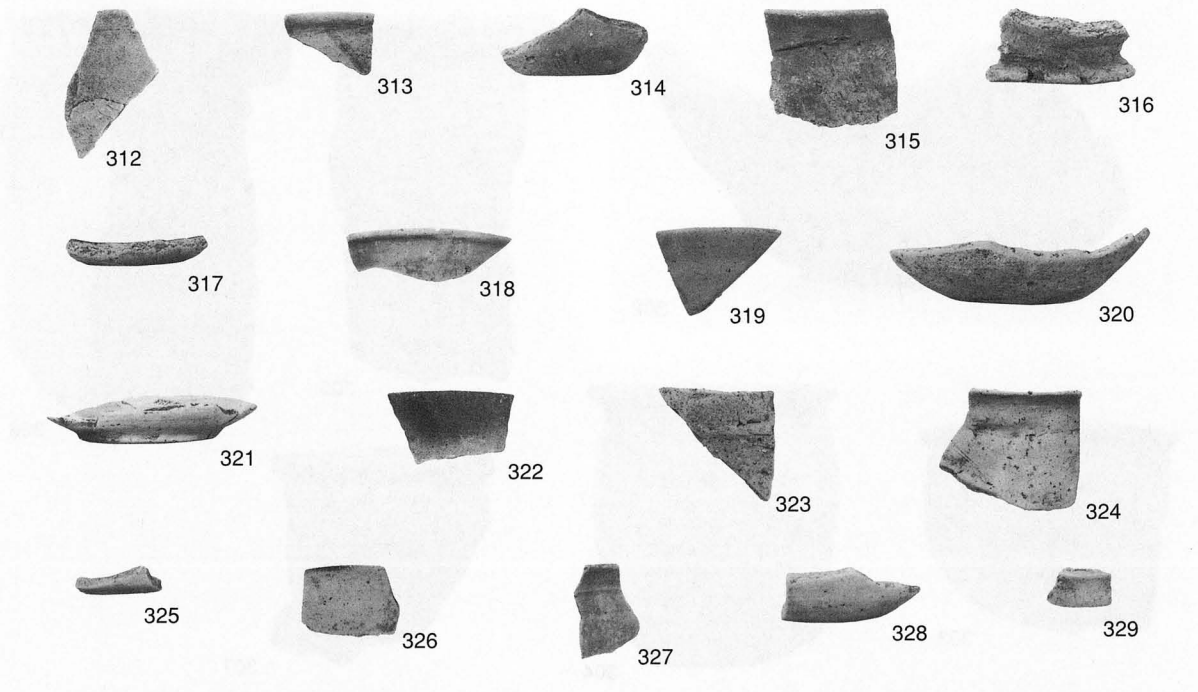
写真図版68　RA079住居跡出土遺物（2）


308

310

309

311



写真図版69　RA079住居跡・RB004掘立柱建物跡・RD土坑出土遺物

330

331

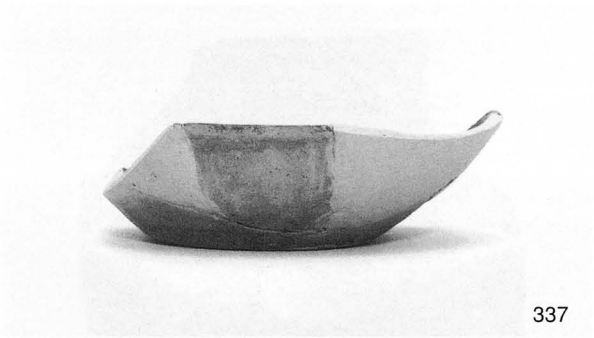
332

333

336

334

335


337

338

339

340

341

342

写真図版70　RD土坑・RE002住居状遺構出土遺物（1）

343

344

345

346

347

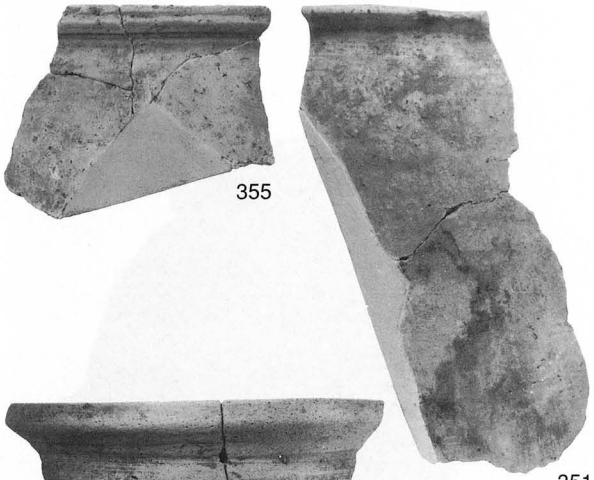
348

354

349

350

写真図版71　RE002住居状遺構出土遺物（2）


355

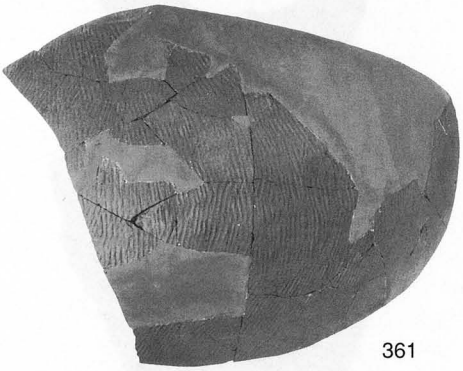
351

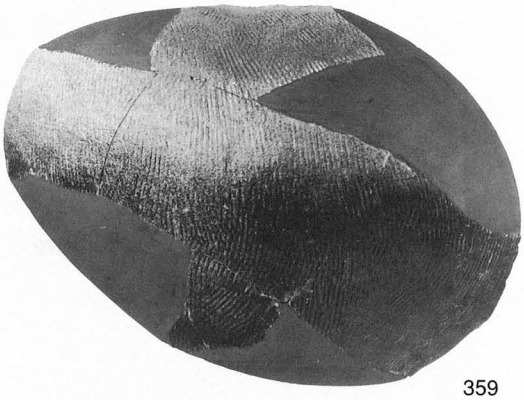
356

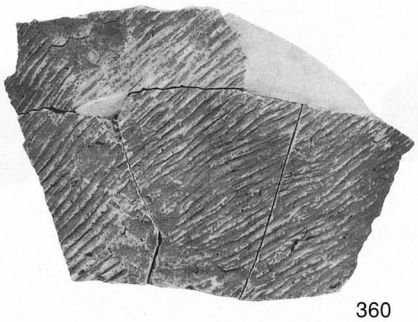
353

334
335
352

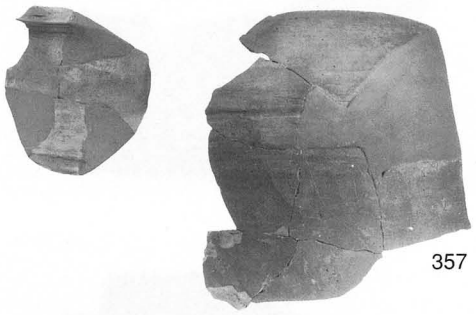
358

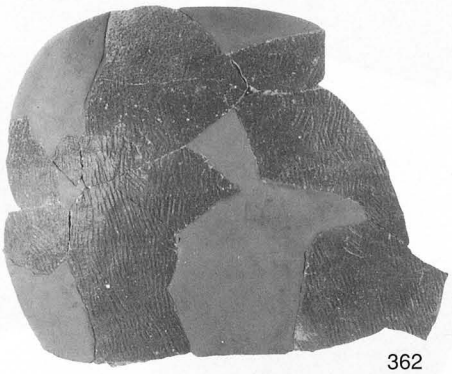

361


359

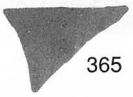

360

写真図版72　RE002住居状遺構出土遺物（3）


357


362

364


365

366

363

367

368

369

370

371

372

写真図版73　RE002住居状遺構（4）・RZ005柱穴状土坑・遺構外出土遺物

報告書抄録

ふりがな	のっこえーいせきだい23・24・29じはっくつちょうさほうこくしょ
書名	野古A遺跡第23・24・29次発掘調査報告書
副書名	盛岡南新都市土地区画整理事業関連遺跡発掘調査
巻次	
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第501集
編著者名	福島正和・八木勝枝・米田寛・立花裕
編集機関	（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
所在地	〒020-0853　岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地　　TEL（019）638-9001
発行年月日	2007年2月28日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 m²	調査原因
のっこえーいせきだい 野古A遺跡第 じ 23次	もりおかしかみか 盛岡市上鹿 づまあざきた 妻字北33-1 ほか	03201	LE16-2155	39度40分 45秒	141度08分 04秒	2004.9.15 ～11.1	2,056	盛岡南新都市土地区画整理事業
のっこえーいせきだい 野古A遺跡第 じ 24次	もりおかしかみか 盛岡市上鹿 づまあざきた 妻字北33-1 ほか			39度40分 45秒	141度08分 04秒	2004.10.1 ～11.1	2,240	
のっこえーいせきだい 野古A遺跡第 じ 29次	もりおかしかみか 盛岡市上鹿 づまあざきた 妻字北40-1 ほか			39度40分 45秒	141度08分 04秒	2005.4.12 ～6.13	3,088	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
野古A遺跡第23次	集落跡	古墳～奈良時代 平安時代	竪穴住居跡8棟（うち1棟は第29次に跨る） 土坑5基 溝跡3条（うち2条は第24次に跨る）	土師器・須恵器・鉄製品・石器・石製品・土製品	
野古A遺跡第24次	集落跡	古墳～奈良時代 平安時代	竪穴住居跡5棟 土坑1基 溝跡3条	土師器・須恵器・鉄製品・石器	
野古A遺跡第29次	集落跡	縄文時代 奈良時代 平安時代	陥し穴状遺構4基 竪穴住居跡5棟（うち1棟は第23次に跨る） 住居状遺構1基 土坑10基 柱穴状土坑157個	土師器・須恵器・鉄製品・石器	奈良時代の住居跡（RA077）から口縁端部に指頭押圧による加飾が施されている土師器甕が出土した。

要　約	北上川西岸の段丘上に立地する7世紀後半から10世紀前半にかけての集落である。カマドを有する竪穴住居を中心とした遺構を検出した。また、竪穴住居内からは多くの土器が出土した。

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第501集
野古A遺跡第23・24・29次発掘調査報告書
盛岡南新都市土地区画整理事業関連遺跡発掘調査報告書

印刷　平成19年２月20日

発行　平成19年２月28日

発行　（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地
電　話　(019) 638-9001
ＦＡＸ　(019) 638-8563
印刷　（株）五六堂印刷
〒020-0021 岩手県盛岡市中央通3-16-15
電　話　(019) 654-5610
ＦＡＸ　(019) 651-2167

© （財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2007